

Be the one ～盾と仮面のベストマッチ～

春風駘蕩

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無数の魔物を生み出し、破壊と悲しみをもたらす災厄の波！

人々を救い、愛と平和を守るため、聖なる武器に選ばれた勇者と仮面の戦士たちが立ち上がる！

# 目次

## 第一章 出会いはサドンリー

ウサギと戦車 1

自称天才 9

フルボトル 15

謎の多い女 24

二つ首の黒犬 31

消えない悪夢 38

戦の用意 44

龍刻の砂時計 52

災厄の波 59

虚飾の宴 69

八百長決闘 75

聞きたかった言葉 82

もう一度ここから 88

## 第二章 カースの目覚め

二つの出会い 92

やさぐれドラゴン 98

戦いの成果 104

フィーロの誕生 110

リュウガの暴走 117

とぼっちリレース 124

フィロリアルの主 131

魔法の服 138

洞窟の魔物 145

奇跡の種	153
新技披露	161
竜の骸	168
憤怒の炎	176
見つめ直す	184
第三章 龍炎・ウエイクアップ	
青い髪の少女	189
同行者	196
新たな相棒	202
久々の王都	208
槍の勇者再び	215
メルの本体	221
信頼は買えない	227
正義の味方	233
二度目の災害	239
憤怒の盾	247
二人の敵	256
一歩乱越えて	265
逃亡者	272
助けて	278
燃えよ青龍	286
私の名前	295
第四章 弾けるニューパワー	
領主の元へ	299
女子トーク	305

海の旅	467
船での出会い	460
尚文の実験	453
クラスアップ	446
道は険しく	441
勇者会議	434
慰労会	430
第五章 鍛錬&バカンス	
ずっと友達で	427
クズとビッチ	422
弾劾裁判	416
女王ミレリア	410
スパークリング	402
四聖勇者、共闘	394
神の代行者	387
道化の戦い	380
盾と槍、再び	373
フィトリアの試練	365
神鳥の聖域	357
伝説再来	348
古の魔物	341
毒蛇の男	333
仇には仇を	326
恩には恩を	318
悪夢の再来	311

カルミラ島レベル上げツアー

474

酒は飲んでも呑まれるな

482

未知の武器

490

海底のタイムリミット

499

海上の戦い

507

知りたくなかった真実

516

因縁の再会

522

別世界の戦士達

530

捨てられた少女

539

お前と共に

545

## 第六章 ジャイアントな破壊者〈前編〉

勇者の朝

551

二人の決意

555

セーアエットの遺志

561

習うより慣れよ

567

レベルアップの弊害

573

変幻無双流伝承者

580

理屈屋と脳筋

586

男の浪漫

592

異変

599

甲羅の魔物

605

増殖する敵

611

まだ死ぬべきじゃない

618

世界の為に諦めて

625

霊亀、進撃

632

勇者すなわち勇氣ある者

638

無謀な戦い

644

青の狂戦士

651

まだ終わりじゃない

658

## 第一章 出会いはサドンリー ウサギと戦車

それは、遠い昔から伝わる伝説。

世界を蝕む「波」と呼ばれる災害、空に走った亀裂から現れる無数の魔物が、たくさんの人々を苦しめる。

その災いに慈悲などなく、人々は抗うことなどできはしない。

しかし人々には希望がある。

世界を守る聖なる四つの武器。それらに選ばれた四人の戦士が、異世界より現れ人々を魔物から救うからだ。

波に唯一対抗できる彼らがいる限り、人々に絶望はない。

謳われるその名は、四聖勇者。

☒

Side:???

「……へー、それがこの世界の常識なのか」

一冊の本を読み終えたオレは、用は終わったとばかりに適当にそれを放り捨てる。

とある本屋で立ち読みしているオレの足元には、同じように読み終わった本が山になって積み重なっていた。

どれも四聖勇者、特に四聖武器について書かれたものばかりだ。

オレの名前はセント。

とある理由であちこちの国を回っている、根無し草の旅人だ。

この国の本屋に立ち寄った理由は、最近召喚された四聖勇者について調べるためだ。

なんで調べてるかって？ 決まってるんだろ。

聖なる武器が一体どんなものか、隅から隅まで調べるためさ！

「勇者を選ぶ聖なる武器…一体どんな素材でできているんだろうな！

いやあく、気になって仕方がない！」

思わず声をあげてはしゃいでいたオレだったが、ふと聞こえてきた咳ばらいについビクってなった。



見ると本屋の店主のおっちゃんが、すごい目でオレを睨んできてる。

あの、すみません。

騒ぎすぎたのと散らかしたのは悪かったんで、そんなに怒らないで…。

…ダメ？ 今すぐ出てけ？ マジ？

「ぐへえっ!?？」

「つたく…亜人のくせにご立派に本なんて読んでんじゃねえよ！」  
いってえ！

ほんとにあのおっちゃん叩き出しやがったな。乱暴だなまったく！

…いや、確かに売り物を粗末にしたオレが悪いんだけどさ。

後ろ姿からも分かるほど怒ってるおっちゃんを見ると、すごい申し訳なくなってきた。

でも亜人のくせについてののはひどくない？

「でもまあ…欲しかった情報はもう手に入ったしいいか」

パンパンと土を払って、ついでに乱れた耳と尻尾も整えて、立ち上がる。

あとは…噂の勇者様を探しに行くだけだ。

メルロマルクで勇者召喚が行われたのは知ってる。しかも今回は四人全員を召喚したって話だ。

なんか各国が怒ってるって話だけど…その辺はどうでもいいか！

「問題はどの勇者様に会うかってことだな」

聞いた話じゃ、四人の勇者のうち盾の勇者は相当な悪党らしい。

召喚された翌日に、わざわざ仲間になってくれた女の子を襲ったって聞いたし、それで城を追い出されたとか。

…：うん、探すなら盾の勇者以外のやつだな。

オレだって普段はか弱い女の子だもん、強姦とかノーセンキュー！

…：で、誰のところに行くべきか。

仲間思いで有名な槍の勇者様か。

冷静沈着な剣の勇者様か。

正義感に溢れる弓の勇者様か。

うくん、迷う。

「……とにかく、どつかその辺歩いてみるか」

オレの故郷（？）でもよく言われてたしな。

『案ずるより産むが易し』とか『千里の道も一歩から』とか。

…あれ、使い方違った？

いやいや合ってるよきつと、ダイジョーブ。

勇者様だってそこらの宿とか飯屋とかで休んだりするだろうし、

きつとそのうち見つかるさ！

…その前に。

「こいつの調子を確かめておかないとな」

☒

Side: Naohumi

俺の名前は岩谷尚文。

金欠で図書館で暇つぶしをしていた時にふと見つけた、四聖武器書という本を読んでいると、いきなり異世界に「盾の勇者」として召喚された。

最初は期待していた俺だったが、現実最低だった。

思いつくのも、気分が悪い。

地位も名誉も金も、何もかもを奪われてこんなクソみたいな世界で生き延びる羽目になっている。

帰りたくても、世界を救うまでは叶わないときた。

ふざけやがって！

仕方がないからお望み通り、力をつけて波に挑むしかない…だが。

防御に特化した盾の勇者である俺には……攻撃力がない。

「ご主人様！」

だから俺は、戦うための剣の代わりとして奴隷を購入した。

ラクーン種…狸っぽい耳が生えた10歳くらいのラフタリアという女の子だ。

病気持ちで夜中にパニックを起こすというこちで非常に安く売ら

れていたのを、俺が選んで購入した。

だが今……俺もラフタリアも窮地に追いやられている。

「離れるなよ！ 守れなくなるよ！」

「は、はい！」

もはや日課のようになっていて、魔物相手のレベリング。

もう少し手応えのある相手を探そうと草原に入ったら、とても捌き切れない数の魔物に取り囲まれてしまった。

くそっ！ なんでこうなるんだよ!?

「ぐっ！」

「ご主人様!？」

「だ……大丈夫だ。お前はお前の心配をしろ！」

一体一体はそれほど強くないが、それでもこの数だ。

袋にされたらたまんねーぞ！

俺の防御力なら、これくらいゴリ押しで抜け出せるかもしれない。

だがラフタリアはまだ弱い……隙についてやられたら目も当てられない。

なんとしてでも、こいつだけは守らなくては！

そう、覚悟を決めた時だった。

「手を貸そうか、お兄さん！」

「は？」

どこからか声が聞こえたと思ったら、俺の目の前にいたキノコっぽい魔物が勢いよく吹っ飛んだ。

俺もラフタリアも、魔物達も何が起こったのかわからず、ポカンとなる。

そんな俺たちの前で、そいつは蹴り上げた足を下ろして、振り向いた。

「危ないところだったね？」

そいつを一言で言うなら、ウサギだった。

灰色の髪から同じ色の長い耳が立ち、メガネをかけた整った顔立ちの中の黒い瞳が俺を見つめる。

尻からはふわふわの丸い尻尾が見える。

かなりの美人なんだが、顔を見ただけで変わり者っぽい雰囲気を感じる。

何だ、こいつは？

「誰だ、お前」

「自己紹介はあとあと！ とにかくこの窮地を乗り越えなきゃ始まらないよ」

そう言っただけは、腰に巻いたポーチから何か黒い、妙なものを取り出す。

歯車とハンドルが付いた…なんだアレ？

それを自分の腰に当てると、黄色いベルトが巻きつく。

「さあ、実験を始めようか」

そう言っただけは、赤と青ののヤ○ルトみたいな容器を取り出し、シヤカシヤカと上下に振る。

そしてキャップをひねると、逆さにしてベルトにはめ込んだ。

「ラビット！」【タンク！】【ベストマッチ！】

…なんか機械っぽい声が変わることを言ってる。

ウサギ？ 戦車？ なんでその二つがベストマッチ？

混乱する俺たちをよそに、こいつはハンドルに手をかけ、ぐるぐると回し始めた…って。

「うおっ!？」

奴がハンドルを回すと、ベルトの歯車が回って管が生えてきた。

それは工場のパイプのように張り巡らされ、奴の前後でプラモデルのランナーみたいになる。

いや、マジでなんだこれ!?

【Are you ready?】

「変身！」

奴がそう言った瞬間、ランナーがこいつを挟み込み、一つになる。

赤色のウサギと青色の戦車をモチーフにしたような、機械的な鎧に。

【鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエイ！】

蒸気を放つ鎧をまとったこいつは、これまたウサギと戦車を模した

でかいサングラスを指で撫で、ピンと弾く。

そして、赤と青のオツドアイとなった目を光らせ、不敵な笑みを浮かべた。

「オレの名は、セント…そしてこの鎧の名は、ビルド。『作る』『創造する』って意味のビルドね」

とても中世っぽいファンタジー世界には似つかわしくない、とんでもない変身をやらかしたそいつ…セントに俺は釘付けになる。

ラフタリアなんて口を開けて突っ立ってるし。

そんな俺たちを放置し、セントはものすごい跳躍で魔物に接近し、恐ろしく思い蹴りを放った。

「どっせいー！」

それだけで、何体もの魔物がまとめて吹っ飛ばされて行く。

ウサギの速さと戦車のパワー。

まったく合わなそうで相性がいい二つの力が、面白いぐらいに魔物を蹴り飛ばしていった。

すげえな、特撮ショー見てる気分だ。

「！…ご主人様！」

「ちっー！」

だがブーツと見ているわけにもいかないらしい。

半分くらいは奴に引き寄せられていったが、他は変わらず俺たちを狙ってくる。

だが、この数なら…！

俺はすかさず襲ってくる魔物を押さえつけ、ラフタリアの方に投げ飛ばした。

「今だ、いけー！」

「はいー！」

ラフタリアはすぐに応じ、空中で逃げ場をなくした魔物をナイフで両断する。

それほど強くはないそいつらは、簡単に仕留められた。

「勝利の法則は、決まった！」

【Ready go!】

気づけば、ゴリラっぽい大型の魔物を相手にしていたセントの方も、いつの間にか出したドリルっぽい武器を振り回している。

それがギョインギョインと回転し、魔物の腹を思いつき切り裂いた！

【ボルテックブレイク！】

「ゴアアアア!!」

ドリルがなんかもものすごい力を発したのか、まともにそれを受けたゴリラが地面に倒れこむ。

白目を剥いていて……完全に仕留められたみたいだな。

とか思っていると、セントはゴリラに向けてきつきのやつみたいな容器を構えた。

なんだ？ 縦に素材を吸寄せたみたいでゴリラが粒子みたいになって吸い込まれていったぞ。

「うっしー！」

満足したらしいセントが、ガッツポーズとともに容器をポーチにしまう。

そうしてそいつは、ベルトの容器を外して元の姿に戻り、俺たちの方に近づいてきた。

…なんかオタク的に心が踊る瞬間を見た気がするが、正直いつてそれどころじゃないな。

「…で、お前は何者だ？」

背中にラフタリアをかばいながら俺が言うと、セントは苦虫を噛み潰したような顔になった。

おい、俺の方が空気が読みたいじゃないか。

やめろその目！

「普通さあ……ここはありがとうじゃないの？ 自分で言うのもなんだけど、オレ一応恩人だよ？」

「どうだかな。信用を得て後で裏切るようなやつかもしれない」

「な、なんつー疑心暗鬼の塊……」

頭を抱えて唸るセントだが、知ったことか。

俺はそうやって、親切そうに話しかけてきたやつに裏切られてん

だ。

もう油断なんかしない。

「…まーいいや。お礼が欲しいわけじゃないし、ピンチっぽかったから手助けしただけだし、気にしないで」

ヘラヘラ笑ってそう言うが、どこまで本気なんだか。

本気だとしたら…：相当お人好しだな、こいつは。

「あの…だったらどうしてこんなところに？」

空気を讀んだのか、ラフタリアが俺の後ろから覗き込んで尋ねている。

たしかに、俺たちを助けたのは偶然っぽいからな…：こいつにもここにくる目的があったんだろう。

「あ、オレ？　ちよつとした人探しの途中でさ、よかったら教えてくれたら…：」

人懐っこそうな笑みを浮かべて聞いてくるセント。

だがその顔が、急に固まった。

…俺を、じゃないな。俺の…：盾を見てる？

そのうち、盾を凝視していたセントの表情が引きつり始めた。

「…：…：…もしかしてさあ」

「あ？」

恐る恐る、なんか信じられないって感じで俺に聞いてくる。

…ああ、やっぱそういうことか。

「君って…：盾の勇者？」

「…それがどうした」

「おーうまーいがつ！！？」

不機嫌な声で答えた俺の前で、セントはがくーつと膝をつき、天に向かつて悲痛な悲鳴をあげていた。

悪かったな、クソ！！

## 自称天才

「さいっあくくだ……よりによって盾の勇者が最初に見つかるなんて」  
草原での戦闘を終え、近くの村に向かう。

さつき出会った目つきの悪い男の人と奴隷らしい亜人の女の子。  
聞けばなんと、男の方はなるべく会いたくなかった盾の勇者ついでうじゃないの。

ついてねえ…。

「だったらさつきとよそに行けばいいだろう。なんでついてきてんだ」

「えっとー…なりゆき？」

スツゲエムカついてる顔で睨んでくる。

…うん、まあいきなり最悪だと言われたら誰だって腹も立つか。

反省！

「オレ、この国に知り合いとかいないしき。できることならどつかのパーティーとかに入れて欲しかったんだけど……それも難しそうだし」

「あっそ」

呆れた目で見られて、ちよつと落ち込む。

しょうがないじゃんか、亜人つてだけで店に入っても嫌な顔されるし、この辺にいる冒険者とかって人間ばっかなんだし。

生きづらいんだよ、オレにとつてこの世界は……やれやれ。

「……ま、いいや。とりあえずその盾調べさせて♪」

「はあ!？」

暗い話はこの辺にしてとにかく突撃！

ずっと待ち焦がれていたものを目の前にしてガマンできる科学者がいるだろうか、いやいな!

ああ…ついに一目見たかった聖武器がこの手に!

「こ、これはオレが知ってるどの金属にも当てはまらない…いやそもそもこれは金属なのか? 無機物には違いないが単純な一元素では構成されていないのかなるほど!」



「気色悪い！ 離れろ!!」

よだれを垂らして聖武器にへばりついていると、力尽くで振り払われてしまった。

おっと、また我を忘れて理性を飛ばしてしまったようだな……だがこんなことでくじけるオレじゃない!

このためにどれだけ旅を続けて、ひもじい思いをしてきたことか! いいじゃんか〜調べさせてくれよお。四聖勇者に会う機会なんてそうそうないんだからさ〜

「だったら他の勇者のところに行けよ! うつとうしい!」

「そんな固いこと言うなよ」

ちっ、ついに近づくこともさせてくれなくなっちゃったか。

本当にこいつ、人間不信なんだな。…自分で罪を犯したわりには、なんかこう、やさぐれてるような。

……今後のプランを変えてみるか。

「あんた、噂で聞くとところじゃ防御力はピカイチでも、攻撃力に難があるんだろ? その子と一緒にいるのを見るに」

「…それがなんだってんだ」

「オレをメンバーとして雇わない?」

噂を信じていたオレは、それが全くの間違いだったことに気づく。

少なくとも話してみても、獣慾に任せて仲間を襲うような輩じゃなさそうだと言うのがわかった。

噂は噂ってことだな、うん。

もっかい反省! そんな、お詫びのつもりで売り込み!

「さつき見たとおり、オレは戦闘に関しちやかなりの自信がある。報酬は……食事とか生活の保障とその盾を見せてくれる、つてのでどうよ?」

オレの提案に、盾の勇者は明らかに胡散臭そうにオレを見てきた。

…まあ、確かにいきなり初対面の相手にこんなこと言われても戸惑うだろうけどよ。

もうちよつと隠す努力しようぜ?

「信用できるか…」

「頭固いなー。そこを押しして頼んでるんだよ」  
うーむ、これはちよつと時間がかかるか？

このまま交渉を続けるか、それともさっさと諦めて別の勇者を探るか。

オレが悩んでいると、盾の勇者の後ろに隠れていた亜人の女の子が、不安げにオレと盾の勇者を見上げてきた。

「……主人様と、一緒に戦うんですか……？」  
んんん？

この子は一体何に怯えてるんだ？ 味方が増えるならむしろ安心してそうなものを……。

オレがそう思っていると、急速に女の子の目に涙が溢れ、ポロポロこぼし始めた!?

「わ、私…捨てられちゃうんですか……!？」

「わーわーわー！ ごめん！君を邪魔者扱いしたいわけじゃないんだよ！ 普通にいてくれていいからさ！ ね？」

ヤツベエ泣かしちゃったよ！

確かにオレみたい強い奴が入ったら、まだ弱い奴隷のこの子は用なしと思われても仕方ない。

でもそう思っちゃうのはちよつとネガティブなんじゃなからうか？

んー…これはオレの目的を省いても心配になってくるな。

奴隷のこの子も……敵意丸出しのあいつも。

しゃーない、こつちの路線で行くか。

「……この子、まだ幼いだろ？ オレが仲間になれば、この子が強くなるまで余裕ができると思うんだ。無茶とかさせたくないだろ？」

それっぽい理由をつけて、どうにか動向を認めてもらおう！

泣き出してしまった女の子を撫でながらそう提案するものの、盾の勇者は以前とオレを睨んだまま頷きもしない。

「……あーもーマジで頭固いなー」

これは本気で長期戦になりそうだ。

そう覚悟していたオレをよそに、何か考え込んでいたらしいたての

勇者がようやく口を開いた。

「そもそもお前、何者だ？ 何だあの妙な力は。あれだけ戦える奴がいるなら、勇者なんていなくてもいいだろう」

「あー、うん。そこからね…」

そつちかー、気になるのはそつちからかー。

そういやあ、別の世界から召喚されてきたんだっけ？ オレみたいな強い奴がいるなら、確かに波にも対抗出来るだろう。

だったら召喚なんかするなって、苛立ってもおかしくはないか。

でもなー、国の意向とオレの正義は別物だから、ぶつちやけその怒りは冤罪なんだよなー。

……よし、じゃあ自己紹介だけでもしっかりやつとくか。

「さつき言った通り、オレの名前はセント。魔導科学者だ！ ……多分」

「多分!?!?!」

「いやはや……お恥ずかしい話なんだが」

しまった…喜び勇んで名乗り始めといて忘れてた。

潔白を証明する以前にオレ、自分の存在すらあやふやなんだった。

「オレ、俗にいう記憶喪失って奴でして」

オレがそう言うのと、盾の勇者も奴隷の女の子も二人とも啞然とした様子で固まつちやった。

うん、気持ちにはわかるけど最後まで聞いて？

「こう、言葉とか知識とかはちゃんと覚えてるんだけどさ？ 自分の

名前とかどこから来たのかとかは全然思い出せなくってさ……まいつちやうよね全く。はっはっは」

「……………」

「無言でジト目はやめてほしいなー」

疑いの視線を向けていた盾の勇者が、なんかこう、冷めた目でオレをじっと見つめてくる。

あ、やめて。

そんな目で見ないで、なんか目覚めそう。

……いかん、何か開いちやいけない扉を開きそうだ。

「あー、じゃあさ!?? どうやったら連れてってくれる? ラフタリアちゃんはいいの!??」

「ラフタリアは俺の奴隷だ。嘘をつかない、裏切らない、そういう命令が下せるように設定している。だからそばに置いている」

あー、そういう関係か。

まあ、世界の全てが敵みたいな目をしてるこいつにとっては、それぐらいじゃないと味方と認識できないのか。

難儀な奴だ……って、そういうことだったら。

「じゃあ、オレもなるよ。奴隷」

「……は?」

オレが自分を指差してそう言うのと、盾の勇者はまたあっけに取られたように口を開いて固まった。

うん、オレも自分で変なこと言ってる自覚はあるよ。

でもさ、これが俗に言う誠意ってやつじゃないの?

「あんたはさ、裏切られたくないから、奴隷のその子以外連れて行きたくないんだろ? だったらオレもなるよ? 嘘もつかないし裏切らない、あんたが唯一信用できる奴隷に」

「……お前、正気か?」

「冗談でこんなこと言わないって」

疑わしげに見つめてくる盾の勇者に、オレも真正面からじつと見つめ返す。

確かに自分から奴隷になるなんておかしな話だけど、オレの目的のためならこつちの方が早いし、特に問題もないんだよね。

盾の勇者は長いことオレと見つめあっていたけど、やがて深いため息をついて目を背けた。

「……いいだろう。しばらく様子を見てやる。使い物にならないときは容赦無く置いて行くぞ」

「よしきた!」

話が早くて助かるよ。

それにこう……仲間意識じゃなくて純粋な仕事相手と思ってくれるのもやりやすそうだ。

「あらためて、流浪の傭兵兼魔導科学者のセントだ。よろしく！」

「…盾の勇者、岩谷尚文だ」

「ラ、ラフタリア…です」

オレのノリノリの名乗りには、盾の勇者ことナオフミと奴隷のラフタリアちゃんも名乗ってくれる。

さてさて、楽しくなってきたじゃありませんか！

## フルボトル

Side:Naohumi

「いでででで！」

もはや通いなれてきた気もする、奴隷商のテントの中。

襟を開けたセントの胸に奴隷紋が刻まれ、セントが痛みで悲鳴を上げている。

そういえば、ラフタリアもあんな感じだったな…。

「ナメてた！ ごめんナメてた！ 奴隷紋ってこんなにキツかったのね!? マジすんません！」

誰に謝っているつもりなのやら…とにかくこれで、セントは俺の命令を聞かざるを得なくなった。

寸前になって逃げ出すかと思えば、事が終わったらこいつ、満足げに笑ってやがる。本気でついてくるつもりか…。

「しかし奇特な方もいらしたものですな。信頼を得るために自分から奴隷になろうとは、ハイ」

「完全に信用したわけじゃない。あくまで雇用契約だ」

奴隷紋がどこまで完全なのか、そもそもどこまで信用していいかはまだ分からない。だが、また裏切られないためには必要なものだ。

禁止事項を設定しておいて…このくらいでいいか。

ステータスは…それなりに高いな。だがやはりさつきよりは低い。あの姿になっっている間の能力の向上という事だな。

すると、奴隷商の奴がセントの顔をまじまじ見つめ始めた。

「実に惜しい、あれはあれで上等な商品になったでしょうに。勇者様にその気があれば金貨6枚でお引き取りしますがいかがでしょう？」

「金貨6枚か…」

「待て待て待て待て悩むな！」

確かに顔はいいし、体つきも健康的だ。売らないけど。

冗談ではのっかってみたが、さすがにそこまで堕ちたつもりはない。それこそあのクソ女みたいにはなりたくない。

セントも嘘だとわかったのか、あからさまにホツとした様子でラフ

タリアのそばに寄っていった。

「……大変だったねえ、小さいのにこんな食らわされて」

「い、いえ……」

まだ少しよそよそしさがあるみたいだな、当たり前か。

ぶつちやけ、俺も雇ったはいいがうさん臭くて仕方がない。おかしなやつだという事しかわかってないし、記憶喪失というのもそれに拍車をかけている。

だが……枷も無しに放り出すのと、枷付きで傍に置くのなら、後者の方がまだ安心できる。

俺がじつと奴を睨んでいると、セントは何を勘違いしたのか頬を染めながら流し目をくれてきやがった。

「やだなあ、そんなにじろじろとオレの胸見ないでくれよ。オレだつて照れるじゃないか」

「……ここで売り飛ばされたくなければ黙ってる」

「ゴメン！ ふざけてマジゴメン！ もう二度とこう言う冗談言わないから！」

その反応はあの女を思い出すからやめろ!!

クソツ!!

「ふん、いくぞ」

「は、はい！」

「あーもうそう急がせるなよ」

奴隷商に手数料を払い、俺はテントを後にする。

人数が増えたのはいいが……正直これでよかったのかと本気で不安になってきた。

……そういえば、ウサギとタヌキの組み合わせって、昔話的には最悪だったような。

まあ、いいか。

☒

Side::Sent o

「ちえすとー」

寄ってきた魔物、バルーンとかいう丸い奴を思い切り蹴り飛ばす。

あんまり強くない奴だったのか、オレの蹴り一発で割れてしまった。…でもまだまだいっぱいいるんだよなあ、異常なほどに。

だったら…！

「細かくて多い敵にはあゝこれ！」

オレはポケットから新しく手に入れたフルボトルを取り出す。

ホウキとかチリトリとか、掃除に関する物を吸収して作ったそれを、タンクフルボトルと入れ替えて差し込む。

【ラビット！】【掃除機！】

オレのまわりにラインとフレームが形成され、赤色と緑系のアーマーが作られる。

気合いを入れて手のひらに拳をぶつけ、景気づけにオレは叫んだ。

「ビルドアップ！」

フレームが前後からオレを挟み込み、オレの体にアーマーを着せる。

ラビット-halfボデイはそのままに、反対側には異世界の技術、掃除機を模した鎧が出来上がった。

【ボルテック・アタック！】

「どりゃああああ!!？」

オレはベルトのハンドルをぐるぐる回し、掃除機の吸引口を魔物たちに向ける。

とんでもない勢いで掃除機は魔物たちを吸い込み、吸引口の前でひと固まりにしてしまう。そこへオレが渾身の蹴りを放ち、一網打尽にしてみた。

ん、我ながらフラインプレーー！

「……思ってたんだが、お前のその妙なアイテムは一体なんなんだ？」

「ん？ あーこれ？」

ラフタリアちゃんを守りながら、別の魔物の相手をしていたナオフミがオレに聞いてくる。…ていうかすごいね、思い切りかまれてるけど痛くないの？

そういえばこれについて説明してなかったか…。

…んふ、んふふふふ！



気になる？ 気になっちゃう？

そりゃあ気になるよねえ!?

「そこまで気になるならば耳をかつぽじってよく聞け！ これこそオレの最っ高の発明品！ ビルドドライバー！」

バーン！と腰に手を当てて、オレは二人にベルトを見せつける。

…ちよつと引いてる気がしなくもないけど気のせい！ 目の錯覚！

「フルボトルっていう、この道具に秘められた力を組み合わせ、自分の体に纏わせることで、爆発的な攻撃力を与えるちよーすごいアイテムなのだよナオフミくん」

「誰がナオフミくんだ」

「こらそこー！ノリ悪いよー！」

「フルボトルはこのエンプティボトルに魔物や物質を吸収させることで生まれ、その組み合わせは無限大に広がるのだ！ すごいっしょ？

天才っしょ!?!?」

「はいはい」

「なにそのぞんぎいな反応!?!?」

わざわざ説明してあげたのに……おかしいなあ、ここはもっとうろなん…だと…」ぐらいの反応があってもいいだろうに。

と、思ってたたらナオフミは別の事を考えてたみたいだった。

「……それを俺やラフタリアが使うことは?」

「あ、それ無理。うっかり誰かに盗まれたりしたときのことを考えて、オレ以外使えないようにしてあるから」

あー………すげえって事じゃなくて、使えるかどうかを考えてたのね。

いや、まア勇者ならその考えも間違ってないんだらうけど………あんた、男の子だよな? ワクワクとかしないの?

しない? しないの? マジで?

「…ならいい。次の獲物を探すぞ」

「…あいあいやー」

ドライすぎるぜナオフミ………何でこんなにひねくれてんだ? 過

去に何があつたの？

不完全燃焼気味に歩き出そうとした時、オレは大事なことを思い出した。

そうだ。別にあれはそんな制約設けてなかったんだっけ。

「あ、でも武器単体なら使えるから、必要なら貸すぞ？ 一応オレ、持ち物も含めてナオフミのものってことになってるんだし」

「…どっちにしろ、俺は使えないだろうがな」

「へ？」

「…貸してみろ」

ナオフミに促されるがまま、オレの武器ドリルクラツシャーを渡す。

あ、剣術とかが使えないとかそういうの？ もしくは運動音痴でうまく戦えないとかそういうの？

そんなの別に恥ずかしくならなくても…ってうお!?

何だ!?! ナオフミがドリルクラツシャーを持った瞬間、弾かれた!?

「うっわあ…マジか」

「この…忌々しい伝説の武器以外は使えないようにできているらしい。だからお前は、自分の道具は自分で使え」

「難儀だなあ…」

そりゃあ…仲間、っていうか戦う奴が必要不可欠だわ。

だったらその人間不信直せよって思うけど、普通の冒険者とかは近づいて来なさそうだしな、あんな噂があるんじゃないや。

…っておい。

「ちよつとは待てつてのー!」

空気を読まずに襲ってきた魔物をまた蹴り飛ばす。

おい！なんか今日は妙に多いなクソ！

「ラフタリアア！」

「やあっ！」

ナオフミが攻撃を受けて、ラフタリアちゃんが剣で突き刺す。

まだちよつとおつかかなびっくりな感じかな？ しょうがない、お姉さんがもう少し手伝ってあげなくちゃね！

「どるりやああああ!!」

その日の狩りは、日が暮れるまで行われた…。

☒

Side : R a p h t a l i a

「うんめえ…!」

ご主人様と一緒に日が暮れるまで魔物と戦って、そのあとはご飯の時間。

新しくご主人様の奴隷になったセントさんが、狩った魔物のお肉をかじって幸せそうに笑っています。

やっぱりそうですよね! おいしいですよね!

「うんめえなこの肉! お前どつかで料理人でもやってたのか!」

「お世辞か? おだてても何も出んぞ」

「イヤイヤ本心だつて!」

「ご主人様のご飯は、なんでかすぐ美味しくいんですよ」

「みたいだな! ……こりやいい雇用主に会えたな」

セントさんがニコニコ笑っていると、私も嬉しくなります。

ご主人様は怖いけど、でも本当は凄く優しい。それを知ってくれてる人が増えるのはとても嬉しくて……。

でも何でだろう、胸がもやもやする…?

「一人増えると、やはり収穫量も段違いだな……」

私達のご飯を食べている間、ご主人様は薬草を混ぜて薬を作っています。

私もお手伝いしたいけど、難しそうで手が出せません。

「何やってんだナオフミ?」

「…明日売る薬の調合だ」

「色々やってるのね」

セントさんは頭がとてもしっかりみたいで、すごいものを一杯作っています。

きつと、すぐご主人様のお役に立っています。

…いいなあ、私とは大違いだな。

気分が落ち込んでいると、胸がまた苦しくなって、今度は咳が出てきてしまいました。

「けほっ…けほっ」

「ん？ 風邪かい？」

「いや、こいつはもともと呼吸器系が弱いらしい。…薬だ、飲め」

「う…はい」

「ご主人様は売り物である貴重な薬を私に与えてくれます。

でも…この薬、すごく苦くてきらい。よく効くのはわかるけど、飲むのがすごくつらい…。

「うわあ、苦そう…」

「貴重な商品なんだ。無理にでも飲ませないと治るものも治らん」

「ご主人様は厳しいけど…これも私の事を想ってくれるから。」

頑張って飲みきったら、ご主人様は私の頭を撫でてくれた。そうするとなんでかな、胸がきゅって締め付けられる感じがする。

さっきの苦しいのは違って、これはいやじゃない。

「飲んだらさっさと寝ておけ。明日も早いぞ」

「はい……」

「へーい」

「ご主人様に言われて、私とセントさんは寝る準備をする。

本当は、まだ寝ていたくない。

だって、あの悪夢をまた見てしまうかもしれないから……。

S i d e : S e n t o

ナオフミの奴、そんなにやることがあるならオレに手伝わせりやいのに。

…まだまだ信用してもらえるには程遠いか。

「……いや、いやあ…」

ん？

先に寝たと思ってたラフタリアちゃんが起きた…いや、これはうなされてるのか？ …って思ってたら。

「きゃあああああああああああ!!!」

いきなりラフタリアちゃんが悲鳴を上げて跳び起きた。

耳っ：耳！ 自慢の耳が余計に音を拾いすぎて…！ キーンてなったキーンって!!

「なっ、何だ!?!」

何事かと思つてたら、ナオフミが作業の手を中断して、手慣れた感じでラフタリアちゃんを抱き寄せてあやし始めた。

「大丈夫だ……大丈夫だから」

「いやあああ……いやああ、お父さん……お母さん……!」

「どうしたんだ……?」

「夜中になると、パニックを起こすらしい。理由はわからんが、奴隷になつてたぐらいだ。辛いことでもあつたんだらう」

…うん、まあ、こんな小さな子が奴隷になつてるぐらいだしな。いろいろあるだろうさ。

ていくかこの人、オレが来る前もこんなことずっとやってたのか。

とか思つてたら、ラフタリアちゃんの悲鳴に呼び起されたのか魔物が集まつてきた。

……正直まだ眠くなかつたし、いいか。

「…あいつらの相手はオレがやるよ。ナオフミは休んでて」

「…わかつた」

ナオフミにそう言つて、オレはベルトとフルボトルを取り出して装着する。

…ついでに、言っておくか。

【ラビット!】 【タンク!】

「……あのさ、ナオフミ。あんたが街で色々噂されてるような奴じゃないのは、なんとなくだけどわかつてきた。でもオレは、あんたのことを何も知らない」

ナオフミはラフタリアちゃんを抱いたまま、振り向かない。

聞いてると思うけど、何も答えない。でもオレは…言っておきたい。

【ベストマッチ!】

「だから…できるだけ知りたいと思う。そのために、オレはこれから

お前のそばで力になるよ」

「…好きにしろ」

ぶつきらぼうに言つて、ナオフミは落ち着き始めたラフタリアちゃんの頭を撫でる。

……オレは馬鹿か。

こんなに優しい奴が、仲間を襲ったりなんてするもんかよ。

【Are you ready?】

「変身！」

誰が流した噂かは知らないけど、こいつを貶めた奴は絶対に許さない。

こいつに今、味方がいないんなら……オレが絶対に助けてやる。

「おりゃあああああああああ!!」

とりあえずお前らは、オレの八つ当たりの相手になりやがれ!

## 謎の多い女

Side:Naohumi

「ほー…おもしれえ仕掛けだな」

セントが俺の奴隷になった翌日。

俺たちは武器屋の親父の店に訪れていた。

セントが持つているドリルっぽい武器の整備を頼むためだ。

「専門外つてこともあるが、ここまで精巧な道具は見たことねえな。ホントにこんなもんをお前さんが作ったのか？」

「おう。なにせ天才的なもので」

「はー、確かにこりや匠の技だ」

親父が興味深そうに武器を褒めると、セントの奴は鼻を高くしている。

ファンタジーっぽい世界にあんなもんがある時点で相当異常だが、やはり親父も知らない技術だったのか…。

あいつホントに何なんだよ。

「にしても度胸のあるやつだな。兄ちゃんの信用を得るためにわざわざ奴隷にまでなるたあ」

「まだまだ壁があるけどなー…」

「その辺はお前さんの努力次第だろうよ」

親父とセントが何かしゃべっているけど、そんな未来はきつと来ないだろう。

来ないに決まっている…：俺はもう、誰も信用しないと決めたんだからな。

「んで、俺はこいつの整備をやっておけばいいんだな？」

「うん。作ったのはオレだけど、素材自体の整備は専門の人に任せといた方がいいと思つてさ。頼むよ」

「ふむ…：まあやれるだけのことはしておくぜ」

セントとの交渉が終わった親父が、俺とラフタリアの方を向いた。

わざわざ町に来たからには何かやっておきたいが…：特に用事はないんだよな。

「アンちゃんの方は何かあるかい？」

「俺はいい…前にもらった研ぎ石が役に立ってるからな」

親父には相当驚かれたな。

ん？ 当のラフタリアは…何をてるんだ？

子供が遊んでいるのは…バルーンの皮を使ったボールか。

「…あれが欲しいのか？」

「っ！ ち、ちがいます…」

「…そうか」

…こいつは前々から欲しがらないな。

前の主人がかなり雑に扱っていたらしいが…。

俺は少し考えると、セントに小銭を本当に少しだけ渡した。

「セント、これであいつにあのボールでも買ってやって、一緒にしばらく遊んでこい」

「ん？ いいのか？」

「たまには休ませるのも奴隷使いの義務だろ。いいからさっさと行ってこい」

しっしつと俺が手を振ると…何だ？ものすごく憎たらしい笑みを浮かべやがった。

おい、何だその「素直じゃないな」的な眼は。

うっとうしいからさっさと行け！

「ラフタリアちゃん、休憩がてらオレとボール遊びしようぜ？」

「い、いいんですか…？」

「ナオフミからお許しはもらってるからさ！ いこいこ」

「わわっ…！」

にやにや笑ったまま、セントが半ば無理やりラフタリアの手を引いて店を出て行く。

どこかそこらの空き地にでも行ったんだろう。あとで迎えにいけばいいか。

そう思ってたなら、親父までもがさっきのセントのような目を向けてきた。

おい、その目は何だ。よくわからんがめっちゃ腹立つな。



「どうなることかと思ってたが、心配するほどじゃないさそうで安心したぜ」

「は？」

「あの亜人の嬢ちゃんだよ」

…親父が言っているのはラフタリアはもちろん、セントの事もだろう。

俺だつて連れて来たかったわけじゃないが…断つてもしつこそうだったしな。

まあ、戦力的には助かつてるかもしれないけど。

「アンちゃんのところにもまた奴隷が増えたって聞いて、金欠にでもなつてねーかと心配してたんだよ。実際は、俺の予想を大きく超えてきてたけどな」

「…まあな」

実質奴隷紋の手数料を考えてもほぼタダだったし。向こうの要望も盾を調べたいとかそんなだったし。

安上がりな女だよ、まったく。

にやにや笑っていた親父だったが、不意に真剣な表情で首を傾げた。

「にしてもホントに何者なんだ？ あれだけの代物を作れるなら、相当有名になつてもおかしくなさそうなんだが…」

「さあな…記憶がないの一点張りだからな。出身も正確な年齢もわからん」

ついでに名前も本名かどうかあやしい。

キャラクターとしてはありふれた設定だが、実際遭遇するとうささん臭く感じられるとはな。

すると、親父が突然聞き捨てならない事を口にしてきた。

「ん？ 生まれはフォーブレイなんだろうなと思つてたが、違うのか？」

「は？」

今なんつった？ フォーブレイ？

どこかの国なんだろうが…俺はこの世界には詳しくないんだよ。

勝手に納得してないで最初に説明しておけよ！

「フォーブレイってどこだよ」

「ああ、知らなかったのか……この世界で一番でかくて栄えている国だ。高い技術力を誇っていることで有名でな……そうか、あの国の人間ならあの技術も納得できるか」

そう言うって親父は、カウンターに地図を出して位置を教えてください。

メルロマルクからはかなり離れていて……そんなとんでもなくデカイ。確かに世界一の大国らしい。

それで技術も高水準だと……この国に召喚されてりゃ、もっとマシだったかもしれないな。今さらどうでもいいが。

「フォーブレイについてはわかったが……なんで親父はいきなりそう思ったんだ？」

「だってあの嬢ちゃん、ナオフミにはずっとフォーブレイ公用語を話してただろ。俺と話すときはメルロマルク語だったけど」

「なに!?!」

キョトンとした顔で応える親父だが、俺はそんなの初耳だぞ！

どうなっている!?! ラフタリアとも普通に話してたはずだぞ!?!

「アンちゃん、いつの間にフォーブレイの言葉を覚えたんだ？ 大したもんじゃねえか」

「いやいや待って待て。俺がいつそんな言葉を使っていた」

「いやいや、むしろ俺はアンちゃんが自覚してなかったことにびっくりりなんだが……」

どうにも親父との会話がかみ合わない。

いや……そもそも考えていれば、異世界の住人である親父とこうして話していることがおかしい。

考えられる原因といえは……この盾しかない。

そしてあいつの目的はこの盾を調べること……という事は。

「すまん親父。ちよつと確認してくる」

「お、おいアンちゃん!?!」

親父の制止も聞かず、俺はどこかにいるはずのセントを探す。

この辺りはほとんど店で、遊べるような場所はほぼない……となるとあいつらがいるのは。

いた……こじんまりした空き地、子供が秘密基地とか作ってそのような場所でバレーみたいなの遊びをやっていた。

「うまいうまい！ んじゃあそろそろオレも本気出して……！」

「おい」

「うひゃあお!？」

俺がちよつと苛立ちを込めた声で呼ぶと、セントの奴は文字通り飛び上がって驚く。

そして俺に気づくと、恨めしそうな目で睨んできた。

おい、被害者面すんな。

「い、いきなり後ろから声かけるなよ！ ビビったあゝ」

「お前、今何語で話してる?」

「ん?」

汗を拭うしぐさを見せるセントに構わず、俺はずいつと顔を近づけて尋ねる。

ラフタリアが目を白黒させているが、それは後回しだ。……なぜかは知らんがシヨックを受けている顔をしているような。

セントはぽかんと口を開け、訝し気におれを睨み返してきた。

「え、いきなり何?」

「いいから答えろ。お前、この国のものとは違う言語で言葉で喋ってたんだってな」

「あ」

俺がそう言った途端、セントはさつと目を逸らした。

こいつ……案の定勝手に何か仕掛けてやがったな。

「あははは……悪い。ちよつと実験してたんだよ」

「実験だあ?」

「ああ、聖武器には言語を翻訳する力があるって聞いてたからさ。どれだけ対応できんのかなってちよつと興味が湧いてきて……」

舌を出して誤魔化そうとしてくる目の前の馬鹿。

最近なんか妙になれなれしくなってきたかと思えば、科学者らしい

マッドな部分を見せてきやがったな。

イラツとしたから、つい奴隷紋を発動させてしまっていた。

「騙そうとしてんじゃねーよ」

「あだだだだだだ!! ごめん、ごめんってナオフミ! ちよつとした出来心だったんだよ!!」

そういう出来心は我が身を滅ぼすんだ。覚えておけ。

まあ……実害のない悪戯のようなものだからこの程度で済ませてやるけど。

それはそれとして、だ。

「おい、どれだけ対応できるかってことは、他にも違う言葉を使っていたのか?」

「え? おう。今日はフォーブレイだったけど、昨日はシルドフロリーデンとシルトヴェルトのだったぞ」

そんなないろいろ使ってたのか……というか、そんだけの言語を流暢にしゃべれすぎだろ。何者だ以前のお前は。

一応、ラフタリアにも確認をしてみよう。

「…本当か?」

「は、はい。時々聞いたことのない言葉を使っていましたけど…」

「それは多分これのことだねー。驚かせて悪かったねー」

ラフタリアにセントが話しかけ、ラフタリアがめっちゃオロオロしてる。

これは……ラフタリアも知らない言葉で話してからかっているんだな。

盾の翻訳すげえな……そしてそれすら流暢にしゃべれるこいつもすげえな。

「で、ナオフミはこれも普通に聞こえていると」

「あ、ああ…対応できる言語に限界はなさそうだな」

「ますます興味深いじゃないか…! そういえば今日はまだ調べさせてもらってない! 触らせろコリア!!」

睨みつける俺を全くおそれず、セントはいつぞやの様に盾に飛び掛かってきた。

やめろ！ お前さっきの奴隷紋で学んでないのか!? もっぺん食  
らわせるぞコラ！

「鬱陶しいんだよ、このバカウサギ!!」

結局、何十分も粘り続けるセントに根負けし、思う存分触らせてや  
ることになってしまった。

その間、なぜかラフタリアが不安げな表情で俺の腕にしがみついで  
いたが……一体どうしたっていうんだ？ セントの事も若干睨んで  
たし。

## 二つ首の黒犬

S i d e : S e n t o

レベル上げと金稼ぎ目的で、オレたちはリユート村という鉱山の麓にある村にやってきていた。

が：なんか物凄く活気がない。

村人もなんか……元気がないな。

「えらく寂れてるな」

「波の影響だそうだ……波で出てきた魔物が鉱山に巣食って、事業が成り立たなくなったらしい」

「ふ〜ん」

「こんだけ困ってる奴らがいるのに、国は何にもしてくれないそう  
だ。」

もちろん勇者も、ナオフミ以外の誰もこの村には来ていない。やれやれだな……。

「で、これからその鉱山に行くってことは、魔物退治？」

「いや、希少な鉱石が採れるらしいからな。手っ取り早く稼げるだろう」

「ああ、そう……」

まあ、そういう奴だつてのはわかってるけどさ。

仮にも勇者なんだから、ウソでもそういう勇ましいこと言っておけばいいんじゃないのか？

機嫌悪くなりそうだから言わないけど。

……ん？

さつきからラフタリアちゃんが大人しい……まあ、不安げなのはいい  
つもだけど。

「大丈夫か、ラフタリアちゃん。今朝からちよつと調子悪そうだけど  
？」

「だ、大丈夫です」

「そう？ 無理するなよ。もし何かあるならオレがナオフミに言って  
休ませてもらうよ」

「大丈夫ですって……」

いやいや：明らかに無理してるだろ。

そーいや朝からこんな感じか。なんかいやな夢でも見たのかね？

そうこうしているうちに、オレたちはリユート村を出て、件の鉱山に辿り着いていた。

で、さっそくナオフミは炭鉱夫の使っていたであろう小屋に向かい、残ったものを色々物色し始めていた。

「助かる。役に立ちそうなのが結構あるな」

「ロープにツルハシに……うん、まだまだ使える」

何だろ、この、勇者っぽいんだかぽくないんだかよくわからない感じは。

金欠だからしょうがないっちゃしょうがないんだけど……なんか釈然としないような。

ナオフミは回収したものを盾に入れて、便利そうなスキルを手に入れている。

何でただのロープや鉄の棒きれであんな能力が手に入るんだ？

オレも人の事言えないけど。

一通り物色し終えて、小屋の外に出てみると、オレたちは興味深いものを見つけた。

「お、トロツコ発見」

「……だがボロボロだな、使えそうにない」

「ところがそうでもないんだよな」

あん？と訝しげに見てくるナオフミの前で、オレは空のフルボトルを開けてトロツコに向ける。

するとトロツコが粒子状になり、フルボトルに吸い込まれ、あっという間に満タンになる。

そしてオレの手の中には、新しいフルボトルが完成していた。

「でーきたできた♪」

「……魔物以外にもいけるんだったか」

これだけでも十分な収穫だぜ！

どんな能力化は使ってみてのお楽しみだけど、きつとハズレはない

はずさー！

来てよかったなあ。

「そういえばあのベルト……ベストマッチとか言ってたな。どう言う意味だ？」

「そのまんま。一番相性のいい組み合わせってこと……らしい」

「らしい!?!」

おっと、ものつすごい驚きの表情で見てきやがる。

そんな目で見るなよ。正直オレだって困ってんだから。

「あはは……オレはただ、あれを使い熟するための道具としてベルトを作ったから、フルボトルの性質に関してはよくわかってないんだよね」

「……何者だよ、記憶をなくす前のお前は」

「何だろね？」

肩をすくめるオレだが、確信はしている。

今のオレも認めざるを得ないほど、以前のオレは天才だったのだから。

と、まあそんな雑談をしつつ、オレたちは鉱山の入り口に辿り着いていた。

「ここが坑道？」

「ああ……ラフタリア、松明を持ってろ」

「はい」

もうしばらく使われてないみたいだし、明かりも当然ない。

ラフタリアちゃんに光源を任せて、オレとナオフミで前を守りながら歩いていく。いきなり魔物が出てきても困らないようにな。

ん、でもやっぱり足元がよく見えん。

「結構深いな……これはちよつと期待できたり？」

「だいたいかな」

しばらくはトロツコの線路を目印に歩く。

入口の方はもう掘り尽くされてるだろうけど、置くに行けばまだあるはずだよな……たぶん。

「ん？」



その途中、オレは気になるものを見つけてナオフミを呼び止める。それは線路の枕木の間に見つけた、魔物の物らしき足跡だった。

「これは……犬か」

「ああ、でっかい犬の足跡だ」

でもそこまで大きくはないか。ラフタリアちゃんでも普通に対処できそう。

と思つてたら、横にいるラフタリアちゃんがなんか、ものすごく青い顔で震えてるのに気がついた。

……いやな予感がする。

「大丈夫？ 顔真つ青だけど」

「つ……は、い」

なんとか返事を返してくれるラフタリアちゃんだけど、これはちよつとまずいかな。

ナオフミに伝えようと思つたら、オレが言う前に口を開いていた。

「ラフタリア、セント、何かあったらすぐに逃げるぞ。いいな」

「は、はい！」

「りよーかい」

お？ちよつと顔色元に戻ったか。オレが聞いても震えてたのに。

これは……ひよつとしたらひよつとするのかな？そういうアレなのかな？

オレは思わずナオフミの方をニヤニヤしながら見てしまう。

朴念仁みたいな反応して……罪作りの男だねえこいつは。幼女キ

ラーとでも呼んでやろうか？

ま、からかうのはまた後にしておくか。

ナオフミも気づいてないみたいだし、こういうのはそつと見守るに限る。

今は仕事の時間だしな。

「この辺りでいいか……さっき手に入れたスキルで」

「ナオフミ、ナオフミ」

小屋で手に入れたツルハシを構えるナオフミに、オレはドリルクラッシャーを見せる。

が、呆れた顔で首を横に振られてしまった。

「……それは使わん」

「えー」

「いいからさっさとお前も掘れ」

そ、そんな拒否することないでしょうに……いや、鉱石が変に傷ついても困るのはわかるけど。

しょうがないからオレもドリルクラツシャーをしまつて、普通のツルハシを持つ。

くつ…絶対ドリルの方が簡単に掘れるのに、めんどくさいなあ。

…あ、クリティカル入った。

「おお、結構デカイのとれたぞ」

「そうか、よくやった」

「へっへっへ……ん？」

手のひら大の鉱石……これはライトメタルかな？

売る用と、フルボトルにする用と、なるべく多めに採取しておきないな。

…つて、またさつきからラフタリアちゃんが大人しいな。

「どうしたんだラフタリアちゃん、急に黙り込んじゃって……」

なんか立ち尽くしててるラフタリアちゃんを心配して振り向くと……そこにいた奴に、オレとナオフミは目を見開いた。

「グルルル……！」

そこにいた、二つの首を持つデカイ犬の魔物に、オレは思わず息を呑む。

あいつか……この行動に住みついた魔物ってのは。結構強そうだな。

「……あれ、途中で見つけた足跡の主だよな」

「ああ、だがあれより一回りはデカイぞ」

「しかも、完全にこつちを標的にしてやがる」

でもしよせんは一匹。三人全員が出る必要もなさそうだな。

何ならオレ一人でも十分相手できそうだし、さつきと片付けて作業に戻るとしますかね。

と、思っていたけど……認識が甘かったことを思い知らされた。

「おいおいウソだろ…!？」

オレが相手をしようと思っただけに出たたん……二首の黒犬の後ろから別の黒犬が出てきた。

しかも……いっぱい。

しかもムチャクチャいっぱい……!

ナオフミもちよつと慌ててたけど、すぐに冷静になって盾を構えた。

「真正面からやるのは無理だ。隙を見て退くぞ」

「がってん! へんし……」

命が大事! さっさと逃げるに越したことはない!

というわけで早速変身しようと思っただけだった。

「いやああああああ!!？」

「え!？」

「くっ、こんな時に……!」

突如、頭を抱えて悲鳴を上げ始めたラフタリアちゃん。

さつきから様子がおかしかったけど……一体どうしちゃったんだ!?

しかも、悲鳴に反応したのか黒犬たちが一斉にラフタリアちゃんに向かってきてしまった!

「ナオフミ! ラフタリアちゃん!」

オレの声でナオフミは我に返ったのか、黒犬に食われかけたラフタリアちゃんをナオフミが抱きかかえ、思いつき飛びのく。

そして二人は……すぐ後ろの崖から落ちていった。

「ナオフミ! ……ってうわわわ!!」

助けに行こうと思っただけ、オレの前にも黒犬たちが集まってきた!

やべえ……おれのレベルじゃこいつらの相手はきついぞ!?

ちくしょう、どうすれば……! ええい、こうなったら!

「必殺! 脱 兎!!」  
ラビットエスケイプ

この場は仕方ない! 許してくれ、ナオフミ! ラフタリアちゃん

！  
オレも命が惜しいんだよ！！

## 消えない悪夢

Side: Naohumi

「……まったく、こんな時にパニックに陥るとは」

魔物たちから逃れるため、悲鳴を上げるラフタリアを抱えて滝つぼに飛び込んだ俺は、ロープシールドを使って崖の上まで戻ってきた。

今朝から妙に様子がおかしいとは思っていたが、あの犬に何かトラウマでもあったのか？

「あいつは、逃げたか。まあ、結局その程度だろうな」

崖の上に、セントも魔物たちもいなかった。

どっかで逃げ回ってるんだろう……いないなら、もうどうでもいいがな。

見下ろせば、へたり込んだラフタリアがうつむいている。

「ごめん……なさい」

「あの犬の魔物を見てから一層ひどくなったようだな……何があった」

「……私は」

そこで聞いたラフタリアの過去は、正直胸糞の悪い内容だった。

海沿いの村で両親や友達と平和に暮らしていたが、波で溢れ出てきた魔物によって村は壊滅。

両親の手によって危機を脱したが、彼らは魔物に食い殺されて終わり。

なんとか村を復興させようと、生き残った村人たちが頑張っていたが、その後襲ってきた奴隷狩りに捕まり、悲惨な目にあわされたとか。

その後はずっと悪夢を見ていたらしい。死んだ両親や友達が、恨み言ばかりを言ってくるのだと。

……夜泣きの原因はこれか。

「ラフタリア、お前は……」

「グオオオオオオオオ!!」

俺が口を開いた瞬間、あの魔物の咆哮がまた聞こえてきた。

クソ…少しは空気を読みやがれ！

「ひっ…ひいいい！」

「落ち着け！ あれはお前の両親を殺したやつじゃない！」

「でも…でも！」

ラフタリアは完全にパニックに陥っていて、戦える状態なんかじゃない。

だが…俺じゃこいつらを突破できない。

無理にでも、ラフタリアに戦ってもらわなければどうにもできないんだ…！

「…お前の両親が戻ってくることはない。だが！」

俺自身、どの立場でものを言っているんだと思う。

だが、こんなところで二人とも死んでいられないんだよ！

「お前はまだここで生きているだろう！ やられたまま、怯え続けるだけか！ お前がただ一人生き延びたことに負い目を感じているなら、それは大きな間違いだ！ 死んだやつに何をしたらって何の意味もない！」

俺の声が届いているかは分からない。

どのみち、あのトラウマを乗り越えない限り、波と戦う事なんてできはしないんだ。

だったらここで、こいつが立ち上がるのを待つしかない！

「お前が苦しいのは、お前がお前を責めているからだ！ そんな無意味なことはもうやめろ！ それでも苦しいなら…今生きてこの世界にいる、お前と同じ苦しみを持ったやつを救え!!」

魔物たちは少しずつ近づいてきている。

後ろは崖…これ以上は引けないが、逆にいえば後ろから敵が来ることはない。

ラフタリアを守るには絶好の位置だ。

「かかってこい犬共！」

俺の声に反応してか、魔物たちが一斉に飛び掛かってくる。

俺は盾を思いっきり振り回し、雀の涙みたいな攻撃をぶつけまくる。だがやはり威力不足らしく、殴ってもすぐに向かってきやがる。

そのうち俺の肩に噛みついてくる奴も出てきた。

「ぐあっ!!」

「ぐしゅじゅ…さま…!」

痛え…! 本当に、なんで俺がこんな目に遭う!?

ラフタリアはやはり、動く事ができない。ここで二人とも死ぬくらいなら…!

「…もういい! 戦えないなら、逃げろ!」

魔物の牙が、俺の首を狙ってくる。

クソツ…こいつら、是が非でも離さないつもりか…!

噛まれた傷口から血が溢れて、意識がだんだん遠くなってくる…。

ここまでか…!

「やああああ!!」

そう覚悟を決めていた時、後ろにいたラフタリアが飛び上がり、ナイフを振り上げて魔物に飛び掛かった。

ザクザクとナイフを突き立て、俺に噛みつく魔物たちを一旦追い払う。

その姿は殺気とは比べ物にならない、鬼気迫るといった様子だった。

「ぐ、ぐ主人様は…! わたしが…!」

ナイフを突きつけ、威嚇するラフタリア。

だが魔物たちはたいして怯える様子もなく、ひとときわ大きい魔物が前足を振り上げた。

「あつ…!」

それだけでラフタリアの身体は弾かれ、衝撃でナイフが手から離れていく。

武器を失ったラフタリアに魔物たちが群がってくるが、その前に俺がラフタリアを抱き寄せる。

せめて…せめてこいつだけでも守らなければ!

【鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエイ!】

「そうは問屋がおろさねえっての!!」

!?

魔物の牙が俺に届きかけた時、見覚えのある青と赤の影がものすごい跳び蹴りをかまし、魔物を思い切り吹っ飛ばした。

この派手な登場は…。

「お前…：逃げたんじゃなかったのか!？」

「見くびんなよ！ お前らを置いて逃げるわけねーだろうが！」

顔を上げると、ビシツと指を突き付けてきたセントが鼻息荒く俺を見下ろしてくる。

こいつ…裏切ったんじゃないのか。

「小さな女の子が勇気振り絞ったつてのに、オレが体張らねえでどうするってんだ？」

セントはそう言い、ベルトに挿したフルボトルを入れ替えて魔物たちに向き直る。

なぜかその背中は…前よりも大きく見えた気がした。

【ゴリラー！】【掃除機！】

「行くぜお二人さん！ 変身！」

セントのまわりにフレームができ、挟み込んで鎧を作り出す。

ゴリラの腕と掃除機の腕という、アンバランスな格好になったセント。

すると、ラフタリアの手元にあのドリルが手渡された。

「ラフタリアちゃん、これ使って！」

「はい！」

ドリルを手にしたラフタリアが、セントと並んで立ちあがる。

魔物たちは新たに増えた敵に唸り声をあげ、またこつちに向かつて突っ込んでくる。

俺は奴らの前に立ちはだかり、もう一度攻撃を受け止める。

やられてばかりなわけがねえだろうが！

「今だ！」

「やあああああ！」

「おりやあああ！」

【ボルテックファイニッシュ！】



俺を標的にしている魔物たちに、ラフタリアとセントが同時に攻撃を加える。

ドリルが大きい方の魔物の肉をえぐり、他の小型はセントが吸引し、ゴリラの腕でぶん殴る。

あつという間に魔物たちは叩きのめされ、俺はようやく一息つく事ができた。

「くっ……どうにか、なったか」

「ご主人様……」

腰を下ろし、血まみれの肩を掴んでいると、ラフタリアが俺の胸に抱きついてくる。

……立ち向かったとはいえ、やはり恐怖はあつたようだな。

ん？ おい、何だセント、その顔は。

腹立つからやめろ、ニヤニヤすんな。

「死なないで……死なないで、ご主人様……！」

「……死ぬもんかよ。死んでたまるか」

少なくとも、元の世界に戻るまでは死ねない。

そのためには、波に打ち勝たなくてはいけない……それまで努力するしかない。

俺は小さくため息をつき、顔を上げる。

セントの奴は何も言わず、俺に話しかけられるのを待っていた。

「……戻ってくると思ってなかった」

「そこまで薄情じゃないよ。こんないい雇用主はそうそういない」

「はっ、どうだかな」

どんな考えで助けに来たのかは知らない……だが、こいつが危険を冒してきてくれたのは確かだ。

信じたわけじゃない……でも、礼を言わないのは違う。

「……だが、たすかった」

「へへっ」

セントは得意げな顔になり、俺に手を差し出してくる。

少しためらったが、俺はラフタリアを抱きかかえたままセントの手を掴んで立ち上がる。

何だろうな…少し肩が、軽くなった気がする。

「うっし！ さつさと採集終わらせて、こんなところからおさらばしようぜ！」

セントはそう言って、鉱石を採取していた場所に向かっていく。

正直つかれたが、たしかに稼ぎがまだ足りない。

もう少し、頑張るとするか。

余談だが、この日からラフタリアの夜泣きはなくなり、うなされる事もなくなったようだった。

## 戦の用意

Side: Sento

「いやあ…」

「なんていうか、見違えたな…」

鉾山の一件から数日後、オレたちはおやつさんの店に久々に向かった。

理由は装備の一新と、そろそろナオフミの格好をどうにかしようかってラフタリアちゃんを相談したから。

で、今おれ達が唸っているのは、ラフタリアちゃんに起こった変化についてだ。

「あんなにやせっぽちだったのに…！ 時が経つのは早いなあ！ … 出会ってまだちよつとしか経ってないけど」

「結婚前夜の花嫁の親父かお前は」

ナオフミはそんな風というけど、ホントに変わったよなあ、ラフタリアちゃん。

ぼさぼさだった髪はサラツサラに。

チビで痩せてた体はなかなかナイスバディに。

こういうのなんて言うんだっけ、げきてきびふおーあふたー？

とにかくラフタリアちゃんが美女に変身したって話だ。

「そんなこと言ってえー、ナオフミだってこんなに別嬪さんに育ったラフタリアちゃんを見て心がざわつかないわけないだろう？ ドキッてしてんじやないの？」

「そうだぜアンちゃん。あんたは今ものすげえ恵まれた立ち位置にいるんだぞ？ 羨ましいなあおい」

「うぜえ…！」

こんなにかわいい子が二人もいるんだ。ちったあドヤれよこのやろう。

人間不信に陥ったナオフミだって、こんだけ奇麗な子がそばにいるならそのうち心開くだろうさ。

「10歳前後の子供に欲情するわけないだろ。人をロリコン扱いする

な」

「……………」

……………」

あれ？　なんか…おかしくない？

ナオフミ誰の事言ってる？　今オレたちラフタリアちゃんのこと話してたよね、そうだよ？

「おやっさんおやっさん、どゆことこれ？」

「…ひよつとしてアンちゃん、本当にわかってないのか？」

「あ？」

おやっさんが聞いてみるけど、ナオフミはマジでわかってない様子で眉間にしわを寄せている。

うわあ…うわあ、マジかあ。

そこまで重傷だったのか我らが主は。

「親父さん、セントさん、その辺で……」

「あ、ああ……」

「不憫なラフタリアちゃんだこと…いや、この場合不憫なのはナオフミの方か」

　　どれだけ深いんだよ、こいつの心の傷は。

こいつがずっとこの調子なら、ラフタリアちゃんの想いの成就も当分先になりそうだなあ。

…まあ、それはまた後で考えよう。

「で、今回は何しに来たんだ？」

「こいつの装備を新調しに……」

「ナオフミ様の装備を買いにきたんです！」

「おいー！」

「まあまあまあ」

ナオフミの発言を遮つちやっただけど仕方ない！

いやいやナオフミさん…あんた今、村人とほとんど変わらない格好してるよ？

誰一人勇者なんて思わないよ？　いいの？

「予算はどのくらいだ？」

「銀貨180枚くらいで」

「その値段だと……鎖かたびらが妥当か」

「ケツ！」

おやつさんが鎖帷子を出した途端、ナオフミがつばを吐いた。

え、何？ あんたの地雷ってどこにあるの？

「……ナオフミ、鎖かたびらになんの恨みがあるの？」

「悪かったよアンちゃん。今はナシだ」

おやつさんはなんか事情を知ってるのか、ナオフミにもものすごく申し訳なさそうに頭を下げてる。

……いい加減、詳しく聞いてみるべきか。

「素材は結構揃ってるし、頼めばオーダーメイドしてくれるんだよな？」

「おう、色々オプションもつけられるぜ」

「なるべく安価に……それでいて高品質にできませんか？」

「勝手に決めるな！」

怒鳴るナオフミだが、ここは譲るわけにはいかない。

だってお前、こないだ油断して魔物に攻撃食らってたじゃん。あのハリネズミだかヤマアラシだかいう奴に。

いい素材だったけど。

「ナオフミ様……」

と、渋るナオフミの前で、ラフタリアちゃんが異様な雰囲気を伴いながら剣に手をかけた。

何て言うかこう、有無を言わさない感じで。

「戯れはほどほどにしないと……死んでしまいますよ？」

「ヒエツ……」

思わず、オレの口から悲鳴が漏れる。ついでに下の方からも漏れそうになったけど、根性で元栓を締めた。

当の本人はおやつさんと「いい剣ですね！」「使ってみるかい？」なんて話してるけど、オレは忘れられそうにない。

あれマジで殺る気だったよ。

「な、ナオフミ……ラフタリアちゃんは今後絶対に怒らせちゃいけない

と思うんだ……でないとおレたちどんな目に遭うか」

「あ、ああ……最近妙にしたたかになってきたな」

出会った当初よりも遅しくなったのはうれいんだけどさあ……。何かこう、時々すつげえ恐い視線感じるんだよね、ナオフミと一緒に調査やってたりすると。

…違うからね？ オレは別にそういう関係じゃないからね？

「お忘れですか……？ 災厄の波が迫っているのを」

もの言いたげなナオフミに、ラフタリアちゃんは心配そうにそう告げる。

そう、オレがナオフミの装備を気にしてるのも、期限が少しずつ迫ってきているから。

いつまでも村人Aの格好じゃ困るのだ。

「そういうえば、そろそろだったか……具体的にいつになるんだ？」

「あれ？ 知らなかったのか？」

おいおい、勇者がそんなんで大丈夫なのか？ パーティメンバーとしてすげえ不安になるぞ？

首を傾げるナオフミに、オレは説明してやった。

「国の教会にさ、龍刻の砂時計つつつてでかい砂時計が置かれてるんだけど、それに波が起こる時期が表示されるんだってよ」

「……なんで記憶喪失の不審者のお前が知ってて、勇者の俺が聞かされてないんだよ」

「…なんか、ゴメン」

今更だけどナオフミに対する冷遇が凄まじい。

やつぱり気になるなあ、何だってこいつ一人にこんなにヘイト重なってるんだ？

「なら確認しに行くか……」

「そうだな。じゃあおやつさん！ ナオフミの装備、用意しといてくれるか？」

「任せとけ！ 嬢ちゃんたちが結構いい素材持ってきてくれたからな。いいものが作れるぜ」

「だから勝手に……もういい」

疲れた様子で肩を落とすナオフミを見て、オレは思わず笑ってしま  
う。

最近、なんか話がしやすくなったな。前より壁が薄くなったってい  
うか……距離が縮まったような。

いいことだ。

「ならそれで頼む。セント、素材と金を渡しとけ」

「あいよく」

おれはナオフミとラフタリアちゃんを見送り、預かった金と素材を  
おやつさんに渡す。

しかし、連れ立って歩く姿はお似合いに見えたなあ……式はいつだコ  
ノヤロー。絶対呼べよ？ 絶対行くからな？

「なんかこう……尻に敷かれる未来が見えるな」

「嬢ちゃんも頼もしくなってきたからなあ」

ときどき立場が逆転する二人に、おやつさんと一緒にけらけら笑  
う。

最初に会った時から想像もつかないな。あんなにビクビクして  
た子がああも立派になるとは。

すると、おやつさんは心底安堵した様子で微笑んだ。

「……俺は、安心したよ」

「ん？」

「アンちゃんがな、前よりマシな目になってきたんだ。……一時は、何  
もかもを呪いたくて仕方がねえって目だったんだけどよ」

……聞くなら今だな。

ていうか、おやつさんはナオフミがこの世界に来てすぐの事を知っ  
てるのか。

一番長い付き合いって事なのかな……？

「……あのさ、聞いてもいいかな」

「なんだ？」

「オレが知ってるのは噂のさわりだけで、詳しいことは何も聞けてな  
いんだ。……本人から聞くのも、アレだしな」

聞いてみたオレだけど、正直あまり気が進まないのも本音だ。

ナオフミとはそれなりにいい関係を築けているとは思う。信頼関係はまだただけけど、少なくとも背中を預けるには十分な間柄にはなれていると思う。

今さら何か聞いたところでどうにかなるとは思ってないけど…影響はあると思う。

「俺も現場にいたわけじゃねえ。それに…噂を鵜呑みにしてたときもあつたんだ。あまり参考にはならねえぞ」

「それでもいいよ。できるだけ…あいつのことを知っておきたい」  
渋い顔で答えるおやつさんに頼み込み、オレは聞く体勢に入る。

しばらく悩んでいたおやつさんは、しょうがないなという風な顔でため息をつき、オレに目を合わせてきた。

「…アンちゃんはな」

☒

Side: Naohumi

「あ、セントさんー」

俺とラフタリアが教会に向かって歩いてっていると、使いを終わらせたらしいセントが早足で近づいてくるのに気づいた。

だが…何だ？ うつむいたまま無言で向かってくる。

「終わったのか？ 思ったより早く来たようだが…」

何かあつた様子だったため、問いただそうとした時。

セントは何も言わないまますすぐ俺の前まで近づき、俺に抱き着いてきた。

「……は？」

「なっ…!？」

俺はいきなりの事で硬直し、ラフタリアも混乱して声を上げている。

だがセントはそれに反応せず、ただじつと俺の背中に手を回し、俺の肩に顔をうずめるだけだった。

何だ？ 何がきっかけでこうなつた？

「なになっ…何をやっているんですか!？」

「……ん」



ラフタリアが引きはがそうとした時、ようやく満足したのかセントは自分から離れた。

「よし、行くぞ！ 待ってる間にまたレベル上げにでも行こう！」

「あ、ああ……」

なぜか不機嫌そうに睨むラフタリアを放置し、セントはずんずんと先に進んでいく。

全く意味がわからんが……まあ、本人がやる気に満ちているならいいか。

と、その時。腹の虫が盛大に鳴り響く音が聞こえた。

「……その前に腹減った」

「お前な……」

腹を抑えるセントに、俺は思わず脱力する。

こいつ……珍しくシリアスな雰囲気だったなと思ったら、台無しじゃないか。

まあいい。腹ごしらえに行くか……

「いい加減にしてくださいナオフミ様！」

そうして、ラフタリアと最初に言った定食屋に行き、前と同じメニューを頼むと今度はラフタリアが騒ぎ始めた。

何を怒っているんだ？ お前の好きな食べ物だろうに。

「私はもう子供じゃありません！ お子様ランチはもういいですから！」

「そう遠慮するな。今のうちにしっかりと食べておけ」

「そういうことじゃ……ああもう！」

顔を赤くして俺に抗議するが、なんだかんだ言っちゃんど食べてるじゃないか。

……ん？ セントがラフタリアのお子様ランチを凝視している。

……こいつ、もしかして。

「……なんだセント。お前、そっちの方がいいのか」

「あ、いや、なんていうかさ……こういうもの食べてたかどうかも忘れてるもんだからさ………どんなのかなって思っ」

俺が尋ねると、セントは気恥ずかしそうに頭をかいて答えた。

ああ、たんに物珍しかっただけか。

「なら交換しましょう！ 是非しましょう！」

「お、おう…？」

すると、ラフタリアがいきなり立ち上がって、セントの分の定食と自分のお子様ランチを入れ替え始めた。

ははあ、これはあれだな。

子供が無理して大人ぶりたくて、違うものを頼みたがるあれだな。

「ほうほう…これはまた」

セントはセントで、自分の分に回されたお子様ランチを興味深そうに調べている。

こいつもこいつで堪能していやがるな…。

「…俺にとっちゃ、どっちでも一緒だがな」

そう独り言ち、俺が一番安い定食を口に運ぶ。

味はやはり、しなかった。

## 龍刻の砂時計

S i d e : R a p h t a l i a

「……おお」

なぜか少し、刺々しい態度のシスターの方々に案内され、私達は教会に入りました。

そしてその奥にあったものに、セントさんがそんな声を漏らしました。

そこにあつたのは、私達の背丈をはるかに超える、大きな砂時計です。

「これが龍刻の砂時計か……！」

「スゲエな……なんていうか、こーう、おごそかな感じ？ がする」

「私も初めて見ました……！」

ガラスの中でさらさらと零れ落ちていく砂、その周りには不規則に動く輪があります。

光り輝くその砂は、とても神々しいというか、奇麗な印象を抱きました。

しばらくじっと、その光景に目を奪われていた私達でしたが、しばらくしてセントさんがナオフミ様の肩を叩きました。

「そんでナオフミ、肝心の波までの期間は？」

「ちよつと待て……」

ナオフミ様が盾を見ると、盾の中心についた宝石から光が放たれ、砂時計に当たります。

すると何かが起こったのか、ナオフミ様が何もない目の前に目を見開いています。おそらく、波が起こるまでの時間が表示されたのでしょうか。

「あと20時間か……かなりギリギリだったな」

「うわあ、下手したらいきなり呼び出されてたかもしれないのか」

セントさんはいやそうに呟きますが、私の身体には緊張が走りません。

波……お父さんとお母さんを殺した魔物を生み出す、終末の災厄。

それと私達が戦う時が、あと20時間まで迫っている。恐怖か武者震いか、私の手は震えたままです。

反対にナオフミ様は落ち着いた様子で、龍刻の砂時計を前に眉間にしわを寄せていました。

「なら、それまでどうするか…」

「あらあ？　そこにいるのは大罪人の盾の勇者じゃない？」

その時、私達のもとに初めて聞く声が届きました。

何かとても…いやな感情でいっぱいの見下すような声です。

その声が聞こえると、ナオフミ様の表情がとても怖くなつてしまいました。

「こんなところに一体何の用かしら？」

振り返つてみると、何やら煌びやかな装いの方々が数十人、私達の方へ入ってきているのが見えました。

先ほど声を出されたのは、あの赤い髪の女の人でしょうか？　とてもきれいな方に見えますが…その表情は、言い方は悪いですが、悪人のように見えました。

「…おい、なんだあのケバい女」

「ナオフミ様のお知り合いですか？」

思わずセントさんと一緒にナオフミ様に聞いてみましたが、ナオフミ様は答えて下さいませんでした。

それどころか、とても苛々した様子で歯を食いしばっています。

あの方々と…何かあったのでしょうか…？

「ナオフミ様…？」

「なんだお前、まだそんなしょぼい装備で戦ってるのか。あわれだなあ！」

無言のまま立ち尽くすナオフミ様に、先ほどの女の人の隣にいた、槍を持った男の人が話しかけます。まわりにいるのは女の人ばかりですね。

この方もなんとというか…ナオフミ様をバカにするような話し方をしています。

それを聞いて、ナオフミ様の機嫌がますます悪くなったように見え

ました。

「ちよつと！ モトヤス様が話しかけているのよ!? 返事しないなんて何様のつもりよ！」

赤い髪の女性が声を荒げて睨みつけてきました。

ちよつとうるさいですね…セントさんも少し迷惑そうにしています。人より耳がいいですからね。

どうにも、ナオフミ様にいい感情を抱いていない方の様なので、私が前に出て対応してみます。

もう、守られるだけじゃありません。

「失礼ですが、あなた達はどこのどなたでしょうか？」

少しきつめに尋ねると、赤い髪の女の人は胡乱気に私を見てきます。

この目は覚えがありますね…私達亜人によく向けられる、いやな目です。

「なに…？ 亜人？ なんでこんなところに…」

「どこの誰かは知らないけどさ、うちのオーナーをあんまり馬鹿にしないでもらえない？ ムカつくからさ」

セントさんもナオフミ様を守ろうとしてか、私に合わせてくれました。

いえ、それだけではありませんね。単純にこの方々が気に入らないのかもしれない。

すると、それまでずっと黙っていた槍を持った男の人が、また口を開きました。

「可愛い…」

え？ と反応するよりも早く。

男の人は優しい気な笑顔を浮かべると、両手でそれぞれ私とセントさんの手を取り、顔を覗き込んできました。

何でしょう…背筋にぞわつと寒気が走りました。

「美しいお嬢さん方、お名前は…？」

「え、えつと…ラフタリアと申します」

「…セントだけど」

「ラフタリアちゃんにセントちゃん……二人とも可憐な名前だ」

：聞かれたのでつい答えてしまいました。何でしょうか、この感情は。

セントさんも同じ気持ちなのか、ものすごく居心地悪そうに男の人を睨んでいます。

ああ：そしてナオフミ様の機嫌がますます悪く…。

「俺は元康、槍の勇者として召喚されてきた者です。以後、お見知り置きを」

「はあ…」

どうにもこの人が持つ槍に見覚えがあると思っていたら、ナオフミ様の盾と雰囲気似ていたのですね。

なるほど、ではこの人が…そしてあちらにいる剣と弓を持った方々も、同じ勇者ということでしょうか。

すると、セントさんがパシツと軽く槍の勇者様の手を払いのけました。

「おい、気安く女の手に触んな」

「おっと、これは失礼…：だけどなぜ君たちはこんなところに？ それも…」

槍の勇者様の目が、ナオフミ様を見下すように向けられます。

さつきから何なのでしようか、この方々は、ナオフミ様とどんな因縁があるのでしょうか…？

「そんな犯罪者と一緒には？」

犯罪者…？

何のことを言っているのかわからず、私が首を傾げていると、ナオフミ様が槍の勇者様を鋭い目で睨みつけました。

怒り…：いえ、それだけではありませんね。

憎しみ、殺意にも似た激しい感情が伺えます。

「何だよ、本当のことだろう？ 悪評なんか自業自得だろ」

槍の勇者様が発言するたびに、ナオフミ様はますます険しい形相になります。

セントさんも何だか…：見る見るうちに不機嫌に…。

「どうせ守ることしかできないんだ。せいぜい自分の命だけ守って、俺の活躍を見届けてろよ」

「っ……！」

何かを言おうとして、何も言えずにいるナオフミ様。

何でしょう……ナオフミ様がけなされているのはわかりますが、その理由がわからなくて私も言葉が出ません。

何故、この人にここまで言われなければいけないんですか……!?

「君達もさつきとこんなやつとは離れたほうがいいよ。こんな奴がそばにいたら君たちの方が危険……」

「お前に言われたくないんだよ、下半身直結野郎」

危うく文句を口に仕掛けた時、私よりも先にセントさんが口火を切りました。

初めて聞く、ものすごく低い声でした。

「へ……？」

「さつきからベタバタバタ馴れ馴れしいし、しかもチラツチラ俺とラフタリアちゃんのおっぱい見てただろ。そういうの分かるんだぞ」

ああ、さつき感じたいやな感じの原因はそれですか。

知らない人に勝手に……む、胸を見られていればそれは気持ち悪いですよね。

これはもう、ナオフミ様だけのものですから！

「オレ、お前みたいにチャライ奴嫌いなんだよね」

「なっ……!?!」

「モトヤス様になんて暴言……!」

槍の勇者様もさすがに傷ついたようですね、優しい顔が崩れました。

赤い髪の女の人がまた騒ぎそうになりましたが、その後ろから鼻で笑う声が聞こえて止まりました。

「自業自得ですよ」

「鼻の下を伸ばしているからですよ」

あれは、剣の勇者様と弓の勇者様でしょうか？

同じ勇者なのに、あまり仲が良くはないようですね…でもそのおかげで助かったみたいです。

すると、ずっと不機嫌そうだったナオフミ様が歩き出しました。

「…行くぞ」

「は、はい！」

「ういゝつす」

私はセントさんと一緒に、慌てて後を追いかけます。

その時、すれ違いざまに剣の勇者様と弓の勇者様が、ナオフミ様に視線を向けました。

「波で会いましょう」

「足手まといにならないようにな」

「…こつちのセリフだ」

挑発するように、ナオフミ様は答えると教会を出て行きます。

ナオフミ様はずんずんと無言で歩き続け、あの方々や教会が見えなくなっても立ち止まりませんでした。

…そんなにも、きらいな方たちだったのでしょうか。

「…あの、ナオフミ様」

まだ怒っているのでしょうか。

気になって尋ねてみると、ナオフミ様は不意に肩を揺らし始めました。

やっぱり、まだ不機嫌なままで…？

「…く、くくつ、くくくく…！」

不安になっていた私ですが、ナオフミ様が声を漏らし始めたことで今度は混乱します。

わ、笑っていたのですか…？ いつから？

「おいセント、お前まさか狙ってたのか？ 見たかあいつのあの顔！」

「あいにくほほほオレの本心を言ったまでだよ。あー気持ち悪かった」

「振られた経験もないんだろうなあ…しかもあんなに盛大に！」

…こんな愉快そうなナオフミ様は初めて見ます。

セントさんもおどけて返していますし、喜ばしいことなんでしょう



が…。

「お二人とも…：気持ちわかりますが人の不幸をそう笑うものではないありませんよ」

「じゃあラフタリアちゃんは、あのままあいつと一緒によかったの？」  
「そ、それは…：大きな声では言えませんが」

確かに、私もあまり傍に近づきたくはなかったですし、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけいい気味だとは思いましたけど。

思いましたけど！

「なーナオフミ、オレ戻ってあいつの顔ぶん殴りたくなってきたんだけど、いいかな？」

「やめとけ。触っただけで孕まされるぞ」

教会がある方をまた睨むセントさんに、ナオフミ様はなだめるように肩を叩きます。

槍の勇者様は確かに、整った顔立ちでしたが…：正直言って下心が丸見えなので、ナオフミ様の制止にも納得してしまいます。

本当に…：何なんでしようか。

「さて…：残りの一日をどう過ごすか」

「ギリギリまでレベル上げするか？ それとも薬でも用意しておくか？」

「そうだな…：まあ、やれるだけのことをやっておこう」

「はいー！」

そうでした、あんなことを気にしている暇はありません！

災厄の波に立ち向かうために、できることを精いっぱい頑張らなければいけませんよね…！

頑張りますよ…：ナオフミ様、セントさん！

## 災厄の波

S i d e : S e n t o

イラツとする連中と分かれてからほぼ丸一日。  
盾を確認したナオフミに聞いてみれば、波が起こるまであとちよつとらしい。

正直波がどれだけのものかもわからないし、あんまり緊張とかしな  
いな〜…。

「あともう数時間程度だな…」

「ナオフミ様……」

ちよつと暇を持て余していたら、ラフタリアちゃんがうつむきなが  
ら口を開いた。

…そうだった、この子は波で家族を亡くしてるんだった。

あんまりふざけるのはよしておこう…。

「どうした。今更腰が引けたか？」

「いえ…ただ、妙に感慨深くなりまして」

言われてみれば、オレたちが出会ってから結構だったのか。いや、  
まだそんなにたつてないのか。

たしかに、結構濃い日々だったなあ。

「ナオフミ様と出会わなければ、私はきつと…あのまま飢えて死んで  
いたでしょう。ですから、今ここにいることが、まだ信じられない部  
分もあります」

ナオフミはラフタリアちゃんの言葉を、じつと黙って聞いている。  
ちよつと前なら、もつと冷たい態度を取っていたかもしれないけ  
ど、今はまだマシになってる……かな？

「私は、ナオフミ様に多くのものをもらいました……この恩を返し切  
れるとは思ってはいませんが、それでも…」

ラフタリアちゃんはナオフミをまっすぐに見つめ、自分の胸に手を  
当てる。

その目はすごく力強くて…ナオフミに向けた強い思いがうかがえ  
る。

……ほんとに、成長したなあ。

「力の限り、あなたの剣であり続けたい……そう思います」

ナオフミはじつと立ったまま、ラフタリアちゃんを見つめる。

そのうち、固かったその表情がふつと柔らかくなった、気がした。

「…わかった。なら、頼む」

「…！ はい！」

正直ちよつと素っ気ないんじゃないのかって思ったけど、ラフタリアちゃんの満足だったらしい。ルンルン気分で準備運動なんかしてる。

そしたら、ナオフミは今度はオレの方に顔を向けてきた。

「お前は死亡フラグを立てなくてもいいのか？」

「縁起でもないこと言うなよ……」

いや、たしかにこの場でああいうセリフを言うのは危なそうだけど……。

せつかく頑張りますーって気合い入れてんだから、もうちよつと考えて言おうよ、ナオフミ……。

そう言う奴だつてわかつてるけどさ。

「ただまあ……長いようで短い日々だったなとは思うよ。あんたと出会つてさ」

「…確かにな」

一緒に戦つて、守つて守られて、ちよつとは仲良くなれた気がして、勇者のパーティーにしてはだいぶよそよそしいかもしれないけど、ちゃんと互いのために頑張ってる。

大丈夫だ、これからだつてやれる。

……ああ、そうだ。

「そういえばさ、オレってまだ試用期間中だったよな」

「…ああ」

「このまま正式にパーティーメンバーに加えてくれる気はない？」

忘れてたけど、まだちゃんとしたメンバーとしては認められてなかったんだよな。

戦力的には、オレの実力はちゃんと見せたからいいけど、仲間とい

う意識内ではまだ仮扱いなんだよな。

今さらよそにいこうとかは考えられないし、いいよな？

「オレさ、ナオフミのこと気に入ってんだよね。口悪いし疑り深いし目つき悪いし……正直とっつきにくいんだけど」

「うるせえな……」

「でもそれ以上にさ。いい奴だよ」

思わず笑みがこぼれて、オレは後頭部で腕を組む。

ナオフミはそんなオレに、ちよつと恨みがましそうな目を向けてきた。

「……奴隷の女の子を、無理やり戦わせてるのにか？」

「必要なことだと思うよ。少なくともあの子にとっては」

……やっぱりにしてたんだな、そのこと。

今は見た目も全然変わってるけど、ラフタリアちゃんはまだ子供。戦いの場になんて連れてくるべきじゃない。

……なんて考えてるんだろうな。

「波で家族を失った。そして戦う力もなく、いずれは死にゆくだけだった……あの子にとっては、剣をとって戦えることは望ましいことなんじゃないのかな」

聞いた感じ、もう身寄りもないし帰るところもない。

ナオフミがいなかったら、もつとひどいところに行ってたか、最悪死んでいたかもしれぬ。

ナオフミはあの娘にとって、十分恩人やってんだぞ？

「だからさ、あんまり一人で背負い込むなよ？」

ナオフミはしばらく俺を睨んでいたけど、そのうちため息をついてそっぽを向いてしまった。

でも見間違いか……ちよつとだけ笑ってた。

「余計なお世話だ。バカウサギ」

☒

Side: Naohumi

チツ、チツ、とカウントダウンが刻まれ、数字がゼロになる。

その瞬間、俺の視界は一変し、それまでの町中とは別の場所の風

景に代わる。

なにより異常だったのは…空一面に広がる赤色と、空に走る亀裂だった。

「すげえ…！　これが盾の転送能力！」

「ナオフミ様！　セントさん！」

興奮した様子のセントと、狼狽しているラフタリアがそれぞれで騒ぐ。

ラフタリアは俺に見覚えのある行動を指さし、表情を青ざめさせた。

「ここ…リユート村の近くです！」

「なっ…!?!」

時間になれば盾が勝手に勇者を転送すると聞いていたが、こんなにピンポイントに波が起ころのかよ!?!

いや、問題はそこじゃない。どこで起きようが同じことだ。

問題なのは、人がすぐ近くににいる事だ！

「避難なんかしてる暇ないよな…!?!」

「あいつらは…!?!」

他の勇者共の姿を探すが、ようやく見つけたあいつらは村の方には目もくれず、一目散に空の亀裂の方へ走っていく。

こつちには何もしないつもりか!?!　そう思っていると、あいつらが向かった方から白い火花が上がった。

「のろし…騎士団に知らせてハイ終わりってか！」

「間にあわねえだろ！」

「行くぞラフタリア、セント！」

「はい！」

「おう！」

俺の後に続き、ラフタリアは剣を抜き、セントは鎧を纏う。

正直この世界の奴らを守るなんて反吐が出るが、顔見知りがいれば後味が悪い。

クソツ！　何でよりによってここなんだよ!?!

村に入ると、そこはもう悲惨な状況になっていた。

デカイハチに、ゾンビみたいな腐った兵士、他に巨人のようなアンデッドと、大量の魔物が村人を襲っていた。

こんなの：俺たちだけでどうにかなるのか：!?

「おらおらおらおらあ!!」

ウサギと戦車の鎧を纏ったセントが、魔物の軍勢に果敢に立ち向かっていく。

ドリルの形をした剣で切り裂くと、魔物たちが気持ちいいぐらいに斬り裂かれていく。

高い攻撃力があるようで羨ましい限りだよ、くそっ!!

「早く行け！ 戦線を立て直せ！」

「は、はいいー！」

俺も魔物の方に向かい、村の住人を守りながら必死に立ち回る。

手に入れたスキルを連発して、どうにか村人に向かう攻撃を防ぐが、正直手が足りない…!!

国の兵士はまだ来ないのか!?

【ボルテックファイニッシュ！】

「どっせい!!」

セントの必殺技が炸裂し、魔物が何匹かまとめて吹っ飛ばされていく。

だがそれでも相手はわらわら湧いて出てくるため、すぐに周りを取り囲まれていく。

あいつらさっさと終わらせろよ!!

「きりがないぞ…！」

「ラフタリアは住民の避難誘導を！ セントは俺と敵の注意を引きつけるぞ！」

「はいー！」

「わかった！」

とにかくやれる事を全部やるしかない。

ラフタリアに村の住人を任せ、俺とセントで敵を引き付ける。

セントはともかく俺はサンドバックにでもされそうな勢いだが、それでも何もしないよりはましだ!!

すると不意に俺たちの足元が、大きな影に覆われた。

「うわ、でか！」

見上げると、遠くにいた巨人がいつの間にか近づき、斧を振りかぶっているのが見えた。

慌てて避けるが、巨人はぎろりとこちらを見つけ、また近づいてくる。

幸いなのは、こいつらがかなりノロいことか…！

「新しい組み合わせ、試してみるか！」

【ゴリラ！】【ダイヤモンド！】

その時、セントが好戦的な笑みを浮かべて、二本のフルボトルを取り出した。

…おい、ゴリラはわかるがダイヤモンドなんていつ手に入れた？

お前いつの間にダイヤモンドなんて貴重なもの採集してやがった!!

【ベストマッチー！】

今はただ、この声がイラツとして仕方がない。

前々から思っていたが何だこのベストマッチって！ 何でゴリラ

とダイヤでベストマッチなんだよ!?

規則性がわかんねーよ!!

「ベ…ベストマッチ来たああああ!!！」

俺の苛立ちをよそに、セントは大興奮しながらベルトのハンドルをぐるぐる回す。

いつもの様にランナーが伸び、茶色と水色の鎧が半分ずつ生み出されていく。

セントはその間で立ち、バシツと拳を打ち鳴らして身構えた。

【Are you ready?】

【ビルドアップ！】

一瞬でセントはランナーに挟まれ、新たに作られた鎧に身を包む。

右腕は異様にデカイゴリラの腕に、左腕はキラキラ輝くダイヤの籠手に、どう見てもアンバランスな格好へと変貌した。

【輝きのデストロイヤー！ ゴリラモンド！ イエイ！】

「おらあああ!!！」

見た目的にはちよつと微妙だが、威力はすさまじく拳の一振りで巨人が大きく吹っ飛ばされた。

何だあれ!? この間殴った時より威力が上がってないか!?

「ゴリラのパワーとー！ ダイヤモンドの硬度！ 今のオレは、硬くて強い!!」

正直何を言っているのかわからん啖呵だが、とにかくセントがパワーアップしたのはわかる。

ゴリラパンチとダイヤガードで、セントは見る見るうちに群がつてくる魔物たちを駆逐していく。数の暴力には、純粋なパワーってか。

「勝利の法則は、決まった!」

「ボルテックフィニッシュ!」

「どりゃああああ!!」

セントがハンドルを回し、左腕を突き出すと、手のひらの先に巨大なダイヤの結晶ができていく。

セントはそれをゴリラの腕で思い切り殴りつけ、バラバラに叩き割る。するとダイヤの欠片が魔物たちに向かい、弾丸のように深々と突き刺さっていった。

「す、すごいですね…!」

「あ、ああ…本当に、勇者が必要なのか分からなくなるな」

村人の避難誘導を終えたラフタリアが、俺の近くに戻ってきて、茫然とした様子でセントを凝視する。

いや、ホントに勇者いらないだろ。

この場所における、俺の存在意義について考えこみそうになった時だった。

「よっしゃー！ この調子で残りの連中も…」

「セント！ 伏せろ!」

「うわっ!」

俺は咄嗟にラフタリアとセントを掴み、マントの中に引きずり込む。

いきなりの事で戸惑う二人を、オレは突然降り注ぎ始めた魔法の雨から防いだ。盾の周りで、魔法を受けた魔物たちが次々に焼き焦がさ



れていくのが見える。

あぶねえ…魔法耐性の高い盾にしておかなかつたらヤバかつたぞ！

思わず歯を食いしばる俺の方に、兵士らしき鎧の集団が近づいてきた。

「ふん、さすがは盾の勇者…：思っていたより頑丈だったな」

「…！ てめえら…！ 何しやがんだこの野郎！」

俺を見下しながら、隊長らしい兵士が吐き捨てる。

すると、俺が文句を言うよりも先に、怒りで顔を歪めたラフタリアとセントが飛び出し、兵士たちに飛び掛かっていった。

「ナオフミ様への無礼、許しませんよ！」

「明らかにオレ達ごと攻撃しやがったな!!」

そうだ、こいつらの殺気の攻撃は、俺が防がなきゃこいつらだって巻き込みかけた。

味方にまで狙われるのかよ！ ふざけんな!!

「なあに、無事だったのだから良いではないか」

「てめえ…！」

俺に攻撃力がないのを、そして弱いことを知ってて兵士はにやにや笑っている。

ますますラフタリアたちが不機嫌になっていくが、俺は逆に冷静になっていく。怒りが頂点に達すると、一蹴回って落ち着くのってほんとなんだな…。

「盾ごときいなくなつたところで、誰も困りはせんわ。むしろこの場から消えてくれたほうがせいせいするっていうもの」

「まだ言うか!!」

「いい加減に…！」

ラフタリアたちはもう、売り言葉に買い言葉みたいになっているが、俺は思わず兵士を鼻で笑ってしまふ。

こいつら…ほんとに馬鹿だよな。

「だったら別に、この場でお前たちを見殺しにして逃げてても文句はないんだよな！」

俺が言った途端、兵士たちの背後で別の魔物たちが起き上がる。やつらの攻撃でもさほどダメージを負っていないかった、比較的レベルの高い魔物だ。

さっきの態度はどこへやら、尻餅をつく兵士たちに代わり、俺が壁役となり攻撃を防ぎ、ラフタリアとセントが仕留める。

まったく…これでよくあれだけデカイ顔ができたもんだな。

「ひいひい…！」

「敵は波からやってくる魔物だろう！ 履き違えるな!!」

本当に逃げてやろうかと思っただが、村人を見捨てるわけにはいかない。

戦力が足りないのは確かだ。仕方がないから、こいつらも一緒に守ってやるしかない。

「行け、ラフタリア！ セント！」

「くっ…！ 盾の分際で生意気な…！」

くやし気な兵士の声に、少しだけ気分がよくなる俺は、ラフタリアとセント共に魔物の討伐を続ける。

数十分か数時間か、時間の経過があいまいになるほど戦い続けた頃だった。

「ナオフミ様！ 空が…」

「元に戻ってく…！」

血のように紅い、不気味な光景を作り出していたその亀裂が、すーっと薄れていく。

同時にあれだけ続いていた魔物の増援が収まり、徐々に勢いが収まっていく。

やっとあいつらが終わらせたという事か…遅すぎるだろ。

「まだ波から出てきた魔物は残っている！ 気を抜くなよ！」

俺たちはそのまま、残った魔物を全て仕留めていく。

なんというか…あいつらの役目の後片付けをしている気分だな。

チツ、最悪だ。

「……村への被害は甚大だな」

「ああ…復興はかなり厳しいだろう」

蔓延っていた魔物の姿が無くなると、後に残ったのは哀れな姿になった村の跡だった。

死者は…思っていたよりは少ないか。怪我人は多いが、あれなら命に別状はないだろう。まあ、上等な結果だろうな。

やるせなさを感じていると、不意にセントが耳を動かし、渋い顔になり始めた。

あれは…勇者共と国の兵士か。何を話してるんだ？

「…向こうはなんて言ってる？」

「祝勝の宴やるってさ。勇者を讃えようって城でやるんだって」

「村がこんな状況なのにか…」

…偉い奴には、下々の連中の事はお構いなしか。

つか、宴っておれも行かなきゃならんのだろうか…：激しく憂うつなんだがな。

「…ナオフミ様、セントさん」

セントと同じように顔をしかめていると、顔を俯かせたラフタリアが話しかけてくる。

何だ、どこかケガでもしたのか？ そう思ったが、見た感じそういうわけでもなさそうだ。どうしたんだ？

「私…：頑張りましたよね。誰かを、助けられましたよね」

「…ああ」

…ああ、そういう事か。

俺に向けられたラフタリアの声が震えているのに気づいて、俺はやつと理解する。

「お前はよく頑張ったよ」

自分のような可哀想な子を減らせ、俺が言ったことをかなえられたのかどうか、それを確かめたかったんだな。

泣き続けるラフタリアを、俺はできるだけ、優しくなでてやるのだった。

…：おいバカウサギ、その妙なニヤニヤした顔をやめろ。

なんか腹立つんだよ。

## 虚飾の宴

Side: Naohumi

「勇者諸君！ この度は誠に大儀であった！ 前回の被害とは雲泥の差にワシも驚きを隠せん！」

杯を持った王が、うざったく笑いながらそう告げる。

この場にいるのは、勇者を除けばほとんど今回の波に関わっていない連中ばかりだ。

特に何もしていない貴族たちが、なぜか誇らしげにそこにいた。

「今宵は宴だ！ 遠慮せずに楽しむがいい！」

そこらに目を向ければ、どいつもこいつも我が物顔で集まっている。

ほとんど無能でしかなかった騎士団長にいたっては、自分こそが村を守ったとうそぶいてやがる。

何でこんなクズどもの集まりに顔を出さなければならぬんだ。

「…呑気なもんだな。波の傷跡はまだ残ってるっていうのに」

思わずため息がこぼれる。

さっさと出て行きたいが、報酬の事もあるから城に残る必要がある。まったく、うまくいかないことだらけだ。

「ていうか、ラフタリアもセントもどこ行つたんだ？」

さっつきから二人の姿が見えない。どこで油を売っているんだ？

と、思っているとき……なんか、テーブルの一角に張り付いて、無我夢中で料理にかぶりついている奴がいる。

あれ、セントだよな？ 隣には困惑してるっぽいラフタリアもいるし。

「今のうちに食いだめしとけ！」

「えつと…はい」

「お前ら…」

あのバカウサギ…なんかもう、見てられない醜態をさらしてやがる。

いや、食いだめには賛成だし、量もあるようだからたらふく食って

もいいとは思いますが……なんか、全力で女捨ててる感が半端ない。間近で見てるラフタリアも、さすがに拒否感が働いたようだ。偶然、反面教師みたいになっているな。

「とりあえずその貧乏くさい食い方はやめろ」

「ん？ おおナオフミ！ なんか包めるもの持ってないか？ 少し持って帰ろうぜ」

「マジで貧乏くさいからやめろ」

「えー……じゃあ今食えるだけ食つとく」

ぶーたれながら、セントはまた料理に視線を戻す。

……俺も一瞬、タッパーがあれば持って帰れそうだと思つた事は言わないでおこう。

「ラフタリアも今のうちに食べておけ……もつとも、セントの真似はしなくていい」

「あ、はい……でも、たくさんあつてどれにしたらいいかと……」

「食べたいものを食べればいいだろう」

ちらちら料理を見るラフタリアが、なんかもじもじしながら俺を見てくる。

何だ、そのしぐさは？ あのクソ女を思い出すからやめさせたいんだが、どうも演技には見えないような気もしなくない。

……本気で太ることを気にしてるのか。子供でも女だな。

「な、ナオフミ様は……太った女の子はお嫌いですか？」

「……別に見た目の好みはない」

「そう……ですか」

なぜかがつくり肩を落として、ラフタリアは俺から目を背ける。

まともに返答されなかったのがそんなにショックか？ …いや、そんな仲でもないだろうに、勘違いだな。何をやってるんだ俺は。

ちなみに俺の見ていないところで、セントが何かラフタリアに耳打ちをしていた。

「ダメだよラフタリアちゃん、ナオフミってばえげつないくらい鈍感なんだから。その程度の攻めじゃ落とせないって」

「うう……でも正直に言ってしまうのは恥ずかしいです……」

「その恥ずかしさを乗り越えろ！ 傷つくことを恐れていちやあ、恋愛なんてできないぞ！ …オレも経験ないけど」

なんかぼそぼそ話していたが、女子の会話の内容なんか毛ほども興味がない。

同性同士でなきや離せない事もあるだろうしな、首を突っ込むのは野暮だ。もしくは藪蛇だな。

こいつらの話がひと段落するまで待っててやるか。

そう、思っていた時だった。

「おい尚文！」

離れた場所で、ハーレムっぽいパーティーメンバーと話していたはずの元康が、ずんずん肩を怒らせながら俺の方に向かってくる。

思わず眉間にしわを寄せる俺の目の前で、元康は指を突き付けて睨みつけてきた。

「聞いたぞ！ お前と一緒にいる二人は、奴隷なんだってな！」

「は…？」

いきなりそんな事を言われて、俺は思わずぽかんと呆ける。

料理を口にしていたラフタリアとセントも、こっちの騒ぎに気づいて振り向いていた。

「ふえ？」

「むぐ？」

…おい、頬にため込むな。行儀悪いだろうが。

バカウサギもラフタリアに変なもの真似させるなよ。こいつが大人居なくなった時、そのまんまになったらどう責任取るつもりだ。

ていうか、何で元康がそんなこと知ってるんだよ。

「…それがどうしたってんだ」

「何だと…!? 人は隷属させるものじゃない！ そんな行為、俺達勇者には許されないんだ!!」

俺が面倒くさそうに答えたのが気に入らなかったのか、ますます元康はうるさく喚き散らしてくる。

うるせえな…お前のせいで関係のない貴族たちまでこっちを見だしてるじゃないか。うっとうしいなおい。

「許されない？ 誰が許さないって言うんだ。この国は別に奴隷を持つことを禁止しているわけじゃないだろう」

「お前……」

俺がそう言うのと、元康は自分の手袋を外し、俺に投げつけてきた。お前は何時時代のどこの国の人間だよ。なんで素面でそんな気障つたらしいことできるんだよ。俺の方が恥ずかしくなってきただろうが。

……なんて、現実逃避してる場合じゃなさそうだな。

「決闘だ！ 俺が勝ったら、ラフタリアちゃんとセントちゃんを解放してもらおうぞ！ もしお前が勝ったらそのまま好きにすればいい！」

「断る。勝っても俺に一切メリットがないじゃないか」

「逃げるのか卑怯者！」

「逃げるも何も、受ける理由がないだろうが！」

こいつは馬鹿なのか？ 俺が奴隷を持っていようと何の関係もないだろうに。

そういえばこいつ、教会でラフタリアとセントを見てかなり気に入ってたようだな……俺から引きはがして自分のハーレムに巻き込むつもりか？

あほらし。放っておくのが吉だな。

「話の顛末は聞いた」

あ？ 何でこの場に王が出しやばってくるんだ？

しかも相変わらず俺の方を見下してくる目だし、なんか面倒なことを考えてる予感しかない。

「まさか、勇者が奴隷を持っていようとは……所詮は盾ということか」

「何だよ。お前たちにとやかく言われるいわれはないはずだ」

「おおいにあるとも」

フン、と鼻で笑った王は、意味深に元康の方を見やる。

……いや、元康じゃないな。元康の隣にいる、憎たらしい笑みを浮かべているあのクソ女の方か？

「此度の決闘、ワシが許可する。逆らわずに応じるがいい」

「おい！ ふざけるなよー」

ちよつと待て！

こんな事にまで口を挟んでくるのかよ!? もはや暴君じゃねーか!!

さつきから俺のメリットも欠点もガン無視しまくるし、付き合ってもらえるか!!

さつきと二人を連れて出てつてやる!! 報酬なんぞ知るか!!

「ナオフミ様…きやつ!」

「な、何するんだよ!」

俺が歩き出そうとしたその時、ラフタリアとセントの腕を兵士たちがつかみ、拘束するのが見えた。

抵抗する二人だが、兵士の方がレベルが高いのか振りほどけていない。

「たえ勇者といえど、女子を隷属するような行為を見過ごすわけにはいかん。応じぬのなら、国王の権限において強引にでも取り上げるまで!」

「待つてください! 私…むぐ」

「かわいそうに…主人を擁護せねば苦しむ呪いをかけられているのだろう。待っている。すぐに槍の勇者殿がお前達を解放してくれよう」

二人はさらに猿ぐつわまで嘯まされて、反論もさせられなかった。

ふざけんなよ…! ラフタリアたちの身を案じているような言葉を吐いておきながら、完全に二人の意志を無視してんだろーが!!

無理やり拘束しておいて何がかわいそうだ!!

「…決闘には参加させるんだよな」

「勝負の景品を使わせるものがどこにいる? 決闘が終わりさえすれば2人は開放する。さあ、早く準備を終わらせよ」

「おい、なに勝手なことほざいてやがる!!」

俺の反論も無視して、連中はラフタリアとセントを引きずってどこかへ連れ去っていく。

俺は二人を取り戻そうとするが、兵士に阻まれてそれもできない。

馬鹿か!? 俺は攻撃力がないんだって言うてんだらうが!!



しかも他の勇者に比べてはるかに弱いってのに…!! ただの出来レースじゃねえか!!

「ナオフミー!」

怒りに肩を震わせていた俺は、不意に届いたセントの声で我に返る。そして、空中に弧を描いて飛んできたものを慌てて受け止めた。

これは……こんな物、あいつ以外に使えないのに何の意味が…。

訝しげに見つめる俺に、セントはどうか引き抜いた右手を伸ばし、俺に親指を上を立ててきた。

「やつちまえ! むぐつ…」

それだけ言つて、セントも猿ぐつわを噛まされる。

あつという間に二人の姿は見えなくなり、残された俺はさつさと行けどばかりに兵士に小突かれる。

何だこれ、この場には馬鹿しかいないのかよ。

思わず渡されたものを握りしめ、拳を震わせる。

「……ん?」

だが、その時感じた違和感に、俺の怒りは一瞬だけ薄らいでいた。手を震わせた時に生じた、俺の中の異変。

これは……そういう事なのか?

もしかしたら……いけるかもしれない。

「……ああ、任せておけ」

…あいつらだって、俺よりも元康の方がいいと思うかもしれない。最弱の、勇者扱いされない奴のところよりも、他の奴の方がマシと

……俺だって考えるだろう。

だからって、あいつらに一方的にやられて黙っていられるわけがない。

「せめて一矢報いるぐらい、別にいいよな」

ならまずほ……あの顔だけの野郎に、一発ぶち込んでやる。

そのためにこの力……使わせてもらうぞ。

## 八百長決闘

S i d e : S e n t o

兵士たちに拘束され、オレとラフタリアちゃんは闘技場っぽい建物の中に引きずられていく。

何だここ、ものすごく使いどころが難しそうな場所だな。

こんなんに金かける余裕あったら復興に金出せよ!!

「これより、槍の勇者と盾の勇者の決闘を行う!」

そしてオレたちの意志もガン無視して、進行役が声を張り上げる。

闘技場にはすでに、余裕綽々と言った様子の槍の勇者が待っていて、少し遅れてナオフミが現れる。

その途端、ざわざわと辺りから小馬鹿にするような声が聞こえてきた。

「もはや勝負にもならないだろうな」

「盾が槍の勇者に勝とうなんて…」

…たぶんナオフミにも聞こえるくらいの声量のつもりでしゃべってるんだろうな。

わざとらしい小声ってめっちゃ腹立つなオイ。

「んんっ…!」

「んー! んんんー!」

正直、こんな茶番は今すぐにでもやめさせたいところだけど、むっちゃくちやきつく縛られてて身動き一つとれない。

隣のラフタリアちゃんを見れば、悔しいのと悲しいのですげえ辛そうな顔をしてる。

あいつら、ウチのかわいいラフタリアちゃんを泣かせるたあいい度胸じゃねえか!! あとで覚えてろよ!!

「盾と矛がぶつかったらって昔話があるけど、この場合は結果は明確だな! あの娘たちのためにもさっさと負けちまえ!」

槍の勇者はすでに勝利を確信してるみたいだな。

確かに、はつきり言ってナオフミは防御力以外はザコだし、勝てる要素は一つもない。

…もし勝てるのであれば、オレが渡したあれを使えば、だな。  
ちゃんと持つてるのか、そしてちゃんと使い方に気づいてくれたのか、オレは一度抵抗をやめてナオフミの方にじっと目を向けた。

「……お前がどう言ったって話を聞かないのも、俺の負けが確定してるのもわかってるよ、だがな……！ ただでやられると思うなよ……！」  
槍の勇者を睨むナオフミの目が、いつにも増して険しい。

当たり前だよな、こんな決闘言いがかり以外の何ものでもないし、あんどけイライラしてるのも当然の話だ。

よし、決めた。

結果がどうなろうと、あの野郎の顔面思いつきり殴る。

「それでは……試合、開始!!」

「うおりやああああああ!!」

レベルによる補正か、槍の勇者が構えだけは立派な突きを放つ。

ナオフミはそれを盾で防ぎ、キーンと甲高い音があたりに響き渡る。

レベルに差があつても盾の勇者だ、あんな舐め切った攻撃が通るはずもない。

「矛盾……辻褄が合わないことを意味する言葉だ」

「はあ?」

「これが本当に盾と矛の戦いなら……俺の盾を貫けなかった時点でお前の負けなんだよ」

うまい! 座布団一枚!

思いつきり笑ってやりたいけど、猿ぐつわが邪魔でうまく声が出せない。

ああ……マジでうっとうしい。

「そ、そんな屁理屈で納得できるわけないだろ! 乱れ突き!」

「くっ……!」

揚げ足を取られた槍の勇者が、今度は本気を出して攻撃を始める。攻撃力がナオフミの防御を上回り、突きを受けたナオフミが血を流す。が、やっぱりまだ決定打には至らない。

「くそっ……! 無駄に高い防御力しやがって!」

「今度はこっちの番だ」

攻撃が止んだ隙に、ナオフミが拳を振りかぶって接近する。それを見て、周りの観客から馬鹿にするような失笑が聞こえてきた。

「フン、盾のパンチなんて毛ほども痛くないわね」

赤髪の女が腹立つこと言ってるけど、その余裕がいつまで続くかな？

案の定、ナオフミが手に持っているものに気づいていない。ついでにナオフミが、走りながらそれを上下に振っていたことにも。

そしてオレの予想通り、逆に大勢の人間の予想を裏切り、ナオフミの拳が当たった瞬間、槍の勇者が大きく吹っ飛ばされた。

よっしゃあ！

「モ、モトヤス様!?!」

「げふっ…!?! な、何で、ナオフミの攻撃なんかでダメージが…!?!」

イエーイ！ その顔が見たかったんだよ!!

見下すことばっかしてるから、こうやって足元をすくわれるんだよ  
バーカ!!

ラフタリアちゃんもちよつと驚いてるな。サプライズ成功って事で、ラフタリアちゃんにウィンクしておこう。

「んー！ んー!」

このままならいけるかもしれない…!

通じるとは思わないけど、せめて応援する気持ちだけは届けておこう。

だが槍の勇者もさすがに勝手が違うとわかったのか、ナオフミから警戒するように距離をとり始めた。

あつ、逃げんなお前！ 大人しく殴られやがれ!

「ちっ…同じ手を何度も喰らうかよ!」

「なら別の手だ」

言いながらナオフミは懐に手を入れ、オレンジ色の何かを取り出す。

槍の勇者に向かって投げられたそれが…口を開けた!?!

え!!? あれってバルーンか!?

懐にそんなん入れて大丈夫なの!?

「いでつ、いでででで!?!? なんでバルーンが!?!?」

ナオフミに投げつけられたバルーンが、槍の勇者にガブガブ噛みついている。

ルールのにはどうかと思うけど、もともとアンフェアな勝負を持ち掛けてきたのは向こうだしいいよな!!

……ていうかナオフミ、魔物使いみたいになってない?

「反則だわ! 魔物を隠し持っていたなんて!」

「んーんーんー(うるせえなアバズレ)」

「ちよつと! 今なんかムカつくこと言ったでしょ!?!?」

いやマジでうるせえから黙れ。あいつの苦労も知らないくせに好き勝手言いやがって。

これぐらいの嫌がらせ許してやれや。魔物を使うなってルールもなかっただろうが。

ていうか結構離れてるのによく聞こえたな。

「エアストシールド! シールドプリズン!」

「ぐあつ!?!?」

バルーンの相手で苦戦している槍の勇者に、ナオフミがたたみかける。

半透明の盾を腹にぶつけ、盾でできた檻で閉じ込める。その中でやりの勇者は、ガブガブとバルーンたちにあちこち噛まれまくっているようだ。

「ちくしょう! イテエ! 離れねえし出られねえ!」

うつわあ……想像するだけで鬱陶しそう。

こういういやらしい戦法よく思いつけるな。オレがやられたら早めに降参しそう。

けっこう息も絶え絶えになっている槍の勇者に、ナオフミはなんか物凄い悪役っぽい笑顔を浮かべて近づいていった。

……なんか、生き生きしてない?

「さーて、今度はテメエの自慢の顔と股間に……今一番活きがいいこ

いつらを食らわせてやろうか……！」

「や、やめろお!!」

「不能になりやがれえ!!」

オレはよくわかんないけど、男の急所?に狙いを定められて槍の勇者が真っ青になる。

やり方はアレだけどいいぞ、このまま降参まで持っていかせれば勝てる……!!

そう思った直後。

ナオフミの背中で、見えない風の爆発が起きた。

「て、てめえ……!!」

倒れこむナオフミを凝視し、何が起こったのかわからず、茫然となるオレとラフタリアちゃん。

するとオレの視界に、にやりと憎たらしい笑みを浮かべた赤髪の女の姿が映る。

あいつ……何かしやがったな!?

「俺の勝ちだ!」

怒りがわき出すオレたちを放置し、バルーンを蹴散らした槍の勇者がナオフミの首元に槍を突き付ける。

誰も納得しない形で……決着がつけられてしまった。

Side: R a p h t a l i a

「ふざけるなよ……! 今のは無効だろ、完全に横槍が入ったじゃねえか!」

「はあ? 勝手によろけただけのくせに何言ってるんだ」

「違う!」

歓声が轟く中、地面に倒れたナオフミ様が抗議の声をあげます。

それも当然です。あのままいけば……もしかしたらナオフミ様が勝っていたかもしれないのに、邪魔が入ったのですから。

おそらく使われたのは、周りからは気づかれにくい風の魔法。

そして使ったのは、槍の勇者様といつも一緒にいる赤い髪の女性でしょう。

「盾のいうことになど耳を貸す必要はありませんわ。これは紛うことなきモトヤス様の勝利……」

ナオフミ様の声を一方的に否定し、宣言するあのマインという赤い髪の女性。

何が勝利ですか……！ こんな決着で納得できるわけないじゃないですか！！

怒りをあらわにしたい私達ですが、この状態では声も出せません。ですが、その怒りを一瞬忘れるほどに、衝撃的な言葉を聞かされませんでした。

「そうよね、パパ？」

え？ パパ……？

マインさんの言葉に応じてやってきたのは……王様？

という事は……マインさんはこの国の、王女様？

「ああそうだとも、我が娘マルティ。卑劣な盾の勇者の勝利などあるはずもない」

「ほら、パパもこう言っていますわ」

「だよな！ よくそんな負け惜しみが言えるもんだな」

国王が味方に付いたことで、槍の勇者様は完全に勝利を確信しています。

私もセントさんも、言葉が出ませんでした。

「まさかマインが王女だったなんて……言ってくればよかったのに」

「私も世界平和のために働きたかったんです！ 色々ありましたけど、今はモトヤス様のそばにいられて幸せですわ」

わけが、分かりません。

王女がなぜ……勇者のパーティーに。あのような方が、本心から平和を願うようには思えません。

戸惑う私達を無視し、槍の勇者様たちが近づいてきます。

「さあ、二人の奴隷が待っていますよ？ お前たち！」

魔法使いらしき人たちが、私達の衣服の胸元を開き、奴隷紋をあらわにさせます。

そして何かの液体を垂らした途端、私達の体を痛みが襲い、奴隷紋を見る見るうちに消していきます。

これは…奴隷契約を消している…!?

こんな……勝手な!!

「俺が…盾だからか…!?!」

奴隷ではなくなった私達を見たナオフミ様が、項垂れながら切ない声を上げています。

人を信用できなくなった、そして誰かと共にいなければ戦えないナオフミ様にしてみれば、私達を失う事は武器を失くすことと同じこと。

その悔しきは、一体どれだけの事でしょうか。

「さあ、モトヤス様が待っていますよ」

「ラフタリアちゃん！ セントちゃん！」

周りで好き勝手話している人たちの姿など、私の目には映りません。

私にはただ、黒いオーラを纏って慟哭するナオフミ様の姿しか見えません。

…もう、我慢の限界でした。

「この……卑怯者!!」

恩着せがましい笑顔で駆け寄ってくる槍の勇者様に、私は声を荒げて平手を振るいました。



## 聞きたかった言葉

S i d e : N a o h u m i

なにも、聞きたくなかった。

俺は何もやっていないのに、誰もが俺を犯罪者と決めつける。

俺を裏切り、その上強姦の汚名まで着せてきたあの女に、何でここまでされなくちゃいけないんだ。

勇者共は現実を見ない、王や貴族は波なんて人ごと、民衆まで俺を敵と見る。

何で、何でこんなクソつたれな世界を守らなくちゃならないんだ：

!?

「私たちが、いつ、助けてくださいなんて願いましたか!?!」

どす黒く濁っていく世界の中で、ふとそんな声が聞こえた。

何か、破裂するような音の後、誰かが誰かに起こっている声が聞こえる。

これは……ラフタリアか？

「なっ……だって二人とも、尚文に酷使されて、辛い目にあってたんだろ  
う!?!」

「そんなものはあなたの勝手な妄想です！ ナオフミ様が私たちを苦しめたことはありません！ いっだって、ナオフミ様は私たちを守ってくださいました!!」

ラフタリアに押されているように、元康のおどおどした声と一緒に聞こえてくる。

何か、すごい剣幕で怒鳴りつけているが、わからない。

なにも聞きたくないから、何も聞こえない。

「そんなのは結果論だ！ 現に尚文のやつは、君たちを隷属させてる  
じゃないか!」

「私が怯えて怖がった時だけ、セントさんがやりすぎた時だけ奴隷紋  
を使っていただけです!」

「無理やり戦わせてることには違いないだろう!?! そんなのは間違っ  
てる!!」

「それは私に必要なことだったんです!!」

ラフタリアの言葉を否定し、元康は引き下がらない。

そうだ、誰も俺のことを信じてはくれなかった。

どんなに違うと言ったって、誰もおれの声を聞いてさえくれなかった。直接関係のない奴さえ、俺を敵のように扱って来たんだ。

これ以上何を言ったって、何をしたって無駄なんだ…。

「…お前さ、オレたちの幸せを考えてるってんなら、なんでオレたちの声を無視するんだ?」

「え?」

「オレたちの答えを、お前否定してばっかじゃん。それは違う、間違ってるって、オレたちやナオフミの言うことにいっぺんでも耳を傾けたことあるのかよ」

深いため息をついて、また別の誰かが元康に話しかけているのが聞こえる。

心底呆れている様子で、面倒くさそうに言葉を吐いている。

そのうち、ガツと何かを掴む音も聞こえた。

「人を舐めるのも大概にしろ! あいつのそばにいるのも、戦ってるのも、全部オレたち自身の意志だ! それを勝手に否定すんじゃねえ!!」

ひっ、と息を呑む声がある。

元康か、観客の誰かかは分からないが、少なくともセントの剣幕に気圧された奴がいるのは確かだ。

勝手に勝負の景品にされたあいつらが…怒りをあらわにしていることだけがわかった。

「お前の独りよがりな自己満足に、オレたちを巻き込むんじゃねえ!!」

元康からの反論の言葉はない。

自分の善意が全部否定されたのが堪えたのか、何も言えずに後退するような音がある。

「…あなたは小汚い、病を患った子供に、ご飯を提供できますか? 恐

怖で泣き喚いても怒らず、優しくなだめ続けることができますか?

血だらけになっても、その子を守ることができますか? 病を治すた

めに、高価な薬を与え続けられますか？」

不意にラフタリアが、何かを懐かしむような声音で問いかける。

何を、聞いているんだ？

俺が飯を食わせたのは善意じゃない、俺の武器として使うために育てようとしただけだ。

お前を、守られるべき子供のお前を、戦場に立たせようとしていたんだ。

何故それを……誇らしいように語る？

「で、できるー！」

「だったらなんで、お前のそばにはそういう奴隷がいないんだ？」

最後に元康に吐き捨てると、セントはそれつきり口を閉じる。

すると次第に俺の方に、ラフタリアとセントの足音が近づいてきた。

「ナオフミ様……」

「ナオフミ……」

「…何の用だ」

何でこつちにくるんだよ。

お前らはもう、奴隷じゃなくなったんだ。俺のところにいる必要はなくなつたんだ。

なのになんで来るんだよ……何で俺を心配するような声で呼ぶんだよ……!?

「お優しい元康に救われたんだろう。だったらもう近づくなよ、放つといてくれよ!!」

どうせお前らだって、俺を裏切るに決まってる。

ラフタリアもあの噂を知らないだけで、いつか俺を見限ってどこかへ逃げるに決まってる!

セントだって、俺のところ居続ける理由なんてないはずだ!!

この世界の連中にとって、俺はいらぬ奴なんだろうが!!

「なんでこの世界の奴らはみんな俺を敵としか見ないんだよ……なんでも勝手に呼ばれたのにこんな苦しまなきやならないんだよ。誰も信じてくれない……誰も助けてくれない……!」

勝手に召喚されて、勝手に犯罪者に仕立て上げられて、勝手にこんな目にあわされて…。

もう嫌だ…元の世界に帰りたい。

こんな、誰も味方がいない世界になんていたくない。

「俺は…そんなことやつてない」

濁っていく視界に逃げ込みたくて、俺はその場に伏せ続ける。

もういつそ、このまま永遠に眠ってしまいたい、そんな事を考えた時だった。

「知っていますそんなこと！」

「知ってんだよそんなこと！」

聞きたかった言葉を、二人から聞いた。

その途端、俺の視界の全てがクリアになり、明るい光が俺の目に飛び込んできた。

「お前が誰より優しいやつだつてことは…オレたちが知ってる」

「この盾で、ナオフミ様は私を何度も守ってくださいました。その事実は…揺るぎません」

そう言つてセントと、見覚えのない、17歳くらいの可愛らしい女の子が、俺の前に跪いていた。

本当に、見たことがないくらいかわいい、だが狸の耳と尻尾には見覚えがある、ピュアな瞳をした女の子だ。

「裏切らない奴隷しか信じられませんか？ でしたらもう一度、私に呪いをかけてください。あなたがそばに置いてくださるように、私は何度だってあの痛みをこらえて見せます」

「どんだけ過酷な道だつて、一緒に乗り越えてやる。どんな敵とだつて、一緒に立ち向かってやる。この先オレたちは、歩き続けるよ」

「偉大なる、盾の勇者様と」

呆然と言葉を失くす俺の前で、セントとその子はふっと優しい笑みを見せてくる。

本当に、誰だ。

セントと一緒にいたのは、ラフタリアのはず。  
でもどう見てもこの子は、あのチビでやせっぽちだったラフタリア  
とは似ても似つかない。

「改めて…よろしくお願いします。ナオフミ様」

「…だ、誰？」

俺が思わず尋ねると、二人とも訝し気に首を傾げた。

いやいや、本当に誰なんだよ。

俺がおかしいみたいないな反応されると困るだろうが。

「あ？ 何言ってるんだお前」

「いやだって…ラフタリア、なんだよな？ こんなにでかくなかった  
はずじゃ…」

「…あー、亜人の性質知らなかったのか」

俺が困惑しながら答えると、セントは目を逸らしながら頬を掻い  
た。

亜人の性質…？ そういえば、武器屋の親父が何か、そんな感じの  
事をチラツと言っていたような…？

「あのですね、亜人は幼い頃にレベルを急にあげると、体もそれに合わ  
せて急成長するんです」

「差別される理由の大半でな、魔物と同類扱いされたりするんだわ」

それは、この世界の人間にとっては当たり前の事なんだろうか。

考えてみれば、元康も親父も、国のやつらも最近よく、ラフタリア  
の外見を褒めるようになっていた。

…気付いていなかったのは、俺の方だったのか。

「…こんなに大きな変化もわかんねえくらい、お前は苦しんでたんだ  
な」

セントはその表情を切なげに歪め、俺の肩をポンポンと軽く叩く。

同じように表情を歪めたラフタリアが、豊満に育った胸に俺を抱き  
寄せてきた。

「ごめんなさいナオフミ様…ずっと苦しんでいたのに、気づかなく  
て。もう、お一人で背負う必要はありません。私たちが一緒に、ずつ  
と一緒に頑張りますから」

子供のように、以前とは逆の立場のように抱き寄せられ、俺の胸が熱くなる。

それを皮切りに、目から涙があふれ出して止められなくなる。気付けば俺は、ラフタリアの胸の中で恥も忘れ、大声で泣き出してしまっていた。

周りにいる誰も視線も、忘れながら。

「俺は…俺は認めないぞ…！ 今だって二人が、尚文に洗脳されてる可能性も…！」

元康が何かわめいていたようだが、その時のおれの耳には全く届かない。

元康の姿を隠すように、セントが間に入ってくれていたからだ。

「せいぜい言ってる、お前に理解なんてされたくないっつーの」

嘲笑うように吐き捨て、セントはその場に座り込んで脱力する。

いつの間にか疲れて眠ってしまった俺の髪を撫でながら、セントはほっと安堵の息をつき、空を見上げていた。

「…あくあ、月が綺麗だなあ」

もう一度ここから

S i d e : S e n t o

翌朝、誰もいなくなった闘技場を後にしたオレたちは、白の外の適当な場所で朝食を取ることにした。

そして、調理場で昨晚の料理の残りをもらってきたラフタリアちゃんが戻ってきたわけなんだが…。

「……ラフタリア、なんだよな」

やりきった表情で、ありあわせのサンドイッチを作ってきたラフタリアちゃんを、ナオフミがじっと見つめている。

マジでこれがちっちゃい女の子に見えてたってんだから、損してたよな。

「なんだよ？ まだ信じられないのか？」

「いや、だってこんな綺麗になって…夢だって言われたほうが納得できそうで」

「な、ナオフミ様…！」

思わぬ褒め言葉に頬を赤く染めるラフタリアちゃん。

これは……この子の春もそのうち報われるかもかな？

そしたら今度はナオフミのやつ、オレの方にハツとした視線を向けてきた。

「もしや、お前も…!？」

「んくん、オレは出会った時からこのまんま。歳は……たぶん20だから」

「…相変わらず胡散臭え」

そう言うなって…しようがないじゃん、記憶ないんだから。ほんとになんで記憶喪失なんてなっちまったんだろうなあ。

…でもそうじゃなきゃ、こいつらにだって会ってなかったかもしれないし、別にいいか。

「まーとりあえずそんなのいいから、朝飯食べようぜ？ 腹減ってしょうがないんだよ」

「昨晚の残り物をもらってきただけですけどね」

「見栄えは十分だしいいんじゃないか？　ある意味手作りってことで」

苦笑するラフタリアちゃんだけど、そこまで気にする必要はないと思うけどな。

見た目はいいし、味は…まだわからないけど。

まあ腹に入れば皆同じってことで、さっさとガブツと食べちまおうや。

「…うん、悪い。味落ちてたな」

「あんまり美味しくないですね」

料理ってやっぱ出来立てが一番うまいんだなあ……。

昨日は結局、皿に盛るだけ持って食いだめあんまりできなかったんだよな。

おのれ槍の勇者め、許すまじ…！

ふと横を見ると、ナオフミもサンドイツチをかじった瞬間動きを止めていた。

「…どうしたナオフミ？　そんなマズかったか？」

「…：味がする」

「え？」

ん？　なんか聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ？

味がする…：のは当たり前じゃ。

…もしかしてお前。

「今まで何を食べても感じなかったのに…：美味しい」

そのままナオフミは、パクパクとサンドイツチを口に運んで、あつという間に完食してしまう。

まるで長い間絶食していたみたいなの、そんな感じだった。

…そうか、昨日も全然楽しそうじゃなかったもんな。

味覚もずつとおかしくなっていたのなら、ほとんど何も食ってなかったのと同じようなもんか。

「…よかったです。ナオフミ様のご飯はいつも美味しいのに、作ってるナオフミ様自身が美味しそうじゃなかったの、心配していたんです」



「美味しいものなんて、これからいくらでも食べばいいじゃんか！  
こつからはなんだってできるぞ！」

ほつと安堵の息を着くラフタリアちゃんと、オレは一緒に笑う。  
評判も地位も相変わらずみたいだけど、そんなもん知ったこつちや  
ない。

オレは元から何にもなかったんだ。ここから手に入ればいい。  
「とりあえずは、につくき波にリベンジのためにレベリングといこう  
ぜ？」

「…ああ」

「何から始めるかねえ…薬作って売って装備を整えて戦って…やれ  
ることはいくらでもあるな」

ガブツとサンドイツチに噛み付いて、平らげる。

そこまで美味くはないけど、これが逆にやる気を出させてくれる気  
がする。

もつと美味しいものを、もつといいものを、つてな。

「頑張りましょう、ナオフミ様」

ナオフミの手を取って、ラフタリアちゃんが微笑む。

…あんなに弱々しかった子が、ホントに強くなったよなあ。

ナオフミと並ぶと画になるって言うかさ？

「頼りにしてるぞ、セント…ありがとう、ラフタリア」

初めてナオフミが笑顔を浮かべ、ラフタリアちゃんの手を握り返  
す。

そこで同時に、ラフタリアちゃんの頬にキスを…つてなにい!?

「あ、ああああ…!!」

「あ、悪い。こういうのは嫌だったか？」

「い、いいいえそんな決してめっそうもない!!」

「いや、これは俺がデリカシーがなかった。もうやらない」

「えっ…!?!」

あらやだ、ナオフミってばいきなりなんて大胆な…!

オレがここ位にいること忘れてたんじゃないだろうな…それは  
まあ、置いて。

この場でオレが言うべきことといったら…。

「式には呼んでね?」

「セントさん!!」

この二人がちやんとくつついたら、ちやんと祝ってやろう。

そんなことを思いながら、オレは前より明るい気がする青空を見上げるのだった。

To be continued…

## 第二章 カースの目覚め 二つの出会い

Side : Naohumi

元康が勝手に起こした決闘騒ぎが終わった翌朝。

あのクズ王からの報奨金が無くなりそうだったり、ビツチ姫がまた騒いだりしたが、ラフタリアがいろいろと言いつ返ししてくれたおかげで、気分はそこまで悪くなかった。

こんな気が楽なのは、ラフタリアのお陰だろうな。

「……お、戻ってきたか」

「ああ、待たせたな」

城を後にし、城門まで出てくると、そこで暇そうに待っていたセントトが俺たちに気づいた。

そこですぐに……いやそうな顔になる。

ああ、お前耳いいからな。あの騒ぎも聞こえてたのか。

「なんか揉めてたみたいだな。またなんかちよつかいかけられたか？」

「ああ……だがラフタリアがいい感じに返してくれてな。ちよつとスッキリした」

「やるねえ、ラフタリアちゃん！」

「な、ナオフミ様……」

なんか照れてるラフタリア。

いいじゃないか、かわいい娘が見せてくれた武勇伝を聞かせるぐらい。

セントも何か察したのか、ニヤニヤとラフタリアを見ている。

普段はウザく感じるが、今だけは許してやろうじゃないか。

「んじや、行くかー！」

「ああ。だがまずは何をするか……」

「いやいや何言ってるのさ」

少し悩んだところで、セントが呆れ顔で俺に言う。

なんだ？何か先にやる事があったか？

そう思った俺に、セントはチツチツと指を立てて告げた。

「最初にやることがあるだろ？」

「…本当に良かったのか？」

意味深な様子のセントに連れられてやってきたのは、奴隷商のテント。

そこで二人は…再び俺の奴隷になる契約を結ぼうとしていた。

「何がだよ」

「もう、わざわざ奴隷になる必要なんかなかったのに」

「いいんです。……ナオフミ様のものだという証が欲しかったんですから」

「…こんな事をしなくても、お前達が俺を信じてくれていることはわかっているのに。」

ん？セントがまたなんかニヤニヤラフタリアを見てる？

「ラフタリアちゃんはあれだよな。意外とムツツリだよな」

「なっ、なななんですかいきなり!？」

このウサギ、いきなり変なことを言いやがった。

ムツツリ？何で今の話の流れでそんな結論に至るんだ？

「身も心もこの人のものになりたいの♡ ……つてアピールしときたいんだろようするに」

「わーわーわーわー!!」

「照れるな照れるな、ういやつめこのこのー!」

「セントさん!」

ラフタリアが顔を真っ赤にしてセントに飛び掛かった。

何だコレ、バックに百合の花が咲き誇っているように見えるぞ。

…別におれは、娘がそつち系であつても差別しないけどな。

「なんだかナオフミ様に変な勘違いをされている気がします!!」

ハツとしたラフタリアがすぐさまセントから離れる。

セントはまだニヤニヤしたままで…なんか耳打ちしてはラフタリアを恥ずかしがらせている。

姦しいが、年頃の娘らしくていいんじゃないか？

「しかし災難でしたな。奴隷紋の修復はたやすいものでしたが、一方的に破棄させられるとは」

「あれがこの国のトップとか、終わってるだろ」

「タイミングを見計らったのか、奴隷商が俺の近くに寄って話しかけてくる。」

「まったく、まっとうな金で買ったものを取り上げられるとは思いませんでしたぞ！」

「あんなのがいる国じゃ、この商売もやりづらいんじゃないか？」

「この国も一枚岩ではありませんからな、そう簡単に需要は下がったりはしませんです、ハイ」

「そんなもんか」

まあ、どんな国にも闇はあるものか。

むしろ清廉潔白な国なんか逆に怪しくて関わりたくもない。なんか抱えていそうで怖いしな。

とか思ってたなら、セントがなんか訳知り顔でため息をつき出した。

「確かに厄介な敵かもしれないけど、まあ、実際はナンバー2なんだよな」

「それはどういう……」

ん？ナンバー2？あのクズが？

詳しく聞こうと思ったら、何やら興奮した様子の奴隷商がラフタリアをまじまじ見つめだして邪魔をされた。

おい、あんまり寄るな。俺の娘だぞ。

「しかしあのやせっぽちがこんな上玉になるとは……非処女でも金貨7枚で買い取ってもよろしいですよぞ！ ハイ！」

「誰がそんな話をしましたか！ とうるかまだ処女です！」

「なんと！ では金貨15枚で！」

「ですから！」

「おいちよつと待て！ オレより高いじゃないかどうということだ!!」

「セントさん!?!」

なんかセントまで騒ぎに参加して聞くどころじゃなくなってきた。

まあいいか……あのクズの話なんてどうでもいいし。

そう思つて、騒ぎが落ち着くまで待つていた俺の目に、別の気になるものが目に入った。

「…おい奴隷商。あれはなんだ？」

なんかテントの入り口近くにあるなにか…あれは、卵か？

「ああ、あれは私どもの表の商品です、ハイ」

「表？」

「奴隷商は裏の顔で、表向きには別の商売してるってことか」

まあ…隠れ蓑にもなるだろうし、そういう形もあるのか。

そうだ、俺も勇者という事を隠して別の仕事をすれば多少は稼げるかもしれないな…。

「魔物の卵か…」

「魔物って…人が持つてても大丈夫なのか？」

「訓練された魔物ならな」

「馬車を引いている生き物も魔物ですよ。見たことありませんか？」

「…そういえば」

あれって普通の動物かと…つて言うか、普通の生き物がいないのか、この世界は。

生物⇨魔物って事なんだな。

よく見ると、卵の表面に奴隷紋に似た模様が描かれている。これで刷り込ませる感じか。

「こちらの商品は銀貨100枚で一回挑戦！ 魔物の卵くじですぞ！」

「当たりは騎竜か…金貨20枚相当つてところだな」

「コンプガチャかよ…」

知つてるぞ、こういうのは元々採算がとれるようにできてるんだ。

騎竜とやらも本当に入ってるのかどうか…でも、最初から否定するのともうかとは思う。

「…一つ、買ってみるか」

「ナオフミ様!？」

俺がそう言うと、ラフタリアが驚いた様子で振り向いてきた。

そんなに意外か……確かに、すぐに役立たないものを買ったことはないし、効率ばかり重視してきたけど。

「気分転換だ。役に立つ魔物ならいいし、最悪ウサピルなら売ってもいい」

「もう……あまり無駄遣いしても」

「いやーじゃないのさ」

難しい表情になるラフタリアの肩に手を回し、セントが耳打ちする。

お、今度は聞き取れそうな声量だな。

「……ナオフミに余裕ができてきたってことだろ？」

「それはそうかもしれないませんが……」

……あのバカウサギに気を遣われるとはな。説得してくれるなら助かるが。

俺は奴隷商に金を渡し、卵を一つ受け取る。

うん、ほんのりあったかいな。

孵化のための容れ物を受け取りながら、俺は奴隷商を睨みつけた。

「もしも孵化しなかったら違約金とかを請求しに来るからな」

「ハズレを掴まされたとしてもタダでは転ばない勇者様に脱帽です！

ハイ」

「ナオフミ……」

セントが呆れた目を向けてくるが……大事だぞ、こうやって釘をさすのは。

ついでだ、にやりと笑いながら、後ろに立つ二人に親指を差した。

「その場合は覚悟しておけ。オレの凶暴な奴隷どもが暴れまわるからな」

「おいー！」

「ナオフミ様ってば!!」

さすがに冗談なんだが、二人同時に怒鳴られてしまった。

いや、でもお前ら今ならそれぐらいやれるだろ。頼りにしてるって伝えたかったんだがな。

「さて、じゃあそろそろいくとする……」

予定はまだ決まっていらないが、まずは何か始めるかテントを後にしようとした時だった。

その声が響き渡ったのは。

「ぐるあああああああああああ!!!」

まるで凶悪な魔物の咆哮のような、どこか悲痛さを感じさせる少女の叫び声が聞こえてきたのは。



## やさぐれドラゴン

S i d e : R a p h t a l i a

「なんだ…!?!」

「ああ、これはいけません！ もう鎮静剤が切れてしまったのですか！」

突然響き渡った声に、私達だけでなく奴隷商さんまで慌てます。

セントさんにいたっては、苦しそうに耳を抑えて悶えていました。耳がよすぎるのも考えものですね…。

「がるるる…い…」

走っていった奴隷商さんの後を追いかけると、それを見つけた。た。

とても大きな…私が入られていたものとは比べ物にならないほど大きく頑丈な、鋼鉄の檻です。

その中で一人の女の子が、太い鎖に繋がれながら、私達を睨みつけていました。

「あの檻か…何がいるんだ？」

「罪を犯して奴隷落ちした、亜人の拳闘士です。アオタツ種で性別はメス、レベルダウンの刑に処され、現在の外見は10歳程度になっております」

「レベルダウン？」

「文字通り、罪人をレベル1まで弱体化させちゃう刑だ。キツイらしいぞ」

あんな女の子が、罪を…？

と思ったところで、私も大体同い年であることを思い出してやめました。

私は罪人ではありませんが、同じ奴隷ですからね。

「それがなんであんなゴツイ檻の中に閉じ込められてるんだ」

「実は、レベルダウンの刑に処されてなお、あの強さですて…普通の檻では抑えきれないので、ハイ」

奴隷商さんの言う通り、女の子が暴れるたびに檻が軋んでいます。

すごいですね…私でも、まだ持ち上げられるかどうか。

「ぐるぐる…！　　があああああああ!!」

ですがやはり、そんなに頑丈な枷をつけられては、脱出することはできそうにありません。

何度も体を揺らし、皮膚が擦れて傷ができたのか、血を滲ませています。

それでも檻を壊そうとする姿は、何て痛々しいんでしょう…。

「…見覚えがあるな、あの目」

「はい…以前のナオフミ様と同じ目です」

セントさんが呟いて、私も気づきます。

私達を睨むあの目、あれは怒っているだけではありません。

声を聞いてもらえなくて、苦しんでいる目です。

「…アイツは、どんな罪を犯したんだ」

「人を殺めたとか…それも他国の要人だったそうで」

ナオフミ様が尋ねると、奴隷商さんはポリポリと頭をかきながら答えます。

あんな子が、人を殺したのですか…？

「オレはやってない!!」

ですが、私の疑問を払いのけようとするように、女の子は悲痛な叫びをあげます。

その声は…どうしようもなく、ナオフミ様に似ていました。

すると不意に、ナオフミ様が女の子に向かって近づいていきました。

「ナオフミ様…？」

「お、おいナオフミー！」

「ゆ、勇者様!?　あまり近づかれては危険ですぞ!!」

私は魔物の卵を押し付けられ、その場にとどまってしまう。

セントさんが奴隷商さんと一緒に止めようと思いますが、ナオフミ様は構わず進んでいき、女の子の前でしゃがみ込みました。

「おい、お前」

「ぐるぐる…！」

ナオフミ様が話しかけますが、女の子は威嚇をやめません。

むしろ近づいてきたナオフミ様に殺意を抱いているように、ガチガチと歯を打ち鳴らし始めました。

あれは…震えているんでしょうか。

「ち、近づくな!!」

「やってないってのはどういうことだ？ お前は人を殺してない?」

「お前に関係ないだろう!!」

「ああ、ないな。だがお前は、伝えたいからそうやって吠えてたんじやないのか?」

「ぐっ…」

女の子は目を逸らし、ばつが悪そうに唸ります。

ナオフミ様はしばらく女の子を見つめ、唐突に檻を開けて中に入りました…って!

「何やってるんですかナオフミ様!？」

「いいから聞かせてみる。愚痴ぐらいなら付き合っただけでもいい」

「うるさい！ お前もどうせ、あいつらみたいにオレをハメて、踏みこむんだ！ オレはもう騙されないぞ!!」

「いいから聞けよ。俺は…」

女の子の目と鼻の先まで近づいたナオフミ様が、手を伸ばします。

すると女の子は、ギリリと目を光らせ、伸ばされたナオフミ様の手にがっぷりと噛みつきました。

「ナオフミ様!!」

「ナオフミ!!」

「盾の勇者様!？」

突然の事に、私達は慌てます。

いくら弱体化しているとはいえ、あれだけ力を持ったものに噛みつかれたら、ナオフミ様の手が食いちぎられるかもしれません!

ですがナオフミ様は…少し痛そうにするだけで、より顔を寄せました。

「…! いいだろう、そのままでもいいから聞けクソガキ…! お前が

どんな目に遭ってきたかは知らないがな、そうやって引きこもって噛み付くだけのところを見てるとなんかムカつくんだよ!!」

怒鳴りつけられ、噛みついた女の子がびくりと肩を震わせます。構わずナオフミ様は、硬直する女の子に向けて叫び続けました。

「自分に近づくもの全てを攻撃できたらそれで満足か？ そんなわけがないだろう！ ここで誰彼構わず噛み付いたところで、お前の心が満足するわけじゃない！」

背を向けたナオフミ様の顔は、今の私達には見えません。

ですが…きつとあの方は今、泣きそうな顔をしているように思えてなりませんでした。

「お前を貶めた奴らは、いまものうのうとどこかで笑っているはずだ…どうだ、許せるか？ そのままにできるか!?!」

「っ……」

「噛み付く相手は選べ…少なくとも俺は、裏切りは絶対に許さない。俺を陥れた奴らと同じには絶対にならない」

そのうち、ナオフミ様を見つめていた女の子の顎から力が抜け、噛みついていた歯が離れました。

それでもナオフミ様は、女の子に手を差し出します。歯が肉を裂き、血を流した手を、見せ続けました。

「選べ。ここでずっと敵を待ち、飢え死にするか！ それとも…俺についてきて、憎い敵を討つ力を手に入れるか」

「ナオフミ！ お前まさか…」

ナオフミ様の意図に気づき、セントさんが慌てた声をあげます。

私や奴隷商さんがはらはらと見守る中、女の子はナオフミ様を見つめ、やがて肩から力を抜きました。

「……お前、嘘はついてないな」

ナオフミ様を見つめる目に、もう敵意はありません。

戸惑いながらも、縋るような目をナオフミ様に向けていました。

「本当だな？ 本当にお前は…俺にあいつらをぶっ潰させてくれるのか？」

「それはお前の努力次第だ。あいにく俺は攻撃ができなくてな、連中

を直接やれるのはお前だけだ」

「なんだと？」

ナオフミ様の言葉に、女の子は訝し気に眉を寄せます。

そしてすぐに、ナオフミ様の手に備わった盾に気がつき、目を見開きました。

「その盾……おまえ、まさか勇者、なのか？」

「戦えなくて、この世界の連中に妙に毛嫌いされてる盾の勇者だ。だから俺は、どうしても戦力が欲しい」

女の子は、ようやく気付いたようです。

どうしてナオフミ様が、罪人とされている自分に歩み寄ろうとしてきたのか。

呆ける女の子に向けて、ナオフミ様は不敵な声で告げました。

「世界を救うついでだ。胸クソ悪いseitら、掃除するのを手伝ってやる」

女の子はそんなナオフミ様を、じっと見つめて考え込んでいる様子でした。

そして数秒がたった後、何か、決意を秘めた眼差しでナオフミ様に答えました。

「……鎖を解いてくれ。もう暴れない」

その答えに、背中越しでもナオフミ様が笑ったのがわかりました。ですがその……見るのが少し怖い笑みのような気がしました。

「奴隷商！……こいついくらだ？」

「お代は結構です。私共も、その奴隷の扱いにはほとんど困り果てていたので……」

「そうか、なら遠慮なくもらっていくぞ」

「ぜひそうしてくださいと助かります……！」

あからさまにホツとした様子で、奴隷商さんが檻の鍵を取りに行きます。

……あの、そちらは良くてもこちらは、その……すごく不安になってきたのですが。

「盾の勇者、オレはお前についていくぞ。だがな……もしさっきの言葉

が嘘だったなら、オレは必ずお前をぶつ殺す」

「ああ、わかった……お前、名前は？」

「リュウガ。お前は？」

「岩谷尚文だ。まあ、期待はしておけ。いい光景を見せてやるさ」

「ああ……楽しみだぜ」

「くくくく……」

「はははは……」

戸惑う私やセントさんを放置し、ナオフミ様は女の子……リュウガちゃんと笑い合っています。

ですがやはり、その……言い表せない危ない感じがしました。

「な、なんか……組み合わせちやいけない二人を組ませちゃった気がするんだけど……!?!」

「爆弾を前にしているようなとても危険な予感がします！ 大丈夫なんでしょうかナオフミ様!?!」

ナオフミ様はそれに、答えてはくれませんでした。

## 戦いの成果

Side:Naohumi

「おい！ 話が違うだろうが！」

薬屋に寄った俺に向かつて、リュウガが怒鳴り声をあげる。

おい、こんなところで騒ぐなよ。俺からぼったくろうとしなかった数少ない店なんだぞ、ここは。

「なんでレベル上げに行かないんだよ!?!」

「お前やラフタリアを鍛える前に、先立つものが足りてないんだよ。卵ガチャの分を引いても、今後やっていくのは難しい」

リュウガを買った分の料金がかからなかったのは幸いだが、食費や宿代の事を考えれば楽観視はできない。

絶対この新入り達は、レベルが上がったら想定以上の量を食うだろうしな。

「本来なら国なら助成金が出るはずなんだが、あのクズにもう払う気はないだろう」

「本当に嫌な国に召喚されたもんだな、お前」  
「まったくだ」

あのクズ、無茶苦茶な理屈で貴重な軍資金をかつさらおうとしやがって…。

さすがにおかしいと思った鍊や樹のおかげで未遂に終わったが、次はないとまで言われた。

べつにいいけどな！

…やっぱりリュウガの奴、納得出来なさそうな顔をしているな。

「…これじゃいつになったらアイツらに復讐できるのか」

「落ち着いてください、リュウガさん。今はまだ焦る必要はないでしょう?」

「そうだけだよ!」

ラフタリアが宥めてくれているが、そのうちまたごねだすだろう。

…大きく事が運ばないもどかしさは俺にもわかる。

だから今は…耐えてもらおうほかにないんだ。

「俺の調合じやまだ大した金にはならないが、少なくとも少しでも前には進めているはずだ」

「オレも覚えるよ、調合とか加工とか」

「……わかったよ。もう急かさねえ」

そう言つて、リュウガはそっぽを向く。

不満たらたのだが、仕方がないから妥協するつて感じか。

……うん、薬草や薬の需要が高い今なら、そこそこの金にはなったか。

「よし、なら次はお望み通りレベル上げに……」

「ちよいと待ちな」

いい加減リュウガの不満を解消してやろうと、出発しようとした俺たちを、薬屋の爺さんが呼び止める。

何だ、と思つていると、薬屋は俺に……一冊の本を手渡してきた。

「おい、これは何のつもりだ」

「親戚がリュート村にいてな、あんたに助けてもらったと聞いた」

思わず問いかけた俺に、薬屋は不敵な笑みを浮かべてそう言う。

正直、驚いた……武器屋の親父や奴隷商が例外なだけで、この国の連中はみんなおれを敵視してると思つてたのに……。

「デカくはねえが、俺にできる精一杯の礼だ。使つてくれ」

「あ、ありがとうございます！」

「助かるぜ、おっさん！」

ラフタリアやセントも、慌てて薬屋に頭を下げる。

これは……思わぬ収穫だ。これでもっと効率よく稼げるようになるかもしれない。

つい笑みが浮かぶ俺だったが、本を一ページ開くと、表情が固まったのがわかった。

「……セント、お前、文字は？」

「読めるぞ？ あとで教えてやるよ」

「私も少しなら……」

一番肝心な問題があつたのを思い出した……俺、この世界の文字なんて読めないぞ。

愕然とする俺に気づかないまま、薬屋は煙管をくゆらせながら続け



て言った。

「魔法屋のばあさんもあんたに礼があるらしい。あとで行ってみな」

「まあまあ！ 私の孫を助けてくれたそうじゃない？ 本当にありがとうー！」

「あ、ああ…」

ジイさんの案内通り、町の魔法屋にも顔を出してみたが…。

孫って…誰だよ。いたのか、あの中に。

「誰のことだ？」

「多分、生き延びた方のどなたかかと…」

「さあさ、ここつちに来てー！」

顔を寄せ合って話し合う俺たちの手を引き、魔法屋は店の奥に連れていく。

そこで俺たちは…デカイ水晶玉の前に立たされた。

「うーん、盾の勇者様は補助と回復に適性があるみたいね。そちらのお嬢さん方もどうぞ？」

「は、はい」

水晶玉に手をかざした魔法屋は、俺たちを順々に見ていく。

なんだ？ 見るたびに色が変わっていつているが…ってこれ。

「ラクーン種のお嬢さんは、光と闇ね。ラビット種のお嬢さんは…あら珍しい、生成魔法だわ。そちらのアオタツ種のお嬢さんは、火に適性があるわ」

「お、おい。まさかこれは…」

「水晶玉は高価だからあげられないけど、中古の魔法教本があるから譲ってあげる。きつと役に立つわ！」

ドサドサツ、と魔法屋は俺の前に大量の本を積み重ねていく。

これは…読めはしないが、たぶん魔法に関する知識が書かれたものだろう。表紙の絵がそれっぽく見えるから間違いない。

だが、今の俺たちにしてみれば…正直、鈍器にしかならなそうだ。

「……た、助かる」

だが、これは好意だ。

無下に断ることは……俺には、できなかつた。

S i d e : R y u g a

大量の本を風呂敷に包んだオレの今のご主人——ナオフミが、よろよろ歩いていく。

その横を通り過ぎた人間は、やっぱりいい目をしないけど……さっきのやり取りを見た後だと、そこまで気分は悪くならなかつた。

「……お前、本当に勇者やってんだな」

思わず呟くオレに、ナオフミ達が振り向いてくる。

な、なんだよ。見たまんまの感想を言っただけだろうが。

「何がだよ?」

「…に、人間の国で盾の勇者がまともにやってけるのかって思ってたけど、意外に慕わられてたからさ」

「…結果的に助けたただけだ。善意じゃない」

ちよつと居心地が悪くなつて、目を逸らしながらオレが言うと、ナオフミもオレから目を逸らしてぶっきらぼうに答える。

…何だ? その反応。

悪ぶつてんのか? 似合わねえからやめとけよ。

「ていうか人間の国ってどういうことだ?」

「ん?」

何を今更なことを……って、そういうえば異世界人なんだっけ。

そうか、ホントに何も知らないままこの世界に呼び出されてきたんだな。

「オレが説明する。…隣国にシルトヴェルトって国があつてな、そつちじゃ盾の勇者は神様みたいに崇められてんだよ。で、この国とはメタクソに仲が悪い」

そう、何かバカなのか頭いいのかわからないラビット種の女がナオフミに説明している。

名前なんだっけ? …ああ、セントだっけ。

そいつの説明で、ナオフミはより一層険しい顔で頬をヒクつかせました。

「……宗教的な敵ってわけか、俺は」

「なんだってそっちに召喚されなかつたんだらうな？」

セントの言葉に、オレも同意する。

巫人に信仰される勇者が人間の国に召喚されれば、敵視する奴がい  
てもおかしくない……バカな奴が多いからな。

何だって伝説の盾はこの国に現れちまつたんだか、本気でナオフミ  
に同情する。

でもナオフミは……それでも諦めないでここにいるんだよな。

「そんな国でちゃんとやれてんだから……大したもんだと思うぞ」

ずっと檻の中で暴れてただけのオレとは違う……必死に戦って、敵  
ばかりの国の中でちゃんと味方を作ってる。

それに比べてオレは……何ができるんだらうか。

その時、考えこんでいたオレの首に、なんか馴れ馴れしく手が回さ  
れてきた。

「なくに落ち込んでるんだよりユウガちゃん。自分と比較しちやつた  
わけ？ 不幸自慢してるわけじゃないんだから気にすんなって」

「ああ？」

何言ってるんだこのバカは。

何だそのニヤケ面は。おいやめろ、なんか無性に殴りたくなるぞこ  
の顔。

『自分だって悲惨な目に遭ってるのに、それでも前を向こうとしてる  
こいつに比べていまのオレは一体……』みたいなこと考えてるぽかつ  
たぞ」

「違うわ！ ふぎけんな！」

「そういうのマジでめんどくさいからやめといたほうがいいぞ。気楽  
に行けよ気楽に」

「だから違うっつってんだらうが!!」

オレがそんな卑屈なこと考えるわけねえだろ！

くつつくな！ ぶつとばすぞこのバカウサギ!!

思わず手が出そうになったオレだったが、それより先にナオフミが  
ギロツと鋭い目を向けてきた。

「もうやめれ」

「あだだだだだ!! ちよ、なんでオレだけ!?!」

「ツツコミがわりだ。ちよつと黙れ」

「ひどくない!?!」

バチバチとセントの胸で紫色の電流が走っている。

ああ、奴隷紋を発動させてんのか。ていうかそれ、ツツコミに使って大丈夫なのか？

……何だろう、悩んでたオレがバカらしくなってきた。

「…こんなんでも本当に大丈夫なのかよ」

「が、がんばりましょう!」

そう言っつて、もう一人の奴隷であるラクーン種の女が話しかけてくる。

ああ、その通りなんだけどさ……先にいっつこだけ言わせてくれ。

「ところでお前、誰?」

「いまさらですか!?!」

## フイー口の誕生

S i d e : S e n t o

「うおらああああ!!!」

ものすごい雄叫びとともに、リュウガの拳が振り抜かれる。

それは草原にいたバルーンを容易く貫き…そのままその後ろにいた奴らをも割ってみせた。

…なんつーか、すげえな。

「…おい、あれでまだレベル3か」

「オレらの力とタメ張ってんじやねえか…?」

「っ、強い…!」

よかった、オレの感覚がおかしかったわけじゃないのか。

さすがはアオタツ種ってことか…低いレベルであれば、頼もしいじゃないの。

負けてられないな……って!?

「私も行きます! はあ!」

「おい待て! 先行しすぎだ!」

ラフタリアちゃんがいきなりバルーンに斬りかかる…けど、何だ?

ナオフミの指示も待たずに飛び出していったぞ? やる気がある

のは結構だけど……なんかからしくないな。

っ、見てる場合じゃないなこれ!

「もう…しょうがねえな。変身!」

【鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエイ!】

手早く鎧を纏い、ナオフミの横に立つ。

さあ、狩りの始まりだ!!

「防御は任せるぜ!」

「わかってる!」

この後滅茶苦茶狩りまくった。

だが……やっぱりラフタリアちゃんの様子が気にかかったかな。

☒

その時が来たのは、数日後の朝だった。

レベル上げと採集と薬作り…その繰り返しをしてコツコツ手持ちの金を増やし続けていたある日の朝の事だ。

「ナオフミ様！ セントさん！ リュウガさん！」

何やら興奮した様子で、ラフタリアちゃんがオレたちを起こした。疲れてんだけどなあ…と思ったけど、ラフタリアちゃんが指さしたものを見て、オレたち全員の眠気が吹っ飛んだ。

「卵が…！」

！ 奴隷商のところで買った卵にヒビが…!?

ピキ、パキ、と空が徐々に割れていき、その中からふわふわの毛が覗く。

その光景に、オレやリュウガは思わずぐくりと息を呑む、そして。

「ピー！」

「おお〜…！」

可愛い鳴き声とともに、そいつは空の中から生まれ出た。

白い羽毛に、ところどころピンク色が混じった鳥の魔物……こいつは確か！

「コイツは…フィロリアル雛だな」

「フィロリアル？」

「前に言った、馬車とかを引く魔物だよ。ていうかむしろ引いてないと落ち着かないんだってさ」

「…それは生物としてはどうなんだ？」

ん？ なんかおかしいか？

ナオフミの世界とは微妙に常識が違うっぽいしな……まあ、そういう生き物だったことは理解してくれてるみたいだし、いいか。

生まれたヒナは、ナオフミの頭に乗ってピヨピヨ鳴いている。

うん、かわいいじゃん。

「ふふ、ナオフミ様のことを親だと思ってるみたいですね」

「よっ、頑張れお父さん」

「うるせえ」

そう言っつて、ナオフミはしかめっ面になる。

しかし何だろうな……妙にこいつ、こういう姿が似合うような。

「でかくなったら馬車でも買つて……移動手段として連れていけるな。ある意味当たりなんじゃねえか？」

「それまでどれだけかかることやら……」

確かになあ……レベルに合わせて成長するとはいえ、そう短時間でレベルが上がるとも思えないし。

とか思つてたら、ナオフミはおもむろにヒナが残した卵のカラを盾に吸い込ませる。あ、なんかスキルが出た？

「成長補正……これで多少は早くなるか」

「便利な盾だよな、それ」

いや、マジで不思議だわこれ。

欲しいと思つてた能力がわりと早く出てきたな。狙つてんのか？

……ん？ 何だ、こつちでは妙に刺々しい雰囲気……。

「ぐるるる……」

「ピィ……」

「……何を睨んでるんだお前は」

「いや……別に」

なんかリユウガが、フィロリアルルのヒナを相手に唸り声をあげてた。

……ああ、生物の本能的に？ ドラゴンとフィロリアルつて、基本的に相いれないっていうしな？

でもお前魔物じゃねえだろ。

「……ところで、そいつの飯はどうするんだ？」

「何がいいんだ？」

「雑食だからなんでも食べるけど……はじめのうちは煮詰めた豆とかだな。貰つてこようか？」

「いや、俺が行く」

頭にヒナを乗せたまま、ナオフミが部屋を出て行く。

……あの、せめて降ろしていったら？ なに、オレを笑わせたいの？

村にいた、他のフィロリアルルの飼い主に事情を説明すると、喜んで持っていた餌を分けてくれた。

ああ…やっぱこの村の奴らは好意的だわ。

「なるほど…そういうことでしたらどうぞ、もらってください」

「なに？ 金ならちやんと…」

「いえ！ もらえませんよ」

財布を出そうとしたナオフミを、飼い主は慌てて止める。そしてにつこりと、本気でありがたそうな笑顔を見せてきた。

「勇者様には村を救っていただいた大恩がありますから…せめてこれくらいさせてください」

…なんか、うるつときた。

ナオフミはこう、必死に生き残る事しか考えてなかったとかいうけど、やっぱり見ず知らずの村人を助けようと必死になった。

それをちやんと見てくれてたやつはいるんだなあ…！

でもナオフミは、差し出された餌の袋を押し返した。

「…村も甚大な被害を受けたはずだ。少しでも復興の足しは必要だろう？」

代金をどうにか受け取ってもらって、オレたちは宿に戻る。

その途中で、痛々しい波の傷跡が残る村を見やり、それぞれの眉間にしわを寄せた。

…復興、なかなか進んでないな。

そりやそうだ、村人の全員を守れたわけじゃないもんな。

「…なにもやれることがないというのは、歯がゆいな」

「ああ…今のところ、買い物して金を落とすかちよつと手伝うくらいしかできねえ」

「何か、私たちにもできることがあればいいのですが…」

…どうしたもんかねえ。

オレの作った鎧は基本、戦うために、身を守るための機能しか持っていない。こういう時に役に立つ能力は、まだ作れてないんだよなあ…。

無力感に苛まれていた時、オレの後ろでギリツと歯を食い縛る音が聞こえてきた。



「……っ！ ああもう！ うだうだ考えてるだけで意味なんかねえだろ！」

「は？」

ん？ リユウガの奴が急にオレの隣を通り過ぎて…復興作業中の奴らの所へ。

おい、お前、何するつもりだ？

「おら！ その角材貸せ！ 運んでやつから」

「え？ だ、だが…」

「いいんだっつもの！ こちとら力だけは有り余ってたんだよ！」

リユウガはそう言っつて、作業をしていた奴らから半ば強引に角材を受け取り、ずんずんと運び始めた。

おお…さすがのバカ力。けっつこうな速さで木材が運ばれていく。

…そうか、そうだよな。

やれる事なんか、考えるより先にいくらでもあるよな。

「…つたく、カツコつけやがって」

【ゴリラ！】【タンク！】

思わず呆れた口調になるけど、オレもすぐに歩きだし、鎧を纏う。

ナオフミからはため息が、ラフタリアちゃんからは苦笑が聞こえるけど気にしない！

お前だけにいいところ見せつけられてたまるか！

「おらああああああ!!」

「どっこいしよおお!!」

吠えながら、片っ端から復興作業を手伝いまくる。

フィロリアルヒナの声を声援に、オレたちは日が暮れるまで働き続けたのだった。

S i d e : R a p h t a l i a

「ぐへえ…」

「っは、っつかれた〜」

「お疲れ様です、セントさん。リユウガちゃん」

復興作業のお手伝いから戻ったセントさんとリユウガちゃんが、も

のすごく疲れた声を上げてベッドに倒れ込みました。

へとへとのようですが、どこか満足げにも見えるから不思議です。

「くそ……そんなレベル上げられなかった」

「まあそう落ち込むなって。焦ったってなんもいいことないぞ」

悔し気に唸るリュウガちゃんに、セントさんが気楽に笑いかけます。

そうですね……焦ってもいい事はありません。

ですがナオフミ様は、最近あまり私達を前に出そうとしません。私達を思つての事だとはわかつているのですが……それでも、私は。

「明日は今日できなかつた分もレベル上げをするつもりだ。今晚のうちにしっかり休んでおけ」

「はい」

「あ〜い」

「……おう」

ナオフミ様の決めた方針に、私たちみんなで頷きます。

悩んでいても仕方ありません。ナオフミ様のお役に立つため……そのためなら、私はどんなに辛いことだって。

すると急に、セントさんが勢い良く起き上がりました。

「じゃあメシの時間だなー！」

「わかった。作つてやるからその辺で待つてろ」

「は〜い！」

とてもキラキラした目でナオフミ様を見つめています。

ナオフミ様の料理はとてもおいしいですからね。アレを食べられるなら、確かにすぐに元気になるのも納得です。

「ピヨ〜」

生まれたばかりのあの子ども、お腹が空いた！とばかりに力強く鳴きます。

……えっと、ですがその、何か、違和感を覚えますね。

「……なんかコイツ、でかくなんの早くねえ？」

そう、フィロリアルのはナは、いつの間にか最初の数倍ほどにまで大きく育っていました。

この成長速度は…正直、不思議を通り越して不気味です。

「まだ1日経ってねえつてのに…」

「成長補正が効いてるんだろう」

「本当か？」

「……た、多分」

自信なさげにナオフミ様が仰いますが、そのお気持ちはわかりません。

伝説の盾の能力なのは確かでしょうが…この子は本当に、フィロリアルなのかと不安になります。

「それにしたって…」

「成長が異常だよなあ…」

このもやもやを解消してくれる方は、残念ながらこの場にはいませんでした。

## リュウガの暴走

S i d e : R a p h t a l i a

リュウガちゃんと出会い、フィーロが生まれてから数日が経ちました。

目覚めた私が宿から出て目にしたのは、もう見上げるくらいに大きくなったフィーロと、それを見上げるナオフミ様とセントさんでした。

「……ラフタリアのことといい、夢でも見てる気分だな」

「たしかになあ……」

「グアア！」

まるでお二人のつぶやきに応えるように、フィーロが鳴きます。

言葉が分かっているんでしょうか？ まだ生まれて数日だということに……。

「知能も悪くはないし、何より元気がある。いい買い物をしたな」

「おいナオフミ！ 次はオレにやらせてくれよ！」

どうやらナオフミ様は、拾った棒を投げてフィーロに取りに行かせるという遊びをしているようです。

むう……ナオフミ様が見たことのない爽やかな笑顔を浮かべていて羨ましいです。

「……なってしまいましたね、成鳥に」

「しかもまだでかくなってるらしい。どうなっただ」

「ほんとにこいつフィーロリアルなのか？ なんか別のもん買っちゃったんじゃないの？」

「……否定はできない」

元気に走り回るフィーロを見て、ナオフミ様たちは不安げに話しています。

ふと気づくと、私より先に起きていたリュウガちゃんが不機嫌そうにフィーロを睨んでいました。

あの……どうして、そんな敵愾心を？

「ぐんぐん……」

「グアア……！」

「そういえば、ファイロリアルとドラゴンって種族的に仲が悪いらしいぞ。リュウガはアオタツ種だし……」

「めんどくさいな、おい……」

そういえば、フィーロが生まれた時も睨んでいましたね……。

ケンカが始まらないだけましなんでしようけど、今後が不安になりますね。

……？ セントさんが何やら、村の広場の方に振り向きました。

何かあったのでしょうか？

「……なんか村の方が騒がしいな」

「何か聞こえるか？」

「ざわめきと……金属音、こりや鎧だな。あとは……」

そこまで言ったセントさんの表情が、苦虫を噛み潰したように歪みます。

なぜそんな顔に……その疑問は、セントさんのつぶやきによって解きました。

「……あのクソ女の声が聞こえる」

Side：Ryuga

「というわけで、俺が今日からこの村の新しい領主になる、北村元康だ。よろしくな！」

騒ぎが聞こえる広場の方に、ナオフミたちと一緒に向かう。

そこには豪華そうな鎧を着た……チャライ金髪の優男が笑って話していた。

なんだあれ？ 誰？

「元康……!? なんでお前がここにいるんだ!?!」

「ナオフミ……？ お前こそなんでこんなところに」

優男に気づいたナオフミが声を荒げる……なんだ、知り合いか？

でもなんか、親しい雰囲気じゃねえな。

ああいうチャラチャラしたやつ嫌いだからむしろいいけどさ。

「お前がここの領主になったってどういうことだ!?!」

「波での功績をたたえて、領地をもらうことになったんだよ」

「功績…!? 避難誘導もほつたらかしにしてたくせにか!」

「そんなのは騎士の仕事だろ?」

……だんだんわかつてきた。

こいつはナオフミと同じ、四聖勇者の一人だ。あの槍を見ればわかる。

そこで、ナオフミが冤罪をかけられた時も信じないで、自分だけ美味い思いしてやがった奴だ。

そういう奴たくさん見てきたからわかるぞ。

つーかなんだあいつ、喋ってるだけですげえ腹立つぞ。

「とにかく、ここはもうモトヤス様の領地なの。犯罪者の盾の勇者は出て行つてくたさらない?」

なんだよ! 優男より腹立つ声が聞こえてきたぞ!

思わず振り向くと、優男の隣に立ったケバい赤い髪の女がニヤニヤ笑つてやがるのが見えた……つて、あ?

その瞬間、オレの視界は突然……赤く染まり始めた。

「恩知らずの亜人にうす汚ないトカゲなんて連れて、みつともないつたらありやしないわ。さっさと消えてくたさらないかしら!」

「こ、この領地の責任者は私のはずです! そんな話は一度も…」

「だから今言っているのよ。あなたはクビよ、クビ」

「そんな…!」

村の村長とか、他の村人がなんか喋ってるけど……何も聞こえない。

オレの目は……あの女のことしか見えなくなっていた。

「フーツ……フーツ……!」

「リュウガさん…?」

隣の誰かがオレに声をかけてくるけど、それすら煩わしくなってくる。

息が荒くなって、目の前が真っ赤になって、頭の中で炎が渦巻いてる感じがする。

「そうねえ……まずは資金として村の出入りに税をかけましようか。」

入るのに銀貨50枚、出るのに銀貨50枚にしましょう」

「ご、合計金貨1枚…!?!」

「そんな！ 生きていけません!」

「そんなに大金か?」

ゴキゴキと拳の骨が鳴る。むき出しになった歯がギシギシときしむ。

体の中の何かが弾けそうな感覚に襲われて、体の自由がきかなくなってくる。

「この村で一泊するのにいくらかかると思う?」

「え…?」

「食事も合わせてたったの銀貨1枚。村の大人が一日暮らすのに、銅貨20枚あればおつりがくる」

「復興どころか村が干からびるつつつてんだよバカ勇者とバカ姫!」

「お、おいマイン!」

「痛みを伴う改革も必要です。苦しむ覚悟のない者は、しよせん野垂れ死ぬのがさだめですわ」

「てめえ…!」

ナオフミが正論をぶつけるが、向こうは全然気にした様子もなくそんなふざけたことをのたまう。

……ああ、もうダメだ。我慢の限界だ。

あの女……ここで潰す。

「ぐるああああああ!!」

オレの喉から、オレ自身も聞いたことがないくらいの咆哮が飛び出す。

ギョツと目を向くあの女に向かって飛び出そうとしたが、横から誰かにしがみつかれて止められた。

だれだ!?! オレの邪魔をすんじゃねえ!!

「お、おい！ 落ち着けリユウガ!」

「どうしたんですかりユウガちゃん!?!」

「離せ！ あの女は…! あの女だけはぶつ殺してやる!!」

それが、セントとラフタリアだとようやく気づく。だが、それでも

止まるわけにはいかなかった。

離せ!! あの女だけはここで仕留めとかなきゃならねえんだよ!!

「ヒイツ」

「なっ…なんなのよ!？」

優男がなんかビビってるけど関係ねえ!!

オレを鬱陶しそうに見てくるあの女…! あの顔を見てるだけで、嫌な記憶が大量によみがえってきやがる!!

遠くでオレを見ていたナオフミが、ハッと目を見開いているのが見えた。

「まさか…アイツなのか!? お前をハメたのは!!」

「違う!! 違うけど…でも同じだ!! 同じ奴らの匂いがする!!」

おかしいなと言ってるのは自分でもわかる。

でも…本能でわかる! あの女とあいつは同類だ!!

ぶっ殺しておかないと、絶対にこの先また同じ目にあわされる!!

「無礼者が! この私に敵意を向けるなど…何よりその暴言! 王族に対する侮辱だわ! 処刑してくれる!」

「お、おい。そこまでしなくたって…」

「生ぬるいですわモトヤス様! こんな亜人の小娘といえど、噛みついてこようとする者には罰が必要です! さあ、さっさと捕らえなさい!」

「ぐるあああああ!!」

あの女の命令で、一緒に来ていた兵士が槍を向けてくる。

上等だ!! あの時張らせなかった鬱憤、お前から解消してやる!!

群れるだけしか能がないコバンザメに負けるか!!

だが、兵士がそれ以上オレに近づいてくることはなかった。

「そこまでです」

あの女の周りに、全身真っ黒の謎の集団が現れる。

その瞬間、偉そうだったあの女の態度が一気に変わり始めた。

「とある方からの命で、こちらをお届けに参りました」

真っ黒集団の一人が、あの女に何か紙束を渡してる。

なんだ…? あの女、大人しく従ってやがる。



急な展開にオレの力も抜けたのか、セントとラフタリアに後ろに引きずられてしまった。

「フーツ、フーツ…」

「落ち着け、様子を見よう」

「こ、こんなことが…！ チイツ…：盾の勇者！」

セントになだめられていると、あの女がヒステリックな声をあげるのが聞こえた。

なんかこう…焦ってる？ そんな重要なことが書いてたのか、あの紙。

「村の権利をかけて、決闘よ!!」

「……はあ!？」

いきなりそんな事を言い出したあの女に、オレ達全員の目が点になった。

S i d e : S e n t o

「…面目ねえ」

ナオフミがクソ女ともめているのを横目に、オレはリュウガと向き直る。

やっと頭から血が下がったのか、しおらしくなってオレとラフタリアちゃんに頭を下げてくる。

全く…：何事かと思っただぞ。

「ああも敵意むき出しになるとは…：お前を騙したやつはマジでどれだけ性根の腐ったやつなんだ？」

「悪い…：なんかもう、頭がカッてなって止まらなくなっちゃって」

「一旦落ち着いてくださって良かったですけど…」

ぶっちゃけ興奮しすぎて何言ってるのか全くわかんなかったけど、あのクソ女を見た途端にこれだからな。

まあ、大体のことは察せた。

似てんだろうな、こいつを騙した奴と。いや、本能的に同類と悟ったのか。

「ていうか、あのケバい女は一体誰なんだ？」

「知らねーのかよ…マルティっていう、この国の第一王女だよ」

「性格は…見ての通りです」

苦虫を噛み潰したような顔で、オレとラフタリアちゃんて説明すると、リュウガも察したのか同じ顔になる。

…うん、嫌だよな。あんなんが王族とかこの国終わってるって思うもんな。

「顔は違う、名前も違う…でもやっぱ似てるんだ。あのなんていうか、自分以外の全部を下に見てるっていうか、物として見てそうなのが…」

「ふーん…」

どこにでも似たようなクズはいるもんだ。この先もしかしたら会うのかもしれないと思うと…激しく憂鬱になる。

…ん？ いいこと思いついたぞ？

「…ってことはだ、リュウガ」

「ん？」

「あの女の言う勝負で連中の鼻をあかせたら…お前のイライラもマシになるってこったな？」

もしかしたら一石二鳥を狙えるかもしれない、オレの提案。

それを聞いたリュウガは一瞬呆けると、やがてニヤリと笑みを浮かべ始めた。

## とぼつちりレース

Side: Naofumi

「勝負は私たちのドラゴンと、罪人勇者の鳥とのレースで決めることとしますー!」

「おい、何勝手なこと言ってるんだ!」

謎の黒装束軍団が現れて、ビッチが見たことない顔になったと思つたら、そんなふざけたとを言われた。

ふざけるな!　なんでそんなもんに付き合わなければならぬ!

「お願いします勇者様!　このお礼は必ずいたしますから!」

「断る!　なんでそんな面倒なものに巻き込まれねばならぬんだ!」

ここの連中には世話になったが、それはそれこれはこれだ。

ただでさえビッチと関わるとろくなことがないってのに!

ん?　セント、なぜお前がしゃしゃり出てくる?

「じゃあオレが代わろうか?」

…それはつまり、自分がレースに出ると?

何言ってるんだお前、自分から面倒ごとに首突っ込む気か?

「代わるって……お前がフィードに乗るのか?」

「うんにゃ、乗り物は自前で用意する」

そう言ってるセントは懐から何か……ものすごく見覚えのあるものを取り出した。

おい、それ……スマホだろ。スマホだよな!?

【ビルドチェンジ!】

固まるオレに構わず、セントはそのスマホらしきものにフルボトルを一本挿して、放り投げる。

地面に落ちる前にスマホは変形し、しかも見る見るうちに巨大化して。

一台のバイクになった……ってウソだろおい!?

「なに!?!」

「うはははは!　これぞオレの新たな発明!　マシンビルダー!」

いやいやちよつと待て！  
バイクて！ バイクて！

スマホだけでも違和感満載なのになんてもの作ってやがるんだお前は！

「い、いいなく！ かつけえ！」

「いやせめて世界観守れよ！ スマホとかバイクとか！」

「世界観？ なにそれ食えるの？」

なんか元康が興奮してるが関係ない！

やめろそのキョトン顔！ 絶対わざとだろ！

そして案の定、バイクを見たビッチがまた騒ぎ始めた。

「そんなものの使用なんて認められるわけないじゃないの！ 邪魔するのなら引つ込んでなさい！」

「ええ〜!? せつかく作つたのに〜！」

ビッチに即座に却下されて、セントが唇を尖らせる。

くっ……確かにあれなら有利そうだしな、向こうの強引さを理由に使つたほうが良かったか？

「いいじゃないかマイン、ちょうどいいハンデになりそうだぜ？」

だがそこに、見下した感じで元康が割って入ってくる。

そのままうちのフィーロの方に近づいてきてボフボフと無遠慮に羽毛を叩き始めた。

……あ、なんかいい予感。

「あんな色が混ざった鳥がうちの騎竜に勝てるわけないって！ 思いつきり安物だな、安物!!」

そう言つて笑う元康は。

次の瞬間、股間をフィーロに思いつきり蹴り飛ばされ、天高く打ち上げられた。

「も、モトヤス様!?!」

一瞬の間の後に、吹っ飛んでいく元康をビッチが追いかけていく。ヒュルル……と墜落していく元康を見送っていた俺は、思わずセントやリユウガと目を見合わせる。

そして全員で、満面の笑顔になってハイタッチを交わした。

「「イエーイ!!!」」

「グア〜!!」

「皆さん！ 喜ばないでくださいよ！ フィーロまで！」

フィーロも同じ気持ちなのか、元氣よく鳴く。

ハハッ！ 最近の鬱憤がちよつと晴れた気がするぞ！ お前は最

高だよフィーロ!!

「セント、手を出すなよ。あいつらには俺とフィーロが勝つ！」

「その方が良さそうだな。よし、任せた！」

「はあ…どうしてこうなるのでしょうか」

「いいじゃねえか、あれはかなりスツとしたぜ！」

いい気分になったついでに、勝負とやらにもやる気が出てきた。

フィーロもすでにやる気十分のようだしな。どうせならコテンパ  
ンに負かしてやる！

ラフタリアもため息をつきながら、仕方ないと頷いていた。

「フィーロ、ナオフミ様のことをよろしくね」

「グア！」

「いっけ〜！ ナオフミ〜!!」

「やってやれ盾の勇者ア!!」

セントとリュウガからもエールが起こり、村人からも声援が送られ  
てくる。

完全に向こうがアウエーだな。また気分が良くなってきた。

よろよろと戻ってきた元康とともに、村人が用意した線の間並  
ぶ。コースは…一本道だから間違いようもないな。

「村の全体を先に三周した方が勝ちとします」

「んじゃ、スタートの合図はオレから…」

またセントがしゃしゃり出てきて、例のドリルを取り出して……つ  
て。

おい、まさかそれ銃にもなるのか？

こんなのが初披露でいいのか？ …お前がそれでいいならいいけ  
どや。

「レディ〜……ゴー!!」

俺たちが構えると、セントが構えた銃が爆音を鳴らす。

そして俺とフィーロは……初っ端からものすごいスピードで走り始めた。

さあ！ やるからには勝ってやろうじゃないか！

「……ラフタリアちゃん、ここ任せるわ」

「え？」

俺たちが出発した後、そんな会話があったことなど、俺は気づかなかった。

Side:Sentto

ナオフミと槍の勇者が出た後、オレはこつそりとマシンビルダーに乗って後を追いかけた。

理由？ そんなのもちろん……あのクズどもの妨害のためだよ。

「力の根源たる我が命じる。真理を今一度読み解き、大地に……」

「おい」

「なっ……お、お前は?!」

コースを見守るために配置された兵士の後ろに寄り、オレが声をかける。

なんかの細工をしようとしていたそいつは慌てて振り向き、オレに剣を構えてくる。

が、その間にコースをナオフミがさっさと通り抜けていった。

うん、狙い通り！

「し、しまった!」

「直接手え出したら変な邪推されそうだから、このくらいで勘弁してやるよ。じゃあな」

慌てて戻ろうとした兵士を放置し、オレは次の兵士が立っていると後ろを目指す。

やれやれ……後何人いたっけ？ 一人目なのにもう面倒くさくなってきたぞ。

「チツ……王女もクズなら兵士もクズだな、この国は」

どうせあのクソ女の差し金だろうけど、従う方も従う方だ。

兵士の誇りとかそういうのはないのか！

ああもう！ 森の中走りにくい！

なんとか次のポイントに向かうけど、そこでは明らかに様子のおかしいファイロの姿が見えた。

「ヤッペー！ 間に合わなかったか!?!」

あれは多分、力を弱めさせる類の魔法だな。逆に向こうの騎竜はパワーアップしてる。

あ、尻尾で殴られた。竜のくせにやることセコいなおい！

でもファイロちゃんは怯まず、最初の時よりも力強い走りで後を追いかけていった。

「…あの子、根性あるなあ」

ちよつと驚いた。

このまま妨害とか、証拠映像残したりとか色々やろうと思ってたけど、なんかあれ見てたら野暮に思えてきた。

「あんまり手を出すのもアレか」

オレが考えてるうちに、レースは終盤へさしかかってくる。

なおも続いていた妨害に苦しめられたあいつらだけど、かなり巻き返しているのが見えた。

いけいけ〜！ あとちよつと〜!!

そんなオレの願いが通じたのか、ナオフミとファイロは圧倒的な差をつけて、ゴールを超えていった。

「よっしゃああああ!!」

思わずその場で、オレは拳を掲げて吠えていた。

ざまあ!!

「あの穴は不正の証拠として抑えました。勝負は盾の勇者様の勝ち、領主は引き続きあの方に任せるということで…」

「やりなおしよ！ こんなのおかしいわー!」

「どこがだよ…」

明らかに正当な勝負で勝ったのに、クソ女がギャーギャー喚いてる。

なんかもう……見苦しい。なんでああも醜態を晒せるの、あの女。  
「あの穴だつて、盾の勇者がやったことに決まつてるわ！ 絶対認めない！ こんな勝負無効よ無効！」

「彼らは我々が連行します」

「おう、よろしく」

向こうの言い分なんぞ関係ねえ、と黒装束たちが去っていく。

味方、でいいのかな？ 謎ばつかだけけどそう思いたいな。

ん？ なんだよ槍の勇者、あんたもなんか文句あんの？

「今回は引き下がるが、次は負けないからな」

「あつそ、さつさといけよ」

「せいぜい首を洗って待っておけ！」

ああ、単に負け惜しみを言いたかっただけか。

こいつは今回、そう腹が立ったわけじゃないけど……こういう態度ならなんか意趣返しをしておきたいな。

あ、リュウガが忍び足で近づいていく。

「おい、後ろにフィーロがいるぞ」

「ひいっ!!」

ビクツ、と震え上がった槍の勇者が、内股になりながら逃げていく。

なんとも滑稽な格好の円柱が引き上げていくのを見て、リュウガがものすごく清々しそうな笑みを浮かべてるのが見えた。

……あいつの気も、これでちよつとは晴れたかな。

Side：Raphalia

「まったく、どこ行っても迷惑かけやがるあいつら……」

「本当ですね……」

いなくなつた槍の勇者様や兵士の方々のことを思い出し、ナオフミ様がため息をつきます。

本当に……どうしてこうナオフミ様を苦しめるのでしょうか。

「ああ、本当にありがとうございますー」

「そういうのはもうはい……で、礼のことだが」

慌ててお礼を言いに来る村長さんに、ナオフミ様が切り出します。



ああ、そうでした……レースに応じたのはそれが理由の一つでしたね。

ですがナオフミ様は、村長さんに思いがけない答えを返しました。「言っておくが金は求めない。復興費を削ったらあいつらと大差ないからな、他の価値があるものをよこせ」

ナオフミ様の言葉に、私は少し驚きます。ですが、すぐに安堵の笑みがかぼれました。

やっぱりこのかたは優しい方です。口調は厳しくても、人のためにどこまでも思いやれる真の勇者様です。

セントさんもリュウガちゃんも、私と同じように笑っていました。「…でしたら、こういうものはどうでしょう?」

そんなナオフミ様に、村長さんがある提案をしました。

「俺が…行商を?」

「ええ、聞けば勇者様は薬や素材を売っておられるとか。通商の手形を発行しますので、基本的にはどこの村でも商売ができるようになります。幸い勇者様には健脚のフィロリアルがいますし、時間はかかりませんが馬車もご用意します。今よりも楽に稼げるようになると思いますよ」

「なるほど……今まで生産側だったのが販売側にも回れるってことか」

これは…ナオフミ様にはうってつけの報酬かもしれません。

今まではどうしても、ナオフミ様の噂を知っていても迫害しない限られた方にしか売れなかった商品が、自分の手で販売できるようになるのですから。

それを聞いたナオフミ様はやがて、ニヤリと笑って答えました。

「なら、それをもらおう」

## フィロリアルの主

S i d e : R y u g a

あのうざったいレースから何日か経って……商人として旅をしなから、レベルを上げる毎日が始まった。

そしてその最中に少しずつだけど、セントが講師をやる文字の勉強も始まった。教室は宿じやなくて、フィーロのいる厩舎だけだな。

「…これで合ってるか？」

「おう、上出来だ」

ナオフミがちよっと形がいびつな文が書かれた紙を見せて、セントが満足そうにうなずく。

こういう時、セントの頭の良さがとんでもなく羨ましくなる。ちよいちよいうざいのが玉に瑕だけだな。

「これで文字も読めれば楽なんだがなあ……」

「あまり武器に頼るのもよくありませんよ？」

「そうだぞく、もしかしたらなんらかの力で聖武器が封じられて、翻訳機能が効かなくなったりするかもしれないぞく」

「なんだその具体的なもしかしては……」

何だそれ？ 未来予知かなにかか？

そのうちホントになりそうで怖いんだが……。

「で、リュウガの方はどうなんだ？」

「ダメだこいつ。簡単な文字しか覚えられねえでやんの」

「悪かったな！」

オレを引き合いに出すな!! こういうのは根本的に向いてないんだよ!!

そりゃあ……読めるに越したことはないけど！

でも人には向き不向きがあるんだよ!!

「さ、さして、勉強はこのくらいにしておいて、明日に備えてもう寝ちまうか！ 明日も頑張らねえとな！」

「お前……いや、そうだな……さすがに疲れた」

オレが思いつきり目を逸らして言うと、ナオフミも同意して手を止

める。

その時めっちゃくちや呆れた目を向けてた気がするけど気のせいだ！ 絶対に気のせいだ!!

ナオフミが眠そうに宿に戻ろうとした時、セントがニヤケ面を向け出した。

「なんだったらオレが添い寝してあげてもいいんだぜ!」

「いらねえ」

「セントさん、あなた疲れてるんですよ」

「なんか冷たいよ二人とも!」

いつもはナオフミの口の荒さを諷めるラフタリアも、冷めた目でセントを見てやがる。疲れてんだな、二人とも……。

「えー、まだ眠くねえよー。もうちつとなんか会話しようぜ」

「めんどい」

「私ももう眠たいです……」

そういや、さっさと読めるようになって新しい調合や、魔法を覚えたいって詰め込んでみたいだしな。

オレはまだそれどころじゃないけど……よくやるぜ。

「グアー……」

「なんだよ……お前体温高いんだよ、あっちいな」

ナオフミ達が立ち上がろうとすると、フィーロがすりすり寄ってきた。

何だ、じやりたいのか？ そう思っていると、なんかムツとした顔

のラフタリアがナオフミの反対側の腕に抱きついた。

……何やってんだ、お前ら？

「何やってんだお前ら……」

「……いえ、別に」

「グアー!」

なんかこいつら、ナオフミを挟んでバチバチ火花を散らせてる。

チツ、見せつけやがって。

「いや〜なんだか熱うございますなありユウガさんや! とくにこのお三方は!」

「うるせえ」

「……誰もツツコンでくれなくてお姉さんさみしい」

関わるのが面倒くさくて、からんでくるセントを適当に追っ払う。

お前…自分でお姉さんっていうわりにはおばさん臭く感じるぞ。

黙ってりや顔は良いのに、口を開いた瞬間残念になるな。

「グアー」

「…こいつもさみしいんじゃねえの？ まだ生まれて数日経ってねえんだし」

「そうかもしれないですね…」

そう言えば、こいつ赤んぼとおんなじなんだっけ。成長速度が異常すぎて完全に忘れてた。

そりやあまあ…一人で寝るのはいやだわな。オレは物心ついた時には一人で寝てたけど、それでもやっぱ寂しくはあった。

「…んじゃあ、オレはここで寝るかな」

「ん？」

「四人もおんなじ部屋で寝たら狭そうだし、でかい部屋借りるのも金かかるだろ？ 節約せつやく」

セントがそう言って、適当な干し草を集めてベッドを作り始める。

…こいつアホっぽいけど、なんだかんだお人好しなんだよな。聞けば、ナオフミに信頼させるために、自分から奴隷になったって聞くし。

……くそ、しょうがねえな。

「だったらオレもここがいい」

「お、マジ？ だったらしばらく話すか。ガールズトークしようぜ」

「うるせえっての…」

隣の奴がうざったいけど、自分で言い出した手前なかったことにもできない。

つーかセント、多分だけどオレもナオフミもお前のこと、女だと思ってると思うぞ、性格的に。

ふて寝気味に横になると、ナオフミの奴ため息交じりにその場にまた腰を下ろした。

「…俺たちもしばらくここにいます。フィー口とリュウガが寝たら宿に

戻るがな」

おい！　なんかナチュラルに子供扱いしてねえか!?

そう抗議したかったけど、最近けっこう働きづめだったせいかすぐに瞼が重くなってきた。

「…まあ、いいか」

干し草って意外とあつたけえ…：そんな事を思いながら。

オレの意識は、スーツと遠くなっていた。

S i d e : S e n t o

「…ん、ああ。朝か…」

チュンチュン、と鳥のさえずりが聞こえて、オレの目が覚める。

姿勢が悪かったせいで若干体が痛いけど、まあまあぐつすり眠れたな。

「意外とぐつすり寝れるもんだな、厩舎って…」

「ぐおー…」

隣ではリュウガが爆睡してる。涎まで垂らして幸せそうに。

こういうところは、年相応に見えてかわいく見えるんだけどな。普段が荒っぽすぎるんだよ、こいつは。

「クエー！」

「おーおー、フィーロちゃんは朝から元気だねえ…：…つて」

なんか前とちよつと違う鳴き声を上げるフィーロちゃんに挨拶しようとして…：オレの動きが止まる。

え、ちよつと待ってちよつと待って。

え？　え!?

「…！　…!？」

「いだっ…：いだだ！　なんだ!?!　何しやがんだ!?!」

思わず眠りこけてるリュウガを思い切り叩き起こし、ぶるぶる震えながら指をさす。

すつげえ不機嫌そうに睨んできたリュウガだけど、オレと同じものを見て一瞬固まって、大きく目を見開いて口も前回になった。

「なっ、ななな、ナオフミ〜!!」

「なんじやこりやああああ!?!」

慌てて宿に向かい、ナオフミ達を引つ張り出しに行く。

厩舎に舞い戻ったナオフミとラフタリアちゃんは、さっきのオレ達と全く同じ反応を見せ、思い切り叫ぶのだった。

☒

「おや、これは盾の勇者様。本日はどう言ったご用件で…」

奴隷商のテントにずかずか入っていったナオフミは、奴隷商のあいさつもほとんど聞かずに詰め寄る。

壁ドン? 壁ドンすんのか?

…オレまだテンパってるな、やめよう。

「おい奴隷商。お前、俺に一体なんの卵を売った…?」

「ハイ?」

ナオフミに聞かれても、奴隷商は本気でわからない様子で首を傾げる。

マジか、こいつでもわかんなかったらもうお手上げだぞ。

「何を、と申されましても確かに勇者様にはフィロリアルのお渡ししたはずで…」

「これのどこがフィロリアルなんだよ!」

そう言つてナオフミが、オレたちの横に立っている巨大な鳥…立った一晩で横にも縦にも一回りは大きくなったファイロちゃんを示した。

案の定、奴隷商の奴もぽかんと呆けて、わなわたと震え始めた。

「こ、これは…! たった数日でここまで育てられるとはさすがは盾の勇者様で…」

「そういうのはいい! どういうことか説明をしろ!」

もう見た目からしてフィロリアルじゃないだろこれ。いや、途中まではちゃんとフィロリアルだったけど。

これでフィロリアルだって言われても絶対誰も信じないだろ!

あれ? フィロリアルって言いすぎてフィロリアルが何かわかんなくなってきた!?

「考えられる可能性としては…フィロリアルキングかクイーンかも

しれませんね」

「キング？ クイーン？」

「それってまさか…フィロリアルの主って伝説の？」

旅の途中、勇者の伝説について調べてた時に見た記憶がある。

自然界に存在するフィロリアルの中には、群れを統率する王や女王のような個体が存在するって。

でもそれは、あくまで伝説で信憑性はなかったような……。

「私もよく知らないんですよ。何せ伝説の存在ですし…」

「だよなあ…」

「くっそ…結局わからずじまいか」

わりかし謎が多いからなあ、フィロリアルって。

どういう進化を遂げてきたのかとか、何でドラゴンと仲悪いのかとか、挙げればきりがなくらいに出てくるしな。

「よろしければ詳しくお調べしても？」

「バラさなきやわからないとか言わなければな」

「クエ!？」

ナオフミがそう言うのと、フィーロちゃんがものすげえ狼狽えだした。

逃げようとしたけど、それより先に奴隷商の部下たちが拘束して連れて行ってしまふ。…出荷、という単語がオレの脳裏をよぎったけど、多分気のせいだな。

「クエーッ！ クエーッ!!」

「…ちよつとかわいそうじゃないか？」

「ああ…あんなんだけど、まだ生まれたばかりのヒナだぜ？」

「そうは言っても、わからないままではな…」

左右を屈強な男達に囲まれて、檻に連れていかれるフィーロちゃんの姿に、さすがにリユウガも同情の目を向けている。

その後、嫌がっているのか怒ったんばったん暴れる音が聞こえていたんだけど…。

「クエエエエ!!」

ひととき大きなフィーロちゃんの声が響き渡った、直後の事だっ

た。

ボフンツ、と何か変な音がして、辺りにうつすら煙が漂い始めたのに気がついた。

え？ 何？

「こっ、これは…!?!」

奴隷商たちが慄く声が聞こえてくる…つて、え？

さっきまでフィーロちゃんが入った檻の中に…翼が生えた、金髪碧眼の美少女が入っていた。全裸で。

「ごしゅじんさま…!」

「なっ…なんじゃそらあああああ!!?!」

本日二回目のオレ達の絶叫が、どこまでもどこまでも響き渡った。



## 魔法の服

S i d e : R a p h t a l i a

「おやつさああああああああん!!」

私達の前を、ナオフミ様とセントさんがものすごい速さで走りま  
す。そして、武器屋の親父さんの店に思い切り飛び込みました。

お二人とも……! お気持ちわかりますが落ち着いて下さい!

「なんだよセントの嬢ちゃん……俺はこれから晩飯だつてのに」

「取り込み中ごめん! でもむっちゃ大事な用があるから!!」

セントさんが謝りながら、リュウガちゃんとナオフミ様が抱えたそ  
の子を見せます。

ナオフミ様のマントでくるんで肌を隠した、金の髪と青い瞳を持つ  
女の子を。

「……うっす」

「……しゅじんさま、このおじさんだあれ……?」

少し居心地悪そうにリュウガちゃんは会釈し、金髪の女の子は親父  
さんを指さして首を傾げます。

……そのしぐさにはとても見覚えがあります。ですが、この子がそう  
だとはいまだに信じられません。

「ちよつと黙つてろ……!」

「アンちゃん……いい奴隷が手に入ったからって自慢すんなよな」

「違うつての!!」

親父さんが呆れますが、すかさずナオフミ様が否定します。

すると、あの子がクンクンと鼻を鳴らし、親父さんが持っていたサ  
ンドイッチに興味を示し始めました。

「それごはん……?」

「ん? 一口食うかい?」

「いいの!?! わあ……いい!」

「いやあの……やめたほうがいいと思うんだが」

「いやあ、子供一口くらい構わねえよ」

あの……本当にやめた方が。

そう止めようとはしましたが、親父さんはあの娘にサンドイッチを差し出します、そして。

「いったただつきまゝす!」

ボフンツと音を立てて、あの子…フイロが煙に包まれます。

そして一瞬にして一回りも二回りも大きくなり…フイロリアルクイーンの姿に変わり、親父さんの晩御飯をぺろりと平らげてしまいました。

「ん、味はイマイチ」

「…だから言ったのに」

「…すまん親父。あとで何か奢らせてくれ」

絶句する親父さんに、ナオフミ様とセントさんが頭を下げます。

そうですね、いきなりこんなものを見せられたらこんな反応にもなりますよね。私達も正直まだ、自分の正気を疑っているんです。

「こ、これは一体どういう…!?!」

「…話せば長くなるんだが」

わなわなと目を見開く親父さんに、ナオフミ様が一から説明していきます。

魔物のくじで買ったフィロリアルが特殊な育ち方をし、拳句に翼の生えた女の子の姿に変身するようになったこと。

同時に、新たに奴隷として加わったりユウガちゃんの事も説明なきしました。

そこまで聞いて親父さんは、ナオフミ様にひどく疑問に満ちた目を向けました。

「…それでなんで俺の店に?」

「変身しても破けない服とかはないか!?!」

「縫っても縫ってもこの子簡単に破っちゃうんだよ!!」

「ナオフミ、セント、ここ武器屋」

焦った様子で尋ねるお二人に、呆れた様子のリュウガちゃんが指摘を入れます。途中まで私も忘れてましたが、相談するお店を間違っていますね…。

と思いましたが、親父さんは呆れながらも何か考えて下さいまし

た。

「流石にウチの店にはねえが……そういうのに心当たりありそうなやつなら知ってるぜ」

「そうねえ……あるわよ、そういうの」

親父さんの紹介で、私達は再び魔法屋のおばあさんの元を訪ねました。

なるほど……そういう特殊な品なら、確かに魔法の出番です。

「自分の魔力を糸にして服を作るの。そうすれば変身したときに自分の体内に魔力が戻るから、破いたりしないわ」

「へえ……そういうのがあるのか」

私達のパーティーには、まだ魔法が使える者はあまりいません。

セントさんも知識があり、ご自分の発明に使ってはいますが、分野が違うのか今回は役に立たないとのことでした。

「服飾については、近くにそういう店があるからそこに任せようぜ。顔見知りなんだ」

「ならそいつを頼るか……」

そう言えば、私が急成長した際にお世話になったお店がありましたね。セントさんに連れて行ってもらったのを覚えています。

ですが魔法屋さんは、お店の奥の方を見やって難しそうな顔を見せました。

「ただねえ……糸を作るのに必要な道具が壊れててねえ」

「……ああ、あれ？」

「そう、一番重要な宝石が割れちゃったの」

魔法屋さんはそう言っ、お店の奥においてある糸車を見せます。

糸を集める輪の中心に、確かに割れた宝石が嵌っているのが見えます。以前の波の騒動のせいだそうです。

「今すぐには手に入らないのか？」

「少し離れたところにある洞窟で採れるんだけど、最近魔物が住み着いたって噂でね」

「……こないだの坑道みたいな感じか」

以前はそうではなかったのが、波の影響で気軽に行けなくなってしまうたという事ですね。

それを聞くと、セントさんの顔がやる気に満ち溢れました。

「うっし、ならちやっちやと行って採ってくるか！」

はい！ 何故かフィーロも魔物の姿に戻ってくれなくなりましたし、女の子をいつまでも裸のままにはさせておけませんね！

いろんな意味で!!

S i d e : S e n t o

「おええええ…！」

「おろろろ…！」

オレの目の前で、ラフタリアちゃんとリユウガが吐き気を催して呻き声をあげている。今にも、美少女二人がとんでもない無様を晒しそうだ。

途中まで我慢してたけど、やっぱり無理だったか…：フィーロちゃん、思い切り馬車をかつ飛ばしてたからな。

「どうどうダウンしちゃったかー、めったくそこに揺れたもんなー」

「ず、ずびばぜん…」

「ち、ちくしよう…」

かくいうオレも若干気分が悪い。魔法屋もちよつと苦しそう。

で、なんでかナオフミは平然としてんだよな。どういう体質なんだ？ 勇者としての力か？

今度調べよ。

「しようがない。オレたちだけで行くか」

「ああ、意外に狭そうだし、多人数で行く必要もないだろう」

「い、いえ！ 私も一緒に…！」

馬車に二人を置いて行くこうしたら、ラフタリアちゃんが慌てて起き上がるとうする。

おい、やめとけ。リバースすつから、オレたちも迷惑だから。

「その状態で来られても足手まといだ。いいから休んでおけ」

「はい……うぷ」

がつくりと項垂れて、ラフタリアちゃんが素直に引っ込む。  
リュウガはその横で思い切りぶちまけていた。何をとは言わない  
が。

「わー！ あー！」

例の洞窟の中に入ると、響く音がおもしろいのかフィーロちゃんが  
声を上げて遊んでいる。ちなみに、馬車を引く際に魔物姿に戻って  
くれた。

「ごしゅじんさまー、ここすつごくこえがひびくよ〜」

「あー、そうだな」

…おいナオフミ、正体はともかく小さな女の子なのは確かなんだか  
ら、ちゃんと相手してやれよ。

だがナオフミは、この妙に造りがしつかりした通路の方が気になる  
らしい。

「ここってなんの遺跡なんだ？」

「大昔の錬金術師が使っていたそうよ。危険なものも多いんだって」

「ふーん…」

大昔の科学者か…会えるもんなら話をしてみたかったな。

ん？ なんか通路の途中に妙な空間が…って、あ。

「…あ、もしかしてあれが発明ってやつ？」

何かへんな部屋ができていて、その真ん中に台座が置かれてる。

そんでその上に…空っぽの宝箱みたいなのが置かれていた。

「空だな」

「もうすでに盗掘されたってことだろう」

「なんでえ」

見て見たかったのと思うけど、先を越されたんなら仕方ない。

あ、隣になんか注意書きみたいなのが残ってる。…小難しい書き方  
されてるけど、これは要するに気軽に手を出さなって意味だな。

「…触らぬ神に祟りなしってあれだな。さっさと行っちゃおう」

「ああ」

「そうね」

「はい」

たいして気に止めることもなく、オレ達はその部屋を後にする。  
そんでまた暗い道をしばらく進んでた時だった。  
その声が聞こえてきたのは。

「しかし本当に暗いな…」

『そうだな…ここならお前を始末しても誰も気づかない』

ふっ、とオレ達が持っていた松明が急に消える。

そして次の瞬間、オレの肩にザクつと小さな何かが突き刺さる感触がした。

「なんだあ!?!」

『馬鹿なウサギ…俺が本気でお前を仲間だと思おうわけねえだろ』

「ああん!?!」

暗闇の中で、悪意に満ちた声が聞こえてくる。

これは…：ナオフミの声!?!

『今のお前なら、結構な金になりそうだよなあ!』

真つ暗闇の中で、オレを嘲笑う声とともにひゅつと何かが近づいてくる音がする。

…：なるほど。なるほどなるほど。

「うるせえ!!」

オレは思い切り怒鳴りながら、近付いてくる何かを思い切り蹴り飛ばす。

思った通りナオフミじゃない。ナオフミにしては小さすぎるし、声も微妙に違う!!

本物の気配は…：こっちだ!

「ナオフミ、大丈夫か!?!」

「セントか! そっちにいたのか…」

「その様子じゃ、お前も嫌なもん見せられてたみたいだな」

ものすげえげんなりした顔してる…おい、そっちでオレは何言ってた?

すっげえ気になるけど、聞いたら聞いたですっげえ気分悪くなりそうだな。

「やはりこれは…」

「やー！ ごしゅじんさま、フィーロのこと捨てないでー!!」  
「ぶっー！」

あ、フィーロちゃんが泣きながらナオフミに抱きついた。それでナオフミがもふもふの中に捕まった。

何？ お前はいくらで売れるかなって言われた？

流石にナオフミはそんな事言わないだろ……言わないよね、うん。

「待ってて……『ファスト・アンチバインド』！」

すると、魔法屋が魔法を使っつて、オレたちを襲っていた暗闇を吹き飛ばした。

そんでその後には、何体もの魔物が表れて右往左往し始めた。全部なんか、音に関わりそうな器官が生えてる種類の奴だ。

「ゴイツらの仕業か……！」

「ここの魔物は人の声をマネて、疑心暗鬼に陥らせるのよ。よく引つかからなかったわね」

「……昔のゲームに似たような展開があつてな」

「むー！ ご主人様に捨てられるかもつてホントに怖かったのに！」

騙されてたことを知って、フィーロちゃんが憤り始めた。

いいぞ……オレもイヤなこといっぱい聞かされたから、一緒に暴れてやろうぜ！

「いっけー、フィーロちゃん！ 片っ端から狩り尽くしてやれ!!」

「おー!!」

「素材の分は残しておけよー」

「はーい！」

この後めちやくちや魔物狩りした！

## 洞窟の魔物

S i d e : F i l l o

フィーロだよ！

「ごしゅじんさまの声でいっぱいいいじわるなこと言ってきた敵をやっつけて、大まんぞく！」

でもいっぱいうごいたから、すっごいおなかすいたよ。

「解放できる盾は……あまり役に立ちそうにないな」

「ごしゅじんさまはやっつけた魔物をあのふしぎな盾にすいこませ、むずかしそうな顔してる。ああやっつてつよくなるんだって。

…もういつこくくらいは、食べてもいいよね？」

「オレは新しいボトルゲット♪」

「それは…マイクか？ 見た感じコイツらメガホンとか拡声器っぽいんだけどな」

「音に関する力ってことだろ。はやく試してみたいな」

お耳が長い、セントお姉ちゃんもふしぎな入れ物をもってはしゃいでる。

中にジューズみたいなのが入ってて、フィーロにはすぐくおいしそうに見える。でもそれ言ったらにげられちゃった。

ちよつとシヨボンってしたら、何かきこえてきた。

「ごしゅじんさまー、なにかあっちにいるよ？」

「ん？ どれどれ？」

むー、ごしゅじんさまに言ったのにどうしてセントお姉ちゃんが出てくるのー!?

フィーロがもんくを言ってるうちに、ごしゅじんさまはその音がしたほうに歩いてく。それで、洞くつのおくに何かがあるのを見つけたよ。

「あれは…又エね」

「又エ？」

「東方に生息しているキメラの一種よ。どうしてこんなところに…」

「この間の波で紛れてきたとか…？」



何かへんな、いろんな魔物がくつついてるみたいなの魔物を見つけ  
て、ごしゅじんさまたちがむずかしそうなの話してる。

そんなことしてるばあいじゃないと思うけどな。

しよーがない、フィーロががんばっちゃうぞ！

「見た感じレベルも高そうだし、できれば避けて行きたいが…」

「とー！」

ごしゅじんさまにかわって、フィーロがああ魔物をけりに行く。

でもすぐによけられて、ものすごくうなられた。むー！

「フィーロちゃん!？」

「あのかか!!」

ごしゅじんさまとセントお姉ちゃんがあわててフィーロのところ  
にくる。

そしたら、又エって言われてた魔物がさつきよりすごく吠えだ  
した。

わっ！　なんかバチバチしだしたよ！

「キシヤアアア!!」

「下がれ、フィーロ！」

ごしゅじんさまに言われて、フィーロは後ろに下がった。

そしたらああ魔物、バチバチって音をたててすごいピカピカし  
だしたの。びっくりした！

「変身！」

【鋼のムーンサルト！　ラビットタンク！　イエー！】

セントお姉ちゃんがそう言って何かぐるぐるすると、へんな声  
がきこえて赤色と青色の変な格好になっちゃった。

わー、なんかすっごーい！

「まったく…！　お前のせいで気づかれたらどうが！」

「えー？　でもあいつ、ずっと前から聞こえてたみたいだよ？」

「なに？」

ずっとあつちむいてたけど、ごしゅじんさまたちには気がついて  
たみたい。

それでごしゅじんさまが近づいてくるのをまっぴたみだつた

よ？

「ごこつてすごく音が響くしー、あいつすごく耳がいいみたいだから！」

「そんなことわかるのか…？」

「まあ…同じ魔物だから通じるものがあるのかもな」

フィーロがはなしたら、ごしゅじんさまもセントお姉ちゃんも、おばさんもまたはなしはじめちゃった。

むー、なかまはずれはやー！

「だったら作戦は決まりだな」

「ああ…とびきりでかいのを食らわせてやる」

セントお姉ちゃんがそう言って、さっきとはちがう入れ物をもってシヤカシヤカふりだした。

またちがう色の格好になるのかな？

「新しい組み合わせ、試してみるか！」

【ドッグ！】【マイク！】

フィーロずっと思ってたんだけど、この声の人だれだろう？

でもだれもフィーロのきもんにこたえてくれなくて、お姉ちゃんはまたぐるぐるやりはじめた。

【ベストマッチ！】

「都合よすぎだろ！」

「きたきたきた〜!!」

こうふんしたお姉ちゃんがぐるぐるをつづけると、お姉ちゃんのみわりにいっぱい柱みたいなのができてく。

そんでさつきみたいに、ちがう色の服みたいのがつくられた。

【Are you ready?】

「ビルドアップ！」

【癒しの 大爆音！ ドッグ！ マイク！ イエイ！】

セントお姉ちゃんがそのへんなのはさままれて、また格好が変わる。

ぶしゅーってけむりみたいのが出て、さっきのおじさんの声がうるさいくらいにひびく。

さつきからコレ、どういう意味なのかな？

「魔法屋！ 耳をふさげ！」

「わかったわ！」

「フィーロ！ コイツに向かって思いっきり叫べ！」

「ごしゅじんさまが耳をふさぎながら、フィーロに形がかわった盾をさしだしてくる。

でばん？ フィーロのでばん？

「これにー？」

「そうだ！ 思いつきりだ！」

「わかったー！ すうく…」

フィーロ、ごしゅじんさまのためならがんばるよ！

となりでセントお姉ちゃんも、じぶんの左手にむかつていっぱいきをすいこんでる。

フィーロたちはがんばって、いっしょに思いきり声をだした。

「わあああああああ!!!」

「わおおおおおおおん!!!」

ぐわあっ!! って、ごしゅじんさまの盾とセントお姉ちゃんの左手からすっごい音がでる。

そしたらあの魔物、耳から血をだして苦しみだしたの。耳がよすぎてやぶけちやっただね！

「今だ！」

『『ファスト・ファイアブラスト』！』

「ごしゅじんさまのあいずで、おばさんが魔物に向かっておつきな火の玉をぶつける。

フィーロもまけない！ とどめはフィーロがさしちゃうもんね！

【Ready Go! ボルテックファイニッシュ！】

「勝利の法則は、決まった！」

「てえええええい!!」

フィーロといっしょに、セントお姉ちゃんも思いきりとぶ。お姉ちゃんはなんか、犬の形をした光をからだにくっつけてる。

それでくろこげになった魔物に、いっちばんつよいひつきつキツク

をおみまいしてやったよ!!

「イエーイ!!」

ぐちゃっ、つてちよつとイヤなかんしよくがしたけど、これで魔物はやっつとやっつけた。

思わずフィーロ、セントお姉ちゃんとハイタッチまでしちゃった。そしたらごしゅじんさまも、フィーロのあたまをよしよしってなでてくれたの。

「よくやったぞ、お前ら」

「えへへ〜」

ごしゅじんさまにほめられて、フィーロすっごいいい気分!

あとごしゅじんさまになでられると、セントお姉ちゃんやラフタリアお姉ちゃんになでられるのより気持ちいいんだよね〜。

その後なんだけど、フィーロたちはものすごくいい景色を見つけたよ。

「わー…」

「すっげえ…!」

そこはね、えつと…すごくキラキラしてたの。

上を見てもどこを見てもキラキラがいっぱいで、なんにも言えなくなっちゃった。

あの魔物、こんなにいいものをひとじめしてたなんてズルーい!!

「…ラフタリアにも見せてやりたかったな」

「またいつか連れてくりやいいさ」

「…そうだな」

セントお姉ちゃんとそんなことをはなして、ごしゅじんさまがちよつと笑ってる。

…よかった。ごしゅじんさまがうれしそうで。

Side: Naofumi

「ホラ頑張れ頑張れ」

セントの応援に合わせて糸車が回り、長く輝く糸が作られていく。それを回し続けるフィーロは、すでに飽きた様子でつまらなそうに

唇を尖らせていた。

「むー、これつまんなーい」

「お前の服を作るための大事な作業だ。我慢しろ」

「ぶー」

仕方ないだろ、こればかりは自分で魔力を出さなきゃならないんだから。

だがまあ、フィーロぐらいの幼い子供にこういう単純作業は苦痛だろう。完成するまで我慢してもらおうほかにない。

「…あの洞窟に置かれてた箱、結局なんだったんだろうな」

「さあな…すでに盗掘された後らしいし、調べる必要もないだろ」

「そうかねえ…」

セントが難しそうな顔をしているが、ぶっちゃけあんまり余計なものまで背負いたくない。絶対にああいうのは厄介事に巻き込まれるだろうからな。

そんな会話をしてるうちに、フィーロが回していた糸車が止まった。

「あー！ もーやつと終わったー！」

「はい、お疲れ様」

できた糸を集め、魔法屋がフィーロを労わる。

ふむ…あれが今後、フィーロの衣服になるのか。それまで今借りてる分をダメにしないように気をつけないな。

「これで糸は十分だから、あとは裁縫屋さんのお仕事ね。それまで少し待ってて」

「どのくらいでできそうだ？」

「そうねえ…2日か3日はかかるんじゃないかしら？」

それまではお預けという事か、さてどうなることやら…。

そして、その少しあとの事だ。

後日訪れた裁縫屋で俺たちは、綺麗に着飾ったフィーロのお披露目をする事となった。

「わあ〜！ きれーい！」

喜ぶフィーロの言うように、白と青に彩られたドレスのような服は、フィーロの瞳の色と相まっていて実に似合っている。

高い買い物にふさわしい出来だな。

「おお、これぞ天使って感じだな」

「可愛いですよ、フィーロ」

「ごしゅじんさま、どう？ どう？」

「ああ、いいと思うぞ」

「えへへ」

俺が褒めると、フィーロも嬉しそうに目を細める。

その横で、目の下にぶつといクマを残した若い女……裁縫屋の主人が興奮した様子で鼻息を荒くしていた。

「久々に可愛い子の仕事ができで大満足でした！ こちらこそありがとうございます！」

「助かったよ、ありがとう」

そう言えば面識があったのか、セントが親し気に裁縫屋に感謝を伝えている。

ラフタリアの服をしつらえてくれてたんだっけか……あとで俺からも礼を言っておかないとな。

「しっかし、まさか一晩で終わらせるとは……ってか大丈夫か？ やつれてない？」

「インスピレーションに促されるままやっちゃいました！ いまにも倒れそうですが私は決して後悔していません!!」

「そ、そうか……」

なんかこう言う奴見た事あるな。どこぞのイベントの売り子とかで。

どこの世界にもいるんだなあ、こういう趣味に命を懸ける奴。

「立て替えてくれてありがとな、おやつさん」

「ま、兄ちゃん達はお得意様だからよ。これぐらい軽いもんさ」

いろいろと世話を焼いてくれた親父が豪快に笑う。まったく、この世界に来てからずっと、こいつには頭が上がらないな。

だがすぐに親父の奴、俺に若干ジト目を向けてきやがった。

「……それと俺の飯」

「ああ…はいはい、わかってるよ」

「まったく…言われなくてもわかってるっての。」

この後急遽バーベキューの用意をしたんだが、親父はぶつぶつ文句を言いつつ好評だったと、ここには記しておこう。

## 奇跡の種

S i d e : R a p h t a l i a

「来るんじゃないかった!」

周りの惨状を睨みながら、ナオフミ様が叫びます。

私自身、そのお言葉にはものすごく同意しますが、今はそれどころではないので我慢して下さい!!

「うるせえ! 黙って働け!!」

「わめいたって今更だぜナオフミ!」

「叫びたくもなるだろうが! この惨状全部……元康の馬鹿のせいだっつてんだからな!!」

そう怒りをあらわになさるナオフミ様は、次々に向かってくる樹の根を防ぎます。

そう、私達が今いるのは、異常な繁殖を遂げた異形の植物の中。町を一つ丸々呑み込んだ、とんでもない惨状の中にいるのです。

「まさか前回見つけた箱の中身がここできいてくるとは……」

「でもこの実、おいしいねー」

「お前はなにのんきに食ってんだ! オレにもよこせ!!」

「食べるんですね……」

私は馬車酔いで倒れていたのだから知らないのですが、ナオフミ様とセントさん、フィーロはこの状況を生み出した存在に心当たりがあるようです。

フィーロ……見慣れないものを何でも口にするのはやめて下さい。リュウガちゃんも!

「ん? おい、あれ見ろ!」

その時、セントさんの声で、私達はあるものに気がつきます。

あれは……町の子供の男の子でしょうか? しかも体に植物の一部が同化し、苦しそうな顔をしています!

「こいつ……寄生能力もあるのか」

「あれ効くかな? 前に一緒に作った除草剤」

「やってみるか……一応飲めるし」



以前、ナオフミ様とセントさんが作った除草剤を取り出し、ふたを開けて男の子に飲ませます。

すると、寄生していた植物はあつという間に枯れ、男の子の顔色が見る見るうちに良くなっていききました。

「おお、きいたきいた」

「結構な効能だな…」

「すごい…あ、ありがとうございますー！」

驚きもありましたが、ひとまず男の子が助かったことにホッと安堵します。

本当はこれを大量に届けるお仕事だったのですが…こんな形で使うことになるなんて。

「君、復活した直後で申し訳ないんだけどさ、村の人たちどこにいるかわかんない？ 注文の除草剤を渡したいんだけど」

「あ…はい、案内します」

セントさんに問われ、歩けるくらいに回復した男の子が歩き出します。

植物の広まる勢いは脅威ですが、まずはこの子の安全も確保しましょうとね。

「さー、お薬だよー」

セントさんと一緒に、町のはずれにできていた避難所に集まった人々に除草剤と薬を配っていきます。

まさか町の人達も、こんなことになるとは夢にも思わなかったでしょうね…。

「遥々ありがとうございますー！」

「ああ、しかしとんでもないことになってるな」

「ええ…槍の勇者様が奇跡のタネを持ってきてくださったときは、一時村も潤ったのですが…。」

町長らしき人が、後悔を滲ませながら話し始めました。

何でも以前のこの町は、飢饉に苦しむ酷いところだったようです。日照りで不作が続き、毎日何人も人が亡くなっていたとか。

そんな時に現れた槍の勇者様は、確かに救世主だったのでしよう……始めのうちはですが。

「昔の錬金術師も余計なことしてくれたもんだ……」

「だから封印したんだろうけど」

やれやれと肩を竦めるセントさんに、思わず苦笑してしまいます。

その時、避難所にできた高い壁の向こうから突然、つんぎくような悲鳴が聞こえてきました。

「……今なんかものすごい嫌な声聞こえなかったか？」

「村に来ていた冒険者でしょう。レベル上げに向かったようですが、あの様子では……」

襲われ、返り討ちに遭った……と。

先ほどの私達も、かなり危うい状況でした。まだレベルの低い冒険者さんが甘く見たまま挑んだなら……結果は目に見えていますね。

そう思っていると、不意に私達の頭上に影が差しました。

「ただいまー」

「つたく！ 余計な手間かけさせやがって！」

ズシン、と私達の目の前に、数人の冒険者の方々を抱えたフィーロとリユウガちゃんが登場しました。

いないと思ったら、助けに行ってたんですね。それにしても……多いですね。

「結構な人数拾ってきたな」

「一応これで全部だ、多分な」

「この人たちこんな弱いのに行くなんて、ばかだね」

人型になれるようになり、よくしゃべるようにもなったフィーロがそんなきつい言葉を吐きます。まったく……二人とも可愛らしいのに口が悪いんだから。

すると私達のやり取りを見ていた町の方々が、フィーロを見て慄いた様子を見せました。

「しゃ……喋る鳥……神鳥様!? ということはある様は……聖人様でしようか!?!」

「違う！ そんなもんになった覚えはない!!」

いきなり聞いたことのない敬称で呼ばれて、ナオフミ様が目を吊り上げています。

まあ、勇者扱いもされないのに聖人と呼ばれるのは、微妙な気分ですよね。

「お願いです聖人様!! 村をお救いください!!」

「何で俺がそんなこと…!!」

「謝礼はできる限りのことはいたします! ですからどうか…どうか!」

とんでもなくいやそうな表情でナオフミ様は渋ります。

ですがそんな必死な懇願を、この方が放っておけるはずもないのですよね。

大きなため息をつき、踵を返すナオフミ様に、私達は思わず苦笑を浮かべていました。

Side: Naofumi

「ハリネズミー!」【マイク!】

「そいやっさ!」

セントの左手から鋭い針が放たれる。それは右手のマイクによる音の振動で切れ味を増し、襲ってくる植物のつるを一方的に斬り裂いていった。

その近くでは、腕に青い炎を纏ったりユウガが拳を振るい、樹の根を力任せに引きちぎっている。

「オラア!!」

青い炎で焼かれ、黒焦げになった樹がバキバキと倒れていく。

だがすぐに別の枝が伸びてバリケードのようになり、町はまた元の状態に戻ってしまった。

「チツ…! 次から次へときりがねえ!」

「バラバラになるな! 囲まれたら数の暴力で潰されるぞ!」

「クソ!」

次から次へとマジでうつとうしい…!

つい了承してしまったが、ここまで厄介だとわかってたら絶対引き

受けなかったのに！

なんで俺があバカの元康の尻拭いをせねばならないんだ!!

「だったらこの組み合わせだ!」

【ライオン!】【掃除機!】

機を見たセントが、ベルトに挿したフルボトルを入れ替える。

前々から持っている掃除機のフルボトルと、この間の波の魔物から採取したライオンのフルボトル。

それが刺さった瞬間、ベルトは光とともにいつものあの声を発した。

【ベストマッチ!】

「またかよ!」

なんでこう、窮地ごとにピンポイントで当たりが出るんだ!?

このベルト、状況をわかってて声出してるんじゃないだろうな!?

「行くぞ、ビルドアップ!」

【たてがみサイクロン! ライオンクリーナー! イエイ!】

俺のツツコミも無視し、セントは新しく作られた鎧をその身に纏う。

掃除機をついた左手に、獅子の顔を備えた右手を持つ、黄色と緑の鎧が強烈な蒸気を噴き上げて完成した。

「見よ! この吸引力を!」

【Ready Go!】

セントが左手の掃除機を、周囲の樹々に向けて構える。するとえげつなくらいの吸引が発動し、絡まっていたそれらを根こそぎ吸い込んでいく。

敵の全てを一点に集めながら、右手の獅子の口に光が集まった。

【ボルテックファイニッシュ!】

「おらあああ!!」

一塊になった樹の根や枝に、獅子の形をしたエネルギーが飛び出し、激突して大爆発を起こす!

あれだけ鬱陶しかった植物のバリケードが、あっという間に片づいた。なんかこう、清々しさを覚えるくらいだ。

「おーし、いつちよあがり…」

「おおおおお!!」

「はああああ!!」

一息ついたセントを追い越し、ラフタリアとリュウガが走り出していく。

二人が向かう先には、バリケードの向こうで町の中心に我が物顔で鎮座している、ひとときわ高く太い大樹の姿があった。

「ラフタリアちゃん!? リュウガ!」

セントが叫ぶが、二人は止まらない。

するとそれまで沈黙していた大樹が蠢き、目玉のような花を咲かせてラフタリアとリュウガを睨み、毒のような煙を吐き出した。

あいつ…もはや魔物化してやがるな!?

「うっ…!」

「くそっ!」

「先行しすぎだつてば!」

毒煙をもらに浴び、二人の動きが鈍くなる。リュウガのやつはともかく、ただでさえラフタリアは呼吸器系が弱いのに、あれでは戦闘能力も下がるだろう。

何をやってるんだ、こここのところのあいつらは!?

「たー!」

「ま、負けません!」

すぐさまファイロが飛び出し、迫ってきた枝を蹴りちぎる。それを見たラフタリアが、負けじと剣を握りなおした。

おいおい…なんかもう無茶苦茶だぞ。連携も何もあったものじゃない。

「あいつら…何張り合ってたんだ」

「もー、世話がやけるなー!」

思わず隣に近づいてきたセントとともに、がつくりと肩を落としてしまう。

最近のあいつらは何かおかしい…俺が守るべき場面で、先に飛び出して退こうとしない。どう見ても、焦っている。

「しようがねえ……さっさと片付けますか！」

「ああ！」

ここで立ち止まっても仕方がない。

あいつらが先走ろうが、それをしっかりと守ってやるのが俺の役目だと……そう思つて。

☒

「一体どうしたんだ、お前ら」

駆逐した植物の残骸……いや、魔物の死骸を探り、種かなんかを落としてまた再生しないようにしながら、俺は二人に呆れた目を向ける。

ラフタリアとリュウガは、それにぼつが悪そうな表情を浮かべた。

「無茶な攻撃ばかり……そう前にで続けられると守りきれないぞ」

「すみません……」

「…悪い」

首を竦める二人だが、やはり不満と物足りなさを抱いているように見えるのは、俺がひねくれてしまったせいなんだろうか。

どうしたものか、と思いながら集めた種を盾に入れ、現れた新しい項目に目を通した。

「ところで何やってんだ？」

「新しく出たスキルがあつてな……解放するのに時間がかかるんだ」

「ほほう……？」

俺の説明を聞いたセントの目が、キラーンと光る……あ。

しまった、最近ないからうっかりしていた!!

「だったらさっさと触らせろ!!」

「またか! 久々だなこのやりとり!」

「あー!ズルい! フィーロもご主人様とあそぶの!」

「セントさん! フィーロ!」

俺の盾に飛び掛かってくるセントが、女として浮かべちゃいけない顔になる。

それにフィーロまで加わって、俺の周りほとんどもない騒ぎになった。くそっ! いい加減に懲りろよバカウサギが!!

「…こんなこと、やってる場合じゃねえのに…！」  
俺達が騒ぐすぐ横で、そんな眩きをこぼすリュウガに、俺は最後まで  
で気付けずにいた。

## 新技披露

S i d e : S e n t o

ガタガタゴットン、馬車は行く。

始まってだいぶ経つ商人としての旅だけど、今は一人、同乗者が加わっていた。

「いやあ…まさか神鳥様の馬車に乗せていただけるとは!」

「…神鳥?」

途中の町で乗ってきた、見るからに身なりの良さそうなおつちゃんが親しげに話しかけてくる。…聞きなれない単語とともに。

えつと…神鳥っていうからには鳥で、うちにいる鳥といえば。

「…これが?」

「ええ! 各地で奇跡を起こす神の鳥ともつぱらの噂ですよ」

「へえ〜…」

奇跡…ああ、こないだの村とか、途中で人助けしたりとかのあれ?

ナオフミ、聖人って言われてるもんな。知らない間に噂が広まってたわけだ。

「よかったな、フィーロちゃん。神鳥って言われてるらしいぞ?」

「神の使いにしては口が悪いがな」

「あー、ひつどーい!」

ナオフミがぼそりと呟くと、フィーロちゃんが抗議の声を上げる。

そしたらおつちゃん、物すげえびつくりした顔でフィーロちゃんを見つめ出した。

やべ、うっかり喋りかけちゃった。

「なんと…! 話すことができるとは…」

「だからしゃべるなつつただろうが!」

「やー!」

「まあまあ…」

ナオフミが叱るけど、フィーロちゃんは普通に嫌がる。

何でか知らないけど、ナオフミのやつは生き物が喋ってるのが妙に気に入らないみたいなんだよな。



…と、それなりに和氣藹々としていたときだった。

「…全員、戦闘用意。前方に複数、敵を確認！」

「ちっ！」

オレの耳が、道の途中で息をひそめる複数の敵の音を捉える。

オレ達がすぐさま戦闘態勢に入った直後、左右の岩場から人相の悪い男達が飛び出してきた。

「おーっとそこまでえ！」

「命が惜しげりや、そのアクセサリー商と金目のもの全部差し出してもらおうぜ！」

「ひい…！」

「テンプレな言い回ししやがって…！」

これで盗賊！と言わんばかりの前置きをして、盗賊達がきつたない武器を突きつけてくる。

なんかこう、これだけ聞くとザコっぽく思えるから不思議だよな。

そんなことを考えつつ、ベルトを取り出そうとした時、ナオフミの前にラフタリアちゃんトリユウガが突っ込んでいった。

「行きます！」

「おらあ！」

「あっ!? おい待て！ またか!?!」

この間注意したばっかじゃん！ 役割があるって！

実力は十分あるからか、2人とも普通に善戦してる。が、それで安心だとは言い切れないのが現実だ。

「初っ端から飛ばしすぎだぜ！ 変身！」

【鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！】

オレは鎧をまとい、二人の元へ思い切り跳躍する。ついでに真下にいた盗賊の一人を蹴り飛ばしてやった。

弱い弱い！ そんなもんじゃ誰もオレを止められないぞ!!

割と圧倒してたように思えたけど、ある男の登場で自体は急変した。

「はあっ！」

「うらっ！」

「効くかよ、ふんっ！」

他より明らかに強そうな奴が、ラフタリアちゃんとリユウガの攻撃をいとも簡単に防いだ。

あいつまさか…クラスアップ済みか！

あんな奴に許可するなよ、この国の教会!!

「あいつ…妙に強いな」

「手加減は無用ってわけだ。だったらー！」

「ラビット！」【電車！】

「ビルドアップ！」

オレは片方のフルボトルを入れ替えて、新しい鎧を展開する。

うーん、ベストマッチじゃなかったか。残念。

「だらっしやあー！」

オレは右足で地面を滑るように素早く走り、盗賊達を攪乱する。ついでにその速度のまま、連中の顔面を殴りつけた。

おお！ このフルボトルの力は速いし酔いが少ないな！

あーでも、若干パワーが心もとないな。攻めきれないわ。

『力の根源たる私が命じる…！』

ん？ 少し後ろに下がったラフタリアちゃんの尻尾が膨れてる…。

おお！ 最近懸命に勉強してた魔法をついに！

「ファスト・ミラーージュ！」

そう叫んだ途端、ラフタリアちゃんの姿が蜃気楼のように消える。

それに驚く盗賊は、きよろきよろと辺りを見渡して…そして、いきなり死角から現れたラフタリアちゃんに斬られた。

なるほど…あれが光と闇の属性の力か。

「フィーロもやるよー！ はいくいっく！」

おお!? 今度はフィーロちゃんが高速移動で盗賊を蹴り飛ばした！

負けられないじゃないか！

「やるねフィーロちゃん！ じゃあ次は一緒にだ！」

「おー！」

「オレだって…！ おらああああ!!」

張り切るファイロちゃんの横で、リュウガが雄叫びをあげる。  
するとその両拳から、凄まじい勢いで青い炎が吹き上がった！  
てか燃えた!?

「龍炎拳!!」

炎を纏った拳を振るい、リュウガは盗賊達をボコボコにしていく。

あれは…魔法か？ 魔法なのか？

とりあえずまあ…全員何かしらのパワーアップを果たしたってわけだな。うん。

「この…!」

「悪いが手出しはさせねえよ!」

「なっ!?!」

割って入ろうとした腕利きの盗賊に、ナオフミが立ちふさがる。

そんで組みついて…ああそうか、このままやれってことか！ よっし任しとけ!

「いくぜ!」

「いくよ!」

「っしやあ!」

【Ready GO!】

ナオフミに動きを止められ、焦りを見せる腕利きの盗賊。

そんな奴に向けて、オレとリュウガの拳と、ファイロちゃんの俊足の蹴りが次々に決まっていく!

盗賊は白目を剥き、ズシンとその場に倒れた。

「いっちょあがりい!」

後に残ったのは、戦闘不能になった盗賊達が積み重なった、死屍累々の光景だった。

Side: Naofumi

「何とかなったな…まさかクラスアップ済みだったとは」

「クラスアップ?」

思わぬ襲撃をやり過ぎし、一息ついていたところにセントが何か呟く。

なんだ？ また何か俺が知らない重要情報か？

「クラスアップっていうのは…」

「ごしゅじんさまー、このおじさんたちどうするー？」

セントが説明しかけ、フイーロに邪魔される。

おいフイーロ…それはそれで重要だが、人が話してる邪魔すんな。セントのやつすげえ渋い顔してんだろうが。

…まあいい、クラスアップとやらは後回しだ。

「身ぐるみ剥いで兵士に突き出すか…」

「剥ぎ取りか、よしきた」

「…その言い方は生皮まで剥ぎそうだからやめとけ」

俺の決定に、リュウガがベキベキと拳を鳴らす。

…大丈夫だよな、お前龍っぽいからってこいつら食ったりしないよな。

金目のものをこっちが奪うだけだぞ。命はいらんぞ命は。

「へっ、神鳥の聖人のくせにやるのがせこいな！」

「別にそう名乗った覚えはない。何を言われようが気にならん」

単に金稼ぎと足が欲しかっただけなんだが、いつの間にか噂が一人歩きしてる感じだな。

勇者でも聖人でも、こんな面倒なやつらに絡まれるんじゃ同じだろうけど。

「な、まあ聖人様よ。見逃してくれよ、俺達が狙ってんのはそのアクセサリー商なんだからよ」

「…わかってないようだな」

考えてみれば、俺を嫌うこの国じゃ兵士に突き出したところで俺が疑われかねない。

こいつらもそれをわかっているのか、ニヤニヤと完全に俺をバカにして見ている……だが、そうはさせん。

「俺は、お前らを生かしておく必要はないんだぞ？」

にたあ…と俺はできる限り悪辣に笑ってみせる。すると連中、嫌な予感がしたのか顔を青ざめさせていった。

はっ！ いい顔できるじゃないか！

「ここらでフイーロに人の味を覚えさせてもいいかもなあ……！」  
「ひいひい!!」

「それが嫌なら大人しくしてな」  
悲鳴をあげる盗賊に、セントが俺に便乗するようにニヤリと笑みを浮かべる。

こういう時のお前は好ましいよ、普段は死ぬほどうざいがな。

「ついでだ、お前らのアジトの場所全部教えろ。溜め込んでるものま  
とめてもらっていく」

「はあ!? ふざけるな!!」

「それで命が助かるんだから安いもんだろ。それが嫌なら……」

「んー? ごはん?」

もう一度俺がフイーロに目をやると、フイーロがよだれを垂らして首をかしげる。

それ以降黙り込んだ連中を見下ろし、俺は満足げに笑うのだった。

…おい、ラフタリアもリュウガもそんな目で見るな。

☒

「いや、大漁大漁!」

「これではどちらが盗賊なのか……」

「それが生きるっていうことさ……!」

「カッコつけても全く感動しませんよ、セントさん」

盗賊のアジトから戦利品を押収し、俺たちは馬車に積み込んで行く。

ノリノリなセントにラフタリアとリュウガがツツコミを入れて  
いるが知らん。奴らの自業自得つてもんだ。

「まったく、お前のおかげで面倒な目にあっ……」

「素晴らしい!!」

この厄介ごとの原因であるアクセサリー商に文句を入れようとしたら、なぜか奴は感激した様子で俺に詰め寄ってくる。

な、なんだ。何にそんな衝撃を受けたんだ?

「殺さず生かし、絞れるだけ絞り財産を手に入れる手腕、感服しました  
!」

「お、おお!!」

「ただ奪うだけではない！ 次にまた連中が溜め込むことを見越して、その機会を待つ！ あなたのよう商人をずっと待っていたんです！」

マジでどうしたんだこいつ!? 俺は一体どんな奴を乗せてしまったんだ!?

最近俺のような貪欲さを持つ奴が少ないとか…いや、知るか!!

「お詫びと言ってはなんです、私の持つ商業ルートを斡旋いたしましょう！ そして秘蔵にしていた細工と魔力付与もお教えさせていただきます！」

「お、おいそこまでしなくても…」

「いーえ！ ぜひ教えさせていただきます!!」

むちやくちやグイグイきやがるこのアクセサリー商！

さっきの俺の行為の何がこいつの琴線に触れたんだ!? 全くわからん!!

「…なんかまた妙な奴に好かれちゃったな」

「ええ、本当に…」

ラフタリア達が呆れながら、どこか満足げに笑いあっている。

ほっこりしないで助けてくれ!!

## 竜の骸

S i d e : R y u g a

「はい、つーわけで反省会を始めます」

「ごごと揺れる馬車の中で、セントがオレ達全員を集めて話し始めた。」

「……いや、何だ？唐突に何言ってるんだお前？」

「いきなり何言ってるんだお前……」

「反省会……ですか？」

「色々突っ込みたいたらうけど、まあ待て……こっちも色々言いたいことがあるから」

じとつとした目で、セントはオレとラフタリアを見つめてくる。

ナオフミも似たような……若干咎めるような目を向けてくる。心当たりは……まあ、確かにあるけど。

「お題は主にお前ら二人な」

「うっ」

「ぐう……」

「自覚があるようで何よりだ」

議題は、最近の戦いについて。

ナオフミの防御を待つことなく、オレやラフタリアが先に飛び出して、かなり大暴れしていたことだろう。

わかっている……わかってただけだよ。

「リュウガが暴走しがちなのは今更だけど、最近ちよつと目立つよ？何をそんなに焦ってるんだ？」

「そんなつもりは……」

「守るのは俺の仕事だ。前に出て傷でもついたら、俺が辛いんだ。セオリーはちゃんと守ってくれ」

慰めるように言うナオフミ。

けどのその言葉は……オレの感情を逆撫でした。

「……そんな悠長なこと言ってるかよ……」

胸の奥にメラツと炎が灯る。それはみるみるうちに大きくなって、

オレの頭を沸騰させ始める。

これ以上はいけない、と思っただけど……気づけば、体が勝手に動いていた。

「お前は優しすぎるんだよ！ ケガする覚悟もなくて、いつまでたっても強くなれねえ！ ただでさえオレは、お前らより遅れてるってのに！」

「おい、いきなりどうしたんだよりユウガ」

セントやら二人あが驚いた顔で見つめてくるけど、もうそれどころじゃない。オレはキツと二人を睨みつけ、セントの方に向かう。

そして、足元に置かれていたベルトを奪い取った。

「待て！ それはお前じゃ……！」

「オレだってこれが使えれば……！」

オレはアイツがしていたように、腰にベルトを当てて装着する。

適当なボトルを持って、ベルトに挿す。そして、レバーを思い切り回そうとした瞬間。

バチツ！と物凄い電流が、オレの体に走った！

「ぐあああああさああ!!」

「あーあー、だから言ったじゃんか」

電流に全身をやられ、オレはバタツと仰向けに倒れる。

なんだ、これ……!?

悶絶するオレに歩み寄り、ベルトを取り返したセントが呆れた様子で見下ろしてきた。

「他の人間に盗まれて使われないように、ロックをかけてあるんだよ。特定の条件が揃わないと使えないの」

「クッソ……！」

お見通しだったって事かよ、ちくしょう……!

オレは……弱いのに、もっと強くなりたいのに!

その資格さえないってのかよ……!

「……お前さ、焦んなよ。さっさと冤罪晴らして自由になりたいのはわかるけどさ、気持ちをやらせたってどうにも……」

「そんなんじゃない……！」



思わず、オレはセントの慰めに反論しかける。

焦ってるのは……認める。だがそれはそんな理由じゃない！

だけどオレは……それを口にする勇気がなかった。

「……そんなんじゃないよ」

「やれやれ……」

そう言つて、肩をすくめるセントやナオフミの憐れみの目が……今は辛かった。

そしてこんなオレを見て我が身を振り返っているのか、悔しげに俯くラフタリアの姿が、妙にまぶたに残っていた。

S i d e : N a o f u m i

若干気まずい空気になりながら、俺たちは次の目的地へと向かう。薬を大量に運んでほしいという依頼だったんだが……その理由は、着いた直後に深く理解することになった。

「……なんか、空気悪いな」

すんすん鼻を鳴らして、セントが顔をしかめる。

着いた村はもう、燦々たる有様だった。

あちこちに具合の悪そうな村人がいて、苦しそうに呻いている。家の向こう側に見えるのは、多分簡易的な墓だろう。

「疫病が流行ってるって話だからな。死臭とかだろう」

「そうなんだろうけど……何かこう、何か腐った匂いみたいだな」

それは死臭と同じじゃないだろうか……そう思ったが、遺体の処理はやっているようだし、違うものが原因かもしれない。

これは、原因を取り除かないとまた同じことが起こりそうだな。

「おい、疫病の原因について何か知らないのか？」

「そ、それは……」

村人の一人を捕まえて尋ねる、妙に歯切れ悪く口ごもる。

目をそらすそいつに質問を続けていると、ようやくそいつは口を開いた。

聞いてみれば、確かに呆れる話だった。

以前この近くには、財宝を山ほど溜め込んだドラゴンが棲みついて

いたらしい。

そいつをつい最近、剣の勇者である錬が討伐したそうだ。

素材を剥ぎ取れるだけ剥ぎ取って、残りは村人にやったりして錬は帰ったらしいが、放置された大量の肉が腐敗し、疫病を流行らせてしまったと。

……バカじゃないのか？

「二時期は村も潤ったのですが、時が経つにつれて病に倒れる者が次々と……」

「…身から出た錆ってわけか」

あいつ……腐るって発想がなかったのか？

いや……何かとゲーム脳な連中だ。そんなことまで頭が回らなかったんだらう。

「この状況をどうにかするには、元を何とかしないと」

「死骸の除去か……全く、ここでも他の勇者どもの尻拭いをする羽目になるとは」

セントと一緒に深いため息をつく。

別に悪いことをしたわけじゃない。だがこう……考えが足りないっていうか、下手に手を出して自体が悪化してるだけにしか思えない。

…頭痛くなってきた。

「次に会ったらたららく迷惑料をふんだくってやる」

「ケツの毛までむしってやんなー！」

「せ、セントさん……」

鼻息荒く、セントは俺とともにどこぞにいるバカ勇者たちを睨む。ラフタリアがセントの口調を諷めかけるが、内容自体は的を射てるせいか口を閉ざした。

言葉もないよな、この状況じゃ。

「なら、行くか」

「おうー！」

「はいー！」

「おう」

「はーい！」

俺は盾を、最も強力なものに変える。

するとそれを見た村人から、驚きの声が上がりました。

「た、盾の勇者…!？」

「聖人じゃなくて悪かったな……あいにく他の勇者は、自分のことで手いっぱいしくてな！」

こいつらの態度が変わろうが、今更知ったことじゃない。

俺は俺で、勝手にやらせてもらうだけだ。

「うっぷ…匂いがきつくなってきたな」

「話にあったドラゴンの巣ってのが、そろそろなんだろう」

山道を登って行くごとに、鼻に襲いかかる刺激がきつくなってくる。

一応マスクはしているが、これじゃ焼け石に水だな。セントやリュウガに至っては、涙目で堪えている。

俺もさっさと終わらせて帰りたい。

「…噂をすれば、見えてきたな」

お、やっと着いたのか。

さて、件のドラゴンとやらはどんだけデカイのか……って、これは。

「うっ…!」

「ひでえ匂いだ…!」

凄まじい匂いに、俺たちは固まる。

首から先や、素材になる部分を全て削がれた哀れなドラゴン。そいつの体には屍肉を漁る魔物が集い、ぐちゃぐちゃと嫌な音を立てている。

これは……精神的にもくる光景だな。

「わー、おいしそー」

「アレが!？」

「…魔物の感覚とは相入れんな」

「同感」

ドン引きするセリフに、全員でギョツとフイー口を凝視する。



「フイーロ!?!」

あいつ…挑発に簡単に乗せられやがって!  
ていうかこの光景前にも見たことあるぞ!? あれだ、元康とレース  
で勝負した時だ!

「そういえば、ドラゴンと仲が悪いんだっただっけな…!」

種族的な因縁が絡んできた以上、逃げることは難しそうだ。こう  
なったらもう、撃退するしか生き延びる方法はない。

くそっ、今の戦力でどこまでやれるんだ!?

「やるしかねえ! 変身!」

【鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエイ!】

険しい表情のまま、セントが鎧をまとう。

明らかに奴の攻撃力は、俺の防御を上回っているが…俺が耐えな  
ければ、全滅する。

だがそんな俺の覚悟を無視するように、リュウガが飛びかかって  
いった。

「ナメんな! ドラゴンブロー!!」

ドラゴンゾンビの顔面に向かって、リュウガが拳を振りかぶる。

だが案の定、ドラゴンゾンビに翼で防がれ弾き飛ばされ、岩場に叩  
きつけられる。

何やってんだよ…! 力の差は明らかだろうが!!

「フイーロ! リュウガ! 体勢を立て直す! 戻れ!!」

「やーっ!!」

「おらあっ!!」

「俺の命令が聞けないのか!?!」

あいつら二人とも、頭に血が上っているのかまともに聞きやしな  
い。

リュウガは空中に飛び上がり、また頭部を狙って攻撃を仕掛けに行  
く。

それを察知したのか、ドラゴンゾンビは尾を振り回し、リュウガを  
吹き飛ばした…フイーロの方へ。

「ぎゃんっ!!」

リュウガが直撃したファイロが、バランスを崩す。  
そして空中で身動きが取れないまま、ファイロは落ちていく。  
ドラゴンゾンビの、口の中に。

「……………え？」

地面に落ちながら、リュウガが呆然と声を漏らす。

そして俺も……………絶句する。

閉じられたドラゴンゾンビの口から、大量の赤い液体が、吹きこぼれたのを見て。

「ファイロおおおお!!」

## 憤怒の炎

S i d e : S e n t o

ゴクン、と。ドラゴンゾンビがのどを鳴らし、それを呑み込む。

それはエサなんかじゃない…さっきまでオレ達と普通に会話していた、フィーロちゃんだという事が、オレは一瞬理解できずにいた。

「ウソ、だろオイ…!?!」

すぐそばでは、尻餅をついたりユウガが呆然とドラゴンゾンビを見上げている。

無理もない、先走ったあいつがフィーロちゃんにぶつかっちゃった結果、こんなことになったんだから。だけど、それを責めてる場合じゃない!

「ぼけつとすんな! 離れてろ!」

【ゴリラ!】【ダイヤモンド!】【ベストマッチ!】

「ビルドアップ!」

俺は現状、もつとも破壊力に優れたベストマッチを選択し、ベルトに挿して鎧を生み出させる。

それを纏いながら、ドラゴンゾンビに向かって飛び掛かった。

【輝きのデストロイヤー!】 【ゴリラモンド!】 【イエー!】

「それ吐き出しやがれ!!」

一発顔面に食らわせて、あの子を吐き出させる。そんなつもりで思い切り振り下ろした巨腕だったけど…オレの一撃は奴の鱗に防がれ、弾かれてしまった。

「硬っ…!?!」

「GYA O O O O O O O O O O!!」

空中で身動きの取れないおれに向かって、ドラゴンゾンビが尻尾を振るう。

オレはそれをまともに食らい、小石みたいに軽々と吹っ飛ばされ、岩場に背中から激突させられた。

一瞬、意識が混濁して吐き気がする。視界も真っ暗になったけど、結構な量の血を吐いたのだけはわかった。

「セントさん！」

「大丈夫……！ 致命傷じゃねえ……！」

いってえけど、我慢できないほどじゃない……！

硬さに定評のあるダイヤモンドフルボトルを使っただけじゃなかったら多分死んでた、マジで。

よろよろしながら起き上がると、リュウガがまだ呆然としているのが見えた。

「あいつが……オレを助けて……オレのせい……！」

「反省は後にしとけ！ 今はそれどころじゃねえ！」

たぶん、オレも同じ状況になったらそうなるけど！ でも今はやめろ！

ドラゴンゾンの奴は、相変わらず太々しく俺たちを見下ろしている。本気出さなくてもいつでもやれるってか……舐めやがって！

「ラフタリアちゃん！ もうこうなったらやるっきゃない！ 覚悟決めといて！」

「は、はい！」

こうなったらもうとことんやってやる！

なんとかして奴に一泡吹かせなきゃ気がすまねえんだよ!!

「ナオフミ！ オレがどうにか奴を仕留めてみせるから、それまであいつの攻撃を受け止めててくれ！」

「……」

「おい、どうしたナオフミ！」

まさかお前まで正気を失ってんじゃねえだろうな!? お前の防御が無かったらどうしようもないんだぞ!?

そう思い、若干イライラしながら振り向いたオレだったが……それが、全くの勘違いだったと思ひ知った。

「……憎イ」

……え？

何だあれ……ナオフミの体に、へんな模様が。っていうか、何だあの……禍々しい雰囲気は。

小さな、しかしおぞましい声を漏らしたナオフミの目は……恐ろしく



見えた。

「この世界の全てテのモノが…憎イ…!」

「ナオフミ…!?!」

ナオフミの盾が…変化していく。

炎の形を模したような、そして竜の姿を描いた、見るからにヤバいとわかる一つの盾。

それから勢いよく…業火が迸った!?

「何だ…あの炎は…!?!」

炎はドラゴンゾンビに食らいつき、ナオフミの伸ばしていた腕を焼き払う。

オレ達があればだけ攻撃しても傷ひとつつかなかった奴の身体が… たった一発で。

それはナオフミの…盾の勇者ではありえない、異様な光景だ。

「あのドラゴンゾンビの体を…!」

「…ハ、ハハハ! ハハハハハ!」

ボロボロと腕を炭化させ、悲鳴のような咆哮を上げるドラゴンゾンビを、ナオフミは悪魔の様に笑う。

絶対ヤバイ…今のナオフミは絶対味方じゃない、一度見ただけでそう察した。

「ナオフミ様!」

正直恐怖を感じて、あとずさりかけた時。

悲痛な表情になったラフタリアちゃんが、炎を纏うナオフミの腕に縋りついた。まるで、どこかへ向かいそうになっているナオフミを引き留めるように。

「ダメだ! 離れろラフタリアちゃん! 黒焦げになっちゃうぞ!」

「イヤです! 今離れたら…ナオフミ様がもう手の届かないところへ行ってしまうす!」

「だからって君が傷ついてたら…!」

実際今、ラフタリアちゃんは炎を受けた所から火傷を負っていく。

いや、ただの火傷じゃない。見るからに体に悪そうな、真っ黒い痣が広がっていく。

動きを止めている二人に、狙ったように奴がまた別の腕を伸ばしてきた。

「ちつとは空気を……」

【Ready GO!】

「読みやがれトカゲ野郎!」

【ボルテックファイニッシュ!】

オレは苛立ちを込めて、ドラゴンゾビの顔面にもう一度渾身の一撃を叩き込む。

さつきよりもいいのが入った…でもやっぱり弾き飛ばされて、今度こそ動けなくなってしまう。

ヤバいつてこれ…! どうすりゃいいんだよ!?

「止まれ……ナオフミ!!」

すると、もう一人…炎に焼かれるラフタリアちゃんの反対側の腕に、継りつく人影が。

ラフタリアちゃん以上に悲痛に…そして苦しそうに顔を歪めたリュウガが、ナオフミの腕にしがみついて叫んだ。

「もうやめろ! やめてくれナオフミ! わかった…もうわかったから!!」

邪魔をされるのが気に入らないのか、ナオフミはうなり声をあげながら進もうとしている。

既に正気の失せたその横顔に、リュウガは涙を滲ませながら叫び続けていた。

「お前は…お前はオレだ。オレと同じで…怒りと悲しみで壊れちゃった…! だからオレはお前についてきた…同じ目的を果たそうって! でも、ダメなんだよそれじゃ!」

ラフタリアちゃんと同じく、リュウガの身体が火傷を負っていく。相当な痛みがあるだろうに…二人ともじつとその場を動こうとせず、ナオフミにしがみついたままだった。

「オレの怒りはオレのもんだ…お前の怒りはお前のもんだろ! お前の苦しみで、大事な仲間を傷つけるな! オレみたいに…だれかれ構わず傷つけたりするな!」

その声から：リユウガの苦しみが伝わってくる。それにオレは、激しい後悔に苛まれていた。

あいつは：自分の復讐が果たせないことに焦ってたんじゃない。自分が復讐心に囚われたまま、何も変われずにいることが苦しくて仕方なかったんだ。変わろうとしているナオフミとの差に、焦ってたんだ。

何だよ……何でそんなことに気がつかなかったんだよ、オレは。

「オレももう……一度と先走ったりしないから！　ちゃんということ聞くから！　だから……戻ってきてくれ、ナオフミ！」

「ナオフミ様！」

炎に包まれながら、必死に呼びかけ続けるラフタリアちゃんとリユウガ。

その声にやがて、ナオフミの目に光が戻り始めた。

「……！　ラ、ラフ……タリ、ア……リユウ……ガ」

ナオフミの意識が：戻りかけている！

だがそんな流れをぶち壊すように、ドラゴンゾンビが手を伸ばし、三人を一緒くたに掴んで捕まえやがった！

「ぐう……！　もう……これ以上……俺から、俺たちから奪うんじゃない……！」

締め付ける力に苦しみ、ナオフミが呻き声をあげる。

どうに片手で締め付けを防ぎ、抜け出そうとしているが：奴の力はそれ以上で、ぎしぎしといやな音が聞こえだした。

「うおおおおおおお!!」

それでもナオフミは諦めない。隣にいる二人を助けようと、凄まじい声をだしながら抗い続ける。

オレも何かしねえと……でも、やっぱ痛みが走って動けねえ！

どうしようもないのか、とあきらめかけたその時！

「G U A A A A A A A A A A!!」

ごぼっ、とドラゴンゾンビが腐肉を吐きかけて、動きが鈍くなる。

何だ？　今奴の胸の中で何かが動いた気がしたけど……ってそんな場合じゃねえ！　チャンスだチャンス!!

「今だ！ ビルドアップ！」

ズキズキ痛む体に叱咤して、オレは立ち上がってフルボトルを入れ替える。

必要なのは、パワーじゃない。急所を正確に貫く、鋭さだ！

【鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエイ！】

「これまでの分、まとめて食らいやがれ！」

【Ready GO！ ボルテックフィニッシュ！】

レバーを回し、オレは空中に高く飛び上がる。

左右から数式のラインが狭まり、ドラゴンゾンビの首をがっちりつかんで固める。そこに、オレの全力のひっさつキックが炸裂する！

渾身の一撃を食らったドラゴンゾンビの首が、胴体から勢いよく離れた。

「GUO…！」

最後に小さくドラゴンゾンビが吠えて、首が地面に墜ちる。

巨体もそれにつられるように倒れた直後、オレの身体も限界を迎え、力なく落下した。

めっちゃくちやいてえ…けど、やった、みたいだな。

「ナ、ナオフミ…！」

一瞬気絶しそうになったけど、まだそれは早い。

オレは体を引きずり、倒れ込んだラフタリアちゃんとりユウガに懸命に魔法での治療を施しているナオフミのそばに寄った。

「火傷が引かない…魔法がきいてないのか…!?!」

「これは…」

近くに寄ってみた二人の症状は、あまりにひどかった。

全身にあの痣が広がって…痛々しいことこの上ない。これは…：まさか。

「…ナオフミ、ここじゃ応急手当てが精一杯だ。一旦村に戻って医者に預けよう」

「あ、ああ…！」

「ダメ、です…！」

オレは呆然とするナオフミを促す、けどその前に、ラフタリアちゃ

んが弱々しい声で待ったをかけた。

リュウガも痛々しい姿のまま、オレたちを咎めるように見つめてきた。

「まだ、依頼が…完了していません…」

「しゃべるな！ 重症なんだから！」

「気にすんな、かすり傷だ…」

「それに…フィーロが」

あ…そうだ。あの子のこと、吊ってやらないとな。

…産まれて数日しか経ってないのに、オレたちの未熟のせいで。

本当に…ごめんな。

「フィーロちゃん…！」

「な…？」

激しい後悔で、うつむいたまま動く事ができないオレたち…だったけど。

…ん？ 今なんか、この状況に似つかわしくない間の抜けた声がかえった気がしたぞ？

え？

「は？」

「ぶあゝ！ やつと出られたゝ」

どぼっ！と音がして、後ろに会ったドラゴンゾンビの腐肉が弾ける。

そしてその中から…無傷のフィーロちゃんが顔を出した。

…は？

「…お前、生きてたのか」

「ぶー、フィーロそんなに弱くないもん！」

「いやだって、お前…血吐いて」

「さつき食べた赤い実、吐いちゃったの」

…マジか。

え、さつきあんだけ落ち込んだのに、泣き損？

ていうか紛らわしいんだよコラ…！

「…は、ははは」

「んー？　ごしゅじんさま、フィーロのこと心配してくれたの？」  
「うるさい……！」

おいおい……ナオフミも思いきり呆れてるよ。

ただ……その目にはじんで見える滴については、オレは見ないふりをしておくことにした。

あー……いつてえな、クソ。

見つめ直す

S i d e : R y u g a

「呪詛ですね…それもかなり強い」

村に戻って、治療院に運び込まれた後のこと。

オレとラフタリアが二人して全身に包帯を巻き、ベッドに腰掛けて  
医術士に治療を受ける。

その時言われたのが、さっきのセリフだ。

「そのドラゴンゾンビが、これほど強力な呪いを？」

「あ…えっと」

「そ、そうです。私達が誤って腐肉を浴びてしまって…」

言いよどむナオフミに代わって、ラフタリアがそう答える。

わざわざ本当のことを言う必要はない…ナオフミも傷つくし、村の  
連中も怖がるだろうしな。

そしたら医術士のおっさんは、小さい透明なビンを持ってきた。

「これは私ではどうにもなりません。王都の教会でもっと強い聖水を  
購入されたほうがいいでしょう」

「…それは？」

「低級の聖水です。気休めにしかなりませんが…」

おっさんはそれに包帯を浸して、オレたちの傷の上に巻きつける。

ジュツと音がして痛みが走ったけど、オレもラフタリアも耐えて口  
を閉ざす。ナオフミやファイロがハラハラしながら見てるしな。

「痛むか…？」

治療を終えると、おっさんは部屋を出て行った。

それでナオフミが、恐る恐るといった感じで問いかけてきた。

「…平気だ」

「大丈夫です。…ナオフミ様こそ、おケガは大丈夫ですか？」

「ああ…俺は何も。あとはセントが戻ってくれば…」

ちよっと安心してるっほいけど……これはかなり堪えてるな。

あのバカウサギ…さっさと戻ってきてこの空気粉碎してくれよ、何  
のためのお前のうざさなんだよ。

「ナオフミ、村の連中に食料もらってきたぞ…せめてもの礼だつてさ」  
ちよつと経つてから、セントの奴が戻ってきた…つて。

「オイ、なんかお前も若干落ち込んでないか？　いつもの無駄なテンションの高さがどつかいっててるぞ？」

「…その、大丈夫か？」

「はい、少し体がだるいですが…それだけです。ありがとうございます  
す」

ラフタリアにかける言葉も、どこか弱々しい。

…それからはしばらく、誰も口を開かなかつた。重い空気だけが、  
肩にのしかかってくる感じがしていた。

「……すまねえ」

耐えきれなくなつたオレが声に出したのは、そんな言葉だつた。

なんか他にあるだろつてオレ自身思つたけど、そんなことしか言え  
なかつた。

「オレが先走つて、無謀な突撃ばかりしたから……こんな目に」

「リュウガちゃん…それは」

「いや、お前のせいじゃない」

俯いていたオレは、ナオフミのつぶやきで顔をあげる。

ナオフミはオレと同じような…いや、オレ以上に苦しそうに顔を歪  
めていた。

…何でお前がそんな顔するんだよ、これはオレが…。

「悪いのは俺だ…俺の心が弱かつたせいで、お前達を巻き込んだ」

「それも違います！　ナオフミ様の心配を無碍にしてみましたのは私  
で……」

「だからそれはオレのせいで……」

「落ち着けお前ら。きりねえよ」

ラフタリアまで自分を責め出してもう無茶苦茶になつてきた。

何だこれ、責任の押し付け合いならぬ奪い合い？　意味わかんねえ  
よ。

フィーロも自分が悪かつたと思つてるのか、落ち込んで見えた。

「…今回の失敗は、オレが言うのもなんだけど全員にあると思う。ナ



オフミは心配が過ぎて、ラフタリアちゃんトリユウガは焦り過ぎ、  
ファイロちゃんは勝手すぎて……オレは、樂觀視が過ぎた。ごめん  
……」

セントまでもが悔しそうに頭を下げてる……くそっ、お前だけでも  
いつもの調子でいて欲しかったのに！

さつきよりもズーンと重くなった空気の中、ナオフミが拳を握りし  
める音が妙によく聞こえた。

「そうだ。勇気と無謀が違うように、慎重と臆病も違う……お前たち  
は俺を信じてくれたのに、俺は……」

「…反省会を開くべきだったのは、オレたちの方だったかもな」

それ以降、誰も何も言えなくなっちゃった。

誰が一番悪いとか、誰のせいとか、このお人好し連中が言えるは  
ずないもんな……。

……そういえば。

「ところでよ、あのドラゴンゾンビ……急に苦しみだしたからなんとか  
なったけど、一体どうしたんだ？」

「ナオフミの火が効いたんじゃないかねえのか？」

「お前の拳じゃないか？」

「セントさんの攻撃が急所をついたのでは？」

「ファイロがゴリつとしちやったからかも」

今回のMVPについて、誰も理解してなかったらしい。全員、自分  
の攻撃が決定打になったと少しも思っていない……って。

ん？　なんか変なセリフを口走った奴がいなかったか？

…お前か、ファイロ。

「…ゴリつと？」

「うん、食べられた時にね、こんなの見つけたの」

「…そこそと服の中を漁り、ファイロが何かを取り出す。

なんか紫色の……危険っぽい雰囲気を持つ宝石みたいな何かだった。

「セント、こいつは……」

「…核だな、あのドラゴンの」

…え、マジで？

あ…そりやあ、ゾンビだから普通に心臓で動いてるわけじゃなくて、こういう核で動いてたつてわけで。

え、そんな手で良かったのか？　じゃあオレたち、やられ損？

「…フイーロちゃんの食い意地がこんな場面で役に立つなんてな」

「えっへんー！」

「お前って奴は…」

思わず全員で呆れて、言葉も出ない。そのうち誰かが嘔き出して、全員に笑いが伝播していった。

もちろん、ナオフミにも。

「あー…ごしゅじんさま笑った！」

フイーロに指摘されて、ナオフミがキョトンとした顔を見せる。

あー、こいつのこういう顔初めて見たかもな。最近はいつつもしかめっ面で、難しい顔ばっかしてたから。

…レースで槍の勇者が吹っ飛ばされた時以外は。

「ずっと心配だったんです。いつも気を張っておいででしたから…」

ホツとした顔で、ラフタリアがナオフミに笑いかける。

思えばずっと、ナオフミには心配ばっかかけちまってたからな…。

「リュウガ、これ」

「ん？」

不意に、セントがオレに何かを…青いフルボトルを投げ渡してきた。

ドラゴンの意匠が施された…見たことがないやつだ。

「…お前、これ」

「そのうち、お前のための武器も作ってやろうって思ってたんだ。これはその前準備」

ちよつと目をそらしながら、セントはオレにそう語る。

…そうか、オレのことそこまで考えてくれてたのか。なのにオレは、あんな醜態まで晒して…。

気恥ずかしくなって、オレはセントから目をそらした。

「…こつからだ。こつからオレたちは、立ち上がるう。失敗も後悔も全部背負い込んで、積み上げていこう。そしていつか…もつと強くな

ろう」

じつとセントが、強い決意を目に秘めてオレたちを見つめてくる。その通りだ…つい駆け足で行きたくなるけど、急いだってどうしようもないんだ。

強くなるのに、近道なんてないんだから。

「…ああ、そうだな」

前よりもずっと穏やかになった顔で、ナオフミが笑いかける。

それに安心したように笑うオレや、ラフタリアにフイーロ。

「…なんかの役に立つかもって思ったけど、どうしたもんかなあこれ」

…その横で、何か黒いフルボトルを持ったセントが、難しい顔で考え込んでいることに、オレは気づいていなかった。

T o b e c o n t i n u e d :

### 第三章 龍炎・ウェイクアップ 青い髪の少女

Side：Raphalia

「今だ！ いけ、リュウガ！」

「おらあ！」

青い炎を拳に纏わせたりリュウガちゃんが、ハチ型の魔物を殴り飛ばします。

以前よりキレもよく、そして何より力も倍増した様子の一撃を受けて、魔物はたまらずバラバラになってしまいました。

私も負けじと頑張りましたが、まだ本調子とはいかないようです。

「ふい〜…これでこの辺の魔物はだいたい掃除できたかねえ」

「ああ。後始末もこの辺で十分だろう」

「おなかへった〜」

「フイーロ、もう少し我慢してください」

切なそうな顔で言っても仕方ありませんよ？

すると不意に、ナオフミ様が私とリュウガちゃんに心配そうな目を向けてしました。

「…その、本当に大丈夫か？」

「あのなあ…もう十分だったの。見たろ？ オレの暴れっぷりをよ」

「私も問題ありません…お気になさらないでください」

「ああ…だが気分が悪くなったら必ず言うんだぞ。我慢なんでもつてのほかだ」

あ、案じて下さるのはうれしいんですが、その…。

最近、ナオフミ様がとても過保護になってしまったようで、少し落ち着きません。

厳しい、というかぶつきらぼうなことが多い方ですから。

リュウガちゃんも違和感がすごいのか、何とも言えない表情をしています。

数日前に立ち向かうこととなったドラゴンゾンビ……その際にナオフミ様が放った黒い炎を受けてしまい、わたしには呪いが掛かってしまいました。

村の人達がまたナオフミ様に険しい視線を向けられないよう、『腐竜の死肉を誤ってあびてしまった』と伝えておきましたが……。

それ以来、こんなふうに気を遣われてばかりです。

セントさんも、そんなナオフミ様にやや呆れた様子でため息をついています。

「しかしあれだな。盾の勇者って知った途端に顔色変えたけど、腐竜片付けたらまた手のひら返してやがったな、あの村の連中……」

「もともとそんな期待はしていない。どうでもいいさ」

反対に、ナオフミ様の村の人達への評価はかなり低いです。

ドラゴンゾンビが生まれたそもその理由は、以前に剣の勇者様に討伐された竜の死肉を放置してしまったため。

私やリュウガちゃんがかようなった原因……とは言い過ぎかもしれませんが、少なくとも要因の一つではあります。

ナオフミ様は、その辺りで村の人達に辛辣な印象を抱いているようです。

「……」

「どうしたリュウガ？」

「ん、ああ、いや……」

ふと、ご自分の掌を見下ろして何か考え込んでいるリュウガちゃんの様子が、目に移りました。

その手にあるのは、一本のボトル。

腐竜との戦いにおける、彼女の唯一ともいえる戦利品です。

「振るだけで力が湧くなんて、相変わらず変わったアイテムだな……ってよ」

「ああ……それな」

「そこがオレのすごいところ……」

むふーっ、と胸を張るセントさん。

ナオフミ様はそれを鬱陶しそうに見て、わたしも若干反応に困ると

ころですが、素直にこれはスゴイと思います。

私も一度試してみました、強すぎてうまく扱えませんでした。

「作ったのは記憶をなくす前のお前だろうが」

「それを言うなよお〜」

鼻を膨らませていたセントさんが、ナオフミ様の指摘につくりと肩を落とします。

えっと……ちゃんとそれを使いこなせているセントさんもすごいと思いますよ？

「つつても、まだそいつの真価は発揮できちゃいねえ。…実際に使わせて見てわかったんだが、そのドラゴンフルボトルは他のフルボトルより強い力があるみたいなんだわ」

「ふうん？」

セントさんの説明に、リュウガちゃんはじろじろとドラゴンフルボトルを見つめて唸ります。

そう、フルボトルはセントさんの作る謎のアイテムに挿すことで、本当の力を引き出せます。姿と共に能力の変わる鎧に、不思議な武器…本当に様々です。

一体、以前のセントさんは何者だったんでしょうか…？

「そんだけ腐竜が強かったってことか？」

「さあな…ま、楽しみに待ってりゃいいさ」

肩を疎めるセントさんがそう言って、辺りを見渡します。

結構な数の魔物が集まっていた布巾ですが、わたしたちで頑張ったおかげか、もうあまり気配も感じられなくなってきました。

「ではそろそろ次の場所へ移りましょうか。この辺りはもう十分のようですよ」

「そうだな…」

戦えない村人たちのために、危険な魔物を間引いておく。

もしまた出てきたとしても、その時はまた以前のように冒険者の方々に依頼を出せば十分対処可能な状態になる、というのがナオフミ様のお考えです。

…というか、あまりご自分の手を煩わされたくないという風にも思

えて、複雑な気分です。

…ところで、先ほどからセントさんは、何を手帳に書き込んでいるのでしょうか？

「さっきから何やってんだ？」

「アイデアをメモしてんの。ビルドを強化する武器のヒントでもねーかなって思ってたさ」

「武器か…：ラフタリア達に持たせたりは？」

「できるよ」

ガリガリと書き込まれている…何でしょう、剣？

私には一片たりとも理解できそうにない難しい式や図形でいっばいのそれを、セントさんは一心不乱に書いています。

ナオフミ様がそれを興味深そうに見下ろしていますが…はあ。

「ナオフミ様…私たちだけではなくご自分の装備も気遣ってください」

「そうだぞ。気を使いすぎんなって言ったばっかだろ」

「だがな…」

盾の勇者であるために、ご自分で武器を持たないので仕方ないとは思いますが、ご自分の優先順位は相変わらず低すぎます。

困ったものですが、それこそナオフミ様の優しき。想われていると感じられ、私の胸はぽかぽかと温かくなります。

もっとこの人の力になれたなら…と、私がやる気を漲らせているときでした。

「ねーねーごしゅじんさま、フィーロあれが食べたいかも」

「ん？」

グーグーとお腹を鳴らしていたフィーロの声で、私はハツと我に返りました。

わ、私だったら…！ 今はそんな場合じゃないというのに…！

熱くなった頬を覚ましながら、わたしたちはフィーロが見ている方向に振り向きま。

そこには数匹の大きな鳥の魔物…：かつてのフィーロと同じ、フィロリアル姿がありました。…って、え？ 今、美味しそうって…。

「野生のファイロリアルじゃないか…あれはお前の同類だぞ！」

「いまならしとめられるよ？」

「共食いはやめとけ、共食いは」

ふんっ！と鼻を鳴らして意気込むファイロ口に、みなさん呆れた目を向けます。

ファイロ：いくらお腹が空いているからって自分と同じ種族の魔物を食べたがるなんて…。

「グエー！」

「グアツグアー！」

「あ、逃げた」

「あーん、ファイロのぐはーん…」

「だからやめとけつての！」

ファイロに気付いた野生のファイロリアルたちが、一声鳴いて一斉に逃げ出します。野生の勘で、危険を察知したのでしょうか…？

私達が嘆くファイロを宥め、若しくは呆れていた時でした。

「え…しゃべった…？」

そんな声が、ファイロリアルたちが去った後から聞こえてきました。

私達は思わず、声が出た方向に振り向き、そして大きく目を見開きました。

「お、女の子…？」

そこにいたのは、青い髪を二つに分けた可愛らしい女の子でした。きれいなドレスに、血色のいい肌、整えられた髪…そして何より、育ちの良さを感じさせる佇まい。

そんな幼い女の子が、目を輝かせて私達を。

いいえ、ファイロを見つめていました。

「今、あなたが話していたの…？」

「うん、そうだよー？」

「あつ、バカ！」

「すごい…喋るファイロリアルさんなんて…」

ファイロが応えると、女の子はますます目を輝かせて笑顔になります。



小走りで近寄って来ると、驚くほどに明るい声でフィーロに話しかけました。

「私は……メルっていうの！　ねえ、もっとお話しましょ！　お名前前はなんていうの？」

「フィーロのこと？　フィーロはフィーロだよ！　えつとー…メルちゃん？」

「ええー！　フィーロちゃんはすごいのね！」

背丈も見上げるほど違うのに、メルと名乗った女の子が臆する様子はありません。

フィーロも彼女が好ましく見えたのか、進んで歩み寄っているように見えます。…すごいですね。

「物怖じしない子だな〜…」

「あの身なり、どっかいいところの子供か？」

「みたいだな…」

やっぱり、ナオフミ様達も同じことを思ったようですね。

ですが……一体どこの方なのでしょう？

すると、何やらナオフミ様が考え始めたかと思うと、フィーロに声をかけました。

「ふむ…フィーロ、その子としばらく遊んで来い。あとは俺たちがやっておく」

「いいの!?!」

「ああ、日が暮れるまで遊んでいい」

「わーい！　行こー！　メルちゃん！」

「うん！」

ナオフミ様に許可をもらったことで、フィーロは喜んで走り出します。

二人の姿が小さくなったところで、ナオフミ様にセントさんがじとっとした目を向け始めました。

「どういう風の吹き回しだ？」

「何、あの見た目なら相当金持ちの子だろう…貴族に恩を売っておくのも悪くないと思っただけだ」

「そういうのは考えるだけで口にはしないほうがいいぞ…」

…どうせそんなことだろうとは思いました。

まあ…いつもの事なので文句は言いません。目的がどうであれ、それでフィーロは楽しそうにしていますし。

「さ、俺たちはさっさと見回りを終わらせるぞ」

「あいよー」

「はいっー!」

はしゃいでいるフィーロとメルさんを背に、みなさんと歩き出します。

そうですね…まだまだ役目は終わっていません。

ですが何でしょう…楽しそうに遊んでおるメルさんを見ていると。

…うらやましい、と、思えてしまいますね。

## 同行者

S i d e : S e n t o

「だ〜…つつかれたあ…」

借りた宿のベッドに倒れ込んで、オレは思い切り脱力する。

あ〜…仕事した。

うん、もうこれは明日一日仕事しなくてもいいくらい働いたんじゃないか？ うん。

「ザコがけっこう散らばってたからな。もうこれくらいで十分だろう」

「ごんだけやつときやあな。しばらく村に連中も困んねえだろ」

「そうですね」

ナオフミやラフタリアちゃん、リュウガを見る感じ、三人とも同じくらい疲れて見える。

すると、オレとリュウガの腹からけっこうな音が鳴り響いた。

「…ナオフミ〜、腹減った。今日の晩飯なに？」

「できればシチュー的なものを食べてえ」

「もしくは何かこうがつりしたもの！」

「この飢えを満たすごっついものを望む！」

「うるさい！ 俺はお前らの母親か!？」

「あ、あはは…」

え〜、リクエストしただけじゃんよ〜。

ていうか、最近はお前の飯を食わねえとやる気でないんだよ。…あれ？

胃袋を掴むのってそれ普通嫁の役目では？ 性別逆転してる？

まさか、ナオフミはオレ達の嫁だった…!？」

「バカなこと言ってるんで、大人しく待ってろ」

「え〜」

「セントさんもリュウガちゃんも…」

「ったく…まあいい。どうせあの腹ペコ鳥もそのうち戻ってくるし、今のうちに準備を…」

ちつとは雑談しようぜえ、ご主人様よお。

ベッドに腰かけたナオフミが、そう呆れた調子で言った、丁度その時。

「ごしゅじんさまー！　ただいまー！」

「噂をすればだな」

バーン！って感じでフィーロちゃんがカムバックしてきた。

…うん、全然疲れたように見えないわ。

「あのねあのね、メルちゃんすごくいい子でね！　それでね、フィーロメルちゃんと一緒にはじめておままごととしてね！」

「あー、はいはい…」

「子供は元気だねえ…」

「まったくだ、どこにあんなエネルギーがあるんだか」

オレ達全員、割とぐったりしてるのに……。

するとナオフミの奴、さつきより呆れた様子でリュウガとラフタリアちゃんの方を見やった。

「…お前らも子供だろうが」

「あ、あはは…ってナオフミ様!!　今私の方も見ていませんでしたか!？」

「それでねそれでねー」

抗議の声を上げるラフタリアちゃん。

フィーロちゃんは一切気にせず、今日出会った謎の女の子・メルちゃんとのことを一生懸命に話していた。

「えつとね、メルちゃんはずっといろんなところを旅してただけど、一緒にいた人とはぐれちゃって困ってるんだって！」

「へー…って、は？」

適当に聞き流していたナオフミが、そこでやっと真面に反応する。

なに？　誰と誰がはぐれたって？

するとタイミングを見計らったように、扉が開いて例のメルちゃんがおずおずと顔を出した。

「夜分に失礼します…聖人様、少々お時間よろしいでしょうか？」

「おい、はぐれたって聞いたけど…それって護衛とか？」

「はい……父が手配してくれた者達なのですが、不幸な事故で離れ離れになってしまい」

ありやま……そりやまた質の良くない護衛なこと。

依頼主の娘をほったらかしかよ、物騒な。

「聞けば聖人様は、王都にご用があるとか。差し支えなければ、ご同行させてはいただけないでしょうか。もちろん、後でお礼はさせていただけます」

「うーん……」

メルちゃんのお願いに、ナオフミの奴かなり悩んでやがる。

そのうちオレ達に向かって手招きしてきたため、みんなが集まって円陣を組み、話し合いを始める。

……まあ、言っちゃアレだが、厄介事だしなあ。

「で、どうする？」

「…商人の娘とかそんなのを想像してたが、護衛っていうぐらいだ。もっと上の位の奴だな」

「この国の貴族とか要人つてことだよな。面倒なことになったりしねえか？」

「前科があるからな」

具体的には、宝石商とか。

だけどなあ……放っておく気にはならないよな。

相手もこんな小さな女の子だ。わぎわぎ一人になるリスクを冒してオレ達をだますメリットなんてないだろう？

「ごしゅじんさまー、メルちゃんたすけてあげようよ」

「ナオフミ様、私からもお願いします」

メルちゃんの境遇に同情したのか、ラフタリアちゃんもフィーロも協力的だ。

しばらく険しい顔で唸っていたナオフミだけど、そのうち大きなため息をついて肩を落とした。

「…あとでお前の親に請求するからな」

「はいー…必ずー！」

やれやれ……お前ならそう言うと思ってたよ。

…とりあえず、その前にメシ食わね？

S i d e : R y u g a

ガラガラと、フィーロが引く馬車が道を走る。

そしてその隣を、セントが操る……バイク？が走る。

その速度はまるで、風のように速く軽やかだった。

「わあっ……！ フィーロちゃん、力持ちなんだね！」

「えっへへ、フィーロつよいんだよ！」

新しくオレ達の旅に同行することとなったチビガキ——メルと  
か言う奴がはしゃいでやがる。

何だ……そ真面目な奴かと思ってたけど、普通の女っぽいな。

……っか、オレ。

人の事見てるヒマなかった……！

「おい、フィーロ。少しはラフタリア達に遠慮してやれ」

「うっぷ……」

「うぐぐ……」

馬車の荷台に乗るラフタリア、そしてセントの後ろに乗ったオレは  
今、真っ青な顔で口を押さえている。

ヤベエ……これ、なんかスゲエ酔う。

「だらしのねえ奴らだな、お前ら」

「そりゃあ自分で運転する分なら酔わねえだろ……」

「ズリイぞセントオ!!」

自分でバイクを操縦しているセントはともかく、ナオフミ。

お前何でそんなガタガタ揺れてんのに平気なの？ メルも同じく、  
何でそんなはしゃげんの？

バケモンかこいつら……。

「それって……フォーブレイの発明品か何かですか!?!」

「うんにゃ？ オレのオリジナル。オレは天才魔導科学者だからさ  
!」

「ふわあ……すごいです」

メルの奴、セントのバイクにちよつと興味深げだな。 …フィーロを

最初に見た時ほどじゃないけど。

すると、それを見たファイロがムツとし始めた。

「むー！　ファイロの方がもつとはやく走れるもん！」

「えっ、あ、いや、そんなムキにならなくても……！」

なんか嫉妬しだして、セントを睨むファイロに、荷台のラフタリアが慌て始めた。

オレもちよつと、嫌な予感がしてきた。

え？　なんか、怪しい空気になってきた。おいセント、ファイロ、お前らなんでちよつとバチバチし始めてるんだ？

「お？　いつペン勝負する？　言っておくが、オレのマシンビルダーはそう簡単には追い越せねえぞ！」

「あの!?　別に競い合う必要はないと思いますが……！」

にやにや笑うセントが、そう言っつて前方を睨む。そしてそれにラフタリアが待ったをかける。

オイオイオイオイ……！　ただでさえこの揺れだぞ!?

待て、ホントに待て！

これ以上酷くなつたらオレ、我慢できなくなる!!

発射しちゃうから!!

「ナオフミ！　合図よろ！」

「ごしゅじんさま〜！　早く早く！」

「つたく……」

「ナオフミ様！　やめてくださいお願いします！」

「頼む！　後生だ！　これ以上揺らすのは勘弁……！」

唯一こいつらを止められそうなナオフミは、完全にレースに興味がなく、傍観するつもりなのは明らかだ。

そりゃあ、へんな意地のぶつかり合いがどうでも良いのはわかる！  
だが！

オレ達を巻き込むのだけは勘弁してくれ!!

が、そんなオレとラフタリアの懇願は、届かなかったようだ。

「レディ・ゴー」

「イエ————イ!!」

「どっぎゅー——ん!!」

「きゃー!」

「ぎゃあああ!!」

無慈悲な合図と共に、ファイロとセントが急加速。

ついでにオレ達は二台と後ろで無茶苦茶に揺さぶられ、意識が紙くずのように吹っ飛ばされそうになる。

……ああ、主の選択、ミスったかなあ。



## 新たな相棒

Side: Naofumi

メルというメンバーを加えての旅は、思った以上にぎやかだった。

というのも、初めて歳の近い友達ができただけで、フィーロがあまりにはしゃいで、それを宥めるのが大変だったからだが…。

しかし意外だったのは、見るからに裕福な家の出であるメルが、この旅に一言も文句を口にしてこなかったことだ。

現にさつきまで、俺が適当に作った串焼きをうまそうに食べてたぐらいだし。

「…思った以上に強かな子だな、この子」

セントも同じことを考えたのか、メルに感心した様子で呟いている。

そうだよな、もつとこう…こんな野蛮な食べ物食べられない！なんて騒ぐかと思っていたんだが。

その時は、絶対に食わせなかっただろうがな。

「普通さあ、こういういいところ嬢さんで、もつとワガママだったりしない？ どつかのビッチ姫みたいにさあ」

「よほどこいつが変わってんのか…あの女がイカレてんのかだな」

「…是非とも後者であってほしい」

…思い返してみると、あいつ、俺について来たときはよくあれだけ猫被つていられたな。

あれ以降は、元康の前でも本性丸出しに見えた気がしたが…あの女好きにはどう見えているんだ？ 節穴なのか？

セントは俺の呟きに渋い顔をしながら、作業の手を止めていない。

…さつきからカチャカチャうるさいんだが、何だそれ？

「ところで何作ってんだ？」

「武器か？ オレの武器か!？」

「違うね」

食い付いてきたリュウガに、セントはほいっと完成したらしいそれ

を見せる。

えつと…ドラゴンっぽい、おもちゃ？ 四角い胴体に細い首と尻尾を持った、機械っぽい見た目のドラゴンだな。

…いや、ほんとに何だそれ。

「ほい、こいつにお前の魔力を込めろ。それで動く」

「？ なんだそれ」

「いいから」

「…ふんっ!!」

訝しげに肩眉を上げるリュウガに、セントがドラゴンの玩具を押し付ける。

リュウガは首を傾げるも、言われた通りに自分の魔力を放出し、おもちゃにこめ始めた、すると。

ドラゴンの目がピカツと光り、自分から宙に浮き上がって鳴き声をあげた。

「——！」

「うおっ！ 鳴いた！」

「名付けてクローズドラゴン！ お前の相棒になる…まあ、使い魔みたいなもんさ」

「ほー…」

使い魔か…：RPGでは結構定番のアイテムだな。いや、魔法か？

しかし、どうにもこいつの発明は、いちいち世界観を壊しててもやっとするな。

フルボトルとか戦車とか、さらには機械の使い魔とは…：ほんとに何者なんだよ。

今さら疑うつもりはないけどよ。

「…んでこいつどうやって使うの？」

「そいつの背中に穴があんだろ？ そこにドラゴンフルボトルを挿す、んで、ベルトに装着して変身できるようになってる」

ああ、機械っぽい見た目なのは、普通に道具として使うからなんだな。

それで、普通のフルボトルより威力が高いドラゴンフルボトルを、

これでまともに見えるようになる……そういうことか。

…ん？ ちよつと待てよ？

「それ…お前がロック外さなきや意味ないんじゃないのか」

「もうリュウガの魔力は登録してるよ。だからあとは挿すだけでいい」

「あ？」

「クローズドラゴンにはもう、お前の魔力が入った。ベルトに装着された時点で、お前に対するロックが外れるようになってんだよ」

「…ん？ ん!? えーつと、つまり…?」

「要するに、こいつを使えばお前も変身できんの！」

なるほど……このクローズドラゴンは、変身するための鍵みたいなものになったわけか。

もうこのドラゴンはリュウガ以外の魔力は受け付けず、変身できる人間もこいつら二人限定になっている、と。

するとリュウガの奴、急に目をキラキラさせて立ち上がった。

おい、まさかお前、もう試すつもりか？

「んじゃ、さっそく…」

「ああ、言っておくけど」

セントの警告も聞かず、リュウガはジャキン！とドラゴンフルボルトを差し込み、ベルトに装着しようとする。

……あ、いやな予感。

「どのみちお前にレベルじゃまだ変身できないから、使ったらまたシビれるぞ」

「あびやびやびやびや!?!」

「リュウガちゃん!?!」

クローズドラゴンをベルトにセットしようとした瞬間、前にも見た電流がリュウガの全身に走った。

遊んでいるフィーロたちの方を見ていたラフタリアが慌てて駆け寄ってきたが……いや、ほぼ自業自得だから気にしなくていいぞ？

「そ…そういうことは先に言え…!」

「お前が聞かないからだろ…バーカ」

お前……反応が前回より間抜けだったぞ。

あびやびやって何だよその悲鳴、面白いじゃないか。

「……まだダメなのか？」

「まーだまだ。少なくともクラスアップ……レベル40くらいまでは使えないものと思っとけ」

セントがそう言つて、リュウガからベルトを取り上げる。

……いい加減、聞いておいた方がよさそうだな。

「……そろそろ教えてほしいんだが、クラスアップというのは何なんだ？」

「あ、忘れてた」

以前に聞こうとして、邪魔が入つて効けずにいた何か重要そうな単語について、セントに再度尋ねる。

「普通の奴の成長限界つてやつだよ。だいたいみんな40くらいで止まるの。星がついたらその証……あ、勇者はそのくくりからは外れるらしいけどな」

「……つてことはつまり、ラフタリアやお前はレベル40以上にはならないってことか!？」

「普通ならね」

くそっ！　なんでそんな重大な事実を勇者である俺が知らされていないんだよ!？」

経験値のことといい、この世界の連中は本気で俺に世界を救わせる気があるのか!？」

他の連中だけで十分だつてか、ふざけんな！

「でも、国から認められた奴は、教会でその成長限界を突破できる儀式をやってもらえるんだ。ま、相当信頼がないと無理だけどな」

得意げに説明してくれたリュウガだが……次第にその顔が険しくなる。

ああ……何を言いたいのか大体わかった。たぶん、俺もお前と似たような顔になってるんだろうな。

「……果たしてあのクス王が俺に許可を出すのやら」

「あー……それかー……まあ、ダメだったときのこと考えとかないとな」

もしもの話だが、おそらく現実になってしまいうんだろうな。

結局のところ、俺達はこの国に居続けても今以上に強くはなれないってわけだ。その場合、どうしたものか……。

「……ってか、なんか静かだな」

「ん？ ああ、そういえば……」

言われて気付いた。

さっきまでフィーロとメルがキャツキャウフフと騒いでいたと思  
うんだが……。

「なあ、ラフタリア。あいつらはどこだ？」

「さっきまで鬼ごっこをしていて、確かその辺りに……」

そう言っただけの向こう側を指差すラフタリア。

その瞬間、ラフタリアの……いや、俺達全員の表情が凍り付いた。

鼻提灯を膨らませて、いつの間にか眠りこけているフィーロ。

その周りに、放り出されたメルのものらしき衣服が……え？

は？ え……え!?

「…おい、ウソだろ」

「冗談…だよな？ 冗談だって誰でもいいから言ってくれよ!」

「フィーロ!」

まさか、いくらなんでも、とは思いますが、俺達全員まともな思考なんて  
できなかった。

だって、あの食欲魔人だぞ？ そして何より元魔物だぞ？

同族だってうまそうといって、止めなければ普通に食っていたであ  
ろうあいつだぞ？

やばい……冤罪が冤罪でなくなる可能性が出てきた、やばい。

「んー…なあにー?」

「おまつ…お前、いくら何でもそんなことするなんて!!」

「フィーロ…! あなた、なんて事を……!」

「は、吐け! 今すぐ食ったもん吐き出せお前!!」

「いやいや! お前らもうちよつと冷静に……大丈夫だよな、そんな  
ことしてないよなフィーロちゃん!!」

ラフタリア! 俺が言うのも何だがその想像は捨てろ!

リュウガ！ 吐き出させるな、もしそうだったら普通に証拠が出てくることになるぞ!?

セント！ お前は信じてるのか疑ってるのかどっちだ!?

するとその時、俺達はフィーロの羽毛の一部がもこもこ動き始めた事に気がついた。

「フィーロちゃん…？ うるさいよ…？」

眠たげな声を上げて、メルがすぽっと顔を出した……って、はあ!?

「な…なんじやそりゃあ!?!」  
ラフタリアもセントもリュウガも、もちろん俺も目を丸くして絶句する。

ちよつと待て、一応無事だとわかって安心はしたが、何だこの状況!?!

メル、お前どこに入ってるんだ!?! お前が入っているのはフィーロの体のどこだ!?! 訳がわからん!!

「わっ、わっ、すごい！ 手がどんどん入っていきます!」

「しかも…あつたけえ…」

「おおふ……これは」

ラフタリアたちが確かめようと、それぞれフィーロの羽毛の中に手をつ突っ込んでいき、恍惚とした表情になっていく。

…おい、そのまま寝るつもりか。

「…服は暑くて脱いだってことか」

「はい！ フィーロちゃんの中が心地よくて心地よくて…あふう」

俺が呆れた目を向けると、メルはまた眠気が勝ってきたのか羽毛の中に引っ込んでいく……そこはお前の巣かなにかか。

ラフタリアたち全員、羽毛の魔力に引き込まれたのか完全に寝ているし…。

…ほんとに、どんだけ図太いんだよ。

そしてお前ら、このカオスな状況に俺だけ置き去りにするな。

……なんか寂しいだろうが。

## 久々の王都

S i d e : S e n t o

「この度は本当にお世話になりました」

王都に着き、馬車を下りたメルティは、そう言つてぺこりと貴族らしいお辞儀をする。

うくん、やっぱりオレの知ってる貴族じゃないわこの子。

なんだかんだで楽しかったな、この事の道中も…。

「じゃあ、フィーロ。メルさんのこと、お願いね」

「うん！ わかった！」

「しつかり礼金をもらつてくるんだぞ」

「えー」

「ナオフミ様…」

そういうとこだぞ、ナオフミ。

けどメルもあんまり気にした様子を見せず、フィーロと仲良くおてて繋いで歩き去っていく。

…なんか、ラフタリアちゃんが懐かしそうに二人を見てるけど、どうしたんだ？

すぐにやめたけど、なんか気になるな。

「さて、じゃあどこ行く？」

「そうだな…まずはこれをどうにかするでしょう」

そう言つて、オレ達は行きつけの武器屋に…おやつさんのところに向かうのだった。

「ほい、つーわけで強化改修よろしく、おやつさん」

鎧を脱いだナオフミが、ラフタリアちゃんの剣と一緒におやつさんに渡す。

おやつさんは剣を確認すると、ちよつと苦笑を浮かべて肩を竦めた。

「またずいぶんこき使つてんな…まあいいや、嬢ちゃんの剣の整備と、アンちゃんの分の強化オプション追加だな。任されたぜ」

「あの…それはいいんですけど」

おやつさんが剣と鎧を持っていくと、遠慮がちにラフタリアちゃんがナオフミに声をかける。

今の彼女は、真新しい鉄の装備を身に纏い、新たな剣を腰に提げた、全身強化された姿になっていた。

うくん、見るからに頼もしいじゃないの。

「私の装備…：…こんなに揃えてもらってよかったんでしょか」

「セントは自前の鎧があるし、リュウガもそのうち手に入る。ラフタリアに一番必要だろう？」

「アンちゃん、奮発してくれるんならウチとしては助かるが、大丈夫か？ このあと聖水も買いに行くんだろ？」

「やりくりくらいできるさ」

前みたいになら、ラフタリアちゃんに冷たい目で見られなきやいいけどな。

まあ、金は天下の回り物って言うし、使える時に使っておくのがいいとはオレも思うけどな。

…オレの鎧も、そのうちいい感じに強化できないか試してみるか。

「さて、ならさっそく聖水を買に行くか…」

「何事もなきやいいけどな」

「やめろ、フラグを立てるなバカウサギ」

えー、だつてさー。

そう思わずにはいられないじゃない？ 最近、妙なことばっか続け

て起こって、ろくな目に遭ってないし。

…：…心の準備だけでもしておきたいじゃないの。

「縁起でもないことを言うな！ さっさと行くぞー！」

そう言つて、速足で武器屋を出ていくナオフミ。

この時はオレも、あんなことが起こるなんて夢にも思わなかったのであつた。

☒

数十分後、メルロマルク国内にある教会の外にて。

オレは、適当な所に腰を下ろして、中に入ったナオフミ達を待つて



いた。

「……思ったより手間取ってんな。聖水受け取ってくるだけだろうに……」

ぶつちやけオレ、ここ嫌いなんだよな。亜人に対する差別とか偏見が結構強めだし、正直こんな状況じゃなかったら来たくなかった。

リュウガもそのうち、怒りながら出て来るんじゃないかねえ。

……つーか、ほんとに遅いな。なんかあったのか？

「しようがない、今のうちに色々調べておくか……」

【ハチー！】【消防車！】

暇を持て余したオレは、ベルトとフルボトルを取り出して、色々組み合わせて遊んでみる事にした。

うーん、ベストマッチが出ない。これはハズレか。

ハチはこの間の腐竜の時にいた奴、消防車は廃村にあったポンプを吸収させて作った奴だ。

けど、ベストマッチじゃなかったみたいだな次。

【パンダー！】【ガトリング！】

前に、シルトヴェルトの山奥にいた魔物から作ったパンダフルボトルと、歯車とか金属片とかを吸収させたら出来たガトリングフルボトル。

でもこれも違った。次。

【ハリネズミー！】【ロック！】

「……んー、なかなか出てこねえな」

自分で作つといてなんなんだけども、この組み合わせに法則性ってあんのかな？

戦車とウサギって明らかに相性わるいだろ。踏み潰す側と踏み潰される側にしか見えないし。

今わかってんのは……えーと。

犬とマイク、ゴリラとダイヤモンド、ライオンと掃除機……あと何だっけ。

【パンダー！】【ロケット！】【ベストマッチ！】

「お、ベストマッチみつけ」

いろいろ試しているうちに、ベストマッチを見つけ出した。  
相変わらず法則無茶苦茶だけど。

いや、まさか爆竹からロケットフルボトルができるとは思わなかったな。

「パンダとロケットか……んー、いい感じの武器が思いつかないな。まあ後回しでいつか、次」

ゴリラモンドとかライオンクリーナー、ドッグマイクは片腕がもろ武器になってる感じだからなあ……武器作っても活用しきれないんだよな。

その点、ラビットタンクは両手フリーだし、一番汎用性が利く感じだな。

「ハチー！」「電車ー！」

「おーい、今戻ったぞ……って、何やってんだ？」

「おう、聖水買えたみたいだな。よかったよかった」

「ハリネズミー！」「消防車ー！」「ベストマッチー！」

「お、また見つけ」

意外と白熱していると、聖水を買って戻ってきたナオフミ達がオレのところに寄ってくる。

「いやな、暇だったから武器開発のアイデアを探すついでに、新しいベストマッチがないか調べてたんだ。能力使うのに一番効率いいし」

「どんだけヒマだったんだよ……」

そう言うなよお、今後の先頭で役に立つかもしれないだろう？

その時お前らは、オレに泣いて感謝することになるんだからな？  
わかってんのか？

……ていうかき、何でお前らみんなそんなに顔険しくなってるの？

「オレの事より、そつちで何かあったのか？」

「ああ……癩に触ることがな！」

オレが尋ねると、ナオフミは眉間に深いしわを刻みながら説明してくれた。

聖水を買おうとしたら、シスターがそれを質の低いもので偽って渡そうとしたとか。

それに文句をつけたら、教皇だとかいう爺さんがそれを咎めてやり直してくれたけど、『神の御慈悲に感謝してくださいね』とか恩着せがましいことを言ってきたんだとか。

……いや、御慈悲云々以前に、普通に犯罪じゃね？

そのシスター普通に詐欺働こうとしてたわけでしょ？

「……腐ってんなく、この国も教会も」

「妙に上から目線で言ってきたやがって、俺が悪役なのが前提みたいじゃないか」

「ウンザリするぐらいロクでもねえな、ぺっ！」

「み、みなさん……」

ナオフミが今にも唾を吐きそうな態度で、リュウガはほんとに唾を吐いて怒りをあらわにし、ラフタリアちゃんがそれを宥めようとする。

…現場に居なくてよかった。

いたらオレ、間違いなく後先考えずに暴れてたわ。

「あー、さっさと憂さ晴らしに暴れてえ！」

「だな！ 新フォームの確認もしときたいし」

「お前ら……」

喧嘩っ早いリュウガと同調するのは微妙な気分だけど、マジでオレもこの鬱憤晴らしたい！

ん？ 何だ、ナオフミの奴急に難しい顔になっちゃって。

「……」

「どうした？ 浮かない顔して」

「前回の波では、明らかに民間人の負傷者が多すぎた。もつと騎士団の連中が動いていれば、減らせたかもしれないに……」

……あの時は、あいつらさっさとボス退治に行っちゃって、村の連中の事はほったらかしだったもんな。

いや、優先順位つてもんがあるだろって思ったよ。

……そういえば、勇者の能力の中に確か役に立ちそうなものが。

「例の編隊機能のことか？」

「そうだ。あいつらこの世界について詳しいのかと思ったら、てんで

役に立たない！　これから波も強くなって行くんだと思うとな…」  
「…そうですね。ですが私たちだけでは、どうにも…」

今ここにいないフィードを合わせても、五人。

他の勇者は当てにならねえし、被害になる村とか町を守るには、実質人手が足りなさすぎる。

うくん、なんか手詰まりって感じだよな…。

そんなことを考えていた時だった。

「あーっ！　その…盾の勇者——」  
「!?」

急に背後からかけられた呼び声に、オレ達は思わずビクツと身体を振るわせて振り向く。

そこにいたのは…メルロマルクの兵士!?

何だ、何の罪状で今度は冤罪を吹っかけてくる気だあのおっさんは!?

いや、今はそんなこと考えてる場合じゃない!

「やべえ、ずらかれ！」

「一時解散！　あとでどっかで落ち合おう！」

「了解！」

「逃亡犯か何かですか!?!」

ラフタリアちゃんがなんか叫んでるけど無視!

痴漢にまちがえられた時はなあ、駅員さんに捕まったらもう間違いなく犯人に仕立て上げられちまうんだよ!!

…あれ、例えを間違えたかな?

ていうか、逃げるのは逆効果になるんだっけ?

ええい、もうどっちでもいいや!

「ま、待って…！　話をー！」

「しつっこいな…！　今度は誰だ？　誰のクソツタレな命令だ!?!」

「わからん！　わからんが振り切るまで走れ！」

ラフタリアちゃんと一緒に走る俺の耳が、ナオフミとリュウガの声をどうにか拾う。

そっちはそっちで何とかやってくれよ!?!

「ったく…！ こっちは何もしてないってのに、なんで追われなきやならねえんだよ!？」

「…いつだってそうだ…！」

「オレ達は何もしてないってのに!!」

そんな悲痛なあいつらの声が遠くなっていくのを感じながら、オレとラフタリアちゃんは町中を必死に駆け抜けていった。

## 槍の勇者再び

S i d e : R y u g a

謎の兵士の追跡から逃げて逃げて……オレとナオフミは街角に辿り着いた。

あちこちに屋台が出てる…市場かな？ そんな感じの場所だ。

こっちはなんにもやってないってのに、今度は何の冤罪ふっかけてくる気だったんだか。

……正直に言うと、なんか途中からスゲー悲痛な声で追ってきてたから、若干罪悪感が芽生えた気もしてたんだが。

まあ……いいよな？

「ハア……ハア……ここまで来ればさすがに……」

「なんだったんだ、あの兵士は？」

「知るか。とにかく、ラフタリア達と合流しよう」

ナオフミももう疲れてるっぽいし、ここからは身を隠しながらいか。結構人もいるし、いい隠れ蓑になるだろ。

そう思っつて、歩き出そうとした時だった。

「みつ、みみ……見つけたぞ尚文い!!」

っ……!

この……セントを遥かに凌ぐウザさを含んだ響きを持つ声は!!

気づいた瞬間、オレの身体は勝手に動き、ナオフミに向けて振り下ろされた槍を、両拳で挟んで受け止めていた。

「ふんがっ!!」

「元康……!? なんでお前がここに!?!」

あっぶね!

こいつ……マジでナオフミを殺す気で攻撃してきやがったな!?

「何しやがるー!」

「おのれこの奴隷使い勇者め! とうとうこんな小さな女の子を自分の盾にするようになりやがって……! 恥を知れ!!」

「恥晒してんのはお前だ!!」

「小さいって言うんじゃねえ!!」

昔は…！ 昔はもつとすごかったんだ！！

ホントならもつとリーチもあって、パワーもあってレベルもあって…乳も身長も何もかもがあったんだ！

どいつもこいつもガキ扱いしやがって！

ふざけんな死ね！ バーカ！ アホウ！

「どいてくれ、君！ 俺はこいつをぶっ飛ばさなきゃいけないんだ！」  
「るっせえ！ オレが戦うことに、お前にとやかく言われる筋合いはねえ！ 引っ込んでろ！」

「そんな汚い言葉遣いまで…！ なんて奴だ、尚文貴様！！」

「これは元からだ！ 悪いか！」

お前にだけは女扱いされたくない！

気色悪いんじゃないボケ！

…つて、考えてるだけで鳥肌立ってきたわ、クソが！！

槍をぶん上げたら、あんにやろう大してバランスも崩さずに着地しやがった。

スカした顔しやがって、腹立つなく！！

「前々から言おうと思っていたが…！ こんな可愛い子に戦わせるなんて間違ってる！ ラフタリアちゃんに飽き足らず、あんな…」

もうホント何なんだよこいつは！！

言動こそフェミニストっぽいけど、根本的にあるのは女にいいところを見せて、優越感に浸りたいっていうゲツスイ欲望なのはまるわかりなんだよ！

周りにいる女だけで満足しとけ、エロ猿！

あーもう！

なんかこいつといると罵倒ばっか出て来るな、おい！

「あんな可憐な子にまで戦いを強要するなんて…堕ちるところまで堕ちたな！」

「何を言って…ああ、メルのことか。あいつは奴隷じゃなくて」

「メルちゃんと言うのか！ 可愛らしい名前だ！」

「いや、聞けよ」

あ？ メルに対しても反応すんの、こいつ？ あいつ中身はともか

く、見た目は大分幼いぞ? …オレも人の事言えないけど。  
うわ……もつと鳥肌立ってきた。

「あの深い海のような碧眼…サラサラの絹みたいな金髪…純白の翼…  
! まさに俺の理想の天使!!」

…ん?

おい、ちよつと待て。

メルの髪は青色だし、羽なんて生えて……あ。

……あくあ、こいつやらかしてやんの。

「あー……そいつはメルじゃなくて、フィー」

「俺の大好きな魔界大地のフレオンちゃんみたいな子まで奴隷にする  
なんて羨まつ……なんて卑劣なやつなんだ!!」

「おいコラア!! 今完全に本音が出てたぞ!!」

ナオフミがキれるが、槍の勇者は全く気にした様子が……つていう  
か、聞いてもいないな、あれ。

若干妄想に入っていて、くそキモイ。

ところで誰だ、魔界ウンタラフレなんちゃらちゃんつてのは。

とりあえず見た目は普通に想像できつけど……アイツといっしょ  
だろ、どうせ。

「……なんでこんなのが王女に気に入られてんだよ」

「あれだ、バカな方が操りやすいからだろ」

「ああ、そういう……」

この間見た時も、あのクソ女に良いように利用されてたしな……  
っ！かナオフミに聞いた感じ、あの女が諸悪の根源らしいし。

哀れとは思うが、同情はしないな。

ていうかいい加減、ナオフミに槍向けるのやめろ!!

「君も彼女達も、俺が救ってみせる!」

「余計なお世話だくそつたれ!!」

やんのか? あ? オレがお前ごときに突破されると本気で思っ  
てんのか!?

上等だコラア!

「どいてくれリユウガちゃん! そいつを処分できない!」



「うるせえ!! リユウガちゃんとか呼ぶんじゃねえ気持ち悪い!!」

ナオフミには直接戦う力がないって何べんいつたらわかんだよ、こいつの脳みそは女の事しか入ってないのか!?

あーもー……マジでこいつ、力の限りぶっ飛ばしたい。

でも本気でやったら多分、この辺の奴ら巻き込みまうしなあ……  
つか、そのへん勇者なら気にしろよ!!

「お前らも止めろよ! ここをどこだと思ってるんだ!!」

「そうだそうだ!」

「喧嘩ならよそでやってくれ!!」

案の定、周りで屋台を出してた連中も騒ぎ出してる。

そりやそうだ、せつかく平和なところで物売りに来てんのに、何が悲しくて乱闘に巻き込まれにやならんのだ。

なのに……!

槍の勇者の隣から、あのクソ王女が悠々と顔を出しやがった……!

「いいえ……これは国が認めた正当な決闘ですわ。邪魔をするなんてもつてのほか、さつさとその薄汚いトカゲは失せてくださらない?」

「あんのクソアマ……!」

「断るっつの! 前回同様、俺に利がゼロじゃないか!」

あいつ……! いけしやあしやあと!!

クツツ……あー、あいつの顔見てたらまた暴走しそうになる!!

耐えろー…耐えろー。

あの顔面ぶん殴ってボコボコにしたいけど、それやったら国外追放どころか処刑もの、その上ナオフミにまで迷惑がかかる。

でも……マジでブツ殺してえ。

「おやめくださいー!」

オレが殺意を押さえるのに必死になっていた時、そいつは現れた。

お前は……さつき追って来た兵士?

え? どういうことだ?

「お前……さつきの」

「こ、こは民の往来です。勇者同士の私闘に使っていい場所ではあ

りません……！」

兵士が……よく見たら結構若い奴だな。

新入りっぽい雰囲気のそいつが、ちよつとおどおどしながらクソ王女相手に啖呵を切つてやがる。

…おい、大丈夫なのか、これ？

ていうか、何が起こつてんだ？

「聞こえなかったのかしら？ 私、国が認めた正当な決闘だと言つたはずよ。それを邪魔するなんて何様のつもりかしら？」

「ぼ、僕は兵士です！ 国の平和を守るのが僕の仕事です！ それなのにこんなことを見過ごすなんて、できません！」

……オイオイ。

このクソつたれな国にも、こんな筋の通つた奴がいたのかよ、ちよつと泣きそうだわ。

「無礼者！ 国の意向に逆らおうとは、反逆者として処刑してやつてもいいのよ！」

だが、やつぱりあのクソ王女の胸には響かない……つていうか端から見下してるから意味ねえな。

庇つてくれんのはありがたいけど、このままだと此奴もえらい目に遭いそうだ。どうすつか……！

槍の勇者も若干惑つてるみたいだ。おろおろしながら、クソ王女とナオフミを交互に見てる。

…でもそれぐらいの常識があるなら、お前の女止めろよな。

うかつに動けば即ケガ人が出そうな、一触即発の雰囲気が漂い始めた、その時だった。

「貴女にその権限はありませんよ、姉上」

……！?

え、あの声……え？

「おい、あれは……」

「……どう言うことだ」

突然響いてきたその声の主に、オレとナオフミは同時に振り向き、そして驚愕に目を大きく見開く。

ど、どういうことだよ。

だってあれは……え、どうして。まさか……いや、ウソだろ!?

「お前は……!」

「お久しぶりです。相変わらずのようで、逆に安心いたしましたわ」

影が現れた時以来の、たじろぐ姿を見せるクソ王女。

その目の前で仁王立ちし、腰に手を当てて書状を見せつけているのは——オレ達が今朝別れたばかりの、いいとこの生まれっぽいお嬢。

メルだったのだから。

## メルの本体

S i d e : N a o f u m i

「姉上、随分とお戯れがすぎるようですね」

堂々とした……俺が想像していた以上の身分を感じさせる佇まいで、メルがビッチに話しかけている。

そして……ビッチがあいつに、押されて見える。

「戯れなんかじゃないわ。私は勇者様の補佐として仕事を……」

「民の往来で決闘をさせ、無駄な被害を出すことが仕事だど？」

ビッチはいつもの詭弁で煙に巻こうとしているけど、メルには通じていない。

と、思っていたら、雰囲気にもまれていた元康が我に返り、ビッチを庇うように前に出てきた。

「お、俺もやりすぎたかもしれない。だが聞いてくれ！　そこにいる尚文は本当に危険な奴で……」

「戦えない民の多くいるこの場で刃を振り回す貴方と比べてもですか！？」

「ひいつ！　ごめんなさい！」

が、メルの気迫に圧されてすぐに引つ込んだ。何がしたかったんだ、あいつ……。

て言うか……俺もさつきから流されっぱなしだ。

何が起こってる？　今この場で……何が起こってる？

「ナオフミ様！」

「ごしゅじんさまー！」

するとそこへ、さつき別れたラフタリアとセント、メルを送り届けにいったファイロが戻ってきた。

三人とも、この状況に驚きを隠せないようだった。

そりやそうだ、ビッチがあんなに気圧される姿なんか、前のレース以来想像だにできなかったからな。

「……なんかえらいことになってきたな、あれ」

「あれは一体どういうことだ？　あのビッチが押されてるぞ？」

「あいつらのあの反応を見るに…間違いないな」

ん？ セントがなんかメルを見て唸っている…お前、何を知ってるんだ？

「あの子の本当の名前は、メルティールメルロマロク。この国の第二王女で、正当な王位継承権第一位の持ち主だ」

「は!？」

え……あ、あいつが？

いや…そういえば確かに姉上って言うていたから、そうなんだろうけど、でも…え!?! 衝撃の事実を理解が追いつかないぞ!

……ん？ 今なんかおかしなこと言わなかったか？

「…第一位？ 妹っぽいが?」

「上があればだからな。姉より権力があるんだよ」

「はっ、ざまあねえな」

ああ……流星にあれに国を任せるつもりはないわけか。

あのクズ王もそのへんの分別はある……のか？ ぶっちゃけ同レベルに思えるが……どうなんだろうな、そのへん。

「ごしゅじんさまー、なにかあったの?」

状況を全く理解していない様子のフィーロが、首を傾げて話しかけてくる。

伝わるかはわからんが、一応説明してやろうとした時だった。

「お嬢さん、お名前は?」

元康が来た。

なんか、以前にラフタリアとセントをナンパしてきた時よりもキラキラした顔で、キザったらしく手を取って……うわ、気持ち悪っ。

「この状況でも見境なしかこのスケコマシ!!」

「フィーロのこと? フィーロの名前はフィーロだよ!」

「答えていい!!」

お前…! そいつはお前の股間を蹴っ飛ばした奴だぞ。

わからないのは仕方ないが、恐いもの知らずというか面の皮が分厚いというか。

「デブ鳥に神鳥なんて呼ばせて、成人なんて言われていい気になって

るみたいだが……もうそうはいかないぞ！」

なんか急に激昂した元康が、ぶんぶん槍を振り回して……って危なっ!?

いい加減にしろよ！ あいつに止められたばかりだろうが!!

「フィーロちゃんは俺が救ってみせる！」

「こいつは……！」

「やりの勇者様！……ですから武器をお納め下さいと……」

「そこをどいてくれ、フィーロちゃん！……俺は君を助けたいんだ!!」

メルが止めようと再度声を張り上げるが、元康の奴状況に酔って聞いちゃいない。

くそっ……いっぺんボコって黙らせるか？

そう思い、ラフタリアたちに目配せしようとした時。

「……フィーロのことデブ鳥って言った」

そう、聞いたことがないくらい低い、感情を押しさえつけた声が、フィーロから聞こえてきた。

……今、初めてこいつのこと怖いつて思ったぞ。

「なっ……お前女の子に向かってなんてことを！」

「いやそれお前だから」

「お前が言ったの、その子に、デブ鳥って」

「？……何を……」

セントとリュウガが呆れた目で説明するが、元康は全く理解していない。

すると、奴の目の前でフィーロが変身し——ファイロリアル・ク

イーンの様で立ち塞がった。

その瞬間、元康の顔がおもしろいぐらいに引き攣った。

「……え？……き、君がああデ——」

元康が再びその単語を言いかけたその瞬間。

ゴツツ!!と俺も思わず内股になるぐらいの轟音が鳴り響き、元康が再び天を舞う。

白目を剥き、泡を吹いた奴はそのまま放物線を描きながら吹っ飛ばされ、近くにあった屋台に頭から突っ込んだ。

「モ…モトヤス様〜!？」

ビッチが慌てて駆け寄るも、元康はぴくぴく震えるだけで反応がない。

俺とセントとリュウガは、滑稽な姿を晒す元康を見つめた後、ポフンツと人型に戻ったファイロに振り向き、にやりと笑みを浮かべる。

「「イエ〜イ!!」」

「わ〜い!!」

歓声を上げた俺達は、三人がかりでファイロを抱え上げ、わっしょいわっしょいと宙に放り上げる。

俺達の熱烈な喝采に、ファイロも満足げで満面の笑顔になる。

ははは! ここに発泡酒やビールがあつたら思いつきりぶかつてるんだがなあ!!

「だから喜んでではダメと…: 胴上げ!？」

ラフタリアが無茶苦茶戸惑ってるが、今はそれに構っている暇はない!

ファイロ、やはりお前を買って正解だったぞ! こんなに爽快な気分になったのは久しぶりだ!!

「ナオフミ様! やりすぎですってば!」

「いいじゃないかラフタリア…: 女の子にデブなんて言ったあいつが悪い」

「そ、それは…」

ラフタリアも思うところがあるのか、注意を止めて目を逸らす。

そうだろうそうだろう、お前だってあいつにあんなことを言われたら腹が立つだろう!

歓喜に沸く俺達だったが、続いてかけられた声に一気にテンションを引き戻された。

「…あの、聖人様。少しだけ、お話をよろしいでしょうか」

そう、遠慮がちに話しかけてくるメル——いや、メルティを見下ろし、俺は自分の思考が冷えていくのを感じた。

Side: Sento

「…で、なんでウチなんだよ?」

連絡も無しに舞い戻ってきたオレ達を前にしたおやつさんがそう言い、オレ達はたまらず苦笑をこぼす。

うん…でもさ、なんか行きつけみたいになってて他に思いつかなかったんだよね。

「悪い悪い…おやつさんのところ以外に思いつかなくてさ」

「はあ…厄介ごとはほどほどにしてくれよ」

ため息をついたおやつさんは、カウンターに肘をつけてそれ以降口を閉ざす。

店が静かになったタイミングで、ナオフミがメルに…メルティ第二王女様に向き直った。

「メルティ・メルロマロク…だったか?」

「はい…以前は名乗ることができず、申し訳…」

「謝罪ならいらん。話もする気がない」

丁寧に礼を述べる王女様だが、それをナオフミがズバツと遮る。

オイオイ…と注意しようと思ったが、ナオフミの奴ムチャクチャ敵意剥き出しで、言葉を挟めなかった。

この勇者、恐い。

「フイーロ、もうこの子と遊んではいけませんよ」

「えーっ」

「なんで親目線…?」

へんな言いつけに、リュウガも呆れた目を向けている。

まあ、立場的に親っぽいけど、不良と付き合い出した子供を叱るみたいなの…その台詞はどうなの?

「名前を隠して近づいてきた目的はなんだ? また俺を貶めるため

か、それともフイーロか」

「そんな…! 私はっ」

「問答する気はない。悪いがお前が王族ってだけで、俺はお前を信用できない」

きつぱり、微塵も会話をする気を見せないナオフミの態度に、さすがの王女様もムツとした様子を見せる。



これに関しては王女さんの方が正しいが…ナオフミも事情が事情だしなあ。

「す、少しくらい私の話を聞いてくれたって…!」

「お前の父親は、ハナから俺を悪人と決めつけた上で一切話を聞かなかったぞ」

うん、そうなんだよね。

ぶっちゃけそのせいで、ナオフミの心はまだ凍ったままなんだよね。

…でも、やっぱ王女様に来れはかわいいそうかな。

「わかつたらさっさと行け。もううんざりなんだよ、お前ら親子に振り回されるのは!」

言い返そうとするメルテイ王女様だが、ぎろりと睨みつけるナオフミに気圧されたのか、立ち向かう様子がない。

いや…流石にこんな幼い子供にガチギレすんのはどうなのよ、ナオフミ。

そうこうしているうちに、王女様の護衛で改めて送られて来たのか、メルロマ六の兵士達が店にやってきた。

「姫様、そろそろお時間です」

「…わかつたわ」

兵士に促され、王女様が渋々店を後にする。

それを心配そうに見送っていたフィーロちゃんが、ぶんぶん手を振って声をかけた。

「ま、またね。フィーロちゃん」

「うん! またね、メルちゃん!」

パツと明るい顔になり、すぐにまた暗い顔になったメルテイ王女様。

…これは、うん。

ちよつと後味わるいなあ。

## 信頼は買えない

S i d e : E r h a r d

…あんな悲しそうな背中、見た事ねえな。

第二王女さんの顔は久しぶりに見たが、アンちゃんの返事であんなに落ち込むとはな……よっぽど鳥の嬢ちゃんと仲が良くなつたんだな。

アンちゃんの気持ちもわからなくてもないが、ちつとばかり口を挟みたくなるな。

「…アンちゃんよお」

「あれはどうなんだよナオフミ」

「そうですよ、いくらなんでもかわいそうだと思います」

「ごしゅじんさまー、メルちゃんいい子だよ」

「問答無用で突っ返すのもな…」

おっと、俺の他にも同じ感想を抱いた奴らがいたようだ……つて、こりや全員だな。

みんなしてアンちゃんをじとつと睨んで、味方が一人もいねえ。

「あいにくだが、あのクズの娘っただけでも信用ならない。カエルの子はカエルっ言うだろ」

「いやいやいや…とても一緒とは思えなかつたけどな」

ウサギの嬢ちゃんが言うように、あの王女さんは違うと言える。

なんせ、あの女王の娘だからな。

…もう一人は、まあ、あれだけだよ。

ん？

ふと入り口を見ると、一人の若い兵士がうちの店を覗き込んでるのが見えた。

「あの…」

「！ お前、まだいたのか…！」

若い兵士が遠慮がちに話しかけようとした矢先に、アンちゃんが即座に追い出す姿勢を見せる。

オイオイ…流石にそりやあ過剰反応ってやつだろ。

「ま、待ってください！ 僕の話聞いてください！」

「この国の兵士のか!? あいつ以上に信用できないがな！」

「聞いてくれるまで、ここを動きません！」

噛みつくような勢いで怒鳴りつけるアンちゃんを前に、若い兵士は一步も退く様子を見せねえ。

その様子があんまり必死に見えたのかねえ：アンちゃんもそのうちトゲを引っ込めて、ため息をつきながら向き直った。成長したじゃねえか。

「……わかった。で、何の用だ？」

「は、はい！ 実は……」

若い兵士が言うところによると……どうやらアンちゃんと一緒に波で戦いたいんだという。

聞けばこいつは、前にアンちゃんが助けたりユート村の出身で、生き残った奴の中にはこいつの家族もいたらしい。

で、その恩義に報いたいってんで、有志を募って瞳孔の許しを得に来たんだとか。

……くう、泣かせるじゃねえか！

恩義で戦いたがるこいつもそうだが、アンちゃんを助けたいってやつが一人でも出てきてくれたんだからよ！

「び、微力ながら、勇者様のために戦いたいです！ どうか、我々の同行をお許してください！」

深々と頭を下げる若い兵士だが、こりゃあアンちゃんとしても渡りに船なんじゃないのか？

人手不足でいっつも頭抱えてたろ。

するとアンちゃんは、何か考え込む様子を見せると、懐から一つのアクセサリーを取り出し、若い兵士に突き付けた。

「え？ こ、これは……」

「俺が作ったアクセサリーだ。値段は銀貨150枚……そいつを買うなら、信用してやる」

あ……ああ!?

銀貨150枚って……いや流石にそのアクセサリーじゃ高すぎる

ぞ！

思わず、アンちゃんを見る目が険しくなっちゃったよ。

「それ、売れ残りの…」

「おい、ナオフミ…！」

「そりやちよつとボリすぎだろ兄ちゃん…」

「黙ってろ」

嬢ちゃんたちも見過ぎせないのか、アンちゃんに咎めるような目を向けている。そりやあ、お前さん達なら言い咎めるわな。

だが、アンちゃんはそれを気にせず、兵士だけを見据えて続けて告げる。

「どうした？ そいつを購入するだけで俺の信用が得られるんだぞ？

…それとも、口だけか？」

「…！ わかりました！ なんとか工面してきます！」

若い兵士はそう叫ぶと、俺の店を飛び出して何処かに走り去っていく。

…あれ、大丈夫かねえ。

せつかくくれた厚意が無駄になっちゃうんじゃないかねえのか？

「ナーオーフミーくーん？」

「お前な」

ウサギの嬢ちゃんと龍の嬢ちゃんも、さつきより厳しい目を向けてアンちゃんを詰る。が、やっぱりアンちゃんは気にしてねえな、はあ…。

と思つたら、急に出口に向かって歩いていっちゃった。

「おい、あいつ待たねえのか？」

「来たら待たせておけ。先にクラスアップに向かう」

…本気で来ると思ってたねえのか？

あの感じは嘘や冗談で話しかけてきた感じじゃなかったんだけどなあ…：…いつになったら、あの人間不信が治るんだか。

「ナオフミ様ったら…」

「…まー、あいつなりの考えがあるんだろ。待ってやろうぜ」

呆れる嬢ちゃんだが、アンちゃんがどうするのか信じて、もうちっ

と様子を見てやろうと俺は思う。

嬢ちゃん達が、アンちゃんの心を溶かしたように、な。

☒ 「……って、感じて行ってきたかと思えば」

俺にあの兵士への言伝を託し、今度は教会にクラスアップをしに行ったアンちゃん達だが、無茶苦茶不機嫌そうに戻ってきた。

「どうしたんた？ 何そんなイライラしてんだ？」

「どうしたもこうしたもあるか！ くそっ！ この国の連中は本当にクズばかりだ……！」

「まさかあんな手を使って嫌がらせしてくるとは……」

何をそんなに、と思つて聞いてみれば、その内容に思わず俺も顔をしかめた。

なんと教会のシスター連中、クラスアップに金貨十五枚を要求したあげく、盾の勇者には許可を出さないとかほざいてきやがったんだとか。

…流石の俺も、そりゃあ無理矢理が過ぎると思うぞ、国王様よ。

「いつその他の国に移住すつか……」

「奴隷商から聞いたが、他の国にもあるんだってな？ 龍刻の砂時計は」

「あ、ああ…アンちゃん知らなかったのか」

望まれず召喚されたアンちゃんは、普通なら教えられるあらゆることが伝えられてないらしい。

まったく…嫌うにもほどがあるよなあ。

「だがまあ……クラスアップするには国の信用を得ないとだしなあ、時間と手間はかかるだろ」

「また一からコツコツとつて感じか…それはまあ、仕方ないか」

「どつちにせよ、今すぐには無理だ。準備が必要だな」

ほんと、何でこの国の連中は四人もいっぺんに召喚しちまったんだか。

しかも、よりによって盾の勇者をこの国にだぞ？

しばらく険しい顔で愚痴っていたアンちゃんだったが、やがて諦め

たように肩を落とす。

「……なら、しばらくはその準備に取り掛かるか」

そう言っつて、今後の事も相談しようとした時だった。

俺の店を再び訪れる奴が現れた。

「盾の勇者様！」

興奮気味な声に振り向くと、そこには息を切らせたさつき若い兵士の姿があった。

それっただけじゃなく、仲間らしき別の兵士や、亜人の魔法使いの姿もある。

来ると思っつてなかつたのか、呆氣にとられた様子のアンちゃんに、若い兵士は中身が詰まった袋を差し出してきた。

「こ、これ……！ みんなでカンパし合っつてかき集めて来ました！ どうぞ、お受け取りください！」

「早いな！ さつき別れてまだ一時間たつてないぞ!？」

「先に事情を話したら、みんな手分けして集めてきてくれたんです」

若い兵士が言っつと、同士らしき後ろの連中も誇らしげに頷いてる。

アンちゃんはしばらくそいつらを見つめて、小さく頷いてみせた。  
「…わかつた」

アンちゃんは袋に手を伸ばすが、受け取らずに若い兵士に押し返す。

そしてさつき見せたアクセサリを渡すと、ステータス魔法をいじつて若い兵士に何かを送り付けた。

ありやあ、多分パーテイ申請の通知かなにかだな。

「勇者様！」

「そいつは信用した証にくれてやる。ただ…もし裏切つたら承知しないぞ」

「は、はい!!」

嬉しそっうに笑っつ若い兵士に、アンちゃんは鼻を鳴らす。

それを見た俺や嬢ちゃん達の顔にも、たまらず笑顔が浮かんで来た。

「…やっぱり試してやがったな？」

「信用は金では買えないからな。わかりやすい誠意つてもんを見せてもらおうと思っただけだ」

ぶつきらぼうに言うアンちゃんが、そう言っただけで店を後にする。

つたく…素直じゃねえな、この勇者様はよ。

S i d e : R a p h t a l i a

「…どうした、ニヤニヤして」

「せめてニコニコと言ってください！」

ナオフミ様に味方したいと言ってくれた兵士さん達の事を思い出していた私に、ナオフミ様はそんなことを言います。

あれを見て何も思わなかったのでしょうか、まったくもう…！

「さっきの兵士達の中に…亜人の子もいらっしやいました。きつと、この国では肩身の狭い思いをしているはずなんです」

私の台詞に、セントさんもリュウガちゃんもうんうんと強く頷いています。

同じ亜人として、あの姿には感じ入るものがあつたのでしよう…

私も今、胸が熱くて仕方ありません。

「本気でこの国の力になりたい、そう思っているはずなんですよ」

「…俺だって、何でもかんでも疑うつもりはない。ただ…見極めが必要なんだ」

…そうおっしゃるナオフミ様ですが、気付いていますか？

どこか、嬉しそうな顔に見えますよ。

## 正義の味方

S i d e : R y u g a

それは、ある事件があつてから少したつてからの事だった。

武器屋の親父の店を後にしたところで、ナオフミが急に妙な事を言い出した。

「……俺はお前の美的センスを疑うぞ、ラフタリア」

「どうしてですか!?! カッコいいじゃないですか!」

「いやでもこれはなあ……」

険しい顔で、ナオフミは自分の鎧を見下ろす。

今身に纏っているのは……蛮族の鎧+1だっけか?

うん、胸当てに付いた例の腐竜の核とか、なんかゴツゴツしたところとか、首周りのふわふわとか、色々ついてるけど……

それを見て目をキラキラさせるラフタリアに、ナオフミがぐちぐち文句を垂れだして……いや、何が気に入らないんだ?

「山賊のボス」

「ワイルドでいいんじゃないか?」

「フイーロもそう思うよ?」

「まともなのはセントだけか……まあ、親父の善意でできてるしこれ以上文句は言えん」

ぼそつとセントが呟いた一言にえらく頷いてるけど……オレ達の評価に言いたい事があるなら聞こうじゃねーか。

最終的に諦めたのか、ナオフミは深いため息をつけてその場から去ろうとする。

波まであと少し、できる事をいろいろしておこうかと思っていた時だ。

「見つけましたよー!」

なんかちよつと偉そうな声が聞こえて、オレ達は胡乱気に振り向く。

あれは……誰だ? 知らねえ男が二人、こつちに向かってきている。



持ってるのは剣と弓？ ……って事は。

フツとオレの頭に思い浮かんだ考えを当たりだというように、セントが訝しげな目を向けて眩きをこぼした。

「…弓の勇者？」

「へー、あいつが……何でここにいんだ？」

「あなたですね！ 僕達の報酬を横取りしたのは！」

じっと見つめるオレ達に構うことなく、剣の勇者と弓の勇者？がナオフミに詰め寄ってきた。

あ？ 何だお前ら、いきなり出てきて偉そうに。

「……いきなり何の話だ」

「とぼけないでください！ 僕はギルドの依頼で悪徳領主の不正を暴き、町に平和を取り戻したのに、依頼料は別の誰かに支払われたと…！」

「…俺は、ドラゴン討伐の依頼がキャンセルされたと聞かされた」

…弓の勇者が言ってるのは、あれだ。

前に行商しに行った、やたら汚れた連中が食べ物欲しがりに来ていた土地の事だ。置物と交換したがってたやつもいたな。

何でも、反乱が起きて領主が変わったのはいいが、重税に次ぐ重税ですっかり生活が苦しくなっちゃったんだとか。

…その反乱を率いていたのが、こいつって訳か。

もう一人の方は…ああ、そういえばあの腐竜、元は剣の勇者が討伐したやつだったっけ？

ふーん、ほーう？

こいつ、まだ何にも知らされてないわけか。

「そんなことをするのはあなたぐらいなもんです！」

「どういう推理だ!？」

「冤罪にもほどがあるだろ…！」

これはオレでもよくわかる。

こいつら……自分がやらかしたことに気づかないで、ナオフミを元凶と思いついて言いがかりつけに来やがったな？

「…お前、依頼を受けるときちゃんと言分を明かしたのか？ 何者か

もわからないのに、本人かどうか証明できるわけないだろ」

「ぐ……！」

セントがもつともなことを言つて、弓の勇者が声を詰まらせる。何だっけ……コーモン様とか何とか、ナオフミが言つてたな。身分を隠して世を忍び、悪を捌く……とかそんな物語なんだって？

……それ、なんか意味あんの？

「善行を自分から主張しろとでもいうんですか!? そんなの……僕の正義に反します！」

「矛盾してるんだよ、お前のやり方は。賞賛されたいなら名乗ればいだろうが」

いつになく、セントの口調が刺々しい。

なんだ？ 弓の勇者のやり方一つ一か……あり方そのものにいやな目を向けてる感じがするな？

なんかあったのか？ こいつと。

「ついでに剣の勇者。お前にも言いたいことあるぞ」

「……なんだ」

「お前の受けた依頼だが……お前がドラゴンの死骸を放置したせいで疫病が蔓延したんだ。キャンセルされたのはそのせいだ」

「なに!?!」

セントに言われて、剣の勇者が愕然とした反応を見せる……あれ？ なんかこう、気取った奴だから「そんなこと知るか!」とか言うのかと思つてたが、予想とちがったな。

「ちなみにこいつら、その時に腐肉を浴びて呪い食らつて、今治療中な」

「そんな……！」

急によるめき出したと思つたら、剣の勇者の奴、オレ達に頭下げた。

……なんか、調子狂うな。一方がめつちや上から目線な分、余計に妙な感じだ。

「……それは、すまなかつた」

「鍊さん! この人のいうことを真に受けるんですか!?!」

「嘘をつく理由がない…」

「こつちを責める材料が減ったからか、弓の勇者がちよつと焦ってる？」

「はっ！ ちゃんと考えもしないで勝手にオレ達を悪役扱いするからこんなことになるんだよ！」

「くっ…ぼ、僕は認めませんよ！ あなたには、僕の功績を妬む理由が…」

「あのさあ、弓の勇者様」

「なおも言い募ろうとする弓の勇者を遮るように、セントが呆れた様子でもう一度口を開く。

「胡乱気な顔で振り向く弓の勇者をセントは…すげえ鋭い目で睨みつける。」

「これは…怒ってる？ いや、嫌悪してるのか？」

「あんたは報酬が欲しいから依頼を受けたのか？ 町の人間が苦しまないようにとかそういう目的で戦ったんじゃないのか？」

「そ、そうですよ!? 僕は正義のために…」

「だったら怒る前に嘆けよ。頑張ったけど役に立てなかったって」

「ああ、そこか。」

「そういえばこいつ、報酬が支払われなかったことにぼつか拘ってて、町の困窮ぶりには触れようとしなかったな。」

「自分の不甲斐なさより先に、自分が、しよ…しよう…褒められなかったことの方が重要そうな物言いだった。」

「睨み返す弓の勇者に、セントは聞いたことがないくらい低い声で告げた。」

「見返りを求めたら、それは正義とは言えないぞ」

「…ちよつと、ゾツとした。」

「何だ？ 今、セントが知らねえ別人みたいに見えたが…気のせいかな？」

「弓の勇者もその辺の威圧感を感じ取ったのか、若干後退ったけど、」

すぐに元に戻って歯を食い縛ってる。

でも否定できないのか、それ以上何も言っただけだった。

「わかったらさっさと帰れ。無駄な時間を潰してる暇なんてないだろうに」

「……ぜ、絶対に認めさせてみせますからね！」

さつきから沈痛な顔で俯いている県の勇者と一緒に、弓の勇者はどっかに立ち去っていった。

……なんだかなあ。

勇者つてもつとこう、希望の象徴っぽいキラキラしたやつを想像してたんだが……。

今の奴らはなんか、ギラギラしてたな。

ただの人間そのままだった……いや、ガキだから仕方ないのか？

「弓の人、そんなにお金欲しかったのかな？」

フィーロの純粋な感想がえらく重く聞こえる……これ、大丈夫か？

この国の子供とかに見せたら、勇者信仰が衰退したりしないか？

そういえば、この国の宗教って確か……やめとこう、考えたら頭痛くなってくる。

「……あれが、波を控えた勇者の今の姿か」

「やれやれ、って感じだな」

ナオフミもセントも呆れた感じで言ってるだけだけど……大丈夫なのかねえ？

……まあ、オレも今はあいつらの事はどうでもいいんだけど。

さつき聞いちゃった一言が……オレの心に、結構深々と突き刺さった気がしてたから。

「……セント、今のセリフは、結構胸にきたぞ」

「ええ……カッコよかったです」

「セントお姉ちゃんすごい！」

弓の勇者を言い負かしてやったセントの台詞に、ナオフミもラフタリアもフィーロも、みんな褒め言葉を……あ、称賛！の言葉を贈っている。

それで称賛された本人はというと……顔を真っ赤にして目を逸ら

した。

「く、口に出すなよ！ 小っ恥ずかしい！」

珍しい、こいつの照れる姿に笑い声をあげ、ナオフミ達は歩き出す。「さてと…あいつらと同類扱いされないよう、俺達も準備に取り掛かるか」

ナオフミの言葉に強く頷き、三人がナオフミの後に続く。

その背中を見つめたまま…オレは、動けなかった。

…自分が正義の味方だとか、思っちゃいない。

だけどオレが戦う理由は…弓の勇者と同じで、誇れるようなものじゃないんじゃないのか。

そう思うと…オレの拳には、うまく力が入らなかった。

## 二度目の災害

S i d e : R a p h t a l i a

ドキドキと心臓が鳴るのを感じます……これから始まる、ナオフミ様にとっては二度目の、私にとって三度目の波が起こる時間です。

一度目は、正直に言っただけで勝てた、とは言えない結果でした。

傷ついた人も、亡くなった方も多く、あの戦いにおいてあまり役に立ったとは思えません。

ですが……今度はそうはいきません。

「ナオフミ……」

「ああ……時間だ」

セントさんが尋ね、ナオフミ様が頷いた直後、その時間はやってきました。

カッと強い光が辺りを照らし、私達を戦いの場へと誘います。

光が収まった時、以前と同じく周囲に景色は変わっていました。以前に一度、行商に訪れたことのある町です。

すると、私達の近くで先ほどと同じ光が灯り、力を貸してくれる兵士さん達が現れました。

「勇者様！」

「来たか！ よし、まずは逃げ遅れた住民の避難誘導だ！」

「はいー！」

人数はそれほど多くありません……ですが、見方がいてくれるというだけでこんなにも心強いのですね。

少し心に余裕ができ、いざ挑もうとしたその時でした。

「何だそいつらは!? 邪魔だ、どいてろー！」

「うおっ!？」

集まった私達を押しよけるようにして、他の勇者様達が飛び出し、空に浮かぶ亀裂に向かって走り去ってました。

これでは……! 前の波と同じではないですか!?

騎士団の姿もありません……私達のように、編隊の力を使っていないのですか!?

「…つてまたあいつら先に行きやがった!!」

「前回の反省ゼロかよ!」

他の勇者様達町に現れた魔物のことは無視し、亀裂から現れた…あれは、船? と、巨大なタコの魔物に立ち向かっていきます。

あの姿だけ見れば物語の一面のようですが、正直いら立ちを禁じ得ませんよ!

「チツ…あつちは放っておけ!」

「そーそー、ぶつちやけ予想通りだしな」

ナオフミ様とセントさんは盛大な舌打ちをこぼし、魔物に向けて身構えます。

そうですね…あの方々に頼り甲斐を覚えたことはありません。

私も剣を抜き、亀裂から溢れ出し人々を狙ってやってくる魔物を見据えます。

「オレ達はオレ達の仕事を全うするだけだ…:変身!」

【鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエイ!】

もはや見慣れた、大きな機械に挟まれたセントさんが、基本である赤と青の鎧を纏います。

大きな音とともに噴き出す蒸気を振り払い、サングラスを指で弾くいつもの仕草をして、目の前の敵を睨みつけました。

「さあ…楽しい実験を始めようか!!」

いきましよう、ナオフミ様! みなさん!

S i d e : R y u g a

「おらあああ!!」

オレが構えた拳が、青い炎を噴きあげる。

最近ちよつとずつ戻ってきた魔力と、持ち前の気を練り上げる独学の戦闘術を使って、オレは向かってきたトカゲ野郎をぶん殴る。

でも一体ぶつ倒しても、次から次へと湧いて出てきやがる!

「しゃらくせえ! 龍炎連撃波!!」

さつきよりもつと強く炎を噴かせ、今度は空中を殴りつけるよう拳を振るい、連中を狙い撃つ。

あつという間に数体がぶっ飛び、青い炎に呑まれる。が、やっぱり  
どンドン増援が来やがる。うつとうしいなおい!!

「GUOOOOOOOO!!」

「次から次へと…!」

やっぱあの亀裂をどうにかしねえと意味ねえな…:他の勇者が向  
かってっただけど、大丈夫なのか?

さっさと終わらせりゃこっちもさっさと片がつくってのに!

イライラしながら拳を鳴らすオレ。その背後から、いきなり別のト  
カゲ野郎が飛び出してきて…。

「ほあちゃあ!!」

オレが振り向くより先に、なんか変なのにぶっ飛ばされた。

…ん? え? 何、何が起きたの?

「…!?!」

「おお、これは聖人様のお共の龍のお嬢さん…:先日はどうもお世話  
になりました」

「お、おお、おう!?!」

混乱するオレに話しかけてきたのは…:なんか、めっちゃ元気そう  
な婆さんだった。

…いや、誰だよあんた。

てか、え? あんたがさっきのトカゲ野郎ぶっ飛ばしたの? マジ  
で?!

…いや、いや、よくよく見るとこの婆さん、見覚えがあるような?

「そ、そういうえば行商の途中で病気のばあさんを助けたことがつたっ  
け…?」

「おかげさまでこの通り! おあちゃあ!!」

そう言っつて、つていうか叫んで、婆さんは後ろから襲ってきたトカ  
ゲ野郎を蹴り飛ばす。

ぶっ飛ばされたトカゲ野郎は、一撃で仕留められて地面に落下す  
る。

おいおいおい…:あの色ボケバカ勇者より強そうだぞ。なんで  
こんな病気でぶっ倒れてたんだよ、つーか何者だよこの婆さん。



「すっかり元気も取り戻しましたとも！ かつかつか！」

山積みになったトカゲ野郎共の死骸を踏みつけ、婆さんは元気そうに笑う……お、おう。

「…我が主よ、あんたこのばーさんに何飲ませたんだよ……」

盾の勇者……ヤベエな。

Side:Sentto

【ボルテックブレイク！】

「ふんぬあ!!」

あー、マジこの数は鬱陶しい！

切っても撃っても蹴っても殴ってもわらわらわらわら……殲滅してえ！

一体一体はどうつてことねえけど、キリがねえよ！

「まだまだ削れねえな……だったら！」

ドリルクラッシュャーをしまい、オレは懐に手を入れる。

そして、白と水色のボトルを取り出してシャカシャカ振ってみせた。

「新しい組み合わせの実験！ アンド火力の確認と行こうかね！」

【パンダー！】【ロケット！】【ベストマッチ！】

「いくぜいくぜいくぜ〜！」

ギョルンギョルンとハンドルと歯車が回り、オレの周りにパイプが走る。

そして、張り巡らされたボトルの中身が、オレの前後で鎧に変わる。

【Are you ready?】

【ビルドアップ！】

【ぶっ飛びモノトーン！ロケットパンダー！イエー！】

鎧のパーツがオレを挟み、ブシューッと蒸気が噴き荒れる。

でっかいパンダの鉤爪に、左腕全体を追う水色の装甲……ロケットを横した腕の鎧。

サングラスも形が変わり、キラーンと強く輝いた。

「どりゃああ!!」

オレが拳を振り抜くと、肩部分の噴射口が火を噴き、オレを空中へ飛び上がらせる。そして、進行方向上にいる魔物をまとめて吹き飛ばしていく。

イヤツホウ！ このベストマッチ、気分爽快だぜ！

「勝利の法則は、決まった！」

【Ready GO!】

空中でハンドルを回し、エネルギーを解放する。

右腕の鉤爪を振りかざし、一気に加速しながら下に集まってきた魔物に向かって急降下、そして思いっきり切り刻みまくる！

【ボルテックファイニッシュ！】

オレが着地すると、バラバラになった魔物の残骸が降り注いでくる。

…自分でやつといてなんだけど、グロいなこれ。まあいいや。

「空飛べんのはなかなか便利だな…：…ほい次！」

【ハリネズミー！】【消防車！】【ベストマッチ！】

ロケットパンダをまた別のボトルと入れ替え、ぐるぐるハンドルを回す。

今度は赤と白の鎧が生み出され、オレの体を挟み込んだ。

【レスキュー剣山！】【ファイヤーヘッジホッグ！】【イエー！】

「攻撃！…：…のついでに消火！」

オレは右手を覆うトゲトゲの球体から棘を発射し、同時に左腕の装置から大量の水を発射する。

メラメラ燃やしやがって…この辺だんだん息苦しくなってくるんだよ！

それで魔物にも水流を向けて、まとめてぶっ飛ばしてやる！

「決めるぜ！ どりゃあああ!!」

【Ready GO!】ボルテックファイニッシュ！

オレがくるつと丸々と、全身がトゲトゲのボールに変わる。

ギョルギョルと助走をつけてから転がり出し、魔物を次々に吹っ飛ばしまくる。爽快だけど目え回るな！

「…：…つて！」

ここらの敵を一掃し始めた、と思ったが。

いつまでたつても増援が止まねえ！ いつになったら片付くんだけこの戦いは!?

「遅いな、おい!!」

「何をちんたらやってるんだあいつらは…!」

「あんだだけ偉そうにしてたくせに、どんだけ時間かけてんだ？ 楽勝とか言ってたろうに…!」

こっちの苦勞も知らないで、あいつら…!」

もうダメだ、待つてられん!

「ナオフミ! このままじゃこっちが疲弊するだけだぞ! オレ達も行こう!」

「それしかないな…ああ、くそ!」

ナオフミに言つてから、オレはビルドフォンを取り出し、ライオンフルボトルを差し込んで放り投げる。

一瞬で変形し、バイクモードにして跨ると、尚文もラフタリアちゃん達を呼び寄せた。

「ラフタリア! フィーロ!」

「はい!」

「はい!」

「リュウガ! 乗れ!」

「おう!」

フィーロちゃんの上にナオフミとラフタリアちゃんが、オレは後ろにリュウガを乗せ、空に浮かぶでかい船に向かって疾走を開始した。

「オイ、樹!」

オレ達が船の真下にたどり着くと、弓の勇者が船に向かって攻撃しているところだった。

何やってんだ…? あれが今回の波のボスなのか?

「!? 尚文さん…何をしにきたんですか。あなたにできることなんて今更…!」

「状況はどうなってる!? なんでここまで時間がかかっている!」

「盾！ 貴様、樹様が話している最中に……！」

なんかごつつい鎧を着たオツさんが吠えてるけど無視！

ナオフミの剣幕に押されたのか、弓の勇者は渋々と言った感じで答え出した。

「あの幽霊船を倒すと、最後のボスであるソウルイーターが出現するんですよ。だからこうやって攻撃しているんです」

ほほう……順序があるわけか。

ん？ じゃあなんで槍と剣の勇者はここにいないんだ？ 協力して墜とせばいいんじゃないのか？

「…なのに元康さんも鍊さんも勝手に乗り込んでいってしまったて」

「はあ!？」

何だそれ……全然噛み合ってねえじゃん。

ってか、連中が乗り込んでるのに普通に攻撃してたのかよ、こいつ!？

「くそっ……どいつもこいつも！ フィーロ！」

「うん！ まかせてごしゅじんさま！」

フィーロの背に乗ったまま、ナオフミが船の上を見据える。

すると弓の勇者のやつ、険しい顔でこつちを睨みつけてきやがった。

「まさか獲物を横取りする気ですか!？ 許しませんよ！」

「そんなことを言ってる場合か！」

獲物とか横取りとか……仕事遅いくせに文句言うな！

お前らがちんたらやってるから、こうしてオレらが戦力低いのにくる羽目になっただろうが！

「お前と問答してる暇はない！ 行くぞ、お前ら！」

「はい！」

「セントー！」

「おう！ これがあつてよかった！」

【ロケットー！】

ロケットのハーフボディを装着し、リュウガと手を繋ぐ。

そしてオレは、フィーロちゃんと一緒に空に向かって一直線に飛び

出した。

「いっくぜー！」

「うおおおお!!」

## 憤怒の盾

S i d e : R a p h t a l i a

空に浮かぶ幽霊船、その上には槍の勇者様と剣の勇者様、そしてそのお仲間さんたちが集まり、戦っていました。

「尚文!? お前なんでこんなところに…!」

船から生えている巨大な…タコ? イカ? の足を相手にしている槍の勇者様が、私達に驚きの目を向けています。

ですがナオフミ様はそれに答えることなく、苛立ったご様子で声を張り上げました。

「状況はどうなってる? なんでお前らバラバラの敵を相手にしてるんだ!」

「盾の分際でしゃしゃり出てくるんじゃないわよ! 命令するなんて何様のつもり…!」

「お前は黙ってる!」  
マルティ王女が偉ぶった様子で言ってきましたが、ナオフミ様はそれを一蹴します。

まったく…まさかとは思いましたが、全く下の状況を分かっておられません。このままではどちらも危ないというのに…!

「お前らがさっさと敵を倒さないと、下じやいつまでも戦いが終わらないんだよ! 少しは考えろ!」

「なんだと!? だからこうやって…!」  
「どうにもできてないからこうなってるんだろ!!」

ナオフミ様の怒鳴り声に腹が立ったのか、槍の勇者様が言い返しますが、ナオフミ様はまったく引く気はないようです。…当たり前ですが。

「いつまでゲームの気分を引きずってるんだ!? 下の連中も、お前らの仲間も、みんな最初から命がけで戦ってんだろが!!」

「ナオフミ様…!」

心の底から怒りの感情をあらわになさるナオフミ様に、私は思わず唇を噛み締めます。

私にもっと力があれば、この方々に頼ることなく、こんな状況も打破できたのでしようが…。

すると、船の上にいるもう一体の魔物…：海賊の姿をした骸骨と戦っていた剣の勇者様が声をあげました。

「…こいつだ！ こいつを倒すとボスであるソウリイターが出現するんだ！」

なるほど…だから剣の勇者様はずっとその骸骨と。

え？ ちょっと待ってください。

それでは、ずつと船に攻撃していた弓の勇者様や、大ダコと戦っている槍の勇者様は…？

「何言ってるんだ！ その条件を持つてるのはクラーケンだろ!？」

剣の勇者様の言葉に、やはり槍の勇者様が噛みつきます。

待ったをかける槍の勇者様を、剣の勇者様が睨んだその時、もう一人の勇者様が船の上へ乗り込み、お二人を睨みながら告げました。

「いいえ、船です！ 船を攻撃しないとボスが出現しません！」

「何を言ってるんだ、お前は！」

「そつちこそ！」

どういうことでしょうか…？

三人の勇者様が、それぞれ違う方法でナミのボスをおびき出そうとしています…一体、誰が正しいのでしょうか。

言い合いを始める三人に戸惑っていると、不意にセントさんがぴくりと耳を動かしました。

「ん？ おい、ラフタリア！ 奴らの陰になんか潜んでるぞ！」

「え!？」

セントさんの指摘で、私も思わず船にできた影を見渡します。

姿は見えませんが…確かに、何かが嗤っているような、嫌な音が聞こえた気がします。

「炙り出せるか？」

「…やってみます！」

ナオフミ様に言われ、私は魔法の準備に取り掛かります。

無意識に尻尾が膨れ、私の中から魔力が流れ出します…直接攻撃が

通らなくても、サポートで後れを取るわけにはいきません！

「ファスト・ライト！」

私の発した強い光で、船の上が眩く照らされます。

その結果、マストや骸骨、そしてタコ足の下にできた影が強く現れ、その中に潜んだものの姿を照らし出すことに成功しました。

「お前ら！ 敵の本体は影の中だ!!」

「そういうことか……雷鳴剣！」

「助かったよ、ラフタリアちゃん！ ライトニングスピア！」

「感謝します……！ サンダーショット！」

ナオフミ様の合図で、勇者様たちが一齐に、それぞれの近くで蠢く影に攻撃を仕掛けました。

雷の力が影の中に迸り……それが外の世界に現われます。

いくつもの影に別れ、私達を嘲笑うように身を潜めていたそれ――

――半透明の幽霊のような姿をした、凶暴な顔つきの怪魚。

次元のソウルイーターという名の魔物が、私達に吠えかかります。

「SHAAAAAAAAA!!」

「こいつが……ソウルイーター！」

「さあ……あとはお前らの仕事だ！」

役目はこなした、とナオフミ様が他の勇者様たちに告げた直後、強力な攻撃が放たれ、次元ノソウルイーターに殺到します。

轟音と閃光が走り、魔物の巨体が爆炎に吞まれます……が、少しすると煙は晴れ、無傷の次元ノソウルイーターが再び現れ、高々と咆哮をあげました。

「……つて効いてないじゃん!!」

「使えねー!!」

期待外れだと言わんばかりにセントさんとリュウガちゃんが声を上げ、それを聞いた勇者様方がぼつが悪そうな顔をします。

ですが、そんなこちらの事情など魔物には関係がありません。

突然、次元ノソウルイーターの口の中に炎が吹き荒れ、こちらに向けて放たれました。

「ヤベ……のわあああ!!」



防御が間に合わなかったセントさんが、炎を食らって吹っ飛ばされ、その衝撃で変身が解除されてしまいました。

しかも、ベルトも外れ、セントさんの近くから離れてしまっています。

「セントさんー!」

「これ…まずいな」

痛みに呻きながら、セントさんは顔を引き攣らせます。

無防備なセントさんに、次元ノソウルイーターが顔を向け、再び炎を口の中のために込み始めました。

動く事ができず、焦りを顔に出すセントさん。ですがその寸前、その手を引いて後ろに下がらせ、ナオフミ様が庇いに入ります。

その直後、放たれた炎が炸裂し、凄まじい衝撃が辺りに撒き散らされました。

「尚文ー!」

「ナオフミ様ー!」

ナオフミ様は少し苦悶の声をあげましたが、すぐに大丈夫だと頷きます。

それに少し安心しますが…状況が好転したわけではありません。

攻撃を防ぐばかりで、一体どうすれば…!?

「どうすりゃいいんだ…打つ手なしかよ」

「こうなったら…!」

すると、意を決した様子のリュウガちゃんがベルトとフルボトルを手にし、えっと…クローズドラゴン?ちゃんを掴みます。

確か、あの子を使えばリュウガちゃんもあの鎧を纏えると…ですがあの方のレベルではまだ…!?

「へんし……いっただあ!!」

やっぱり思った通り、ベルトにクローズドラゴンちゃんを差し込もうとした時点で電流が走り、リュウガちゃんは倒れ込んでしまいました。

何度見ても痛そうです…!

「だからまだ早いってのに!」

「くっそお！ 今がその時だろうが!!」

悔しそうにじたばたするリュウガちゃんですが、こればかりはどうしようもありません。

セントさんも、別に意地悪で変身できないようにしているわけではなく、リュウガちゃんの安全を考えての事なんですから。

…ですが、反撃手段がないままなのはその通りですね。

事態が好転しないまま、追いつめられるばかりだったその時でした。

「…ラフタリア、お前ら。離れている」

次元ノソウルイーターを睨んでいたナオフミ様が、ぼそりとそう言って、構えた盾に手を添えました。

「お前、まさか…あれを使う気か!？」

「それしかないだろう」

「待て待て！ あれはお前…前回思いっきり暴走してただろうが！危ないって!」

「このままならどちらにせよ全滅だ!」

そんな…! ナオフミ様があんなことになってしまう力なのに、また使うなんて無茶です!

ですが、こちらに目をやったナオフミ様の目は…私達の説得を聞き入れてはくれそうにありません。

…それしか、逆転できそうな手段がないのは、事実ですものね。

「…逃げねえぞ。お前がもし暴走したら、誰が止められるんだよ」

「最後まで、お伴します」

「…頼む」

ナオフミ様の手に触れながら、私達は覚悟を決めます。

また、呪いの炎にこの身を焼かれる事になろうとも…この方を決して、放っておきはしません。

いつだって私達は…一緒に戦うんですから。

私達に領いたナオフミ様は——禁じられたその力を、解放しました。

「ぐっ…ぐおおおおおおおおおおおお!!」

ナオフミ様の全身に赤い模様が浮かび、盾が赤黒い炎に包まれます。

同時にナオフミ様は、あまりにも痛々しく悲しい、憎悪と怒りをこれでもかとかめた咆哮を上げます。

そして次第に、ナオフミ様の纏う鎧まで変貌し始めました。

「なんだアレ…!?!」

竜の身体を思わせるトゲが全身に生え、憎しみと怒りを表す黒に染まる、ナオフミ様の鎧。

獣のような唸り声をあげるナオフミ様がぎろりと、剣の勇者様を見据えます…って、ダメです！ ナオフミ様！

「ナオフミ様！ 敵はそちらではありません!!」

「ナオフミ……しっかりしろ！」

「ナオフミ！」

あの腐竜の怒りが…ナオフミ様の心に侵食している!? 自分を殺した剣の勇者様を、ナオフミ様を使って殺そうとしている…!?!

いけません！ その方は、あなたの道具などではありません！

あなたは憎しみを振りまく魔物なんかじゃありませんよ、ナオフミ様！

「ご自分を…しっかり保ってください！ あなたは盾の勇者…人を傷つける方ではありません！」

「…ラフ、タリア」

私の声に、ナオフミ様が少しずつ反応を返します。

大丈夫…! 完全には飲み込まれてはいません…まだ、こちら側に戻って来られる！

ですが、敵は私達にそんな余裕も与えてはくれません。

「SHAAAAAAAAA!!」

ナオフミ様を脅威と認識したのか、次元ノソウルイーターが咆哮と共に向かってきます。

この状況で…! なんとか応戦しようと、私が剣を構えた時でした。

目を血走らせたフィーロが、とてつもない力で次元ノソウルイ

ターを蹴り飛ばしたのです。

「グガアアア!!」

「フィーロちゃん!」

フィーロは、いつもの天真爛漫さなど微塵も感じさせない凶悪な姿で、再び次元ノソウルイーターに襲い掛かります。これは…暴走してしまっているの!?

「なんでフィーロまで…!」

「! アレだ、前に食った腐竜の核! アレに当てられてんだ!!」

! そうでした…フィーロは腐竜に飲み込まれた際に、肉体を操っていた核を食べてしまったのでした。

だからフィーロも、あの腐竜の憎しみに影響されて…!

その時、しがみついていた私の手に、ナオフミ様が優しく触れました。

「…大丈夫だ、ラフタリア」

「ナオフミ様……」

「少し……離れていろ」

恐ろしい気配を発するナオフミ様を見て、すぐには頷けません。

ですが…私は、ナオフミ様を信じ、しがみついていた手を離しました。

そしてナオフミ様は、ゆらりと次元ノソウルイーターを前に立ち塞がります。

「これは俺の怒りだ……お前ごときが、抗えると思うな! シールドプリズン! チェンジシールド!」

盾の力で、次元ノソウルイーターを盾の檻が囲い、その中に無数の棘が生やされます。

苦悶の声をあげる次元ノソウルイーターの上に……巨大な、女性を模った棺のようなものが現れました。

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は鉄の処女の抱擁による全身を貫かれる一撃也。叫びすらも抱かれ、苦痛に悶絶するがいい!』

「アイアンメイデン!!」

中身がトゲだらけになったその棺の中に、封じ込められた次元ノソウリーターが吸い込まれていきます。

開かれた扉が、ぎしぎしと軋みながら閉じられたその瞬間……耳をふさぎたくなるような絶叫が、辺りに響き渡りました。

棺が再び開かれると……ボロボロになった次元ノソウリーターが落下し、甲板の上に横たわりました。

「……く」

「ナオフミ様！」

「……ふにやっ？」

棺が姿を消すと、ナオフミ様の姿ももとに、そしてファイロも元に戻りました。

窮地は脱しましたが……なんて恐ろしい技なのでしょう。

「なんだよ……攻撃力がないとか言って普通に戦えてるじゃないか」

「……今回は勝ちを譲ってやる」

「今までサボっていたんですか？ まったく……」

倒れ込んだナオフミ様を見下ろし、他の勇者様たちが呆れた様子を見せます。

何ですか……！ ナオフミ様がこんなにも体を張ったというのに、その言い草は！

私は思わず、怒りの声をあげようと思いました。

「……この程度の敵に苦戦するとは無様だな、勇者よ」

ですが、そんな聞きなれない声が響いてきて、私の頭は一気に冷やされました。

そして、音もなく現れたその人物達を目の当たりにして……私達全員が、呆然と立ち尽くしました。

「嘆かわしい……眷属器が泣いていますよ」

「まったくだ……蒸血」

『Bat!』

蒸気の中から現れたのは、見慣れない格好の女性と、あまりにも奇

妙な姿をした一人の戦士。

その手にあつたもの——フルボトルを凝視し、私達は、動く事が  
できませんでした。

『ミストマッチ！・Bat・B・Bat…Fire！』

## 二人の敵

S i d e : R y u g a

現れたそいつらに：オレ達の目は釘付けになった。

なんとなく半透明に見える扇を持った女と、肩から煙突のような何かを生やした、コウモリの仮面をつけた：男？ 女？

あまりにも唐突な、前触れのない登場に：誰もが言葉を失くしていた。

「：!? なんだ、あいつら：」

他の勇者共はそいつらの登場事態に驚いている様子だが：：オレやナオフミ、ラフタリアとセントは、全く違う理由で絶句していた。

だってそうだろ：何であいつらが、アレを持っているんだよ!?

「：おい、セント。あいつの持つてるアレ：」

「ああ：：間違いねえよ！ なんで：なんであいつ、フルボトルを保持ってんだよ!？」

コウモリの仮面の奴が手にした：あれは、銃か？ 妙な形をした武器の手元には、コウモリの意匠のフルボトルが装着されている。

あれは、セントが作ったものなんだろ!？ なんでそれが!?

すると、驚愕で言葉を失くしたオレ達に気付いたコウモリ男が、フツと鼻で笑ったような声をもらした。

「：：なるほど、そうか。そういうことか」

：何だ、そのこっちの知らない事実気付いてほくそ笑んだ的な悪役面は。

お前、絶対なんか知ってるだろ！

黙って笑ってないで何か言え！ なんか物凄いムカつくんだよ！

「答える義理はない：：ここで死ぬものに説明したところで、時間の無駄だ」

コウモリ男はそう言って、オレ達を：：いや、セントを見たままそれ以上口を開かなかった。

：マジで何を知ってたんだよ、こいつ!?

だが、そんなオレ達の目に飛び込んできたのは、また驚きの光景

だった。

散々苦勞して倒した巨大幽霊魚が、もう一体現われたんだ。

「！ ソウルイーターがもう一体!？」

オイオイオイオイ……!

ナオフミの奴、あのヤバイ盾使つちまってもうへ口へ口なんだぞ?! どうすりゃいいんだよ!?

けど……そいつがオレ達に襲い掛かる事はなかった。

コウモリ男と一緒に現われた女が扇を振るい……巨大幽霊魚を真つ二つにしちまったからだ。

「なっ?!？」

「……崇高な戦いの邪魔をしないでいただきたいですね」

あの化け物を瞬殺して、あの女……まったく疲れた様子を見せてねえ。

何なんだ……!? 何なんだよ、あいつら、ヤバすぎるだろ……!

「名を……聞いておきましょうか」

「……人に名前を聞くとときは、まず自分から聞くもんじゃないのか?」

「これは失礼……」

警戒し、盾を構えたままのナオフミが、若干青い顔であいつらを睨む。

挑発して大丈夫なのかと思つたが、二人とも大して気にしていない……というか礼儀正しく礼をして、名乗りだした。

「私の名はグラス。あなた方の敵です」

「同じく……そうだな、ナイトローグと呼んでもらおうか」

「……盾の勇者、岩谷尚文だ」

互いに名乗り合つて、また辺りが緊張感に包まれ始める。

相変わず、あいつらが何者なのか全くわかんねえけど……これだけわかる。

下手に動いたら——死ぬ。

「では……始めましょうか」

「ああ……真の波の戦いをな」

言うが早いのか、半透明女ことグラスとコウモリ男ことナイトローグ



がこつちに向かつて突つ込んでくる。

すかさず構えた時、グラスが急にふわりと舞い上がる。横から割つて入った剣の勇者の攻撃を避けたらしい。

あいつらも連中を新たな敵と認めたいで、他の勇者やその仲間が次々に攻撃を加えていく…が、今のところひとつも当たってねえ！

ほんとに使えねえな、お前ら!!

「ちよこまかと…!」

「どきなさい! 私…!」

拳句の果てに、ちよつとした喧嘩にもなりつつある勇者共。

それを見たナイトローグが、仮面越しでもわかるぐらいにイラついた様子を見せた。

「…鬱陶しい雑魚どもめ!」

そう言つて奴は、どこからともなく妙な武器を取り出す。

へんな機械がごちゃごちゃついた短剣みたいなそれをナイトローグは構えて、途中に付いたバ、バルブ?を回し始めた。

「デビルスチーム!」

「セント、ラフタリア! 下がれ!」

途端に迸る蒸気に、嫌な予感を覚えたオレがすぐに二人を呼ぶ。

すぐに戻つてきた二人を、ナオフミがオレやファイロと一緒に後ろに庇う。

その直後、ナイトローグが放つた強烈な斬撃が、周りにあつた何もかもを吹き飛ばしてみせた。

ナオフミの防御力があつても、無傷ではいられなかった。

「ぐっは…大丈夫か、お前ら…!」

「くそ…こいつら強え!」

呻くオレ達は、再びこつちを見てきたナイトローグ達を見据えて歯を食い縛る。

くそ…余裕シヤクシヤクみたいな顔しやがって! なんかつまんねえつて顔に書いてんぞコラ!

「こつちまで弱いと…戦い甲斐がないな。弱いものいじめは趣味じゃ

ないんだ」

「言ってくれるぜ…見てろ！」

「待て、リュウガ！」

オレは覚悟を決め、ナイトローグに向かって拳を振りかぶる。

効くとはハナから思ってたねえ…少しでも隙ができれば、逆転の機会は見つかるはずだ!!

「吠え面かきやがれ! 爆竜拳!!」

渾身の力で振るったオレの一撃……だけどそれは、横から割って入ったグラスに防がれ、逆に吹っ飛ばされて終わっちゃった。

「ぐあっ!？」

「たー!」

「はあっ!」

オレの後に、ファイロやラフタリアも続くが、どっちも簡単に防がれ、あっけなく弾き飛ばされちまう。

思った通り、普通に攻撃する程度じゃだめか…!

だったらやっぱり、こいつを使う外には…!

「なるほど、先ほどの方々よりは手練れようですね……ですが、甘い」

扇を閉じて、グラスはそれをラフタリアの首元に添える。

…お前ら程度いつでもブツ殺せるってか? 実際そうできそうで、全く笑えねえ…! 急がねえと…。

「ナオフミ、なぜ先ほどの盾を使わないのですか? ……私たちを侮辱しているのですか?」

「くっ…!」

ナオフミがさっきのヤバい盾を使わない事を、なめられていると思ったのか、グラスがものすげえ殺気を込めて睨んでくる。

…向こうの注意は、オレには向いていない。

今なら…いける!

「ナオフミ! セント! これ使え!」

オレは声を上げ、ナオフミとセントに向かってある物を投げる。

さっきまで漁っていたクソ女の持ち物、魔力回復薬と、セントのピ

ルドドライバー、そしてオレのドラゴンフルボトル。

それぞれを受け取った二人は、にやりと不敵に笑ってみせた。

「ナイスだ…リユウガ」

「…：非道な。倒れた者の装備を漁るとは」

「うつせえ、そいつにや散々辛酸？を飲ませられてんだよ！」

なんか引いた様子でこっちを見てくるけどいいんだよ、この女に關しては！

さあ…！ 反撃開始だぜ、ヒーロー共！

オレの期待に応えるように、ナオフミは回復薬を飲み干し、セントは腰に巻いたベルトにフルボトルを差し込む。

「ドラゴンー」【ロックー】「ベストマッチー」

「このタイミングでまさかのベストマッチかよ!?!」

いや、狙ってたわけじゃないけど、都合がよすぎじゃねえか!?!

セントの奴ツキすぎだろ！

「ビルドアップー」

【封印のファンタジスター！ キードラゴン！ イエイー！】

オレの叫びも知らない振りをし、セントはハンドルを回して、鍵とドラゴンを模した新たな鎧を身に纏う。ナオフミもその横で、あの刺々しい格好に変わる。

…これで、少しは優勢になりやあいいが。

「グガアアアアア!!」

その時、さつきと同じように暴走したファイロが、グラスに襲い掛かる。

けれどその突撃は簡単にいなされファイロはその勢いのまま甲板に突っ込み、動かなくなっちゃった。

「まるで手負いの獣…」

「よそ見厳禁だぜー」

呆れたように呟くグラスに、左腕を掲げたセントが吠える。

落ち着いたまま振り向くグラスだが、セントの動きの方が早かった。

「はっー」

セントが鍵の形をした腕を伸ばすと、何本もの太い鎖が現れ、グラスとナイトローグをひとまとめに縛り上げる。

なるほど…封じる事に特化した能力って訳か！

「小癩な…！　しかしこの程度…！」

がんじがらめになった連中だけど、地の力の違いか、拘束できるのはやっぱり数秒が限界だったらしい。ぎしぎしと音を立てて、鎖に罅が入り始める。

だがなあ…そのくらいオレ達には予想通りなんだよ！

「龍火衝!!」

「ぐうつ!」

奴等が解放されるより先に、オレは拳から青い炎の一撃を放ち、二人を攻撃する。

対して効いちやあいないが、それでもちよつとくらいは怯ませられた。

その際に、セントがもう一方の腕——ドラゴンの力を秘めた方に力を込め、オレより数倍でかい炎の塊を生み出した。

「はああああ!!」

【ボルテックファイニッシュュー!】

「食らいやがれええええ!!」

セントの咆哮と共に、放たれた炎が連中に炸裂し、呑み込まれる。

ゴウゴウと昂る、青い炎の中に奴らの姿が消えた頃合に、セントはナオフミに振り向いて叫んだ。

「ナオフミ、今だ!」

「アイアンメイデン!!」

セントが注意を引いている間に、さっきのデカイ拷問箱の用意をしていたナオフミがスキルを発動させる。

燃えたまま盾の檻に閉じ込められ、さらにトゲで串刺しにされた連中が、さらにデカイトゲの中に封じ込められる。

ぶつちやけ物凄いや怖えけど、これでどうにか…?

「ぐつ…ぐああああ!!」

「セント!」

直後、セントが急に叫び声をあげたかと思うと、鎧が電流を放って解除される。

フルボトルが弾け飛び、セントがどつとその場に倒れ込んだ。

「大丈夫か!？」

「ハア…ハア…! やっぱりダメだ。ドラゴンフルボトルの力が強すぎて、ベストマッチでも安定しない…!」

「反動がでかいのか…!…なかなかの威力だったんだがな」

「だが、流石にこれで…!」

あんだだけえぐい攻撃を食らえば、さすがにな…!…?

だが、そんな考えは甘かったと、空に浮かぶ拷問箱を見上げたオレ達は、思い知らされることとなった。

閉じられた拷問箱が、轟音と共にべこべこに歪み始めたんだ。

「ウソだろ…!？」

驚愕で目を見開くオレ達の前で、拷問箱はさらに歪んでいく。

そして次の瞬間——拷問箱は粉々に砕け散り、無傷の連中が余裕の顔でその姿を現した。

「…!…やってくれたな」

どこか苛立った様子で、グラスとナイトローグがオレ達を睨みつけてくる。

あ、あれの他に強力な攻撃なんてねえぞ…!?

「もう十分だろう…!お前達はよく戦った」

もう、為す術がない。

ナオフミも、セントも、ラフタリアも…!…オレも。

みんな完全に心を折られ、諦めそうになる…!ウソだろ、こんなところで、オレたちの戦いは終わっちゃうのかよ。

膝をつきそうになった、その時だった。

「…!… もう時間か…!」

不意に、グラスとナイトローグが空を見上げ、悔しげな様子を見せる。

それは…!…明確な隙だった。

「ラフタリア!」

「ファストライト！」

我に返ったナオフミが叫ぶと、即座に応じたラフタリアが魔法を発動させる。

その瞬間、辺りは凄まじい光に飲み込まれ、連中の視界を一時だけ奪い取った。

「くっ…目潰しか！」

流星の連中も、目を潰されてはすぐには反応できなかつたようで、忌々し気にしながらもこっちに向かつて来ない。

今しかない…逃げんならな!!

【ビルドチェンジ！】

「フイーロちゃん起きろおおお!!　そして走れえええ!!」

「ふにゃ!？」

バイクを起動したセントが、甲板にめり込んだまま気絶していたフイーロを叩き起こし、オレを後ろに乗せて発進させる。

何が何だかわかっていないフイーロを走らせ、ナオフミとラフタリアも船の上を走った。

「走れ走れ走れ!!」

迷うことなく、オレ達は宙を舞う船から飛び降り、何とか地面に着地してそのまま逃げ去る。

追ってくるか、と後ろを見るが、船もグラスたちもどんどん遠くなってくるばかりで、こっちに来る様子はない。…諦めた、のか？

「…ナオフミ様！　皆さん！　あれを！」

「空の亀裂が…」

ラフタリアの指摘で空を見上げ、オレ達は波の亀裂が徐々に消えていくのに気がつく。

「…一応、あれで波のボスは倒したってことか」

「じゃあ、あいつらは波とは関係なかったのか？」

「わからんが…そうかもしれない」

連中が気付いたのは、もしかしてこれか…？　…災厄の波に、助けられるなんてな、くそ。

…わからない事が多すぎて、疲れてきた。

「生き残れた方がいいが……あれで勝てたとは思いたくないな」  
ナオフミの呟きは……その時のオレ達の心に、重くのしかかるのだっ  
た。

## 一波乱越えて

S i d e : F i l l o

いっぱい走って、走ったから、フィードのおなががグーグーなってる。

でも、フィードはまだガマンする……がん、ばる…。

「はいよー、炊き出しの時間だー」

「ごはーん…」

「フィード、もう少し待ってて」

「お前の分も作ってあつから」

　　ごしゅじんさまがごはんを作ってくれるけど、フィードのぼんはま  
だだつて。

　　波でたいへんだった人たちにもごはんをあげてるから……でもお  
なかついたよ。

「今回もひでえ被害だ…」

「全体の死者数はまだマシみたいだけどな」

「それでも、今後の生活が苦しくなるのに変わりはないよ」

　　ごしゅじんさまとセントお姉ちゃんたちがむずかしそうな顔では  
なしてる。

　　おケガをした人や、おうちがなくなって困ってる人がたくさんいる  
んだつて。

　　フィードもいっぱいお手伝いしたよ。でもまだたりないんだつて。

「…うわ」

「ん？ どうした？」

「いや々な奴らがやってきた…」

　　あれ？ セントお姉ちゃんがきゆうにイヤそうな顔をしてる…ど  
うしたの？

　　そしたらね、ごしゅじんさまのお手伝いをしてた兵士さん達とおん  
なじカツコをしたおじさんたちがやってきたよ。

「おのれ盾！ 我が国の兵士を勝手に連れて行きおつて！」

「…この惨状を前にしての第一声がそれかよ」



いきなりどなってきたおじさんに、ごしゅじんさまがものすごく呆れてる。

なんであんなにぷりぷりしてるんだろ？

「き、騎士団長！誤解です、これは僕らが勝手に……」

「ああ。お前らがまともな仕事をしないから、素直でお人好しそうな連中をこつちで勝手に引き抜いた。誰かさんたちとは違って、大いに役に立ったぞ」

「貴様ら……」

兵士さんたち、がんばったのに変なおじさんになんか怒られてる。

おじさんたち、今まで何してたのかな？ みんな波でいっぱい困ってるのに、ファイロたち一回も見ることないよ？

「おじさんたち、何にもしてないのにえらそうだね」

「き、貴様つ……」

「ファイロちゃん……ちよつと今は黙ってようか」

「いや、よく言ったぞファイロ。こいつらはな、何もしてないくせに文句を垂れるようなどうしようもない大人なんだ」

そつかく、そういう人もいるんだね！

ファイロ、すつごく勉強になったよ！

ファイロにごはんをくれてから、ごしゅじんさまは頭をなでなでしてくれて、それからまたおじさんたちをにらんだ。

「俺たちやこいつらを責める前に、お前たちにはやらなきやならないことがあるんじゃないのか？」

「何を…!？」

「負傷した村人の手当てに復興の手伝い、ついでに今回全く役に立たなかった勇者どもの面倒！ 吠えてないで働け」

ごしゅじんさまのごはんおいしーな！

でも、おじさんたちがうるさいからファイロ、すつごく気分がわるいなー。

槍の人よりましだけど。

「ゆ、勇者様方を急いで治療院に！ 急げ！」

「そいつらが先かよ……」

「我々の職務は勇者様の戦闘のサポート！ それ以上に優先することなどないわ！」

え？ セントお姉ちゃん、もういいの？ のこりはフィーロが食べていいの？

なんかセントお姉ちゃん、すっごいきげん悪そうだけど、ほんとに食べなくていいの？

そんな気がなくなっちゃったって？

じゃあ、食べちゃうねー！

「そして盾！ 貴様には今すぐに王城へ来てもらおうぞ！」

「はあ？ 見てわからないか？ 俺は今忙しいんだ。後にしろ」

「事後報告も勇者の務めだ！ 真実とは思っておらんが、いかにかの波を盾ごときが切り抜けたのか、洗いざらい話してもらわねばならんからな！」

フィーロが食べてるあいだに、なんかむずかしそうなお話をしたたごしゅじんさまがどっかに行っちゃった。

あ、ラフタリアお姉ちゃん、フィーロたちももう行くの？

わかった！ じゃあ、のこりぜんぶ食べちゃうね！

Side: Sento

ムカつくムカつくムカつく!!

あの兵士も！ 他の勇者も！ クソ王もみんなみんなムカつく!!

王命だから仕方なく、わざわざ王都に戻ってきたけど、こんなことになるならバツクレればよかったぜ！

んだよ、人が必死に戦ったつてのにあの態度！

何がどんな手を使っただ！ 信じねーけどぜんぶ話せだ！

ナオフミがテメーなんかとまともに話すかバーカバーカ!!

でもその後の土下座しろは正直笑ったなく。

なんでか知らんけど、ナオフミにはメガネをかけて言ってもらいたかった。

【海賊！】【電車！】【ベストマッチ！】

オレは苛立ちを誤魔化そうとするように、ベルトに次々にフルボト

ルを差し込んでみる。

何個かベストマッチが見つかったから、次はそれ用の武器を考えないとな。

「セント、遊んでないでメシの準備を手伝え」

「遊んでねーし、実験してるだけだし」

ナオフミがクソ王に喧嘩を売ってから数時間。

王都を離れ、シルトヴェルトに向かつて馬車を進める途中、夕食の準備を始めたナオフミに言われて、オレも手伝いに回る事にする。

はく…今日はほんとにいろいろあつたな。

「…ところでこっちの荷物なに？」

「武器屋の親父がくれた。旅の幸運を祈るってよ」

「太っ腹だねえ…」

おやつさん、今日中に国を出るって言ったら色々用意してくれたんだよな。

いつかまた会えたら、この恩は何倍にしても返さないとな。

…そのためには、波で生き残らなきゃだけど。

「この剣はどう使うのでしょうか…？」

「フイーロこのグローブ使いたーい」

「なんだこれ、盾につけるアクセサリーだったき」

にしてもほんとに色々くれたな…でもせめて、使い方のメモはくれてもよかったんじゃないの？

ラフタリアが持つてる剣なんて、刃がついてないんだけど。

「まあ、細かい使い方は後で確認すればいい…ぶーっ!？」

「うおっ!？」

メシが煮込まれるのを待つ間、飲み物を口に含んでいたナオフミがいきなり嘔き出した。

おい！ おまつ…オレのふわふわ尻尾がちよつと茶色くなっちゃっただろうが!! どうしてくれんだよ!？」

「おい！ 何やってんだよナオフミ!？」

「ゲッホ！ うえっほ…誰だこのクソまずいコーヒー淹れたやつは!!」

「あ？ 飲んでいて文句言うなよ」

「お前か、突撃ドラゴン！」

「誰が突撃ドラゴンだ！」

ぶすつとした顔のリユウガがナオフミを睨む。

…何も手伝ってなかったオレが言う資格ないだろうけど、できないなら無理にやらない方がよくね？

「まずいって……オレはお前が教えた通りに淹れただけでまっす!!」

不満たらたらのリユウガが、自分の淹れたコーヒーを一口飲む。

それで、ナオフミと全く同じように嘔き出した……マジか、マジかあ。

「……これは」

「ひつでえなこりゃ……」

「もはや一種の才能だな……」

みんなで飲んでみるけど、これはマジでひどい。

なにこれ、お前の手は一体何を生成するようになってんの？ ダークマターでも作れんの？

こりゃあ、ナオフミに淹れなおしてもらわないとスッキリできないなあ……

と、そう考えていた時だった。

「見つけたわよ、盾の勇者！」

道の向こう側から、物凄い勢いで馬車が走ってくるのが見えた。

それに乗ってるのは……メルちゃん、もといメルティ王女。

「よし、片付けろ。今すぐズラかるぞ」

「いやいやいやいや……」

「逃がさないわよ!!」

即座に荷物を片付け、逃げようとするナオフミに思わずツツコミを入れてしまう。

それを阻むように、メルティ王女は馬車から飛び降りる勢いでこっちに向かってくる。前々から思ってたけど、アグレッシブな王女だなあ……

「今すぐ王宮に戻り、父に謝罪して和解してください！ でないと

……」

「断る」

「なっ……!」

憤然とした様子で口を開くが、案の定ナオフミは耳を貸そうとはしない。

…もうそろそろ、加減してやれよ。

態度とか佇まいはともかく、相手は小さい女の子よ？ 泣くよ？

さすがに良心咎めないの？

「す、少しはこちらの話を…」

「向こうにこっちの話を聞く気がないのに、どうやって和解できるってんだ。時間の無駄だ」

メルティ王女は諦めず、何度も何度も会話を試みるものの、ナオフミはその全てをばっさり切り捨てる。するとメルティ王女、俯いてぶるぶる震え始めた。

これは…流石に泣くかなあ？ いやだなあ、そういう子供の相手は苦手なんだよなあ。

…ん？ なんか呟いた？

「…いかげんに」

「あ？」

「いい加減にしてよ!」

!?

「盾の勇者も！ 父上も！ 世界が波で大変なのに…何で言うことを聞いてくれないのよ!!」

「お？ おお？」

「フイーロちゃんもそう思うでしょ!? ね!」

ちよっ…急に大声出すから、ちよつとビビった。

え？ いや…大人しい子だと思ってたから油断したけど、え？

何、物凄い剣幕で怒り始めた。

「…もしかしてこの子、こっちが素だったり？」

「かもな…」

…猫被り、いや、感情を表に出さないように制御してたんだな。

うん、王族がそう。ポンポン本音をぶちまけるわけにはいかないもんな。頑張ってたんだなあ、メルティ王女様。

……何だ、この雰囲気。

さつきから兵士達、黙ったままだし、じつとこっち見たまま動かないし、何だこの不気味さ。

あの先頭の兵士が持つてるのは……確か映像記録用の水晶玉？

…ヤバい。

ある一つの未来を予想した俺は、咄嗟に動く事ができなかった。

「下がれ！」

「えっ——」

唯一動けたナオフミがそう叫び、メルティ王女を自分の元に引き寄せた直後。

ガキンツ！と音をたて、メルティ王女の護衛の兵士が振り上げた剣と、ナオフミの構えた盾が、激しくぶつかり合った。

## 逃亡者

Side : Naofumi

あつ…ぶねえ!

こいつら、一国の王女を狙うとか何考えてやがる…!?

間一髪俺が間に合ってたからいいものの、そうじゃなかったら本当にこいつ死んでたぞ!!

「おのれ、盾の勇者め! 姫を人質にするとは卑劣な!」

「あ?」

俺に斬りかかってきた奴が、なんかおかしなことを抜かした。

人質だと…お前らが攻撃してきたんだろうが! どう見ても正当防衛…つてか、助けてる側だろが!!

「そっちが攻撃してきたのに…!」

「盾の悪魔から王女様を救え!」

「神の鉄槌を下せ!」

こつちの話を聞く筈もなく、騎士共は俺達に向かってくる。

何考えてやがるか全くわからんが、舐められてるってのは間違いないな!

「なめんな!」

「オラア!!」

セントやリユウガが即座に応戦し、向かってくる奴らを片っ端からねじ伏せる。

幸いというかなんというか、騎士連中はそこまで強くなかったからすぐに制圧できた。が、のこった連中が嫌に素直に引き下がっていったな…。

「ちつ…何人が逃しちまった」

「何でしょう…妙な感じでしたね。最初から最後まで」

「そうだな…」

「メルちゃん、だいじょうぶ?」

「え、ええ…」

ピンチを乗り越えた、というには…いやな予感がする。

こいつら、本気で第二王女を殺す気でいた……この国の騎士がだぞ？ 本来、命をかけて守る相手だろ。

「まさか、ヤベエな……」

「は？ 何でだ？」

すると、昏倒させた騎士達を見下ろしていたセントが、何かに気付いた様子で息を呑んだ。

おいやめろよ……お前がそういうシリアスなテンションで話し出したら、何かあるの確実じゃないか。

「連中、映像記録用の水晶を持ってた……あれ、多少映像を加工できるんだよ」

「……ん？ ど、どういうことだ？」

「だから……」

セント自身も頭の中がぐちゃぐちゃなのか、説明に困っているみたいだ。

だがリュウガはともかく、俺もこいつが何を言おうとしているのか……いや、こいつらが何を考えているのかわかってきた気がする。

すると、顔色を悪くする俺達を嘲笑うように、倒れた騎士の一人が鼻を鳴らした。

「フン、悪魔の配下は少しは頭が回るようだな」

「……どう言う意味だ？」

「あいつら、言ってたよな。王女を人質に云々……さつき撮った映像をそれっぽく編集すりゃ、いくらでも証拠を捏造できるぞ」

「なっ……」

「しかも王族の誘拐だ。国外逃亡しても指名手配がつく」

リュウガが絶句しているが、俺だって信じがたいわ！

俺を貶めるために、娘まで利用するのかこの国の国王は!? もう一人の方は溺愛どころか、取り返しのないところまで甘やかしてるくせに!!

「……！ また冤罪かよ……」

「くそつたれ!!」

リュウガ達だけでなく、ラフタリアも表情を強張らせて口を手で



覆っている。

フィーロだけだな、状況がよくわかってないのは。…いや、雰囲気が悪いのだけは察しているのか、やや不安げな顔だ。

「とにかく逃げるぞ！ できるだけ痕跡を残さないようにするんだ！」

「がつてんだ！」

「フィーロちゃん、馬車はいらない！」

「えー!？」

ああもう…！ 新天地でやり直す筈だったのに、何でこのタイミングで厄介事が降りかかって来るのか！

ばたばたと逃げる用意をしていると、まだ呆然と立ち尽くしている第二王女に気付く。何やってんだ…！ 呆けてる場合か!!

「お前も早く来い！」

「あ…え…!？」

「守ってやるから、早く来い！」

戸惑う第二王女を無理矢理引っ張り、馬車にしがみつくフィーロを引きずり、俺達は最低限の荷物で走り出す。

ほんつとうに…最悪の日だ!!

S i d e : R a p h t a l i a

私はフードで顔を隠し、町の様子を伺います。

広場では、メルロマルクの騎士が住人の方々を相手に、水晶で撮影し悪辣な加工を施した映像を見せて回っています。

私達が、メルティ王女様を誘拐した極悪人だと…。

「…どこもかしこも、オレ達の似顔絵でいっぱいだ。動きにくいっただらありやしねえ」

セントさんが自慢の耳で声を拾いますが、結果は芳しくないようです。

どこに向かっても、まるでこちらの動きをわかっているかのように騎士の姿があるのです。

「あくん、フィーロの馬車〜！」

「今は我慢して…!」

「どうする? このままじゃシルドフェルトなんか目指しようがないぜ」

「十中八九…途中で邪魔されるだろうな」

王族誘拐なんて大それた冤罪をかけられてしまった今、隣国に移る事なんてほとんど不可能に近いです。

フィーロが嘆き、全員で苦悩の声をこぼしていると、メルさん…メルティ王女様が不意に呟きました。

「…ごめんなさい」

「王女様が謝ることじゃねえだろ。オレ達が今土下座させたいのは、あのクソ王の方だ」

メルティ王女様…私達を追いかけて来たことを悔やんでおいでなのでしようか。それは、あなたの責任じゃないというのに…。

セントさんが慰めますが、メルティ王女様はそれに首を振ります。

「…ううん、父上じゃない。こういうことは、姉上が好んでやりそう」「うつわ…妹にこんな言われる姉って」

「姉上は、欲しいものはどんな手を使っても手に入れたがる人なの…でも、父上はそれをわかってない」

…セントさんの言う通り、身内の方にここまで言われてしまうほど、あの方の性格はひどいのですね。

いえ、ちゃんとこの目で見てきたつもりではありませんでしたが…それでもあまりにも。

「んじゃあ、王女さんが狙われたのは…はい、リュウガ」

「えっ…あー、どさくさ紛れに妹を亡き者に?」

「正解。やればできるじゃねえか」

そう考えられてしまうのが、悲しいですし腹立たしいですね。

血の繋がった唯一の家族を、自分の欲のために害そうとするなんて…!

いいえ、そもそもあの方はそういう方でした…自分の欲のために、ナオフミ様を苦しめ続ける酷い方です。

ですが、いくら王女であるあの方に、このような事が可能なので

しょうか。

いくらなんでも、国の力を自由に使えすぎているのでは…？

「女王様はなにやってんだ？ あいつらを止められんのはその人くらいだろ」

「…今回の勇者召喚の責任を取って、各国と交渉しているわ。休む間もないくらいに…」

「あー、そっか…」

セントさんとメルティ王女様の会話に、ナオフミ様が首を傾げています。

そうでした…このあたりの話はこちらでは結構常識でしたが、ナオフミ様は知らない情報でしたね。

訝し気に、ナオフミ様がセントさんに尋ねます。

「どういうことだ？」

「ああ、うん。メルロマロクってな？ 代々女王が国を統べてんの。

不在の時に、国王が指針を取るの」

「は？」

セントさんの説明に、ナオフミ様はぼかんと口を開けて固まりました。

そしてやがて、ヒクヒクと頬を震わせたかと思うと、お腹を抱えて嘔い始めてしまいました。…あの、今のどこに面白い要素がありましたか？

「じゃあ、何か!? あいつ…婿養子だったのかよー」

滅多にないくらいの笑顔で、ナオフミ様は肩を揺らします。

えっと、確かに婿入りした方が、奥さんのいない間に好き勝手して偉ぶっている姿は滑稽かもしれません…そんな面白いのでしょうか。

案の定、笑い転げるナオフミ様にメルティ王女様が食って掛かってしまわれます。

「父上を笑うな！」

「いいじゃないか、お前を捨てた父親なんてかばわなくなたって」

「ち、違うわよ…父上は…」

ナオフミ様、なんてことを言うのですか!?

信じていた騎士に命を狙われ、精神的にも追いつめられている女の子に、そんな追い打ちをかけるようなことを……!

反論しようとするメルティ王女様の目に、見る見るうちに涙が溜まり……。

「父上は私を捨てたりなんてしないもん……うわーん!!」

ああ、やっぱり泣き出してしまわれました。あげく、まだ笑っているナオフミ様にぽかぽかと殴りかかる始末……。

これには、私達全員の冷たい目がナオフミ様に向けられます。

「……お前なあ」

「こんな小さい子を泣かせるなんて最低ですよ!」

「お前とそう変わんだろ……」

そういう問題ではありません!　　というか、身体はもう大人です!

ですがナオフミ様は気にした様子もなく、ご自身が気になっている事への質問を続けました。

「それよりその……勇者召喚の責任っていうのは?」

「それよりって……あー、国同士の取り決めがあつてな」

「勇者を召喚するのに決まりごとなんてあるのか?」

「そりゃあ……」

セントさんが詳しい説明を行おうとしたその時、ぴたりとその表情が変わります。

私も、近付いてくる沢山の足音に気付き、固まってしまう。

……あまりにも、早すぎる……!

「見つけましたよ、ナオフミさん……メルティ王女を返してもらいましょうか」

そう告げるのは、お仲間と共に完全武装でやってきた弓の勇者様。

そして、同じくこちらに敵意をぶつけてくる槍の勇者様と剣の勇者様、そしてメルロマロクの兵士達。

国そのものが、ナオフミ様を敵と見定めて、集まっていました。

助けて

S i d e : R y u g a

「お前ら……」

オレ達の前に現われたのは、あの槍と弓と剣の勇者共だった。

訳がわからない言いがかりを吹っかけてきやがった、この国の兵士連中。

成り行きで連れていくことになった王女と一緒に、そいつらから逃げようとしていたら、今度はお前らかよ！

「逃げられはしませんよ。大人しく王女を解放しなさい」

「よく見ろ、拘束なんてしてないだろ！」

「白々しいぞ！ 証拠は上がってるんだ！ 大人しくラフタリアちゃん達を解放しろ！」

槍の色ボケ勇者！ お前は黙れ！

お前は言葉の端々からいいかつこしいって感じがしてきて、ひたすらにうつつとうしいんだよ！

「正義はこっちにある！」

「その正義とは……本当に正しいものなのですか？」

偉そうに吠えていた槍の勇者に被せる形で、王女が前に立ち塞がった。

「メルティ王女……！ よくぞご無事で」

「ええ、あなたの見た通り私は無事です。誘拐などされてはおりません」

「そうだそうだ！ お前らの言ってることは最初から最後までムチャクチャなんだよ！」

何が悲しくて王女を連れ去るなんてバカみたいな犯罪起こさなきゃならねえんだ！ ……誰がバカだ!!

「ですが、あなたの護衛はその人に……！」

「弓の勇者様、これは陰謀なのです。盾の勇者様をよく思わない者が、この方を貶めるためのでっち上げです。今は、勇者同士で争っている場合では……」

…正直、こいつ一緒に連れててよかったってマジで思う。  
当事者がこうやってちゃんと弁明してくれるんだから、これ以上頼  
もしい事はねえな。

が、その流れをブツ壊す、空気の読めない奴がいた。  
「かわいそうに、メルティ……洗脳されてそんなことを言われるな  
んて」

あのクソ女が……！ むちやくちやイヤな、毒みたいな臭いを発する  
あのクソ王女が、わざとらしい悲しそうな顔で話に割って入ってき  
た。

…耐えろ、耐えろオレ。

ここで暴れ出したら全てがおじやんだぞ……でも、ブツ殺してえ。  
「ぐるぐるる……！」

「洗脳の盾……眉唾じゃなかったのか？」

「詳しく調べた上での事実ですわ。最近、妙に盾の勇者を擁護する者  
が増えたと……その真相は、行商と称してあの男が、人々を洗脳して  
回っていたからなのです！」

クソ王女のなんかイラつく話も、今のオレの耳には届かない。

右ストレートでぶっ飛ばす……アッパーカットでぶっ飛ばす……コー  
クスクリューでぶっ飛ばす……！！

あー……殺してえ、殴りてえ。

「そんなもんがあったら今こんなことになってねえだろ!!」

「盾の言葉に信憑性なんてありませんわ……さあ、モトヤス様？ 可愛  
い私の妹を助けてあげて」

「ああ！ 任せろ！」

あ、やべ。

やつをどう殺すかシ……シユミ……シミレート？ してるあいだに向  
こうから動きだしやがった。

それを見て、ナオフミが慌て始める。

「待て、本当に話を聞け！ 場合によっては、王女をこの場で引き渡し  
てもいい」

「……本当でしようね？」

「この状況で嘘なんかつけるわけないだろ」

…オレ達の立場的に、そうするのが一番なのはわかる。ぶっちゃけ、そうすりゃあ王女誘拐なんて言いがかりは一発で晴らせる。

だけど…：本当にそれでいいのか？

さつきセントが言っていたように…：あのクソ王女がろくでもない事を考えていたら。

「…だめ、行ったら殺される…！」

王女の背中…：震えていた。

それでも、オレ達の事を助けるつもりなんだろう…：アイツの足は、前に出ていく。

恐いくせに、逃げたいくせに、それを必死に抑えつけて。

それでもやっぱり、小さな体を突き動かして、あいつは。

たすけて、と——そう呟いていた。

「…ナオフミ」

「…ああ」

オレのすぐ横で、ナオフミとセントが頷き合っている。

そしてナオフミは王女の前に出て、進み出ようとするアイツの足を止めた。

「やっぱり駄目だ…：メルティは渡せない」

「なっ…：そこまで堕ちましたか!？」

「お前らが俺を信用できないように、俺もお前らを信用できなくてな」  
弓の勇者が言葉を失くしているが、こっちからすりゃ、ナオフミの言い分の方が正しく聞こえる。

あんな悪意まみれの醜い面を見せる姉のところに、こんな弱っちいガキを行かせられるわけないだろうが!!

「俺はこいつを守ると言った。だから、その性悪女に騙されていいように使われているお前らなんか、こいつを連れていかせるわけにはいかないんだよ！」

馬鹿にしたように吠えるナオフミの声が、今はなんかとんでもない

くらいに心地いい。

それでこそ、オレが認めたオレの主だ、この野郎!!

「フイーロ! セント!」

「おう!」

「わかった!」

ナオフミのあいずでオレ達は踵を返し、フイーロがぼふんと煙に包まれ、セントがあのだ道具を取り出す。

このまま一気に駆け抜けて、姿を晦ませてから仕切り直しだ!

「逃がすかつ!」

だがその時、ひゅんつと何かが空をかける音が響いたと思った直後、セントの手からあのだ道具が弾き飛ばされる。

それと同時に、フィロリアル・クイーンの姿になっていたはずのフイーロが、人間の子供の姿に戻って倒れ込んだ。

「ぶべつ!」

「ぎゃんつ!」

当然、その背に乗っていたナオフミ達は地面に突っ込んでいく。

なんだ!? 何が起こった!?

ん…? フイーロの足に…:…なんか変な輪っかがついてる?

「なにこれ…あれ、変身できない!」

「フイーロちやくくん♡」

戸惑うフイーロの後ろに、ワキワキ手を動かした槍の勇者が近づいて、ガバツと抱きついた。

おい! 何か知らんがむちゃくちゃヤバイ絵面だぞ!?

足に鎖付きとかもつとヤバく見えるわ!!

「お前…何しやがった!」

「また蹴られたくないからね、フイーロちゃんがずっと天使の姿でいられる道具を、国の錬金術師に作らせたのさ!」

お、お前…いくら好みの見た目だからって、子供相手にそれをやるか!?

まじで気持ち悪っ!!

「んなろ…!」



「それは使わせませんよ!」

応戦しようとしたセントがベルトとフルボトルを取り出すけど、それを読んでいた弓の勇者が矢を放って、両方とも弾き飛ばしやがった。

ああ、起死回生のアイテムがとんでもない所に飛んで行っちゃおう!!  
「あーっ! おまつ、お前ー! 変身シーンを邪魔するとか悪役怪人でも使わねえ策だぞ!」

「最近ではそうでもありませんよ!」

「マジで!」

ばらばらに飛んで行ったベルトとフルボトルを交互に見て、目を剥いて怒鳴るセントと弓の勇者がなんか言ってるけど、何の話だよ!?

…いやいや、それどころじゃねえ。

ふと視線を向けると、王女が捕まったファイロを心配して槍の勇者の前に立ち塞がっていた。

「ファイロちゃんを離さない!」

「大丈夫だって、ナオフミから解放したら君も一緒に…」

気障ったらしい台詞を口にする槍の勇者。

それにイラツとしたオレが、もう後の事とかは考えずにぶん殴りに行こうとした時。

王女が魔法を発動し、槍の勇者に向けて水の刃を放った。

「ツヴァイト・アクアショット!」

「おわーっ!」

発射された刃は槍の勇者の頭上を通過して、後ろにあつた木を真っ二つにした……こ、こええ。

威嚇なのはわかるけど、なんつー危ない魔法浸かってんだよ、こいつ。

「っ、次は当てますよ!」

「お、落ち着きなって…! そんなに震えてたらファイロちゃんにも当たっちゃうよ!」

「だ、だから…その前にファイロちゃんを離して…!」

次はほんとに当てるぞ、って言いたいんだらうけど……あれじゃだ

めだ。演技ってバレるくらい声が震えちゃってる。

あの調子じゃ、ファイロを人質に盗られたままアイツも捕まっちゃう。

が、事態はオレの考えたものよりまずいことになってきた。

「ツヴァイト・ヘルファアア！」

槍の勇者を睨みつけていた王女に突如、でかい炎の塊が襲い掛かったのだ。

間一髪、気付いたオレが王女を抱えて下がったからいいものの、炎は辺りを真っ黒に染めるくらいのとんでもない威力だった。

あのクソ王女……！ ふぎけやがって!!

「容赦がねえな……お前の姉はよ!!」

「マルティ王女！ 妹に当てる気ですか!?!」

「あら？それはお互い様ではなくて?」

「殺す気かと聞いているんだ!」

「多少動けなくなる程度に抑えています……それに、加減なんてしていたらこちらが危険でしょう?」

いけしやあしやあと王女が言っているが、弓と剣の勇者は何かおかしいうって気付き始めているみたいだ。

だけど……この状況が良くなっているわけじゃない。

囲まれたままだし、セントは動けなくなってるし、ファイロは捕まってるし……!

くそっ……どうしたら。

「リュウガー！」

そんな時、セントがオレに向かって何かを……ベルトを投げ渡してきた。

フルボトルはない……唯一拾えたベルトだけを、オレに渡して来たんだ。

なんで、この状況でオレに……!?

オレはまだ、レベルが低くて……使えないんじゃない……。

「セント……お前、これ……」

「今のお前なら使える……頼む!」

戸惑うオレに、弓の勇者が狙って来るけど、セントがそれを邪魔をしてくれている。

本当に、大丈夫なのか…？

オレが悩んでいた時、宙を裂いて、一匹の小さな鉄の竜が舞い降りてきた。

「――！」

「…力を貸してくれるのか？」

クローズドラゴン。オレの魔力を食った、オレの身体を変えるための鍵。

オレを見つめ、鳴くそいつの目は、こう語っていた。

戦え、と。

…気付けばオレはクローズドラゴンを掴み、胸元にしまっていたドラゴンフルボトルを取り出し、シャカシャカと上下に強く振っていた。

「あれは…！ まさか！」

「しまった…あいつを止めろ！」

オレの腰に巻かれたベルトに気付き、向かってこようとする勇者共の声が聞こえる。

だけどその時にはもう、ドラゴンフルボトルはクローズドラゴンの中に差し込まれ、ベルトに装着されていた。

【Wake up！ クローズドラゴン！】

相棒をベルトに備え、オレはハンドルをぐるぐると力いっぱい回していく。

すると、ベルトの歯車を中心に何本もの管が現れて――セントと同じように、オレの前後に半分ずつの鎧を生み出す。

セントと違うのは、オレの左にも一つ、竜の翼のようなパーツが作られていることだ。

オレは気合いを入れるように、バシツと掌に拳をぶつけ、敵を見据えて身構える。

そうだ…アイツは確かこの時、こう言っていたな。

【Are you ready?】

「変身！」

【Wake up burning! Get CROSS—Z  
DRAGON! イエイ!】

ガシヤン、と機械がオレの身体を挟み、オレに鎧を纏わせる。

刺々しい牙のような角のようなものが生えた、藍色の籠手。胸や各部を覆う、特殊っぽい素材の布。

顔の上半分を占める、ゴーグルみたいな竜の顔。

最後に竜の翼みたいなパーツが背中に張り付いて、折り畳まれて肩と胸を覆う装甲になる。さらにはそこに、ボツと炎の模様が浮かび上がった。

…力が、湧きあがる。

新しい一人の戦士になったことで……オレの魂は、激しい戦いを求め始めた。

「今のオレは……負ける気がしねえ!!」

覚悟しろよ……クソつたれの大バカ野郎共!!

## 燃えよ青龍

S i d e : N a o f u m i

「うおらああああああああ!!」

「ぐわあああ!」

鎧を纏ったリュウガが、青い炎を纏わせた拳を思いつき振り抜く。

その直後、なんかもう、漫画みたいな勢いで騎士共が吹っ飛ばされて、あちこちに突っ込んでいく。

中には頭に犬つてつくあの映画みたいに、上半身が地面に突っ込んでる奴もいるし…もう無茶苦茶だな、これ。

「…! なんつー馬鹿力だ!」

暴れ回るリュウガを見たセントが、物凄い戦慄した顔を見せている。

…おい、あれ作ったのお前だろ。つてか、普段あれ使ってるのお前だろ。

いや…それだけリュウガの力が強くなってるって事か。

「力が…湧き上がる!!」

ボツ!と拳の炎を強めて、リュウガが他の騎士を相手に身構える。いいぞ…あいつら、リュウガの気迫と強さに圧されて若干勇み足になっけてきている。

このまま押し切れれば、ファイロとセントを救出する時間を稼げる。

だが、不意に騎士共が後ろに下がり、弓に矢をつがえた樹が前に出てきた。

「気は進みませんが…これで倒れてください! ホークショット!」

スキル名を叫んだ樹の手から放たれた矢が、鷹の姿となってリュウガに突っ込んでくる。

マズイ、あれは間違いなく普通の矢じゃない!

よける、リュウガ!

「ガアアアア!!」

だが、俺が危険を叫ぼうとした直前、リュウガは自分に向かってくる光の鷹に向かって吠える。

すると、その咆哮に呑みこまれ、鷹は一瞬で消し飛ばされてしまった。

…あ？　ちよつと待て。

今マジで何が起こった!?

お前いま何したんだよ、リュウガ!!

「なっ…なんですかそれ!?!」

「俺が相手だ…いくぞ!」

「来やがれ!」

樹が絶句する横を、今度は鍊が剣を振りかざして飛び出してくる。

それにリュウガは拳を…じゃなくて手を突き出し迎え撃つ。

すると、リュウガの手元に例のパイプが伸び、一本の銀色の剣に姿を変え、リュウガの手に収まった。

【ビートクローザー!】

「!?　剣を…!?」

こんな機能もあったのかよ…!?

というか、あいつ剣なんて使えるのか!?

と思ったオレの目の前で、リュウガは手にした剣を思いっきり振り上げ、鍊の剣に叩きつける。

…うん、力技だな、逆に安心した!!

「くっ…重い!」

【ヒツパレー!】

「どりゃああ!!」

鏢迫り合いの状態のまま、リュウガは剣の柄頭を引っ張る。

ベルトと同じ声が聞こえ、剣の刀身に光が灯る…というかあれ、どう見てもイコライザーに見えるんだが。

それでエネルギーがたまったのか、リュウガは思いっきり剣を振り抜き、鍊を吹っ飛ばしてみせた。

「ぐあっ!!」

【スペシャルチューン!　ヒツパレー!　ヒツパレー!】

倒れ込む鍊を睨みながら、リュウガは剣の柄にある窪みに、ロックのフルボトルを差し込む。

そしてまた柄頭を今度は二回引つ張り、全身に力を入れて振りかぶった。

【ミリオンスラッシュユー！】

「ぐわあああああ!!」

剣が振るわれた直後、光り輝く斬撃が剣から放たれ、大勢の騎士共をまとめて吹っ飛ばす。

さつきから何だこれ！ 無双アクションゲームみたいだぞ。

リュウガはいったん剣を地面に突き立て、ベルトのハンドルを回しまくる。

すると奴の背後に突如、青い炎でできたような東洋の龍が現れた。

「おらおらおらおらあ!!」

【Ready GO!】

「おっしやあ!!」

龍を引き連れて、リュウガが空中に跳び上がる。

思いつきり片足を振りかぶるリュウガの背に、青い炎の龍が口から爆炎を吐きかけ、蹴りの威力と速度を倍増させる！

【ドラゴニックファイニッシュユー！】

「うおりやあああああああ!!」

ものすごい感じのボレーキックが、残っていた騎士共に炸裂し、また面白いぐらいに吹っ飛ばしていく。

さつきから何だこれ…むちゃくちゃ気分爽快じゃないか！

「いいぞリュウガ！ 力の限り暴れ回れ!!」

「おおよ！ オレを止められるもんなら…止めてみやがれ!!」

オレの言葉にうなずき、リュウガは拳を振り回し、まだ動ける勇者共や騎士共に突撃していく。

こいつ一人で、完全に戦況ひっくり返ってないか!?

…と思ったが、向こうはまだ増援がいるらしく、敵の数が減っているようには見えない。

が、あのビッチは焦り始めているように見えた。

はっ！ いい顔するじゃねえか！

「何をしているの!? さっさとあのトカゲを殺しなさい！」

「——そうはさせませんよ」

リュウガの勢いに気圧されているのか、冷や汗をかいて怒鳴るビツチ。

その背後から突如、ゆらりと空気を揺らがせてラフタリアが姿を現した。

それに気づいたビツチが、途端に顔色を変えた。

「お前っ……ぎやあああ!!」

ドスツ！とラフタリアの剣……親父がくれた、魔力剣とかいうあの剣が、ビツチの胸を貫く。

体内でとんでもない痛みが走っているのか、ビツチは俺達がスカツとする悲鳴をあげ、やがてがくりと気を失った。

「マルティ!?!」

「ご安心を、物体を斬る剣ではありませんから……気絶しているだけです」

「そんな……ふべ!?!」

「槍の人、やっぱりキライ!」

ビツチがラフタリアの手に堕ちたことで、動揺する元康。

すると今度は、奴の顎にフィーロのパンチがキレイにヒットした。今フィーロが付けているのも、親父がくれたアイテムの一つだ。

腕力を強化するグローブらしい。ほんとはフィーロに何かあった時、俺や他の誰かが馬車を引くためのつもりだったらしいが、別の使い方だに立ったな。

「食らえ、人間ストライク!」

「ぎやあー!」

セントの方を見ると、騎士の一人を蹴り飛ばして別の騎士にぶつけて、昏倒させている……あつちはもう、心配する必要もなさそうだな。

「人質なんて卑怯ですよー!」

「先にフィーロを捕らえている方に言われたくありません……この方に傷を負わせたくなければ、ここを通してください!」



「形勢逆転……とまではいかないか」

捕らえたビツチを抱えて、ラフタリアが鍊や樹たちをにらみつける。

フイーロも自由になった、セントも……草むらをガサガサ探ってるけど、おおむね無事、メルティもこちら側。

後は、この場から逃げられれば……!

だが、緊迫した空気を切り裂くように、ラフタリアの顔のすぐ横を、一本の矢が通り過ぎていった。

「誰だ、今射った奴は! 人質が……」

こつちを刺激するとまずいと思ったのか、鍊が矢の飛んできた方に叫ぶ。

だが、そこにいた連中を……そいつらの目を見て、鍊や樹の表情が強張った。

「マルティ王女がやられた!」

「容赦などするな! この場で息の根を止めろ!」

倒れた騎士、傷付いた騎士、一度戦闘不能になったはずの騎士共が……まるで幽鬼のような足取りで向かってくる。

メルティの奪還なんかももちろん思わせない、ただ俺を殺す事だけを考える、狂気の日だった。

「盾の悪魔を許すな!」

「盾を殺せ!」

「盾の悪魔を抹殺しろ!」

「こ、これは……」

湧きあがる怒号、いや、もはや人間離れしたそいつらの声に、鍊や樹も困惑気味になっている。

かくいう俺も、連中の狂気に若干体が強張っていた。

そのせいで、こつちに戻ってこようとしているセントを狙う凶刃に、気付けなかった。

「盾の配下は一人残らず殺せ!!」

「ヤッベ……!」

「セントー!」

背を向けたセントに、騎士の一人が剣を振りかぶる。

焦りで目を見開き、固まるセントを守ろうと盾を構えるが…スキルの発動が間に合わない！

や、ヤバい…！

「やめろおおおおおおお!!」

セントの頭蓋を叩き割ろうと、騎士の剣が振り下ろされた瞬間。

俺の盾につけられたアクセサリーが突然割れ、何かの力が辺りに吹き荒れた。

Side:Sentto

濛々と広がる煙…あちこちに倒れ込む追っ手を避けながら、オレ達は森の中を走る。

やがて、気配が全く感じられなくなった頃合いに、オレ達は足を止める。

「…なんとか逃げ切れたか」

ナオフミがそう呟き、荒ぶる息を整える。

その横でオレは……がくりと膝をつき、涙を流した。

「うう…！ ビルドフォンは回収できたけど、ボトル何本か落としてきちまったじゃねえか…！」

「お前…それより安心することあるだろ」

懐が…！ 懐が軽いよお…！

弓の勇者めえ…この恨みはずっと忘れねえぞ！

後で絶対取りに戻ってやる！

「さっきの煙幕と結界は、ナオフミが？」

「いや…煙幕は知らんが、結界は盾が勝手に出したような……」

…逃げれたのがあれのおかげなのは、確かなんだよな。

一瞬、何かの力が働いて騎士が吹っ飛ばされて…そのあと煙が立ち込めたんだ。そりゃあもうむっちゃくちゃ濃く。

「じゃああの煙幕は誰が…」

「…私、誰がやったかわかるわ」

「なんだと？」

え？

あの一瞬で、何が起こったのかわかったの？

…と思っただけど、ちよつと違つたみたいだ。

「そこにいるのよね、影」

メルティ王女がそういうと、近くの木陰から人影が…あ、あいつつて確か。

ああ、そうそう。

前にリユート村でバカ女を止めた黒装束集団の格好だ！

「…どうしてメルティ王女にはわかつてしまうのでござるか？」

「その喋り方…たしか女王の影武者の」

「女王の命により、盾の勇者殿を陰ながら助けに来たのでござる」

…何、あのみようちきりんな話し方。

みんなおんなじカツコだから、個性でも求めたのか？

そんなオレの疑問も放置し、影は語りだした。

オレ達を狙う、盾の勇者以外の三人の勇者を崇める宗教…前に  
行つた教会の大元である三勇教。

そいつらは今、虫の息になってるんだとか。

というのも、他の勇者があちこちでやらかして、それをオレ達が尻  
拭いをしていることが、教会の求心力を弱めちまつてるんだとか。

…ヤダなあ、そういう面倒ごとの処理まで押し付けられるの。

そんなの、自分が勝手に失敗してるだけじゃん。

…で？

そいつらを国から一掃するのに、女王との合流と協力が必要にな  
るって事か？

「盾の勇者殿には、この方角に向かっていたら良かったのでござる」

「シルトヴェルトと真逆じゃないか！」

「亜人の国への道は、すでに包囲網がしかれているでござる」

うん…そりやそうだな、素直に行かせてくれるはずがないわな。

強行突破…は、現実味がないから却下。

…指示に従うしかないのかなあ。

「…ことは国を揺るがす大事でおじやる…勇者殿には一刻も早く、女

王と合流していただきたいのでござやる」

「…罨に聞こえるのは俺の気のせいかな？」

「ナオフミ様！」

この状況で……って、ナオフミの疑念ももつともなんだよな。

これまでが、善意を思いつきり踏みにじられるケースが多すぎたんだよなあ。

すぐに応じるのは、まあ難しいか。

だけどそれに対して、女王の影はあんまり気にした様子も見せずに応えた。

「たしかに信じていただくのは難しいかもしれぬが……考えてほしいでござやる」

……そうきたか。

これは…ナオフミが散々他の勇者に言ってきたことだな。

言い返された形になったナオフミは、大きなため息をついてばかり頭をかく。

「…わかった。お前らの案に乗ってやる」

「そう伝えるでござやる。…それと、これを」

女王の影が消えようとした時、忘れていたとばかりにオレに何か渡してきた。

…え？

この…紫色で、十字の刃物の意匠をしたこれは…。

「フルボトル!？」

「セント殿が落とした一つが変化したものでござやる。この機会にお返しするでござやる」

「お前…」

ナオフミがオレに、無茶苦茶呆れた目を向けてくる。

や、やめろ！

オレにそんなどうしようもない奴を見る目を向けないで！

ていうか、オレいつの間にか落とした!? 確かにいつでも作れるようつっていっぱい作ってたけど…もしかして結構ほろほろ落としてた!?

は、恥ずっ…！

「では、拙者はこれで」

羞恥に悶えるオレをほっといて、女王の影は闇の中に消えてしまっ  
た…。

せめて…せめて何かフォローして行って…！

みんなの視線が…！ 痛い…！

## 私の名前

S i d e : F i l l o

フィードだよ！

槍の人がつけてきたわつかをごしゅじんさまに外してもらえて、ものすごくごきげんだよ！

でも槍の人ぜったい許さない。

こんど会ったらいつもよりもっとける！

「ほれ、できたぞ第二王女」

今はみんなで逃げるのをお休みして、晩ごはんのとちゅうだよ。

きょうのはサンドイッチ！ 中身がたっぷり入ったおいしいのだよ！

でもごしゅじんさま、ラフタリアお姉ちゃんやセントお姉ちゃんに先にあげて、フィードにはまだくれないの。

あ！ でもメルちゃんのはフィードが先にゆずったんだよ！

「ごしゅじんさまー、フィードにもー」

「わかったわかった…お前にはちよつと大きめに作ってやるから」  
わーい！

んー、やつぱりごしゅじんさまのごはん、おいしく♪

「どうした、リュウガ。システムに不調でもあったか？」

「ん？ あ、いや…むしろすげえしつくりきた。けどな…」

ぱくぱくどんどん食べてるフィードのうしろで、セントお姉ちゃんとリュウガちゃんがなんかはなしてる。

どうしたの？ 食べないならフィード、もらっていい？

「すげー力だった…だからこそ、ちよつと怖くなった。あれは、認証すりゃあ一応は誰でも使えるんだろ？」

「まあ、オレがそう設定したらな」

…むー、なんかむずかしそうなお顔で話してるから、おじやまできない。

いつもお姉ちゃんたちが使ってる…あのへんなきかい？を見てお顔にしわをよせてる。

「…向こうがこれを使えてたら、苦戦するだろうなって思ってたよ」

「…そうだな」

「お前が俺になかなか持たせなかった理由が、痛いくらいによくわかったよ……」

「なんだかよくわかんないけど、リュウガちゃん、なんだか大人になつてきたね。」

「ごしゅじんさまにガウガウかみついていた時より、なんだか丸くなってきた気がする。」

…あれ？

メルちゃん、どうしたのかな。ぜんぜん食べてないよ？

「どうした、第二王女。疲れたんなら早めに寝ろよ。しばらく歩きづめだぞ」

「まあ、身内に命を狙われちゃあ落ち着かんわな。…なんでこっちの王女様はこんないい子なのに、姉はああなんだか」

「まったくだ。王女さんと血が繋がってるとは思えねえよ」

「ごしゅじんさまたちがみんな心配してるけど、メルちゃんはうつむいたまま何にもいわないの。」

「しかもなんだか、ごしゅじんさまが話しかけるともつとうつぶむいてる。」

「メルちゃん、どうしたの？」

「とにかく飯は食っておけ、明日動けなくなるぞ」

メルちゃんの手がぶるぶる震えてる……どうしたんだろ。

お腹痛くなっちゃったかな？

「どうした、第二…」

「第二王女って言わないで!!」

わ！ びっくりした！

「きゅってくちびるをかんてたメルちゃんが、急にごしゅじんさまに向かってきけんだ。」

ど、どうしたの!?

「私にはメルティって名前があるんだから、ちゃんとそう呼んでよー!」  
「…お前だつて俺を盾呼びだろうが」

「じゃあ私もあなたのこと、ナオフミって呼ぶわ！ だからナオフミももう第二王女って呼ばないで！」

…あく、そっかあ。

ごしゅじんさま、前にメルちゃんとケンカした時からずっとメルちゃんの名前、よんでなかったもんね。

メルちゃん、なかまはずれがさびしかったんだね。

「今は…苦楽を共にする仲間なんだから！」

「…わかったよ、メルティ」

おつきなため息をついたごしゅじんさまが、メルちゃんをよんだよ。

そしたらメルちゃん、ちよつと恥ずかしそうにほっぺを赤くして、サンドイツチをパクパク食べきつちやつた。

きょうは、いっぱいいたいへんなことがあつたもん。

おなかも空くよね。

「大丈夫だよ、メルちゃん！ こんど槍の人達がきたら、フィーロがこんどこそぶつ飛ばしてあげるから!!」

「フィーロちゃん…」

フィーロが元気づけたくというと、メルちゃん嬉しそうに笑ってくれたの。

よかつた！

フィーロ、ぜつたいやくそくは守るからね！

「…あの、フィーロ？」

「たのむから…やり過ぎて殺しちゃうなよっ！」

「槍だけに？」

「うっせえ！」

ラフタリアお姉ちゃんたちも、なんだかさつきより元気になった気がする。

なんかいやくなことがいっぱいあって、たいへんだと思うけど、ごしゅじんさまやみんながいたら、きつと大丈夫だよね！

フィーロ、がんばっちゃうぞ！



「……最悪の場合、この切り札を使わなくちゃいけないかもな」  
そんなことをセントお姉ちゃんが言ったのに、フィーロは気づいてなかった。

To be continued…

## 第四章 弾けるニューパワー 領主の元へ

S i d e : F i l i o

「あのクソ王女がああああああああ!!」

めらめら森がもえてる中をはしりながら、リュウガお姉ちゃんがものすごくおこってる!

フイーロもおこりたい!

あつーい!

ごしゅじんさまとメルちゃんにいじわるする人たちから、フイーロたちはがんばって逃げてたんだよ。

それでちよつときゆうけいちゆうしてたらね、気がついたら森がぼうぼうもえてたんだよ!! ひどいよね!!

「アホなのか!? 王女もアホならそれに従う兵士もやっぱアホなのか!? そしてやっぱりあの勇者は頭ん中真っピンクのクソバカ野郎なのか!?!」

「あちっ…あちっいって!」

「けむーい!」

いっばいけむりが出てて、ちゃんと息ができなくてたいへん。

ラフタリアお姉ちゃんもリュウガちゃんも、むせてげほごほいってるし。

もう!

やっぱり槍の人もあのギラギラした女の人もきらい!!

「ここじや丸焼けになる! 早く逃げるぞ!」

「わかってる!」

おにもつもって、火のちかくからはなれようとしたんだけど、あつちこつちもえてて逃げられそうにないの。

そしたら、セントお姉ちゃんがまたあのどうぐを持ってまえに出てきたよ。

「道はオレが作る! どいてろ!」

【消防車！】【ラビット！】

いつも使ってるおいしそうなジュースのビンをどうぐにさして、ハンドルをぐるぐる回すお姉ちゃん。

そしたらへんなくだがいっぱい生えてきて、ガシヤンガシヤーンってあわさって、お姉ちゃんの鎧にかわったよ！

そしてセントお姉ちゃんは、ぼうぼうもえてる火に向かって思いつきりお水をかけはじめた。

あのお水、どこからもつてきてるんだろ。

「爆裂的に鎮火じゃあ!!」

「なんでそのネタ知ってんだよ……!」

「私も手伝うわ、ツヴァイト・アクアレイン!」

セントお姉ちゃんと一緒に、メルちゃんも魔法をつかって火を消そうとがんばってる。

がんばれー! メルちゃん、セントお姉ちゃん!

でもぜんぜん消えそうにないよ!!

「焼け石に水だな、ちくしょう!」

「ないよりマシだ、行くぞ!」

でも、メルちゃん達がんばったおかげで、ファイロたちがとおれそうな道ができた!

「よしゆじんさまがいそいでそこを通過して、火のそとに出ていく。

待つてよよしゆじんさまー!」

S i d e : M e l t y

セントさんの尽力で、私達はどうか燃え盛る森の中から脱出できました。

ですが……森はもう、目も当てられない惨状になっています。

こんな風になると想像もできないのでしようか、あの方々は……。

「……付近の住民が何とかしたみたいだな」

「危うく戦場と全く関係ないところで死ぬところだったぜ……」

繁みに隠れながら、セントさんとリュウガちゃんが見ている方を見ると、確かに何人もの人影が見えます。

斧や桶を持つているのを見てわかる通り、懸命に消火活動に当たっていたことがよくわかります。

…私達が原因、というわけではないのですが、  
どうしても申し訳なさを感じてしまいますね……。

「姉上…まさかこんな手段を取ってくるなんて」

「そんでこの山火事もオレ達のせいにしてたりな」

「なっ…それは、あるかも」

「身内の信用ねー…」

メルティちゃん、こう言うのは何ですが…：別の方の家に生まれていれば、こんなにも苦勞することはなかったのではないのでしょうか。

あの方が血の繋がった姉だと思いと、同情を禁じ得ません。

ふと、その時私はある違和感に気付きました。

焼けた森を確かめている住民の方々、どう見ても人間ではないような……。

「…何だか、亜人の方が多くありませんか？」

「そういえば…」

私の違和感は、勘違いではなかったようです。

人間の方もいるにはいますが、獣人や亜人の方が多く見えません。

すると、それを見たメルティちゃんがハッと目を見開き、ナオフミ様の方に振り向きしました。

「ねえ、ここの領主ならかくまってくれるかもしれないわ！」

「あ？ 何だよ。この国は亜人に対して排他的だろ」

「中には友好的な貴族もいるのよ。セーアエツト領みたいに…：あ」

言いかけてメルティちゃんは、口を押さえてから申し訳なさそうに私の方を見ます。

…お気づきなのですね。私が波で滅んだセーアエツト領の出身であることは。

気を遣わせたくなくて話していませんでしたが、やはり気にしてしまっただようですね。

「ぐ、ぐめんなやこ」

「そうか…セーアエットってのは確か、ラフタリアの故郷だったな」  
「…はい」

ナオフミ様やセントさん達も、私に案じるような目を向けてくれます。

つい数カ月前の事ですけど…：自分でも、もう何年も前の事にように思えます。急成長したせいでしょうか。

「セーアエットは、人と亜人の架け橋として動いてたらしいな。あと、女王の右腕だったとか」

「ええ…でも、波で亡くなってから、父上は亜人に友好的な貴族をみんな左遷させてしまつて…」

セントさんが言うと、メルティちゃんはまた俯いてしまいます。

メルティちゃんが悪いわけではないのに…：こういつた義務感が強い所も、あの方々と似ていない箇所ですね。

少しだけ…救われた気がします。

「…ラフタリアを奴隷にしたのも、この国の兵士だってな」

「…はい」

今でも思い出せます。

お父さんとお母さんを失くし、せめて自分を支えるものが欲しくて、村の生き残りのみんなと一緒に、村を復興させようとした矢先のこと。

暴徒と化した兵士達が、私達を捉え、売り飛ばした日の事を。

私の気持ちを察してか、ナオフミ様が手を握ってくれます。

セントさんもリュウガちゃんも、フィーロもメルティちゃんも…：みなさん、心配してくれます。

「…父上の暴走は必ず止めなくちゃ、ううん、止めてみせる！」

顔を上げたメルティちゃんが、そう決意を固めます。

ナオフミ様もそれを見て、顔はぶつきらぼうなままですが、少し安堵しているように見えます。

味方が一人でもいてくれるというのは、こんなにも心強いんですね。

「さて…だったらどうやってそいつに会うか。街中にはオレ達入れ

ねえしな」

「…私が行きましようか？ 同じ亜人の私なら、話を聞いてもらえるかもしれない」

私がそう提案しますが、ナオフミ様は首を横に振ります。

手配書が出回っている以上、亜人に協力を申し出たとしても、果たして本当に味方してくれるかどうか…という事だそうです。

確かに、国の兵士に脅されていたとしたら、私達の事を伝えざるを得ませんからね。

「うーん…どうしたもんか」

「ご心配なく、普通に屋敷にお迎えしますよ」

「ああ、そう？ 助かるわ…」

ふと、聞こえてきたありがたい言葉に、セントさんが応えます。

そして少しの間を開けて、セントさんとその隣にいたりユウガちゃん、ギョツと目を見開いて後退りました。

「おお!?!」

「誰だお前！ 敵襲か!?!」

いつの間に居たのでしょうか、黒髪の優しい顔立ちの男の方が、ニコニコと私達に笑顔を見せています。

上品そうな衣服や装飾品から見ても、かなり高い地位にいる方だという事がわかります。

すると、男の人の顔を見たメルティちゃんがあつと声を上げ、ナオフミ様に振り向きしました。

「ナオフミ、この人よ！ 今言ったここの領主は!」

「お前が…?」

「お久しぶりです、メルティ王女。そして盾の勇者様」

ペこりと頭を下げる男の人…メルティちゃんが言うには、このあたりの領主の方を、思わず凝視してしまいます。

どうやって会おうかと考えていたら、まさかご自分の方から来て下さるとは。

ですが、何でしょうか…ナオフミ様と面識がある様子で？

「俺…? あ、そうかお前、前に俺が作ったアクセサリーを買っていつ

た優男……！」

「相場より五倍ほどの値段でしたが、他ならぬ盾の勇者様のデザインでしたからね。いい買い物をしたと思っと思っていますよ」

ああ、そういう事ですか。

納得はしましたが……ええと、何というか、申し訳ないというか言えないですね。

セントさんもリュウガちゃんも、メルティちゃんもナオフミ様に呆れた視線を送っています。

本人が気にしていないようなのえ、私達からは何も言えませんが。

「……まさか、本当に助けてくれるのか」

「それはもちろん……まあ、詳しい話は私の馬車で道中にでも」

そう言つて、領主様はご自分の乗ってきた馬車を示します。

……これで少しは、逃げる事に付かれたこの身体を休める事ができるでしょうか。

## 女子トーク

Side:Sentto

「…ふはー、ひっさびさにいい飯食った〜」

「オレとしては正直、ナオフミの作る飯の方が好きだけだな」

「はいはい…」

領主とかいう優男の家で、オレ達はごちそうになった。

それで今は、客室に入って少しばかり寛いでいるところだ。

横を見ると、なんか上等そうって事だけわかるベッドに寝転がって、リュウガが満足そうに腹を摩る。

なんかこうやって、気を抜けたのは久々だな。

じゃあオレも…って思ってたなら、ナオフミの奴、まだ外を警戒してる。

「ちよつとナオフミ、少しくらい落ち着いたらどうなの？」

「いつどこに奴らの目があるかわからん。あの領主が、俺達を裏切る可能性だつてあるんだからな」

「そんなこと…!」

「領民を人質にでも取られたら、流石に引き渡せと言われたら応じないわけにはいかないだろう」

ナオフミの言葉に思うところがあつたのか、メルティが黙る。

まあなあ…:国全体が「盾の勇者殺すべし!」みたいな状態なのに、いつまでも手を貸してくれるわけじゃないだろうし。

「ナオフミ様…私達がここにいることは、まだ伝わっていないはずです。今のうちに少しくらい休んでおくべきかと」

ずっと気を張ってるナオフミ。

それを見かねたのか、ラフタリアちゃんが宥めるように話しかける。

ナオフミはしばらく悩んでたけど…:そのうち肩から力を抜いて、窓から離れた。

「…そうだな」

「オレ、見張つとくよ。ラフタリアちゃんも休みな」



「よろしいのですか？」

「いーからいーから」

オレが見張りを買って出ると、ラフタリアちゃんは申し訳なさそうにしなから引き下がる。

すると、それを見たメルティがなんか目を吊り上げてきた。

「なんでラフタリアさん達の言うことは信じるのよー！」

「あ？ こいつらは信用できるからに決まってるだろうが」

「むー……！」

「何なんだよ……」

「おやおやあ……？」

オレが思わずにやにやしなからその様子を見ていると、気付いたメルティが気まずそうに目を背ける。

おい、ほっぺ赤いぞ。どうかしたのか、ん？

さて……からかうのはこれぐらいにして、と。

「メルティちゃんも休んどきな。なんかあったらすぐにも動けるようにしておいて」

「……ええ、わかったわ」

オレが言うと、メルティは素直にベッドに入る。

全員が（リユウガとフィーロちゃんはいつのまにか寝てた）ベッドに入ったのを確認して、俺は窓辺に立って、外の様子を伺う。

それからしばらくの間、オレ一人で見張りを続ける。

すると不意に、一つのベッドがごそごそと動いて、メルティが体を起こした。

「……眠れないのか？」

「……そう、かも」

一緒に寝ていたフィーロを気遣ってか、小声で答えるメルティ。

まあ、色々あったからなあ……休めつつつて休めるもんでもないか。

「……ねえ、セントさん」

「ん？」

「私……このまま父上の元に戻ったほうがいいのかしら」

……いきなり何を言い出すんだ、この子は。

え、マジでどうしたの？

いや、確かにそうできたなら手っ取り早いとは思うけど……できないからこうしてるわけで。

「でも、そしたらあんたの身が……」

「もちろん、捕まるつもりなんてないわ。だけど……このまま逃げ続けるより、自分のやるべきことがあるんじゃないかって」

いや、うん、気持ちちはわかるよ？

たださあ……自分の身、もうちよつと大事にしとこうよ、お姫様。

「ナオフミに言ったら、浅はかだつて怒られるかもしれないけど……」「んー……まあ無謀とは思うだろうな」

そういう手段は、ないわけじゃないんだよな。

国中の監視の目を掻い潜り、城の中の兵士を全員突破して、あらゆる困難を突破しながら、国王の元にメルティを連れていく……うん、無理だな。

あれだな。

女王のどこまで行く方法がダメになったら、そっちに変えるって感じだな。

「でもまあ、メルティちゃんがちゃんと考えて言うことなら、ちゃんと聞いてくれると思うぞ？」

「そうかしら……」

「そうだと。あいつは結構、優しいやつだからさ」

おいおいナオフミ……王女様からの信頼がどっか行つてんぞ。

日頃の行いの所為だし、自業自得だから直接は何も言わんけど、もうちよつとこの子の扱い考えた方がいいぞ。

フオローするオレの身にもなつてほしいもんだぜ……。

キューピッド役は辛いな！

オレがそんなことを考えていたら……なんかメルティの奴、オレにすっげえ羨ましそうな視線を向けてきた。

「……セントさんやラフタリアさんみたいなお姉さんが欲しかったな」

「あれと比べるとはやめとくれ」

「ごめんなさい、そういうつもりはないの！　ただ…」

それ、ある意味侮辱に等しいからな？

あの性悪腹黒最低嘔吐き女と比べられるのって、無茶苦茶傷付く事だからな？

『君、ウ○コより良い匂いがするね！』とか『君の美しさはゴキブリとは比べ物にならないよ！』とか言われて嬉しいかい？

そういう事なんだよ、あいつと比べられんのは。

んー、けどもメルティは、そういう事が言いたいわけじゃなさそうだから、これ以上はやめとこ。汚いし。

「……最近私、どんどんわがままになってる気がして。王女らしくしなくちやいけないのに、ナオフミの前だと感情を抑えられなくて」

……あー、うん、なるほどね。

そういうアレで、そういう心情なわけね、はいはい把握しましたよ。

「……なんですか、その目は」

「いや？　別に？」

いつ頃になったら自覚するのかなあ〜？とか。

自覚したらしたでどんな面白い反応みせてくれるのかなあ〜？とか。

全然考えておりません事よ？

これはアレだ……下手に口を挟まずに、様子を見守るのが吉だな。

ラフタリアちゃんには悪いけども！

しかしあれだな……この子はこう、色々背負いこんじゃうタイプなんだな。

今回の冤罪も、自分に責任あるって考えてそうだし……どうしたもんかなあ、オレこういう話題苦手なんだよな。

「セントさんみたいに、落ち着いた人になれたら……」

「んにや……オレはそこまで大したものじゃないよ」

「そんなことは……」

なんかこう評価下されてて気恥ずかしい……全然、そんな、尊敬されるような生き方してないし。

……うん、いい加減話しておくべきかな。

「メルティちゃんにはまだ言っていなかったっけな……オレ、記憶喪失なんだわ」

「え……」

「ナオフミと会うまで、どこで何やってたのか全然覚えてないんだわ、これが」

オレが語ると、メルティは驚きの表情でオレを見てくる。

知らない奴が聞けば、確かに驚くわな。

けど正直に言えば、本当に戸惑ってんのはオレの方なんだよな……気がついたら、今のオレになってたわけで。

今に至るまでの全部がきれいさっぱり消えちまってんだもん。

「覚えてるのは、自分が人より頭がいいってだけ……セントって名前も、昔助けてくれた人がつけてくれた名前なんだ。オレがオレであることを示すものは……ほとんど残ってない」

あるのはこの天つ才的な頭脳と、人より強い好奇心、あとはラブ&ピースの精神くらいか？

持つてるのはそれくらいで……オレには、何もなかったんだ。

「時々思うんだわ——お前は誰だ、何でここにいるんだ？ ……って」

メルティは息を呑みながら、オレの話を聞いてくれている。

こんな話、いきなり話したら不気味がるか、怪しんで距離をとられてもおかしくない……けど、ただ心配そうにオレを見てくれるだけ。

ほんつと……なんであの女の妹がこの子なんだか。

「不安で不気味でたまらなくなる……もしかしたらオレは、過去に何かやらかした大罪人なんじゃないのか、なんて」

「そんな……ことは」

「いーのいーの、怪しいのは本当のことだから」

気を遣ってくれて、マジでありがたいわ。けど、今更考えたってしょうがないんだよな。

きっかけも何もないんじゃない、過去なんて思い出しようがない。

オレが犯罪者だったかどうかなんて、今の状況じゃ調べようがないんだ。

「でもあいつ、そんな怪しいオレでもふつつーに受け入れてくれてさ

「……正直、オレの方こそ救われてんだよ」

そのへんのベッドで横になってるあいつを見やる。

全く……疑心暗鬼になってるくせに、オレみたいな奴を受け入れるなんて、お人好しが過ぎるっての。

……だからこそ、オレはお前の力になりたいんだよ、ナオフミ。

「……ナオフミには、内緒な？」

「……わかったわ」

ふつと微笑んだメルティが、また布団の中に戻る。

今度はちゃんと眠れるといいな……また起きたら、話し相手になつてやるか。

……ところでナオフミ？ 起きてんなら一声かけてくれてもいいんじゃないの？

寝息で起きてんのバレてんだよ、バカ。

ほんつと……手間のかかるご主人様だよ、お前は。

## 悪夢の再来

Side: Ryuga

ひっそりびさに心地よく、思う存分眠れたなと思いながら、ベッドの柔らかさを堪能していたオレだが。

ある時いきなり、ベッドから蹴り出されて床に叩き落とされた。

「起きろ筋肉バカ！」

「んがっ!？」

怒号と衝撃で、一気に目が覚める。

目がちかちかするのを堪えて、オレはいきなり蹴りを放ってきた奴を——セントを睨みつけた。

「つてえ…何すんだバカウサギ！」

「寝ぼけてる場合じゃねえ、さっさと隠れるぞ！」

「あ?…何言って…」

何だこいつ、何でそんな怒ってんだ? 見張りをサボったのがそんなに腹立ったのか? いや、そりゃ確かに悪かったと思うけど…。

…いや、怒ってんじゃねえな、これ。

焦ってる…オレが寝てる間になんかトラブルでもあったのか?

ナオフミ達もバタバタ慌ててるみたいだし。

なんか皆が覗き込んでる窓の外を、オレも一緒に見やる。

すると…何人もの兵士達に拘束され、連れていかれるあの優男領主の姿が目に入った。

おいおいおいおい…こりゃほんとにマズいだろ!

「あいつら…!…とうとうここを嗅ぎつけやがったのか!?…っていうか、領主の家でもお構いなしかよ!…」

「あの優男さんも連れてかれちまうとはな…オレ達が見つかったらあいつもやばい。早く行くぞ」

「お、おおー!」

マジで眠りこけてる場合じゃなかった…! とにかく急いで逃げる用意を…いや、隠れねえと!

オレ達が慌てて部屋を出ると、屋敷のメイドが緊迫した顔でオレ達

を案内してくれる。

「勇者様！ お急ぎください！」

「我々はメルティ王女を誘拐した犯人の捜索に来た！ 罪人の手助けをしようものなら容赦はせんぞ!!」

メイドの手引きで、大急ぎで厨房に隠れると、無理矢理入って来らしい兵士達の声が聞こえてきた。

相当無茶をしたらしいな……途中で何かが割れる音とか、悲鳴とかが聞こえてくる。

連中、ホントにここまでするのかよ……宗教つてのはマジでめんどくせえし、胸糞悪いな！

「絶対にここから出ないでください！ 決して！」

「わかった……！」

掃除道具入れにオレ達を押し込め、メイドは兵士達の方へ向かう。匿って貰ってただけだよ、ここ無茶苦茶狭いんだが。

おい、オレのケツ触ってるの誰の手だ？ ナオフミ、お前じゃない……わな。悪い、オレが悪かった。

「ここをどことお考えですか！ 罪なき者に疑いをかけるなど、騎士の行いとは思えませんよ!？」

「黙れ！ 盾の悪魔にさらわれた王女を救うための行いを非道とでも言うか！」

さっきのメイドが懸命に兵士に抗議しているが、奴さん、全く聞く耳もたない。

今にもメイドを押し退け……いや、もしかしたら斬り捨てて押し入ってくるかもしれないねえ。それくらいイカレた奴の声に聞こえた。

「…あのメイド、ヤバくないか？」

「落ち着け……今出てったら全員危ない」

セントがそう言うけど、焦りは募るばかりだ。こつちを助けてくれる奴が殺されるとか、罪悪感と後味の悪さが半端じゃねえよ！

正直今すぐ飛び出して、あの兵士達全員ぶっ飛ばしたい……だけど、オレでもそうしたらどうなるかは分かる。

居場所がバレて、優男がこんどこそ国に捕まって、全員処刑される

未来しか見えねえ……!

「そういう貴様こそ罪人に手を貸す反逆者ではないのか!!」

メイドの足止めにも、いい加減我慢の限界が訪れあのか、激昂した兵士の声が聞こえてくる。

これマジで手を出す三秒前だろ! 止めるなセント! オレは屋敷の連中が、あのクソ野郎共にどうこうされるのを見過ごせねえ!! セントやナオフミの制止を振り切って、掃除用具入れを飛び出そうとしたその時だった。

「おやめなさい!」

いきなり響き渡った、この場で一番聞こえちゃいけない声に、オレの動きがピタツと止まる。

同時に、オレの口はナオフミの手で塞がれて、一切身動きが取れなくなった。

むーむーうなるオレに代わって、外の様子を伺うセントが引き攣った声をこぼした。

「あああああ……! 何やってんの王女さん……!」

「メルティ王女……! 本物か!?!」

「他に私がいるとでも?」

オレ達の心配をよそに、メルティの奴は堂々と、ものすごい威厳たっぷりの態度で応える。

あいつすげえな……何をどうやったら大勢の敵に囲まれた状況で、あんな強気なままいられるんだよ。兵士もちよつと怖いぞ。

これ……本物の王の威厳ってやつか。

もしかしたら、あいつがこの状況を好転させてくれるんじゃないかって、そんな考えまで浮かんでくる。

「嘆かわしい……こんな真似を平然と行う兵がいるだなんて。一体どこ  
の誰があなた達に命じたのですか?」

後退る兵士達を睨み、厳しい口調で告げるメルティ。  
いけるか、と、抵抗を止めたオレがそう思った時だった。

「これはこれは……無事で何よりです、メルティ王女」



そんな、丁寧な言葉遣いなのに、悍ましいほどの悪意に塗れた声が、メルティに向けられる。

兵士達が左右に分かれ、その奥から一人の、ぶくぶくと肥え太った中年の貴族が進み出てくるのが見えた。

そいつを見た瞬間、オレの後ろにいる女が一瞬、息を呑むのがわかった。

「御身を案じて馳せ参じました……あの盾の悪魔に何もされていないようで本当に安心しましたよ」

何だあいつ……喋る言葉のぜんぶが気持ち悪い。

表向きはメルティを敬ってるけど、内心じゃ道具か何かとしか思っていないのがまるわかりだぞ。

……ていうかそれより、オレの後ろで震えてるラフタリアのことが心配なんだが。

「盾の悪魔はどこに？」

「もうお逃げになりました……そうするようお願いしましたので」

「なんと？」

「私がお願いしたのです。ここから逃がす代わりに……私が盾の勇者様の冤罪を晴らしてみせると、そうお約束したのです」

「……あいつ」

「危険な橋渡りすぎだぜ、王女さん……!」

ナオフミとセントが、呆れを孕んだ焦りの声をこぼす。おれも同じ気持ちだよ。

こつちを助けようとしてくれてんのはわかるけどよ、正攻法が通じる相手じゃないだろうが……!神のためなら、何しでかすかわかんねえ奴等だぞ!?

するとそこで、ようやくナオフミ達は後ろで真っ青な顔になってるラフタリアに気付いた。

おい、さつきより顔色悪化してんぞ。

「……ラフタリア？」

「ダメ……その男についていって……!」

…なんだ、お前…あの貴族のこと、知ってんのか？  
怯えてる…？ いや、今のこいつから感じる感情は、恐怖じゃなく  
て…！

「…ふむ、いないのならば仕方ありませんな。ではあなたのお望み通り、話を聞かせていただきましょうか」

困惑するオレ達をよそに、貴族の男はメルティに手を差し出し、促している。

空きっぱなしになった厨房の扉が、オレ達にはまるで、地獄に通じる出入り口のように思えた。

「……じつくりと、ね」

貴族の男の案内で、メルティがすつと歩き出す。

そして、兵士達全員が退出し、厨房の扉はバタンツと、勢い良く閉じられた。

Side : Naofumi

「ぴぎゃーっ!？」

オレが発動させた魔物紋の罰により、屋敷のどこからファイロの悲鳴が響いてくる。場所は…屋根裏だな。

隠れる時にいないと思ったら、こんな所にいたのか、お前は…。

迎えにいつてみると、横たわったファイロが恨めしそうな目でオレを見上げてきた。

「ごしゅじんさま、ひどいいゝ。なにをするのお」

「お前が呼んでも出てこないからだ」

「えー、メルちゃんがそう言ったんだもん。かくれんぼするから、見つからないようにねって。よんでも声だしちゃダメだよって」

…なるほどな、遊ぶ振りをして、ファイロをここに隠したわけか。

あいつめ……一丁前に格好つけやがって。

「あれ？　メルちゃんは？」

「だらあ！　こなくそ！」

ようやく、メルティの姿が見えない事に気付いたファイロが辺りを見渡し、首を傾げる。

すると今度はリュウガの奴が、手ごろな位置にあったものを蹴り飛ばし、バラバラに破壊して回っていた。

「落ち着けよ、リュウガ」

「これが落ち着いていられるかよ！ あのバカ王女……無謀すぎんだろ！」

目の前で、メルティがむぎむぎ連れていかれる様を見ていたせいか、リュウガの怒りは収まる気配を見せない。

冷静に見えるセントも、握りしめられた拳を見る限りほぼ同じようだ。

そこでオレ達は、話に置いてけぼりになっているフィーロのために、一から説明してやることにした。

そして教えてやると、フィーロは愕然とした様子で立ち尽くした。

「メルちゃんが……!?!」

「おかげで俺達は全員、捕まらずに済んだ。……だがその代わり、あいつがどんな目に遭わされるか」

：俺がオタクなせいだろうか、どうしてもこう、嫌な想像をしてしまう。

違うよな？ R18な意味でえらい目にあったりしないよな？

いや、グロイ意味でのえらい目も願いたい下げだが。

「あいつ……三勇教のロザリオ持ってたよな。まず王族に敬意なんてないだろ。あいつら、教義を全うするためならなんだってやりかねない」

「本物の狂信者だな」

ああ、やつぱりそういう意味での窮地だよな、ここは。

昔の魔女狩りみたいなの……罪が確定したうえでの拷問とか、やはり凌辱とかをされる可能性もあるわけだ。

まったく……ファンタジーな世界で、何でこんな血生臭いものと関わらなきゃならないんだ。

「ごしゅじんさまー！ メルちゃんたすけに行こう！」

「もちろんそのつもりだ。あいつはもう俺の仲間だ……何より借りを作ったまま死なせてたまるか」

あいつは俺達を助けるために、自ら死地に赴いた。

だったら……俺達もそれに見合う恩を、きつちり返してやらなきやならないよな。

「そんじや、行くか。あのハゲブタ野郎をぶっ飛ばしに」

## 恩には恩を

S i d e : S e n t o

「…あれか、あのブタ野郎がいる領地は」

「でつかいな…あの優男より上位の貴族つてわけか」

川を越え、山を越え、追っ手の目を掻い潜って数時間。

オレ達は目的地、メルティを攫ったあの野郎が治める領地に辿り着いていた。

そこで気づいたのは、その街にかなり見覚えがあったことだ。

「なあ、ナオフミ。オレこの街に見覚えあるんだけど」

「ああ…お前の記憶の通りだ。行商の時、売り子をやってたラフタリアが毛嫌いされて、ものが全く売れなかった街だ」

巫人差別が一際強い土地つて事か、なるほどなあ…。

ぶつちやけた話、この国が巫人嫌い知られる理由つて、この街の連中が好き勝手してるからなんだろうな。

あの王の影響を最も強く受けている場所つて事だ、胸糞悪い。

…：…そろそろ、あっちにも触れとくか。

さつきから、ラフタリアちゃんが黙ったままでちよつと怖いんだよな。

「…何か知ってるんだろ、ラフタリア」

「…はい」

おつもい声で、ラフタリアちゃんが応える。

おおぅ…：…ビビツてちよつと肩が震えちまったぜ。

しかし、そういうええ言ってたな。

波で家族を失った後、奴隷にされてあちこちたらい回しにされたつて。

「奴隷落ちした私を買い、親友のリファナちゃんと一緒に拷問して笑っていた貴族です」

…：…聞かなきゃよかった、マジで胸糞悪い。

何だつて見た目がちよつと違うだけで、そこまでしやがるんだよ、人間つてやつは。

「私は完全に壊れるより先に、契約期間が終了して元いた場所に戻されましたが、リファナちゃんは…」

「…ん、わかった。もういい」

抑揚のない声でしゃべり続けていたラフタリアちゃんを、ナオフミが止める。

それ以上はもう言わなくていい……って感じじゃなくて、もうそれ以上聞きたくないって感じだったな。

丁度良かった、おれも大分気分悪かったし。

「大丈夫か？　むちゃくちゃ顔色悪いぞ」

「…大丈夫とは言えません。もしまた、あの男と真正面から対峙したら……私はもう、自分を抑えられる自信がありません」

顔を上げて、豚領主の屋敷を睨みつけるラフタリアちゃん。

……うん、控えめに言っても混じ怖え。

おいリュウガ、お前も一緒なんだろう？

今のラフタリアちゃん、めっちゃ怒り狂ってて近寄りたくないんだよ。

こら逃げるな、オレを一人にするな！

「好きだけ暴れればいい。ただし、メルティを救出してからな」

「…はい」

ナオフミがそうなだめるけど……ありや、まだ憎悪と憤怒が体の中にくすぶってるな。

放つといたら、なんかやばい事しかすかもしねえ。

メルティの救出だけじゃなくて、ラフタリアちゃんの監視も追加か

……やる事が多いなあ、もう。

……さて、結構前の緊張ほぐしはこれぐらいにして。

そろそろ派手におっぱじめるとしようか。

「よし、じゃあ当初の作戦通りに、各々で行動を開始して……」

ナオフミがそういって、屋敷に標的を絞って動き出そうとしたその時。

ドカーン！と、豚貴族の屋敷の扉が、巨大な桜色の弾丸に衝突され、粉々に破壊された。

……は？ え、ちよつ、あれ！

「メルちゃ——ん!! どこー!？」

「フイ——ロちゃん!? 人の話聞いてたー!？」

目を吊り上げたフイーロちゃんが、見張りも護衛もしたことかとはばかりに大暴れする。

騒ぎを聞きつけ、次々に兵士達がやって来るけど、暴走したフイーロちゃんは止まらない。むしろ被害者が増えるだけだった。

ねえ、ちよつと？

オレの作戦、全くの無意味になっちゃったんだけど？

「うわあああ! な、なんだこの魔物ぶほあつ!？」

「大丈夫かあべしつ!!」

「メルちゃ——ん!!」

あーあー、気の毒になるぐらい盛大に吹っ飛ばされてら。

助けに行った奴まで吹っ飛ばされる有様……なんか、こつちが申し訳なく思えてくるな。

オレが呆然と、屋敷の庭で起こっている惨状を凝視していると、オフミがオレの肩を叩いた。

「あいつがああなるのは想定のうちだ。セント、リュウガ、フイーロを手助けしてやれ」

「ああもう……あいよ!」

「おう!」

「ラフタリア、向こうに注意が引きつけられている間に急ぐぞ」

「はい……!」

……確かによお、フイーロちゃんがいい感じに囿になってくれるけど、

なんか釈然としないわ……。

まあ、オレのもやもやは横に置いといて、オレ達もメルティ奪還のために動き始める。

二手に分かれて、あのメルティとあの豚貴族がいるであろう場所を目指す。

オレとリュウガは、屋敷の扉の上に登り、敵の位置を確認しながら

侵入場所を選ぼうとする。

その時、オレの足元でガチャンと音がした。

「…おい、セント」

気づいたリュウガが、オレを睨んでくる。

そして、オレの懐から落つこちたそれ——オレの使ってるものと全く同じベルトを拾い、険しい顔で差し出してくる。

「お前こんな大事なもん落とすなよ」

「お前んだし、いいだろ」

「あ?」

オレがそう答えると、リュウガはぼかんと目を見開く。

理解が追いついていない様子の奴に、オレはため息交じりにもう少し詳しく説明してやる。

まったく…時間ないんだから、察しろよ。

「お前の分のビルドドライバーだよ、それ」

「…作ったのか」

「ああ」

「いや、でもよ…」

「メルティを助けるには、必要になるだろ?」

リュウガはベルトを見下ろし、渋い顔になる。

おいおい…前はあんなに欲しがってたのに、今更怖気付いちまったのか?

まあ、そうやって危険なものだって認識してくれてんなら、まだましだと思っけだよ。

「怖くなったか。強い力を手に入れるのが」

「…普通にレベル上げてして強くなるのは、別に怖くも何ともねえよ」  
ギチツ…とベルトを持つ手に力が籠もる。

…葛藤してんなあ、言いたい事はわかるけどよ。

「けど…これはその普通から外れてるだろ」

「…そうだな、これさえあれば、誰でも強くなれちまう。使う奴に問題がありや、即兵器に早変わりだ…そうなるのが怖いか?」

「…ああ」



例を上げるなら……三馬鹿勇者共か。

あいつら、あつちこつちで問題ばつか起こしてやがるし、その自覚がほとんどないときてる。

それが悪意じゃなくて、一応善意からだつてのが質が悪いけどな。何だつて伝説の聖武器様は、あいつらを選んだんだか……まったく謎だ。

……ここで迷つても仕方ないんだけどな。

しようがない、ちよつと気恥ずかしいけど、ちよいと背中を押してやるか。

「オレだつてき、根つからの善人じゃねえよ。ムカつくことがあつたら、ぶっ潰してやりてえとか普通に思う。自分のことしか考えられないときもある……でもさ」

にっ、と笑つて、オレはリュウガを見つめる。

まったく……オレにここまで言わせておいて、やっぱり怖いから使わない、なんて言わせねえぞ？

「オレが間違つたら、きつとナオフミやラフタリアちゃん達が止めてくれる。そう思うんだ」

驚いた様子で、リュウガがオレを見てくる。

くっ……我ながらちよつと臭かったか？ 今さらになつて恥ずかしくなつてきた。

ええい、ままよ！ このまま行つてやる！

「だからさ……お前も途中で間違ひそうになったら、オレが止めてやるよ。仲間つてそういうもんだろ？」

「…簡単に言いやがつて」

頬を染めて、リュウガはぷいっと顔を背ける。

だけど、それで覚悟は決まつたらしい……黙つてベルトを自分の腰に巻いた。

ほんつと……手間がかかる新入りだよ、お前は。

「じゃあ、囀役を全うしますかねー！」

「おうー！」

リュウガと二人並び、オレは塀の上で構える。

オレは水色と黄緑のフルボトルを振り、ベルトに挿す。

リュウガは青いフルボトルを、飛来したクロースドラゴンの背中に挿し、ベルトに装着する。

【海賊!】【電車!】【ベストマッチ!】

【Wake up! クロースドラゴン!】

新しく手に入れたフルボトルの力……試させてもらおうぞ!

さあ、オレ達も大暴れしてやるぜ!

【Are you ready?】

【変身!】

【定刻の反逆者 海賊レッシャー イエイ!】

【Wake up burning! Get CROSS—Z

DRAGON! イエイ!】

オレ達の周囲にパイプが張り巡らされ、それが鎧に変化する。

前後から狭まってきたそれを身に纏い、オレ達は戦士の姿に変わる。

リュウガのはいつも通りの、青と金の龍の鎧に。

オレのは、片方には海賊船、もう片方には列車?とかいうよく知らねえ乗り物を模したパーツが張り付く。

いきなりベストマッチが当たるとは、随分ついてるねえ!

「うおおおお!!」

「おらあああ!!」

変身を完了させたオレ達は、塀の上から盛大に吠えながら飛び降りる。

その声に……っっていうかベルトの音声で気づいた兵士達が、ギョツと目を見開きながらこちらにやって来た。

「! また侵入者だ!」

「さっさと迎え討て!」

兵士達は持っていた槍を構え、オレ達に襲い掛かってくる。

あの感じ、相手が誰であるか確認する前に、一気に突き殺すつもり  
の勢いだな……だが、無意味だ。

「効くかよ、そんなもん!」

【カイゾクハッシャー!】

オレが片手を掲げると、パイプが張り巡らされ、一つの武器――  
弓矢に変化する。

オレはそれを構え、矢の部分にある列車?の模型を掴み、後ろに引つ張つて力を溜める。

そして狙いを定め、兵士達に向けて一気に撃ち放った!

【各駅電車】

シユバツ!と放たれた矢……ではなく光の列車が、兵士に炸裂する。

オレはどんどん光の列車の一撃を放ち、迫り来る兵士達を次々に昏倒させていく。

安心しろ、加減はしてある!

だけど、兵士の中には結構レベルの高い奴らもいたらしい。一発じゃ斃れない奴もいた。

「だったら……!」

【急行電車】 【快速電車】

オレは弓を引く時間を伸ばし、光を撃ち出す力を溜め込んでいく。

設計通り、時間が伸びるごとに蓄積されるエネルギーは増大し、凄まじい光を放ち始める。

オレを狙う兵士の槍が、オレの目前にまで迫ったその瞬間、オレは力を顔蓬する。

【海賊電車】

「勝利の法則は、決まった!!」

ゴツ!!と、先程とは比べ物にならない一撃が、兵士に決まる。

胸のど真ん中に食らったそいつは、大きく弧を描いて宙を舞い、やがて地面に頭から落下する。

……やべ、やり過ぎたかな。

「ま、いいか」

「どるりゃああああああああ!!」

あつちでは、リュウガが思いつきり大暴れしてるし……一人くらい重傷者が出てもしようがないよな、うん。

女の子を一人攫うような悪党だ、ノープロブレム！

「さあ……どんどんかかってきやがれ!!」

まだまだ姿の見える兵士達に向けて、オレは弓を構え、凄んでみせた。

## 仇には仇を

S i d e : M e l t y

「聞けばマルティ王女は……盾の勇者に洗脳されているとか」

連れて来られた、亜人排斥派の貴族・イドルⅡレイビアの屋敷。

そこで私は……この男に脅されている。

前々から危ない印象を抱いていた人だけど……今は、前よりもずつと恐ろしく見えるわ。

「奴はメルロマロクを滅ぼそうとしている悪魔。討ち取らねば多くの血が流れるでしょうねえ」

「あの方は、そんな事……!」

「盾の悪魔の行き先をお教えてください……共にこの国を奴の間の手から救いましょうぞ——神の名の下に」

そういつて見せてくるのは、剣と槍と弓が合わさった意匠のネットワークレス。

三勇教の……この国を可笑しくしている宗教の、その信者であることを示す証。

私はそれを見て、とてつもない恐怖に襲われてしまう。

イドルの手が、私を捕らえようと伸ばされた——だけど。

「メルちゃああああああああん!!」

どかん!!と、思わず耳を塞ぎたくなるような轟音と共に、大きな影が……私の友達が扉を蹴破ってくる。

私が驚いていると、ファイロちゃんの後ろから、ぞくぞくと見覚えのある人達が現れてくる。

「おっと、それ以上は見過ぎせないな!」

「ナオフミ……!?!」

「たっ……盾の悪魔!……とうとうここまで来たのか!」

「ああ……親切な兵士さんの案内でな」

にやりと不敵に笑うナオフミが、イドルにそう告げる。

よく見ると、ナオフミの片手は、なぜか顔色の悪い兵士を捕まえている。そして今のナオフミの使っている盾には、毒蛇の意匠がついて

いる。

……なるほど、毒で脅してここを探し当てたのね。

うん、来てくれて嬉しいんだけど……なんだかうまく喜べないわ。

「ご苦労だったな。じゃあ、あとは好きにするといい」

「くっ……おのれ、地獄を見るがいい！ 盾の悪魔め！」

ナオフミが解毒剤らしき瓶を渡して、囚われていた兵士が逃げている。

私はつい、ナオフミの方に駆け寄りそうになるけれど、我に返ったリドルがそれを止め、今度は私が捕らわれてしまった。

「さて……単刀直入に言うぞ。メルティを離せ、そしてこっちに返せ」

「近づくな、悪魔め！ 貴様の要求など聞くわけがないだろうが！」

「一応の情けのつもりなんだが……痛い目に遭いたくなけりゃ、さっさとこっちによこせ」

ぎろりとイドルを睨みつけて、要求するナオフミ。フィーロちゃんも一緒になって、こちらに凄んできてくれる。

けれどそれくらいじゃイドルは臆さないみたいで、余計に私の首にかけた腕に力を込めてきた。

「ふ……ふん！ 貴様の方こそ、そこに跪くがいい！ メルティ王女の命が惜しいのならな……！」

「く……う……」

首が絞められて、少し苦しくなる。

でも、私が苦しんでいる事に気付いていないようで、イドルはナオフミ達に不気味に笑ったまま後退る。

どうしよう、どうしたら……！ 私が焦っていた時だった。

「……あなたはそうやって、自分より弱い立場の相手しか傷つけられないのですね」

「な……何だと?！」

そう、抑揚のない低い声で告げて、前に出てくる人がいた。

俯いたラフタリアさんが、ゾツとするぐらい冷たい声を発し、イドルの方へと近づいていく。

私も思わず、ブルツと肩を震わせてしまった。

「おい、ラフタリア…」

「卑怯で矮小で……どうしようもない最低の男。リファナちゃんは……こんな男に殺されたんですね」

俯いていて、私にはラフタリアさんの表情が見えない。

けれど、ラフタリアさんがすごく、アイドルに対して大きな怒りと憎しみを抱いている事がわかった。

一体この人は、ラフタリアさんに何をしたの…!?

「貴様…貴様は、まさか…!？」

私の首を締めながら、アイドルが何かに気付いたのか目を見開く。

そしてやがて、ニタリとさつきよりも醜い、悍ましさを感じさせる笑みを浮かべ出した。

「そうか…そうかそういうことか！ 貴様はあの…私の玩具だった奴隷のガキか！ 随分とデカくなって、態度もデカくなったな！」

「…あなたに売られてから、色々ありましたからね」

「それでどうした!? また私にいたぶられるために戻ってきたのか！ 殊勝なことだな！」

…! まさか、ラフタリアさんが売られた場所って…!?

そういう事なら、ラフタリアさんのあの様子も納得できる。しかも、話の内容から察するに、ラフタリアさんの友達は……!?

ラフタリアさん、まさか、自分の手でアイドルに…!?

「いいえ……私がここにきたのは」

その声に、どんどん堪えきれない激情が募っていく。

自分を苦しめていた……友達の仇である男を前にして、ラフタリアさんの籠が外れそうになっているのが、ありありと見て取れた。

「過去の弱い私を終わらせ……因縁に決着をつけるためです!!」

「くっ、来るな！ こいつがどうなっても……」

すらつ…と剣を抜き、アイドルに狙いを定めるラフタリアさん。

それを見て焦ったのか、私を引きずりながら後ずさっていくアイドル。

どうしよう……これじゃ、私がまた足手纏いになっちゃう。

何とか、アイドルの拘束から逃れなくちゃ…!

私が必死に、アイドルの拘束を抜け出す方法を考えていた時だった。

【忍者！】【コミック！】【ベストマッチ！】

「ビルドアップ！」

【ニンニンコミック イエイ！】

最近はもう、聞きなれてしまった声が、どこからともなく響き渡る。

アイドルも驚いた様子で、辺りを見渡しだしたその次の瞬間。

【隠れ身の術！】

ぼんっ！と、白い煙とともに、黄色と紫の鎧に身を包んだセントさんが、私とアイドルの目の前に現れる。

さらにセントさんが、片手に持った短刀のような武器を構えると、私とアイドルの間で、強烈な風と火の一撃が炸裂した。

【風遁の術！】【火遁の術！】

「ぐわああ!？」

【分身の術！】

不意打ちによろけたアイドルに、ぼぼぼんっ！と煙と共に分身を生み出したセントさんが襲い掛かる。

おなかに蹴りを入れられてふらつくアイドルに、今度は猛スピードで突っ込んできたリュウガちゃんが拳を振り上げた。

「うおりゃああああ!!」

【ドラゴニックファイニッシュ！】

青い炎を宿した拳が、アイドルの顔面に炸裂する。

真面目な防御も取れなかったアイドルは、そのまま後ろの窓ガラスに突っ込み、どたつと盛大に倒れ込んだ。

「よっしゃあ！ 人質奪還!!」

「やったー!」

ボツ！と拳に纏わせた炎を散らし、ガッツポーズをするリュウガちゃん。

フィーロちゃんもそれを見て、そしてセントさんに抱きかかえられた私を見て、翼を広げて喜びをあらわにした。

「…これであなたを守る盾はなくなりましたよ。いい気味ですね」

「ち…近づくな！ 私に近づくな、亜人め！」



「この状況でここまで強気でいられるとか、逆に尊敬するわ」

ガラスの破片を下敷きにして、横たわるアイドルにラフタリアさんがそう告げる。

けど、やはりそれでもアイドルは臆さないみたい……ナオフミが呆れるぐらいに、私達を見下した態度を崩さなかった。

諦めの悪い彼を見つめていたその時、ナオフミがハッと目を見開いた。

「セントー！」

「うお!?」

ナオフミが叫んだ直後、バシンツ!と黒い何かが床を打つ。

慌ててセントさんが飛びのいたからよかったものの、砕けた床を見て、私はぞつと背筋に寒気を走らせた。

「盾の悪魔め……亜人共を引き連れてこの国を滅ぼす気だろうが、そうはいかんぞ! 亜人との戦争で何人も屠った私の力を見せてやる……!」

攻撃してきたのは、アイドルの鞭だったみたい……どこに隠し持っていたのか、ヒュンヒュンと両手で不気味な鞭を一鳴らしている。

アレが、アイドルの持つとっておきって事かしら。

でも、その威力を見ても、ラフタリアさんは引かない……いいえ、もつと怒りを増して、自分の武器に手を伸ばした。

「そこに一体、弱気人々は何人いたのでしょうか……この、卑怯者!!」  
そういつて、ラフタリアさんは刃のない剣の柄を引き抜く。

それを振りかざした瞬間、魔力でできた刃が飛び出し、眩しい光を放つ。

鞭を振り回すアイドルの懐に入り込み、ラフタリアさんは、魔力剣をアイドルの胸に深々と突き立てた!

「ぐわああああ!!」

実体のない刃が、アイドルの精神に突き刺さる。

アイドルは悲鳴をあげてのけぞり、やがてずるずるとその場に倒れ込む。

しん、と静かになると、ラフタリアさんは魔力剣の刃を消し、無言

のまま鞘に納め、仇敵に背を向けた。

「…やっちまわなくていいのか?」

「それでは…この人と同じです。自分の感情の赴くままに命を奪えば…悪人と何も変わりません」

「ラフタリアさん…」

そう、何という事はないようにいうけれど、ラフタリアさんの表情はまだどこか厳しい。

命を奪いたくないという気持ちと、今すぐに殺してやりたいという木本がせめぎ合っているのかもしれない。

…そんな気持ちにさせてしまったことに、私の方が申し訳なく思えてきた。

「よく…耐えたな」

ナオフミがそういつて、ラフタリアさんの肩を叩く。

そうしてようやく…ラフタリアさんは落ち着きを取り戻して来たらしい。ぽろぽろと、とめどなく涙を流し出した。

少しでも、犠牲になった人の弔いになればいいけど———そう思われたけど。

「このままでは…このままでは済まさんぞ…! 盾の悪魔も…亜人も!」

「あいつ、まだ…!」

背後で聞こえた声に振り向くと、おなかを抑えたいドルが、壁を支えに立ち上がるようにしている姿が目に入った。

嘘でしょ…!? あれだけ攻撃を受けて、それでもまだ起き上がれるなんて…!?

目を血走らせてこちらを睨んでくるアイドル、彼の反撃に、私達が身構える……だけだ。

「ぎっ…ぎやあああああああああ!!」

突如、アイドルが喉を掻きむしるような仕草を見せて、がくりと膝をつく。

直後、アイドルの顔中に紫色の斑点が現れて、見る見るうちにその体が崩れ出していく。

私達が目を見張っている間に、イドルは跡形もなく、部屋の中から消え失せてしまった。

「な……なんだ、今のは。何が起こったんだ…!？」

「おいおい…盾の勇者様も甘いねえ。トドメを刺すなら、ちゃんどこまでやらねえとな」

呆然と立ち尽くす私達。

そこに、まるで聞いたことのない声が、嘲笑う響きを持って届く。いきなりのことで、私達は一斉に勢い良く振り向く。

そして……困惑で大きく目を見開く。

そこにいたのは、体中に金属の管を巻き付けた、赤黒い格好の誰か。蛇の形をした緑色の目が特徴的な、見るからに怪しく不気味な雰囲気醸し出す、おそらくは男の人であろう何者かが、テーブルの上に腰かけていた。

「誰だ…お前は!」

「まあまあ、そう身構えるなよ。別に今すぐ潰してやろうなんざ思っちゃいねえんだから……そうだなあ、晴れの舞台だ。盛大に名乗ろうか」

ナオフミの問いに、蛇のようなその男は呆れるように肩を竦める。

そして勿体ぶるようにテーブルを降りると、まるで舞台役者のような大仰な仕草で、私達に向けて礼をしてみせた。

「ブラッドスターク……つてのが俺の名よ。以後、お見知り置きを？」

盾の勇者……ナオフミ君？」

## 毒蛇の男

S i d e : R y u g a

「ブラッド……スターク？」

いきなり現れた、蛇を思わせる格好のそいつに、オレ達は皆絶句していた。

仮面で顔が見えないから……ってだけじゃねえ。

なんかこう……目には見えない、えげつない闇を隠してそうな、そんなむちやくちや不気味な感覚がする。

「やれやれ……せつかく俺が手助けしてやったのに、結局なくんの役にも立たねえとは……いやになっちまうぜ」

「手助け……!？」

豚貴族が消えた場所を見やって、肩を竦める蛇男。

あの野郎が消えたのは……こいつのせいなのか？ 何をしたのか全然わかんなかったけど、こいつで間違いないんだろうな。

こいつは油断しちやならねえ……得体の知れない敵ってわけだ。

「なあ？ 盾の勇者殿？」

「知るか、俺に聞くな」

「冷たいねえ……人生もつと余裕を持って生きるべきだろお？」

この野郎……!

言い方がいちいち腹立つな……!

なんつーか……つかみどころのない、雲みたいなの？ いや、煙みたいな奴だな。

こつちが警戒してる姿を、思いつきり馬鹿にしてる感じがしやがる。

「手助けってことは……お前があの貴族に、俺たちの居場所を教えたって事でいいのか？」

「ご明察……しらみつぶしに探して、なくんの罪もない亜人の連中が巻き込まれるよりはいいだろ？」

「何を恩着せがましいことを……!」

クツソ……こいつが喋るたびになんかイラつく。

ナオフミの奴もイライラしてるし、セントもラフタリアも、ついでにフィーロとメルティも険しい顔をしてる。

落ち着け、落ち着けオレ達……!

挑発に乗ったら、こいつの思うつぼだぞ……クソつたれ!

「…それでお前、俺たちに何の用だ。ただ世間話とグチを言いに来たわけじゃないだろ」

「せっかちなねえ……ま、そっちの方が話が早くていい」

どかつ、と蛇男はやたらと豪華な部屋の中を歩き回り、下品な色をしたソファに腰かける。

そして膝に肘をつけて、オレ達を見つめてくる。

仮面で表情は見えねえけど……間違いなく、にたりと不気味に笑っている事だけはわかった。

「——お前さん達を追ってきた、これでいいかあ?」

蛇男がそう告げた途端に、オレ達の背筋に寒気が走る。

そして全員で、飛びのきながらそれぞれで武器を構える。

この感覚……!

前にあつたあのコウモリ男と同等……いや、それ以上にやばい気配だ!!

ていうか、こいつの格好!

何となくだが、あのコウモリ野郎に似てるのは、オレの気のせいか

…!?

「ははっ……それじゃ遅すぎるぜ勇者様よお!」

顔を引き攣らせたオレ達に向かって、ソファから跳んだ蛇男が腕を振りかぶる。

その手から飛び出したのは……緑色の蛇!?

とてつもない速さで飛び出したそいつが、盾を構えたナオフミに向かって突っ込んでくる!

まさか、さつき豚貴族がやられたのはこれか!?

「ナオフミイ!!」

こいつにやられたら、ナオフミもあいつみたいに…!?

慌ててオレとラフタリアが、飛び掛かる緑の蛇を弾こうと手を伸ばす……だが、蛇の牙は、すでにナオフミの首元にまで迫っていた。

ヤ……ヤバい!

オレ達が顔を蒼白にさせた瞬間だった。

【タカー!】【ガトリング!】【ベストマッチ!】

聞きなれた、あのベルトの音が響き渡り……オレとラフタリアの間を、オレンジ色の閃光が駆け抜けた。

【天空の暴れん坊 ホークガトリング イエイ!】

「うおおおおお!!」

振り向けば、オレンジと灰色の鎧を身に纏ったセントが、オレンジと灰色の妙な武器を構えている姿が目に入った。

六つの管を束ねた……銃?とかいう、遠くにいる奴をブツ飛ばす武器だ。

その前面が回転し、管の穴からオレンジ色の閃光が幾つも発射され、蛇男にぶち当たっていく。

ドガガガガガ!!

って感じで、ものすごい衝撃と轟音と火花が辺りに撒き散らされた。

「うおっ…バカ! 部屋の中でそんな攻撃力の高いものを使うな!!」

「んなもん気にしてられるかよ!!」

セントのバカが撃った余波で、部屋の中があっという間にポロポロになる。

ナオフミがめっちゃくちや怒ってるけど……正直に言っただけ今はチャンスだ!

セントが撃つのをやめた瞬間に、オレもベルトのレバーを回しまくりながら、蛇男に向かって突っ込む!

まずはこの狭っ苦しい場所から追い出してやらあ!!

【ドラゴニック・フィニッシュ!】

「うおらああああ!!」

「ぐおっ!!」

オレの渾身の一撃が、蛇男のガードした腕に決まる。

そしてオレ達はずもつれあうようにしながら、窓に激突して、そのまま屋敷の庭に放り出される。

振り向けば、オレ達を追ってセントが背中に羽根を生やして飛び降りてくる。

っしやあ！

仕切り直しだ、蛇男!!

S i d e : M e l t y

あの不気味な男を追って、セントさんとリュウガさんが飛び降りていった。

結構な高さのハズだけど……あの二人ならきつと大丈夫よね？

だけど一番心配なのは……一緒に窓の外に飛び出した、蛇を連想させる不気味な鎧を纏った男のことだわ。

あの人、一体何者なのかしら……？

「くっ……俺達も追うぞ！」

「は、はい！」

「わ、わかったわ」

「おー！」

ナオフミの声で、私達もようやく我に返る。

そ、そうよね……心配している暇があったら、あの二人の戦いを助けないと！

大急ぎで部屋を出て、セントさん達の降りた中庭に向かおうとした、その時だったわ。

「……え？」

唐突に、ラフタリアさんが立ち止まり、あらぬ方向に振り向く。

気付いた私達がラフタリアさんを見ると……何か、信じられないものを見た、いや、聞いたような表情で、その場に立ち尽くしていた。

「どうした、ラフタリア!？」

「……すみません、ナオフミ様」

「ラフタリア!？」

「ラフタリアさん!？」

訝しむ私達に一言だけ告げると、ラフタリアさんはいきなり走り出してしまった。

呆然となる私達だったけど、すぐに正気に戻って、ラフタリアさんの後を追いかけて始めた。

そうして辿り着いたのは……屋敷の裏側だった。

そこには、ぽっかりと大きく開かれた、地下に繋がる入口があった。

「ここは……地下牢、だよな」

「ええ……でも何だか」

「ここ……やー。イヤなおいがする」

本来、罪人や疑いのかかった者を収監しておくため……のはずの場所。

今はそうそう使われる事のないはずのそこは……鼻に突き刺さるような、強烈な臭いが漂っていた。

これは……死臭？

恐る恐る、私達が地下牢の中を進んでいくと、牢の一つで蹲るラフタリアさんの姿に気付いた。

「ラフタリア……何でこんな」

「ラ、ラフタリアさん……？ そんなところで何を……」

微動だにしないラフタリアさんを心配して、ナオフミが話しかける。

返事がない事を不思議に思っ、私も一緒にラフタリアさんの手元を覗き込んでみる。

……そして、激しく後悔したわ。

そこには……白骨化した、明らかに子供の大きさの、誰かの亡骸があっただもの。

「……その子は」

「私の……親友、だった子です」

ナオフミが尋ねると、ラフタリアさんはかすれそうな声で答えた。  
泣いて……いるのかしら。



よく見たら、亡骸を見下ろすラフタリアさんの肩が、小刻みに震えているのが見えた。

「私なんかよりも、ずっと女の子らしくて……大人になったら、盾の勇者様みたいな人と、結婚したいと……」

ラフタリアさんの、今にも泣き出しそうなその声に……私は何も言えなくなってしまうた。

わかったつもりになってた……！

こんなひどい事が、この国ではあちこちで行われているんだって……でも、私の想像じゃ、足りなかった！

何もしてこなかった私が……情けなくて仕方がないわ！

「そんな、風に、ずっと……！」

「……こんなところに置き去りにしたらかわいそうだ。どこか……静かに眠れる場所に、連れて行ってやろう」

ナオフミがそういって、どこかからぼろ布を持ってきて、ラフタリアさんのお友達の亡骸を包んでいく。

……せめて、お日様の当たる何処かに埋葬してあげれば、無念が少しでも晴らせるかしら。

そのためにも……私も、何かをしなくちゃいけない。

涙を流すラフタリアさんの肩を抱くナオフミの姿を見て、私はそう思っていた。

……思う事しか、できなかった。

「……ねーねー、あそこにだれがいるよ？」

ふと、フィーロちゃんやんが別の牢を指して告げる。

ハッと息を呑んだ私達が駆け寄ると、フィーロちゃんの言う通り、鎖に繋がれた亜人の男の子が、ぐったりと項垂れている姿が目に入った。

「……もしかして、キール君……？」

！まさか、他にもラフタリアさんのお友達が……！

それも、まだ生きて……！

私達の声に気付いた亜人の男の子が、ぐったりとしたまま、気だるげに顔を上げた。

「っ……誰だよ、お前……」

「私だよ、キール君……ラフタリア、だよ」

「……つくなら、もっとマシな嘘つけよ……ラフタリアちゃんはもう、死んだんだ……!」

優しく話しかけるラフタリアさんだけど、男の子……キール君は荒い口調で拒絶るばかり。

かれのめをみてナオフミがぼそりと、「……知ってる目だな」と呟いているのが耳に入った。

そうか……昔のラフタリアさんも、こんなふうには。

「……私知ってるキール君はね、昔、海で泳いでいた時に足をつって、サディナ姉さんに助けられた事があったり、山で毒キノコを食べてお腹を壊して、誰にも言わないで! って私にお願いしたり……すごく、元気な男の子で……!」

肩を震わせるキール君に、ラフタリアさんは穏やかに笑ったまま、続けて話しかけた。

それを聞いたキール君が、ハッと目を見開いて顔を上げた。

「ラフタリアちゃん……!? ほ、本当に、ラフタリアちゃんなの……!?」

「久し、ぶりだね……キール君」

急に大きな声を上げたせいで、激しく咳き込むキール君。

ラフタリアさんはにこやかに笑い返し、キール君の腕を繋ぐ鎖を剣で叩き斬る。

「ど、どうして……」

「たくさん、たくさん……大変なことを経験してね。今はナオフミ様の……盾の勇者様のお世話になってるんだよ」

「盾の……勇者様?」

キール君はぼんやりと、ナオフミの方を見上げる。

信じられないかもしれないわね……だってこんな不愛想な勇者様なんて、誰が想像できるかしら?

だけど、本物だから……きっと、あなたを助けてくれるから。

そのまま気絶してしまったキール君を抱えて、ナオフミと一緒に牢を出ようとした時。

外からズズンツ…！と、ものすごい轟音が響いてきた。

「……あいつら、どんだけ遠慮なしに暴れてやがるんだ」

「急いで加勢に行かないと…！ あの男、不気味な力を感じたわ」  
横から見てただけだけど、セントさんもリュウガさんもものすごく焦ってたわ。

それってつまり、十分な強さを誇るあの二人でも焦るぐらい、相手は危険な力を持っているって事になるわ。急がないと…！

「ラフタリアはこいつと一緒にいてやれ。あの蛇男は俺達が……」  
「で、ですが」

「それでは、私がお前の子を安全な場所まで連れて行きましょう」

ナオフミの命令に渋るラフタリアさん。

そこに、ちよつと疲弊した様子の子の声——私達を助けてくれたライヒノツトが、身体を引きずりながらやって来た。

あなた……そんな身体でこんな所に。

「お前…怪我は？」

「平気です。それより、外の騒ぎを鎮めなければ、いずれ国に報告が上がりません」

「…すまない、助かる」

「お気をつけて」

ナオフミがそう言って、ライヒノツトにキール君を託す。

檻樓布に包んだラフタリアさんのもう一人のお友達の亡骸も、ライヒノツトが優しく受け止めてくれる。

…もう、気がかりな事は任せたわよね？

「行くぞ、ラフタリア！ メルティ！」

「はい！」

「わかったわー！」

ナオフミの声で、私達は声を合わせて進みだす。

もう、無謀な事はしない……絶対に生き残って、父上と姉上の、三勇教の暴走を止めろ！

絶対生き延びて……この国を変えてみせる！！

## 古の魔物

S i d e : S e n t o

「フッフフ……フツハハハハ!!」

蛇男が喧しい哄笑と共に……前に出会ったコウモリ男が持っていたものと同じ、黒い銃で発砲してくる。

それを背中の翼を羽搏かせて躲しながら、オレは内心歯噛みをしていた。

「あの武器……もうこりや間違いねえな、ちくしょう!」

どこだ!? そんでいつだ!? オレの発明がパクられたのは!?

いや、もしかしたらオレが記憶を失う前の話かもしれない……だとしたら、もつと多くの発明品が他所に流れてる可能性もあるじゃねえか!

しつかりしろよ! 記憶を失う前のオレよ!!

「おらあ!!」

「ぐつ……うおお!」

リュウガが放った拳を、蛇男は腕を交差させて防ぐ。

が、そもそもリュウガの馬鹿力が強すぎるせいで、蛇男は地面を滑りながら後退していく。

しかし倒れる事はなく、それどころかこつちを馬鹿にした感じで見やってきやがった。

「く、くくつ……ハザードレベルもずいぶん上がったな……俺は嬉しいぞリュウガア……!」

「ああ!? 何の話だテメエ!!」

苛立ちながら駆け出すリュウガに合わせて、オレは蛇男に向けて銃弾を放つ。

ハザードレベル……あの野郎、一体何の話をしてるんだ?

リュウガの身体に……何か秘密でもあるのか? あいつはその事を知っているのか?

「ククク……自分の力がどんどん大きくなる感覚! 自分でもわかってんだろお……? こうしてるのが楽しくて仕方がないってよお!!」

「ぐおっ!？」

拳を連発するリュウガの隙を狙い、蛇男がリュウガの腹を蹴り飛ばす。

思わず膝をつくりユウガに、蛇男はなんかやたらと勿体ぶった動きで、オレ達を見下すように喋り出す。

「敵を叩きのめし、平伏させ、殺す……その全ての感覚！ 何より甘美だろお？ 戦いつてのはこうでなくちやなあ!!」

「うるっせえ！ てめえと一緒にすんじやねえ!!」

戦いを、殺し合いを楽しんでいるなんて言われたせいか、リュウガは額に血管を浮き立たせて吠える。

まずいな……冷静さを失いつつある。

ここはオレが奴の気を引いて、リュウガの頭を冷やさせるべきか。

「おい蛇男!」

「あ？ おいおい、何だよそのダサイ呼び方は！ どうせならスタークと呼んでくれよ、お嬢さん」

「んなこたあ、どうでもいいんだよ!」

ああああああ、ムカつく!!

お嬢さんとか言われたくねーし、あいつのあの役者みたいな大袈裟な仕草超嫌い!!

……って、オレが冷静さを失ってどうすんだよ。

言いたい事は別にあるんだっつーの、なんか調子狂うな、こいつの相手は。

「てめえ、なんでフルボトルを持ってんだ！ 誰に渡された!？」

「……さて、誰にだろうねえ」

「言わねえなら……言いたくなるようにしてやる！ リユウガ!」

「ツシヤア!」

言いながらオレは、ジャキツとオレの銃を———ホークガトリンガーを構える。

一緒にリュウガに目配せをし、同時に動く。

口を割りそうにないから、とにかくボコボコにしてから始めてやらあ!

「10! 20! 30! 40! 50! 60! 70! 80!  
! 90!」

オレは空中に舞い上がり、ホークガトリンガーの側面、弾倉部分を回す。

ぎゆるんぎゆるん弾倉が回って、徐々にエネルギーを銃身の中に蓄積していく……そして最後の一回が終わって、オレは銃口を蛇男に向けてる。

「100! フルバレット!」

直後、ドドドドドドド!!と凄まじい数の弾丸が放たれ、蛇男に炸裂していく。

蛇男の鎧から火花が散り、衝撃で蛇男が一步二歩と後退る。

そして俺が撃ち終わった直後に、蒼炎を纏ったリユウガの拳が、蛇男の顔面に叩き込まれた。

【ドラゴニックファイニッシュ!】

バガン!!と……若干心配になるような轟音と共に、蛇男が吹っ飛んでいく。

その先にあつた……なんか変な石の塔に背中から激突して、蛇男はピクリとも動かなくなった。

「よっ……」

「オラァ! どうだこの野郎!」

静かになった蛇男の前で、オレは空中から降り立ち、リユウガは薄い胸を張る。

結構な一撃食らわせたけど……どうやらまだまだ健在のようだな。

多少よろついちやいるが、普通に立ち上がっちゃった。

「フツ……フフフフ……! なかなかやるな、お前ら……まあ、今日のところはこれで十分か」

「何……?」

「逃げる気か!」

意味深に笑う蛇男に、オレとリユウガは思わず身構える。

得体の知れない事ばかり口にするこいつは、このまま逃がすと後々面倒な事になりそうだ……ふん縛って洗いざらい吐かせた方がいい。

だが蛇男は……警戒するオレ達を嘲笑うように、やれやれと肩を竦めた。

「おいおい、勘違いするなよお前ら……俺は別に殺しにきたとは一言も言つてねえ。お前らの今の力を探りにきたんだ。つまり、俺の用事はこれでおしまいってこつた」

「逃がすわけねえだろ!!」

「いんや、俺はここでおいとまする……フン!」

リュウガの咆哮にそう返し、蛇男は後ろの石の塔を……いや、何か文字が記された石碑を叩く。

その瞬間、石碑にバキバキとヒビが入り、割れ目から不気味な光が迸った。

な、何だ…!?

何が起こるっていうんだ!?

「あ、あれは……まさか……!」

慄くオレとリュウガの後ろで声がする。

振り向くと、何故か地下から出てきたナオフミ達が、オレ達と同じく驚愕の表情を浮かべ、異変を見せる石碑を凝視していた。

……ていうか、あの優男貴族無事だったのか。

それと……あの、お前が抱えてるちっこいの、誰?

「知ってるかあ、勇者殿? この石碑の下には、はるか昔の勇者様が、あまりの強大さゆえに封じることしかできなかった最悪の魔物が眠ってるらしいぜ」

困惑するオレを放置し、蛇男が石碑を撫でながら聞いてくる。

仮面に隠された表情は……きつと、嗜虐心に満ちた醜悪なものなんだった事は、全員が気付いていた。

「その封印を解いちゃったら……一体どうなるのかねえ?」

「何だと…!?!」

「じゃあまあ、せいぜい頑張りな…チャオ〜」

蛇男がそういって、銃を掲げて引き金を引く。

途端に銃口からもくもくと、真つ黒い煙が噴き出し、蛇男の姿を隠す……と思つた直後、蛇男は影も形もなく消え去ってしまった。

「なっ……」

「GYA O!!」

いきなりのことで絶句するオレ達。

そして、そんなオレ達をさらに追いつめるように——石碑の中から、巨大な化け物が姿を現した。

Side : Raphaelia

ズシン!と、謎の石碑の中から飛び出した足が、力強く地面を踏みしめます。

その衝撃で、私達は足場をぐらぐらと揺さぶられ、真面に立つこともできなくなってしまうました。

「おわああああああ!?!」

危うく転びそうになり、セントさんとリユウガちゃんが悲鳴をあげます。

私は必死に揺れに耐えながら、現れた巨大な魔物——額に×字に交差した角を生やした、二足歩行の竜の怪物を見上げます。

ここ、これは……一体何なのでしょうか!?

あの蛇の鎧の方は、大昔の勇者が封印した怪物だと言っていましたか……まさか、本当にその封印を解いてしまったのですか!?

「チクショー! あ、あの蛇野郎……! とんでもない置き土産していきやがって!!」

「ぼやくな、セント!」

目の前でしてやられてしまった悔しさからか、セントさんは頭を抱えて嘆きます。

ですが、これは仕方がない事でしょう……こんな場所に、街中の貴族の屋敷の庭のだ真ん中に、こんな怪物が封印されているだなんて!

一体誰が想像できるのでしょうか!?

「ナオフミ様! ここで暴れられては、町が……!」

「くそっ……めんどくせえ事態ばかり起きやがる」

巫人にたいして良くない気持ちを抱いている人々ですが、こんな理不尽な災害に巻き込まれて、死んでしまっているわけがありません。



ナオフミ様は勇者、私達はその仲間……絶望を前にした人々を置いて、どうして放り出す事ができるでしょうか！

「GURRRRRRRRRRR……！」

「むー！ フィーロ、あんな奴に負けないもん！」

「おい、フィーロ!?」

不意に、目を吊り上げたフィーロが魔物に突撃します。

また……！ フィロリアルとドラゴンが仲が悪いのは承知していますが、こんな状況で飛び出すなんて……！

「GYA O O O O O O O O!!」

え……?」

よく見ると、怪物もフィーロに反応している……けれど、仲が悪いというより、明確な敵と判断しているような。

明らかに、腐竜と戦った時とは状況が異なっています。

「あいつ……フィーロに反応してる?」

「何でだ……? フィロリアルだからか?」

よくよく見ると、フィーロのおなかのあたりが光っているような？ 怪物の方も見れば、同じ色をした光が体の一部から放たれているように……！

その事に気付いたセントさんが、ハツとした様子で目を見開き、語り始めました。

「そういえば聞いたことがある……ドラゴンってのは、引かれ合う性質があるって。フィーロちゃん、そういえば前に、腐竜の核を食っちゃってたよな」

「それでか……だったら！」

セントさんの説明で、ひらめいたナオフミ様がフィーロに振り向きます。

「フィーロ！ そいつを町の外におびき出すぞー！」

「わかったー！」

ナオフミ様の指示で、フィーロが屋敷の塀の上に飛び移ります。

できるだけ壊されるものがない、町の住民達の方に行かないようにしなければ……！

ふと視線を移すと、セントさんも塀の上に飛び移り、怪物に向かってパンパンと手を鳴らし、挑発している姿が視界に入りました。

「おーにさーんこーちらー、てーのなーるほーう……えぎやあああああ!!」

「GURRRRRRR! GYAOOOOO!!」

その挑発が効いたのか、それとも単に餌と見られたのか、セントさんに向かって怪物が頭から突っ込んでいきます。

間一髪交わしたセントさんですが、すでに涙目で情けない声を上げています。

……あの人は、どうしてこう格好をつけられないのでしょうか？

「何やってんだあのバカ……」

「十分囹役になってくれるよ、行くぞ！ 優男、そいつのこと頼むぞ」

ナオフミ様が、キール君を抱えた貴族の方にそう告げ、セントさん達を追って走り出します。

同時に、やや呆然としていたメルティさんにも声を張り上げます。

「メルティ！ こっちだ！」

「！ ええー！」

ナオフミ様の声で我に返り、メルティさんも走り出します。

私も一緒に駆け出し、ファイロとセントさんを助けに向かいます。

突如現れた脅威に立ち向かうため、走り去る私達の背中を見やりながら、貴族の方はこう呟いていました。

「……………どうか、武運を」



【ボルテック・ファイニッシュ！】

「ビリビリイ!!」

恐竜擬きの胴体に向かって走るセント。

伸びたタコ足が、恐竜擬きの前足に巻き付き、直後に凄まじい電流が迸る。辺りが一瞬、昼間のように眩しく照らし出されるほどの光量だ。

だが、恐竜擬きは全く堪えた様子を見せず、セントを鬱陶しそうに払いのける。

「どわーっ!?!」

「たー!」

「はあっ!」

空中に撥ね飛ばされるセントをよそに、ファイロとラフタリアが走る。

素早い動きで恐竜擬きの足元を抜け、関節部分にそれぞれ、剣と爪で斬りかかる。

だが、恐竜擬きの鱗は相当強靱なのか、二人ともまったく攻撃が通っていない。理不尽過ぎるだろ、ふざけるなクソつたれ!

「ツヴァイト・アクアショット!」

「うおらああああ!!」

【ドラゴニックファイニッシュ!】

恐竜擬きが足元に気を取られている間に、メルティが魔法で、リュウガが拳で、恐竜擬きの顔面を攻撃する。

眼球や口なら、まだ攻撃が効くと思っただろう。

だが、樹をへし折る水流も、岩石なら容易く砕く拳も、恐竜擬きの鱗を貫くことはなかった。

「GURRRRR!!」

ちまちまと攻撃を受けて苛立ったのか、恐竜擬きが凄まじい咆哮を上げ、俺達を踏み潰そうと迫ってくる。

ラフタリア達はいったん下がり、俺が恐竜擬きの前に入る。

頭上から降ってくる踏みつけを、俺はどうにか盾を上にも構え、防いで見せた。

「ぐ……ぬ……!」

うおおお…お、重っ!?

長男……じゃねえ、勇者じゃなかったら死んでたぞ……!

今は防いでいるが……このまま耐え続けるのは、防御に特化した俺でも流石に無理だぞ……!?

【忍びのエンターテイナー! ニンニンコミック! イエイ!】

見上げれば鎧を変えたセントが、恐竜擬きの頭上から攻めている姿が見える。

忍者に似た格好で、火遁やら風遁やらを分身しながら繰り出し、ひたすらに斬りかかっている。

【天空の暴れん坊! ホークガトリング! イエイ!】

次は鷹の翼を生やし、ガトリングガンをぶっ放して背中を撃ちまくる。

映画なら、皮膚が裂けたり穴が開いたりしそうな強力な攻撃だが、恐竜擬きに堪えた様子はやはりない。

【鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエイ!】

「どりゃああ!」

「とー!」

今度は、スタンダードなウサギと戦車の鎧に戻り、ファイロと共に必殺キックを叩き込む。

顎に決まり、後退ったが、それでも恐竜擬きは平然としている。

くそっ! 顎を殴ったら脳が揺さぶられて意識が朦朧とするとか、そういう反応ちよつとぐらい見せるよ!

「ちっ……ダメか」

「何なんだよ、あいつのあの硬さは!」

この世界に来て、次々に降りかかる理不尽の並みに、いい加減うんざりしてくる。

勇者様にも倒せなかった敵を俺達が? ろくな装備もレベルもないのにな?

はっ……とんだ無理ゲーだな。

だが……ここで諦めたら、俺は自分以外の大事なものを失う羽目に

なる……!

「こうなったら……!」

「お、おいナオフミ! まさか憤怒の盾を使う気か!」

「それしかないだろう……!」

恐竜擬きの踏みつけから解放された俺が盾を構え、意識を集中させる。

後でどうなるかなんて、今考える事じゃない……今を乗り切らなければ、結局みんな死ぬ!

だったら……今、無茶をするしかないだろうが!

「巻き込まれないようにだけ、気をつけろ——」

そうして、俺が憤怒の盾を呼び覚まそうとした、その時だった。

「ガツン!という唐突な衝撃で、俺は思わず仰け反らされた。」

え……? 何が、起きた……?

何か、盾に表示が……この武器は、ロックされています?

「!? どうした、ナオフミ!」

「……ロックされた、だと?」

「ロックって……誰が」

何の前触れもなく起こった不可思議な状況に、俺達は顔色を変えて立ち尽くす。

聖なる武器の使用が、阻害される事なんてあるのか……!?! できるとして、一体誰が!?

いや……誰がやったかなんて今はどうでもいい。

この状況で憤怒の盾が使えないとか、絶望的過ぎるだろうが!!

——その盾を使ってはダメ……。

その時、俺の耳に何か……穏やかな声が届く。

頭の中に直接響いてくるような、不思議な響き……なんだ、誰なんだ、この声は!?

——もう少しで、そこに行くから。

「そこに行くって……何だ!? 誰だ、お前は!」

「お、おい……さっきから誰と話して……」

セントが焦りながら尋ねてくるが、俺はそれに答えるような余裕が

ない。

ふと、辺りを見渡すと……いつの間にか霧のようなものが漂い、俺達を囲み始めている事に気付く。

そしてその向こう側から……色とりどりのデカイ鳥が飛び出して来た。

「何だあ!?! フィロリアルが大群で押し寄せてきたぞ!?!」

「声って……こいつらか?」

「い、いや……多分違う」

た、確かにグワグワガーガー言っているが……こんな奴らが俺の盾をロツクしたのか?

現れたフィロリアル達は列になり、恐竜擬きを取り囲んでいく。

こいつら、俺達の味方を……いや、恐竜擬きに立ち向かおうとしているのか?

そう、俺達が困惑しながら、事態の成り行きを見守っていた時だった。

ズシン……と、凄まじい足音を響かせて、もう一つの巨大な影が、その場に姿を現した。

「な……何だこいつは!?!」

現れたのは……恐竜擬きとほぼ変わらない大きさのフィロリアルクイーン。

フィーロとは冠羽の形が異なる、空色のフィロリアルだった。

な、何なんだこいつは……!?!

ていうか、フィロリアルクイーンって、こんなにデカくなるのか!?!

「まさか……伝説のフィロリアル様!?!」

「伝説……!?!」

目を輝かせているメルティ! 見とれてないで説明しろ!!

だが、俺の問いに答えたのは、他と同じく目を奪われ、間抜けなぐらいに大きく口を開けっぱなしにしていたセントだった。

「過去の勇者が育てたとされる……最古のフィロリアル! 本当にかよ!?!」

最古の……? しかも、過去の勇者……!?!

おい、ちよつと待て！

前に勇者が召喚されたのは、遙か昔の話なんだろう…!?  
だったら、あのフィロリアルはそれだけ生きてるって事に…!

「そこについて…すぐに終わらせる」

俺が凝視している事に気付いたのか、巨大フィロリアルクイーンは  
そう言つて、恐竜擬きに向き直る。

ほんの一瞬見えた奴の目は…：ゾツとするほど冷たく見えたのは、  
俺の気のせいだろうか。

「…核を手に入れて、身の丈に合わない力を手に入れたようだね。  
怪物ですらない…：ただ単に、力に振り回されているだけ」

じろり、と恐竜擬きを睨み、そう呟くクイーン。

核…：というのは、あの核石のことか？ アレが何なのか…：こい  
つは知っているのか？

…：聞きたい事が一気に増えてしまうな。

「大人しく核だけを置いて去るなら、命までは取らない。ここで退い  
て…：」

「GARRRRRR!!」

「聞く耳持たず、か…：じゃあ、しょうがない」

ふう、とクイーンがため息をついた瞬間、ドツ！と恐竜擬きが駆け  
出す。

大きく口を開いた恐竜擬きが、クイーンの肩辺りに噛みつき、その  
衝撃が俺達にまで襲い掛かる。

どうにかクイーンが盾になっているが、巻き込まれるところだった  
ぞ!?

「怪獣大戦争か!!」

「スゴい!」

「あれ見て何で興奮できるんだよメルティちゃん!!」

伝説のフィロリアルと伝説の魔物の激突に、ぴよんぴよん飛び跳ね  
て興奮をあらわにするメルティ。

なんでこういう時に年相応になるんだよ!

「…：哀れだね、せめて一瞬で逝くといいよ」



ハッと、クイーンがこぼしたその一言に振り向いた瞬間。  
ズバツ!

と……恐竜擬きの全身が、バラバラに切り裂かれて大量の血が噴き出す。

恐竜擬きは鳴き声一つ上げることなく、轟音を立てて、地面に倒れ伏した。

「しゅ……瞬殺」

「バケモン同士の対決かと思ったら、片方がバケモンよりヤバかった……」

あまりにも呆気なく、圧倒的な差を見せて終わった戦いに、俺達はそれ以上の言葉が出ない。

何だ、こいつは……勇者なんか目じゃないくらいに強いぞ。

大丈夫なのか……？ こいつは本当に、俺達を助けに来たのか……？

驚愕と焦り、そして恐怖で固まる俺達の元に、クイーンは地響きを立てて近づいてくる。

そして俺達を見下ろしながら、再び口を開いた。

「……さて、改めて自己紹介する。その前に……」

バサツ、と、唐突にクイーンが翼を広げ、自分の身体を覆い隠す。

すると、クイーンの身体から光が放たれ、見る見るうちに小さく……いや、形を変えていく。

数秒も経たないうちに、クイーンは一人の……ハッと息を呑むほどに美しい、銀髪の少女に姿を変えた。

「世界のフィロリアルを統括する……女王、フィトリア。盾の勇者と話をしにきた」

「俺と……？」

無表情のまま名乗り、俺を見つめてくるフィロリアルクイーン——  
「フィトリアの言葉に、俺は思わず聞き返す。

するとチラツと、フィトリアはオレの盾を見つめ、何故か目を細めた。

「呪いの力は強力……でもその分危険が伴う。それ以上使わないほうがいい」

「…そう言われてもな」

「大丈夫、危害を加えるつもりはない」

戦いの最中に盾をロククされたことが頭に過る。

一番攻撃力のある武器を封じられて、はいわかりましたと心を許せるはずもない。

あれをいつでもできるんなら…こいつは、かなり厄介な敵になるぞ。

「…何の用だ」

「ここでは、そちらが困るはず…フィットリアが守護してる場所に、来てもらいたい」

フィットリアの要求に、俺は領けない。

今も追われてややこしい立場になっているが…こいつの元についていって、もつとややこしい事態にならないとも限らない。

だが俺の懸念に気付いたのか、ラフタリア達が俺の方に寄って囁いてくる。

「ナオフミ…こりや、行った方が安全なんじゃないのか？」

「たしかに…敵意は感じられませんか」

「そうよナオフミ！ フィットリア様の聖域に行けるなんて、今後一生ないかもしれないわよ！」

「そういうことじゃないんだよなあ…」

「むー…」

…若干ズレた願望を口にしてる奴がいるが、こいつらの考えも一理ある。

ただ逃げ続けるより…得体の知れない奴の縄張りに向かい、追っ手をかく乱させるのも手ではないだろうか。

少しの間悩んでいた俺は、ため息とともにフィットリアに頷いてみせた。

「……わかった、世話になろう」

「では、こちらへ…フィットリアの馬車で連れて行く」

そう言っつてフィットリアが手で示した、白い馬車——屋根の上の寶石が何故か気になるそれに、俺達は息を呑みながら乗り込んでいっ

た。

## 神鳥の聖域

S i d e : M e l t y

伝説のフィロリアル……フィトリアさんの案内で、不思議な馬車に乗り込んだ私達。

そう思った直後——私達は深い森の中の、石でできた建物のようなものが並ぶ、奇妙な場所に移動していた。

植物に覆われてよくわからないけれど……人工物、よね？

「これ……遺跡か？ 何の遺跡だ？」

「最初の勇者が召喚された地だと聞いてる。フィトリアが生まれる前で、よくは知らない」

フィトリアさんの説明で、私は思わず息を呑んだわ。

それも伝説に聞く、フィロリアルの聖域なんじゃ……そんなところに来られるなんて、本当に夢を見ているみたい！

「で？ 俺に一体何の用だ……」

私が周りに見惚れていると、すごくイライラした様子で、ナオフミがフィトリアさんにそう尋ねる。

もう！ ナオフミったら……！

せっかく助けてくれたのに、いつまでたっても疑う癖が抜けないんだから！

思わず文句を言おうとしたら、どこからかぐくつてすごい音がした。

音がした方にあるのは、えつと……フィトリアさんしかいないわよね。

「そーいえば、結構な大暴れしてたよな、あの子」

「それは……お腹も減るわよね」

「…先に飯にするか」

はあ……って大きなため息をついて、ナオフミが盾から食材を——さつきフィトリアさんが倒した魔物の肉を取り出していく。

え、それ……食べられるの？

ナオフミの料理の腕を疑うわけじゃないんだけど……食べ物とあ

の魔物とで、イメージが重ならないわ。

そんな私の心配をよそに、ナオフミはてきぱきと手際よく魔物の肉を調理してしまう。

そして、みんなと一緒に口をつけたんだけど……。

「…おいしい」

どうやらフィットリアさんのお気に召したみたい。

フィーロちゃんと一緒に勢いよく口に運んでいて、お鍋の中があったという間になくなっていく。

こうして並んでいるのを見ると、まるで姉妹みたいだわ！

「よく似た二人だな…」

「雑な食い方もそっくりだ」

フィットリアさん達を見るナオフミ達の目が、ものすごく呆れているように見える。ラフタリアさんまで同じような目をしてるわ。

「ドラゴン嫌いなくせに、飯にしたらちゃんと食うんだな、お前」

「おいしいのが悪い」

「どんな責任転換だよ」

「だったら盾に入れるのに文句つけるなよな…」

「それとこれとは話が別」

フィットリアさんはぼりぼりと、出汁が浸み込んだ骨まで食べている。

種族としては嫌いだけど、食べ物には罪がないって事ね……まあ、こんなにおいしい料理を食べないのはもったいないし。

するとそこでおもむろに、なぜか気まずそうな表情でセントさんが手を挙げた。

「とこころでよお…」

ちらり、とすぐそばに目をやるセントさん。

私達もつられて、何を見ているのかと振り向いてみて……思わずうっ！と声を漏らした。

そこにはたくさんの方のフィロリアルさん達が……だからだと涎を垂らしてこちらを見つめてきている姿があった。

その目はじつと、ナオフミの作った料理を凝視している。

フィトリアさんに許されていないからかしら、ものすごく羨ましそ  
うに見てきて、とてつもなく居心地が悪かったわ。

「あーもーわかった!! デカイ鍋と材料持ってこい! お前らの分も  
作ってやるよ!!」

「やっぱお前、ちよいちよいオカンっぽいよな」

「やかましい!!」

文句を言いながら、フィロリアルさん達が持って来る食材を調理す  
るナオフミには、苦笑を禁じ得ないわ……。

お母さん、か……。

ナオフミと結婚したら、家事はナオフミがやって、仕事は私が――

……つて!

私は何を考えているのよ!?

この後私は、もやもやしながら眠る事になるのだった……。

Side:Sentō

「で、俺に話ってなんだ」

「詳しく聞きたい……どうして四聖が追われていたのか」

フィーロちゃんメルティ、あとついでにリュウガが腹いっぱい  
なって眠った後。

フィトリアと名乗るフィロリアル・クイーンに呼ばれ、オレ達大人  
組は追われるようになった経緯を話したのた。

の、だが。

話が終わるとフィトリアさん、ものつすごい重いため息をついてし  
まった。

「どうかしたか?」

「……呆れている。世界の危機だというのに、人間が愚かな争いを続  
けていることに」

……うん、呆れるよな。

今のところこの国の連中、アホしかないもん。

しょうもない宗教の教義を真に受けて、やらなくていい争いしかしてないもん。

「…言つとくが、俺は悪くない。全部あいつらが冤罪をふっかけたせいだ」

「そこは興味がない。人間の行いに、フィトリアは関係ない」

ナオフミが不貞腐れながら言うけど、フィトリアは全く興味がなさそう。

まあ……本質は魔物だもんなあ。

人間同士でどんだけ争おうが、殺し合おうが、縄張りを侵略されない限り、生活を脅かされない限りは関わろうとは思わんわな。

「だけど……だったらなんで助けてくれたんだ？」

「争うのをやめて、ちゃんと波に立ち向かってほしい」

「波なら対処している。といっても、しよせん俺は攻撃ができない盾の勇者だがな……」

「一箇所だけで満足しないで」

こつちはこつちで頑張ってるんだけどな……つて思ってたらば。

なんかフィトリアの奴、ものすごい引つ掛かること言いやがった。

一箇所？　一箇所ってどういうこと？

「……まさか、波は別の地域でも……？」

「本当に呆れた……波が起るのはこの国だけだと思ってた？　世界中の波に對抗しなければ、いずれこの世界は滅びに向かう」

え……マジで？

そ、そういえば、この国の中でしか今のところ波に遭遇してない。ていうかそもそも、いろんな国に龍刻の砂時計があるんだから、それぞれで場所が違ってあたり前だよな……！！

何でこんな事に気がつかなかったんだ、オレ達は……!?

「勇者が一人でも欠ければ、それだけ波の戦いは厳しくなる。だからこそ、四聖勇者は協力しなければならぬ」

「どういうことですか……？」

「四聖同士で争ってはいけない……それでは、滅びゆく世界を救うことなどできない」

……フィットリアの言葉は真剣で、オレ達を騙す意思なんて微塵も感じない。

ていうか、どういうことだ？

勇者が欠けたら……なんか起こるのか？ 不利になるって……どういう事だ？

まるでわかんねえけど……でも、放つといちやいけない問題だと思えてきた。

「オレも正直さ、この子の言う通りだと思うんだわ。連中が後先考えないバカばかりだつてのはわかってるけどよ……向こうが頭下げんのを待つのは、効率的じゃないと思うんだ」

「私も……避けては通れない道だと思えます」

便乗……って言ったら言い方が悪いけど、オレもナオフミの説得に協力する。

ラフタリアちゃんも乗ってくれたけど……ナオフミは依然として、厳しい表情のままだった。

「……それができたら苦労はしない」

「だがよ、ナオフミ……」

「お前だつて見ただろ。元康のやつが、俺の話も、あんなに口説いてたお前らの話だつてまともに聞こうとしなかったのを」

「そりゃあ……まあ、そうだけだよ」

ふつつーに、ナオフミのこと敵だつて断言してたもんな、槍の勇者様。

他二人は若干疑つてたみたいだけど……ぶつちやけ五十歩百歩というか、どんぐりの背比べというか。

ほぼ何も考えずに、国の言うこと信じてたからな、あいつら。

「待つても何も、悪いのは全部向こうだ。なんで俺の方から歩み寄らなければならぬ」

「ナオフミ様……」

だがこいつもこいつで頑固なんだよなあ……人間不信も大概にしろよ。

すると……だ。



オレ達を見つめていたフィトリアから、なんかゾツ…と、冷たい氷でできた刃を突き付けられたような感覚を覚えた。

「……そう、なら仕方ない」

思わず黙り込むオレ達を、フィトリアはじっと見つめる。

すると急に、視線をオレの方に向けてきた……って、いきなりなんだよおい。

「……盾の勇者の仲間にも言いたいことがある」

「な、何だ？ オレになんか用か？」

さ、さっきの寒気の所為か、ちよつと声が震える。

がんばれオレ、負けるなオレ。見た目幼女のこんな奴に気圧されるな、オレ！

そんなオレの奮闘をまるつと無視し……フィトリアはオレの胸元を指差してきた。

「今持つてるそれは捨てたほうがいい。使い方を誤れば、その身を滅ぼす」

「…鼻がきくのね」

……何で気づいたんだ？

なんか臭いか、気配でも放ってるのか？ 後で調べておくか。

促されるままに、オレは懐から一本のフルボトルを……真つ黒に染まった、異様な雰囲気醸し出すそれを取り出した。

「……何だそれ」

「お前の憤怒の炎を採取したボトル。そしたらこんなんができた」

「はあ!? まさかあの時に…!!」

オレが説明すると、ナオフミが目を吊り上げてオレを睨んできた。ラフタリアちゃんも、オレに心底呆れた目を向けてきてるし……いや、何か見えて気になっちゃってさ。

今後いつ採集できるかわかんなかったし、やつといて損はないじゃん？

二人から睨まれるオレに、フィトリアまで厳しい視線を向けてきやがる……泣くぞ？ そんなにいつぺんに責められたら、オレだって泣くぞ？

「それは呪いの武器と同じ……敵にも味方にも害をなす諸刃の剣。使えば、自分の身も滅ぼすことになる」

「ナオフミの超パワーアップ見て、役に立つかなーって……」

「……お前な」

「なんて危険な事を……」

「けどさ、リスクを背負わなきゃ、障害を超えることなんてできねえだろ」

ナオフミに言ってることと一緒に！

ほんとに信じてくれるか……あの勇者共に懸けるってのも、必要になるだろ？

オレがそう言ってみせると、フィトリアはまた大きいため息をついた。

かと思ったら、オレに掌を向けて、何か光を浴びせてきた……って、何するんだこの野郎!?

慌てるオレだけど、光はオレを無視して懐に……何個も入れておいたフルボトルの一本に入り込んできた。

「お？ おおお!?! ちよっ…何だこれ!?!」

「少しだけフィトリアの力を分けた。使うならそっちの方がいい」

「お、おお……ありがとう?」

白く変色したフルボトルを掲げて、オレは気の抜けた返事をする。

え? これを……どうしろと?

ただでさえ、あっちの黒い方を持て余してんのに? これをどう使えと?

呆氣にとられるオレをほったらかしにして、フィトリアちゃんたら立ち上がってさっさとどっかに歩き出しちまった。

「今夜はゆっくり休むといい……じゃあ、おやすみ」

「お、おう……」

……なんつーか、マイペース?

いや、人とは考えが違うからだろうか、言うだけ言って行っちゃまった。

だがそれ以上に……あいつが残した警告、それと同時に放っていた

寒々しい気配が、オレ達を動けなくさせていた。

「……いま、なんか殺気を感じなかったか？」

「ああ……確かに感じた」

「あれほど濃密なものは、初めて受けました……」

全員、オレと同じ気持ちだったらしい。

助かった……なんて浮かれてたら、王国の追手なんて目じやないくらいヤバい敵が現れた感じだな。

「ずっと味方でいてくれると思うのは……ちょっと早計かもしれないな」

……ちよつとばかし、こいつを手掛けておこうか。

焼け石に水、なんてことにならなきゃいいけど。

## フィトリアの試練

S i d e : R a p h t a l i a

長かった夜が明け……朝が来ました。

頼もしい方に守られて眠りに就いたおかげか、随分と体が軽くなつた気がします。

ですが、もうそろそろ出発しなければなりませんね。

そう思い、ナオフミ様の方を見ると……たくさんのフィロリアルさん達に埋もれている姿が目に入りました。

「暑い！ なんなんだお前は、散れ散れ!!」

ナオフミ様が怒号を上げ、フィロリアルさん達が走り去っていきま

す。  
前々から思っていました。ナオフミ様の生き物に好かれる性質は、最早能力の域に達していますね……。

「おはようございます、ナオフミ様……懐かれてしまいましたね」  
「餌付けただけでこれか……まったく」

フィロリアルさんの羽毛に埋もれるのは、相当暑苦しかったようです。  
……夜や寒い日は、きつと気持ちいいと思うんですけどね？

ふと、声の聞こえる方へ目を向けると、メルティさんとフィトリアさんが、何やら楽しげに話している姿を見つけました。

そして、それを詰まらなそうに見つめるフィーロの姿も。

「……むー」

メルティさんを取られてしまったと、不貞腐れているんですね。  
気持ちはわかりますよ……というか、それはつい最近まであなたが私にしていた事ですょ？

あの二人を見て、何をしたのかしつかり学んでください。

「ふへ……ふへへへ……で、できたぜえ……!」

あら……?

繁みの向こうから、へろへろのセントさんが現れて……って、なんですかその顔色の悪さは!?

前に一回見た覚えがありますよ!?

あれは確か……ビルドフォン?という道具を作った次の日の姿です!

「うおっ……お前また徹夜したのか? 目の下の隈すごいぞ」

「へ、へへ……フィットリアにもらっらひからをしゃっしやとかちゅようしてやくれよ……」

「お前はもう寝ろ!!」

ああ、もう……!

呂律も回らなくなっているじゃないですか……これからまた逃げるといふのに、こんな状態で大丈夫なんでしょうか。

「そろそろ行くぞ。転移した分、向こうの追跡もだいぶ攪乱できただろうし、逃げる絶好のチャンスだ」

「そうですね、準備をしましょう」

最悪、セントさんは担ぐか引き摺っていきましよう。

出発すると言っているのに徹夜をしたんですから、自業自得というものです。

……それにしても、何故でしょうか? 一人、誰か足りていないよ  
うな……あ。

リュウガさん、どこにいるんでしょうか?

「セント、リュウガ起こしてこい。あのバカまだ寝てやがる」

「ういーす」

「もう行っちゃうのね……」

「惜しがるな、フィロリアルオタクが!」

悲しげに目を伏せるメルティさんに、フィーロがますます頬を膨らませます。

夢にまで見た場所にやっと来れて、浮かれるのはわかりますが……今は非常時です。また来れる時を楽しみにしましょう。

すると、準備をしていた私達の元へ、フィットリアさんが近づいてきました。

「……盾の勇者にもう一度聞きたい。他の勇者に歩み寄る気は、本当にないの?」

「ない! しつこいぞ、向こうにその気がないんだから無理に決まっ

てるだろう！」

「そう……わかった」

落胆したように、フィトリアさんがため息をつきます。

……この方とは、もう少し詳しく話をしておきたかったです、今は余裕がありませんからね。

この方のお願ひも、聞き届けてあげたかったです……。そう、申し訳なさを抱いたその瞬間でした。

「じゃあ盾の勇者には……ここで死んでもらう」

スツ……と、伏せていた目を上げたフィトリアさんから。

凄まじい重さの殺気が放たれました。

Side：Ryuga

ドカンツ!!

と……どこかから物凄い爆音が響き渡ってくる。

それを聞いたオレは、思わずびくつと身体を跳ねさせ、一気に目を覚まさせられた。

「んがっ!! なっ、何だあ!？」

あれ? もう朝か?

ヤツベ! 逃げなきゃいけないのに、思いつきり寝過ぎしちゃまった!

ナオフミは!? あいつらはもう行っちゃまったのか!?

いや、それよりさっきの爆音は何なんだ!?

オレは慌てて、爆音がした方に走り出す。

するとやがて、開けた場所に集まっていたナオフミ達の元に辿り着く。

何やってんだ、こいつら……?

「おい! 何だよこの騒ぎは!？」

「やっと起きたのかよ筋肉バカ!!」

「何を呑気に寝てるんですか、あなたは!!」

「朝っぱらから罵倒の連続かよ!?!」

いや、確かにオレが悪いけど!

何も全員でそんな怒らなくなつていいじゃねえか!

泣くぞ! 思っきり泣くぞ!?! この場で!

つてか……そんな場合じゃなさそうだな。

「なっ……なんだよこの有様は」

森は、何かとんでもない状況になつてた。

フィーロとフィトリアがなんか殴り合つてる……いや、フィーロが一方的に弄ばれてるし、メルティが風の檻に囚われてるし。

オレが寝てる間に何が起こつたんだよ、これ!?!

「セント! わかりやすいように三行で頼む!」

「前回までに起きた3つの出来事! 1つ! フィトリアがナオフミに他の勇者と和解しろつて要求してきた! 2つ! ムリと拒否したら殺すと言ってきた! 3つ! それが嫌ならフィーロに実力を示させろと言ってきた!」

「わかんねえよ!!」

「そうしなきゃメルティを解放してくれねえんだよ……!」

「マジかよ……」

何だそれ!?!

そういや、昨日の夜にあいつ、ナオフミと一緒になんか話してたな

……それがあれか。

っーか……あいつらと和解つて無茶言うなよ。

少なくとも、あのバカ女がいる限り無理だろ。あいつ絶対邪魔してくるぞ。

……ん?

ナオフミがこつそり……風で捕らわれてるメルティのところに行こうとしてる?

「おいナオフミ、どこに!?!」

「あんなのに付き合つてられるか……! メルティを取り戻してくる」

おお……フィーロとフィトリアのバトルが白熱してるあいだに、こつそり助け出す気か。

確かに、あの程度の檻なら今の俺の力でも破れるかもしれない  
……よし、じゃあオレも一緒についていって——

「ズルはダメ」

その瞬間、オレとナオフミはいつの間にか、まとめて空中に吹っ飛ばされていた。

……は？

え、いや……え？

「がはっ!?」「ぐあっ!!」

地面に背中から叩きつけられる感覚で、ようやくオレ達は我に返る。

な……え？ な、何が起こっ……っでええ!?

は……腹!?

腹……切り裂かれた!? いつ!? 誰に!?

「ナオフミ様!」

「おいおい……あいつ本気でオレ達を殺す気なのかよ」

ぼ、防御力が凄まじいナオフミの腹にも、傷が……!

じゃ、じゃあ……フィットリアがさっきの攻撃を!?

その気になれば……いつでも殺せるってのか。

くっそ……逃げるのも無理、だったらもう……方法は一つしかねえ

じゃねえか!!

「フイーロ! 力任せじゃダメだ! やるならもつと鋭く、速くだ!!」

「え、何!? 何!?!」

オレは腹の痛みに耐えながら、フイーロに向かって叫ぶ。

意識を逸らすな! 集中しろバカ!

こつちから手助けできねえんなら、フイーロが勝つしか生き残る方法がないんなら、こうして戦い方を教える他にないだろうが!!

「足で地面を掴め! 体はもつと前に! 拳は固く、さらに前へと突き出せ!!」

「え!? え!? え!?!」

いつもオレがやってる戦法を叫ぶけど、フイーロの奴、全く理解してねえ。



こうしてわかりやすく教えてやってんだろうが！ 本能のままに戦うなっつってんだろ！

ああもう！

焦れつてえな、オイ!!

「友達助けたいなら気張れ!! てめえの全力で……メルティを取り戻してみせろ!!」

「——たああああああ!!」

オレのその一言で、フィーロの奴覚悟を決めたらしい。

そして考えるより先に、体で覚えたらしい……さつきよりも、全身に力が籠もった踏み込みで突進し、フィトリアに迫る。

前に構えた両手から、鋭く伸びた魔力の爪が突き出され、フィトリアの胸に迫る——!

だが、その一撃は軽く躲かれ……薄く頬を切り裂くだけに終わってしまった……!

くっ……! やっぱ付け焼刃じゃだめなのかよ……!

どうする……このままじゃ、この化け物に殺されちゃう……!

「……合格、ってことにしてあげる」

……あ?

何だ? 今、ものすげえ聞き捨てならない一言訊いた気がするぞ?

フィトリアを見ると……さつきの殺気がまるで感じられない。

ていうか、むしろフィーロに微笑ましげな、満足げな笑みを浮かべて……って、おいちよつと待てやコラ。

「……合格う!?!」

「まさか……」

いやいやいや、嘘だろマジか。

あんだだけビビらせといて、そりやないだろフィトリアこの野郎。

だが……やっぱオレ達が思った通りだったらしい。

「フィーロを……私達を試していたんですね!」

「……手加減したフィトリアに負けるようなら、この先の戦いは生き残れない。これは、その節」

演技……だったって事か?

ファイロに戦い方を……力任せじゃない、頭を使った戦法を使わせるための。

そのために……オレ達、こんな大ケガまで負わされたのか？

「ぎっけんなよコラア!!」

「じゃあ、本気で私たちが殺すつもりはなかったのね？　よかつたあ

……」

「…メルたんには悪い事をした」

「メルたん!?!」

「話を聞けコラア!!　無視すんじゃないやねえ!!」

こんなつ……こんな痛い思いして、嘘お!?

マジで許さねえぞフィトリアこんちくしょう!!

オレのそんな怒りの言葉を丸々無視して……フィトリアは、ナオフミに向き直って、口を開いた。

「…盾の勇者と話がある。2人だけにしてほしい」

「……お前、本気で俺らを殺す気だったろ」

森の奥に入り、二人きりになったナオフミとフィトリアの会にを、オレとセントが聞き耳を立てる。

そこで聞こえてきた内容に、オレ達は思わず息を呑んだ。

「最後以外は。フィトリアが手加減してまだダメなら、もう見込みはないと判断してた」

「……えげつねえ」

マジかよ……やつぱあれ本気だったのか？

じゃあ、ファイロが敗けてたら、オレ達皆殺しにされてたのか？

「……やべえ、オレってば今更足震えてきた」

「……オレも」

伝説のフィロリアル……こつわ。

内面もファイロと似たようなもんかと思ってたら、比べ物にならねえぐらいこつわいんだけど。

オレ達……よく生きてたな。

オレ達が絶句してるあいだも、ナオフミとフィトリアの話は続いて

いた。

勇者とフィロリアルのこと、フィトリアの戦う理由、ナミから現れる敵のこと、そして……いずれ勇者に訪れる役目の事。

ぶつちやけわかったことはほとんどないが……覚えておかなきゃならない事を、わんさか教えられた。

……そういやあいつ、むちやくちや長生きなんだっけ。たった一人で……いろんなところで戦い続けてたんだな。

「…流石は年の功つてところか。ついて来てよかったぜ」

「ああ、そうだな…」

セントの呟きに、オレは若干渋い顔で頷く。

ぶつちやけ、オレ達やつてんのただのストーキングと覗きなんだよな……いや、いや！ 考えたら負けだ！

「…なぜお前は、そこまで俺にこだわる。なぜ…俺にそこまで信頼を寄せられる？」

「フィードをあそこまで育てた勇者が、悪人とは思わない」

「…俺は悪人だ」

ナオフミのいつもの憎まれ口に、フィトリアは首を横に振る。

あいつにもわかってんだろうな……ナオフミの心の傷も、その奥にある、むちやくちや優しい心も。

……できれば、その傷はオレ達でどうにかしてやりたいんだがな。

「盾の勇者がなんと言ったって、その役目を果たしてる。だから信じてる……信じさせてほしい」

そう言つてフィトリアは——数百年孤独に戦う女王は、ナオフミの肩に凭れ掛かる。

その目尻に見えた涙に……オレもセントも、何も言えない。

ナオフミ達が無言で佇むその姿から……オレ達もまた、無言で目を背けた。

…つたく、重てえ役目、引き受けちまったなあ。

## 盾と槍、再び

Side:Sentto

「やー！　なんかへんなの生えたー！」

ぴよこん、と頭の上から飛び出した毛、いわゆるアホ毛を見上げて  
ファイロちゃんが嘆きの声を上げる。

よっぽど嫌だったのか、それをブチツと引き千切る始末。

が、ちぎった傍から新しいのが生えていた。

「うわーんごしゅじんさまー！」

「ステータスは上がってるんだ。喜んどけ」

泣き叫ぶファイロちゃんに、ナオフミはそう言って全く取り合わな  
い。

うん……あれが俺に生えてたら、確かに嫌だわ。

マジで同情する。

「ファイロちゃん可愛いよ」

「えー…？」

「え、えつと…そうですね…？」

「…ノーコメントで」

ラフタリアちゃんや、優しい言葉は時に残酷に人の心を傷つける  
よ。

リュウガ、気を遣うんなら何も言うな。

それを与えたファイトリア的には、多分善意のつもりなんだろうけど  
なあ……でもあれ、年経つと増えるらしいしなあ。

「ファイトリアは、ほかの四聖勇者の近くに送るつもり」

「……本気であいつらと和解させる気なんだな」

「そう約束したでしょ？」

ファイトリアの問いに、ナオフミは無茶苦茶渋い顔になる。

しばらく黙り込んでいやあいつは……やがて、ふっかいたため息をつ  
いて、がしがしと髪を掻きむしった。

「わかった……！　善処する」

ナオフミがそう答えると、ファイトリアは小さく頷いた。

そして、前にも見たあの馬車の扉が開いて、眩しい光が迸りだす。さして……覚悟、決めなきやならないな。

「ありがとうございます、フィトリアさん」

「本当にありがとうございます！」

「うん……盾の勇者と仲間達の健闘を祈っている」

最後にみんなで並んで、フィトリアと対峙する。

いろいろあったけど……助けてくれたこいつには、感謝しかない。礼を言おうと、フィトリアは少しだけ、表情を綻ばせた。

おっと……初めてかもな。

こいつの笑顔を見たのは……。

☒

光が収まると、オレ達は森の中に立っていた。

木々の先にチラツと……門と壁らしき人工物が立っているのが見える。関所だな、あれ。

「うーわ、本当に敵と目と鼻の先だよ」

「関所か……なるほど、そりゃ勇者の誰かは確実にいるよな」

うっわ……兵士がそろそろいやがる。

あれ、のこのこ出でたら即囲まれて、問答無用で取っ捕まるやつだよな。

「どうする？ 突っ込むか？」

「……いや、その必要はなさそうだ」

ん？

よくよく見ると……見覚えのある、ごっつい槍を持つてる男がいる。

あの長い金髪と、やたら高そうな鎧は……。

「あれは……槍の勇者か！」

「都合よく、向こうも待っていたようだな……前までなら鬱陶しいほかなかったが、今はむしろちよいどいい」

おいおい……よりによって一番話聞かなそうなあいつかよ。剣とか弓とかの方がまじだぞ。

だがまあ……行くしかないわなあ。

全員で覚悟を決めて、オレ達は関所の方へと進んでいく。

「た、盾だ!」

「盾の勇者が現れたぞ!」

すると即座に、関所にいた兵士達が集まってくる。

槍を突きつけて囲んでくるけど、それ以上近付いては来ない。

これはあれか、前の大暴れが効いてる感じか。

よし、じゃあこれで兵士達が邪魔に入る事は無いな……さて、話し合いを始めるとしようか。

「おい元康! こつちに戦闘の意思はない! 話し合いに応じてやるからお前もそうしろ!」

「どんな切り出し!」

つて、おいこらナオフミ!?

いきなり何でそんなケンカ腰!? 話し合いになってないじゃん!

ほらア……リュウガも呆れてるし、ラフタリアちゃんもメルティも額に手え当ててるしい!

「お前さあ……もうちよつと言いつてもんを考えようぜ」

「あいつにはこんなもんでいいだろ。……メルティはここにいる!

何もしちゃいない! 無駄な争いを止めるために俺達はここに来たんだ、お前も槍を引け!」

ああ……もうダメだコレ、こういうスタンスが根付いちやつてる。

……つていうか、さつきからずっと槍の勇者が静かだな。

何だ? ずっと黙ったままって言うか……

殺気を感じるんだが?

「樹と錬はどうした!? お前と一緒にじゃないのか!」

「……したくせに」

「あ? なんだった?」

ぼそり、と槍の勇者の呟きに、思わず聞き返すナオフミ。

その直後のことだった。

槍の勇者が突如、槍の聖武器を振りかざし、ナオフミに向かって突

進してきたのは。

「お前が殺したんだろが…！ 盾の悪魔ナオフミ!!」

ガキン！と、咄嗟にナオフミが構えた盾が、槍に衝突する。

同時に、ハツと我に返ったオレ達が構える。

いきなり何してんだこいつは!?

ていうかなんつつた今!? だ…誰と誰を何したって!?

「お前…いきなり何を言っている!? 俺が誰を殺したって!？」

「とぼけるな！ 二人の仇は…俺が取る!!」

「待て…落ち着けバカ!!」

ギリギリと、槍の刃を押し込んでいく槍の勇者。

その気迫は、本気でナオフミのことを殺そうとしているのがまるわかりな、凄まじい圧だった。

「どらあ!!」

横から割り込んだリユウガが殴り飛ばして、何とかナオフミから引き離す事ができた。

だが、それが奴の怒りの火に油を注いだらしい…ものすごい目でナオフミを睨みつけてくる。

「ていうか待てよ、おい…！ 他の勇者が死んだって、本当なのか…!？」

「お前がやったことだろ！ 影とかいう連中から得た、確かな情報だ!？」

影…って、あいつと同じ連中が？

女王の味方じゃないのか!?

ってか、それは今はどうでもいい…!

やばいやばいやばいだろ…! どうすんだよ、勇者が一人でも欠けたら、波がもつと酷い事になるって!

これじゃ、フィトリアが言ってた通りになっちまうじゃねえか!?

「俺が甘かった…！ 同じ地球の日本人と見誤って…お前の暴挙を許した！ 情けなんてかけなければ、あいつらを死なせずに済んだのに!？」

「お、おいおい待ってって！ 話を聞け！ そんなことオレ達はしてな

い！ とんでもない誤解だ！」

やつべ、槍の勇者の圧に押されてた。

我に返ったオレも、すぐにナオフミの弁護に入る。

こいつが何をどう吹き込まれたのかは知らないけど、これ以上冤罪ふっかけられてたまるか！

つーかこのやり取り自体、マジでめんどくさい！

「こちとら冤罪だつって逃げてたのに、なんだってそんな自分で罪を重ねるような真似するんだよ！ 少し考えたらわかるだろ！」

「…そう言わされてるんだろ、セントちゃん」

オレがそう叫ぶけど、何故か槍の勇者はもつと険しい表情になる。

あ、これ駄目だ。

この野郎、話聞いている風で聞いてない。完全にナオフミが悪だと信じ切った上でここに来てやがる。

こいつマジでめんどくせー!!

「思えば最初にあつた時からおかしいと思つてた……あんなに汚い言葉で俺を拒絶するなんて、考えられない！」

「いや、それはお前がマジでキモかったからで……」

「ナオフミに洗脳されて、そこまで至ってしまったんだらう!? 君達は!!」

ちくしょう、ぼろつとこぼれた本気の罵倒も届いてねえ！

この野郎……自分が嫌われている可能性とかまるで考えてないのか？ モテ男はこれだからよ。

ていうか口が悪くて悪かったな！

気づいたらこんななつてたんだよ大バカ野郎!!

「……ここまできると怒る気にもなれませんか」

「ねえ、あの人もしかして耳に病気でも患ってるの？」

「いや、ただのバカだろ」

「ぶー！」

おお、オレが言うのもなんだけど散々言うね君達。気持ちはおかしくはわかってるけど。

出会ってからずっと同じ感じだもんな……本人に悪気はなくても、



どうしても好きになれねーんだよ。

まあ、こいつ一人が悪いわけじゃないけどさ！

具体的にはいつとも一緒にいるあの女とか！

「お気をつけください、元康様……盾の勇者の洗脳の力は危険極まりないもの」

とか、オレが内心で罵ってたら、現れやがったよあの女が……。

ナオフミを嵌めて、行く先々でオレ達の邪魔をして、色んな方面で好き勝手やらかしてる最低最悪のビッチ！

「一刻も早く始末しませんといけませんわ」

「デメエ……余計なデマぶっこいてんじゃねえぞ！」

「あらあら、汚らしい言葉……盾の悪魔はこんな可憐な少女を、こうも豹変させてしまうのですわね」

ふんつとりユウガを見て鼻で笑い、元康にしなだれかかるクソ女ことマルティ。

大方、この女が槍の勇者にあることないこと吹き込んで、良いように操ってたんだろうけどな！

ていうか、この事件の黒幕もこいつなんじゃねーかと思つてしまふ。

そんぐらいこいつ、頭も腹ん中も真つ黒なんだよな……。

「さあ、元康様……あの娘達を今度こそ悪魔の手から救い出しましょう？」

「ああ……俺が、俺が二人の分まで戦う……！ そしてナオフミ……！ お前を倒し、彼女達を救い出してみせる!!」

うつわー……ほんつと簡単に言うこと聞くなこの男。

見る目ないっつーか、ほんとに頭脳みそ入つてんのか、とか聞きたくなるような。

……なんかもう、腹立ってきた。

こちららよ？ 無実の罪着せられて、国中逃げ回って、やばい魔物と戦わされて、もつとやばい奴に脅されて、むちやくちや苦勞してんのよ。

それを……こつちが歩み寄ろうとしてんのにこいつらは！

何もかんもむちやくちやにしてくれやがって!!

「あああああもう!!」

「この……どうしようもない道化が!!」

怒りのままに、戦闘態勢に入るオレ達。

こうなったら、力の限り暴れてぶっ潰して、無理矢理にでもいうこと聞かせたらあ!!

その時のオレ達は、気付いていなかった。

関所に集まっていたはずの兵士達が……いつの間にか一人もいなくなっていたことに。

## 道化の戦い

S i d e : R y u g a

オレ達が身構えたその瞬間、空に魔法が打ち上げられる。

それはオレ達の真上で弾けると、雷の檻となつてオレ達を閉じ込めやがった。

「雷檻……ここから逃がさないつもりだな」

「この関所には大勢の兵士が集まつてる！ 覚悟しろ、逃げ場なんてどこにもないぞ！」

槍の勇者がそう言つて、オレ達に……つて言うかナオフミに槍を突き付ける。

仲間の女共もこつちに敵意をぶつけてきて……つか、ほんとに女ばっかだな!!

こいつはマジで、一発どぎついのを食らわせた方がよさそうだな……!

「上等だ！ かかつてきやがれ！」

【忍びのエンターテイナー！ ニンニンコミック！ イエイ！】  
「たー！」

「おらあああ!!」

【W a k e u p b u r n i n g ! G e t C R O S S — Z  
D R A G O N ! イエイ!】

オレとセント、ファイロで同時に奴らに向かう。

忍者の格好になったセントが忍術でほん……ほん……派手に暴れて気を引いて！ ファイロが思いっきり蹴りかかる！ そんなでオレがおもつきりぶん殴る！

避けんじゃねえぞ、女共！

お前ら全員にして、オレ達はさっさとお暇させてもらう！

「許してくれ……ファイロちゃん、リュウガちゃん！ 君達を救うためには、君たちを止めなくちゃいけないんだ！」

ファイロに槍を突きつけ、槍の勇者がなんか語る。

戦闘中に何甘つちよろいこと言つてんだ、こいつは。

「そのためになら俺は……心を鬼にする！」

「ドラゴンフィスト!!」

「ぐっべっ!？」

槍の勇者がべらべら話している間に、奴の顔面にガチで拳を叩き込んでやった。

あんまりに隙だらけなもんだから、思わずがぶっ飛ばしちまったよ。

チツ…もうちよつとであの雷の檻にぶつけられそうだったのに、あとちよつと届かなかったか。

「救われる必要なんざねえんだよ、大馬鹿野郎！」

「よくも…! 死になさい、このトカゲ！」

ぺっ!と唾を吐きながらオレが吠えると、バカ女がなんか激昂してオレに魔法を放ってくる。

はっ! ふいうちはお前の十八番だもんな!

だがな、騙しならこつちだつて負けてねえんだよ!

「あなたの考えることは大体予想がつきます」

「てめーが死ね、バカ女」

どろん!と煙とともに現れたセントとラフタリアが、バカ女の後ろに現れて蹴りを放つ。

すげエな、あんな近付いても気配を悟られないのか……いや、単に向こうがザコ過ぎて気付かなかっただけか?

どうせならぶった斬ってやりやよかったのに……ああ、殺したら駄目なんだっけ? 勇者以外は別によくね?

「ぐっ……この! 俺はまだやれるぞ! 勇者として、悪は裁かなければならないんだ!!」

オレが殴り飛ばして倒れ込んでいた槍の勇者だが、それでも諦めることなく立ち上がり、ナオフミを睨みつける。

軽かったか? いや、向こうの執念がすごかったのか…?

すごいすごい、物語の主人公みたいだ……だがな、今のお前は単なる道化でしかないんだよ。

「本当におめでたいやつだな、お前は」

「暴風雨で薙ぎ払え！ タイフーン!!」

ナオフミの合図で、メルティとフィーロが同時に魔法を放つ。

二人の手の間から暴風が吹き荒れ、槍の勇者とその仲間をみんなまとめて空に巻きあげてみせる。

あれが噂に聞く合体魔法ってやつか！

相当コンビネーションがよくねーとできねえって聞いたぞ？ ス

ゲーな、あいつら…。

「こ、これが盾の…洗脳力なのか…!？」

「そう思うんならそう思っておけばいいさ…どうせ話しても信じないだろう、お前は」

まだそんなこと言ってるのか…。

洗脳で強くなるってどうやるんだよ、考えてからもの言えよ。

「俺はな、元康…お前らが元から知ってるゲーム知識で俺TUEE EEしてる間も、地道にコツコツ戦力を鍛えてきたんだよ」

いい加減苛々してきてるな、ナオフミの奴…それでも我慢してる。

だが、フィトリアに言われてるからな。

他の二人はもう死んじまつてるようだし、これ以上勇者を死なせるわけにもいかねえからな。

「…わかったら話を聞け。俺達が争ったところで、何一つ解決したりはしない」

「こ…と…わるー!」

あ？

今断ったのか、こいつ？

槍の勇者は槍を杖代わりにしながら、ふらふらしたまま立ち上がる。他の連中も同じように…いや、単にこつちを憎んだ様子で続々と立ち上がってくる。

しぶってえな、こいつらマジで…。

「俺は…勇者は悪に屈するわけにはいかないんだ…！俺を信じてくれる…俺が守りたい人達のために、俺は負けられないんだ!!」

「デメエは……!」

バカか? マジでバカか!?

仲間……いや、女に言われたことだけ信じて、こっちの話をまるで聞こうとしやがらねえ。

ああもう……フィトリアの言ったこと無視してぶつ殺してやりてえ!!

そう、オレの我慢が限界に達しかけた時だ。

えげつないくらいの寒気が、オレの背中に走った。

近づいてくるそれに気付いた瞬間、オレの身体は勝手に動いていた。

「うおおおおおお!!」

「やああああああ!!」

フィーロもオレと同じものを感じていたらしい。

同時に走り出し、槍の勇者共の元へ駆け寄る。

そして奴らの後ろに回って、全員まとめてナオフミ達の方へと蹴り飛ばしてやっていた。

「なっ、え!?! ちよっ、フィーロちゃん何を……へぶっ!?!」

「ちよっと! 高貴な私に対してなんて無礼な……ごべぶっ!?!」

「黙ってろ!!」

困惑する槍の勇者とクソ女だが、ぶっちやけこいつらに構っている暇はない。

やばい……ヤバイヤバイヤバイ!

何がどうヤバイのかはわかんねえけど、とにかくさっさと動かねえと!!

オレ達を狙ってる奴らに殺されちまう!!

「ごしゅじんさま、あの黒い盾にして! 早く!」

「な、何を……!?!」

「急げ! あれじゃねえと耐えられねえ!!」

「わ、わかった……! エアストシールド! セカンドシールド!

シールドプリズン！」

オレとフィーロの必死の頼みに、ナオフミは困惑しながらも従ってくれた。

すぐに盾を構え、持っている防御の技を全部出す。

盾の檻の中に全員が入り、じつと息をひそめる。

クソ女がぎゃーぎゃー喧しいけど、それに構っている場合じゃない……そこでオレは、辺りにいたはずの兵士達が一人もいなくなっている事に、ようやく気付いた。

そして次の瞬間、遙か空の上から、オレ達に、受かつてとんでもない量と熱さの光が降り注いだ。

「ぐお……お、おとおおお!!」

「何だああ!!? 何が起こってんだリユウガあ!!?」

「黙ってるバカウサギ!!」

ドゴツ!とナオフミの足が地面に埋まる。

あと少し遅ければ、オレ達全員が飲み込まれていたであろうその何かを、盾の上に構えたナオフミがたった一人で耐え続ける。

!!? ナオフミの盾があつという間に壊れていく音がするぞ!!?

どんな魔物の攻撃でも、一発ぐらいは耐えてきたはずの盾だったのに!!?

くそ……これ、いつまで続くんだよ!!?

それが収まったのは、長いこと経った後だった。

数秒か数分か、必死過ぎて時間の感覚が狂いまくってたぞ……つてか、外もやべえな。

ナオフミが守ってた部分以外、ドロドロに溶けてやがる。

どんだけ高い熱で焼いたら、地面ってこんなふうになるんだよ……!!? ずいぶん深くまで抉られてるし……空が遠いぞ、おい。

「——はっ、はあっ……ど、どうにか耐えきったか」

「だ、大丈夫ですかナオフミ様……!」

「ああ……何とかな」

むちやくちや息を切らせて、膝をつくナオフミ。

セントとラフタリアが心配してるけど、それ以上動けないらしい。そりゃそうだわな。

「今のって……」

「ま、まさか……どうして……!?!」

一方で、何やらメルティとバカ女が真つ青な顔で立ち尽くしている。

おい……まさか、さっきの何かに心当たりでもあんのか？

固まったままのメルティに、オレが問いかけようとした時だ。

パチパチ……と、その場に似合わない、拍手の音が響いた。

「いやいや……さすがは盾の勇者。今ので死なないとは、しぶときは他の勇者とは比べものになりませんな」

あわてて声が出した方を振り向くと、地上に人影が見える。

それも一つじゃない……十人、二十人、いやもつといふ!?!

その先頭に……気味が悪いぐらいに白い、偉そうな感じの格好をしたジジイが不気味に笑っているのが見えた。

「あいつは……確か教会にいた……!」

あ、ナオフミ……お前が知ってる奴か？

よかった……顔見たけど全く知らねえ奴だったんだよな。思わず誰だテメエ、って聞くとこころだった。

ただ……一番驚いてるのは、意外な事にクソ女だった。

「教皇……これは一体どういうことなの!?! 次期女王たる私に対し、あんな魔法を使うなんて……これは明確な反逆行為よ!?!」

「これはこれは、マルティ王女……ご健在とは申し訳ありません。せめて痛みなく始末して差し上げるつもりだったのですが」

「なっ……!?!」

何だ……? 裏切りだの始末だの。

あのジジイが教皇で、クソ女と繋がって……?!

ダメだ、全く構図が浮かんでこない。

「……セント、どういう事だ?」

「つまりだ……あのバカ女が教会を利用してオレ達を貶めようとしたつもりが、あの女も教皇に騙されて、オレ達と一緒に殺されかけて



るって事だ」

「ああ、そういう事か……」

うん、なんかちよつといい気味だな。

ただ……あのクソ女が殺される時は、オレ達もまとめてやられる時なんだが。

「う、裏切ったの!? せつかく盾の勇者の排除に協力してあげたのに！ 私が誰にお仕えしているかわかってやっているの!?!」

「もちろんですとも……偽勇者とその一味、これを浄化するために我々は参上したのですから」

あ、クソ女がよろめいた。

まあ、自分が他人をいいように利用したかったのに、逆に掌で踊らされてたんだって知ったんなら、そうなるか。

ていうかあのジジイ……さつきから何言ってるのかまるでわかんねえんだけど？

「勇者とは……人々を救い、世界を救う者。故に誰からも支持され、誰からも尊敬され、崇められていなければならぬ存在なのです」

そういつたジジイの眼が、一瞬鋭くなる。

おい、あれ本当にジジイか……？ ジジイの格好をした別のなんかじゃないのか？

「ですが……彼らは違う。魔物を蘇らせ、疫病を蔓延させ、権威を示さない。そんなものは勇者を名乗る資格はありません」

ああ、他の勇者がやらかしたあれか。

結局、ほとんどのやらかしをオレ達で何とかして回ったんだよ……で、それが何で勇者を殺すことになるんだよ。

理解ができず、首を傾げたまま棒立ちになるオレ達の前に……ジジイはそれを見せつけてきた。

何処かで見たとのことのある形状の……一振りの剣を。

「故に私が——真なる神を代行し、裁きを与えに来たのです」

ジジイがそれを振り下ろす姿を見た瞬間。

オレの背筋に、さつきとは比べ物にならないくらいのヤバい寒気が走った。

## 神の代行者

S i d e : N a o f u m i

ドゴンツ!!

と……襲い掛かった衝撃を盾で受け止めた瞬間、俺の身体は思わず吹っ飛ばされそうになった。

何だ、あいつは今何をした!?

ただ武器を振っただけじゃないのか!?!

「なんっ……だあ、この威力は!?!」

俺の後ろに立つセントも、戦慄の目で教皇を見上げる。

その場にいた全員が、あり得ないくらい強力な攻撃を目の当たりにして、信じられない様子で突っ立っていた。

あんなジジイが、あんな攻撃をするなんて誰が思うよ……!

「あ、あれは……どうして!?!」

ふと後ろを振り向くと、メルティが大きく目を見開いているのが見えた。

教皇の持っている武器を見て、固まっている……?

姉のビッチも似たような顔で同じ方を……いや、こいつは教皇を凝視していた。何に凛びてるんだ、お前は。

「おいメルティ、あれがなんなのか知ってるのか!?!」

「……四聖勇者の武器の、模造品よ。勇者の力を再現しようとして、大昔に作られたって聞いてるわ。でも……」

「なんであいつらが持つてるか、つてわけか」

セントの呟きに、メルティは引きつった表情で頷く。

何だよそれ、あんな強力な武器があるなら、勇者なんて呼び出す必要ないだろうが!

あ? コストがかさむ?

一回使うのに膨大な魔力が必要になる? ……あ、そう。

「これぞ神の武器……代行者たる私が持つのにふさわしいもの、これがここにある理由は、それで全てですよ」

……いや、それ要するに盗んだって事だろ。

盗みだけじゃなく、神の武器で殺人まで平然と犯そうとしているわけか、この野郎は……。

「逃げ場は……ないわな」

「多分だけだよ、関所の連中全員、この展開を知ってたんだと思うぜ。だから気付いた時にや誰もいなかったんだ」

「綿密に計画された策だったってわけか……笑えねえな、おい！」  
くそっ……！

ビッチの顔を見る限り、こいつらも利用された感じだな。ざまーみやがれ。

いや……危ないのはこっちも同じだな。

「ナオフミ様……！」

「ああ、あんなものをもう一度食らったら、流石に一卷の終わりだ……！」

軽く振った衝撃だけで吹っ飛ばされかけたんだぞ……！？

奴が本気で攻撃を加えてきたら、次はどうなるか……もしかしたら真つ二つにされるかもしれん。

最初の攻撃でギリギリなのに、これ以上戦えるか……！

「くっ……そおおおおおおお!! 許さない……許さないぞ教皇！」

絶望的な状況に、俺達が動けなくなっていた時だった。

槍の石突を地面に叩きつけ、突如元康が吠えだす。

危うく殺されかけて、俺と教皇を信じられない様子で交互に見つめていたかと思ったら、いきなり目を吊り上げて叫び出したんだ。

……何してんだ、お前。

恐怖と絶望でおかしくなったのか？

「鍊も樹も……この国のために良かれと思って頑張ってきたんだ！それを役に立たないから処分しただど!? 俺達はお前達の道具じゃないぞ!!」

いや、その気持ちは汲もうとは思うが……結果が伴っていないから弁護は無理だぞ。

お前らの失敗の尻拭いをしたの、誰だと思ってんだ？

おい、見ろ。ラフタリア達の眼がえげつないくらいに冷たくなって

るぞ。

「この国の膿はお前達の方だ！ 浄化されるべきなのは、そんな身勝手なことをのたまうお前達の方だ！」

「覚悟しなさいあなた達……！ 時期女王を騙したこと、後悔させてあげるわ!!」

槍を構える元康に合わせ、ビッチを先頭とした女共が構えだす。

こう、後ろから見た図は確かに勇者っぽいんだがな……圧倒的な力を持った強大な敵を前にしてもなお、逃げようとする姿を見せない敵な。

ただ……その前の俺達とのやり取りを考えると、滑稽にしか見えな  
いんだよ。

「行くぞ、尚文!!」

しかもこいつ、何の臆面もなくそんなことをのたまいやがった。

今さつき本気で殺そうとした奴を、勝手に仲間扱いして、勝手に一緒に戦ってくれると認識して？

お前、マジでふざけてんのか…!?

そんな俺達の苛立ちも知らず、元康の奴は女共に援護を施されながら突っ込んでいく。

槍の聖武器のスキルに、女共の魔法が重なって……途轍もない勢いの炎と風の一撃が完成する。

「風炎の流星槍!!」

喰らえばひとたまりもないであろう、凄まじい熱を放つそれが、教皇めがけて襲い掛かる。

だが……教皇は一切表情を変えないことなく。

奴の後ろに控えた大勢の信徒共が、金色に輝く魔法を発動させた。

『『力の根源たる私達の神が命ずる。心理を今一度読み解き、祝福されし者を守れ』』

「高等集団浄化魔法『城壁』」

カツ！と、眩しい光の壁が生み出されたと思った直後。

それに触れた元康の一撃が、呆気なく跡形もなく消滅してしまっ  
た。

あの一撃が……あんなにあっさりと？

あいつら、どんだけ高等な魔法を用意してるんだよ……！

ていうか、本当にお前らが波と戦えばいいだろうが、ふぎけるな!!

「うそ……だろ。あの大技を……あんなにあっさり」

「これぞ神の御技……あなた方がどれだけ奮闘したところで、どうにもできないのですよ」

力尽きたのか、がくりと膝をつく元康。

そんなあいつを嘲笑いながら、教皇は不気味に笑い、聖武器の模造品だという剣を——槍に変えた!?

他の武器の力も使えるって事か!?

「では……死んでもらいますようか」

「ナ、尚文！ 助け——」

神々しい光を放つ教皇の槍を前に、元康が振り向いてくる。

必死の顔で、懇願するような視線を向ける奴に、俺は。

「……で、オレがフラッシュ焚いて煙幕はるから……」

「その間にファイロとバイクで一目散に、だな」

「煙の中から狙撃するのはどうですか？」

「それも採用しとくか」

「ついでに槍の勇者をぶん投げて囷にしとかねえか？」

「ファイロ、それさんせい！」

まるっと無視し、ラフタリア達とさっさと逃走する作戦会議を行っていた。

奴等が勝手に騒いでるあいだに、大体の方針は決まったから丁度良かったな……あんなもんとまともに戦ってられるか。

「尚文！ 何やってんだ！ 一緒に戦おうって言っただろうが！」

「……お前、どんな神経があったらそんなこと言えるんだよ」

お前、俺のこと殺そうとしたよな。その事について一切何も言っていなかったよな。

面の皮が厚いにもほどがあるだろうが！

「攻撃が通らないんじゃないや逃げたほうがいいだろ！ あんなもんと真っ向から戦えるか!!」

「このまま奴を放って置くのか!？」

「どうにもできないから逃げるつつつてんだよバカ!!」

お前の薄っぺらい正義感に俺達を巻き込むな!

お前の攻撃が効かないのに、俺に防御させたところで勝てるわけないだろうが!

罅り殺しにされるだけだ、俺が!!

「仲間割れとは見苦しい……せめて一瞬で終わらせてあげましょう」

言い争う俺達に焦れたのか、それとも見苦しくなったのか、教皇が手に持つ槍の輝きをさらに強くしていく。

あれは……元康の攻撃の比じゃないぞ!

おそらくは……槍の聖武器が習得できる上位のスキル。そんなもん、受け止められるわけないだろうが!

「ぎゃー!」 お前が邪魔するから向こうの準備終わっちゃまってんじやねーか!」

「くそっ……!」

セントが喚くのを横目に、俺は……意を決し、前に出る。

凶行が真つすぐ俺を標的にしているのを感じながら、全員が盾の防御の範囲に入るように、教皇の前に立ちはだかる。

「ナオフミ様!？」

「尚文!」

「お前ら……! 俺の後ろから出るんじゃないぞ!!」

正直、俺はここで死ぬかもしれない……。

元康たちはどうなろうと知った事じゃないが……しかし、せめてラフタリア達は守り通さなきゃならない!

……教皇のあの面、一発でもぶん殴ってやりたかったが、これじゃ仕方ない。

奴の口が小さく「さようなら……」と動くのを目に、俺は、死ぬ覚悟を決めようとした――

「ハンドレッドソード!!」

「流星弓!!」

だが、教皇が一撃を放とうとしたその時。

無数の光の剣と、光の弓が降り注ぎ、教皇と信者共の方へと次々に炸裂していった。

今の攻撃は……！ しかも、今の声は……!?

「バカな……！ なぜあなた達がここに……!？」

「フン………どうした、亡霊でも見たような顔だな」

「僕達がここにしていることが、そんなに不思議ですか？」

はっ！ と振り向けば、教皇とは反対側から見下ろしてくる二人の人影が—— 鍊と樹の姿が目映る。

前と同じ気取った笑みを見せながら、教皇を睨みつけ、俺達の元へと飛び降りてくる。

「樹!? 鍊!? 生きていたのか!？」

「あの程度で俺がくたばるものか」

「影とかいう人達に、寸前で助けられましてね」

そうかお前らも………って、どうした元康、そんな訝しげな顔をして。

あ? お前らに俺達の居場所を教えたのも影?

ああ………向こうも主義主張の違いで、一枚岩じゃなくなってるわけか。

そんでお前らは………女王派の影に助けられたというわけか。

「お前ら、何で………」

「借りがあるからな。それを放置したまま、おめおめ逃げ恥を晒すわけにもいかない」

そう言って二人は、再びぎろりと教皇を睨む。

それは、歪んだ宗教間で国を混乱させた者への義憤………とかではなく、散々利用されて騙されたことへの怒りがあるように見えるのは、俺の気のせいかな?

とにかく、同じ敵を見据える奴らが増えたのは確かだが………気に入らない。

「メルロマロクの代表に代わり僕達四聖勇者が、おぞましき悪意の温床であるあなた方三勇教信徒を撲滅します!! 覚悟しなさい!!」

樹が大仰な素振りですう告げるが、教皇は臆した様子を見せない。

そりやそうだ………実力的に劣った勇者が今さら揃ったところで、圧

倒的な力を持った今の奴はまるで恐ろしく思うまい。

むしろ……邪魔者をまとめて排除できる機会、なんて考えてそう  
だ。

状況は……決してよくはなっていない。

「尚文、お前には防御を頼みたい。奴の攻撃を止められるのは、お前しかいない」

「……虫のいい話をしていると思わないか？」

「わかってる……こつちもお前を完全に信じたわけじゃない」

お前らは俺に濡れ衣を着せたんだぞ、と無言で脅すが、向こうも退かない。

まあ、この程度で俺への疑惑を解くようじゃ、あの時に騙されてすらいないだろうしな。

「だが、今は争っている場合じゃない。俺達が負ければ、奴らは今度は国を攻めるだろう。そうなればもう泥沼だ」

「最悪の未来を回避するために……今この時は、共に戦いましょう」

そう言つて二人は……無断で俺の隣に並ぶ。

元康もやや戸惑いながら、二人にならつて槍を構え直す。三人の間も遅れて登場し、総勢三十人近い面子がその場に揃う。

その時の俺の顔はきつと……苦虫を噛み潰したような顔になってただろう。

仕方なく、本当に仕方なく……俺も奴らと並び、教皇を睨みつけた。

「ほんつと……ままならねえな」

これつきり……これつきりだぞ。

お前らなんかと、こんな風に共闘するのはな！



## 四聖勇者、共闘

S i d e : M e l t y

「奴らに次の攻撃を撃たせるな！」

「わかってる！」

ナオフミの号令で、他の三人の勇者達が走り出した。

もちろん、ラフタリアさんとセントさん、リュウガさんとフィーロちゃんも一緒に、教皇と信徒達に攻撃を仕掛けたわ。

【天空の暴れん坊！ ホークガトリング！イエー！】

「おおおおお！！」

空を見上げれば、ワシの翼を生やしたセントさんが、手にしたオレンジ色の銃から弾丸を放っているのが見える。

銃弾は信徒達に食らいつき、爆発して次々に吹っ飛ばしていく。

手加減しているのかしら、吹っ飛ばされて倒れるだけで、血を流しているようには見えなかったわ。

「ライトニングスピア！」

「雷鳴剣！」

「サンダーアロー！」

みんな、示し合わせたように雷の属性の攻撃を放っているけど……  
そんなに仲がよかったの？ 貴方達。

教皇を狙うけど……それを大勢の信徒達が邪魔をして、まったく近づけそうにない。

それを教皇は、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべて眺めている。  
くっ……ナオフミに影響されたのかしら、あの顔見るとものすごくムカついてくるわ……！

こうなったら、私のこの怒りも魔法に乗せて放つしかないわね！

「はあっ！」

「ツヴァイト・アクアショット！」

ラフタリアさんが斬りかかり、リュウガさんが殴り飛ばし、二人の合間を縫うように私が水の弾丸を放つ。

他の勇者の仲間達も、教皇に向けて遠距離からの攻撃を浴びせ続け

る。

「防御は通らないけど……でも、その壁はいつまでも持つわけじゃないでしょう!？」

【フルバレット!】

「どりゃあ!!」

【Ready GO!】

「おらああああ!!」

ドドドドドドドツッ! ズガンッ!

なんて、セントさんとリユウガさんの放った攻撃が教皇を守る壁に炸裂して、轟音と衝撃を撒き散らす。

ビキツ…と、壁の一枚にだけひびが入るけど、すぐに魔力が補充されて、元通りになってしまふ。

もう…! こんなのに、いつまで続けられるのよ!!

「とー!」

すると、フィーロちゃんがものすごい速さで走り出して、教皇に向かって飛び掛かる……つて、だめよフィーロちゃん!

逃げ場のない空中に誘い込まれたフィーロちゃんに、信徒達が放った魔法が迫る……!

「ただど寸前でナオフミの盾が現れ、フィーロちゃんは無事に戻って来られた。」

「フィーロ! 無茶するな!」

「だって…きりがいいんだもん」

悔しそうに呟くフィーロちゃんに、私やナオフミも似たような顔になる。

倒しても倒しても、信徒達は血塗れになって立ち上がる……どれだけ傷付こうと、苦しもうと、まるで何も感じていないみたいに。

「見ているだけで、背中がぞわぞわしてくるくらいだわ…」

「ゾンビかよ…死ぬことをまるで恐れてねえ。ありやあ、オレ達を殺すまで止まんねえぞ」

「くそっ、狂信者共が…!」

人って、こんなふうになるものなの…!?

神様を信じていたら、自分の命もどうでもよくなるぐらいになっちゃうの…!?

私が人間の闇の部分に戦慄していると、ナオフミが何かを思いついたのか、ハッと顔を上げてフイーロちゃんに振り向いた。

「フイーロ！ 元康を俺に向かって投げろ！」

「わかったー！」

微塵も疑う様子を見せず、フイーロちゃんは槍の勇者様の元に向かう。

……え？ 思わずスルーしかけたけど……一体どんな指示を出してるのよ、ナオフミ!?

「え？ はー！ おい何してんだあああああああ!?!」

抗議の声をあげながら、フイーロちゃんに投げ飛ばされた槍の勇者様が宙を舞う。

向かってくる勇者様に、ナオフミは盾を……あの黒い呪われた盾を構えた。

「元康！ 俺に向けて攻撃しろ！」

「ああああああ……あ！ なるほど、そういう事か！」

！ そうだわ、ナオフミのあの盾は、攻撃されると自動的に反撃するもの！

しかも放たれる炎は、相手を呪いで侵す恐ろしく危険な攻撃！

「セルフカースバーニング!!」

ゴウツ!!と、真っ黒な炎が信徒達に襲い掛かる。

炎に包まれた信徒達が悲鳴をあげ、さらに呪いに侵され悶え苦しむ。

今のナオフミが放てる、一番強力な攻撃……これなら、教皇に通じる道も開けるはず……!

だけど、それすらうまくはいかなかった。

「高等集団浄化魔法『聖域』」

信徒達が一斉に魔法を唱え、眩しい光が放たれる。

光は黒い炎にぶつかり、あつと言う間に浄化し、綺麗さっぱり消去ってしまったわ。

そんな……あの攻撃でも、だめだっていうの？

「おい……ラフタリアがああ呪いを解くのにどんだけかかったと思っ  
てんだ…!？」

「くそっ……！　ここまで来て死んでたまるかってのに……！」

どうしよう……どうしたらいいの!？」

攻撃は効かない、今度は防ぎきれない……こんな絶望的な状況、軌  
跡でもなければ突破できそうにないわよ!？」

すると不意に……弓の勇者様が、ナオフミに話しかけてきた。

「尚文さん……手はないのですか？」

「は？」

「本来は不遇なはずの盾でここまで戦えているのです。何か挽回でき  
る秘策を有しているのではないんですか？」

「ああ、確かに……」

「尚文の盾、チートっぽいしな」

「お前ら……！」

チートって……どういう意味よ？

この人達、自分の力が通じないからって、ナオフミに頼るなんて恥  
ずかしくないの……？

すると今度は、槍の勇者様がセントさんに問いかけた。

「セントちゃんはどうなんだ？　君の武器、全部見たことのないやつ  
ばっかりだし」

……それは、私もちよつと思っただかも。

セントさん、正体不明なうえに色々作れるし、この状況を打破でき  
る何かを持つてるかも。

ナオフミも同じだったみたい、振り向いて尋ねていた。

「セント……お前、フイトリアにもらった力で何か作っていたな。今そ  
れは使えるのか？」

「いやあ……ムリだ。こいつはまだ完成してない」

だけどセントさんは、悔しげな表情で首を横に振る。

懐から取り出した……あれは何かしら？　銀色の容れ物みたいな

……変な突起がくつついた機械だわ。

「システムは完璧にできてんだけど……内蔵されたエネルギーを覚醒させる必要があるんだ。だけどそのためには、超強力な衝撃を与える必要があつてだな……」

「強力な衝撃だと……?」

「そんなものどうやって……」

「どうしよう……最後の希望かと思つたけど、これで完全に八方ふさがりになってしまったわ。」

「こんな所で……母上に任された役目も果たせないまま死ぬなんて……!」

「…賭けに出るしかないな」

私が悔しきで俯いていた時、不意にナオフミが呟いた。

賭け……つて言つたの? 何を……するつもりなの?

「覚悟を決めろ……失敗したら、お前ら全員ここで死ぬと思え」

「な、何を勝手なの!? ちゃんと私を守りなさいよ! 盾ならそれぐらいやつて……ぎゅっ!」

「お前、ちよつと、黙れ」

ナオフミの宣告に、騒ぎ始めた姉上をリュウガさんが無理矢理黙らせる。

この人は……どうしてこの状況で、他の誰かを見下す事しか考えられないのかしら。

……あの人のことは、どうでもいいわね。

「悪い、ナオフミ……頼らせてもらうわ」

「お側にいます……!」

「…行くぞ」

……ラフタリアさんは、知っているの? ナオフミが、何をする気なのか。

ナオフミはラフタリアさんに笑いかけると……憤怒の盾を両手で構えて、目を閉じる。

そしてやがて——吼えた。

「オオオオオオオオオオアアアアアアアアアアア!!!」

途端に起こったものすごい咆哮に、私達は思わず耳を手で塞ぎ、後退る。

強風に耐え、薄目を開けて様子を伺うと……ナオフミの姿が、見る見るうちに変化していくのが見えた。

鎧は竜の鱗のように刺々しく、禍々しく。

盾もより大きく、悍ましい形へと変化していく……！

「ナオフミ様……！ ナオフミ様……！」

「ごしゅじんさま……！」

「ナオフミ……！」

「ナオフミ……！」

「ナオフミ……！」

カツと見開かれた目が、赤く血のような光を放つ。

まるで獣のような咆哮を上げて、教皇を……ううん、目に映る全ての者を睨みつける。

これが、憤怒の盾の本当の力なの……!?

「俺は……！ 俺ハ……悪くナイ……！ オレハ……ヤツテナイ……！」

聞こえてきたのは、そんなか細い声だった。

そうか、憤怒の盾の原動力は……怒り。

姉上に裏切られたこと、父上に冤罪をかけられたこと、三勇教に脅かされたこと……この世の全てに、ナオフミは怒っている……！

ものすごい力……だけど、これじゃナオフミが!!

「自分の呪いで滅びることを選びましたか……盾の悪魔らしい哀れな最期ですね……せめて私が、死出の案内を努めましょう！」

鬼のような形相になり、唸り声をあげるナオフミに、教皇が笑う。

彼の頭上で、あの強力な魔法の準備が、再び行われていく……！

だけど……私は、そちに構っている余裕はなかった。

「ナオフミ様……！ 戻ってきてください、ナオフミ様……！」

「ナオフミ……！ しっかりしなさい、ナオフミ……！」

気づけば、私はラフタリアさん達と一緒にナオフミに抱き着いていた。

噴き出す炎に体を焼かれ、激しい痛みに襲われるけど……それくらいで止められたりはしないわ。

だって……！ ナオフミはもつと苦しかったのよ……！？」

「しっかりしろや、ナオフミ！」

「ここが正念場だろうが!!」

セントさんとリュウガさんも、私達と一緒にナオフミの腕にしがみつく。

必死に呼びかけて、揺り動かして、みんなでナオフミを正気に戻そうとがんばり続ける。

だけど、ナオフミは元に戻ってくれない……！

お願いだから、いう事を聞いてよ、バカ……！

「……だいたいしょうぶだよ、ごしゅじんさま」

無我夢中になつていた私の耳に、その声は届いた。

ハツと目を開ければ、私達と同じく、火傷と呪いに侵されたフィーロちゃんの姿が目映る。

「ごしゅじんさまがやさしいことは、フィーロもみんなもちやんと知ってるから……だからね、この黒くてイヤなの、フィーロが食べちゃうね？」

怒りと憎しみの炎に包まれながら……私の初めての友達は、見たことがない優しい笑顔を浮かべていた。

そして、フィーロちゃんがそうナオフミに語り掛けた瞬間。

ナオフミから噴き出していた炎が、フツと消え去った。

「——滅しなさい、悪魔よ」

一塊になつて動かない私達に向け、裁きの光が放たれる。

私達が一步も動かないまま、頭上に目を向け、迫り来る絶望を前に息を呑んだその瞬間。

カツ、とナオフミの眼が正気を取り戻した！

「セントー！ よこせー」

「!? お、おうー」

正気を取り戻したナオフミが、セントさんに手を出す。

一瞬戸惑いの顔を浮かべたセントさんは、すぐにナオフミの意を汲

み、あの機械の容れ物を手渡す。

ナオフミはそれを片手にフイーロちゃんの上に飛び乗り、迫り来る裁きの光に真正面から飛び出した。

「ぐ……うおおおおおおおおお!!」

降り注いだ閃光と、ナオフミが前に突き出した手——セントさんの渡した機械が激突する。

とてつもない衝撃に抗い、びりびりと震えるナオフミの手。

弾き飛ばされるのではないかと思った次の瞬間、防がれていた裁きの光が四散し、辺りに欠片が飛び散った。

そして、ナオフミの手からも機械の容れ物が吹き飛ばされる。

「……あれって……」

それを目で追っていた私は、ふと気づく。

空中に浮い機械の容れ物から、しゅわしゅわと不思議な音が鳴り、徐々に大きくなっていくことに。

そして容れ物が、あつと言う間に赤と青に鮮やかに彩られ出したことに。

「おっ……ととー!」

落下してきたそれをセントさんが慌てて受け止める。

目を見開き、変貌したそれを凝視していたセントさんはやがて……にやり、と不敵な笑みを浮かべた。

「な、何ですかそれは……!」

一体何が起こったのかと、教皇が目を見開き棒立ちになる。

それを放置し、地面に降り立ったフイーロちゃんの背から降りたナオフミもまた、セントさんに不敵に笑いかける。

「これでどうだ……? セント」

「……ああ、上出来だ」

セントさんはそう返し……いつもの得意気な笑みを取り戻すと、教皇に向けて新たに手に入れたそれを。

起死回生の切り札を、見せつけた。

「さあ……実験を始めようか」



## スパークリング

Side: R a p h t a l i a

セントさんの手で輝く、筒状の何か。

セントさんはそれを上下に振り、上部のつまみを立てます。

何か、シユワシユワと泡が弾けるような音が響き、セントさんはそれをベルトに差し込みました。

「ラビットタンクスパークリング！」

聞きなれた声が響くと、セントさんはいつもと同じように、ハンドルをぐるぐると回します。

ですが、ベルトから伸びたのはいつもの管ではなく……もつと大掛かりな、鋼鉄の歯車のような機械です。

前後を歯車に挟まれながら、セントさんは不敵に笑い、叫びました。

「Are you ready?」

「ビルドアップ！」

直後、ガシャン！とセントさんの身体が歯車に挟まれます。

そしてすぐに歯車は青と赤、白の泡となって弾け——その中から、新たな鎧に身を包んだセントさんの姿があらわとなりました。

「シユワつとハジける！ ラビットタンクスパークリング！ イエイイエイ！」

ウサギと戦車を模した、以前のものより刺々しく、ギザギザした鎧。

赤と青の装甲に、白の斑点やギザギザの模様が入り、攻撃的で鮮やかな見た目が変わっています。

まるで、セントさんの力が溢れ出し、噴き出しているような格好です。

「勝利の法則は——決まった」

いつもと同じポーズ……ですが、何故でしょうか。

いつもよりも……セントさんが頼もしく見える気がします。

「姿が変わった……!? いつもものかなり違う……!」

「トゲトゲ〜!」

メルティさんやフィーロも、セントさんの新しい姿の違和感に気付

いたのか、目を瞬かせています。

それは他の勇者様も、冒険者の方々も……そして、教皇も同じようでした。

「つまらないこけおどしを……！ 今度こそ死になさい!!」

教皇は忌々しげに顔を歪め、武器を構えます。

そして標的をナオフミ様からセントさんに変え、眩しく光を纏わせ、勢いよく振り下ろします。

ナオフミ様が必死に耐えた力……！

真正面から受けては、ひとたまりもありません！

「ふんっ!!」

ですが、私の杞憂は大外れでした。

セントさんが振るった右手が、光の一撃を横から弾き、受け流し……あらぬ方向へ逸らしてしまったのです。

想定外の展開に、私達は目を見開きます。

そして……教皇が最も驚愕し、啞然とした顔になっていました。

「何ですって……!?!」

「今度はこつちからだ」

教皇がその声を漏らした瞬間、セントさんが拳を振りかぶります。構えたその手に、赤と青の泡のような光が集束していき、セントさんはそれを、思い切り振り抜きます。

放たれた泡が風を切り、信徒達に炸裂、吹き飛ばしていきました。

「どららららららあ!!」

「ぐああああ!!」

セントさんは止まらず、次々に拳を放ちます。

それに伴い、泡の砲弾が何十発も放たれ、信徒達が恐ろしい勢いで倒されていきます。

私達が啞然としている間に、三人の勇者達とその仲間達が苦戦した人数が、見る見るうちに減っていきました。

「どるりやあああ!!」

「ぐぬあ!?!」

ものの数秒も経たないうちに、セントさんの周りにいた信徒達は、

誰一人立っている者はいなくなりました。

最後の一人が……顎を殴られ、高く高く宙を舞いました。

自分の周りを守っていた信徒達が全滅したことで、キツ……!と、温和だった教皇の顔が憎悪で歪みます。

ここでようやく……この方の本性が見えた気がしました。

「この……!」

「効くかよ、そんなもん!!」

怒りのままに放ったひと振りは、最初と同じく弾かれ、消し飛ばされます。

数と攻撃力、私達よりはるかに優れていた2つが消えた事で、教皇の顔には明確な焦りが現れ始めました。

自分が神であると語っていた方が……冷や汗を流し、目を見開いています。

「……これが」

「セントさんの……新しい力」

「スゲエ……圧倒的じゃねえか!」

たった一人で、戦況を完全にひっくり返してしまったセントさんに、他の勇者様方や冒険者の方も目を剥いて驚いています。

一応戦ってはいますが……完全に、セントさんに持ってかれていきますね。

ナオフミ様だけは……こうなるのを待っていたように、不敵に笑っていらっしやいます。

何故でしょう……セントさんに少し、嫉妬します。

「くっ……この! 悪魔の配下の分際で……!」

「終わりだ、教皇! 今までの借りを返してやる!」

歯を食い縛り、怒りの表情を見せる教皇に、セントさんが勢いよく飛び掛かり、拳を振りかぶります。

そして、強固な一撃が教皇の顔面に炸裂する……と思われた時。

教皇の姿が消え——全く知らない男の方が、顔面をへこまされて吹っ飛ばされました。

「……は? え?!」

セントさんは思わず止まり、困惑の声を上げます。  
私達も突然の事態に戸惑い、立ち尽くすセントさんを凝視してしま  
います。

ですが、異変はそれだけでは終わりませんでした。

私達の視界に……数えきれない人数の教皇が、不気味に笑いながら  
現れたのです。

「教皇が増えた……だと!?」

「これは……ミラージュアロー!? 幻影で相手を惑わせるスキルです  
!」

弓の勇者様が戦慄した声を上げます。

表情から察するに、弓の聖武器でもかなり強力な能力のようですね  
……そんなものまで、あの武器は使えるのですか!?

「私を、あなた方ごときが殺せると本気で思いましたか? 言ったで  
しょう……どれだけ抗おうと無駄なのだ!」

哄笑をあげる教皇は、無数の幻影と共に、一斉に私達に向けて矢を  
放ちます。

実際は、信徒達による魔法や弓の攻撃のようですが……幻覚を見せ  
られている私達からすれば、それも教皇の攻撃に見えます。

「うおっ!!」

「ぐあっ!」

「きやあ!」

その全てを防ぐことはできず、私達は一人二人と、攻撃を受けて膝  
をつき始めました。

勇者様方が、仲間の方を守ろうと奮闘されていますが、多すぎる攻  
撃の前に、全く手が足りていないようです。

「ナオフミ様……あぐっ!」

「ラフタリア!」

肩に矢を受け、倒れ込んだ私に、ナオフミ様が駆け寄ってきます。

リュウガちゃんもフィードも、セントさんもどうにか攻撃を防いで  
いるようですが、徐々に疲弊しているように見えます。

「くそつたれ! このままじゃなぶり殺しだぞ!」

「セント！ 何とかする方法はないのか!?!」

「あつたらもうやつてるよ!」

向かってくる攻撃を防ごうとするナオフミ様ですが、盾が守れるのは一方のみ。どうしても全ては守れません。

このままでは、ナオフミ様も、みんなも…!

その時…突然、セントさんの耳が、ピクツと震えるのが見えました。

「…!?! 誰だ、このヤバそうな気配は…!?!」

「は?」

!?!

まさか、セントさん…: 教皇の他に、まだ敵が!?!

私がそう、どうしようもない絶望を前に、顔から血の気を引かせたときでした。

「アル・ドライファ・アイシクルプリズン!!」

突如、どこからか響き渡った魔法の詠唱。

その直後——不気味に笑いながら矢を放っていた教皇達の足元が、バキバキと分厚い氷に包まれ出しました。

「うぐおおおおおおお!! こ、これは…!?!」

「氷の檻…!?! 一体、誰が…!?!」

「この魔力は…!」

氷に包まれ、教皇の幻影が次々に消えていきます。

残ったのはボロボロになった信徒達で…: 全員が元の姿に戻ると、最後に一人、本物の教皇が残りました。

それを見て、ナオフミ様とセントさんが、ハツと目を見開き、目を見合います。

「ナオフミ！ 今だ！ 強力なやつぶちかますぞ!」

「おお!」

セントさんの合図で、ナオフミ様が憤怒の盾を構えます。

同時に、セントさんが勢いよく駆け出し、教皇に向けて大きく跳躍を行います。

「うおおおおお!!」

「ち、近づくな亜人の化け物め！ この私を誰だと…!!」

自分を見下ろすセントさんに、教皇は我を失ったように、めちやくちやに攻撃を繰り返します。

剣の斬撃、槍の突き、弓の射撃、あらゆる攻撃がセントさんに迫ります。

しかしセントさんは微塵も焦らず、ベルトのハンドルをぐるぐると回しまわります。

「勝利の法則は、決まった！」

【Ready GO!】

いつもの決め台詞を叫ぶと、セントさんのサングラスがカツ！と一際強い光を放ちます。

教皇の前に、渦を凶形化したようなラインが現れ、その中に光の泡を纏ったセントが突っ込んでいきます。

慌てて構えた教皇、その武器に、セントさんの強烈な蹴撃が炸裂し、そして――。

【スパークリングファイニッシュ！】

バキン！と。

教皇が構えていた武器にひびが入り……一瞬で、粉々に砕け散ってしまいました。

「ば、バカな…!?! 神の武器が…こんな、こんなことはあり得ない!!」  
「行け、ナオフミ！」

『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は神の生贄たる絶叫。我が血肉を糧に生み出されし竜の顎により激痛に絶叫しながら生贄と化せ』…! ブラッドサクリファイズ!!」

決定的な隙ができた教皇に、ナオフミ様が最凶の一撃を見舞います。

ナオフミ様の周囲に、悍ましさを感じるオーラが纏わりつき、膨れ上がった――と、思った直後。

ブシュツ！と、ナオフミ様の全身から、夥しい量の血が噴き出しました。

「ナオフミ様！」

「ぐっ…!? が…」

苦悶の声を上げ、ナオフミ様があくりと膝をつきます。

そんな…! ここまで来て、自滅する力を使ってしまったというのですか…!?

教皇は、血塗れになるナオフミ様に嘲笑うような目を向けています。勝手に自滅したとでも思っているんですか…!?

ですが…:教皇の顔もまた、突然変わりました。

撒き散らされたナオフミ様の血…:まるで池のように広がったその中から、巨大な竜の喙が出現し、教皇を呑み込んだからです。

「ぼっ…バカな! 私は、私はこんなところで死ぬはずがない! 私は三勇教皇、神の、神のおお!!」

喙は教皇の全身を挟み、鋭く尖った牙を喰い込ませ、突き立てていきます。

教皇の身体はそれに耐えられず…:めきめきと潰され、牙で貫かれ、壊されていきます。

そしてやがて——竜の喙が、教皇の全身を押し潰し、凄まじい量の鮮血が噴き出しました。

「ぎゃああああああああああ!!」

響き渡る、教皇の断末魔の叫び。

愕然とした表情で固まる信徒達の前で——ぽこりと、血の海の中から、割れた眼鏡が浮かびます。

「きよ、教皇様が…!」

「う、嘘だ…!」

「全軍! 速やかに邪教徒の残党を殲滅しなさい! そして速やかに、盾の勇者様をお救いするのです!!」

もはや立ち上がる気力もない信徒達に、王国の兵士達が向かいます。

抵抗する気力もないのか、然して大きな争いも起こらず、信徒達は続々と捕縛されていきます。

ですが…:私達にとってはどうでもいい事です。

「母上…!」

「メルティ、よく役目を果たしました。あなたのおかげで、この国の膿を一つ、ようやく片付けることができます」

誰かが近づき……メルティさんに話しかけていますが、振り向く気にもなれません。

私達の目の前では……ナオフミ様が。

ナオフミ様が……傷だらけで、虫の息で倒れているのですから……!

「盾の勇者、ナオフミ・イワタニ様……長らく大役を押し付けてしまい、誠に申し訳ありません」

「……女王、か」

「ママ!? なんてそんな奴に頭を下げるのよ!!」

メルティ王女が何か……騒いでいる声や、どこかに引きずられていく音も聞こえますが、そんなものどうでもいいです。

早く……早くどうかしないと。

ナオフミ様が死んでしまいます……!

「すぐに治療を始めます……皆さんのことは、私にらせてください」

「……お、せえ、よ……」

小さく、消え入りそうな声で、ナオフミ様は言葉を発し……ゆつくりと、瞼を閉じてしまいました。

その瞬間、私の胸に、かつてない恐怖が襲い掛かりました。

「ナオフミ!!」

「ナオフミ様!!」

私達の必死の呼びかけに。

ナオフミ様は……答えては、くれませんでした。



## 女王ミレリア

Side:Melly

「んにや…ごしゅじんさま……」

「ナオフミ様あ……ダメれす、きしゆらなんて……」

「フィーロちゃん……おつきーい……」

少しずつ……意識が浮き上がってくるのを感じる。

いい夢を見ている気がして……まだ起きていたくないと思えてくる。

だって、起きたら残酷な現実に向き合わないといけないかもしれないから……。

「何なんだお前らは!? 起きろ起きろ、暑苦しいんだよ!!」

その声に、私の眼は驚くくらい早く冷める。

ガバツと顔を上げてみれば……いつかと同じ、不機嫌そうなナオフミの顔が、そこにあった。

生きてる……!

ちゃんと、ナオフミが生きてる……!

「ナオフミ様!」「ナオフミ!!」

「うえくん! ごしゅじんさま〜!!」

フィーロちゃんが泣きながらナオフミに飛びつき、ぐりぐりと顔を押し付ける。

ラフタリアさんは……先を越されたって感じで固まってるわね。

「すまない……ずいぶん心配をかけたようだな」

「ったく……寝すぎだぜ、英雄様よ」

「起きるのがあんまり遅えもんだから、退屈で涙が出ちまったよ」

そう言つて、やれやれって感じで肩を竦めるセントさんとリュウガさんだけ……顔はあからさまにホツとしてる感じがする。

まったく……! ナオフミってばほんつとやな奴よ!

こんな……こんな私達を心配させたりして……!

「それで……ここは」

「治療院の中だ。大丈夫、もうここには敵はいねえから」

自分がベッドに入っている事に、ナオフミはまだ戸惑っているみたい。

そりゃあそうよね、死ぬ覚悟で戦ってた後に倒れて、目が覚めたら全然知らない所にいるんだもの。

すると不意に、セントさんがくすつと笑い声をあげた。

「笑えたぜ？ ナオフミの治療に文句言おうとしたやつがよ、女王の鶴の一声で一瞬で黙っちまいやんの」

「あれは傑作だったな」

「女王……」

けらけら笑うセントさんとリュウガさん。

二人は楽しそうだけど……私は正直笑えないわ。

あん兄苦しい思いをして、とんでもない悪事を働いていた教皇を倒したのはナオフミなのに……！

やれ、捕まえろだの処刑しろだの、何を考えているのかしら！

「お目覚めになられましたか、盾の勇者ナオフミ・イワタ二様」

そこに、母上の……メルロマロク女王陛下の声が届く。

母上の登場にラフタリアさんやセントさん、リュウガさんがちよつと緊張した様子を見せる。

別に、そんなに構えなくていいのに。

「母上……」

「お前の……てことは、お前が」

「はい。メルロマロク女王、ミレリアⅡQⅡメルロマロクと申します」

私もちよつと嫉妬するぐらい綺麗な所作で、母上はナオフミにお辞儀をする。

ナオフミにとっては……ちゃんと顔を合わせたのは、これが初めてよね。

「治療の手配は、お前がしてくれたと聞いている」

「はい、最善を尽くさせていただきました……しかし、呪いの根は深く、完全な除去までは」

「それはいい……覚悟の上で負ったものだしな」

……ちよつとナオフミ、何でまだちよつとそんなきつい目してるの

よ。

私の母上なんだから疑う必要なんてないわよ、バカ！

母上は気にした様子を見せてないけど……いい加減、その癖は直した方がいいわよ。

「ようやく顔を見られたんだ。話を聞かせてもらおうか？」

…真剣な表情で、ナオフミがそう切り出す。

母上も真剣な目でそれを受け止めて……一からちゃんと、説明を始めた。

——本来、勇者召喚とは各国の王が集まって、召喚する国と順番を決めなければならぬ事。

三勇教が暴走し、勝手に勇者召還を行った事。

本来であれば、ナオフミは亜人の国であるシルトヴェルトに召喚されていた可能性がある事……。

ほとんど説明なんてされなかったナオフミにとっては、衝撃的過ぎる事実が教えられたわ。

「……なるほど、俺は敵陣の真っ只中に召喚されたわけだ」

「しかしこう聞くと、三勇教の連中はイカレた奴しかいなかったんだな」

ぼそつと呟いたセントさんに、私もつい頷いてしまう。

いろんな国を敵に回す行為だものね……母上、他の国を宥めるの凄く頑張ってたのよ。

『我が国の膿を払う役目の最中です』…って、ずっと説き伏せてたのよね。

「……オレにはどうも、利用された感があるんだが」

「否定はいたしません」

「しねえのかよ、してくれよー！」

リュウガさんの呟きにも、母上はきちんと答える。

そう思われても……仕方がないわね。メルロマロクが悪役にされないように、ナオフミの名を利用したんだもの。

ナオフミは厳しい表情だったけど……怒ってはいないみたい。

「別に俺は利用されたとしても気にしない……お前は女王で、守るべきものがたくさんあった。それだけの話だ」

「寛大な配慮、ありがたく頂戴します」

「構わない……むしろ同情している。周りが敵だらけだったのは同じで、俺より重い重圧の中戦ってたんだからな」

「母上は本当に頑張っていたんです……毎日、寝る間もないくらいに」  
本当に……母上は、国のことを一番に想っているの。

母上を悪く思わないでほしいだけ……その一心で、私はナオフミ達にそう告げる。

……って、何よナオフミ。その微妙な表情と視線は。

「…何よ」

「いや、お前が今更敬語で話してるのを見ると、違和感がすごくてな」  
「なっ……！　しょうがないじゃない、母上の前でみつともないとこ見せられないんだもの」

い、いつもと違うところを見せたら、母上が驚いちやうかもしれないじゃない！

それに、こんな気持ちを大きく見せるのは、私らしくないし……こんな姿、母上に見せたら恥ずかしいし！

だけど母上は……なぜだろうか、意味深な目で私とナオフミを見ながら、微笑んでいた。

「いいではありませんか、メルティ」

「母上!？」

「貴方は生真面目すぎるところがありましたから、役目を背負いすぎてはいないか、いつも心配していたのですよ」

「母上!？」

「イワタニ様、どうぞ娘と今後も仲良くしてくださいませ」

「母上え!!」

何!?!　母上は一体私に何を望んでいるの!?!

ラフタリアさん!?!　どうしてそんな戦慄した表情をしているんですか!?!

セントさんもリュウガさんも、にやにや笑いながらひそひそと何を

話しているの!?

フィーロちゃん! ナオフミ! ……は普通ね、よかったわ。

「こつちに引きかえ……あ、悪い。あんたの娘なのに」

「いえ……あの子に関しては、申し開きもありません」

不意に、楽しそうだったセントさんが、うんざりした顔になる。

うん……姉上に関しては、本当にもう、ごめんなさいとしか言えなくなるわ。

本当に血が繋がってるの? ……って、時々母上に尋ねたくなるんだけどね。

聞けないじゃない、そういうの。

「メルティと区別する事なく、時期女王となるための教育は施していたはずでしたが、いつの間にかあのような子に……」

「……ここまでできたからぶっちゃけるけど、親父も何なんだ?」

「子供ができてから腑抜けましてね。あれでも昔は猛将として知られていたのですが……」

母上の話を、ナオフミつてばぜんぜん信じてない。

うん……まあ、私もそんな話を聞かされても、全然想像がつかないってというか、うん。

「猛将って……嘘だろ」

「いや、亜人の国シルトヴェルトに何度も苦渋を飲ませた、とんでもねえ將軍だったって噂だぜ」

セントさんとリュウガさんの囁きに、思わず深く頷きたくなる。

……父上が昔凄かったって、全然そうは思えないのよね。

そこまで話して……場の空気が、少しずつ重くなっていた。

「あの二人、どうすんの。無罪放免なわけないだろ」

「当然でござります……王としての責務を放棄し、国を揺るがす邪教に手を貸していたのですから」

表向きは、平然とした顔でそう告げる母上。

だけど、私にはわかる……母上、辛いのを必死に我慢してる。

「その際には……イワタニ様、貴殿にも立ち会っていただきたく思います」

「……ああ、当たり前だ」

母上の申し出に、ナオフミは鋭い……背筋に寒気が走るような目をして、答える。

「……そろそろ行くか。ナオフミ、精々養生しろよ」

「うっせえ、バカウサギ。…お前も休んでおけよ」

「あいよ。みんなも行くこうぜ」

私が思わず震えていると、セントさんが立ち上がって、私達に退出を促してくれる。

ナオフミの様子が心配だったけど……正直言つて、ありがたかった。

今のナオフミは……一緒にいるのは、恐かったから。

「メルティ、悪いな……オレ達はこれから、むちやくちや残酷な決断を下すかもしれねえ」

「っ……！」

ナオフミの病室を出て、廊下を歩いていた私に、セントさんがそう告げてくる。

セントさんの表情は厳しくて、私に対する申し訳なさと、父上や姉上に対する怒りが混じった複雑なものになっているのが見える。

私は、一瞬ドキツとしたのをどうにか隠して……みんなに、向き直った。

「覚悟は、できています……！」

私は大丈夫だって……誤魔化せていたらいいけど。

## 弾劾裁判

Side : Naofumi

「初めまして、勇者様方。私がこの国の女王、ミレリアⅡQⅡメルロマロクです」

玉座に座った女王が、並び立つ俺を含んだ勇者に向けてそう名乗る。

そこだけ見たら普通なんだが……。

俺達の前で、両手を縛られ、膝をつかされているクズ王とビッチの姿に、どうしても目を奪われてしまっていた。

「ここにいる者は代理の王ですので、こんな格好をしていますけどどうぞお気になさらず」

「お、おお……」

「何か……すごいな」

「ですね……」

三勇者共はドン引きしてる。俺もしてる。

まあ……今回の騒動が大きくなった原因でもあるし、この対応は当然なんだが。

「さて、このたび皆様にお集まりいただいたのは他でもありません……我が夫と娘の罪、それをこの場で裁かせていただくためです」

「罪!?! 罪って言ったのママ! 私がい体何をしたと……!」

「……娘はこの通りですので、罪状を改めてあげさせていただきます」  
思った通り、ビッチがキャンキャン叫んで邪魔をする。

が、女王は全く気にせず、二人のやらかしを一つ一つ上げていく。

まず、他の国をほったらかしにして勇者召還を行った事。

俺一人を迫害したこと。

三勇教を野放しにして、国を混乱させたこと。

あらためて文字にするとんでもねえな、こいつら……。

それで、あれだけの事をやっておいて、ビッチの奴全く悪びれた様子を見せない。そこは逆にすごいと思う。

こいつの思考回路は一体どうなってんだ……女王も流石に呆れて

るぞ。

「——よって、オルトクレイとマルティはこの通り捕縛させていた  
だきました」

「そんなのデタラメだ！ マインはそんな奴じゃない！」

すると案の定、元康の奴が食って掛かる。

お前……ほんつとこれまで何を見てたんだよ、お前の女、思いつき  
り自分の妹殺そうとしてたぞ。

何ならそれをまるで隠そうともしてなかったぞ。

「あんた母親だろう!? どうして自分の娘を信じてやれないんだ！」

「それではもう一人の娘の言葉も、疑わなければなりませんよ」

襲われた被害者ではなく、容疑者の言葉を信じようとしている……

俺の時とは真逆だな、ケツ。

自分の仲間を信じたいんだろうが、相手が性根の腐った輩なら、そ  
の優しさはもう滑稽にしか見えないぞ。

「私はメルロマロク国女王として、国を脅かす者を放置するわけには  
いきません。それが、夫や娘であつても」

非道に聞こえる女王の言葉、為政者としては正しく、母親としては  
残酷な決意だ。

だが……気のせいだろうか。

女王は自分の本心を、必死に内側に隠しているような気がしてなら  
ない。

俺のふとした疑問を他所に……女王は無情に、夫と娘の裁判を続け  
る。

「信じられないようですね。では……本人に確かめてみましょうか。  
マルティ、あなたは盾の勇者様に襲われたのですね？」

「そうよ！ 私、怖くて怖くて——」

泣き顔を見せ、ビッチが女王に叫ぶ。

一瞬見たら、マジで泣いているように見えるけど……一度見た俺から  
すれば、演技つてのがまるわかりな表情だ。

元康はこれに騙されたんだな……と、思った瞬間。

ビッチの胸に魔法陣が浮かび上がり、眩しいくらいに強烈な雷撃が



迸った。

あれは……相当高位の奴隷紋だな。

「ぎゃああああさああああああああ!!」

「嘘をついた報いです。さ、まだ裁判は終わっていませんから、気絶なんてさせませんよ」

その場に倒れ込み、ばたばたと悶え苦しむビツチ。

だが女王はまるで意に介さず、冷めた目で娘を見下ろす……同情はしないが、流石に何も思わないわけじゃない。

あんな母親……俺、絶対嫌だ。

自分の子供に容赦なく雷撃食らわせる親とか、マジで嫌だ。

「あなたは三勇教と結託し、四聖勇者を抹殺し、国家転覆を目論んだ。違いますか?」

「そんな恐ろしいことするはずがないじゃない! 勇者の抹殺なんてこと、奴らが勝手にやったことに決まってるじゃない!」

別の質問をぶつけるが、今度は奴隷紋は反応しなかった。

それを見て、元康がほつとあからさまに安堵した様子を見せる。

「ほ、ほら見ろ! マインがそんな事……」

「言い方を変えましょう。三勇教の陰謀を利用し、自分より王位に近いメルティを亡き者にしようと思いましたね?」

「そんな事……ぎいいいい!!」

今度はキツチリ雷撃が走った。

そうか……こいつが企てたんじゃなくて、勝ち馬に乗って利用しようとしてたんだな。

それで、逆に利用されたと……。

バカだろ、こいつ。

メルティは愕然とした顔になっているが……バカにもほどがあるだろ。

「マ、メルティ……!? それは、本当のことなのか!」

「違う……違うわパパ! 私はそんな事……ぐぎいいいい!!」

クズの方は、ビツチに信じられないものを見る目を向けている。

こっちは……普通に俺だけを抹殺する気だったんだろうな。ビツ

チの陰謀には全く気付いていなかったと。

「こんな男が父親のメルティに、深く同情する……。」

「これでわかったでしょう。この子は生来の嘘つきで、血の繋がった妹でさえ手にかけてやうとする輩、慈悲など必要はありません」

「う、嘘だ！　こんな裁判デタラメだ！」

そう言つて、また元康が口を挟む。

うるせえな……こうやってしつかり証拠を見せてんだろうが。

仕方なく、女王が元康にも奴隷紋で確認させることを提案し、奴は即座に応じる。

それで全く同じ質問をして……また嘘で返され、雷撃が迸った。

「もうこれ、結果見えてるよな」

「裁判の必要、あるんでしようか……？」

セントとラフタリアもざわざわしている。

まあ……ずっとこいつらが自爆して、無様を晒すところを見せられてるだけだからな。

異議あり！　なんて言う奴もここにはいないし。

最初から証拠が全部そろった状態で、公開処刑されてるようなものだ。

「これらの事実をもつて、二人を国家転覆罪の主犯と認定。然るべきのちに、死罪に処す！」

「妻よ！　本気なのか!?!」

「ママ！　あんまりよそんなの！」

「自業自得だということがまだわかりませんか……！」

女王の無慈悲な決定に、クズもビッチも反論する。

特にビッチの縋りつきようがすごかった……髪を振り乱して泣き叫ぶわ、きんきん甲高い声で喚くわ、見つともないにもほどがある。

悪女なら悪女らしく、某女スパイみたく格好だけでもつけとけよ。

「では……此度の騒動、最も被害を被ったイワタ二様に決めていただくのはいかがでしょうか？」

うわっ、巻き込まれた。

女王の奴、この場で俺に采配を譲るのかよ……つて、ビッチの奴必

死に地面を張って、俺の方に近づこうとしてやがる。

「ナ、ナオふみ様！　どうか、復讐など愚かな行いはおやめください！

恨みを抱く続けたところで、何も解決などいたしませんわ！」

は……？

こいつ、今なんつった？

加害者にあるまじき発言が聞こえた気がするんだが……俺の気のせいだよな。そうだよな？

「あなた一人が溜飲を下げればいい話なのです！　盾の勇者様であるナオふみ様なら、きつと正しいご判断ができるはずでしょう!？」

「ええ……」

「うおお……」

気のせいじゃなかった……後でラフタリア達が全員困惑してる声が聞こえてくる。

ラフタリア達だけじゃない、他の勇者も……元康でさえ、ビッチのこの発言に目を白黒させてるぞ。

おい、目は覚めたか？

お前が惚れていた女は、こんなにクズでろくでもない奴だったんだぞ？

……次第に俺の中で、ふつつつと憎悪が再燃し始めた。

命乞いをするべき場で、あろうことか説教じみた戯言を抜かすこの腐った性根……もう、怒りが止まらなくなる。

俺の中で、こいつらに対する処分が決まろうとした、その時だった。

「はい。ちよつとタンマ」

不意に、後ろから拳手と共に、リュウガの声が響く。

ラフタリア達や兵士達の視線を一身に集め、リュウガはオレの方に近づいてくる。

……お前、一体これは何のつもりだ？

「お前、処刑しろって叫ぶつもりだったろ」

「……その何がダメなんだ」

「そんなに連中にとって一番楽な道に決まってるんだろ。苦しみが一瞬で終わるんだから」

む……それは確かに一理ある。

俺がこの何日もの間、汚名と謂れのない差別を受けて苦勞し続けていたのに、最近になつて罪を問われたこいつらの苦しみはすぐに終わる。

それは確かに……考えてみると、何とも腹立たしい事のように思える。

「じゃあ、どうするつて言うんだ？」

「一生苦しむ罰を与えるんだよ。奴隷紋があるし、割と無茶苦茶な命令だつて聞かせられるだろ」

なるほど、こいつが言いたいのは、生きてまま受け続けられる罰を負わせるという事か。

中世的に考えるなら……腕をもぐとか、皮膚を剥ぐとか、目玉をくりぬくとか、結構えぐそうなことか？

それを決行したら、俺の精神の方がイカレそうなんだが……。

……ん？

そうだ……汚名を着せられたんだから、こいつらにも同じことをするというのはどうだろうか？

「……でかしたぞ、リュウガ。お前のおかげでいい案を思いついた」

思わず、にやりと笑みがこぼれてしまう。

そんな俺を見て、ラフタリアは呆れたようにため息をつき、セント達は楽しそうに笑っている姿が見えた。

## クズとビツチ

その日、メルロマロクに一つの通達が行われた。

王都の住民達、各地の村人たちに、兵士の口を通じて放たれたそれは――

「本日より、国王オルトクレイは名をクズ！ 王女マルティはビツチと名を改めることとなった！ 元の名、異なる名を使用した者は、厳罰に処す事をここに通達する！」

……という、何とも言い表しがたい内容で。

人々は皆、通達を行った兵士にぽかんと呆けた顔を見せるのだった。

Side: Filio

「おのれ盾ええええ!!」

「許さないわよこのブサイク!!」

フィーロが大っキライなおじさんと女の人が、ごしゅじんさまに向かってなんか叫んでる。

ものすごくおこってて、がんばってこっちに来ようとしてるけど、

ヨロイをきた人につかまっててぜんぜん動けないみたい。

ごしゅじんさまがつけたお名前、そんなに気にいらなかったのかな？

「汚名を着せたものに、本当の汚名を着せる……いい落とし所だと思えますよ」

「フン、自業自得というものだ」

「お前ら……！ くっ、俺に力がないばかりに！」

弓の人とか、剣の人はうんうんうなずいてるけど、槍の人だけなんかくやしそう。

ラフタリアお姉ちゃんも、ギャーギャー叫んでるおじさんたちを見て、すっごくいくしゃってなった顔してる。

顔に手をあてて、どうしたんだろう？

「ああ、もう……またナオフミ様の悪名が重なって……ってまた胴上げ

ですか!？」

「「イヤッホゥ!!」」

「きゃああ何で私が!？」

「ごしゅじんさまと、セントお姉ちゃんトリユウガちゃん。

みんなで一緒に、メルちゃんをもちあげてわっしょわっしょいって  
放り上げる!

メルちゃんは楽しくない?

フィーロ、前にやってもらってすっごい面白かったんだよ!

「下ろして! 下ろしてっば! 怖い! 下着が見えちゃう!」

「祝杯じゃ〜! 今夜は飲めや歌えのお祭りじゃああ!!」

「ひゃっは——!!」

「お祭り〜!? わーい!」

「お願いだから止めて〜!!」

「ごしゅじんさまたちはうれしそうだけど、メルちゃんはちよつとつ  
らそう。

きてる服のはしっこをおさえて、大きなこえでさげんでる。

「皆さん! いい加減にしてください、メルテイさんが半泣きになっ  
ていますよー!」

「うっし、じゃあここまでだな」

「またなんかあつたらやろうぜ!」

「イヤよ!」

ラフタリアお姉ちゃんにおこられちゃったから、みんなでメルちゃ  
んを下におろす。

こんどはフィーロが上になりたいな。

フィーロとべないから、あれやってたらとんでる気持ちになって楽  
しいんだよ!

…でもメルちゃんは違つたみたい。

「はあ……はあ……怖かつたわ」

「すみません、メルテイさん……ナオフミ様達が」

「いいわ……いいのよ。あんなにはしゃいでるナオフミ、初めて見たし」  
メルちゃん、よく見たらちよつと泣いてる……そんなに嫌だったの

かな。

フィーロ、メルちゃんに楽しんでほしかっただけなんだけどな。

「フィーロちゃん……ナオフミのあれは真似しなくていいからね？」

「えー？ でも楽しいよ？」

「楽しくても！ ……嬉しいのはわかるけど」

むー、メルちゃんがそういうなら、やめとく。

ごめんねメルちゃん。

メルちゃんと話してたら、むらさきの髪の女の人……えっと、メルちゃんのお母さん？ がやってきた。

「ふふ、歓迎されているようで安心しました……勇者様、我が娘をよろしく願いますわ」

「もう！ やめてください母上!!」

「むっ!! まさか妻よ！ いかん！ いかんぞ！ そいつだけは許さんぞ!!」

メルちゃんのお母さんは楽しそうだけど、メルちゃんははずかしそうにしてて、おじさんはものすごくおこってる。

何のはなししてるんだろ？ ふいーろ、よくわかんない。

「しかし、やたら娘との仲を押すな、あの女王」

「多分だけど……政治的な思考があると思う」

「というっ？」

セントお姉ちゃんは、何かしってるのかな？

リュウガお姉ちゃんに何かおしえてるみたいだし、フィーロにもおしえて！

「シルトヴェルトの連中にとつちや、ナオフミは神様だ……じゃあその神様が敵国のやつらと仲良くしてたら？」

「あー……うかつに手が出せない？」

「そ、そんで今後の争いを抑え込もうとしてんだらうよ」

……きいてもわかんなかった。

ごしゅじんさまとメルちゃんがなかよくすると、何かあるの？

あれ？ ラフタリアお姉ちゃん、なんでそんなにフラフラしてるの？

お顔もまつさおになつてるよ？

「頑張れよ、ラフタリアちゃん。側室の座は譲ってもらえるかもしれないぜ？」

「どうしてメルティさんが本室であることが確定してるんですか！」

「いや、だって母親ぐるみだし、女王が相手だし」

「私に救いはないんですか!？」

「あるといいね〜」

とうとうラフタリアお姉ちゃん、あたまをかかえてがくってひざをついちゃった。

セントお姉ちゃんもリュウガちゃんも、何かにやにやしてるし……ムー、フィーロだけおいてけぼりにしないでよ！

「さて……勇者様方、此度の一件を鎮めてくださったお礼として、ささやかながら宴の席を設けました。どうぞごゆるりとおくつろぎください」

「そうさせていただきます」

「ああ、今回はかなり疲れたからな……ありがたく使わせてもらおう」  
そう言つて、弓の人と剣の人は、お城の人と一緒にどっかにいっちゃった。

槍の人だけ、つかまつてる女の人をちらちら見てる。

むー！ フィーロのことはチラチラみるな！

ラフタリアお姉ちゃんのことともみてるけど……ごしゅじんさまだけにはらんでる。

槍の人、やつぱりキライ！

「マ、マイン……！」

「キタムラ様？ いけませんよ、先ほど伝えた決定をお忘れなく……」  
「うっ……」

メルちゃんのお母さんになんかいわれて、うめいてる槍の人。

女の人は槍の人を、すっごいつらそうなお顔をしてみつめてる。槍の人もじっとみてる。

「お、俺は必ず……君を助けてみせるからな、マ——ア、アバズレ!!」  
「……!!」



槍の人がそういうと、女の人の顔がみるみる赤くなった。

恥ずかしかつてるのかな、怒ってるのかな？

よくわかんないけど……ごしゅじんさまもリュウガちゃんも、セントお姉ちゃんもそれを見てすっごいわらってた。

「クク、ククク……！ 何度でも礼を言うぞ、リュウガ」

「お褒めに預かり光栄至極……ブフツ」

うれしいのがガマンできないみたいで、ごしゅじんさまはなんどもふき出してる。

お姉ちゃんもメルちゃんも、それをみて呆れてた。

何がおかしいんだろう……でも、ごしゅじんさまが笑ってるから、いいや！

## ずっと友達で

S i d e : N a o f u m i

国王とメルティ王女改め……クズとビツチの元を後にし、俺達は王城内を歩く。

ずっと自分の中にくすぶっていた何か、少しばかり発散されて、俺は久しぶりに爽快な気分になっていた。

……もし、あのまま二人を処刑する事になっていたら、こうはいかなかっただろう。

確実に……後悔が残っていた気がする。

「さあして、ようやく肩の荷が降りたな」

「つつかれた……」

首や肩をゴキゴキと鳴らし、寛いだ声を上げるセントとリュウガ。ラフタリアは声にこそ出さないが、同じくかなり疲れている様子を感じさせる。

治療を受けた後とは言え……精神的な疲労はまだ回復していないだろうしな。

冤罪で国中を逃げ回っていたわけだし、こいつらにはきちんと、十分な休息を取らせてやりたいな。

「メルちゃん！ フィーロね、お城のなか見たのはじめてなの！ 一緒にたんけんしよー！」

「あ……フィーロちゃん」

俺達とは打って変わって、元気なのはフィーロだ。

逃亡生活における我慢から解放されたせいか、キラキラと目を輝かせながらメルティの手を引く。

しかしメルティは……その誘いに、表情を曇らせた。

……時間切れ、つてところか。

これまでは常に一緒にいなければならなかったが……もう、その必要はない。

いや、一緒にいられる時間は……終わってしまったんだ。

「フィーロ、メルティとはここで一旦お別れだ」

「え……？」

「王女様だからなあ……今まで通り一緒に冒険ってわけにはいかねえんだよ」

俺が言うと、フィーロは困惑で固まる。

続いてセントが、無茶苦茶渋い、言い辛そうな顔で説明を引き継いでくれる。

…悪いな、セント。付き合わせて。

「おわかれ……!? や……やだ！ フィーロ、エルちゃんとずっと一緒にいいー！」

「そりや気持ちはわかるがなあ……」

「フィーロ……あまりわがママを言っっては、メルティさんを困らせてしまいます」

意味をようやく理解し、納得ができない様子のフィーロがいよいよと首を横に振る。

リュウガやラフタリアが説得するが……受け入れられないみたいだ。

考えてみれば、生まれてまだ数カ月しかたっていないフィーロにとっちゃ、友達との別れは辛さが強いんだろう。

「俺達には俺達の、メルティにはメルティのいるべき場所ってのがあ………そいつは、ただ一緒にいたいって想いだけじゃどうにもできねえんだよ」

「む……」

リュウガの割と容赦のない言葉に、フィーロは俯き、顔をくしゃくしゃにする。

目には涙がたまり、今にも爆発しそうなほどになっている。

どうしようもないって事を……どうしても受け入れたくないんだな。

「メルちゃん……もう一緒にいられないの？」

縦るように、フィーロがメルティに問いかける。

ふるふると震え、見つめてくる親友の前に……メルティは、同じく目に涙を溜めながら、首を横に振った。

「……ううん、そんなことはないわ。私は、私にできる事をしに行くの。それは、フィーロちゃんとの先もずっと一緒にいられるようにするためのなの」

「ほんとう……？」

「ええ、いつかまた、一緒に遊べるようになるために……私は、頑張りたいの」

メルティのその言葉に安堵したのか、フィーロは引き結んでいた口元を笑みに変える。

涙がこぼれ、鼻も赤くなっているが、それでもメルティの言葉が嬉しいのか、差し出されたメルティの手をきつく握り返す。

「じゃあ、約束だよ？ フィーロ、また一緒にあそびたい！」

「ええ……また、いつかまた一緒にね！」

二人で泣きながら、再会を約束し合う。

その姿を眺め……ラフタリアも目を潤ませて、セントはけらけらと肩を揺らし、リュウガは通路の端っことで号泣していた。

……二人を見て、俺は決めた。

俺がいつか元の世界に帰る時……フィーロのことは、メルティに託そうと。

平和になった世界で、こいつらがいつまでも笑っていられるように……俺は、戦い続けよう。

そう……心に決めたんだ。

To Be Continued…

## 第五章 鍛錬&バカンス 慰労会

Side:Sentto

オレの前には今、豪勢な料理が並んだテーブルがいくつも置かれている。

なんか……懐かしいな。前にここに来た時は、居心地は悪かったし、途中で槍の勇者のやつが決闘騒ぎなんて起こすし、満足に食えもしなかったしな。

……まあ、そのおかげでナオフミと絆を深められたわけだけでも。その後もいろいろあった。

ナオフミの冤罪を晴らしたり、バカ女とクソ王にきつちり仕返ししたり、もうマジでいろいろあったわけだ。

「ひゃー、やっぱすっげえ豪勢な宴。前の波の後のやつもだが、国が主催する催しは金かかってんなー」

この間のは、あのクソ王が主催だったよな。

今回は女王が開いてて……ああ、なんか違和感があるって思ったから、ちよいちよい亜人の冒険者が混じってんだな。

ふーむ、ほんとにあの女王様、亜人に歩み寄ろうとしてんだなあ……お、噂してたらちようど本人が来やがった。

「今回の騒動を鎮めてくださった皆様へのささやかな慰労です。どうぞゆるりと、戦いの疲れを癒してくださいませ」

「ああ、そうさせてもらう」

「ご厚意に甘えさせてもらいまーす」

女王に言われるよりも前に、リュウガとフィーロちゃんは料理の山に飛びかかった。

おお、あんだだけ乗ってたのがみるみる消えていく。どんだけ腹減ってたんだ……ってか、マジでよく食うな、お前ら!!

「ねえごしゅじんさま、メルちゃんはどこかな?」

「どっかで貴族達のご機嫌取りでもしてるんじゃないかねえか。また後で会

う時間もできるだろう、それまで飯でも食って待ってけ」

「うん、わかったー!」

ナオフミに聞いてきたフィーロちゃんは、そのまま料理を平らげるのに戻る。

今日までいろいろあつたもんな。ちゃんと食えなかつた分、たらく食つとけばいいよ。幸いビュツフェっぽい感じだから量は大したもんだし。

……そっちはべつにいいんだけどよ、おい。

「……逆にお前は遠慮つてもんを覚えろ」

「腹減つてんだよ! 次の戦いに備えてたらふく食つとかねえと体もたねえだろうが!」

「リュウガさん、女の子なんですからもつと外聞を気にしてください!」

「見た目気にして強くなれるか! 次持つてこい次!」

口の周りを汚しまくつたりリュウガの奴は、ラフタリアちゃんの制止も聞かず、料理を食う口も手も止めない。

ナオフミも呆れてんぞ……女王も。

なんかラフタリアちゃん、お母さんみたいに口元ハンカチで拭ってるし。

しっかし、あのちっこい体のどこに入つてんだらうな。

……若干、乳がでかくなってる気配を感じるような、気のせいかな?

「……こいつも急成長したりすんのかね」

「アオタツはクラスアップが40から可能で、レベル限界が60だからな。体が成長するにはもうちよい必要なんだろ」

ナオフミがやや引いた目で呟いてるのに、オレもだいたいおんなじ気持ちになる。っーかまだ食ってるし、こいつ。

……うーん。

こいつのレベル的に、60に行くまでもうちよつとぼいんだよな。

もうじきあの島でアレが起こるし、女王に頼んで連れてってもらえば、すぐにクラスアップにも行けそうだな。

「イワタニ様、少しお時間をよろしいでしょうか?」

「何だ？」

「前回の波で、決して少なくない数の犠牲者が出ました……なのでその反省を踏まえ、勇者様方にはお互い情報交換をする場を儲けさせていただきたく思っております」

女王がそんなことを頼んでくる。要は反省会って奴だろ？  
情報交換か……オレも結構気になってることが何個かあるんだよな。

ナオフミの盾は結構調べ尽くしたと思ってるし、他の勇者の聖なる武器もいろいろ調べておきたいし……ああ、やばいヨダレが。

「……たしかに、俺もあいつらも力が足りなさすぎる。向こうの知識が食い違ってることもあったしな……」

……確かにな。

そういや、あのグラスとバットローグとかいう奴らが出てくる前、ソウルイーターを倒すのに揉めてたしな。こうするのが正攻法だのなんだのって。

自分の知識が正しいって、どいつも覚えてるような……いや、思い込んでるようなそんな感じだった。

まあ、そこらへんはナオフミに聞いてきて貰えば……って、あれ？

ナオフミさん？　なんでオレの方見てんの？

「行ってくる。セント、お前も来い」

「え!?　何でオレも!?!」

「どうせあいつら、お前のことで知りたがってることがたくさんあるだろうしな……ごねる前に連れてつとこうと思っただ」

「あー……うん、そうか。そうだな」

ごねそうだなあ……最悪よこせとか言ってきたもおかしくないよなあ。

オレ、自分で言うのはなんだけど、記憶喪失なんていうなかなか怪しい経歴だからな……そこらへん絶対突かれそうだな。

しゃーねえ、文句言われんのは多少覚悟していくか。

「つーわけだから、また後でな。リュウガ、フィーロちゃん、たくさん食べておくんだぞ」

「はいー！」

「どうぞ、お気をつけて」

「お袋か、お前は」

ラフタリアちゃんは心配そうにしてくれて、フィーロちゃんは元気よく返事をしてくれるけど、リュウガはボソツとツツコミを入れてくるだけ。

このやろう……あとで覚えてろよ。



## 勇者会議

S i d e : M i l l e l i a

「それで……僕達をここへ集めた理由は、一体なんなのですか？」

円卓の席に座っていたいただきました勇者様方のうち、弓の勇者様ことイツキ・カワスミ様が最初にそう質問されました。

他の勇者様方も似たような表情をされており、時間を惜しんでおられる様子が感じられますね。

長引いて機嫌を損ねられても困りますし、端的に説明足しましょうか。

「実は、近々メルロマロク領内に存在するカルミラ島にて、近々活性化が起こるとの情報……」

「本当か！」

「やっつとですか！」

やはり、イワタニ様を除く勇者様方は、この世界の常識にかなり精通しておられる様子……話が早くて助かりますね。

「なんだ、活性化って」

「カルミラ島って特殊な島で、ある一定期間に修行すつとな？ 得られる経験値が爆上がりすんだって。そんでその期間中に、冒険者とかが大幅レベルアップを狙って集まんの」

「ほほお……」

イワタニ様の方でも、お付きのセント様が説明してくださっていますし、このまま話を進めてもよろしいでしょう。

……もつとも、これから始める会談がスムーズに進むとも思えません。

「そちらで勇者様方には、さらなる強化を凶っていただきたいのですが……その前に勇者様方同士で、それぞれの強化方法について情報交換などを行なっていただければと」

「……情報交換って言われてもな」

「俺達は自分が強くなる方法なんて、だいたい全部知ってるからな」

思った通り、困惑している……と見せかけて、お互いに手の内を晒

し合う事を忌避しているようですね。

勇者は世界を救う存在であって、勇者様同士で争われても困るの  
すが。

……いえ、この方々を喚んだのは我が愚かな夫の独断でしたね。

「お前らはな。だが俺はこの世界について……お前らが遊んでいた  
ゲームについて全く知らない。必要最低限は教えてもらわなければ  
困る」

「……尚文さんが苦勞をしてきたのはわかっています」

イワタ二様がそう始めると、カワスミ様が少しだけ同情の眼差しを  
向けて答えます。

……ですがなんでしょう、かなり鋭い目でイワタ二様を睨んでいらつ  
しやるような。

「色々話し合う必要があるのは確かですが……まずはつきりさせてお  
かなければならないことがあります」

「そうだな」

「たしかに……あるよな、尚文。いや、この場合はセントちゃんか」

おや、どうやらカワスミ様だけではなく、他の勇者様方も同じ目を  
向けていらつしやいますね。

これは……敵意は感じられませんが、なんとなく、有無を言わさな  
い雰囲気を感じられます。

セント様にどのような質問があるのでしようか。

「あの鎧を僕らが使う事は可能なのでしようか……!?」

「ああ、そうだ！ 教えろ！ いや、教えてください！」

「使わせてくれ、頼む！ この通りだ!!」

……何やら勇者様方が興奮しておられるようですが、はて。

確かに不思議なアイテムであることは確かですが、どうしてこうも  
荒ぶられるのでしょうか？

よく見たら、イワタ二様も真剣な目をしておられるような？

「……お前らがあれを欲しがるのはわかる。というか俺だってアレは使  
いたいぐらいだ」

「だよな！ ……ん？ って事はお前、使った事ないのか？」

「ああ、こいつとリュウガの分しかなかったからな」

「増やさないのですか？」

「俺も最初はそう考えてたんだが、セントが渋ってな……まあ、理由は納得できるが」

：確かに、報告にあったセント様の不思議な鎧については、私も気になっておりました。

世界中のどこを探しても見当たらないような……四聖武器とどこか似た能力を持った道具と、それを使って繰り出される力。

色々と気になるところはありますが、兵達に備えさせればかなり安心できそうですね。

本人にその気があるのなら、ですが。

「ほら……：教皇の件とかあんじゃん？ あの爺さんが持ってた武器は、過去に勇者以外の誰かが波に対抗するために作ったモンだ。けどそれを、悪人が使っちゃった」

そう、教会で長年封印されてきたアレが、身勝手な信者の手によって此度、勇者様方に向けられてしまった。

私達の落ち度ですが……それが再発するかもしれないとなると、頭が痛くなります。

「オレの作る装備は、ぶっちゃけある程度体ができてりや誰でも強くなっちまえるモンだからさ……それをもし、敵が手に入れちゃったときのリスクが怖い」

「まあ……たしかに」

「あんなのが今後も現れて、強力な武器を使ってくるとなると、考えものですね」

カワスミ様もアマキ様も、どうやら納得されたご様子。

ただ、物欲しそうな視線から、名残惜しそうな視線へ変わっただけのようにすが。

「そもそもどうしてあんなものを作れるのですか？」

「悪い……オレはどうも記憶喪失みたいだよ。昔に何があったかとか、何者なのかとか、本当の名前とかも全部忘れちゃってるみたいなんだ」

「ここも、影からの報告にあつた通りですね。」

名前も出身地も年齢も、性別以外の何もかもが不明の謎の人物。

一度、イワタニ様から引き離すべきかとも考えましたが……一応、監視だけに留めました。」

「…セントがお前の名前じゃないのか?」

「んにゃ、それはごく最近つけてもらった名前。呼ぶ時に不便だつて言われてさ」

イワタニ様もその事は知らなかったのか、意外そうな表情でセント様を凝視されています。

反対に他の勇者様方は……とてつもなく怪しいものを見る目をしておりますが。

「記憶喪失……尚文さんはよくそばに置いてますね」

「出会った当初はそう思ったが……今となっては全く気にならん。こいつに俺を騙したり陥れたりするような悪知恵が働くとは思えなくてな」

「……あー」

「もしもし弓の勇者様? あーって何!? あーって!!」

……セント様には言えませんが、私も少し納得してしまいそうでした。

もしこれが演技なのだとしたら大変に危険な人物なのですが、まずそんな人間ではないのだろうな、という安心感といえますか無害な印象といえますか。

「まあ、とにかくこれで男子の夢……じゃなくて手っ取り早い強化は叶わなくなつたわけか」

「したかつたのになー、変身……戦闘スーツなんてウエポンコピーできそうにないもんな」

何やら頬を染めたアマキ様が、咳ばらいをしながら話を続けます。

反対にキタムラ様は、セント様の謎の道具に名残り惜しさをあらわにしていらつしやいますね。

殿方の琴線に、あれはそんなにも触れるのでしょうか。

おっと、先程のキタムラ様の発言に、イワタニ様が訝し気な視線を

向けておりますね。

「ウエポンコピーってのは何だ？」

「あ？ ああ、そういう基本的なところから知らないんだっけか。しようがない、元康お兄さんが教えてしんぜよう」

「何だその年上風は……」

呆れるイワタニ様を他所に、キタムラ様が説明なさいます。

ほう……自分が持つ聖武器と同系統の武器に触れる事で、その形と能力を聖武器にコピーさせる事ができると。

そんな能力が……というか、それも既に皆様知っておられたのですか。

「ウエポンコピー……なるほど」

すると、セント様がおもむろに立ち上がり、懐から例の道具を取り出し、腰に巻き付けます。

そしてあと二つ、水色と黄緑色の小瓶のようなもの——本人曰く、フルボトルと呼ぶアイテムを取り出します。

「弓の勇者、コレってコピーできんのか？」

【定刻の反逆者！ 海賊レッシャー！ イエイ！】

堰から離れたセント様が、道具に付いたハンドルを回し、鎧を生み出して身に纏います。

あの謎の声といい台詞といい、この方はどうも不思議なセンスをお持ちのようですね……いえ、注目すべき問題はそこではないのですが。

「……やっぱり羨ましい。量産の件は是非考えていただきたいですね」

「それは置いといて。こっちだこっち」

【海賊ハッシャー！】

羨望の眼差しを送るカワスマミ様に、セント様は手の上で作り出した弓……？を渡します。

カワスマミ様はそれを受け取り、何やら集中する素振りを見せ……弓の聖武器の形状が変わりました。

「おお……これはなかなか優秀な装備ですね、固有スキルがついている

とは。おもちゃっぽい外見を無視すれば、かなり使えそうです」

「……本当にコピーした」

感嘆の声を上げるカワスミ様を見つめ、言葉をなくしております。私も実際に聖武器の力を目の当たりにして驚いておりますが……勇者様方の注目は、セント様の武器に向いておりますね。

「……俺が使えそうなものはあるか」

「ちよつと待つてねー」

【忍びのエンターテイナー！ ニンニンコミック！ イエイ！】

アマキ様が問うと、セント様はフルボトルを別のものに換え、またハンドルを回されます。

あれは……以前、影に返却させたものはず。

影が言うには、何の前触れもなく変化したため、理由はわからないままだとか……調べてみる必要がありますね。

私が考えている間にも、セント様はアマキ様に短刀を——刀身に絵が描かれた奇妙な武器を手渡してらっしゃいます。

「ほう、この能力はなかなか……ふん、悪くないな」

「セントちゃん！ 俺は!? 俺にはなんかないの!?!」

「悪い。槍っぽい武器はまだ作ってねえんだわ」

「うそ——ん!?!」

キタムラ様が期待の眼差しを向けておられますが、セント様は申し訳なさそうに頭を下げます。そんなに落ち込むような事なのですか？

「まあ安心しろよ。ナオフミも持ってないから」

「よかった！ 仲間がいた！」

「黙れ!!」

「まあ、とにかくこれやるからさ、ナオフミに色々教えてやって欲しいのよ。それとあと……わだかまりをできるだけでいいから、解消してほしい。頼むよ」

「……それ、渡す前に言う事では？」

ご自分で作られた武器を手渡し、深々と頭を下げるセント様。

本当ならこんな事をしていただかなくても、勇者様方にはぶつかる

事なく話し合っていたたくつもりだったのですが……。

すると、勇者様方もセントさんの真摯な対応にはつが悪くなった様子です。

「まあ、いいんじゃないか？ セントちゃんもこうして頭下げてんだしよ」

「ふん、別に断る気はない」

「ええ、尚文さんには色々と助けられたこともありましたし、今回の件も合わせて借りを返すとしましよう」

どうやら、波乱になると思われた会談も、セント様のおかげで有意義に終えられそうですね。

どうなることかと思いましたが、これで安心して、波に意識を集中する事ができそうです。

……そんな私の考えは、どうやら少し浅はかだったようです。

## 道は険しく

Side:Naofumi

「ですから！ 武器のレアリティが重要だと言っているでしょうが！」

「何を言っている！ 熟練度の高さがものを言うんだ！」

「だーかーらー！ ステータスの高さや強化精錬が一番大事なんだって！」

気難しいこいつらをセントが説き伏せて、やっと話し合いが始まると思っただら……このざまだ。

どいつも他の奴が語る強化方法が間違ってるとか何とか言っていて、情報交換なんてあったもんじゃなくなっている。

何だこいつら、この世界についてゲームで知ってるんじゃないのか？

そういえば、最初にこいつらが言ってたゲームのタイトル、全部違う、俺の知らないやつばかりだったな……どうなってるんだ？

「女王、こいつらの話は誰が正しいんだ？」

「申し訳ありません……聖なる武器をどのように強化するかは、勇者様方本人でなければ詳しくは。文献がほとんど残っておりませんので」

女王に聞いてみるが、肯定的な返事は返ってこない。

くそっ……これじゃ何のための話し合いなんだよ。余計勇者同士の仲が険悪になるだけじゃないか！

「おいおい、落ち着けよ！ 教える側のお前らに揉められたら、オレ達どうしたらいいのかわかんねえじゃねえか！」

セントが止めるが、頭に血が上った奴らは全く取り合わない。

自分の考えだけが正しいというように、侃侃諤諤と騒ぎまくるだけになっている……ってか、うるせえんだよ全員!!

俺の怒りが限界に達しかけた、その時だった。

「大変です！ 勇者様方のお連れの方々が！」

ああ、もう！



次から次へと厄介毎が降ってきやがって！

☒

「もういつペン言ってみろゴルア!!」

「何度でも言ってくれろ！ 卑しい盾の手下どもは即刻イツキ様の前から立ち去れ!!」

「下品なのはあなたの方じゃないですか!？」

「薄汚い亜人に言われたくはないわね!」

「あわわわわわわ……」

俺達が慰労会の会場に戻ると、そんな怒号があちこちから聞こえてくる。

中心になっているのは……リユウガとラフタリアか？ あいつらに……ビッチと樹の所にいた鎧を着た奴が絡んでいるのか。

もう……話を聞くまでもなく面倒な連中に絡まれているとわかるな。

「何だこの騒ぎは……」

「あつ、ごしゅじんさま！ あのね、お姉ちゃんたちが槍の人と一緒にいるお姉ちゃんとかとね！ ケンカしはじめちゃったの」

緑の髪の毛、何か気弱そうな奴と一緒に抱き合っていたフィーロが、俺を見て駆け寄ってきて説明をする。

ラフタリアもリユウガも、理由なく他人にちよつかいをかけるような奴じゃない。

おそらく……というか間違いなく、ビッチとあの鎧がくだらない因縁でもふっかけてきたんだらう。というかそんな台詞がすでに聞こえてきているからな。

「おい、リユウガ!」

「だってよお……!」

「ラフタリア、お前も落ち着け」

「ですが……!」

セントと一緒に止めに入ったが、二人とも不満そうだ。

ただ腹の立つことを言われたんだ。こいつらが……リユウガはともかく、ラフタリアがここまで怒るって、相当だぞ。

「卑しい亜人め、見てるだけで気分が悪くなるわ！」

俺がラフタリア達を宥めていると、鎧の奴が聞いてもいないような罵詈雑言を放ってくる。

何だこいつ、偉そうにふんぞり返りやがって……樹はよくこんな奴と一緒に旅ができるな。まあ……樹の前じゃ猫を被ってるんだろっけだよ。

「盾なんかと一緒に戦うなんて吐き気がするわ！　こんな奴に媚びれるメルティは、なんて卑しい精神をしてるのかしら！」

「んだとてめえゴルア!!」

「ぶち殺すぞクソアマあ!!」

「メルちゃんが悪口言うなー!!」

おい、セント。お前まで何暴走してんだ。止める側だろうが、お前は。

ああ、もうダメだ……フィーロも一緒になって罵り合いがヒートアップしてやがる。

つーかこのビッチ！　俺の冤罪事件といい、元康を色仕掛けで操ってたことといい、今回の事といい、どんだけ勇者同士の輪を邪魔すりや気が済むんだよ!!

「黙りなさい」

「ぎゃあああああああああああああ!!」

あ、女王が奴隷紋を操ってビッチに電流を走らせた。

相変わらず、女っぽくないすげえ悲鳴をあげてたな……まあ、こっちはその方がスツとするからいいけど。

ってか、これを何度も食らっただけでどうして反省しないんだろっな、こいつは。

「マッ……ア、アバズレ！　大丈夫か!？」

「モトヤス様あ……!」

「槍の勇者様、甘やかされては困ります。先ほどの言動を見ただしよっう、イワタ二様に命を救われておきながらあの始末……反省の色がない者に優しくされては示しがつきません」

ビッチに駆け寄って、抱き寄せる元康だけど、女王のいう事に反論

できないのか悔しそうに目を逸らしている。

「そうだぞ、お前は甘えられていい気になっていたから気付かなかつたんだろが、そいつの本性最悪だぞ。早く気づけ。」

「じゃなきや、お前もいつか俺みたいに利用価値がなくなった途端に捨てられるぞ！ ……なんか腹立ってきたな。」

「マルドさん、あなたもですよ。僕達は今後、協力して波に立ち向かわなければならぬんですから」

「ですが…！ あ、いえ……申し訳ありません」

鎧の奴も、全然反省している様子を見せていない。

「…樹の態度がときどきでかく感じるのって、こいつが傍にいるからじゃないだろうな。面子替えた方がいいんじゃないのか？」

「すみませんでした、尚文さん。あまり長居しても空気が悪くなりそうなので、僕達はここで失礼します」

「そうか、まあ、気をつけろよ」

「…俺達も帰る。次はカルミラ島で会おう」

「ご、ごめんなフィーロちゃん」

これ以上話しても無駄……っていうか、相手が信じられないからって感じで、勇者共はそろそろ仲間を連れて出て行ってしまった。

「おいおい、ナミに備えて戦力を強化するための集まりだったのに、さっそく暗礁に乗り上げたじゃないか。」

「…前途多難だな、マジで」

「頭が痛くならあ」

セントの呟きに、心の底から同意する。

「再出発だつてのに、どこもかしこもこんな調子で、大丈夫なのか

……？

⊗

「すみません、ナオフミ様……」

「オレも止まれなかった。悪い……」

与えられた部屋に戻ると、ラフタリアとリュウガが頭を下げて謝ってきた。

まあ、タイミング的に自分達が騒ぎを起こしたせいで勇者同士の話

し合いが中断させられた、みたいな感じだったからな。

「あれは向こうに原因がある。気にするな」

「……悪い」

「どうしてこう、どいつもこいつも人の話を聞かないのか。世界の危機なんだぞ……？」

ビッチにあの鎧、言う事がそれぞれで異なる勇者共。互いが互いを疑って、憎んで、話し合うどころか近くににいる事も疎んでいる。

二人とも、これでは突っかかってもおかしくない相手だ、と本気で同情する。

……俺も、教えられた強化方法がうまくいかずに頭を抱えているところだけだよ。

「今悩んでも仕方がねえ、今日はもう寝ちまおうぜ。ナオフミもあんまり気に病むなよ」

「ああ、わかってる」

わざわざ変身までして、武器を渡して、ウエポンコピーを実演してみせたセントがそう言う。

……そういえば、あそこまでやってもらっておいて、何故俺はウエポンコピーの項目を見つけられなかったんだろうか。

「フイローはどうしてる？」

「メルティと一緒に寝てる。あいつらは仲良しでいいねえ……」

「ああ、心の底から信頼し合っているんだろうな」

この場にはいないフイローの顔を思い出して、思わず俺はフツと笑みをこぼす。まったく、こっちの気も知らないで呑気な奴等だ。

今はとてつもなく羨ましく思う……あいつらみたいに、勇者全員が互いを疑わず、信じあえる人間だったら、こんな事にはなっていないだろうに。

……信じる、疑わない？

「……信頼、か」

ふと、俺は自分の発言に引っかかりを覚え、考え込む。

黙り込んだ俺を心配して、顔を覗き込んでくるラフタリア達に手を振ってから……俺はしばらくの間、頭を回らせるのだった。

## クラスアップ

S i d e : S e n t o

勇者会談の翌日、オレ達はフィーロちゃんが引く馬車に乗って、旧三勇教、新たに四聖教となった教会にやってきた。

目的はもちろん、オレ達全員のクラスアップのためだ。

「ついに来たな……！」

「ああ、クラスアップの時だ！」

レベル40で足止め食らって、今日までだいぶかかったなあ……それもこれもあのクズ王のせいだけだ。

あれで昔は猛将だったって、絶対ウソだろ。面影全然ねーぞ。

まあ、とにかくこれで上限が取っ払われて、波に向けてさらに準備が進められるってわけだ。

「あのクソ神官もいなくなってるし、今後の旅はもっと楽になんのかもなー♪」

「いやいや、今までがハードすぎたんだったって」

「あのね！ あのね！ フィーロね、毒吐けるようになりたいの！  
ぶわーって！ ぐわーって！」

「お前は結構毒吐いてるけどな」

「言えてる」

砂時計の前で、リュウガやフィーロちゃんと一緒に和気藹々と話している、後ろから盛大なため息が聞こえてきた。

「おいお前ら、あんまりはしやぎすぎるなよ」

「二はーいー！」

呆れた目で見つめてきて、オレ達に注意をしてくるナオフミに、三人で一斉に返事をする。

ん？ なんかナオフミがますます呆れた表情になったような……。

「……ったく、俺は幼稚園児の引率の先生か」

「あ、あはは……」

ナオフミのため息に、ラフタリアちゃんも乾いた笑みを浮かべる。そんなに子供っぽかったか？

それにしても……なんかナオフミのやつ、昨日からずっとモヤモヤ考え込んでる風に見えるな。

勇者会議が失敗に終わったのが、そんなに残念だったのか？ まとも情報得られなかったみたいだし……いや、そんなことで悩んだりしないよな。

オレがナオフミを見つめて首を傾げていると、女王が手を差し出して、ナオフミに促してきた。

「ではイワタニ様、クラスアップさせる者を砂時計の前へ」

「フィーロちゃん、前譲るぜ」

「わーい！」

さて、ついに時が満ちたわけだ。

オレはまだちよつと悩んでるから、うずうずしてるフィーロちゃんに先を譲る。人生の大事な選択肢だもんな。

で、砂時計の前に立ったフィーロちゃんが、淡い光の中に包まれていく。

へえ、これがクラスアップか……初めて生で見た。

「ナオフミは……あ、そうか。勇者は最初からレベルの制限ないんだっけ？」

「そうらしい。ご都合主義というか何というか……」

「異世界の住人だし、色々規格が違ったりすんのかねえ？」

ってか、どこらへんがレベルの最後の上限なのかね？

レベル70とか80は、有名な冒険者にいたりするけど、90とか100はまず聞かない……勇者はそこらへんも突破できたりするんだろうか？

ふむ、また研究欲がむくむくと膨れ上がってきたな。

「お前らはきちんとして、どうなりたいか考えろよ。波が終われば、平和な暮らしが続くんだからな」

「そうだといいのですが……」

「まあー」

そこら辺も、いつ平和な世界とやらが来るのか。

ちよつと前は平和……だいたい平和な時代が続いてたと思う。あ

んまり昔の事は覚えてないけど。

姐さんに拾われる前の事は知らないけど……前回の勇者の召喚からずっと、波は起きてないわけだしなあ。

小さいドンパチはあったかもしれないけど、それなりに平和だったんじゃないだろうか。

「……っていうかナオフミ君、お前その言い方だといなくなるか戦死する感じに聞こえるぞ」

「死ぬつもりはない。だが……ずっとこの世界にいるつもりはないからな」

「え——」

オレがナオフミの言い方に物申すと、ナオフミは自分の今の願いを口にした。

そこで、ラフタリアちゃんを鼓舞して受けた顔になった。

そうだった……こいつ、あのクソ女に騙されて以来、望郷の念が強くなってるんだった。

「俺がいなくなっても生きていけるように……お前達は自分の生きかたを考えとけよ」

ラフタリアちゃんを鼓舞してるつもりなのか、そう言うナオフミだけど、ぶっちゃけ逆効果といっても過言じゃない。

恋する乙女としては、ずっと一緒にいてほしいって思うもんだからな。

「気に病むなよ、ラフタリアちゃん。あいつの気もそのうち変わるかもしれないねえし」

「そう、ですね……」

肩を落とすラフタリアちゃんに、オレも慰めの言葉を向ける。

オレもできれば、あいつには元の世界に帰らず、仲良くしててほしいと思う……それはきつと、リュウガもフィーロちゃんも同じ想いだろうしな。

とか何とかやっていると、フィーロちゃんを包んでいた光がだんだん弱くなってきた。

「終わったみたいだな……って何じゃこりや!？」

ファイロちゃんのクラスアップが終わったのを確認して、ナオフミがステータスを確認する……って、いきなり叫んでどした？

ん？ ファイロちゃん、なんか落ち込んで、歩き方がとぼとぼって感じになってる？

「ステータス全部2倍近くになってるぞ！　どんな選び方したらこんななるんだよ……お前、意外とポテンシャルすげーな」

「ほうほう……ならラフタリアちゃんも期待できるな」

へー、そんなにすごいのか？　それはまた、今後が楽しみになる吉報じゃないか。

よしよし、行っておいでラフタリアちゃん。これで君も、波に立ち向かう超戦士に進化するのだー。

ん？　女王さんがなんか驚いてる。あんたもどしたん？

「ステータスが2倍……それは真ですか!？」

「あ？　そ、そうみたいだけど……」

「そんな……ありえませんが。どんなに上昇したとしても、大抵は1.5倍が精々のはずですよ!」

ナオフミの言葉が信じられないって感じで、女王さんが慌てふためいている……そうなのか？　これが普通だと思ってたけど。

そうしたら、ラフタリアちゃんと入れ替わる形で、暗い顔になったファイロちゃんが戻ってきた。

「どういう事だ……あ、ファイロちゃんおかえり。聞きたいんだけど、なんか変な事とか変わった事なかったか？」

「うん……なんかね、なりたかったやつどれも選べなかったの」

「は?」

「え?」

んん？　選べなかった？

え？　クラスアップって、自分が望む形に自分の存在を昇華させるものだって聞いてんだけど、どゆこと？

オレ達がそう、ファイロちゃんの言葉に戸惑っていると。

「きゃあっ!？」

「うおっ!」



びかつ！ と。砂時計が凄まじい光を放ち、危うく目がやられかける。

うおい！ 何だよ、いきなり何しやがんだよこの無機物が！

勇者様御一考に目つぶし食らわせるとは、粉々に叩き割られてえのかこの野郎!!

「ぐああああ！ 目が！ 目がああああ!!」

「あ、え…？ クラスアップ…終わっちゃいました…？？」

ゴロゴロと地面を転げ回るリュウガを他所に、ラフタリアちゃんはぽかんとした様子で自分の体を見下ろす。

…気持ちはわかるけど、もうちよつとあいつのこと気にしてあげて。

「うおお…ラフタリアのステータスも同じく倍加してる…」

「おい！ どういう事だ女王さん！」

思いもよらない事態に、我に返ったナオフミが女王さんに詰め寄る。

そうだそうだ！ どういう事なんだよ!?

え？ 特殊な道具を使うと効果が上がる事もあるって？

それを使った状態で、ようやく1・5倍になる事があるって？

……あ！ あああああ！

「あれだ！ フイトリアがファイロちゃんにやったアホ毛！ アレのせいだきつと！」

「なんてこった…何考えてるんだフイトリアの奴！ せっかくの二人の人生を勝手に決めやがって…！」

「フイトリア…？ それはまさか、伝説に聞くファイロリアル女王の名では…!? どうしてその名を…?!」

あんのやろう、勝手な事しやがって…!!

頭を抱えるオレとナオフミの方に、なんか違う種類の興味を抱いた女王が逆に詰め寄ってくる。

おい、どした？ なんか目がかつ開いて恐いんだけど。

「ああ、なんて事…！ あの伝説がまさか真実であったなんて…！  
これは是非、メルティにも話を聞きたいものですね！」

「こっちはそれどころじゃないんだっての！」

なんかこの反応見た事あるぞ……メルティがフイーロと出会った頃、こんな目してたぞ。

血筋か。それで母親の方は、古代の文献とか伝説に興味津々なマニアって事か。……この国の王族って、変な奴しかいないのか？

オレ達の視線が冷たくなっている事に気付いたのか、女王は頬を赤く染めながら居住いを直す。いや、遅いからな？

「んんっ……フィロリアル女王様のお導きならば、そう頭を抱える必要もないのでは？」

「よくない！ 俺はあいつらに、一人でもこの世界を生きていけるようになって欲しかったんだよ！」

女王がフォローするけど、ナオフミは顔を険しくしたまま首を横に振る。

ナオフミの考えとしては、そうだろうな。戦う事は、平和を得るためお手段であって目的じゃないんだから。

……さて、と。

「よし、じゃあ次はオレな！」

「待て！ オレが先がいい！」

「喧嘩してる場合か！ ていうか、この状況で続ける気か!？」

隙を見て、砂時計に向かうオレだったが、同じことを考えていたリュウガが割り込んできた。

もみ合うオレ達に振り向いたナオフミが、目を吊り上げてツツコミを入れてくる。別に、そんな気にする事でもないんだけどな。

「構やしねえよ、ナオフミ。別にラフタリア達みたいになって困るわけじゃねえしな」

「だが……」

「オレ達の未来を心配してくれるのはありがたいけどよ、それは結局先の事だろ？ 今を戦い抜かない限り、その未来には辿り着けねえんだからよ」

戦いを生き延びたい、平和な世界で暮らしたい。

この二つの願いは同時には叶えられなくて、どちらかを優先させな

きやならない……だからオレは、戦う術を優先して求める。

これがのちに無用の長物になるかって聞かれれば……はつきり言ってるわからない。未来の事なんて、誰にもわからないんだからな。

オレがそう告げると、ナオフミはもう、心の底から呆れた様子で、でっかいため息をついて肩を落とした。

「お前らな……」

「ま、オレとしては何か知らねえ間に強くなつててラツキーって感じだけどな！」

「オレも〜！」

「お前らなあ……！」

さ、無駄話はこれくらいにして、クラスアップだクラスアップ！

あ、リユウガてめえ、だから割り込むなよ！ オレが先だろオレが！

「……はあ、勝手にしろ」

もう一度もみ合い、順番を争うオレ達に、ナオフミはそう言っって苦笑を浮かべるのであった。

## 尚文の実験

S i d e : R a p h t a l i a

「おやつさ〜ん！ おひさ〜ん！」

街に向かった私達は、まずはじめに武器屋の親父さんの元に向かいます。

逃亡中は、親父さんの餞別に随分助けられました。お礼を言っておかなければ……と、皆さんで意見が一致しました。

「おお！ 兄ちゃんに嬢ちゃんたちじゃねえか！ 無事で何よりだぜ」

「ご心配をおかけしました」

「悪いな、すぐに顔出せなくてよ」

セントさんが初めに挨拶をし、親父さんがホッと安堵の笑みを見せます。

逃亡生活はそこまで長くはなかったはずですが、親父さんの顔を見るのも随分久しぶりに会った気がしますね。

本当に……たくさんご心配をおかけして申し訳なく思います。

まさかあの方々が、ここまで馬鹿な事をするとは思ってもありませんでしたから。

「親父のくれた装備のおかげで助かった。礼を言うよ。特に盾につけたアクセサリーは俺達の命を救ったくらいだ」

「いやあ、なに……実を言うところじゃあ、ちよつとした実験のつもりで作ったんだ」

「実験？」

「伝説の武器を目にできたのは、とんでもない幸運だと思ってよ。今のうちに色々調べてみてえなと思ったんだ……勝手な事をして悪かったな」

親父さんは苦笑を浮かべ、ナオフミ様に頭を下げています。

実験ですか……ではあの壁が現れたのは、親父さんの意図があつたことではなかったのですか。

ああして役に立っていたのですし、終わり良ければすべて良し、と

いう奴ですね。

「気にするな、そのおかげで助かってるんだからなーそれで、親父に一つ頼みごとがあるんだ」

ナオフミ様はそうお答えして、親父さんにあることを頼みました。それはー親父さんの店にある盾を、他の勇者様方が教えてくださったウエポンコピーで複製させていただきたいというものでした。当然、親父さんはその頼み事に渋い顔をされます……当たり前ですよね。

「兄ちゃん達……そりやウチで堂々と盗みを働くって言ってるようなもんだぜ？」

「すまないな、頼めそうなのが親父しかいなかったんだ」

「うーん、しかしそうか……それで他の勇者は、武器を見るだけ見て何にも買ってかなかったわけだ」

ああ、あの方々もこのお店に来られていたのですね。そして、ウエポンコピーをしていったと。

…何でしょうか、知り合いが盗みを働いて、そのまま平然としているのだと知ったような、複雑な気持ちになります。

と、そこにセントさんが身を乗り出し、親父さんに耳打ちを始めました。

「…代わりにさ、今後もしかしたら大量に武器とか鎧を発注する事になるかもだからさ、それで許してくれよ」

「何だ、なんか企んでんのか？」

「まあ、な。……ラフタリアには内緒にしてくれ  
えつと……？」

ナオフミ様とセントさんが何やら、悪巧みをされているような？

ナオフミ様があくどい商売をするときは違う、何と違いますか……イタズラを思いついた子供のような顔をされていますね。

「ナオフミ様？ 何の話をされていたのですか？」

「んー、まあ男同士の秘密の話ってやつだ」

「気にしないで」

「セントさんは女性でしょう!?!」

どうしてこう、このお二人はちよくちよく波長が合うんでしょうか……!?

別にその、男性と女性のあれこれですとか、そういう感情を抱いていないのは雰囲気でわかるのですが……何となくモヤモヤします。

私だけ仲間外れにされているような……ああ、もう、リュウガさんまで混じっていますし!

「よし、わかった! とっておきを持ってくるからちよちつと待っててくれ!」

私が悶々としている間に、親父さんはお店の奥へ引つ込み、一枚の盾を持ってきました。

普通の鉄ではなさそうな……不思議な色合いと見た目の盾です。

「ほらよ、こいつは『隕鉄の盾』つつつてな、空から降ってきた鉄を鍛えて作った装備だ。非売品だから大切に扱ってくれよ」

言葉からもわかる、非常に貴重そうな盾を、親父さんは笑顔でナオフミ様に渡してくださいました。本当に心の広い方ですよ。

そして、ナオフミ様は隕鉄の盾を片手に持ち、ご自分のせいなる盾に意識を集中させ始めました。

一秒、十秒、二十秒と経っていき、何の変化も見られない事に、私達が訝しみ出した時です。

ふわっ……と淡い光を放ち、ナオフミ様の盾の形が変わり出しました。

そして……もう片方の手に持った隕鉄の盾と、全く同じものへと変化します。

「……できた……!」

「おお!」

「やったな、兄ちゃん!」

思わず歓喜の声を上げる私達の前で、ナオフミ様は愕然とした表情になってきました。

「これは熟練度……こっちはレアリティ、強化精錬の項目もある。あいつらの言っていた強化方法が全部載ってるじゃないか!」

「……あの複製品の出力が、本物の四分の一だったのが、現実味を

帯びてきたな」

「四倍どころじゃないぞ……！」

セントさんの眩きに、私も思わずゴクリと息を呑みます。

三勇教の教皇が使っていた聖武器の複製品は、十分に危険な力でした。それを優に超える力を発揮できるという事実には、私達は震えます。

これは他の勇者の方々にも、必ず伝えなければならない事実です……！

「さて……と。オレも何か、新しいパワーアップアイテムを考えるかな」

胸を弾ませる私達の見えない所で、そう眩いたセントさん。

その手に持った黒いフルボトルが、キラリと怪しい光を反射している事に、私達は誰も気づきませんでした。

S i d e : R y u g a

フィーロが引つ張る馬車に乗って、ガラガラガラガラと揺られるオレ達。

潮の匂いがしてきたな……なかなかいい見晴らしだ。

これから船に乗るわけだし、見晴らしはもつと良くなると思うがな。

「……ったく、現金な奴」

「えへへ、フィーロの馬車に戻ってきた〜！」

そこで、フィーロのやつはというと、めちやくちやご機嫌に馬車を引つ張っている。今朝の絶望顔はなんだったんだよ。

そういや、指名手配されてた時に置き去りにしてたんだっけか。

宝物でも扱ってるみたいに、暇さえありや磨いてたぐらいだし、だいぶ思い入れがあんだらうな。

「あの、ナオフミ様」

「ん？ 何だ、ラフタリア」

「……少し、寄り道したいところがあるのですが」

不意に、手綱を操るナオフミにラフタリアがそう話しかける。  
どうした？　なんか真剣な顔してるけど。

そして、ラフタリアの案内で馬車を進ませてどれくらい経ったか……オレ達は、とある廃墟に辿り着いた。

「ここって……」

「…私の故郷、だった場所です」

…そうか、ここが最初に波でやられたっていう。

どこの家もほとんど原型がなくなつて、崩れてるところもある。  
食器だの服だのが散乱しているのが、生々しい。

つて、あそこにいるのは確か、逃げる時に助けてくれた優男……と、  
ラフタリアの幼馴染だったっていう奴じゃないか？

「キール…」

「ラフタリアちゃん…！　無事でよかった！」

「キール君も……あらためて、生きていてくれて嬉しいわ」

向こうもこっちに気づいて、キール？　って奴が駆け寄ってくる。手  
なんて繋いで、本気で再会を喜んでる感じだ。

オレ達がそれを眺めていると、優男が近づいてくる。

前とおんなじ、にこやかだけど……色々と悩み事を抱えた、疲れた  
顔をしているように見える。

「復興はどんな感じだ？」

「上手くは行っていませんね……問題は山積みです」

優男が言うには、ここを元通りにするのは色々と障害があるんだ  
とか。

人はいないし、金もないし、食い物もない。

あのクソ王が牛耳ってた頃は亜人の村なんか放置……それどころ  
か、勝手にのたれ死ねって感じだっただろうしな。

女王が助けてくれるって話だが……まだまだ先の事らしいな。

「お互い、頑張ろうとしか言えないな」

「ですね…」

「勇者つてさー、もつとこう、戦つとけばそれでお役御免みたいなイ  
メージ持ってたんだけどさ、全然そんな事ないよな」



「それはオレも思ってた」

「現実はその甘くないって事だ」

主にクソ王とかクソ女とかクソ教皇オレらの邪魔をしてくる奴らの所為でな。

4人一緒になつて、深いため息が溢れる。

お、ラフタリアがキールと一緒に戻ってきた。

が、なんかキールがナオフミの方を睨んできてる……お前、なんかやったのか？

「お前！ 前の事は助けてもらったからいいけど、ラフタリアちゃんに危ない事ばかりさせてないだろうな!？」

「ちよつと、キール君……」

「割とさせているかもな」

「何だどー!？」

「ナオフミ様！ 煽らないでくださいー!」

ナオフミがそう言うのを、ラフタリアが声をあげて止めているが、まあ確かにみんな毎回ボロボロになつてるよな。

主な原因はナオフミのあの黒い盾だけど……覚悟の上の負傷だしなあ。

ナオフミ的にも気にしてるみたいだし、今度からもうちよい気をつけていくべきか。

「ラフタリアちゃんに何かあったら、オレはお前を絶対許さないからな!」

「わかつている……絶対に死なせたりしない」

「絶対だぞ！ 絶対に守れよ!」

目を吊り上げてそう吠えるキールが、またラフタリアちゃんの方を向く。

なんかこいつ、ナオフミに対して当たり強めじゃねえか？

「オレ、頑張つて強くなるから！ ラフタリアちゃんを守れるくらい、強くなつてみせるから!」

そう、キールはラフタリアに誓う。

何にもできなかった自分を恥じるように、今度こそ勝つてみせる

と、ちっこい体に決意を秘めてラフタリアを見つめる。  
そんなキールを置いて、オレ達は港へと向かうのだった。

再び、ガラガラと海沿いの道を進むオレ達。

その間、ラフタリアはずっと黙ったまま、村があつた方をじつと見つめて、切なげに顔を歪めていた。

……思う事は、たくさんあるだろうな。

まだあの村は、何一つ元には戻っていないし……全部が戻るわけじゃない。キールが生きて見つかっただけでも、大した事だ。

「……今後は、女王の援助も入る。元通りとはいかないが、あの村はきつと復興できる」

たそがれるラフタリアにナオフミがそう語りかける。

それを聞いて、ラフタリアはハツと目を見開いてナオフミを見つめる……心なしか目が赤いが、全員見えない振りをする。

「あと、オレ達もできる限り手伝うからよ！」

「フイーロも！」

「ああ、お前はもう一人じゃねえんだからな」

オレやセント達も一緒になって、ラフタリアを勇気付けようとする。

何ができるかは……オレは暴れる事しかできねえけど、だけど仲間のためならなんだってしてやる。

それが、オレをあの場合から救い出してくれたこいつらにできる、数少ない恩返しなんだからな。

「だから……もうそんな顔をするな。次会うときまでに、笑えるようにしておけ」

「……はい」

頷いたラフタリアの顔は……もう大丈夫だと思える、明るい笑顔になっていた。

## 船での出会い

S i d e : R a p h t a l i a

懐かしい……故郷の村にいた頃によく嗅いだ匂いが、そこら中から漂ってきます。

戦力の向上を目的に、女王様が教えてくださった活性化したカルミラ島に向かうため、私達はメルロマロクの港へとやってきました。

移動費や諸々の費用は女王様が負担してくださるという事で、安心して用意された船に乗り込んだのですが……。

「はあ!? 俺達の部屋がない!?!」

部屋に向かおうとした矢先、船長さんや乗組員の方々が顔を見せて、申し訳なさそうな顔で頭を下げられました。

「申し訳ありません……! 他の勇者様方が、お仲間のためにと全て貸し切ってしまい……!」

「いきなり前途多難だぜ……!」

「あいつら……ふざけんなよな!」

そういえば、他の勇者様達のお仲間もかなり大勢でしたが……十分足りるよう、配慮くらいされていると思っていました。

……そういうわがままを言いそうな方に、何人か心当たりがありませんね。

頭を抱えて顔をしかめるナオフミ様と同じく、セントさんもリュウガさんも、地団駄を踏んで苛立ちをあらわにされています。

すると、深いため息をついたナオフミ様が呟きます。

「仕方がない、普通の部屋でいいか」

「だな……」

「よ、よろしいのですか!?!」

「暴君じゃねーんだ、あんた達に当たったりしねえよ」

戦々恐々といった雰囲気船長さん達に、セントさんが苦笑を浮かべて手を振ります。

悪いのはこの方々ではありませんし……こうも怯えた表情で謝ら

れても困りますからね。こちらが悪いことをしている気になりますし。

そうして私達は、船長さん達に紹介された、空きがある部屋に向かいました。

「いきなり災難だったな」

「まったくあいつら……勇者の立場を勘違いしてるんじゃないの？」

ぼやきながら、とりあえず一息つくために部屋を目指します。

一つ、二つ、三つ……と扉の前を通り過ぎ、入り口からだいぶ離れた奥の部屋の前に辿り着きました。

「ここだな、相部屋になったのは」

「すいませーん、ちよつといいですかー？」

ナオフミ様がドアをノックするのと同時に、セントさんが中にいる方に声をかけます。

船長さん達から、話をつけてくださっているとのことですが……第一印象は大事です。何せ向こうにとつても急で、思わぬ事態なのですから。

ノックと声かけをして少し経ち、ガチャリと扉が開かれ——一人の赤髪の男性が顔をのぞかせました。

「おう、なんか用か？ 坊主」

男性は何とも気の良さそうな、親しげな雰囲気話しかけてきます。

どうやら気難しい方と一緒になるような事態にはならずに済んだようです。

「坊主って……俺はもう二十歳なんだが」

「ああ、悪い悪い。俺より年下に見える奴はどうしてもそう呼んじまってるな、癖なんだ」

ナオフミ様はナオフミ様で、ご自分の呼ばれ方が不満なようでしかめっ面になってしまっていますが……赤髪の男性はそれも気にしていないようでした。

すると、部屋の奥からもう二人、若い女性が顔を見せてきます。

「ちよつとラルク、初めて会う方にその態度は流石に失礼よ。今更な話だけど……」

「そうだぜ若大将、初対面でそりゃあ馴れ馴れしすぎるぜ……悪いな、お兄さん方」

「すみません……」

青い……緑？ 不思議な色合いをした、光の角度で色が変わって見える、宝石のような髪をした綺麗な女性と。

もう一人は……鋭い目に赤い鱗を肌に生やした、背の高い女性です。チロチロと飛び出す細長い舌が、この方が蛇の亜人である事を示しています。

お二人ともとてもお綺麗ですが……宝石の髪の方だけ、言葉がよく聞き取れませんでしたね。

「あの……お付きの方は外国の方でしょうか。言葉が……」

「ああ、ええと……」

宝石の髪の方はハツとした様子を見せると、おもむろに赤髪の方の腰に提げた鎌に触れました。

すると、そこから淡い光が発生し、宝石の髪の方はそれをご自分の喉に押し当て……塗り込むように取り込みました。

「これで大丈夫でしょうか？」

「あ、はい！ 聞き取れます」

「よかった。それでは……改めて自己紹介といきましょうか。相部屋を希望の方々ですよね？」

「あ、はい！」

途端に言葉がわかるようになって、思わず背筋が伸びてしまいました。

魔法でしょうか……あんなにも簡単に言語を訳せる魔法だなんて、この方は高度な魔法使いなのでしょうか。

「……ん？ あれ!？」

その時、部屋を覗こうと四苦八苦していたセントさんが、ナオフミ様を押しつけて前に出てきます。

セントさんらしくない反応に、私達が啞然としていたら、蛇の亜人の方が突如ニヤリと快活な笑みを浮かべました。

「よお、久しぶりだなあ……セント」

「姐さん!？」

驚愕の声をあげ、目を丸くするセントさんが、飛びかかるような勢いで蛇の亜人の方の肩を掴みます。

蛇の亜人の方も、頬を緩ませたまま、抱きついてくるセントさん肩をポンポンと、優しく叩いてやっています。

「何だつてこんなところ!? ゼルトブルに行くとか言つてなかったっけ!？」

「ちよいと予定を変更してな、のんびり船旅をする所だったのよ」

「はーっ! いやいや偶然にしても都合よすぎだろ!」

再会の喜びを称え合い、わーっつと騒ぎ合うセントさんと蛇の亜人の方。

お二人にとっては、大変喜ばしい事であるのがわかりましたが……そろそろ私達をほったらかしにするのはやめていただけないでしょうか。

ああ、ほら……ナオフミ様だけでなく、蛇の亜人の方のお連れの方まで呆然とされていますし。

「おい、おい。いい加減説明しろ」

「イスルギ、お前の知り合いか?」

「ああ! オレの恩人で名付け親! 蛇の亜人のイスルギ姐さんだ」

「蛇じゃねえ、コブラだつて言つてんだろバカウサギ」

胸を張り、我が事のように語るセントさんの頭を、蛇の亜人の方……イスルギさんが小突きます。

大体一緒だと思うのですが……本人としてはこだわりがあるのでしようね。小突かれた頭を抑えるセントさんを、じろりと睨みつけています。

「恩人つて……どういう事ですか?」

「記憶を失つてさまよつたオレを拾ってくれてな、色々助けてもらつてたのよ。……いやしかしこんなところで会うとは」

「オレもびつくりだよ。いつの間に旅仲間ができたんだ？」

「色々あったのさあ…ホントに色々」と

「ふーん……」

……まだまだ、私たちの知らないセントさんがいるという事ですね。

記憶を失う前のセントさんどころか、私達と出会う前のセントさんのことなんて、何も知らないままですからね。

いつか聞ける機会があればいいのですが……いつになるでしょうか。

「さて、話を戻そうや……俺はラルクベルク。冒険者だ。ラルクって呼んでくれ」

「同じく、テリスと申します。ラルクとは幼馴染なんです」

「オレはイスルギ。こいつらとは最近知り合った仲でな」

赤髪の男性……ラルクベルクさんが場の空気を入れ替えるように声を発し、それにテリスさんとイスルギさんも続きます。

ラルクさん、こちらに気を使ってくださったのでしょうか。優しい方ですね。

「ラフタリアと申します」

「フィーロはね、フィーロっていうの！」

「セントっていいまーす。イスルギ姐さんとは恩人関係にありまーす」

「…リュウガだ」

ラルクさん達に合わせ、私達も名乗ります。

ここも、第一印象が大事ですからね。船旅の間もですが、セントさんの恩人がいるのであれば、仲良くしておいて損はありません。

やがてナオフミ様も、イスルギさんを見つめて何やら考え込んでおられました。ため息とともに口を開きました。

「……一応、こいつの今の雇い主をやっている盾の勇者ナオフミだ。よろしく」

ナオフミ様がそう名乗った数秒後のことです。

ラルクさんもテリスさんもイスルギさんも、プツと吹き出したかと

思うと、大きな声をあげて笑い出しました。

ど、どうなさったのでしょうか!?

「おいおい、お兄さん。偽名を名乗るにしてもそりやどうかと思うぜ」「は?」

「ナオフミってのあ、奴だろ? 盾の勇者ナオフミ・イワタニ! 最低最悪の男だつて噂になつてらあ」

イスルギさんが大仰に……舞台役者の口上のような勢いで語ります。

以前、吟遊詩人がこのような形で、ナオフミ様のことを話していたのを聞いた覚えがありますが……思い出したら腹が立ってきましたね。

「ちなみに、どんな噂なんだ?」

「極悪非道、冷血無慈悲! 貧しい人間を脅して金品を巻き上げ、時には権力者に媚入り、気に入らない奴を処刑までするともない奴だつてな!」

根も葉もない噂ばかりを詰め込んだような内容ですね。

まだナオフミ様が冤罪を晴らしてそんなに経っていませんから、仕方ない話だとは思いますが。

……多少、いえほんのちよつとだけそんな感じのことがあつたかもしれませんが。

「……そこまで間違つてもいないな」

「否定してください、ナオフミ様」

私が言葉を濁した意味がないじゃないですか。

もつとご自分が勇者であるという自負を持つて欲しいのですが……どうしてこうも悪ぶるのでしょうか。最近はそれを楽しんでいますし。

「噂がどうかは知らんが、俺の名前は岩谷尚文だ」「わかつたわかつた……そういう事にしておこう。長い旅だ、お互い詮索はなしとしようぜ」

偽名を名乗るのも礼儀に反しますし、名乗っても信じてもらえないのであれば、もうどうする事もできませんね。



もつとこう……善行が知らればこんな事にならないのでしょ  
うけど。

「よろしく、今後の長い付き合いを期待してるぜ。自称・盾の勇者殿」

「……自称ってお前」

そんななんとも言えない自己紹介が終わり、私たちとこのお三方の  
初邂逅は終わったのでした。

## 海の旅

S i d e : F i l l o

「たー!」

ひろいひろーい海をおよいでたら、フィーロのまえにおつきな魚がやってきて、フィーロのこと食べようとしてきた。

でもフィーロはそいつをけとばして、ごしゅじんさまのいるお船の上にはぶつとばしてやったの。

「おおー! これまたでつかいの獲れたな!」

「うん! ごしゅじんさま、今日のごはんはこれがいー!」

セントお姉ちゃんもほめてくれて、フィーロすごく気持ちよかったです。

そしたらセントお姉ちゃん、フィーロが捕まえたおつきな魚にちかよって、またあの入れ物を取りだしたの。

「ちよつと分けてもらっていい?」

「いーよー」

「わーい、成分成分〜!」

セントお姉ちゃんが魚に入れ物をむけたら、おつきな魚がしゅるしゅるーって、ちっちゃい入れ物の中に入っちゃった。

そしたら入れ物のかたちがかわって、青い魚の形になったよ。

「サメフルボトルってところか……向こうでいろいろ手に入れられるといいんだけどな」

「またおもしろい鎧ができるの?」

「おう! カッコイイのいっぱい作るぞ!」

お姉ちゃんはあの入れ物をたくさん使って、いろいろなよろいをきて戦う。

ウサギとかライオンとかタコとか、あとせんしゃ? とかしよーぼーしゃとかかいうのりものの力も使うんだって。

お姉ちゃんの変身すると、すっごいいろいろな音がなって面白いから、フィーロ楽しみ〜!

……でもセントお姉ちゃん、さっきまで楽しそうだったのに、なん

だかむずかしいかおでよこを向いちゃった。

「……それはそれとして」

「う、ううう……」

「誰か……助けて……」

「視界が……視界が揺れる」

セントお姉ちゃんは、お船のはしっこでうーうーいつてる槍の人とか弓の人とか剣の人とか、いっしょにいる人達を見る。

お船が動いてから、ずっとあんな感じなんだよね……あ、剣の人が吐いた。

ごしゅじんさまもなんかくしゃってしたかおで、槍の人達の方に行っちゃった。

「おい、お前らちようどいい。このあいだの会談で共有できなかった、それぞれの強化方法についてなんだが——」

「今は勘弁してくれ……吐く」

「……お前らなあ」

ごしゅじんさまがなんか言ってるけど、槍の人達はぐったりしたまま。

ご主人様がなにかだいじそうなお話ししてるのに、みんなぜんぜん聞こうとしてない。

怒るかなって思ったけど、ごしゅじんさまははーっておおきなためいきをつくだけだった。

「リュウガ、お前は平気そうだな」

「昔から、酔いには強くてな。酒をたらふく飲んでも平気だし、どんだけ足場が揺れる乗り物でも全然何ともなかったりしてたし」

「ウワバミだったか。俺もだ、酔った事がない」

「ラフタリアは平気……だな、馬車で慣れたか」

「はい。……アレに普段から乗っていれば、いやでも慣れると思いますよ」

そういえばリュウガお姉ちゃん、ぜんぜん気持ちわるそうじゃないね。

ラフタリアお姉ちゃんだったら、まえばフィーロの馬車にのって、

あとでゲーゲーやってたのに……ウワバミがなにかはしらないけど、強いんだね。

「オレはアレが好きだったんだよな……ルコルの実。濃厚な味わいがたまんねえんだ」

「ほう……高いのか？」

「それなりつてところだな。島の酒場に置いてあるといいんだが」

「どうせ飲み代も女王持ちだし、時間があつたら呑みに行けばいいだろう」

「まじか、じゃあたらふく飲むとするか」

「あの……ほどほどにしていた方がよろしいのでは」

「ごしゅじんさまとリュウガお姉ちゃん、すっごい楽しそうにお話してる。」

「フィーロのカンだと、おいしいもののお話をしているとと思うんだけど……そんなにおいしいのかな。フィーロも食べてみたい！」

「ラフタリアお姉ちゃんは、なんだかちよつと青い顔になってるけど。」

「フィーロも平気そうだな。つてか、あいつに関しては泳いでるから関係なさそうだし」

「オレも泳ごつか……暑くなってきた」

「あ、それはやめておいたほうがいいかと」

「フィーロがバチャバチャしてるのをみて、リュウガちゃんも服をぬごうとしたけど、ラフタリアお姉ちゃんに止められちゃった。楽しいのにー。」

「もう時期、嵐が来ると思います。空気が変わってきましたから」

「マジで？ つてか、そんなことわかるのか？」

「沖合の天気は変わりやすいので……だいたい激しい嵐が来ると思いますがよ」

「まだ揺れるのか……!？」

「しかもこれ以上に……!？」

お姉ちゃんがせつめいして、リュウガちゃんが目を丸くしてる。そ

れで、槍の人たちがぎよつとした声を出してる

お船が揺れるの、そんなに苦しいのかな？　ファイロはゆらゆらしてるの楽しいけどな！

「ファイロ！　戻ってこい！」

「はい！」

もつと遊んでいたかったけど、ごしゅじんさまに呼ばれちゃったからもう帰る！

あー、楽しかった！　またおよいであそぼーつと！

Side: Motoyasu

俺の名前は北村元康！

槍の聖武器に召喚され、勇者として人々を救う使命を負った大学生の日本人だ！

……なんかこうして名乗らなきゃならない気がしたんだが、なんでだ？

まあいいや。

俺は仲間としてついてきてくれたマ……ア、アバズレのために、こうしてパワーアップのためにカルミラ島へやってきた。

……母親である女王に色々言われてたし、証拠も突きつけられたけど、やっぱり俺は彼女を信じたい。彼女の冤罪を晴らしてみせたいと思ってる。

それで、長い船旅が先ほどようやく終わったんだが……。

「さて、無事にカルミラ島に着いた……ってのはいいが」

そう言っただけを見下ろしてくるのは、マインを襲った最低男とされていた盾の勇者・岩谷尚文。

強姦まで犯した極悪人のはずだったのに、いつのまにか女王に取り入ってアバズレや国王様を罰したこんちくしょうだ！　同じ地球人として恥ずかしいぞ！

だが、それを言い返す余裕は今の俺にはなかった。

船でむちゃくちゃ揺らされたせいで俺も仲間達もみんなぐったりしているからだ。

「ものの見事にへろっへろじやねえか」

「船酔いしちゃってますね…」

周りを見れば、同じ勇者である天木錬や川澄樹もそれぞれの仲間達も、大体俺達とおんなじ感じでぶっ倒れている。

平気そうなのは尚文達だけ……どんな手を使ったんだこの野郎！

……叫ぼうとしたら余計気持ち悪くなってきた。

「だらしがねえぞ、お前らー！」

「う、うるさい……！」

「どうしてあなた達は平気なんですか……」

「俺は乗り物酔いなんてした事ないし、ラフタリアは漁村の生まれだからか慣れも早かったしな……体質の差だろう」

「やっぱりチートじゃないですか……うぷっ」

酔った事ねえとか絶対嘘だろ……あの盾にそういう特殊効果があるに違いない。ていうかそう思っていないとやってられない。不公平だろ。

「世話の焼ける奴らだ。おいセント！ こいつらを運ぶの手伝え！」

はあ、と深いため息をついたリュウガちゃん……だよな？ ちよつとおっぱいでかくなってる気がするけど。

彼女は面倒臭そうに俺の方へ来て、襟首を掴んで引きずり始める……あの、もうちよつと優しくして。お願いします。

錬や樹も同じようにして、荷物みたいに乱暴に運びだしていく。それをセントちゃんにも手伝ってもらおうと声をかけて……あ。

「おええええええええ!!」

呼ばれたセントちゃんだったけど、彼女も俺達と同じく、船酔いにやられてダウンしていた。

よかったー、仲間が他にもいた。しかも尚文のパーティーに。

「お前もか!! さっきまでの元気は何だったんだ!?!」

「す、すまねえ……船旅なんて滅多にしないから耐性ついてなくてよ……も、もう少ししたら復活するから、それまで待っ……ぼええ!!」

「情けねえ……」

すげえ真っ青な顔で、何度も海に井の中のものを吐き出すセント

ちゃん。

あー、ああいうの前に見た事がある気がする……むかし、サークルの飲み会でしこたま飲んで、帰り際にトイレに駆け込んだ女の子があなっていた。

勇者パーティーのほとんどが動けなくなっている中、一人の見知らぬおっさんがやってきて、俺達に困惑の目を向けてきた。誰だ、あんた。

「どうもはじめまして、この島の領主です。あの……勇者様方をお送りしようと思っていたのですが、大丈夫なのでしようか？」

「…しばらくはそつとしといてやってくれ」

「はあ……」

ああ、領主、領主ね。

まともに挨拶もできなくて悪いんだけど、尚文の言う通りそつとしといてくれ……人前で吐くのだけは勘弁だ。

「では、簡単な島の説明を行ってもよろしいでしょうか？ カルミラ島での活動について重要なお話がありますので」

「わかった。だが移動しながらで頼む……」

領主はどうやら、長旅で疲れた俺達のために馬車を用意してくれたようだが、正直それはとどめでしかない。

これは歩きの方が楽だな……さつさと宿に行きたい。

が、宿についたのは日が暮れる頃の事だった。

延々と街を案内され、島を開拓した魔物の伝説やら勇者のみが使える特別な魔法について刻まれたの碑文やら、あとレベル上げに関するマナーまで教え込まれ、やっとこさ宿に行かせてもらった

魔物に興味なんてないし、碑文は尚文以外読めないし、散々な一日だったぜ……。

「や、やっと終わった……」

「つらい……気持ち悪い……苦しい……」

鍊も樹も、アバズレもみんなへ口へ口になっている。

マナーって何だよ、そんなもんとつくにできてるっつもの。子供じや

ねえんだからいちいち説明なんてされたくねえよ、面倒臭え……。

ああ、ほんと……どつと疲れた。

「勇者共に色々教えてやらなければと思っていたんだが……あれでは無理だな」

「ですね……また日を改めなければいけませんね」

尚文達がなんか言ってる気がするけど、聞く元気もない。

あ、ダメだ。なんかすげー意識が遠くなってきたような……で、せめて部屋についてから……あ、だめだ、本当に、もう。

俺の目の前が、真っ暗になった。



## カルミラ島レベル上げツアー

Side:Raphaelia

「勝利の法則は、決まった!」

【ボルテッククフィンツシュ!】

「たー!」

船から降り、宿に泊まった翌日。

私達は港で船頭さんを雇い、人が住む町がある島とは別の、豊かな自然が広がる魔物達の領域に入りました。

そこで早速、遭遇する魔物を相手に戦い、倒して経験値を獲得していたのですが……。

「経験値たつか! こりゃ結構な結果が期待できそうだな」

「たーのしー!」

「噂通りだな……あとで別の弊害も出てきそうだが」

セントさんやファイロがはしゃぐ通り、そこから現れる大した強さを持たない魔物から、驚くほどに高い経験値を得ることができたのです。

メルロマロクでナオフミ様がよく利用していたバルーンと同じくらいの強さの魔物なのに、得られる経験値が十倍近かったり……活性化、おそるべしです。

嬉しい限りなのですが……お手軽に強くなりすぎて、精神的な鍛錬が遅れてしまいそうですね。

ナオフミ様はどうやら、そこを気にされているようです。

「いよっし! この調子で最大レベルまで上げて——おわーっ!」

セントさんがぐるぐると腕を回し、新しく近づいてきた魔物に挑もうとします……がその前に、空中で弧を描く光の弓矢が飛来し、セントさんの足元に深々と突き刺さりました。

思わず仰け反ったセントさんは、そのまま尻餅をつきます。

なんて危険な……というかこれは、非常に見覚えがある攻撃です。

「おっとと、すみません。新しい武器の性能を試していたら、勝手に妙な方向に……って、なんだ尚文さん達でしたか」

そう言つて、弓矢が飛んできた方からぞろぞろと、弓の勇者様の一行がやつてきました。

よく見ると、弓の勇者様に手にはセントさんの作った機械の弓が握られています。

そういえば、セントさんの弓をコピーさせたとなオフミ様がおつしやつていましたね……って、問題はそこじゃありません！

「おい樹！ お前人の獲物に手を出すとか、素人でもやらないマナー違反だぞ！」

「何を言う！ 貴様らが危険な魔物に遅れをとる前に、先んじて悪を滅したイツキ様のご厚意を無下にする気か!!」

危うくセントさんが串刺しになりかけた事で、ナオフミ様が弓の勇者様に抗議の声をあげます。

が、弓の勇者様ではなく、分厚い鎧を着た例の男性が声を荒げ、ナオフミ様の前に立ちはだかります。弓の勇者様も諫めませんし、他の方々も……お一人だけ、あの気の弱そうな女性を除いて同じ考えのようです。

……この方々、前々から思っていました自分勝手すぎませんか？

「何言つてんのこいつ……何言つてんの？」

「こういう奴なんだよ。前もこんな感じで突つかかってきてよ……」

「少々騒ぎすぎたと反省していますが……大半の原因がこの方である事は確かです」

ひそひそと小声で話しかけてくるセントさんに、リュウガちゃんと一緒に説明します。

本当……横柄な態度であの気弱そうな女性に突つかかるわ、他の方々を邪魔そうに扱うわ、人格的に問題があると言わざるを得ない方ですね。

「落ち着いてください、マルドさん。大した問題ではありません。……言っておきますが尚文さん、ファーストアタックは僕がとったんですから、この獲物は僕のもですよ。そちらこそ気をつけてください」

「お前……はあ、もういい」

ナオフミ様も、心の底から呆れられていますね……当然としか言えません。

この島の領主様の説明で、獲物の横取りは禁止、という項目があったでしょうに。それをさも私達を思つてのことのように……。

鎧の方ももちろんですが、弓の勇者様もかなり難しい性格をされているようですね……似た者同士のパーティーといったところでしょうか。

「ここは僕は先に狩場にしたので、どうぞ尚文さんは他の島へ。場所はダブると、お互いの成長に差し支えますからね」

「ああ!? 何でこつちがどかなきやならねえんだ! ふざけんじや……」

「やめとけやめとけ、真面目に怒つても通じねえよ、この手の奴には」  
リュウガさんが食つてかかりそうになります、セントさんがそれを止めています。

セントさんもとても苛立っている様子ですが……必死で堪えているように見えます。

なんといいましようか……勇者様とのお仲間達というよりも、神とその熱心な信奉者という構図に見えますね。

狂信者には以前、ロクな目にあわされていますし、ここはあまり関わらないほうがいいかもしれません。

「仕方がない……他の島を回ろう」

釈然としない気持ちを抱えたまま、私達はその場を離れ、別の島へ行くために船頭さんの元へ向かいます。

その途中で、あの気の弱そうな女性が他のお仲間にごんざいに扱われている姿を見て……ひどく、嫌な予感に苛まれました。

ですが、他人のパーティーに口出しできる資格もない私は、そのままナオフミ様達と一緒に島を後にしてしまったのです。

そして他の島にて、私達は活動を再開し、そこで複数の甲虫の姿を見た魔物——カルマービートル達と遭遇し、戦闘を開始しました。

【サメー！】【バイク！】【ベストマッチ！】

「ベストマッチ、来たーっ!!」

早速、セントさんが新しく手に入れたフルボトルを使い、鎧を生み出してその身に纏います。

今度のはサメと……セントさんが乗っている二つの車輪が前後についた、バイクと呼ぶ乗り物を模した鎧に変わりました。

【独走ハンター！ サメバイク！ イエイ！】

「ひゃっほうー！ ぶちかますぜえ!!」

セントさんが吠えた直後、ブオン！ と凄まじい爆音が鳴り響き、セントさんの体が前へと滑り出します。

カルマービートルはすぐさまセントさんに襲いかかりますが、セントさんの方がはるかに早く、全く追いつけていません。

猛スピードで敵を翻弄しつつ、セントさんは不意に、カルマードツグ達から距離を取ります。

【ボルテックファイニッシュ！】

「うおおおおおお!!」

ベルトのハンドルを回し、雄叫びをあげて拳を突き出すセントさん。

すると、セントさんの右手から半透明のサメが出現し、カルマービートル達に噛み付いていきます。

カルマービートル達は体の一部をえぐられ、断末魔の声をあげられないままにどさどさと倒れていきました。

骸となった魔物達の元に、セントさんが空のフルボトルを持って近づき、骸の中に吸い込ませます。

そしてボトルが変化し、カブトムシの意匠のものへ変化しました。「うっほほほ♪ 見てくれよ、フルボトルがこんなにたくさんできた

ぜ〜♪」

「カブトムシに、トラに……かなりの収穫になったな」

「女王さんが手配してくれた素材もあるし、こいつらはどれとベストマッチするかな〜？ いや〜、楽しみだ」

じやらじやらと手のひらの上に乗せた、いくつものフルボトル。

先ほどのカブトムシに、トラになど森の中で遭遇した魔物の力が、続々とフルボトルの中に集まっています。

この人は、一体何種類集める気なのでしょうか…？

「樹のパーティーとのブッキングが痛かったが、なかなか収穫がいいな」

森の奥に行けば行くほど、それなりの強さの魔物が現れ、非常に高い経験値を得ることができません。

他の勇者がいない島であれば、手付かずの獲物とより多く遭遇できるのですから、違う島にきて正解だったかもしれないですね。

……と、そこまで考えながら、私は先程から違和感を感じている武器に意識を傾けます。

「？ どうした、ラフタリア」

「少し……武器が心許なくなってきました」

「フイーロもツメがへんー」

なんといいましょうか……刃が切れにくくなっているような、軽すぎて今ひとつ手応えが感じづらいといいますか。

フイーロも同じようで、ずっと使い続けている爪を見て首を傾げています。

「二人の急激なレベルアップに、武器が追いつかなくなってきましたのか……お前らはどうだ？」

「んにゃ、こっちは大丈夫。そうなくても大丈夫な仕様になってっから」

「オレも……と言いたい所なんだが」

レベルが上がっても、使い心地が変わらない武器とは羨ましいですね……今度、フイーロと一緒にセントさんに作ってもらえるよう、お願いしておきましょうか。

そんなことを考えていると、リュウガさんが服の裾を引っ張り、居心地悪そうな顔をしていることに気づきました。

……そういえば、そろそろでしたか。

「単純に服がきつくなってきた…」

「ああ、急成長が始まったのか。ラフタリアの時と同じだな」

「…戻ったら服の調達をしましょうか」

「手間かけて悪いな」

申し訳なきように頭を下げるリュウガさんに、私は首を横に振ります…：仕方がないですよ、そういうものなんですから。

懐かしいですね、私も以前は急成長して、服の調整が大変でした。…：まあ、ナオフミ様は全然気づいていませんでしたけど。直してくれたのは宿の女将さんとかでしたけど。

「リュウガもそのうち大人になるのか…：感慨深いねえ」

「お前はオレの親か！」

しみじみとした口調で呟くセントさんに、リュウガさんが目を釣り上げて吠えています。本当に仲がいいですね。

…：それにしても、成長が止まる前の段階で、随分体が大きいような…？

☒

レベル上げも、切りのいいところで一旦終えて、野営に入りました。焚き火のそばでは、戦闘で回収した素材と森の中にあつた素材、そしてナオフミ様の盾が出したアイテムドロップ？ という特殊な道具が並べられています。

「やはり、実力が上がると収穫も違う…：後の懸念は、レベルに気持ちがついていけるかどうかだ。変な万能感が芽生えなければいいが」  
「その辺はまあ、終わってから考えようぜ」

どっさり、山のように積まれた素材を眺めながら、ナオフミ様が難しい顔をされています。

セントさんはそれを樂觀的に笑いますが…：確かに、レベルに振り回されないかが不安です。

ですが、この先の波がどれだけの強さを見せてくるのかわからない以上、力が必要なのは揺るぎない事実です。

「ところでお前達、渡した武器はどうだ？ 急場凌ぎだから、使いづらいかと思っただが…」

「大丈夫です。まだ使えそうです」

「フイーロも、でもさいしよの爪のほうがつかいやすい」

「そうか……メルロマロクに戻ったら、親父に頼まないとな」

途中でナオフミ様から渡された武器を見下ろし、私もフイーロも領きます。

素材と、造る為のレシピアさえあればどんなものも作れるという話ですが……勇者の武器の不思議さに、改めて驚かされるばかりです。

「便利だなー、アイテムドロップ。武器も作れるとは思わなかったけど」

「あいつらの力が強かったわけだ……まったく、何でこれに気づかなかったんだ、俺は。ゲームの定番だろうに」

羨ましそうな言葉とは裏腹に、セントさん……不満げですね。

まあ、魔導科学者を名乗っているくらいですし、作るという分野においてプライドのようなものがあるのはわかります。

……その割には、武器ができた瞬間にまた盾に飛びついていましたけど。

「さて、ここからどうするよ。夜をここで過ごすか、一旦戻るか」

「ふむ……可能な限りレベルをあげておきたいところなんだがな。もう少し続けるか……」

辺りは真つ暗で、どこに魔物がイルカ耳を澄ませてもよくわからない程ですが、活性化の期間を有意義に使う為には、多少も無茶も必要かもしれません。

そう話し合い、動き出そうと腰を上げた時でした。

「……なんか来るぞ」

「敵か!？」

突如、セントさんが森の奥に振り向き、耳を立てて呟きました。

すぐさまリユウガさんが立ち上がり拳を構え、私達も武器を以て、セントさんが見た方向を睨みます。

ガサガサと、草木を掻き分ける音が徐々に近づいてきて、そして。「やっと見つけたぜ、坊主達!」

——大きな鎌を持ったラルクさんと、掌の上に光を灯したテリスさん、そして草木を掻き分ける石動さんが顔を出しました。

突然の事に、身構えていた私達はぼかんと呆けた顔になってしま

ます。

えつと……どうして、こんな所にあなた達が？

「ラルク！ テリスにイスルギも……!？」

「お前らが全然戻ってこないってんで、船頭が慌ててたのよ。心配かけさせやがるぜ」

「……それで、探しにきたのか」

「おう！ まだ坊主達とは、一緒に狩りをする約束を果たしていないからな！」

敵ではない、とわかった瞬間、私は体からどつと力が抜ける感覚を抱きました。

そうでした……島まで送ってくださった船頭さんがいたんでした。レベル上げに夢中になって、完全に忘れていましたね。

「さつさと戻ろうぜ。夜の魔物は一味違うからな、また今度にしろよ」

「悪いな、姐さん。ナオフミ、そうしようぜ」

「……仕方がないな。ここまで探しにきてもらって、帰らないのは礼儀に反する」

そう言つて、安堵の表情を浮かべたラルクさん達が踵を返し、騎士に向かって歩き出します。その後を、ナオフミ様も素直について行きます。

というか……一度会っただけの私達の為に、わざわざこんな森の奥深くまで探しに来て下さるなんて。

そんな人達に出会った事なんて片手で数える程しかないので、正直驚きです。

「まったく……お人好しな奴らだ」

ふと、そんな呟きが聞こえたので、こっそり振り向いてみると。

……呆れながらも、柔らかい微笑みを浮かべているナオフミ様の顔が目に入りました。

この笑顔は……私だけの秘密の宝物にしておきましょう。



酒は飲んでも呑まれるな

Side: Naofumi

「ーってわけで、坊主達との出会いを祝してカンパーイ！」

「「イエーイ!!」」

……どうしてこうなった。目の前に広がる光景に、ふとそう考えてしまう。

俺達を迎えに来たラルク達に誘われるまま、酒場に連れてこられて同じ席についている。

これで俺が女だったら、連れ込みとか言われてもおかしくないぞ、ラルク……元康じゃあるまいし。

「…何でこうなるんだよ」

「親交を深めるにはまず酒だろ！ 目一杯飲んで騒いでしゃべろうぜ！」

「そう、その通りだ嬢ちゃん！」

「ほぼ出来上がってるな」

「もう…ラルクったら」

ジョッキに注がれた酒を一気に飲み干し、上機嫌に騒ぐラルクにテリスが呆れ顔で肩をすくめる。

幼馴染つつつてたっけな……こいつ、地元でもこうやって飲んで騒いで、テリスに手間をかせかせてたんだろう。

「まあ、そう難しい顔をするなよ、盾の勇者殿。親交だの何だのより、こいつはただ飲んで騒ぎたいだけなのよ」

「あつ！ 言うなよイスルギ！」

「はあ、そんなことだろうと思った」

イスルギがため息をつきながら肩をすくめ、じとりと冷た目をラルクに向けている。

こいつとの関係はいまいちよくわからんが、たび仲間にもこんな目を向けられるとは、親しみが深いのか小馬鹿にされているだけなのか……まったく。

ふと横を見ると、フィー口がラルクに勧められて俺の酒に口をつけ

ていた……ってオイ！

「ぶえ〜、おいしくなーい」

「子供に飲ませるなよ、ラルクお前……ラフタリアは大丈夫か？」

見た目が完全に幼女のフィーロに飲ませるとか、何考えてるんだ……まあ、どうせフィーロが興味を持つてちよつと欲しいとか言い出したんだろうが。

ラフタリアにも勧めていたが、まあこっちは見た目が大人だから大丈夫に見えそうだが……実年齢は一桁のはずだぞ？

「これがお酒……初めての味です」

「平気そうだな。ま、果実酒なら初心者でも飲みやすいだろうが……ん？　というかそもそも呑ませて大丈夫だったのか？」

こっちの成人年齢は知らないし……レベルアップとともに肉体年齢も急激に上がるって性質があるそうだし。

俺の世界の常識が完全に通じないんだよな……と、こう言うときは一番詳しそうなやつに聞くのが一番だな。

「なあ、セント……」

「らいじよーぶらいじよーぶ……らふたりあひゃんはもうおとなのおんならぜニャオフミふへへへへ」

早っ！　泥酔すんの早っ！！

さつき一口飲んだだけだろうが！　どんだけ弱いんだよ？！

「らからよお〜、ひゃっひゃとらふたりあひゃんのはいめてもらっへやれっへんらよお。おまへいひゅまれたっれもどーのままでいろいろか〜？」

「何を言っているのか全くわからんが、とりあえずバカにされていることはわかるぞコラ」

「らふたりあひゃんをいひゅまでまたせんらよ〜？　しゅえじえんくわぬはおとこのはじっていうらろうが〜」

もう、お前、寝ろ。

ベロベロになってる上に目がぐるぐる回ってるし……ってか、そんな状態なのに酒を注ぎ込もうとするんじゃないやねえ！　バカかお前は！！

俺が呆れるそばでは、リュウガがぐびぐびとジョッキを次々に空に

していた……って、それ何杯目だよ。

「お前は自分で言っていた通り強いな。さすがドラゴン」

「酔う前に腹がタポタポになるんだよな……そうなる前になるたけいい酒を飲んでおきたい」

「その方が確かに得だな、どうせ女王持ちだ。飲め飲め」

ラフタリアもなかなか強そうだが、こいつは格が違うようだな。

そういえば俺も酔った覚えがないし……サークルの飲み会でみんなが潰れてる中でガブガブ飲んでたと、翌日二日酔いに悩まされた友人が言っていたような。

こうして酒を飲む機会も今までなかったし、親近感のわく連れもいるし、今日は精々存分に飲ませてもらうとするか。

「ごしゅじんさま！　ファイロあっちでうたってるね？」

「おう、いいぞ！　歌え歌え〜！」

「にやおふみく、つまみつくっへ、つまみく。はらへっひやよお、おりえ〜」

「黙れ、酔っ払い！」

くそ……いい気分になったと思ったら今度は酔っ払いに絡まれるとは。

やめろ、抱きついてくるな、口を近づけるな！　つまみを作って欲しいんなら邪魔するな！　ダル絡み女め！

その後、ラルクにも頼まれた通り全員分のつまみを作り、日を跨ぐまで飲み会を続けた。

そして案の定……結構な大惨事となった。

「もつと、もつと確実に強さを得るには……ナオフミ様ともつと……一緒に連携を鍛えて……そして……」

「ぐっ……嬢ちゃん強えな、らがまだまだ負けねえろ……！」

酒を口に運びながら、熱心に俺に話しかけてくるラフタリアと、いつのまにか飲み勝負しているつもりになって入るラルク。

だがもう途中から関係なくなってきたるな、ラルクも呂律が回らなくなってきたるし。

離れたところでは、ファイロが歌を披露している。思いの外上手くて、酒場にいた他の客から拍手が送られているほどだ。

あいつ、あんな特技があったのか。

「L・O・V・E・ファイロちゃん、サイコー!!」

……知らない間に、元康もギャラリーに混じってるし。

なんだあれ、あいつの周りだけアイドルのコンサート会場みたいになってるぞ。どんだけ金髪碧眼の天使好きなんだよ。

「本当にお二人共、強いんですねえ」

「酔った事ないんだよな、水みたいなものだ」

「同じく」

「自称・盾の勇者様はこっちもお強いようだ。はっはっは!」

ラルクに比べて、テリスは実以上に上品に飲んでいるな……それを見て笑ってるイスルギは、豪快ながらきちんとしているように見える。

ふむ、ちようどいいし、こいつには色々聞いておくか。

「……なあ、聞きたい事があるんだが。こいつの事で」

「んん? ……ああ、セントとオレの過去についてかあ?」

俺が尋ねると、イスルギはすでに察していたのか、眉ひとつ動かさずに返してくる。

ぐびぐびとジョッキを空にし、テーブルに置くと、深いため息をつきながら脱力する。しばらくの間虚空を見つめていたが、やがて口を開いた。

「オレあ、色んな国や世界をめぐる旅をしてなあ、セントとはその途中で出会ったのよ。雨の中、ボロボロの格好で倒れてるこいつを見てな」

「……何があったんだ」

「さあな。こいつ、その時にはもうなーんにも覚えちゃいなかったから、謎のまんまだったのよ」

ちらりと横を見ると、顔を真っ赤にしたセントが気持ち良さそうに眠りにについている姿が目に入る。

まったく……こっちは結構真面目な話をしてるつのに、呑気な奴め。

ていうか、こいつ普段あんな飄々としてるくせに、なんであんなテンション高く過ごせてるんだ……そこが一番わけがわからんわ。

「ま、放つとくのも気分が悪いんで、オレが拾ってしばらく面倒見たってわけ。……これでいいかい？」

「……結局謎ばかりが残ったわけだ」

聞きたい情報はあんまり手に入らなかったな……まあ、いちばんセントの事を知ってそうなこいつが知らないんじゃないや仕方ない。

過去に何があるうと、こいつは俺の仲間だ……敵しかいなかったこの世界で、ラフタリアと一緒に俺を信じてくれた数少ない存在。

俺が言うのも変な話だが、こいつの事はしっかり信じてやりたい。

「ナオフミ様！　ちゃんと私の話を聞いてくらはい！」

「お、おう。悪いラフタリア」

び、びっくりした……初めてだぞ、ラフタリアがこんな声を荒げてきたの。

ていうか、大丈夫か？　目え据わってるし顔も赤いし……酔っ払った人間そのままの状態だぞ。

どうしたものかと考えていると、ラフタリアの後ろの席にいた奴がドタツと倒れ込んできた。どうやら酔ったまま腕相撲に挑んで、負けたらしい。

「ちよつと！　こつとは大事な話をしてるんれす！　邪魔しないでくらはい!!」

「なんだあ？　文句があるなら勝負だ、お嬢ちゃん！」

「望むところれす!!」

ラフタリアはギロ！　とすげえ恐ろしい目で後ろの酔っ払い達を睨みつけ、腕まくりをして隣の席に向かっていく。

怒り上戸ってやつか……なんかもう、ラフタリアに対して申し訳なさが滲み出てくるな。普段のストレスとか我慢してそうだし。

「あれは……放つといていいのか？」

「ラフタリアも色々溜まってる事があるんだろ、好きに酔わせておけ。自分にとってちよつどいい量を知りたい機会だ」

「そんなもんか……」

リユウガに問われるが、そつとしておく他に俺ができそうな事は無い。ていうか今行ったら絶対絡まれて不満をぶちまけられそうだな。

「勝ちましたー！ 次の相手は誰ですかー!?」

で、当のラフタリアは腕相撲で次々に相手をなぎ倒してるし……あれ、いま挑んでるのって、樹の所の鎧じやないのか？

あ、数秒で体ごと吹っ飛ばされた……ぎまあ。

ちよつといい気分になっていると、テーブルからガチャンとガラスがぶつかる音が聞こえてくる。

ああ、ついにラルクが限界に達したか……あの状態で飲み続けてたもんな。

「までやまでや……のめるろお〜」

「もう無理よ、ラルクったら。……ごめんなさいね、ナオフミさん。そろそろ連れて帰るわ」

「明日は地獄だから覚悟しておけよ、若殿」

「そうだな……ラルク、帰るぞ」

「なんろ……こりえしきい……」

意地を張るラルクだが、テリスとイスルギに引きずられて強制的に酒場の外に連れていかれる。

ありやあ、多分イスルギの言う通り、凄まじい二日酔いに襲われるだろうな……うちのセントもだが、ご愁傷様と言う他にない。

「じゃあなく、坊主く、嬢ちゃんたひく、こんろ一緒に冒険しようぜ〜」

「失礼します、ナオフミさん」

「じゃあな、チャオ〜♪」

酒場の入り口でラルクが手を振り、テリスがそつと会釈を、イスルギが洒落た敬礼みたいな仕草を見せ、夜の街の中に消えていく。

まったく……騒がしい上に、人の距離感も考えずにズカズカ踏み込んでくる、どうしようもないお人好し達だったな。

ふつ、と苦笑を浮かべながら、カウンターにおいてある適当な果実を口に運ぶ……ん!?

「お、この実なんかうめえな!」

「だろ? 前から好きなんだよな」

俺が感嘆の声を上げると、リュウガが自分もとばかりにやってくる。

「そうか、そういうえば船で言ってたな……うまい酒があるって。もしかしてこれのことか？」

すっかり気に入って、リュウガとともにばくばく食べていると、酒場に店主らしき男が話しかけてきた。

「あ、あの、お客さん……大丈夫なんですか？」

「ん？ ああ、すまない。高いものだったのか、これ」

「んー、まあそれなりだけど。別にこれくらいどうってことないと思うぞぞ？」

「い、いえ、そういうわけではなくて……」

さつきから何だ……？ やけにビクついてるような……恐る恐るって感じで話しかけてきてるし。

俺と……リュウガを？　なんか化け物でも現れたように見ているな……失礼な奴だ。

「何食ってんだよ、尚文」

「元康……フィードの所に行かなくていいのか？」

「フィードちゃん、歌いすぎて疲れたみたいだから飲み物でも頼もうと思ってるな。ん？　これ食ってたのか」

実を咀嚼していると、ドルオタみたいな事をしていた元康がニヤニヤしながら近づいてくる。

こいつ……あんだだけフィードに嫌われてるくせに、しつこく高感度を稼ごうとしてるな？　周りの女で我慢しとけよ。

とか思ってる間に、元康は俺の食ってる実を一つつまみ、自分の口の中に放り込む。

ん？　その瞬間、店主の顔がより一層青くなったな。

「そんで？　何をそんなに青くなったんだ？」

「……そのルコルの実は、樽いっぱい張った水に一粒入れて、ようやく飲めるほどの酒精を含んでおりまして、その」

店主がそう、心底申し訳なさそうに答えた直後。

ドターツ!!　と、元康がその場で勢いよくひっくり返った。

何だ？ いきなり……って、こいつ泡吹いてやがる。

「槍の勇者様が倒れたぞ!!」

「ルコルの実に当たったんだ！ 早く吐かせろ！ 命に関わるぞ！」  
元康が倒れた事で、酒場は蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。

すぐにどこから担架が運ばれてきて、虫の息になっている元康を治療所に連れていく。

それをぼーっと眺めていたら、いつの間にか俺とリュウガの方にも視線が集まり始めたのに気がついた。

「ナ、ナオフミ様……それ、何を食べて……!?!」

「やー！ フィーロそれきらいー！ はながもげそうー！」

ラフタリアやフィーロでさえ、俺達に戦慄の目を向けて絶句している始末……例外は、酔いつぶれているセントだった。

……いや、別にそんな対したものじゃないだろ、これ。

「この程度で墜ちるとか、だらしねえ勇者様だよな」

「まったくだ」

そう言つて、俺とリュウガはまた実をーールコルの実というんだったか、を口に放り込む。

そしたら酒場の音が突如消えて、ややあつてからどつともものすごい大騒ぎになった。

「ウワバミじゃああああああ!!」

「バケモノがいるー！」

「酒の神も尻尾巻いて逃げ出す酒を飲み干すヤバい奴らだああああああああ!!」

誰もかれもが、俺とリュウガを指差して慌てふためいている。

ラフタリア達もそれにまじつて、ギャーギャーわーわーやかましくなった酒場を眺めながら、俺とリュウガは思わず目を合わせる。

「何だつてんだ、全く」

「なあ?」

お互いに肩を竦めながら、俺達はまたルコルの実を口に運ぶのだつた……うまつ。



## 未知の武器

S i d e : L a r c

よう！ 俺の名はラルクベルク！

世界を股にかける冒険者で、その真の姿は――って、いやいや何言おうとしてんだ、俺。

……とある目的で、旅の途中だった俺は幼馴染のテリスや仲間のイスルギと共に、活性化とかいう現象が起こっているカルミラ島にやってきた。

その島で俺は、自分を悪名高い盾の勇者だと名乗る一人の男、ナオフミが率いるパーティーと出会った。

そんで話してみれば、こいつらみんな気のいい奴らで、俺もテリスもイスルギもすっかり気に入っちゃまった。

そんで、前から話してた通りに一緒にレベル上げをしないかって事で、今朝集まったんだが……。

「あつたまいってえ……！」

「視界がぐらつぐらしてるぅ……！」

「言わんこつちやねえ……セント、お前はもう二度と酒を飲むな」

俺とウサギの耳が生えた嬢ちゃん、セント嬢ちゃんは今、とてつもない頭痛に苛まれていた。

理由は勿論二日酔いなんだが……正直俺は、昨日の事は途中から全然思い出せねえ。どんだけ飲んでたっけ、俺達？

頭を抱えてうーうー唸る俺達に、ナオフミやテリスが心底呆れた目を向けてきやがる……やめてくれ、その目は俺に効く。

今日に備えてさっさと寝てればよかったぜ……と、頭を抱えながらの事だった。

「……しかしまア」

俺は小さく呟きながら、さつきからチラチラ全員の視線が向いてる方を見る。

そこには龍の嬢ちゃん……だよな？ が、いるんだけど……昨日の夜に見た時と見た目が全然違ってんだよな。

具体的に言うと、ちんちくりんだった体がボンツ!! キュツ! ボンツ!! のとんでもねえドスケベボディになってやがる。

「でかくなったなあ、お前」

「おう、やっと前のオレに戻って来れたぜ」

たゆん! とかぼいん! とかいうレベルじゃないんだわ。

あえて擬音語をつけるとするならば……どぼるんっ!! みたいな、そんなデカさだ。

……テリス、落ち着け。

俺は確かに大きいのが好きだが、誰でもいいわけじゃねえ。俺が好きなのはお前のだ。

……だから脛を蹴るのはやめてくれ。

「……おつきいですね」

「おつきー」

「ねえ、何なのそのデカさ。オレに対してのいやみか、いやみなのか？」

でかい乳がそんなに偉いのかコラア!」

龍の嬢ちゃんのを、嬢ちゃん達がじつと凝視してる……っーか、若干目が血走ってて怖いんだよ、特に

ウサギの嬢ちゃんなんて思いつき嫉妬してるし。鳥の嬢ちゃん、お前さんはまだ子供なんだから羨みなさんな。

……だからテリスさんや、別にあんたに不満はないから足を踏むのをやめておくれ。

「さーてそれはさておき新しいベストマッチの時間だよー!」

「どういう思考回路してんだお前」

「またテンション高えなあ……」

真っ青な顔で、これ以上ないくらいに上機嫌で森の中に入っていくセント嬢ちゃん。お前、俺よりひどい顔じゃなかったっけ?

そんなセント嬢ちゃん達に呆れながら、俺達は命にあふれた森を進んでいくのだった。

……ってか、ベストマッチって何だ?

「さあ、実験を始めようか!」

【カメラ！】【カブトムシ！】【ベストマッチ！】

目の前に現れた、でかいペンギンの姿をした無数の魔物達。

セント嬢ちゃんはそれを見据えると、腰に巻いたベルトに、二本の小さな瓶のようなものを突き刺す。

それをぐるぐると回すと、二色の鎧が生み出され、セント嬢ちゃんの全身にガシャーンと張り付いた。

【密林のスクープキング！ ビートルカメラ！ イエイ！】

【どすこい！！】

カブトムシと……カメラ、だっけか？ 景色を一枚の絵にするって聞く道具を模した鎧を纏い、セント嬢ちゃんはペンギン達に殴りかかる。

カブトムシの角が突き刺さり、ペンギン達はぎーぎー耳障りな声をあげて吹っ飛ばされて行つた。

【さらにもういつちよー！】

【トラー！】【ユーフォー！】【ベストマッチ！】

セント嬢ちゃんは止まらず、今度はまた別の瓶をベルトに刺し、ハンドルを回す。

こんどはピンクと黄色、虎となんかよくわかんねえ船みたいなやつを鎧にして纏つて……宙に浮いた!?

普通じゃねえ軌跡を空中に描き、セント嬢ちゃんはまた別のペンギン達に突っ込んでいく。そこで、虎の爪でぶった切つていった。

【未確認ジャングルハンター！ トラユーフォー！ イエイ！】

【いやっほう!!】

はは……あれがベストマッチ。

なんかとなんかの力を掛け合わせて、一番相性がいいもの同士を鎧にして戦つてるわけか。

……でもなんでそんな変な組み合わせばつかなんだ？

「おいおいセントお、ずいぶんボトルが増えたなあ！」

「おうー！ でもまだまだいくぜー！」

【キリン！】【扇風機！】【ベストマッチ！】

敵を蹴り飛ばしていたイスルギが、長らく離れていた相手に不敵な

笑みを浮かべてみせる。

セント嬢ちゃんはそれに得意げに笑い返し、また別の瓶を取り出した。

【嵐を呼ぶ巨塔！ キリンサイクロン！ イエイ！】

今度は……えつと？

確かあれはキリンとかいう種類の生き物と……どつかの国で見たセンプウキとかいう道具だな。

嬢ちゃんが左腕1を向けると、羽が回ってとてつもない風が生み出される。

発生した竜巻によってペンギン達は巻き上げられ、そこを右腕のキリンの顔がぶん殴ってぶっ飛ばしていった。

そうか……キリンって首が伸びるのか、初めて知った。

「嬢ちゃんの武器、スゲーな。何がどうなってあんななってるんだ？」  
「俺に聞くな。割と長い付き合いになるが、本人が記憶喪失なのも相待って全くわけがわからないんだ」

「はー……なーんかどうも気になるなあ」

具体的に言っていると、なんか心惹かれるんだよな。

俺もアレを使ってみたい……嬢ちゃんが言う「変身」を俺もやってみたいと、魂が叫んでいる気がするんだ。

坊主……お前も同じ気持ちなんだろう？ わかるぜ、俺には。

「さて、いい加減俺達も活躍しねえと、獲物全部あいつらにとられちまうぞ」

「だな！ いくぜ、飛天大車輪!!」

坊主の言葉で、俺も気合いを入れ直す。

自慢の大鎌を振り回して、ペンギン達をバツタバツタと斬り伏せていく。

嬢ちゃん達に比べれば地味かもしれんが、強さならまだまだ負けちやいないぜ!!

「今度は私に任せて。ナオフミさんが作ってくれたこの子の力、見せていただきましょう！ 輝石、紅玉炎！」

今度はテリスが前に出て、ペンギン達を足止めしている坊主に向け

て炎を放つ。

慌ててる様子だが……無用な心配だぜ。テリスの攻撃は敵だけを焼き、味方を癒す浄化の力だ。

それを証明するように、ペンギン達は焼き尽くされ、坊主は傷一つなくその場に立っている。

「なんだあれ……すげえな、あいつら」

「おうおう、楽しそうだねえ……そんじや、オレもいきますか」

セント嬢ちゃんが呆然とした声を漏らし、目を見開いて俺達に見られる。

その隣から、イスルギがやや億劫そうに歩き出し、周りよりやたらとでかいペンギンの元に向かう。

そして次の瞬間、イスルギの足から紫の液体が噴き出し、でかペンギンの首に叩きつけられた。

「うわ出た！ 姐さんの毒攻撃！ 致死性のない麻痺毒から猛毒まで何でもぶっかけるえげつねえ攻撃だ！」

「本当に恐ろしい攻撃ですね……！」  
「……どうやって出してるんだ、あれ」

セント嬢ちゃんやラフタリア嬢ちゃんが戦慄の声を上げる前で、でかペンギンはぶくぶくと泡を吹き、その場にどしゃつと倒れ込んだ。前に何度も見てきた技だが……マジで怖えな、敵じゃなくてよかったですと思わず。

「やるじゃねえか！ オレも負けてらんねえ!!」

「スペシャルチューン！ ヒッパレー！ ヒッパレー！ ヒッパレー！」

イスルギの戦いに興奮したのか、龍の嬢ちゃんが剣を取り出し、金色の瓶を一本突き刺す。

剣の柄頭を何度も引つ張り、答申に光の線を走らせた嬢ちゃんは、ものすげえ形相で剣を振り回す。

【ビリオンスラッシュュー！】

「オラアアアアアアアアアアア!!!」

直後、でかい光の刃が飛び出し、ペンギン達が根こそぎぶった切ら

れていく。

うーむ、体がでかくなつたせいなのだろうか、威力も間合いもすげえな……前の嬢ちゃんの戦いを知らんからなんとも言えんけど。

そんなもつて……すっげえ揺れてたなあ。

あ、すいませんテリスさん、お願いなんで蹴りの構えを取らないで。

「そつちこそ、大したもんだ」

「へっ、まだまだこんなもんじゃねえよ！」

「フイーロもやるー！」

からかうような声をかけるイスルギに、龍の嬢ちゃんは鼻を鳴らし、また雄叫びと共に魔物に向かって走り出す。

鳥の嬢ちゃんもそれに続き、でかい鳥の姿で暴れ回る。

そうして、俺達のレベル上げは丸一日……夕方になるまで続いたのだった。

日が暮れ出した頃、俺達は一旦狩りをやめ、集めた魔物や素材の山を前に、顔を見合わせていた。

今日のレベル上げはもう終わり……あとは素材の山分けをする時間だ。

「さて……素材の半分はそつちのだ。量が多いが大丈夫か？」

「問題ねーよ。それじゃ、お先に失礼するぜ」

坊主が聞いてくるが、俺は構わず、半分に分けた素材の山に近づくと、訝しげに眉をひそめる坊主の前で、俺は自前の大鎌の切っ先を下ろし、素材に近づける。

直後、素材の山がぐにやりと形を歪め、俺の鎌の中に吸い込まれていった。

「!?」

後ろで、坊主達がギョツと息を飲む姿が目映る。

あー、いつもの癖が出ちゃったな……まあいいや、そんな珍しいものでもないだろうし。

「お前……今の、どうやったんだ？」

「ん？ ああ、これか？ 俺の武器はちと特殊だよ、こういうことがで

きるのよ」

「まるで、ナオフミ様の盾やセントさんのボトルのようですね…！」

「マジかよ…すげえな」

俺は努めてなんとでもないという風に語り、大鎌を坊主達に見せる。

ほら、こうして対してなんも隠してるようなそぶりを見せなきや、そんなに怪しまれる事なんてないんだよ。

……だからテリスさんにイスルギさんや、そんな冷たい目で俺を見ないで遅れ。

「おい、ちよつと待て！ そんな武器が四聖武器以外にあるなんて、聞いたことねえぞ！」

「まあ……ずつとこの国にいたんなら、知らなくても仕方ないんじゃないか？ うちの国の特殊な得物つてことでよ」

「そんなものを作る奴が、オレ以外にいるつてのが悔しいんだよ！」  
セント嬢ちゃんは科学者として譲れない何かがあるのか、ものすごい剣幕で俺に詰め寄ってくる。

変なこだわりがあるな……お前さんだつて十分とんでもないもん作つてんだろうに。初めて見た時めちやくちやびっくりしたぞ。

「ラルク、今度それ作つた奴紹介してくれよ！ もしかしたら新しい発明を思いつくかもしれないねえ！」

「お、おう。できたらそうするよ、できたらな……」

できたら、つてもしもの話をしてるから、嘘はついてないよな？  
正直、こいつを作つた奴が誰かなんて皆目検討もつかねえしなあ

……ていか、だ。

——こいつらには、いずれ俺達の正体もバレるだろうし、其の場凌ぎの誤魔化しにしかならないだろうけどな。

「やっぱり坊主は……」  
「ん？ 何だ？」  
「い、いや……何でもねえ」

思わず思つた事を言いかけて、慌てて口を閉ざす。  
つぶね……危うく妙な事口走つて、せつかく仲良くなったこいつ

らを怪しませるところだった。

……迂闊な事は言えない。今の俺は、ただのちよつと腕が立つ冒険者なんだからな。

「今日も今日とて大量大量！」

「かなりの収穫だったな。やっぱメンツが多くなると、成果がまるで違うな……」

両腕でどっさりど、復路に包んだ大量の素材を抱え、セント嬢ちゃんと龍の嬢ちゃんが戻ってくる。

おお、確かに大量だ。ナオフミのサポートがあつたお陰か、いつもより軽い疲労で倍の収穫を得た気分だな。

「礼を言うぞ、ラルク、テリス、イスルギ。今日はかなり助かった」

「お、珍しいな。ナオフミが素直に礼を言つてる……明日は槍でも降るかな？」

「誰がツンデレだ。俺だつて最低限の礼儀ぐらいわきまえてるわ！」

坊主が礼を言つてくると、それを見たセント嬢ちゃんがニヤニヤと揶揄い出す。坊主はギロリと鋭い目を向けているが……若干頬が赤く染まつてんのに気づいてないな。

……そういう反応されると、なんつーか、申し訳なさが芽生えてきちまうな。

「……また組める日があつたら誘う。その時は頼む」

「……ああ、俺もそう願つてるよ」

坊主も相当俺を気に入ってくれたのか、最初の頃よりはるかに柔らかくなつた表情で誘ってくる。

本音を言えば、すぐにその手を掴んで約束をしたいところだが……それは、許されない事だ。笑みを返すぐらいしか、俺には自由がない。

「じゃあな、盾の勇者殿。いずれそのうちに——」

「……? あ、ああ……」

イスルギがそう告げる様を、俺は居心地の悪さを感じながら横目で眺める。

……本当に残念だよ、坊主……いや、ナオフミ。

お前といつか、世界を懸けて殺し合いをしなくちゃいけないんだか



of 51

## 海底のタイムリミット

S i d e : R y u g a

あれから、イスルギ達とは出会わなくなった。

あんだだけわきあいあいとレベル上げたんだから、次も絶対誘ってくると思ってたのに……なんかあったのか？

そういえば、別れる時のあいっすら微妙に反応がおかしかった気がするし。

うーん……気になる。気になるけど……本人達と会えもしないんじゃない、何考えてんのかわかりやしねえ。

「ねえねえ、ごしゅじんさま！ フィーロ、すごい見つけちゃったの！」

「何だ？ なにかあったのか？」

「うん！ うみの底にね、おっきなおうちがあったの！」

…オレがウンウン悩んでると、フィーロのやつがなんか騒がしく駆け込んできた。

なんだ、最近海で泳ぐのにハマってるらしいけど、なんか珍しいものでも見つけたのか？ おうち……とかなんとか言ってたけど。

「おうち……それはもしや古代の遺跡とか神殿とか呼ばれるものではないだろうか」

「海の底にか？」

セントのつぶやきに、ナオフミは胡乱げに、オレとラフタリアは筋トレをしながら不思議そうに聞き返す。

……ん？ どうしたナオフミ。

なんでそんな微妙な顔でオレとラフタリアを見つめてんだ？ 普通に筋トレを……ラフタリアは腕立て伏せで、オレはスクワットやってるだけなんだけど。

まあそれはともかく、海の底の遺跡か……こいつがすげーすげーというくらいじゃあんまり期待はできねえが、まあ暇つぶしくらいにはなるか。

「行ってみようぜ、ナオフミ。こういう時のフィーロちゃんは、意外と

とんでもないものを見つけている可能性がある」

「……動物的、いや、魔物的直感か？」

セントがそう言って、ナオフミに促してる。

「……あと頭が子供で、妙なところまで遊びに行ってるかもしれないし。」

「わかった、行ってみよう」

右と左から、それぞれセントとフィーロにねだられて、そのうちナオフミは頷いた。

……ってか、横からねだられる様が完全にどっかの家の親父みたいだったのは笑えたけどな。

そんなこんなで、オレ達はフィーロが見つけた海中遺跡を調べるために、浜辺へやってきたわけだが……。

「な、何ですかこれえ〜!？」

頭を抱えたラフタリアが涙目で……って顔見えないけど半泣きな声で叫んでる。

海の中じゃ生身の人間は呼吸ができない。

そんな不都合を解消するのが、セントの発明——ではなく、ごく最近、ナオフミがアイテムドロップで作り出せるようになった着ぐるみだ。

ペックルとかいう、昔この島を開拓した魔物だっという、嘘か本当かわからない伝説の存在。

その能力を模した着ぐるみ……らしい、詳しくは知らん。

「おお、なかなか優秀な装備が手に入ったな。さすが聖武器のアイテムドロップだ——っつておい!!」

「調べさせるー！ もっとよく調べさせるお!!」

着ぐるみのステータスを確認して、満足げに頷いていたナオフミに、眼をぎらつかせたセントが飛び掛かった。

お前は……いい加減にしるよな、一々変なタイミングで欲望に吞まれやがって。

…ってわけで、暴走したセントはオレがぶん殴って大人しくさせておいた。ちったあ反省しやがれ、バカウサギ。

「ナオフミ様！　こんな恥ずかしい格好イヤです！」

「優秀なんだからいいじゃないか。お前、見た目より機能を重視するだろ」

「ですけどお…！」

「俺だって着てるんだ。ちよつとの間だから我慢しろ」

そう言っつて、すでにペツクル着ぐるみを着たナオフミがラフタリアを諭す…：まずいな、思わず吹き出してしまいそうだ。

あの仏頂面があの中に入ってくると思うと、シニールすぎて笑いがこみ上げてきやがるぜ。

「お前らは必要…：ないか」

「泳ぎは得意だ」

「オレはこれがあるから大丈夫だ…：変身！」

【サメ！】【ライト！】

オレもセントもベルトを腰に巻いて、ボトルをセットして鎧をまとい、準備万全な状態になる。

今回のセントの鎧はベストマッチじゃないみたいだな…：確かに、暗い海の中じゃ、明かりがあつた方が便利だしな。

ただそれ、攻撃に使つたらオレ達まで感電したりしないだろうな…？

…：まあ、いいか。

「おし、それじゃあ行つてみつか！」

五人全員で列になつて、ザブザブと波をかき分けて海に入つていく。

膝下くらいから、またした、腰、そして胸のあたりまで届く高さになつた頃に、思い切つて潜り込む。

サンゴやら小魚やら、太陽の光でキラキラと照らされる美しい景色の中を、オレ達は息継ぎなしでスイスイ泳いでいく。

今のところ、快適な時価が続いてるけど…：おっと、さつそく相手がお出ましのようだな。

【ボルテックファイニッシュー！】

オレ達の気配につられてやってきた、サメ型の魔物の群れ。

水中をすげえ速さで泳いできて、ギザギザの葉をオレ達に突き立てようとしてくるけど……残念、ムダだ。

オレが先に思いつきりぶん殴って戦闘不能にさせてやってるからな……舐めんよ、魚め。

そうこうしているうちに、オレ達はずいぶん、フイーロが言っていた海中遺跡の元へと辿り着いた。

それで外観をざっと見てみんだが……これ、神殿っぽいな。何の神を崇めてたのかは知らないけど、なんらかの祈りを捧げる場っぽい。んで、扉っぽい部分を見つけて全員で押してみたけど、錆びついているのかうんともすんともいいやしねえんだ。

どうしたものか、と考えていると、ナオフミ達の息がそろそろ持たなくなってきたらしい。

一旦上がるか——そう考えて、神殿から踵を返そうとした瞬間。ナオフミの盾から光が迸り、神殿の扉に当たって、あれだけ硬かった扉が最も簡単に開いてしまったのだ。

マジかよ……これって、勇者の武器がその場になきや開かないようになっていたのか!? じゃあ、この中には一体何が……。

一瞬悩んだオレ達だったが、ナオフミが先頭を進み、遺跡の中へ入っていく。

慌ててオレ達も後に続き、奥へ進んでみると……なんと一番奥は空気があつて、えらく広い空間が広がっていたのだ。

ますますわけがわからなくなったが、遺跡の正体を突き止めるために、オレ達は先に進んだ。そして——。

「こ、こりゃあ……!?!」

空間のど真ん中に鎮座する、巨大な砂時計——古びた龍刻の砂時計の姿を目の当たりにし、みんな言葉を失った。

そして砂時計は、残り二日というあまりにも短い時間を示し、刻一刻と砂を落とし続けていたのだった。

ナオフミが他の勇者達を集めに行つて、オレ達は放置されていた。海底で見つけた砂時計、そこに示された波へのカウントダウンについて、早急に伝えて対処しなければならぬからだ。

ラフタリアとフィーロは鍛錬に行つたらしく、セントはどつかで発明してる。そこでオレは、波止場に腰を下ろしてぼんやり空を眺めていた。

「ただなあ、残り二日でどんだけ何ができるかって話なんだよなあ……」

場所が場所だけに、対処の方法にひどく悩まされるのだ。

もし海に転送されるなら船が必要だし、陸地に放り出されたら船は役立たずになるし……どう動くべきか本当に悩ましい、との事だ。

兵の手配も必要だから、女王と話さないといけないみたいだしな……やる事が多いのなんの。

ん？ あれ、あつちからやってくるのはナオフミ達か？

なんだ……なんでか知らないけど、思いつきり藻掻いてる剣の勇者を引きずつてるし。

それで喚く剣の勇者を……海に放り投げた。

「!? お、おい何をする!? やねろー！ 離せ……離せえええ!!」

剣の勇者は元気に騒ぎながら、どぼーんと海に沈んでしまう。

ボコボコと浮き上がる泡を見下ろしてから、なぜか無表情でやってくるナオフミ達に、じとつと呆れた視線を向けた。

「……何やってんだお前ら」

「ああ……立てばいいのにな」

ナオフミと一緒に、なんとも言えない顔で海の中に沈んだ剣の勇者を見つめる。

そこは浅くて……そりゃあもう子供が入っても大丈夫そうなほど浅い場所で、体を起こせば十分呼吸ができるようなところだ。

いや、まあ、人間って膝上くらいの深さの水で溺れるっていうし、でもなあ……洪水時ならともかく、めっちゃやくちや穏やかな海だしなあ。

「そうか……お前カナツチだったのか」

「俺は……泳げる」

「ひざ下くらいの深さで溺れといて何を言ってるんだ」

剣の勇者を引き上げると、ポタポタと水滴を垂らしながら項垂れてしまう。

なのに強がりなんていうもんだから、こいつの意地の張り具合は褒めたもんだか呆れたもんだかわからなくなる。

そっかあ、こいつ泳げないんだあ。

……いやいやいや、どうすんだよ次の波。お前だけ沈むぞ。

「水中で呼吸ができるようになる魔法も存在いたしますが……時間制限もありますからねえ」

「どうしたもんか、このままだと本当に錬だけ不参加になるぞ」

島の領主も一緒になつて首を傾げてる……うん、困惑するよな。頼みの綱の勇者が困難こんなだもんな。

……しようがない、こいつらには一人でも死なれても困るって話だし、ちよつと手を貸してやるか。

「おい、剣の勇者よ。これを」

【ビートクローザー！】

あんまりに哀れなんで、一旦変身してオレの剣を手元に呼び出す。

んで、セントが余分に作ってたつていう、サメのフルボトルも一緒に剣の勇者に手渡してやった。

あいつ、まさかこうなるのを見越してたんじゃないだろうな。

「その剣の鏢るところにこれ、挿してみな。そしたら水泳能力が向上する……らしいぞ」

「……なんだと？」

「！能力を自身に付与できるのですか!？」

「あのバカウサギの自信作らしくてな。ま、とにかくやってみろやってみろ」

ぶつちやけ、オレが使ってるフルボトルって一本だけだから、他のを使ってどんな感じになるのか知らねえけど。

セントが言ってたし、大丈夫じゃねえの？ ……たぶん。

「……ふん、なら試してみるか」

そう言つて、劍の勇者は言われた通りにオレの劍をコピーさせて、さらにサメのフルボトルを鏝のところに突き刺す。

で、ぎぶぎぶおっかなびっくりつて感じで海に入つてつたんだが……途中から走り出したかと思うと、ものすごい勢いで飛び込んでいった。

その後、なんか沖の方でイルカみたいに飛び跳ねる劍の勇者の姿が見えたんだが……何やってんだ、あいつ。

「——イヤッホオオオウ……！」

遠くから、なんかむちゃくちゃ楽しそうな雄叫びが聞こえてくる……めっちゃくちゃ飛び跳ねてるし、ああ、うん。

その、あの、そんなに喜んでくれんだったら、渡したかいがあるつてもんだな、うん。

「……ガチで嬉しいみたいですすね」

「相当気にしてたみたいだな」

「ダッセエ」

それを、ナオフミと他の勇者達が呆れた目で眺めている。

それで、オレと一緒にいたたまれなくなってきたのか、みんなさつと目をそらしちゃった……うん、そうだよな、そうなるよな。

しばらくの間たのしそーに泳いでいた劍の勇者は……だいぶたつてから戻つてきて、いきなりオレの手をつかんで頭を下げてきた。

「……ありがとう」

「お、おう。気に入ったんなら、しばらくそのフルボトル貸すぞ」

ぶつちやけ、オレ泳げるからいらねえし……これ言ったらこいつ気にしそうだから言わねえけど。

ていうか、こいつつてもつと気どつた一匹狼みたいな奴だと思つてたけど、大分印象変わってきたな。…そんなに泳げないのいやだったのか？

「あいつ、最近やたら素直になつてきたな」

「あっちが素なのかもしれませんね」

「ダッセエ」

槍の勇者からはつ、と鼻で笑う声が聞こえてきて、オレはどうした



ものかと悩んだ。

あの……おい、剣の勇者殿よ。

お前、これ、オレはいつまでお前に手え握られたままじやなきやいけないの？ 波に向けての作戦会議とかあるんじゃないの？

オレが解放されたのは……それから大体一時間くらい経った後の事だった。

## 海上の戦い

S i d e : R a p h t a l i a

「助かったぞ、女王。短期間でここまで揃えてくれるとは……」

「世界を救うための助力を惜しむ気はありません。そもそもこれまでが異常だったのです」

私達は今、女王様が手配してくれた船の上に乗っています。

海を進んでいるのは、この一隻だけではありません……10隻以上の大小様々な船が集まり、兵士や集まってくれた冒険者達を乗せています。

本当に……前回、前々回とは頼もしさが雲泥の差ですよ。

「といつても……水兵の少ない我が国では、この程度の助力しかできないのが口惜しくありますが」

「……サディナ姉さんがいれば」

女王様の言葉に、私は思わず唇を噛んで、あの人の名前を口にします。

前にも触れる機会がありました但しが亜人への差別意識が強いこの国では、兵士も人間が主となっていて、亜人の兵士は非常に数が少ないです。

私の知っているあの人なら……きつと大きな力になってくれたでしょうけど。もし生きていてくれたなら……ぜひ会いたいですね。

「……ってか、なんでお前までいるんだ、メルティ」

ふと、ナオフミ様がそう言つて、女王様の隣に立っているメルティさんの方を向きます。

お城で女王様に報告をした時にまたお会いできて、こうして女王様と一緒に軍の指揮を手伝つてくださるそうなのですが……ナオフミ様が心配されるのもわかります。

「何よ、ダメなの？」

「女王もだが、国のトップとその後継者がホイホイ現場にきて大丈夫なのかと思つてな」

「母上の指揮がなくちゃ、軍はちゃんと動けないわよ。……それに私

だって、ナオフミの仲間なんだし」

じつとナオフミ様をにらんでいたメルティさんが、ぷいっと顔を背けて唇を尖らせませます。

そうですね……一度お別れをしましたが、私もまだメルティさんは仲間のままだと思っっています。仲間外れにされたら嫌ですものね。

ナオフミ様もそのことに気づいたのか、ふっと微笑みを浮かべると、メルティさんの頭を撫でてあげてました。

「…頼りにしてるぞ」

「…うるさい」

メルティさんは照れているのか、赤い顔でそっぽを向いてますが、振り払わないあたり嫌ではないようですね。

……あの、女王様？ どうして急にそんな、慈愛と期待に満ちた眼差しをメルティさんに向けているのですか？

セントさん？ リユウガちゃん？ どうしてそんなニヤニヤとした目でナオフミ様を見ているのですか？

私が言い表しがたい焦燥感に駆られていた時です。

ふと視線をずらしたセントさんが、突然ハツと目を見開いてナオフミ様の肩を叩きました。

「おい、ナオフミ。あそこ見てみるよ」

「ん……？ ラルクとテリス、それにイスルギか……あいつらも参加してくれてるんだな」

最近の姿を見かけませんでしたでしたが、ようやくお顔を見ることができましたね……全然見つからなくて、ナオフミ様も珍しく落ち込んでいましたし、一安心です。

あんなにもお強いお二人が一緒なら、今回の波は本当に安心して挑めそうですね。

「さつて……そろそろ時間だな」

「ああ、気を引き締めろよ」

「おうー！」

「はいー！」

「おーー！」

私達はナオフミ様とセントさんの号令で、声を合わせて拳を突き上げます。

そして、ナオフミ様の視界で刻一刻と減っていた時間が、ついにゼロになった瞬間。

私達の周囲の景色は一変し、毒々しい極彩色の空が広がる海原へと、船ごと放り出されました。

「転送されたー！ 波の亀裂はどこにー！」

「上だああああ!!」

全員で敵の姿を確認しようと、辺りを見渡した時です。

セントさんが叫び、指差す方向を見上げた私達に。

無数の魚型の魔物と、巨大な角を持ったクジラのような魔物が、遥か高くに開いた亀裂から落ちてきました。

「ー！ きゃあああ!!」

「メルちゃん!」

私達は角クジラ……次元ノ勇魚という名の魔物が落下した衝撃で、船ごと大きく揺さぶられました。

危うく吹き飛ばされかけたメルティさんはフィーロが救出しましたが、多くの兵士さんや冒険者さんが海へ投げ出されてしまったようです。

「……！ 被害報告!」

「数隻が航行不能に! 死者・負傷者数はまだ把握できていません!」  
揺れる船の上で、女王様が確認をとっています。

この状況で動けるなんて、なんて肝が座った方なのでしょう……私も負けて要られません。

ですが、海に落ちた方々をどうにかしなければ、みなさん溺れてしまいます。

「今いくぜ、お前ら!!」

【オクトパス!】【ユーフォー!】

声が出た方を見ると、セントさんがベルトに挿すフルボトルを交換して、別の色の鎧を纏っています。

タコと、レベル上げ中に見たゆーふおー?なる謎の乗り物の鎧で

す。

「つかまれ！」

「あ、ありがとうございます……！」

セントさんはふわふわと空中に浮かび上がると、タコの足を伸ばして落ちた兵士さん達を次々に救出していきます。

……いいですね、あれ。

セントさんにその気がないのはわかっていますが、私も欲しくなってきました。

と、私が考えている間にも、救助活動を行うセントさんが、ふよふよと別の船の方に……あれは、剣の勇者様がいる船に向かっていきますね。

「剣の勇者！ 大丈夫か!？」

「ふっ……問題ない！ ああ、何も問題ないとも!! 俺は今、これ以上ないほどに清々しい気分で戦っている!!」

「あ、はい」

ザクザクと剣を振り回し、これ以上はなさそうなほどに清々しい顔をしていますね。

波で気分が高まっているのはわかりますが、そうしてしまわれたのでしょうか、彼の方は……？

…あの、どうしてナオフミ様は、そんな呆れた目をされているのですか？

「おらおらおらおらおらあ!!」

「ドラゴニックファイニッシュ！」

ものすごい轟音が響いてくる方を見れば、リュウガちゃんが拳に青い炎を纏わせて魔物をタコ殴りにしていました。

最後に強烈な一撃を見舞うと、リュウガちゃんは鬱陶しそうに舌打ちをし、自分の周りに群がる魔物達を睨みつけます。

「ちっ……雑魚共が結構多いな」

「デカブツはナオフミ達に任せろ！ オレ達は雑兵の片付けだ！」

「【タカ！】【ガトリング！】【ベストマッチ！】【天空の暴れん坊！】

ホークガトリング！ イエイ！」

ぼやくりユウガちゃんにそう言って、セントさんは空中でフルボトルを交換します。

次に纏ったのはタカと銃器の組み合わせ、同時に生み出された銃を握りしめ、眼科の魔物達に無数の銃弾を浴びせかけていきます。

海の顔を出している魔物も船の上に這い上がってきた魔物も、すべて銃弾に貫かれ、ぼとぼと海に落とされていきました。

あれも羨ましいですね……使えるように練習を始めてみましょうか。

「くうう……！ 今だけセントちゃんが羨ましい！ 妬ましい！ いいなあ、変身……！」

「飛行能力、羨ましい限りです」

「お前から見惚れてないで戦え!!」

セントさんの戦いを見て、どうしてだか槍の勇者様や弓の勇者様が熱い眼差しを向けています。

前々から思っているんですが、あの方達……ナオフミ様もですけど、セントさんの鎧に異様に注目しすぎじゃないですか？

と、私が魔物を切り捨てながら、そんなことを考えていた時です。

海の中からまた、あの次元ノ勇魚が飛び出し、大きく強烈な波と水飛沫を巻き上げてきました。

「どわーっ!? あ、あつぶな……びつくりさせんじやねえよデカブツめ!!」

危うく角に貫かれかけたセントさんが、フラフラしながら体勢を整えています。

すぐさま発砲しましたが、銃弾は水飛沫に阻まれて届かず、それが収まった頃には、次元ノ勇魚はまた海深くへと潜って行ってしまいました。

「厄介だな……奴め、普段は海の中にいてここぞと言う時に突っ込んできやがる。その上皮膚がかなり硬い……！」

「飛び出してくるタイミングがわかればいいんだけどなー」

「そこは考えがある……考えるべきは仕留める方法だ。早くに決着をつけなければ、こっちの足場……もとい船が次々に沈められる」

こうして、恐ろしいほどに揺れてますからね……!

馬車旅で慣れてきたとはいえ、ここまでひどいとまた気分が悪くなりそうで……うっぷ。

「よし、オレがその辺の事を勇者達に説明してくる! ナオフミが言うより聞いてくれるだろ! 貸しあるし!」

「ああ、頼む!」

「おーい! お前ら〜!」

ナオフミ様にそう言っつて、セントさんはそれぞれ他の勇者様の乗っている船に向かって飛び立ちました。

こういう時、セントさんの気の良さや気軽さが役に立ちますね。

私も力を貸したいですけど……できるのは精々、這い上がってくる小型の敵を倒すことだけ。不甲斐ないばかりです。

その時、兵士さん達を指揮していた女王様が私達の方へ近づいてきました。

……いいえ、私達ではなく、私の方に?

「ラフタリアさん、実は任せたい役目があるのですが……」

「え? は、はい!」

実は初めてな、女王様との一人での対面。

思わず緊張する私に、女王様は勇魚を攻撃するある方法を教えてくれました。なるほど……それなら私にもなんとかなりそうです。

リュウガちゃんは自力で泳げると言っていましたし、フィーロと一緒に勇魚を誘い出す役目に向かうようです。

私達全員が、この戦いでなすべきことを見出し、配置についていきます。

「メルちゃん! フィーロ、行ってくるね!」

「うん、気をつけて!」

フィーロはメルテイさんにそう告げると、ナオフミ様を背中に乗せて海へ飛び込みました。

フィーロの白い影が海に沈み、見えなくなった頃、海の中に見えた魔物達の動きが明確に変わり始めました。

あの巨大な勇魚までもが、海中を動く存在の後を追いかけて、深く潜

り……そして。

「出てくるぞー！！ 構えろー！！」

遙か空を舞うセントさんが、円形に整列した船の上に向けて叫びます。

そして、海中からぐぐぐ……と低く轟く音が響いてきたと思えば。どぼっ！ と。

鼻先の角にナオフミ様とフィーロを引っ掛けた勇魚が、勢いよく飛び出しました。

「ラフタリアちゃん！ 女王さんに教えてもらった通りにぶちかませえ！！」

「はいー！」

「集中攻撃だ！ ぶちかませ野郎共！！」

「流星弓！！」

「流星剣！！」

「流星槍！！」

ヘイトリアクションを使い、魔物達を自分に引き寄せたナオフミ様が、勇魚に攻撃するチャンスを作ってくださいました。

そこへ私が、船に取り付けられたバリスタで大きな矢を撃ち、攻撃します！

あらかじめセントさんが伝えてくれたため、他の勇者様も攻撃に加わってくれています。こういう時はタイミングが合うんですね、全く！

ですが、いくら攻撃を加えても、勇魚が弱っていく様子は見受けられませんでした。ずっと力一杯暴れまわっています。

「おい！！ ほとんど効いてねえじゃねえか！ 連発しろ連発！！」

「無茶を言わないでください！」

「リキャストタイムが長い技なんだよ！」

本人達は一生懸命やっているようですが、やはり実力が足りていないようです。この数日間、カルミラ島で何をしていたんですか！？

かろうじて、剣の勇者様と弓の勇者様の武器が強く効いているくらいでしょうか。それでもやっぱり力不足は否めません。どうしたら



…!

「くそっ……また潜られちまうぞ」

「大変だなあ、セントローマあ、あとはオレ達に任せとけよ」

その時、セントさんやリュウガさんそのそばを抜け、飛び出す影が二つありました。

それは、大鎌を構えたラルクさんと、蹴りの体勢に入ったイスルギさん。

お二人はナオフミ様に労いの言葉を送ると、冒険者さん達から攻撃を受ける勇魚に向かい、そして。

「ヴェノムスパーク」

ごっつー！ ととてつもない轟音を立て、イスルギさんによって勇魚の体が歪むほどの一撃が叩き込まれ、毒が叩き込まれ。

その後、ラルクさんによって勇魚の体はバラバラに切り裂かれました。

目を疑うほどの早業で、正気を疑うほどの強力な技に、私達は啞然となるばかりでした。

「……あのデカブツを、ほとんど二人だけで。マジで何者だよ、あいつら……」

「やっぱ姐さん強え〜」

小型の魔物を掃討し終えたセントさんとリュウガさんが、そう言うて海に浮かぶ勇魚の死体を。

そしてその上に乗っているラルクさんとイスルギさんを見上げます。

落ち着いて見ても、本当に大きいです。こんな怪物を瞬く間に倒してしまふなんて、あの方達は一体何者なのでしょうか……？

「つかこれ、やっぱあいつらの獲物になるよな。今回ナオフミ以外の勇者は、こいつを倒すのに全然役に立ってねえし」

「……オレも成分採取できない感じ？」

「勝手にしたら流石に怒るだろうな……体張ったのあいつらだし」

確かに、今回の戦いの勝利の立役者はラルクさん達です。

いくら勇者だからといって、手柄を横取りするのは礼儀に反します。

……まあ、先に登っていった弓の勇者様方は、そんなことを考えているようには見えませんでした。

「しゃーねえ、姐さんに土下座でもしてわけてもらうか。おーい！」

「セントさん……それはちよつと」

「プライドねーのか、お前」

「ラフタリアお姉ちゃん、フィーロお腹すいた」

「これが終わったら、ナオフミ様に作っていただきましようね」

ぐずるフィーロをなだめながら、私達も勇魚の上に登ります。

セントさんではないですが、こうして力を貸してもらったのですから、ちゃんとお礼を言っておかなければなりません。いえ、別に土下座はしませんが。

そうして、ナオフミ様とラルクさん達の姿が見え始めた時。

「ナオフミ様！ラルクさんもイスルギさんも、ありがーー」

「来るなあ!!」

そこで私達は、信じられない光景を目の当たりにします。

倒れ伏した三人の勇者様達と、ナオフミ様に大鎌を突きつけるラルクさん。

そして、申し訳なさそうに黙り込むテリスさんと、不気味に笑みを浮かべるイスルギさんという。

どうしても受け入れがたい姿を見てしまったのです。

## 知りたくなかった真実

S i d e : F i l l o

フイーロだよ！

「ごしゅじんさまとお姉ちゃんたちといっしょに、波から来たたくさんの魔物とたたかって、おっきな魔物をたおしてきたの！」

でもね、ごしゅじんさまは鎌の人とかへびのお姉ちゃんとかのところに引っちゃったの。

「おーい、ナオフミヤーい。どこ行ったんだ、あいつ」

「ナオフミ様ー！」

セントお姉ちゃんもラフタリアお姉ちゃんもいっしょうけんめいさがしてるけど……どこに引っちゃったのかな？

……あれ？

なんだかあっちがうるさいね？　なんだろう？

「どわあああああああ!!！」

「うおっ!!?　……え!!?　槍の勇者!!？」

なんかうるさいところから、槍の人がとんできた！

どうしたんだろ？　すっごいボロボロになってるけど……フイーロ別にいいけどね！

「おっと……悪いねえ、思った以上に弱かったもんでなあ、加減を間違えちまった。まあ、お前さんの弱さを憎みなあ」

「……あ、姐さん……？」

フイーロ達がごぢゅじんさまをさがしてたらね、へびのお姉ちゃんを見つけたよ。

でもね、お姉ちゃん達は前みたいにニコニコしてなくて……ごしゅじんさまにすごい怖い目を向けてたの。

「……どういう事だよ、姐さん。なんで……こいつらに攻撃なんか」

「んー？　ちよいと邪魔になりそうだったもんで、しばらくどいててもらおうと思っただけ。なあに、手加減はした」

「ラルク、どういふつもりだ！」

「悪いな、坊主。この間とは、色々と事情が変わっちゃったんだ」

鎌の人はそう言つて、ごしゅじんさまに鎌を近づけてる。

どうして…? どうして、あんなになかよしてたのに、ごしゅじんさまにそんな目を向けてるの?

そしたらね、へビのお姉ちゃんが何かを……むらさき色の変な道具をとりだしたの。

「姐さん……それ」

「まさか!？」

すっごくみおぼえがあるそれを見て、セントお姉ちゃんがものすごくあわてだしたの。

ごしゅじんさまもすっごくあわててる。だってアレは、ファイロ達にひどいことした……コブラの人の持ってた道具だから。

「コブラ!」

「フハハハ……! 蒸血……!」

【Cobra………Fire】

へビのお姉ちゃんが、くろい道具にセントお姉ちゃんがよくつかつてるジューズのビンをさした。

そしたらへビのお姉ちゃんのまわりにまっくろな煙がとびだして、ばちばちつて火のこもとんできた!

それから、まっくろな煙がはれてつて、前に見たコブラの人になつちやつたの!

『久しぶりだなあ……あらためて、元気にしてたか、お前達』

声も前とかわつてつて、すっごいいじわるそうなおじさんの声になつちやつた。

なんで!? なんでなんで!? なんでへビのお姉ちゃんが、前にファイロ達をいじめたコブラの人になつちやつたの!?

「……嘘だろ、姐さん。そんな……あんたが、毒へビ野郎だなんて……そんな、オレを、騙してたなんて……」

『おいおい……前にも言ったはずだが、セント』

セントお姉ちゃんがふらふらつて、すごくショックをうけたお顔でつぶやいてる。ファイロやごしゅじんさまといっしょで、信じられないうって感じになつてる。

そしたらコブラの人、がばって手を広げて大きな声でしゃべりはじめたの。

『オレはブラッドスターク！ お前さん方の……敵だってな！』

「ま、そういうわけだ。この数日間は本当に楽しかった……できれば本当にダチになりたかったんだが、状況が状況だ、しょうがねえ」

そう言って、鎌の人がコブラの人のとなりにきて、いつしよに武器をかまえる。

ウソだってフィードも思ったけど、鎌の人もコブラの人もウソついでる感じじゃなくて、ホントにフィード達を敵と思ってるみたいだった。

「俺達の世界のために、死んでくれ」

鎌の人がそう言って、ごしゅじんさまにきりかかった。

コブラの人もいつしよで、フィードでもいつしゅん見えないくらいのはやさでとんできて、セントお姉ちゃんをけりとばしちゃった！

「セントー！」

「くっ…… がはっ!!」

セントお姉ちゃんはすぐにおきあがったけど、すっごくつらそうな顔をしてて、うずくまったままになってる。

リュウガお姉ちゃんがかわりに出て、コブラの人をにらみつけてる。

それを、コブラの人はお面でよく見えないけど、ぜったいいじわるに笑って見下していた。

『構えろよ、セント……オレは敵だとさつきから言ってるお？』

本気で来ねえなら……殺しちゃうぜ』

コブラの人のことばで、セントお姉ちゃんじゃなくてリュウガお姉ちゃんがイライラした顔になる。

それでぎりぎり歯を食いしばって、ものすごいきおいでコブラの人をなぐりにいつつたつた。

「おらああああ!! この野郎があ!!」

「おっとお!!」

すっごいいいたそうなパンチが出されたけど、コブラの人はぜんぜん

おどろかないで、ヒラって感じてよけちゃった。

リュウガお姉ちゃんはそのまま、コブラの人につかみかかっ  
てしーんっっておでことおでこをぶつけ出した。痛そう……！

「テメエ、どういうつもりだ……！ あのクソ教皇の手下じゃなかつた  
のか!?!」

『おいおい……オレあ、あんな小物にこき使われるような存在じゃ  
ねえよ』

「だったらお前は何だ!? オレ達を殺して、何の得がある!?!」

リュウガお姉ちゃんはおでこをコブラの人にぶつけて、ものすごく  
怒ってる。

きよーこーって、前にごしゅじんさまをいじめてたメガネの人で  
しょ?

そういえばあの人たちにおいかけられてたときには、はじめてあつた  
んだよね……でもあいつらの仲間じゃないの?

じゃあなんでごしゅじんさまいじめなの!? ねえ、なんでなんでえ  
!?!

『オレの目的を果たすには……お前達の死が必要なんだよ。口を動か  
すより、手を動かしな、小娘え……!』

「ぐおっ!?!」

コブラの人が思ってたよりつよかったみたいで、リュウガお姉ちゃ  
んはぶつとばされちゃった。

でもすぐに起きてたから、そんなにいたくはなかったのかな。すぐ  
に立ってまたパンチのかまえをとったよ。

「ごめんなさい……本当はあなたと戦いたくなんてないんだけど、私  
達にも使命があるの!」

「テリス……!」

宝石のお姉ちゃんもコブラの人たちとおなじみたいで、ラフタリ  
アお姉ちゃんにうでわを向ける。

アレって、前に宝石のお姉ちゃんにごしゅじんさまがおねがいされ  
てつくったやつだね。こうするためだったのか、むー!

だけど、宝石のお姉ちゃんが魔法をつかおうとしたら、ぼうつてと

びだした火がすぐに消えちゃった。

「…そう、あなたは戦いたくないのね」

宝石のお姉ちゃんはなんだか悲しそうな顔になって、うでわをはずしてべつのうでわをつけた。

それでごしゅじんさまが作ったのとはちがううでわで、ものすごい大きな火を出してきた！

「輝石・紅玉炎!!」

前とちがって、この火はすごく危なそう。

いっしょに冒険してた時のやさしい火だったけど、これはなんかちがう！

タフタリアお姉ちゃんといっしょに、とんできた火をよける！でもまだおいかけてくるよ、むー！

「お前達の世界って…どういう事だ!!」

「そのままの意味だ！俺達はこの世界の人間じゃねえ…俺達は俺達の世界を守る為に、お前達の世界を滅ぼす！そういう話だ！」

鎌の人とギリギリやってるごしゅじんさまがきくけど、鎌の人が言ってることの意味、ぜんぜんわかんない。

それでなんでごしゅじんさまをいじめるの？ わかんないよ!!

「意味わからねえ事…言ってるじゃねえよ!!」

ごしゅじんさまがガキーンって、鎌の人の鎌をはねかえす。

フィー口達、この島でいっぱいがんばってつよくなったんだもん！  
そうかたんにやられないよ!!

でも、セントお姉ちゃんだけ小さくなったまま、ぜんぜんうごかなくなっちゃってる。

「おいセント！ さつきから何やってんだ！ しっかりしろ!!」

「…うそだろ、姐さん…敵だなんて、そんな…」

「おい！ いいから立て！ 本当に殺されるぞ!!」

セントお姉ちゃん…へビの人が本当は敵だったって知って、シヨックで立ち上がれなくなっちゃったみたい。きもちはわかるけど、いまはダメだよ！

「オレが…盾の勇者の仲間になったからか？ だから、いや、でも

……あんたはオレを助けてくれて、恩人で、だから、なのに……!!」  
「セントー！」

「教えてくれ、姐さん……あんたが敵なら、ナオフミを殺して、世界を滅ぼすのが目的なら、だったらどうして！ 滅ぼす世界の住民であるオレを、助けたりなんかしたんだ!?!」

セントお姉ちゃんはぐすぐすしながら、コブラの人に聞いている。

ホントはぜんぶウソなんだって、セントお姉ちゃんやごしゅじんさまをからかってっただけなんだって、そう信じたいみたい。

でも、コブラの人はそれを見て、お面の下でケラケラ笑ってた。

『大した理由はねえ……強いて言うなら、お前がオレの目的の障害になるかどうか、監視するのが目的っちゃ目的だったな。まあ、違ったがな』

……へビのお姉ちゃんはもう、フィーロ達の友達じゃないみたい。

ごしゅじんさまをいじめる敵で、セントお姉ちゃんをだましてたウソつき。

たたかわなきやいけないんだ、って、フィーロとラフタリアお姉ちゃんが、かくご?を決めようとした時。

「……おや、もう始めていましたか」

波のきれつの中から、前にあった黒いお姉ちゃん達が出てきた。



## 因縁の再会

Side : Naofumi

「あの女……それに、コウモリ男……!」

「そうか……お前ら仲間だったのか」

久しぶりに、俺達の前に姿を現した二人組、グラスとナイトローグ。奴らが空から舞い降りて、ラルク達のそばに立った事で、奴ら全員の関係性を察する。

道理で強いわけだ……さつき勇者共が吹っ飛ばされてった構図なんて、この間とほぼ同じだったぞ。情けない……!

「苦戦していますね、ラルク。イスルギ……あなたならあの方々をすぐに無力化できるという話だったのでは?」

「そういうなよ、嬢ちゃん」

『ハハハ……オレにも情つてものがあんのよ』

ぎろり、と鋭い眼を向けるグラスに、ラルクはやや引きつった顔で、ブラッドスタークはさつきと全く同じ調子でしゃべっている。

あいつ、味方にもあんな腹の立つ喋り方をしてるのか?

って、バカウサギはいつになったら立ち上がるんだよ!? 人数が足りないんだよ!!

「しつかりしろ、セント! 立って戦え!」

「でも……だって……!」

「向こうは完全に俺達を殺す気だぞ!!」

グズグズすすり泣きながら、セントは涙目でブラッドスタークを見る。やる。

まあ……言いたい事はわかる。無条件で味方だと思ってたやつが本当は敵だったとか、わりかしありふれてはいるが、実際にあるとだいぶ心にくる展開だ。

俺だって……あいつらが俺の命を狙ってる敵だったとか、考えたくもねえんだよ。だからってなあ……!

「姐さん……頼むよ、頼むから……嘘だと言ってくれよ……!」

地面……ってか次元ノ勇魚の死骸の上で膝をつき、項垂れるセン

ト。

俺とリュウガはとつさにセントの前に出て、こちらを見つめてくる  
グラス達を睨み返す。

「……なるほど、躊躇うのも無理はありませんね」

『だろお？ ……オレだって心苦しいのよ』

「……どこまでが本音なのかはあえて聞きません。最低限役目を果たし  
てください」

『はいはい……』

そこまで仲がいいわけではないのか、仲間に向けるにはどこか刺々  
しい言葉を吐き捨てるグラス。

ブラッドスタークは肩をすくめると、手にした銃になんかこう……  
メカニカルな装飾がついた短剣を合体させ、ライフルのようにする。

野郎……本気でセントを殺す気か。血も涙もない奴め……つて、い  
い加減動けつつつてんだろバカウサギ!!

「セントさんー！」

「セントお姉ちゃんー！」

「心中お察しますが、これは波の戦い……敵であるあなた達に情け  
をかける事は、それこそあなた達への侮蔑に当たります。故に……」

『素直に死んでくれよ、なあ？ ダチ公共……！』

奴はガシャガシャ鎧を鳴らして、獲物をいたぶる肉食獣のような苛  
立たしい声を向けてくる。

正直、ラルク達だけでも結構苦戦していたんだ……グラスとナイト  
ローグが加わった今、どこまで戦えるか……！

必死に頭を巡らせ、俺は全員が生き残る道筋を探す。

なんととしてでも、ラフタリア達は生かして帰したい……そうじゃな  
きゃ、俺は絶対に死んでも後悔を残す。

……なんかちよつと、イライラしてきた。

なんでこんな事になってる？俺はラルク達に気を許したからか

？この島に来てしまったからか？レベル上げが甘かったせい  
か？

いや、違う……！

「いつまでも……メソメソしてんじやねえよバカウサギ!!」

後ろのバカが一向に戦おうとしてないせいだろうが!!!

俺は目を吊り上げて、うつむいたままのセントを怒鳴りつける。ラフタリアやフィーロがビクツと震えてるが、今そんな事を気にしている場合じゃない!!

「いつものお前はどうかした!? 能天気にならケラケラ笑ってるお前は!

性根が腐った人間を見たら怒りを燃やすお前はどこに行った!」

「ナオフミ……」

「そうだ! いつまでも腑抜けてんじやねえよ、バカ!!」

俺が叫んでいると、リュウガも両腕に青い炎を纏わせて、声をあげてきた。

ナイトログとブラッドスターク、かつて苦渋をなめさせられた奴らが二人とも揃っている光景に、やる気を漲らせている。

「いつものお前なら、相手が誰だろうと向かっていくだろ! 悪を許せないお前なら、オレ達と一緒に戦ってきたお前なら、あの野郎を何が何でもぶっ飛ばしにくだろうが!!」

「お前の大事な人を止められんのは! 間違いを犯そうとしてる奴を止められるのは……!!」

俺は知っている。闇の道を歩く事がどんなに孤独で苦しいか。

過ちを犯して、もう二度と戻れないかもしれないと思った時の絶望が、どんなに胸を締め付けるか!

大切な人を傷つけてしまった後悔が、どんなに自分の心を傷つけるか!!

お前だって……俺を見て、知ってるはずだろうが!!

「実験バカの正義のヒーロー、セントだけだろうが!!!」

俺とリュウガの声が、辺りに響き渡る。

ラフタリアが悲痛な顔で口元を覆い、フィーロも目を潤ませていた。俺からは見えなかったが、メルティもくつと唇を噛み締めていたのだとか。

ラルク達も思わず動きを止める仲、俺達の背後からため息の声が聞こえてきた。

「……最悪だ。見つともねえ醜態さらした挙句、こんな鈍感野朗と筋肉バカに教えられるなんて」

……筋肉バカはわかるが、鈍感ってどういうことだ。

詳しく問いただしたいところだが……今はそんな場合じゃないから黙っておく。

あとで覚えてろよ、セント……！

「そうだ……あんたはオレの恩人だ。あんたがどう言う目的でオレを拾ったって、その事実是不変わらない。だったら今度は……オレがあんたを止める番だ」

俯いたまま、ゆっくりと立ち上がる。

ベルトからフルボトルを抜き取って、ウサギと戦車を模した鎧を消し、脱ぎ捨てる。

そして……ギン、と鋭く覚悟を秘めた目で、ブラッドスタークを……いや、イスルギを見据える。

「オレが掲げた愛と平和を貫くために……オレはあんたを、倒さなきゃならないんだ!!」

『……ほう？ だったらどうするんだあ？』

小馬鹿にするように嗤うブラッドスタークに、セントは銀色の缶を……ラビットタンクスパークリングを取り出す。

『！ そりゃあ……』

【ラビットタンクスパークリング！】

そう、これは俺と出会ってからこいつが生み出したもの。

やつが知らない間に生み出した……ブラッドスタークが全く知らない、セントが執念で作り上げた新しい力だ。

仮面の下で目を見開いているであろう奴の前で、セントはそれをベルトにセットしてハンドルを回す、そして。

【Are you ready?】

「変身……!!」

【シュワっとハジける！ ラビットタンクスパークリング！ イエイ

イエー!

工場のようなギミックの中で、刺々しい、赤と青と白に彩られた鎧を纏う。

現時点での最強装備であるそれが、やかましい声を響かせて、生み出された眩しく輝く装甲を見せつける。

炭酸泡のような光を撒き散らして、セントは再びブラッドスタークを見据えた。

「覚悟しろ……その顔ぶん殴ってでも、あんたの目を覚まさせてやる!!」

『……フツ、フツハハハハ!!』

勇ましく吠えるセントに、ブラッドスタークが不気味に笑いながら迫る。

銃弾を放ちながらどんどん近づいていくが、セントはそれらを難なく躲し、握り潰し、突撃してきた奴を受け止める。

その衝撃で、辺りにもものすごい暴風が吹き荒れたのだった。

「いくぞ、お前ら!!」

「おうよ……かかってこい!!」

「っ……行きます!」

「うおー!」

「……どうやら以前とは異なる様子、相手にとって不足はないようですね!」

俺達も負けていられないと、目の前に立ちはだかる相手に向かって走り出す。

ラルク……お前も俺にとっては気のおけない相手になったが、俺に敵意を向けるのなら、俺は手加減なんかしないぞ!

【エレキスチーム!】

俺もすぐ横では、短剣に雷撃を纏わせたナイトローグがいて、リュウガに振り下ろしている姿がある。

だが、リュウガはばちばちと帯電するそれを平然と受け止め、逆にならないとローグの顔面を思い切り殴り飛ばして見せた。うっわ、すげえ吹っ飛んだぞ。

『お前……！ いつの間にかここまで力を!?』

「お前から逃げた後になあ!!」

ナイトローグは何度もリュウガに攻撃を加えるが、それで後ずさる様子は一切見受けられない。

方に、胸に、腹に強烈な一撃を受けても、リュウガは敵を睨みつけたまま、強烈な拳をお返ししていく。

なんとなく、自衛隊に攻撃食らうゴ○ラのことを思い出させる姿だった。

「おらおらおらおらおらおらおらあ!!」

『くっ……ぐあああ?』

リュウガはそのままものすごい連打を浴びせかけ、そのままナイトローグを天高くへ吹き飛ばしてしまう。

ガンツ! と思わずビビる音が響いたが、仮面とかが割れてるようには見えない。どんだけ頑丈な鎧なんだよ。

その横を見れば、セントとブラッドスタークがものすごい殴り合いを繰り返しているのが見えた。

だが、両方とも当たってない。寸前で躲すか受け流している。

『フハハハ……！ いいだろう、こちらも全力で相手をしてやる……ぬうあああああああああ!!』

ブラッドスタークは一度セントの元から離れると、何か力を溜め込むような雄叫びをあげる。

すると、奴の胸の蛇の衣装が輝き出し、巨大な二匹の毒蛇が這い出してくる。

奴らはそのまま、共学に目を見開くセントにぐるぐると巻きついていく。

「ふん…… おおおおおお!!」

巨大毒蛇に捕らわれたセントだったが、気合いの声とともに力を込めると、毒蛇達はすぐさま引き剥がされた。

セントはそいつらを掴むと、ブンブン振り回してあちこちに叩きつけ始めた。

『ヒュー、想像以上に力を上げてやがるな……!』

「たー!」

「はあああああ!!」

ボッコボコにされていく巨大毒蛇の姿に、ブラッドスタークはふぎけるような言葉を吐きながら後ずさる。

そこに、ラフタリアとフィーロの声も響いてくる。

二人はそれぞれテリスとラルクを相手にし、雨嵐とばかりに放たれる魔法をよけ、斬りかかっている。

俺もグラスの攻撃を全て受け止め、弾き返して反撃の隙を狙う。

重いが……我慢できないものじゃない! 俺たちが前と同じままだと思ったら大間違いだ! 後悔するんだな!!

「ちっ……こりや思ってた以上にヤベエな」

「以前はここまで強さではありませんでした……彼らの成長度合いを見誤った私の落ち度です」

「グラスの嬢ちゃんのせいじゃねえよ」

膝をつき、一旦後退するラルク達。

体にも結構な傷が刻まれ、少しずつ息が上がり始めている……まあ、こつちもそれなりに疲労が見え始めているがな。

だが逃しはしないぞ……この前の借り、まとめて全部返してくれるわ!!

そんな俺の考えに合わせるように、距離をとったセントがぐるぐるとハンドルを回していく。

そして……なぜかその両側に、フィーロとメルティが待機していた。な、なんで?

「合わせろ、お前ら!!」

「はい!」

「うん!」

セントに言われ、二人は小さく魔法の詠唱を始める。

ハンドルが回り、ベルトにはまったボトルからエネルギーが抽出され……セントの全身に行き渡っていく。

同じくりユウガも、でかくなつた胸を揺らしながらハンドルを回しまくる!

【ドラゴニックファイニッシュ！】

「おらあああ!!」

自分の周りに青い龍を召喚し、勢いよく飛び出し跳躍する。

空中へと躍り出たリユウガの背に青い龍が炎を吐き出し、蹴りの構えをとったリユウガに爆発的な加速と威力の割増を与える。

そして、全身を光らせたセントも高く跳び、蹴りの構えをとって叫ぶ。

「あんた達が何かを背負ってるんなら……オレ達はオレ達の愛と平和のためにあんた達を潰す!!!」

「暴風雨で薙ぎ払え！ タイフーン!!」

宙へ舞ったセントの背中に、フィーロとメルティが生み出した竜巻がぶつかる。

セントの蹴りはその風を受け、さらに威力を増しながら、大量の赤と青と白の気泡を撒き散らす。

【Ready GO!】

「いくぜえええええ!!」

【スパークリングファイニッシュ!!】

雄叫びとともに空中を貫いたリユウガとセントの蹴りが。

それぞれナイトローグとブラッドスタークの胸に直撃し、奴らをまとめて吹き飛ばしてみせたのだった。



## 別世界の戦士達

S i d e : S e n t o

渾身の一撃で、姐さんをぶっ飛ばした。

死ぬまでの威力じゃなかったけど、姐さんは勇魚の上に転がったまま動かない……だ、大丈夫だよな？ 殺してないよな？

あ、姐さんがガバツと起きた。よかった。

『フ、フフフフ……！ ハザードレベルも順調に上がってるようだな……強くなったな、お前ら』

ゆらりと立ち上がる姐さんに、オレ達は咄嗟に身構える。

何だ？ こっちが追い詰めてるつもりなのに、逆立場になってる気がする……この人の妙な存在感がそう思わせてるのか？

『だがこっちもまだまだいけるぜえ？ こっちにも通さなきやならねえ意地つてもんがあるんでなあ』

「ええ……こちらにも、譲れないものがあるんです」

「イスルギ姐さん……！」

正直……もうここで退いてほしいと思う。

一回覚悟を決めたオレだけど、やっぱり姐さんを殴るのは心が痛む……さつきも実は、ほんの少し拳が鈍ってた。

ナオフミ達にはバレてないっぽいけど、次ぶつかったら多分、もつと迷いが出てくると思う。

「本当に強えよなあ、坊主達……こうなりやこっちも、奥の手を出さなきゃならねえな！」

ラルクがそう言って、グラスに鎌を向けて何か、意識を集中させているような素振りを見せる。

何をするつもりなんだ……と、訝しむオレ達の前で。

ラルクの鎌からポンツ、と。

見覚えしかない道具……魂癒水、だったか？ が飛び出した。

「アイテムドロップ……！」

「ほらよ、グラスの嬢ちゃん」

「！」

ラルクは魂癒水の蓋を開けて、グラスに頭からぶっかける。グラスも何が何だかつて顔で困惑してるけど……魂癒水って、勇者独自の力であるSPを回復させるアイテムじゃなかったっけ？

と、オレが困惑していると、だ。

ドゴンツ!! と。

拳を構えていたリュウガが、何かの衝撃を受けて思い切り吹っ飛んだ。

「ぬああ!?!」

宙を舞ったりユウガは、そのまま海に真つ逆さまに堕ちて、大きな水飛沫を立てる。ぶくぶく泡が立って、浮かんでくる様子はない。

な、何が起こった…？

さつきリュウガが立ってたところには、困惑した顔になっているグラスがいる……あの一瞬で、リュウガをぶっ飛ばしたってのか？

「……ラルク、これはどういう事でしょう。力が恐ろしく湧いてきます」

「こつちの世界の技術らしくてなあ、グラスの嬢ちゃんには最適なものだろう？」

「……そうですね」

ふっ、とグラスが怪しい笑みを浮かべ、扇を構える。

オレの見間違いか、人間っぽく見えない奴の目が、ギラリと不気味に光った気がした。

「逆式雪月花!!」

「憤怒の盾!!」

ものすごい加速と共に接近してきたグラスに、ナオフミはあの黒い盾を構えて迎え撃つ。

触れた瞬間、強烈な炎が噴き上がってグラスを呑み込むけど……平然と、ナオフミとギリギリ鏝迫り合いをしている姿が目に入る。

「ナオフミ! 氣いつける!!」

「わかってる!!」

あの炎でもまだ効いてないのかよ……! あいつ、魂癒水を浴びた途端、力を上げただけじゃなくて防御力も上がってないか？

あの魂癒水に特に変わった様子にはなかった……って事は、あの急激なパワーアップはあいつの体質によるものって事か？

あいつ、どういう種族なんだ…!? 人間っぽくないし、亜人ですらなさそうなんだが……!

『そら、ローグ…… お前さんもしつかりやりなあ』

『フン……言われずとも』

オレが考えている間に、姐さんとコウモリ野郎がオレ達の方に向かってくる。

姐さんはまたあの蛇を出して、コウモリ野郎は……背中からでつかいコウモリの翼が生えた!

『フツハハハハハ!!!』

『ハアアアアアア!!!』

片や哄笑を、片や雄叫びを上げて、二人はオレに襲い掛かってくる。オレは勇魚の上をごろごろ転がって、二人の攻撃を躲す。だけど、二人ともすぐに戻ってきて、執拗にオレばかりを攻撃してくる。

くっ……まさか、オレの拳が迷ってるせいで鈍ってるの、ぜんぶばれてんじゃないだろうな!

「くっ……んなろお、舐めんなよ!!」

【ドラゴニックファイニッシュ!】

すると、海から這い上がってきたリュウガが走って来て、ベルトのハンドルを回し始める。

そして、自分の周りに青く燃える龍を呼び出して……上に乗った!?

「うおおおおお!!」

『ふんっ!!』

龍の背に飛び乗ったりユウガは、同じく大空を舞うコウモリ男に向かっていき、炎を纏わせた拳を振り下ろしていく。

ガキン、ガキンとぶつかって、空中での対決が始まっっちゃったんだけど。

え? いや、あの、色々突っ込みたい所があるんだけど……まずお前、それ、どうやってんの?

「……あんな機能、つけてたっけ」

『おいおい、自分の作ったもののスペックぐらい把握しとけよ、バカウサギ…』

「う、うるせえ！」

姐さんに冷静なツツコミを受けて、思わず頬が熱くなる。

だつてあんな風に作ったつもりないんだもん！ あれは必殺技をやる為に呼んでいたのであつて、背中に乗ったりするなんて考えてなかつたんだもん！

ああ、もう！

うるさいからぶん殴つて黙らせてやる！

「……ここままでして倒れないとは、本当に厄介な方々です。もはや、自分の身を惜しんでいる暇すらもない……！」

オレが姐さんと殴り合つてると、不意にグラスがそう言う。

そして……奴の気配が膨れ上がり、オーラが目に見えるようになってきた。

…代償付きのパワーアップ、ナオフミの憤怒の盾みたいなものか？  
奴め、ここで何が何でもオレ達を始末しておくつもりのような……しかも、自分の身を犠牲にしてまで。

「！ グラスの嬢ちゃん……それは！」

「ここで終わるわけにはいかないのです。いずれさらなる強敵として立ちはだかる敵ならば……ここで倒しておかねば……！」

「待て、嬢ちゃん！」

「グラスさん！」

ラルク達が止めてるけど、グラスが止まる様子はない。みるみる威圧感を増させて、オレ達を見据えてくる。

まずいな……あれの威力がどれだけかは知らないが、距離的にラフタリアちゃん達が巻き込まれかねないぞ！ 如何すれば……と、焦りを抱いた時だった。

「——今です、放て！」

突然、オレ達がいる勇魚の上に、幾つもの樽が投げ飛ばされてくる。

何だこれ……と、オレが訝しんだ途端、勇魚の体にぶつかった樽が爆発、紫色の煙を撒き散らした。

「うわわわわあぶ、あぶ、危なっ!?!」

「うお!?!」

樽はオレ達の周りに落ちて、何度も何度も爆発を起こす。

あつという間にオレ達の周りは紫色で埋め尽くされ、姐さんやグラス達の姿が見えなくなる……リユウガの所まで及んでるな。

ん？ この煙の臭いって……まさか!?!

「うっ……!?! こ、こりやあ……」

「ルコルの実の……爆弾!?!」

煙を吸ってしまったせいで、ラルク達は顔を赤くして膝をついていく。

そりやあ……一口で大の大人がぶっ倒れるような酒の元だもの、そんなもんを使った兵器を受けてただで済むわけがない。

……ってか、オレもこの状況は結構まずいんだけど。ここで沈むのはやだぞ!?!

「女王か……! 助太刀感謝する! 今なら……」

「くっ、こんな、もの……!」

何でナオフミ、あの煙の中でピンピンしてんの!? グラスなんか千鳥足になってんのに!

めったくそこに酒に強いって聞いたけど、いくらなんでも強すぎだろ!!

ああ、上でもリユウガがコウモリ野郎相手に無双してる! 逆にコウモリ男の飛び方ふらふらしてんのに!

「助かるぜ……これで全快だ!!」

【「ベリオンスラッシュ!」】

『ぐあああああ!?!』

リユウガはビートクローザーを取り出して、ロックフルボトルを鏝部分に差し込んで、柄頭を引っ張って力を溜める。

そんでコウモリ男に、この間よりがぜん強力になった斬撃を浴びせかける。

コウモリ男はそのまま、グラス達のすぐ近くに墜落して……頭からいったけど、大丈夫か?

「ですが……まだ!」

「だめだ、グラスの嬢ちゃん……時間だ」

フラフラの体で、なおも戦おうとするグラスをラルクが止める。

時間……前にも言ってたな、何かに気付いたと思ったら、急にオレ達を襲うのをやめて。何の時間だ……?

「じゃあな、盾の勇者ナオフミ……やっぱ違うな、坊主のままでもいいか。この決着はいつかまたつけよう」

「! 逃げるのか!」

「死ぬわけにはいかねえからな……」

姐さんもオレから離れて、グラス達の所に後退する。

コウモリ野郎も起き上がって、五人で一箇所に集まって……そんなで、グラスがものすごい目でこっちを睨んでくる。

「……またすぐに相見える事でしょう。その時は必ず、私達の世界を守るために……」

『そんじゃあ、この辺で失礼させてもらうぜ……チャオ♪』

「待て! 逃げんなあ!!」

『待たないねえ、オレが次に来る時まで、せいぜい強くなっている事だな……ふふふははははは——』

リュウガが吠えるけど、姐さんはあの黒い銃を構えると、銃口から真っ黒な煙を撒き散らし、自分達の姿を隠してしまう。

ルコルの実の煙も、煙幕もすべて腫れた時には……姐さん達はどう、影も形も見当たらなくなっていた。

しゅ、瞬間移動……? それとも姿が見えなくなった?

自慢の耳で気配を辿ってみるけど……どこにも感じられない。完全に、この場から居なくなってしまった。

「ラルク……くそっ!」

「テリスさん、イスルギさん……」

ナオフミが悔しげに声を上げ、ラフタリアちゃんやファイーロちゃんが切なげに顔を歪めている。

……なんで、こうなっちゃうんだろうなあ。

オレ、久しぶりにあの人に会えて、嬉しくて、楽しくて、最っ高の

日だと思ってたのに……なんで、こんな。

「イスルギ姐さん……オレはやっぱり……」

あんたが敵だなんて、思いたくねえ。信じたくねえよ……姐さん。だけど、そんなオレの想いに同意してくれる奴は、どこにもいなかった——。

「……ん？　なんだ、コレ？」

⊗

波の亀裂が閉じて、魔物の発生が収まった海。

今回もほぼほぼ役に立たなかった勇者共を回収して、兵士達が今回手に入った素材の回収に入ってる、けど。

オレはそこに混じる気になれなかった。

ブーツと空を見てるだけで、いつもなら喜んでいくフルボトル精製も、全然やる気になれなかった。

「大丈夫か、セント」

「……ああ、大丈夫だ。なんてことはねえよ……」

「嘘つけ、バカ」

やべ、リュウガに情けねえところ見られてた。

慌てて平静を取り繕ったつもりだったけど……ダメだったか。

リュウガは無言でオレを睨みながら、オレの隣に立つてくる。そして、ため息交じりに口を開いた。

「……お前、あいつに対してちよつと手加減してただろ」

「……バレた？」

「むしろなんでバレねえと思っただよ……つたく、甘っちよろい奴め」

やっぱバレてたかあ……筋肉バカのコイツに見破られるって事は、相当酷い顔してたんだな、オレ。

オレが自分の頬をムニムニ触っていると、リュウガはまたため息をついて、オレから目を逸らした。……そんなに見苦しい顔してるか？

「気持ちわかる、恩義を捨てきれないのもわかる……だがあいつは次こそオレたち達を殺しにくる。そんな時、お前ちゃんと戦えるのか」

？」

「…わからねえ」

「じゃあ、次はオレがあいつの相手をしてやるよ。お前は引っ込んでろ」

そう言われて、オレは思わず苦い顔になる。

他人にあの人が倒されるのは…：…なんか、いやだ。

たぶん、次に会っても拳が鈍ると思うけど、それを他の奴に任せるのは、なんか違うと感じる。

「それが嫌なら、しっかりとメエでケリをつけるんだな」

…：…ほんと、今日の俺って最っ悪だわ。

筋肉バカに説教されるし、あと多分ナオフミ達にも心配かけてるし、まじで凹む最後だったの…：…こんちくしょうめ。

「あ、そうだ。忘れてた…：…ほれ」

オレが黄昏てると、リュウガが何か手渡してきた。

何だコレ？ リュウガが渡してきたのは、なんかこう…：…赤い、銃のグリップみたいな形で、メーターがついてるなんらかの機械だった。

「…：…何だコレ？」

「あのへび野郎とコウモリ野郎が逃げてった後に落ちてた。なんかの機械だよな、これ」

「…：…姐さんの持ち物、か？」

あの戦闘中に落としてったのか？ だとしたらなんか違和感があるな…：…あの人が落し物したまま逃げてくなんて、イマイチ想像できない。

オレはリュウガに渡されたそれをしげしげと見つめ、ある部分に気付く。

機体のはしつこに、小さく文字が刻印されている…：…なにになに？

「『ハザードトリガー』…？？」

刻まれていたその文…：…いや、名前。



その名に何故か、オレは背筋にゾクリと寒気が走った気がした。

## 捨てられた少女

S i d e : F i l l o

フィードだよ！

今ね、フィードすっごい気分がいいの！

だって、ごしゅじんさまが帰ってきたらほめてくれそうなことしたから！

「ふえええええ…！ 離してください…！」

フィードの足元で、みどりのかみのお姉ちゃんが泣いてる。

フィードをおしのけて海に行こうとしてるから、フィードがんばって止めてるの！ だってまたおぼれそうなんだもん。

「フィード、お前何してんだ…？」

「あ、リュウガお姉ちゃん！ あのね、このお姉ちゃんが海で遊んでたのに溺れてたからね、フィードが助けたの！ えっへん！」

セントお姉ちゃんとリュウガお姉ちゃん、それとラフタリアお姉ちゃんが帰ってきたから、みどりの髪のお姉ちゃんをはなしてせつめいしたよ。

また海に行くのかなって思ったけど、お姉ちゃんほどきつてすわりこんじやった。もう溺れるのはこりごりになったのかな？

「遊んでたあ？ 海で…って、お前それは」

「…まあ、とりあえずファインプレーだな」

セントお姉ちゃんもリュウガお姉ちゃんも、何だか呆れた顔になってたけど、フィードの頭をなでてくれたよ。

んー、ごしゅじんさまになでられた方が気持ちいいー。

…あれ？ ラフタリアお姉ちゃん、どうしてそんなこわい顔してるの？

「お前さん、なんだってこんな事をー」

「ここにいたか、お前達…：リーシアも、未遂で済んだようだな」

リュウガお姉ちゃんのみどりの髪のお姉ちゃんに聞こうとしたら、ごしゅじんさまが帰ってきた！

フィード、がんばったよ！

って言おうと思ったたらごしゅじんさま、なんにもきいてないのに  
ファイロの頭をなでてくれたの。

いいことするってきもちいいね！

「ナオフミ、未遂ってどういう事だ？」

「……詳しく話すどだな」

ごしゅじんさま、何だかすごくイライラしてる顔でセントお姉ちゃん  
におしえてる。

えーつと…このお姉ちゃんはリーシアってお名前です、弓の人と一  
緒のパーティーにいてー。

このあいだの波でがんばって、ごしゅじんさまが危なかったところ  
も助けてくれたけど、それがいやだった弓の人に追い出されちゃった  
んだって。

ええ…弓の人、バカなのかなー。

「あの援護はこいつのおかげだったのか…：…それで、その功績を妬ま  
れて追い出された、と」

「セントさん…：…もう少し言い方に気を配ってください」

「氣い使ってどうなるんだよ、こいつもう自殺までしかけてんだぞ？」

セントお姉ちゃんの言葉とリュウガお姉ちゃんの言葉で、リーシア  
お姉ちゃんもつとおちこんじゃった。

どうしておちこむの？ そんなイヤなこと言う弓の人なんかと  
いっしょにいたって、何にもおもしろくなくさそうなのに、へんなのー。

「…：…で、どうする気だ？ こいつほつといたらまた…：…」

「わかってる…：…正直、樹の言い分には俺もムカついてるんだ…：！」

セントお姉ちゃんに聞かれて、ごしゅじんさまはまだイライラした  
ままリーシアお姉ちゃんの前にしゃがんだ。

「リーシア…：… お前、このままでいいのか？ あいつらにバカにさ  
れたままで、見下されたままで、泣き寝入りして自殺して、そんなも  
のが結末でいいのか!？」

「ふえ…：!？」

「正直今のお前は見ていてイライラする…：… 抗うこともしないで、  
逃げようとしてるお前は…！」

「ごしゅじんさま、何に怒ってるんだろう……弓の人とかがキライなのは知ってるけど、リーシアお姉ちゃんにも怒ってる気がする。」

「ラフタリアお姉ちゃん達が止めようとしてるけど、ごしゅじんさまは全然怒るのをやめなかった。」

「どなられてるリーシアお姉ちゃんはずっと下を見てたけど……だんだん顔を上げて、ぐちゃぐちゃになった目でごしゅじんさまを見つめだした。」

「それが嫌なら……俺の手を取れ！俺がお前を強くしてやる！あいつらの鼻を明かせるぐらい、引きずりあげてやる!!」

「……私の気持ちは、樹様だけのものです」

「ああ、それでいい！あんな奴でもそこまで惚れてるんなら、見返せるぐらい這い上がってみせろ！」

「ごしゅじんさまは手を出して、リーシアお姉ちゃんを待ってる。」

「ラフタリアお姉ちゃん達もしずかになって、ごしゅじんさまとリーシアお姉ちゃんをじっと見つめてる。」

「そしたら、リーシアお姉ちゃんはちよつとずつ手を伸ばして、ごしゅじんさまの手をつかんだ。」

「よろしく……お願いします……」

「なんだかよくわかんないけど……リーシアお姉ちゃんがファイロ達の仲間になったってことでいいんだよね？」

「わーい！友だちがふえたー！」

Side : R a p h t a l i a

「く……苦しい」

「帰りもこれだつて事すっかり忘れてた……！」

「い、医者……」

「カルミラ島の活性化が収まってしばらく、私達は船に乗り、メルロマロクへと帰還しました。」

「城に帰還し、女王様に感謝の言葉を述べてから、ナオフミ様と共に馬車に乗り、ナオフミ様が目指すどこかへ向かいます。」

「ナオフミ様……一体どこへ向かわれているのでしょうか？」

そちらも気になりますが……今は特に、新たに仲間となったリーシアさんの事があります。

「あの、ナオフミ様。リーシアさんを鍛えるとおっしゃいましたけど、具体的にはどうするおつもりなんですか？」

「まずはごいつの実力を調べてからだ。メニューを決めるにしても、改造……もとい、強化方法を考えるにしても、能力をきちんと調べておかないとな」

「……今改造って言った？　もしかしてオレがやんなきゃいけないの？」

「……セントさんも少し引いています。

「実力をあげて、弓の勇者様を見返してやると言うお考えは納得しましたが……そう簡単にできるとは思えません。普通じゃないのは確かですよ。」

「ねえごしゅじんさま、メルちゃんにはいつまた会えるかな？」

「大丈夫だ、近いうちに会えるぞ」

「ほんとー!？」

「フィードはマイペースですね、まあ、仲がいいのはいい事ですけど。それにしても、どういう意味でしょうか？」

「旅が終わって、今回の波の時のような場合でない限り、メルティさんとはそうそう会えなくなってしまうはずですが。」

「あの……すぐに会えるとは一体どういう意味で」

「見てのお楽しみ、ってところだな」

「そう言つて、ナオフミ様は私にウインクをされました。」

「むう……ずるいです。そんな風に、カツコよく言われてしまったら許す以外にないじゃないですか。」

「……あの、どうしてリーシアさんは、そんなに怯えた目でナオフミ様を見ているのですか？」

「……この方角って確か……？」

「馬車が進んでしばらくして、私はだんだんと、辺りの景色に見覚えがし始めた事に気付きました。」

はつと息を飲む私の後ろから、リーシアさんがきよとんとした顔を覗かせます。

「えつと……あの廃墟は、もしかして」

「…はい。私が生まれた故郷で、最初の波の被害を受けた場所です。……」

徐々に見え始める、領主様の家があった場所。

屋根も壁も崩れ落ちた残骸が残っているだけの、私の心にズキンとした痛みをもたらす景色……が、見えるはずでした。

ですが、廃墟が残っていたはずの場所には、真新しい建物が建っていて……!?

「……あー！ もう……やっと来たのね、ナオフミー！」

私達がそこへ……かつての私の故郷、ルロロナ村の跡地があった場所に着くと、なぜかメルティさんが出迎えました。

その隣には、工具を持った兵士さんがいて、壊れた家を撤去し、新しく作る作業を行なっています。

それだけではありません。

辺りを見ればちらほらと、見覚えのある方々がいて、色々な作業を行なっている姿が目に入ります。

「よお、盾の兄ちゃん！ 無事で何よりだぜ！」

武器屋の親父さんに、薬屋のおじさんに、服飾屋のお姉さん……私達のこれまでの旅で出会った方が、大勢集まっています。

「兄ちゃん！ ラフタリアちゃん！ おかえり！ 見てくれよアレ、すごいだろ!!」

「キール君……すごいって、何が」

キール君も、前に助けてくださった領主の方もいらっしやいます。

駆け寄ってくるキール君を抱きとめて、一体ここで何が起こっているのかと、呆然と立ち尽くしてしまいます。

ふと、視線をあげた私の目に、あるものがはためく様子が映りました。

「旗が……！ 村の旗が……!?!」

最初の波で倒れ、その後暴徒と化したこの国の兵士達によって奪われたセーアエツト領の旗が、そこにありました。

これでは昔に……波が起こる前に時間が戻ったみたいじゃないですか。

「これまでの波での功績で、領地を貰えることになった。まだ正式じゃないが……こうして、前々から知り合いに呼びかけて人を集めていた。セントやリユウガの伝手も借りてだけどな」

「結構大変だったんだぜく？」

「ま、こんだけ集まりや色々できんだろ」

ナオフミ様の説明に、セントさんとリユウガちゃんが続けて語ります。

そういえば、以前に親父さんのところで何か意味深に話していたよな……あれは、この事だったのでしようか。

あの時からずっと……この地を復興させるために、皆さんで。

「ルロロナ村は復活する……お前の帰る場所を、完全ではないが、元に戻してやれるんだ」

そう微笑みかけるナオフミ様の言葉で、私はつい、目を涙で潤ませています……私に秘密で、こんな。

……でも、それは喜びではなくて、胸を刺すような悲しみのためでした。

## お前と共に

S i d e : S e n t o

オレ達の頭上……前の領主の館の廃墟の上で、ナオフミとラフタリアちゃんが復興途中の村を見下ろしながら話してる。

ラフタリアちゃん、驚いたろうな……フィーロちゃん以外全員知ってたし。

あ、新しく面子に入ったりシアちゃんも知らないか。

「ナオフミ様……これって」

「女王に掛け合ってたな……いつか、お前の故郷のみんなも探し出して、ここに連れてくるつもりだ」

まあ、今まで出会ってきた連中に片っ端から声かけて、手を貸してくれた奴が集まってようやくここまで来たけどな。

まだまだ物資も金も人も足りないんだよな……。

人より働けるリユウガとフィーロちゃんもいるけど、あいつら若干燃費悪いから、その分食費掛かるんだよな。

早いとこ、ラフタリアちゃんと同郷のを探し出して、手伝って貰いたいもんだ。

「俺にできる、お前への恩返しだと思ってくれ。お前は俺に救われたと言ってくれたが……逆だ。俺がお前に救われたんだ」

おや、おやおやおや？

なんだか上でいつの間にかいい雰囲気になりかけてない？

ちよつと気になったから聞き耳を立てていると……リユウガにムチャクチャじとつとした目で見られた。

いいじゃんか、そろそろあいつらの関係にも進展があっというと思

「……いつか、俺がいなくなっても、ここにはお前の仲間がいる。大丈夫だ、もう二度と離れ離れになんか——」

「イヤです!!」

うおっ、びっくりした!

聞き耳立ててたせいで、余計にラフタリアちゃんの悲鳴じみた声が



聞こえちゃった。どうしたんだ、いきなり。

「ラフタリア……？」

「イヤです、いなくなってもなんて……そんな未来想像したくありません！ そんな事……私の求める幸せじゃありません!!」

あー、なるほど、ナオフミの考えがちよつと先走つちまった感じか。

ナオフミは前々から帰りたいてって言ってたし……ラフタリアちゃんの事を考えてのこの復興作業なんだけどな。

……ラフタリアちゃんの気持ちもわかるから、どつちが悪いとか正しいとか、一様には言えねえよな。

「だ、だが……ここにはフィーロもメルティも……」

「ナオフミ様がないじゃないですか!! 私は……！ 私はずつと……ナオフミ様の元に、あなたのそばにずつといたいのです!!」

おおつとここでラフタリアちゃんの渾身の告白!

さすがの鈍感野郎ことナオフミでもこれは気づくか……あ、だめだ、困惑してるだけで気付いてないっぽい。

……おい、リュウガ。

お前も聞き耳立ててんじやねえか、同じ穴のムジナめ。

んー、どうしたもんか。

ナオフミの奴、困った顔のままうんともすんとも言わなくなつちまってるし……よし、ここはラフタリアちゃんに味方しておくか。

「ナオフミや、もうちよつと真剣にラフタリアちゃんの話聞いておやんなさい」

「……だが、俺は」

「そんだけお前が大好きなのよ。ここにいるもよし、帰りたきや連れていくもよし、選択肢なんざいくらでもあるだろうに」

本人の悦ぶ事をしたいてって気持ちは尊重するけど、本人の気持ちを無視するのもつといけない事だ。

ここまでやっちゃってるから途中でやめるつもりはないけど、ちゃんとラフタリアちゃんの望みを聞いておくべきだな、なんせ惚れさせた女だもの。

「そんな事、できるんなら……」

「それが、死に逝く人間の未来を変えた男のケジメってやつだ。……縁つてのは、千切っちゃいけないもんなんだよ」

オレはその縁を、記憶と一緒に失くしちゃったからな……。

今でこそ、こうやってたくさん仲間ができてるけど……記憶を失う前のオレにも、誰か大切な人がいたかもしれない。

そう考えると……苦しさで申し訳なさが湧いてくる。

「……しけたツラしてんじゃねえぞ、セント」

「……なんだよ、慰めてくれてるのか？」

「うるせえ、黙れバカウサギ」

オレが遠い目で空を眺めてると、隣に來たりユウガがぶつきらぼうにそう言ってくる。

けっ、こいつにこんなふう心配されるようじゃ、オレもまだまだだね。

……そら、ナオフミよ。ひとまずでいいから、答えを返してやんなさいな。

「……最初は最悪な事だらけで、なんでこんな世界を救わなければならなんだ、ってばかり考えていたのに。いつのまにか、そばにいろんな奴が集まって、関わってきて……ほんと、どうしてこうなったんだろうな」

うん、確かにどうしてこうなったんだろうな。

オレも噂を聞いた後だったから、マジで関わるつもりなかったのに、なんかほっとけなくなっちゃったんだよな。

それで、リュウガと出会ってフイーロちゃんが生まれて、王女さんと遭遇して……他にも色々であって、それで今、ここで手伝ってくれる。

ほんとに不思議なもんだ、縁つてのは。

「どうせ、波をどうにかするまで帰れやしないんだ。いつまでかかるかわからない……一年か十年か、それ以上か」

「帰る気なんてまだまだ起きねえだろ？」

「ああ……ずいぶんな重荷をたくさん抱えてしまった。今はまだ、帰れない」

義務感とかそんなんじゃない、まだ帰りたくないって雰囲気、今のナオフミから感じる。

大事な思い出ができたなら、その分帰りたくない気持ちは大きくなる……それが多ければ多いほど、な。

「ここから先はもつと過酷な旅にある……それでもついてくるか？」

「あなたのそば以外に、私の居場所なんてありません」

「……しつかり、ついてこい」

「……はい！」

例によつて、ラフタリアちゃんの気持ちに気付いてないっぽいけど……まあ、これからだよな？　いつかは振り向かせられるよな？

このままこの焦れ焦れした感じが続くとかははないよな？　決着つけてくれるよな？　信じてるぞ、ナオフミ。

……こいつらが少しずつ心を寄せていくのを眺めるのも一興か、せいぜい楽しみにさせて貰おうかね。

……あ、やべ。王女さんと話してたファイロちゃんが戻って来ちゃった。

っていうか、なんでか知らないけど、キール君も他の子も興味津々にナオフミの方見てるし。

「……しゅじ……むがっ」

「今はちよつと静かにしてろ……！　あいつら何か知らねえ間にいい雰囲気になってんだから……」

「むむ……」

「ふええええ……！」

大声を出して駆け寄ってきたファイロちゃんを、リュウガががばつと抱き留めて口を塞ぐ。

お前……たまにはちゃん空気を読めるんだな。リーシアちゃんもすぐに状況を察して声を抑えてるし。

ただ、ちよつとばかり反応するのが遅かったみたいだけど。

下で騒いでるリュウガとファイロちゃんに気付いて、ナオフミがちよつと頬を赤くして睨んできてるし。

「おい、やめろ！　そんな目で見るとはじゃない!!」

「わー！ 兄ちゃんが怒ったー!!」

「逃げろー!」

ナオフミが怒鳴りつけて、リュウガ達やキール君達が笑いながら逃げ出していく。

明るくなつたもんだ……その事にホツとしながら、オレはにやりと笑みを浮かべてみせる。

「つたく、うるせえ奴らだ……やーいナオフミのムツツリ〜!!」

「セントてめえええええ!!」

とうとう怒りが限界に達したナオフミが、廃墟の上から飛び降りてオレ達を追いかけてきた。

はっはっは、捕まえられるもんなら捕まえてみる……って!

ナオフミよりも先に、ラフタリアちゃんがものすごい速さで追っかけてきた!?

「ふふふ……逃がしませんよ、皆さん……!」

「うわああああ!」

「ぎゃー! 待つて待つて待つてラフタリアちゃん! オレ達が悪かった! すまん、だからガチギレしながら追っかけてくるのはやめてくれエエエ!!」

おっそろしい笑顔を浮かべたラフタリアちゃんに追い回され、オレ達は皆くたくたになって倒れ込むのだった——。

☒

武器屋のおっちゃん達が街に帰って、ナオフミ達も馬車に戻って寝静まった頃。

オレは一人、ナミのさざめきが響く砂浜に腰を下ろし、ある物を弄っていた。

「……ロック解除、と。さて、色々と見せてもらおうかねえ……」

オレは手にしたそれ、イスルギ姐さんか落としたと思われるアイテム——ハザードトリガーを目の前に掲げる。

すると、メーター部分から光が放たれ、オレが前にした岩の表面に映像が映し出された。

危うく騙されるところだったぜ……まさかこのアイテムに、こんな

ものが隠されていたなんて。オレじゃなかったら気付かなかったぞ。『——はじめまして、かな？ これを見ている人は、おそらく僕と同じ科学者で、ボク並みに優れた頭脳を持った人間だろう』

そう名乗る、オレと大体同じか少し下の背丈と年齢の女。

なんとなく、自意識過剰なインテリ系って感じの、割と整った顔立ちの人間の女が映し出され、語り始める。

『このハザードトリガーを見つけてしまった以上、君にはボク達の戦いに巻き込まれる義務がある。ボク達の敵は非常に危険だ。この力が必ず必要になる——』

やや粗い映像の中、その女はオレを……この映像を見る者に語る。

と、不意にはっとした顔になり、居住いを正してから笑みを浮かべると……ある聞き捨てならない一言を発したのだった。

『ああ、そうだ。自己紹介がまだだったね。ボクの名前は葛木タクミ

……——の勇者だ』

To Be Continued…

## 第六章 ジャイアントな破壊者〈前編〉 勇者の朝

Side : Naofumi

宝石をガリガリ削って形を作り、表面を磨いて光沢を出させる。

この削り出しと研磨作業も、始めてからずいぶん時間が経った今じゃ慣れたものだ。昔は結構おっかなびっくりだったもんな。

今のところまだ少ない額だが、大事な領地の収入源だ。

この先の波に備える為……人を増やして戦力を整える為にも、金はある。それもより多く。

ただ……今までずっと張り詰めた日々を過ごしていたせいか、こうして無心で作業に没頭するのは初めてかもしれない。

ビッチに騙され、冤罪で立場を落とされ、生きるために必死に足掻いて足掻いて……そんな中でラフタリア達に出会った。

はじめは自分のためにあいつらを利用していたが……いつからかあいつらの為に戦いたいと思うようになった。

俺を信じ、命がけで助けてくれるあいつらの為なら……正直なんだってできる気がした。

ただ、だからこそこうして気を張る必要なく、のんびり過ごせる時間は貴重でありがたい。ラフタリア達には、しっかり休む時間が必要だ。

願わくば、もうしばらくこんな時間が続いてくれれば――。

「ふんっ！ ふんっ！ ふんっ!! ……オラ、キール！ もつと腹から声出せえ!!」

「お……オッス!! せいやあ!!」

「そうだいいぞ……！ お前の力をオレに見せてみる!! オラア!!」

バキッ！ ……と手元が狂って、削っていた宝石が欠けた。

軌道修正すれば十分使えるが、デザインを少々変える必要が出てき

た。……あの野郎。

「おい、うるさいぞ筋肉バカ！ そのやかましい声をもっと静かにできないうのか!？」

「ん？ ああ、悪い悪い。いやあ、キールの奴が張り切っててさあ！

ついオレも熱が入っちゃって」

「兄ちゃん！ オレ、頑張つて強くなるからな！」

「ああそうか、わかったわかった……だったらもう少し周りにも配慮してくれ」

俺はたまらず、作業場の近くでスパーリングをしていたキールとリュウガに怒鳴った。

こいつら……俺がいるのにわざわざこんなところで鍛錬するか!？」

さつきから我慢していたが、うるさくて仕方がないんだよ！

「つーか、キール……お前、こいつが師匠でいいのか？ 俺にはこの脳筋が何かを教えられる人物にはとても思えないんだが」

「リュウガ姉ちゃんはオレの目標だ！ 強くてカッケエ大人なんだ！

だからオレも、リュウガ姉ちゃんみたいな強さが欲しい！」

「よし、よく言った！ ならばお前には、オレの全てを叩き込んでやる！ もっぺん組手だ!!」

「オッス!!」

完全に師弟関係が出来上がっている、だと。

波長が合うのかやたら仲いいんだよなあいつら……まあ、険悪になるよりはずっといいが。

キールもずいぶん落ち着いたしな。地下牢にいた頃とは雲泥の差だ。

しかし……鍛錬か。

あれだけやる気を出しているということは、戦う事に結構意欲的なのかね。波の件で怖がるかと思つたが……いや、だからこそか。

あいつはあのまま、リュウガに任せておいた方がいいかもしれないな。

「いしゅじんさま〜！ 遊んで〜！」

とか思つてたら、フィー口がものすごい勢いで突っ込んできた。一





「ん？ おおナオフミ！ 久し振り……ん？ 久し振り？ うん、久し振りだな！ 腹減ったからなんか作ってくれ」

煙の中から飛び出してくる白衣の女……セントを睨んでみると、本人は呑気に笑いながら駆け寄ってくる。

ラフタリア達から覚めた目で見られていることにも気づいていないのか、全身真っ黒のままへらへらしている。

「いや、今作ってる新兵器がなかなか難しくってさ！ 思わず没頭して飯食うのも忘れてて！ あ、いまはなんか肉の気分だから肉にして！ メシメシ〜！」

……なんか、頭の奥でぶちって音がした。

人があれこれ悩んで頭抱えている間にこの女は……あれでも行商の商品作りの一環だとかパーティーの強化のためとか、理由があるのはわかってる。わかってるが……!!

人の迷惑ぐらい考えんか!!!

「いっぺん黙れ、バカウサギ!!!」

「ぎにゃあああああああああああああああ〜!!!」

俺の咆哮と共に、胸から紫電を走らせたセントが、思いつきりひっくり返って悲鳴をあげた。

……根無し草だった俺達が拠点を得て、国の協力も得て、この先の戦いに少しは余裕が出てくるかと思っただが……俺の負担が増えるだけにしか思えない。

この先、こんなんで大丈夫なのか……本当に、先が思いやられる。

## 二人の決意

S i d e : K e e l

朝の鍛錬を終えたオレは、兄ちゃんに連れられて王都にやってきていた。

なんかよくわかんねえけど、他の勇者と情報交換したり、会議したり忙しいんだって。

兄ちゃんが忙しいのは、色々やってるのを見てるからわかるんだけど……他の勇者って大変なのか？ 兄ちゃんに比べて、あんまり活躍してるっぼくないんだけどな？

カルミラ島の波でもイマイチだったって、村に巡回に来てくれる兵士達が言ってたぞ。あ、リーシアちゃんはすげー頑張ってたみたいだけど。

でもリーシアちゃん、目立ちすぎて弓の勇者に追い出されたみたいだし、オレからした他の勇者の印象はあんまし良くないな。

まあ、どうせ会うこともあんまりないだろうから気にすんなって姉ちゃんも師匠も言ってたし、いっか！

「……つたくよお。ナオフミの奴、あんなに怒んなくたっていいじゃないか」

ちよつと涙目になったセント姉ちゃんが、奴隷紋のある胸をさすつてぶつくさぼやいてる。さつき兄ちゃんにお仕置きされたからだな。

あれ、やられるとスツゲー痛いのが知ってるから同情するけど……でもなあ。

「正直に言っついていいか？ セント姉ちゃんの自業自得だと思う」「えー」

オレもリユウガ姉ちゃん……いや、師匠との修行中に騒ぎすぎて怒られたけど、オレ、ちゃんと謝ったぞ。

ていうか、セント姉ちゃんの実験は怖いから、村の中であんまりやらないで欲しいんだよなあ。

「セントさんがそう言う人なのはわかってるつもりですけど……で

すが、最近は特に生活が酷くなっている気がします。ちゃんと寝てますか？」

「大丈夫だよラフタリアママ……人間寝ないだけで死なないから」

「大丈夫じゃありません!! 誰がママですか!？」

ヘラヘラ笑ってるセント姉ちゃんに、ラフタリアちゃんが厳しく叱る。でも全然堪えてねえ。

姉ちゃん……無茶苦茶なこと言ってるなあ。

ラフタリアちゃんが起こるのもしようがないだろ。結婚もしてねえのにママ呼ばわりされてるし。

……すげえ綺麗な大人になってるから違和感はないけど。

「そう怒るなよお……代わりにナオフミのことをパパって呼んでもいいんだぜ？」

「っ……! そういう、問題では……!」

「揺れんな、処女」

「ゆ、揺れてません! 処女で何が悪いんですか!？」

ん? なんかセント姉ちゃんにボソツと小声で言われたラフタリアちゃんが真っ赤になって固まった。何言われたんだろ。

「ふふ……でもラフタリアさんは本当にいいお母さんになりそうですよね」

「リ、リーシアさんまで!!」

「ラフタリアお姉ちゃんはラフタリアお母さん？」

「フイーロー!」

……オレは色々察した気がして、思わずじつとラフタリアちゃんを見つめる。

やっぱ、昔と雰囲気ちよつと変わったよなあ、ラフタリアちゃん。

恋愛に興味津々だったリファナちゃんと違って、あんまりそういう話で盛り上がらない子だったけど……兄ちゃんと出会って色々変わったんだな。

……オレもそのうち変わるのかな、大人になれば。

「……ところで、盾の兄ちゃんはまだ戻ってこねえのかな。待ちくたびれたぜ」

「勇者会議が長引いてんだろ。今回は色々あったしなあ」

「ああ、波のこととか強化方法のこととか……ラルクとイスルギ達のこととかな」

あー……なんだっけ？

ああ、そうだそうだ。兄ちゃん達がカルミラ島で出会った冒険者の奴らのことだっけ。

すげー強かったって言ってたし、あとセント姉ちゃんの恩人もいたらしいし……何より、勇者の武器みたいなものを使ってたんだって。それで、兄ちゃん達を殺そうとしてきたんだって。

ちゃんと教えてもらったわけじゃなくて、兄ちゃん達が話してんのを聞いただけだから、全部わかってるわけじゃないけど。

……オレもそこにいたら、何かできたのかな。

いや、多分足手まといになってたな……今のオレは、弱いから。

「なあおい、セント。お前のボトルの技術とか使ってたのを見るに、お前が記憶を失う前からなんか関わりがあったんじゃないか？」

「……否定はできねえ。姐さんも色々知ってる風だったし、可能性は高いな」

「お前が元々向こう側の奴だった……とか」

「それはねえよ。だとしたらオレがこっちにいる理由がねえ。もし、オレがあいつらの仲間だったんなら、自分の拠点に連れて帰って記憶が戻るのを待つなりするだろ」

「だよなあ……」

師匠とセント姉ちゃんが、なんか難しい顔で話し合ってる。ボトルって聞こえたし、セント姉ちゃんの使ってるアレのことを言ってるのかな。

……ダメ元で、聞いてみようかな。

「なあ、師匠。オレもセント姉ちゃんの作るアイテムを使えば、もっと強くなれるかな」

「……ああ、なれるだろうな。確実に。だが……」

「駄目ですよ」

さりげなく、オレにも作ってもらえないかなって感じで話しかけ

たけど、やっぱり師匠はいい顔をしなかった。

それだけじゃなくて、ラフタリアちゃんが先にオレの期待をぶった切ってきた。え、そっち？

「な、なんでダメなんだ!? ていうか、オレは師匠とセント姉ちゃんに聞いてんだ! ラフタリアちゃんの許可はどうでもいいだろ!?」

「ダメなものは、ダメです! キール君が戦場に出るなんて……!」

「オレも波と戦いたいんだよ! みんなの仇を討ちたいんだ!」

「それを許すわけにはいきません! ……もし、キール君まで死んでしまったら……!」

むっか……! なんだよそれ!

自分で弱いのはわかってるけど……だからこそ強くなりたいって、こうして頼もうと思ってるんだろ!?

弱いままなんてイヤだ!

そんなの……また何もできずに奪われるだけじゃなか!

「ラフタリアちゃんだって、昔は小さくて弱いただの女の子だっただろ!? でも、兄ちゃんと一緒に旅をして、鍛えて、そんなに強くなっただ……だったらオレだって!」

「そういう問題では……!」

「オレは強くなりたいんだよ! もう、誰も失いたくないから!!」

オレが思わず力一杯叫ぶと、ラフタリアちゃんははっとした顔で黙り込んでしまった。

やべ……言い過ぎたかな、言い過ぎたかもしれない。

ラフタリアちゃんはラフタリアちゃん、オレのことを心配してくれてるのに……だけど、それはわかるけど、守られてるだけなんてイヤで、ついカツとなっちゃった。

気まずくて、ラフタリアちゃんの方を見れなくて、棒立ちになる。フイーロちゃんとかリーシアちゃんがアワアワしながら見つめてきて、セント姉ちゃんにもじっと見つめられて、すげえ居心地が悪くなる。

……そしたら、不意に師匠にぽんつと頭を撫でられた。

「熱くなるなよ、お前ら……まったく、昔のオレみたいなキレ方しや

がって。どつちも言ってることは正しい。けどな、大事なのはそれぞ  
れの気持ちだ、そうだろ？」

「……ですが」

「んん〜…オレからすると、戦う力は今後必ず必要になると思うんだ  
よね。波に立ち向かうだけじゃない波から自分や仲間、友達ダチを守るた  
めにも……なあ？」

渋るラフタリア姉ちゃんにセント姉ちゃんが説得してくれる。

そしたら、ラフタリアちゃんも何も言えなくなってきたみたいだ  
……顔は全然納得してないけど。

だけど、絶対わかってくれる。わかってくれないと困る。

もう二度と、友達を……リファナちゃんみたいに失いたくないか  
ら。

「……戦力として鍛えるかどうかは、ナオフミ様に決定権があります。  
私はもう、反対はしません……だけどどうか、無茶だけはしないで。  
いつかあの旗を、村のみんなを取り戻すんですから」

「……ああ！ わかってるー！」

よかった、受け入れてくれた！

セント姉ちゃんのおかげだな、頼りになるぜ！ さすが大人！

研究のしすぎで時々バカになるけど。

「ふえええ……ふええええ！ 感動しましたあー！」

オレがホツとしてると、リーシアちゃんがなんかいつのまにか泣き  
出していた。

あーあー、顔中グツチャグチャになっちゃってるし……女の子とし  
て大分アレな顔になってるよ。

「リ、リーシアさん……落ち着いてください。大丈夫ですか？」

「私、私ってこんなドジで、お友達もあんまりいた事なくて、イツキ  
様の元でも仲良くできた方っていないくて……こんなにお互いに想い  
合えるラフタリアさんとキール君は、すごく羨ましくて、でもすごく  
ホツとして……ふええええ〜！」

「……お、おおう」

うっわ、師匠がドン引きしてる……言いたい事はわかるけど、声に

出すのはやめてやろうよ。すげー悲しいこと言ってたし。

すかさずラフタリアちゃんが鼻をかませてあげてる。うん、やつぱラフタリアちゃんの母ちゃん化が進んでるな。

あ、フィーロちゃんも空気読んで静かに頭撫でてる。ああいう顔するんだ。

なんかもう……めちやくちやな空気になっちゃったな。

……あれ？

どうしたんだ師匠、なんかすげー考え込んでるみたいだけど。

「……なあ、キール。今後の鍛錬について、お前にちよつと提案があるんだが。リーシアにも」

「え？」

なんかちよつと言いつらそうに話しかけてきた師匠が、オレとリーシアちゃんに持ちかけてきた提案に。

オレは思わず……顔をくしゃくしゃにしかめることになる。

## セーアエツトの遺志

S i d e : R a p h t a l i a

「兄ちゃん、頼む！」

「私達を……ナオフミさんの奴隷にしてください！」

会議から戻ってこられたナオフミ様に、キール君とリーシアさんが深々と頭を下げます。

先ほどまで悩んでいた二人が決めた事です。私が口を挟む気はありません……ですが、その。

もう少し言い方があったのではないのでしょうか……？

「……よし、わかった。とりあえずまず一旦落ち着いてから続けようか」

思った通り、とてつもなく険しい顔になられたナオフミ様が、額を押さえながら目をそらしました。それを見ていると……すごく、申し訳ない気持ちになります。

「おい、セントにリユウガ。……どうしてこうなった」

「波と戦えるように強くなりたいたんだってさ」

「で、オレが奴隷の成長補正のことを教えた」

あつけらかなと、お二人が説明して、ナオフミ様は深い溜息と共に頭を抱えてしまいました……そうですね、勝手に決めていい話ではありませんよね。

「……お前らはそれでいいのか？ 特にキール、お前は再び奴隷になる事に抵抗感があると思っていたが……」

「……正直言ったら、嫌だ。好きで奴隷になんて、なりたくない」

キール君の目に、暗い気持ちが混じって見えます。

やっぱり……あの暗く冷たい地下牢での苦痛は、忘れられませんよね。

私も、今はもう悪夢に見る事もそうなくなりましたが……目を閉じれば、簡単に思い浮かべられます。

リファナちゃんを笑いながら死に追いやったあの男の顔も……この手で仇を討った今ですら、鮮明に思い出せます。忘れられるはずも



ありませんし、忘れる気もありません。

……けど、ナオフミ様の下でなら。

「だけど、兄ちゃんなら絶対ひどいことしないって、そう思うから。それに、強くなるのに手段なんか選んでる場合じゃないだろ」

「わ、私も……！ 私も早く、イツキ様に追いつきたいですから!!」

変わる様子の見当たらないキール君とリーシアさんの目を見つめ返し、ナオフミ様が肩をすくめます。そして、私の方に振り向きみます。「ラフタリア、お前も何も言わないんだな」

「先ほど、キール君とは充分話しましたから……本気で戦うつもりでいる以上、止める事はできません」

「……そうか」

ここまで覚悟を決めてしまっているのですから、仕方ありません。けど、私が認めたのはあくまで波から自分の身を守るようにという点です。命懸けで波に立ち向かう戦士になる事を許したつもりはありませんからね！

ナオフミ様もきつと、それを望む事はない、と思います。

「できるだけ早く、波の被害を止められるように努力する……俺ができるのはそれぐらいだ。世話を掛けるな、ラフタリア」

「そのお言葉だけで、十分です」

申し訳なさそうに顔を歪めるナオフミ様に、私は首を横に振りま

す。  
平和な世界が訪れるまで、なすべき事をなすまで、一緒にいてくださると約束してくださいましたのですから。

「ぶー、またごしゅじんさまとラフタリアお姉ちゃんがイチヤイチヤしてるー」

「しーっ、言うんじやありません！」

「さっさとくつつきやいいのにあの朴念仁とむつつり……見ててイライラすんだよな」

……横から何やら余計な言葉が聞こえた気がしましたが、聞かなかった事にします。幸い、ナオフミ様には聞こえていないようなので別に構いませんが。

ですが、後で覚えておいてくださいね？

「まあ、俺からも提案するつもりではあったからな、好都合だ。このあと奴隷商のところに行くし、二人とも奴隷の契約を結ぶでしょう……覚悟しろよ」

「おうー！」

「ひゃ、ひゃいー！」

にやり、と不敵に笑ったナオフミ様に、キール君は元気に、リーシアさんは慌てふためきながら頷きます。

少し不安もあるままですが、ここは堪えます。この先の戦いで死なないための、無用に傷つかないための奴隷としての契約ですから。

「ここにおられましたか」

その時、私達の下に女王様が近づいてきました。

何でしょう、何かナオフミ様にご用が……？

「先ほど申しました戦技教導の件で、腕に覚えのあり、信頼のおける者を連れてきましたので、先にイワタニ様にご挨拶を……と」

「ああ、そうか。もう見つかったのか」

教導、ですか？

もしかして、先程までナオフミ様が参加されていた勇者会議で決定された事でしょうか？

カルミラ島でレベル上げをした割に、現地で起きた波であまり活躍できていなかった他の勇者様方に、ナオフミ様もかなり苛立っていました。

その改善のためなんでしょうね……あの方々が素直にそれを受けられるかどうか、疑問ではありますが。

すぐ目の前にいるナオフミ様も、微妙な顔をしておられますし。

それよりも私は、女王様に連れられてやってきた騎士らしき女性に目を奪われていました。

ストロベリーブロンドの、大変美しい女性です。

切れ長で吊り上がった目は、その方の意志の強さを示しているように見え、存在そのものが手入れされた剣のようです。

「……そいつか？」

「はっ、お会いできて光栄です。盾の勇者イワタニ殿。教導の任を賜りました、エクレール・セーアエットと申します」

性格も見た目通りの真面目な方のように、綺麗な姿勢のままナオフミ様に礼をしてみせます。

ですがその時、私は……私とキール君は、エクレールさんが口にしたある単語にはつと息を呑みました。

「セーアエット……つて！ ラフタリアちゃん！」

「まさか……」

驚きの声を上げる私達に、エクレールさんが視線を向けます。

そして、何かを察したように目を細めると、私とキール君に向けて深々と頭を下げました。

「ルロロナ村のラフタリア殿、キール殿、我が父がお前達を守りきれなかった事、私が代わって詫びをする。すまなかった」

「父……ではあなたは」

「そう。私はセーアエット領領主の娘……お前達には、私を恨む権利がある」

私達は、咄嗟に声をあげられなくなっていました。

伏せっついていてどんな表情かはわかりませんが……私とキール君に向けられた態度は、本気だとわかります。

本気で、私達に申し訳ないと思ってくれている、そう感じます。

「……お前、今まで何してたんだ？ 親父は……領主は死んだって聞いてたけど」

「恥ずかしながら、投獄されておりました」

「投獄う!？」

ぎよつと目を剥くセントさんとリュウガちゃんに、女王様が代わって説明してくださいました。

エクレールさんは波の直後、奴隷狩りの暴徒と化した、同じメルロマロクの騎士達に剣を向けたそうです。

ルロロナ村のみんなを助けようとして……ですが、反対に反逆者として囚われてしまったのだとか。

その話を聞いて、思わず胸が熱くなります。

こんな方がまだ、ほかにもこの国にいてくださったんですね。

「ふむ……捕まったのはもしかしてアレか、相手の騎士が自分より格上の家柄だったとかそういうのか」

「そうですね。イワタニ様方のご活躍で、そういった貴族の大半を粛清することができましたが」

「なるほどなるほど……性格は信用できるな」

「ああ、大した女だ」

ナオフミ様も、エクレールさんに対しての印象はいいようです。

私も思わず笑みをこぼしながら、頭を下げたままのエクレールさんの手を取りました。

「私達はあなたを責めたりしません。あなたのような高潔な方を誰が詰れるものでしょうか……その上、こうして私達の助けになろうとしてくれているのですから」

「オ、オレも！ オレも許すよ！ 騎士の姉ちゃん、いい人だったわかったからー！」

「ラフタリア殿……キール殿」

はつと顔を上げたエクレールさんに、私とキール君は微笑みを返します。

うつつらと、エクレールさんの目元が潤んで見えるのは……言わないほうがよさそうですね。

「よかったねー、騎士のおねえちゃん！」

「そうだな。……だがまず、肝心なことを確かめねえとな」

「ん？」

感きわまるあまり、お互いに手を取り合っていた私達を見て、ナオフミ様達が真剣な眼差しを向けてきます。

そうでした、エクレールさんがここに呼ばれた目的は……。

「女王さん、どっか場所借りれない？ 多少暴れても問題ない広いところがいいんだけど」

「すでに( )用意しております」

「さすが……仕事が早いね」

セントさんの問いに、女王様がエクレールさんに目配せをします。

そして領いたエクレーールさんが、私達を案内してくれました。

向かう場所は……以前、ナオフミ様と槍の勇者様が決闘をさせられた闘技場に似た、広い外の空間です。

案山子や的がいくつも並んだその場所はない、何に使う場所なのか一目瞭然でした。

「お前さんが本当にオレ達の修行相手にふさわしいのかどうか……納得するには、やり合うのが一番手っ取り早い。だろ？」

舞台のような修練上の中心に立って、セントさんがやりと不敵に笑ってみせました。

## 習うより慣れよ

S i d e : L i s c i a

「うし、そんじや相手はオレが務めようか」

「胸を借りよう」

私達の前で鎮座する広場の前で、ナオフミさんの仲間のラビット種の巫人さんとメルロマロクの女性の騎士の方が向かい合っています。

ふええ……どうしてこんな事に。

さつき手を取り合って頑張りましょうってしたばかりじゃないですかあ……！

【ユニコーン！】【ダイヤモンド！】

「変身！」

あわあわと私が狼狽していると、セントさんの周りに透明な管がいっぱい伸びて、それがぐるぐるって塊になって、変な形の鎧になって……そのまま前後からセントさんの全身にまわりつきました！！

えつと……ユニコーンとダイヤモンド？

言われて見たら確かにそんな感じに見える形をしています。

右手からユニコーンの顔が伸びてて、左手は全部宝石みたいに輝いてて、顔には左右がそれぞれ形の違うサングラスがついています。

セントさんが戦うところはちよつとだけしか見れてませんでしたけど、こういう感じなんですわえ……。

「では……参る！」

ふええ!? もう始まつちやいました!?

エ、エクレールさんがすごい速さで飛び出して、細剣で突きを放ちました！

でもセントさんは、宝石の左手でそれを受けて、身を守ります。そしてそのまま、右手のユニコーンの角を伸ばして反撃しました！

でもエクレールさんはそれを軽く躲します！

そしてお二人で、ものすごい速さで打ち合いを始めちやいましたあ

!!

「うお、速っ！」

「まだまだー！」

ぜ、全然目で追えない……速すぎて見えないですう。  
で、でもなんとなく……セントさんが押されてる、ような？  
ちよつと焦ってる顔が見えます。

「単純な剣技じゃ流石に本職には勝てねえか？ あいつ、そこまで武器の扱いが上手いわけじゃないし」

「まあ、科学者や魔法使いが鎧着てガンガン前線に出てんのがそもそもおかしいしな」

「なんで相手の武器に合わせてんだよあのバカウサギ……」

ちよつとずつ押されているセントさんを見ながら、ナオフミさんとリウウガさんが話しています。

つて、え、セントさんって戦士じゃないんですか？ ……つて、よく考えたらあの鎧を作ったのがそもそもセントさんなんでしたよね！？

ど、どうしたら……こ、このままじゃ負けちゃいますよ！？  
……あれ、そういえばそういう戦いじゃないんですってつけ。

「くっ…だつたらこれだ！」

【消しゴム！】

エクレールさんの突きをいなしながら、セントさんは懐から何か……えつと、フルボトルっていうんでしたつけ、いまつけてるのは別のそれを取り出して、腰につけてる機械にはめ込みました！

【ベストマッチー！】

がきん、と一度エクレールさんを弾き飛ばして、距離を取ってから、セントさんは機械についてるハンドルを回し始めます。

そうすると、また透明な管がいっぱい飛び出してきて、別の鎧になつてセントさんにくつつきました。

【一角消去 ユニレーザー！イエイ！】

ふえええ……変な声が響きました。

鎧によって鳴る音が違うのはわかりましたけど……言ってる言葉の意味が全然わかりません。

あれ、もしかして全部セントさんのセンスですか…!？

違う意味で怖いですう!!

「それが噂に聞く……では、改めてお相手願おう!」

見た目が大きく変わったセントさんに、エクレールさんは全然臆さずに突っ込んでいきました。

向かってくる突きに、セントさんはおもむろに左手を上げて……ふえ!?

セントさんの姿が掻き消えました!!?

「何っ!?!」

ふええ!?! ふええええくく!?!

ほ、ほんとに消えちゃってますう!

ど、どこ行っちゃったんですかあ!?

「消えた……いや、消した? まさか、消しゴムとは……!!」

「当たり前」

キョロキョロとセントさんの姿を探すエクレールさんが、はっと振り向いて細剣を構えます。

そこに、セントさんがいきなり現れてユニコーンの角を突き出して

……ふえ!?

エクレールさんの剣が折れちゃいましたあ!!

「勝負あり……だな!」

「いや、まだだ!」

セントさんが勝った——と、私は思い込んでいたが。

エクレールさんはまだセントさんを見据えたまま、折れた細剣に手を添えて小さく早く魔法を詠唱しました。

すると、折れた細剣から魔力の光が迸って、刃に変わりました!

「うそお!?!」

ふええ!?! あんな事できたんですかあ!?!

セントさんも目をまん丸にして驚いて、慌ててユニコーンの刃を引いて受け止めようとしています!

でもほんのちよつとですけど、エクレールさんの方が早いかもです!

だ、大ピンチですうく!!



「そこまでえ!!」

ふえ!?

いきなりすごい声が聞こえて、セントさんとエクレールさん、お二人ともぴたつと動きが止まりました。

さ、さつき叫んだのは……リユウガさんでしたか! ビ、ビツクリしました!

「それ以上は訓練にならねえ。やめろ」

「す、すまない。つい、心が踊ってしまい……」

「ていうかセント、今回はこいつの技量を見るための戦いなんだから、ガチで戦ってどうすんだよ」

「……だって、割と危なかったんだもん」

「いい年した奴がもんとかいうな、気持ち悪い」

「なんだと脳筋!」

「うっせえ、バカウサギ!」

……え、えつと。

と、とりあえず、大変な事態になるのはまぬがれたみたいですから……ふええ。

「セント殿、中々貴重な仕合だった。感謝する」

「ん? ああ、いやいや。こつちこそ」

「それで……盾の勇者殿。いかがだっただろうか」

魔力を纏わせるのをやめた細剣を下げて、エクレールさんがナオフミさんに話しかけます。

ナオフミさんは……なにやら真剣な表情でエクレールさんを見つめています。

「お前のさつスキの剣……剣に自分の魔力を付与したっていう認識でいいのか」

「はい、我が流派の極意の一つです」

「それに防御比例攻撃や、特殊な攻撃を乗せることは可能か?」

「我が流派にはありませんが、失伝した武術にはそういった技術があったという話を聞いております。……私では、役不足だろうか」

細剣を鞘に収めたエクレールさんが、どこか不安げに尋ねています。

ふええ……私まで緊張してきました。

ど、どっちですか？ 合格ですか、不合格ですか!?

しばらく黙り込んだナオフミさんは……やがてにやつと笑って、エクレールさんに手を差し出しました。

「いや、是非とも力を貸してもらいたい」

「喜んで」

「よろしくな、騎士の姉ちゃん!」

「よろしくお願ひします、エクレールさん」

がしつ、とナオフミさんとエクレールさんが固く握手を交わします。

よ、よかったあ……私の隣で、ラフタリアさんとキール君もほつと安心した笑みを浮かべていますう。

「こちらこそ。ラフタリア殿、キール殿」

「呼び捨てでいいですよ。これからこちらがお世話になる立場なんですし」

「おうー!」

「……では、改めてよろしく。ラフタリア、キール」

ラフタリアさんとエクレールさんも、ぎゅつと握手を交わして笑いあっています。いい話ですねえ……みなさん本当にいい人たちでよかったです。

……もしかしたら、私もこの人達と一緒になら、本当に今よりずっとずっと強くなれるかもしれません……!

「わ、私もよろしくお願ひします!!」

私もみなさんに倣って、思いつきり頭を下げてお願ひします。

得意分野なんてないですし、不器用で足を引つ張つてばかりかもしれませんけど……せ、精一杯頑張りましたゆ!!

……噛んじやった。

「さて、そんじやナオフミ? 何から始めるよ」

「ふむ……まあ最初にこいつらの要望通り、成長補正をつけるために

奴隷商のところで契約する必要があるが、先に方針から伝えておくでしょう」

セントさんに確認されて、ナオフミさんは改めて私達に向き合いました。

けれど……その……。

その、にたあ……！ってとてつもなく不気味で恐ろしい笑顔は、一体何なんでしょうか……!?

「お前らを強くしてやると断言した手前……手を抜くつもりは一切ない。血反吐はいてもやめてやるつもりはないから、覚悟しておけ」  
向けられた笑みに、ぶるつと背筋に寒気が走りました。

隣ではキール君が真っ青な顔になって、足の間に尻尾を隠しちゃってます。がたがた震えてて、本気で怯えてるのがわかります。

ふ……ふええええ!!

や、やっぱり盾の勇者様は悪魔だったんですかあ!?

## レベルアップの弊害

Side: Naofumi

「ぬうおらああああああああああああああ!!!」

ガリガリガリガリガリ!!!

俺の目の前には今……およそ女が出すものではない怒号をあげながら、訓練場を走るリュウガの姿がある。

ただし、普通に走っているわけじゃない。

アホみたいに変な重りをいくつも背負って、さらに腰に結んだ紐で重りを引っ張っている。

見たことあるなこれ、何だっけ……ばんえいだっけ？

「ああくそ！ 重さまだ足んねえ！ もっと追加くれ!!」

拳句、土埃がもうもうと巻き上げられ、辺り一面真っ茶色になっているというのに、さらに重量を要求する始末。

おまえ、一人だけ世界観違ってるんだろ。

剣と魔法のゲームっぽい世界観だぞここは、お前だけバトル漫画の修行してんじゃないか。

「あいつ……オレらが思ってた以上にアホだ。ていうかあんなでかい鉄の塊、どっから持ってきたんだ……?」

セントもドン引きしてるぞ、おい。

いや、セントだけじゃないな。ラフタリアもエクレールも、周りで訓練してる兵士達ですら啞然とした顔で固まっていた。

「もしかしてリュウガちゃん……私達に見えないところでもいつもあんな修行を……?」

「何というか……凄まじいな」

エクレールの語彙力が死んで……まあ、そうとしか言えんわな。

前々からすげー馬鹿力の持ち主だとは思っていたが、あんなもんじゃないもやってたならそりゃ強くなるわ。阿保の一念何とやらというが。

昔見たアニメの……引退した怪力のヒーローが電車を引っ張って鍛え直すシーンを思い出した。

……てか、あれならライダーシステムいらなくないか？ 過剰戦力だろ。

「リュウガ、お前今度からフィーロの代わりに馬車引け。何台かまとめて繋げば丁度いいトレーニングになるだろ」

「あ？ 何だそれ、いいな。次からそうしよう」

「やー！ 馬車を引くのはフィーロなのー！」

冗談で言ったのに乗り気になってるし……マジでバカだろこいつ。とりあえずやめさせよう。

幼女姿のフィーロに引かせて虐待とか思われないようにしてたのに、あいつに引かせたらもつとややこしくなる。

「というか、盾の勇者殿も十分凄まじいと思うが……」

「ん？ ……あ、そういえばもう何周してたっけ？」

エクレールに指摘されて、俺は我に返った。

奴隷商のところについて、キールとリーシアを奴隷として登録してから、再び城の訓練場に戻ってきてきてしばらく。

本格的に鍛え始める前に、まずは全員の身体能力を把握しようってことで、全員で訓練場をぐるぐる走ってたんだっただ。

そしたらリュウガがどんどんペースも負荷も上げてくもんだから

……いつのまにか無我の境地に至っていた。

その上、ほとんど息も上がっていない。エクレールの方が先に疲労を見せ始めている。

「こんなに体力があったわけじゃないはずなんだがな……」

「高レベルのステータスによって、身体能力そのものが影響されているのでしよう。カルミラ島でかなりお強くなられたようですし……」

そういうことか……考えてみれば、微々たる数値とはいえ魔物狩りで腕力とか上がってるしな。防御力に関してはありえないくらいになっってきてるけど。

ラフタリアも、普段からやばい回数筋トレとかしてるもんなあ……あれ、そのうち何とか言ってやめさせるべきか。

……しかしこれじゃ、三馬鹿の事を悪く言えんな。

これは確かに、真面目に訓練するのが馬鹿らしくはなるか。

「そーいや、錬が言っていたな、この世界はレベルがものを言うところ……ある意味真理だったな。」

「で、そんな俺達とは正反対に……へろへろで地面にへたり込んでいる二人がいるわけだが。」

「ふえええ……も、もしかして、私もあれができなきやいけないんですかあ……!?!」

「に、兄ちゃん、嘘だよな。アレをやらせたりしないよな?」

「ぜーひゅーぜーひゅーと荒い息を吐き、全身汗まみれになったリースアとキールが絶望の表情で俺を見上げてくる。」

「さっきのやる気はどこ行った……と、言いたいところだが。」

「流石に、アレを指すべき壁と定めるのは気が引ける。」

「いや、アレができるのはあの脳筋だけだ。ていうか真似すんな、死ぬぞ」

「だ、だよな!? ……でもオレ、兄ちゃんやセント姉ちゃんにも追いつけてないし」

「あー、たしかに、この辺はしつかりしないとな。」

「リースアはなぜかレベルに比べてステータスが低く。」

「キールはそもそもレベルが低い……成長補正がかかっている、あの程度の経験値を積ませないと話にならない。」

「だが次の波まで時間がない。それまでバルーンやエググなんかの雑魚ばかり狩ったところで、戦えるようになるかどうか。」

「……こうなりや、多少はゲーム的にやり方を変えるべきか。」

「キール、お前はフィードと一緒に魔物狩りに行ってこい。だがまだ直接戦う必要はない、フィードの背にしがみついている方がいい」

「えっ?」

「というわけでフィード、晩飯の食材ついでにキールを連れて爆走してこい。日暮れまで帰ってくるなよ」

「うん、わかったー!」

「ええっ!?!」

「フィードに適当に走らせて魔物を撥ねさせてくれば、勝手に経験値が入ってレベルも上がるだろう。俗に言う養殖だな。」

「私としては、あまり推奨したくない方法だがな。本来ならば、もつとじっくり時間をかけて鍛錬を重ね、学びながら強くなるべきなのだが……」

「オレもそう思う。なあ、リュウガ……って聞いてねえな、あいつ」  
エクレールが険しい顔でそう言うてくるが、この際そんなことも言っていられんだろう。まあ、褒められた方法じゃないのは確かだが。

多少は焦らなきや、勝てる戦いにも勝てない。

「に、兄ちゃん!? なんかオレ、ものすごく嫌な予感がしてるんだけど!?」

「手っ取り早くレベルを上げるためだ。軽く地獄を見るだろうが……まあ、頑張れ。ラフタリアも一度通った道だ」

「地獄?! 地獄って言ったか今!?!」

加減を捨てたフィーロの背中はずぶ揺れるだろうなあ……ラフタリアも真つ青な顔で固まってるし。

……おい、セント。手を合わせて拝むな。

南無阿弥陀仏じゃねえんだよ、冥福を祈るんじゃないやねえ。つてかなんで知ってんだよ阿弥陀経。

ガクブルしてるキールだが、もう遅い。

最初に自分で言ったんだからな——強くなるためなら、何でもするって。

「というわけで行ってこい!!」

「はいー!」

「あ、ちよ! ちよつと待ってフィーロちゃん! オレまだ心の準備が——」

ひよいつとフィーロがキールを自分の背中に乗せ、くるつと踵を返す。

キールがぎよつと目を剥いて俺の方に振り向く。なんかものすごい助けを求める目をしてるが……強くなるためだ、諦めろ。

「ぎゃああああああああ……!!」

どどどどど、と勢い良く走り出すフィーロ。

その背にしがみつकिながら、キールが悲鳴をあげて遠ざかり、訓練場を……城を後にする。

やれやれ、とそれを見送っていると、ラフタリア達がそろそろ集まってきた。

「……かわいそーに。ナオフミ、せめて飯作って待っててやれ。流石に不憫だ」

「城の料理でよくないか？」

「私からもお願いします……本人の希望とはいえ、きつとくたくたになつて戻ってくるでしょうし」

えええ……何でわざわざ城にいるのに俺が。

こいつら、やたらと俺の料理を食べたがるが、何なんだ？ そんな大層なもんじやないぞ？

……仕方ない。フィードとキールが帰ってくる頃に作っておくか。とりあえず、キールはしばらくこの方針で行くとして。

「……問題はリーシアだな」

「ああ」

ちらつと視線を交わし、鍛錬を一旦中断したセントを近くに招き、訓練場の隅に移動する。

ラフタリアには、エクレールと個人で稽古を始めて貰っておこう。リーシアはとりあえずその見学、見るだけでも経験にはなるだろう。

リュウガは……うん、元気に走り回ってるし放置だな。

「リーシアちゃんはレベルリセット拒否したんだっけ？ まあ、積み上げてきたもんゼロにすんのは抵抗あるのはわかるけど……」

セントの問いに俺は思わず険しい顔になって頷く。

どうせ、樹との旅で積み上げてきたもんだからだろうが、どうしたものか。

レベルだけなら樹のパーティーにいても違和感はない数字なんだがなあ……どうなってるんだ？ 元々戦いに向いてない体質とかか？ だとしたら手の施しようがないんだが。

「どうすつかねえ、剣とか槍の腕前は全体的にそこそこで目立つところがないって言ってたし、鍛えるにしてもどこをどう伸ばすべきやら」



「弓とか投げ武器は？」

「味方に当てそうで嫌なんだと」

あの気弱さはマジで何とかしないとな……あの性格はもしかすると、どっかで周りと比べられたりしたせいかな？ 頭はそれなりっぽいんだが。

だとしたら自信をつけさせたら伸びたり……いや、元からあんな気がする。

「戦闘技術はオレが直接相手するとして……あとは魔法か？ セント、お前が見たところどうだ？」

「んー、こつちも微妙だな。得意も苦手もなし、どの属性もそこその威力しか出せないんだってさ」

筋金入りだな……器用貧乏か？

万能とは違うってのがリーシアらしいのかなんというか。

「……ん？」

あれ、なんか今違和感感じたぞ。

「おい、ちよつと待てセント。どの属性もそこそこ使えるって言ったか？」

「え？ ああ、言ったぞ？ ……あれ、そういや妙だな」

俺が指摘すると、セントもそこで気付いたのか眉間にしわを寄せて考え込み出した。だよな、おかしいよな？

本人がアレすぎて想像もつかないが、その話が本当なら話は変わるぞ。

「適正って普通、偏るよな……珍しいなんてもんじゃないぞ」

あいつ、気付いてないだけで何らかの才能があるんじゃないかと、俺達が旋律を感じていた時だった。

「——きやああ!？」

「——ふえええ!？」

「——うわっ!？」

「——おわーっ!？」

訓練所の方から、ラフタリアとリーシア、ついでにエクレールとリュウガの悲鳴が聞こえてきた。

はつと我に返った俺達は、急いで訓練場に戻りラフタリア達の方へ振り向く。

そこで、俺達が目にしたのは――。

「この子は100年に一人の逸材じゃくく!!!」

「ふええええええ――!!!」

……と、なんかハイテンションで泣き叫ぶリーシアの脇腹をさすつて騒ぐ、どつかで見た事のあるババアの姿だった。

……え、何この状況。

## 変幻無双流伝承者

S i d e : S e n t o

「ふえええ助けてくださいい〜!!」

オレとナオフミが訓練場に戻ると、リーシアがなんか妙なバーさんに腹を撫で回されて悲鳴をあげていた。

いや、いやいやいやいや、マジで何これ。

ていうか、えつと？ あのバーさん、あれだよな、三回目の波ん時に大暴れしてた、やたらと強いあのバーさんだよな？

「あのババア……なんでこんな所に」

「しかもなんか、えらく立派な格好してないか？」

道着、つていうのか？ どつかの拳法家が着てそうな、詰襟の分厚い感じの服。

それでもつてめっちゃ機敏な動きでリーシアの脇だの腹だのをまさぐつて……うん、普通にセクハラで訴えられそうだな、あれ。

「……で、ラフタリアちゃんや？ 何ですかいなこれは？」

「え、えつと……」

オレはそこらへんで息を切らせて座り込んでたラフタリアちゃんに話しかけて、詳しい事情を聞いてみる。……先にやられたんだろうなあ。

「あ、あの方が城の兵士さんに案内されてここへ来たかと思うと、私やリュウガちゃんやリーシアさんの体を触って『この子らこそ次代の変幻無双流の継承者じゃあ！』と騒ぎ始めて……」

「反応する間もなく関節決められて全然動けなかった……つてかマジで何しやがんだあのババア」

うん、説明されても謎だわ。

本人達もいきなりすぎて全然状況把握できてないんだろうな……そりやそうだなあ。

……ていうか、いつまでやってんのあのバーさん？

「いい加減にしろ、ババア！ 女同士でもセクハラだぞ！」

「ほっほ……手荒じやのう、聖人様」

拳句、ナオフミに首根っこ引つ掴まれてやめさせられてるし。

おーい、大丈夫かお前らー？

「ふええええ……びつくりしましたあ、もうお嫁に行けません……」  
「ババアに脇腹まさぐられたぐらいで何言ってるんだ、お前。オレなんか関節決められて押さえつけられたんだぞ」

あーあー、解放されたリーシアちゃんが泣いちゃった。

ラフタリアちゃんもリュウガも疲れ切ってるな……修行中だったのに、なんだってんだ全く。

「全員、災難だったなあ」

「他人事か!!」

「そんなに嫌なら誰か……ナオフミにでも上書きしてもらえ。あれだ、ラフタリアちゃん、あすなる抱きでもされてみな、飛ぶぞ」

「何の話だ!?!」

「わ、私はイツキ様のものなんです!!」  
「重いわ!!」

と、オレがリュウガに突っ込みを入れられながら、おどけてみんなを慰めていた時だった。

「——ぐあつ!?!」

突如、バーさんを捕まえていたナオフミが悲鳴をあげた。

ばちっ、てなんか電気が走るみたいな音が聞こえて、バーさんがナオフミの拘束から抜け出して、ひらりと降り立った。

な、なんだ？ 何が起こった？

「……ババア、お前、今、何をした?」

「ほっほ……ババアもなかなかやりますじやろう。若者に教える時はまずこれですじゃ」

旋律の表情を浮かべるナオフミに、バーさんはやりと不敵な笑みを浮かべて手を見せる。

え？ いきなりすぎてわかんなかったけど……このバーさん、ナオフミに攻撃食らわせたのか？ 防御力バリカタのナオフミに？

「お、おい、何があつたんだ?」

「……あのババアに軽く触れられただけで、ものすごい痛みが走った。

指先がちよつと当たっただけだったのに」

は……いやいやいやいや、わけわからんわ。

何をどうやったたらそんな真似できんの？

前に波の魔物相手に大暴れしてた事もそうだし、マジで何者なんだこのバーさんは……？

「こちらにおられましたか」

オレ達が呆然としてしていると、女王さんがちよつと急ぎ足でやってきた。

こちらにおられましたか、つて……あ、このバーさんに向けて言ってる？　じゃあこのバーさんは女王さんが呼んだってことか？

「で、女王、こいつは一体……」

「今回の戦技教導のためにお呼びした、変幻無双流の伝承者の方です。初めはお断りされておりましたが、盾の勇者様の教導のためだとお伝えしたところ快く頷いていただきまして」

女王さんの説明で、バーさんは袖口を合わせながらナオフミに首を垂れた。

なんか……すごい。

ただ挨拶しただけで只者じゃない感じがする。さつきまでセクハラしてたのに。

「改めまして、聖人様には命を救っていただき、その御恩を返すために馳せ参じましたじゃ。老骨の身なれど、ぜひ聖人様のお力になりたく」

忠誠すげー……あの薬、別の効き方してないだろうな。

ていうか、なんだその変幻なんたら流って。全然知らねえんだけど。

「変幻無双流!?　マジか!？」

うお、なんか急にリユウガが元気になった。

あれ、心なしか目がキラキラしてね……？　なにその憧れの英雄に偶然であつた少年みたいなの純粋な目。お前のキャラじゃねーだろ復讐者。

「知っているのかりユウガ」

「ああ……特定の武器を満たず、そしてこの世のあらゆるものを武器とし、弱きを助け強きをくじくため編み出されたという幻の流派だ。詳しくは知らねえけど、今は衰退して失伝したって聞いたが……」  
「ほっほ……お察しの通り、跡を託せる者がおらんくての、わしも残り少ない余生を目立たず静かに過ごそうと思っておつたくらいじゃ」  
「はえー……そんなあるんだ、へー。」

この脳筋がそういうのを知ってたのはいいとして、そこまで恩義を感じてくれてんのか、このバーさん。

何がどう転ぶかわかんないもんだなあ。

……伝説がどの程度かは知らないが、実力は確かみたいだな。

実際に一撃を受けたナオフミが真剣な表情でバーさんを凝視している。ほんの軽い感じで、相当効いたらしいな。

「……ババア、今のはまさか、防御比例攻撃か」

「左様。相手の体内に『気』を打ち込み、内側から破壊する変幻無双流の技の一つですじゃ。相手が硬ければ硬いほど効きますじゃ」

何それこわい。

「気か、漫画とかアニメ……いや、創作物の中じゃよく聞くが、それは俺達でも習得できるものなのか？俺に関しちや、戦闘に関してはほぼレベル頼りの素人だぞ？」

「無論、これは弱者が強者に挑むために生み出された技術ですじゃ。誰しにも使いこなす才は眠っておりますじゃ」

「この脳筋とバカウサギにもか？」

「当然」

「オレを引き合いに出す意味あつたか今!？」

……いや、まあ、そういう修行的なのは苦手なのは確かだけどさ。

気とか言われてもよくわからん。ステータスに出ないものをどう感じりゃいいんだよ。

「どーするよ、ナオフミ」

「……正直言えば、願ったり叶ったりだ。今後の戦いに必ず必要になる技術をあのババアは持つてる。この機会を逃す手はない」

あー、グラスの奴やたら頑丈だったし、ラルクも妙な技術持ってた

みただいしな。次またやりあう時までには備えとかねーといけな  
か。

……オレも、姐さんとの戦いがあるしな。

あとコウモリ野郎とか、あいつも結構頑丈だったし。

「やろうぜ、お前ら！ オレもずつと変幻無双流を体験してみたいと  
思ってたんだ、ぜひ習おう、すぐ習おう」

「おう、わかったからちよつと落ち着け。顔近いわ」

「ラフタリアちゃんが割とヤベー目で見てるからちよつと離れろ」

「ただ推してくるんだよ、こいつ。」

後頭部押したらチューできそうな距離でナオフミに詰め寄って  
し……冗談なんでそのこわい目やめてもらっていいですかラフタ  
リア様。

んんっ……それはそれとして。

必要に思ってた技術の持ち主が、昔偶然助けた奴だったってのは流  
石に偶然にしちゃ出来過ぎだって思っちゃまうのは……ナオフミの影  
響か？

……ま、疑ってる暇も正直ないし、ここは厚意に甘えとくべきだな。  
とか思ってたなら、不意にバーさんがリュウガの方を向いてじつと見  
つめ始めた。

「龍神殿に至っては、独自に『気』を纏える段階に入られているご様子  
……癖がつく前に、ある程度矯正の手伝いをさせていただけますれ  
ば」

「……え？」

は？ 今何つったこのバーさん。

リュウガが……気を使ってる？ いや、そういう意味じゃなくて。

ってか、龍神って誰!?

「え？ いや、え？ ちよ、ちよつと待てよ。オレは気なんてもの使っ  
てなんて……」

「どうやら無意識のようですが、確かに龍神様は『気』の習得に至り始  
めておられる……それを完全なものとするれば、必ずさらなる力を得ら  
れよう」

「……マジかよ」

え、あの、龍神様云々はスルーすんの？

……まあ、いいか。聖人も神鳥もバーさんが勝手に呼んでるだけだしな。

リウガが強くなるってんならパーティー的にも助かるし、本人も願ったり叶ったりだろうし。

「次の波までそんなに時間も無い……俺達は今、かなり急ぐ必要がある。正直強くなるためなら猫の手も借りたい状況だ。存分に利用させてもらうから覚悟しておけ」

「誠心誠意、努めさせていただきますじゃ」

ナオフミの言葉に、バーさんは深々と頭を下げて応える。

こうして、最強のバーさんがオレ達の指南役として仲間に加わったのだった!!

……字面にするとわけわかんねーなこれ。



## 理屈屋と脳筋

S i d e : F i l l o

フイーロだよ！

今ね、ごしゅじんさま達がね、メルちゃんのお母さんが呼んだって  
いうすっごい強いおばあちゃんにきたえてもらってるところなんだよ  
！

でもね、ほかの人達にぜんぜんやる気がないの。

槍の人もー、弓の人もー、剣の人もー、それとその仲間の人達みー  
んなしゅぎよーなんてやだーってイヤがってるの。

剣の人なんて、エクレアのお姉ちゃんを怒らせちゃって、けつとー  
まで始めちゃった。

あつというまにボッコボコにされてたけど。

しかもスキルは使っちゃダメーって言ったのに使ってごしゅじん  
さまに怒られてたし。

それでなにも言い返せなくなっちゃったみたいだね。

みんなしゅぶごしゅじんさまと一緒にしゅぎよーを始めたの！

……でも、やっぱり長持ちしなかったみたい。

「……し、死ぬ。なんだこの感じ、懐かしいぞ……」

「学校の授業を思い出しますね……無駄な勉強で長時間拘束され続け  
て……」

「いつまで続くんた、この時間は……」

槍の人達、みーんなぐったりしてる。

どよーんってくうきまでよどんで見えるね。

でもこういう時でも槍の人はフイーロに近付いてくるから、なるべ  
くあの辺にはいかないようにしとこく。

「つーか、この修行マジで意味あんのかよ。レベル上げりや十分だろ  
？ なんだってこんな面倒臭い事、勇者がしなきゃならないんだよ  
……」

槍の人がぶつぶつ文句言ってる。

なんでってそれは……フィーロやごしゅじんさまががんばってる横でぜんぜん何にもできてなかったからだと思うよ。

「お前らな、そうやって本気にならないから、何度も敗北を喫してるわけだろうが。いい加減理解しろよ、ここはゲームじゃ……」

「あーもー！ 説教なんかたくさんなんだよー！」

見ててイライラしたのかな、ごしゅじんさまが槍の人を怒ってる。でも槍の人ってば、ぜんぜん聞く気がないみたいで耳をふさいでそっぽを向いちやった。

ごしゅじんさまも呆れて、はーっておつきなためいきをこぼした。「ったく、今の段階でこうじゃ先が思いやられる……」

そう言って、ちよつとつかれてるっぽいごしゅじんさまはフィーロたちの方を見てきた。

「キールの方は、順調……か？」

「うん！ いっぱい魔物ひいてきたから！」

「そ、そうか」

キール君はでろでろになっちゃったからあつちで休ませてるよ。でもいっぱいレベルが上がったからいいよね！

フィーロは元気だよ！ リユウガお姉ちゃんも元気！

ラフタリアお姉ちゃんもぜんぜん平気そう、さつきもエクレアのお姉ちゃんと一緒にくみてするって走ってったし。

……あれ？ エクレアのお姉ちゃん、フィーロたちのしななやくなんじやなかったっけ？

リーシアお姉ちゃんはぐったりして……って、あれ？

「セントお姉ちゃん、なんで地面で寝てるの？」

「……ってお前もか!? 先からぜんぜん喋らねえと思ったら!!」

耳をへんにやりさせて動かないお姉ちゃんに、ごしゅじんさまがあわててかけよって起こしてあげてる。

イスにすわったセントお姉ちゃんは、「ふえええ〜」ってリーシアお姉ちゃんみたいな声を上げて机につつぶしちやった。

「しんどい〜、つらい〜、ムリだつて〜。オレこういうのマジで向いてないんだつて〜、勘弁してくれよ〜……」

「お前なあ……」

「いや……オレはあくまで科学者なんだよ。そりゃあ、武器を使うならそれなりにやれるけど、こういう体力が物を言う事はマジで苦手なんだって……はあ」

ほんとにつらそうなセントお姉ちゃんが、ぶーぶー文句を言う。

それを見て、槍の人たちが仲間を見つけたみたい顔に顔を明るくして、セントお姉ちゃんに近づいていった。やー！

「やっぱそうだよな、こういうのは違うよな！　こういう汗水垂らす系のは別ジャンルだよな！」

「ああ……初めてお前らと意見があったな」

「……レベルを上げれば何も問題はないだろう」

「ですから武器のレアリテイが重要だとあれほど……」

どンドンやる気がなくなっっていくセントお姉ちゃんと槍の人たちに、ごしゅじんさまの顔がどンドンこわくなってく。

お姉ちゃん、ごしゅじんさまが怒らないうちに帰ってきた方がいいよ。

「……はあ、ほんつとに先が思いやられる」

あ、怒るのあきらめちゃった。

うーん……槍の人達が役に立つの、いつになるんだろうね。

Side:Elrasra

「……………」

女王陛下より賜りし、大恩ある聖人様の指南役を仰せつかり、はや数日。

想像以上の出会いに恵まれ、年甲斐もなくはしやいだものの……修練の成果自体は、未だ種のままというべきですじゃ。

無理もありませんな、そうそう開眼してはわしの立つ瀬がありませんゆえ。

「……くっ、ダメだ。全然わからん」

「ふええええ……」

わしの目の前におりますのは、聖人様と龍神様、そしてリーシア門

下生じゃ。

座禅を組み、まずは己の中の『気』の存在を感じる修行をしてもらっているのじゃが……うまくはいっておらん。

最も気の習得に近いと思われた龍神様なのじゃが……やはりこれまで無意識に使い続けたせいかな、うまくそれを実感し操ることができぬようですじゃ。

「戦ってる時は普通に気とやらを使えてるんだよな？」

「左様。気を体内で循環させ、身体能力を大幅に上げておられる。じゃが意識して使っておらぬ分、無駄が生じておりますのじゃ」

ふむ……これは少々手がかかりそうじゃな。

しかし聖人様に受けた恩に報いるため、しっかりと役に立ってみせると誓ったからの。

「使えはしてるけど使い熟せてないって感じか……流石に、ステータスにも表記されないものを自覚しろってのは難しいよな」

「別に特別なことは何にもしてないんだけどなあ……気を感じるってどうすりゃいいんだ？」

「疲れましたあ……座禅って組んでるだけでも大変ですなあ」

ふむ……今宵は流石に限界か。無理をさせすぎても気の習得に至れるわけではないからもう、今日はもうやめにするべきか。

む？ 聖人様が何やら思い出した様子で、小瓶を取り出しましたぞ。

「忘れていた……練習終わりの休憩ついでにこれでも飲んでみる」

「何だこれ？」

『命力水』というらしい。薬屋の親父に相談したらくれたものだ、味はまあまあいいぞ」

命力水……聞き慣れませぬな、どのような薬じゃろうか。

ほ、わしにもくださるのですか。では、ありがたくいただきますじゃ。

ほう、これは確かに美味とは言えずとも体に染み渡る——む!?

「お、何だこりゃ」

「体がポカポカしてきますう」

わしが目を見開くそばで、龍神様とリーシア門下生が薬を飲んで目を丸くしておる。

「ぼかぼか……まさか、いやまさしく！」

「お二人共！ それじゃー！ それを体内にとどめ続けるのじゃ!!」

「ふえっ!!」

「おおっ!!」

なんと……まさかこのような形で！

慌て、戸惑う龍神様とリーシア門下生に指示を出しつつ、修練場の中心においた岩の前にお二人を導く。

「さあ、今のうちじゃ！ その力を感じながらこの岩を突くのじゃ!!」

「ふえ!? え、えつと……えいっ!!」

右往左往としておったリーシア門下生が、意を決した顔で岩を人差し指で突いた。先ほどは突き指をして苦しんでおったが――

リーシア門下生の指が触れた瞬間、大岩に確かな亀裂が走った。

「……ふえ、ふええええ!!」

ほっほ、突いた本人が誰よりも驚いておりますじゃ！

しかし、これは確かな事実……見れば聖人様も龍神様も目を丸くしてそれを見ておられたわい。

「い、今の……マジか!? このあつたけえのが……気!!」

「……これにこんな力があつたのか」

「ババアも驚きですじゃ。数ヶ月かかかっていてもおかしくはない段階に、こうも簡単に到達できる方法があるとは……」

「おい」

聖人様に睨まれてしまったが、じゃが仕方のないことですじゃ。

人によつては何年もの年月をかける必要のある流派じゃからのう……本来急ぐことはできぬはずなのじゃ。

その時、何やら考え込んでおられた龍神様が突如、聖人様に振り向きなされた。

「ナオフミ、アレかけてくれ。カルミラ島にあつた碑文に刻まれて

たつていう魔法」

「あ？ あー、あれか……何で今？」

「いいからー！」

いぶかしむ聖人様に、龍神様が真剣な眼差しで頼んでおられる。聖人様は渋々といった様子で、龍神様に魔法をかけられた。

アレが噂に聞く、勇者にしか読めぬという魔法の呪文じゃったか。

『フアスト・オーラ』

む!?

この気配……よもや!?

「きた……きたきたきたきた！ この感じだ!!」

「何!?! 今ので気を纏えたのか!?! ……さてよ、よく考えたらオーラつて『気』のことじゃねえか!!」

聖人が愕然とした表情で、ご自分の手を見つめておられる。

聞いていたあの魔法の効果は、対象者の全能力を飛躍的に向上させるものだったはずじゃが……よもや気まで与えるとは。

興奮したご様子の龍神様と戸惑うリーシア門下生じゃったが、しばらくするとお二人の気が抜けてしまったようじゃ。

「あ……ポカポカしたの消えちゃいました」

「オレもだ。抜けちゃった」

「お二人はまだ、気を体内にとどめる事ができずにおられるようじゃな。じゃが……これは大きな一歩ですじゃ」

わしの言葉に、これまでずっと不安ばかりが顔に出ておったリーシア門下生の表情が、わずかにじゃが明るくなった。

いい傾向じゃな、自信のなさは不利を呼ぶ……自身もまた己の武器じゃ。

わしもようやく、聖人様へのお力に慣れそうで安心しましたじゃ。道はまだまだ先があるが、少なくとも出発点には辿り着けたというものの。

まったく……長生きはするものじゃな。

## 男の浪漫

Side: Motoyasu

「だからなお前ら、こうやるんだって!」

今日も今日とて始まった、憂鬱で退屈で最悪な修行の日々い……。昨日の疲れが全然抜けてなくて、なのに朝早くから叩き起こされて山の上に連れてこられて、ひたすら座禅やら精神統一やら。

唯一の救いは、他の勇者パーティーの可愛い女の子が見れる事ぐらいか……?

ナオフミのところのリユウガちゃんは……まあ、アレだ。見ていて大変眼福でございますが。

ただし……何いつ言つてんのかさっぱりわからない。

指南役だとかいうバーさんが言つてた気?とやらについて一生懸命説明してくれてるんだけど……全く意味がわからない。

あと正直、動くたびにブルンブルン揺れるからそつちに目が行くんだよな、ハハハ。

「……あの謎言語は本当に同にもならないのか……!?!」

「アレだな、名選手が名監督になるとは限らないっていうアレだ」

「言いたいことはわかりますけど、もうちよつと仲間に対して言い方があるんじゃないですか……?」

鍊も樹も、あとナオフミも呆れた目でリユウガちゃんを見てるし。

前見たときはもつとこう、愚直に強さを求める無人キャラっぽかったのにな……割とアホの子だったんだな、あの子。

「ああん、もうつかれた〜!」

「おいこら、そこ! 勝手に休むな!」

へたり込んだ俺のパーティーの仲間で恋人のマ……ア、アバズ……考えるだけなら別にいいだろ! マインだマイン!!

ぐったりしてしまった彼女に、リユウガちゃんが声を荒げて注意する。

女の子にこういう事は言いたくないんだけど……流石にちよつとイラツとしてきたな。

なんかこの間のカルミラ島の波イベントでボロクソにやられた事を危惧して、マインのお母さんである女王が訓練するってことになった訳だけど……。

マジで面倒臭い……何だよ気だのなんとか流だの。

レベル上げりやいいじゃん、そんなわけわかんない修行とか必要ないじゃん。

……まあ確かに、最近全然イベントで勝ててないけど。

「この修行！ 本当にいつになったら終わるんだよ!? こっちは波とかクエストとか色々やらなきゃいけないんだぞ!?!」

最近、マジでうまくいってない。

尚文に強姦されて辛い目にあっただって聞いてたマインが実は嘘吐きで、お父さんの王様と一緒に尚文を迫害してたとか聞かされて。

その上今じゃ活躍の場が全然巡ってこなくて……ああ、くそ!

最初の夢いっぱいの世界生活はどこ行っちゃまったんだよ!!

「そこんところどうなんだ? ババア」

「うむ、人にもよりますがの……大抵の者は最低でも一月、あるいは一年。深く長く集中し続け、ようやく体得できるものじゃ」

尚文が婆さん……なんとか流の指南役だっという人に聞いたら、そんなとんでもない事を言われた。

なんだよそれ、聞いてないぞ!?

「冗談じゃない! そんな長ったらしく付き合ってられるか!!」

「そうですよ! どうしてこんな無駄な時間に何ヶ月も何年も付き合わさなければならないのですか!?!」

「それこそレベル上げの邪魔だ! そんな事をしなくても俺達は十分強い!」

鍊も樹も、俺と同じ気持ちみたいでいきり立った。

そうだよな、絶対無駄な時間過ごしてるよな!?! 絶対意味ねえよ、こんな時間!!

俺達はスキルを放って、その辺にある大岩を粉々に砕いてみせる。

婆さんがなんか指先で壊してたけど、別にスキルを使えば同じことはできるだろ! 偉そうにしてんじゃねえ!!



「やってられるかよ、こんな事！」

「おい、お前ら……」

「尚文もやめろよ、そういう修行はやりたい奴がやりやいいんだ！  
いっそ、そいつらが勇者になって世界を救えばいいだろ！」

マジでうまくいかねえ……！ 全然楽しくないぞ、こんな異世界召喚！

俺達がダメだってんなら、最初からもっと強い奴らを勇者に選んで  
りやよかつたんだ！

なんか言いたげな尚文をおいて、その場を後にしようとした時だっ  
た。

「……なるほどなるほど、だったら努力せざるを得ない条件を出して  
やろう」

「あ？」

さっきまで呆れた目で俺達を見ていたリュウガちゃん、なんか  
……不敵な笑みを浮かべてそう言ってきた。な、何？

「確かに……修行は辛え。長いこと頑張って我慢して、なかなか成果  
が出ないことに悶々して、やがて目的自体を見失う事もある。その気  
持ちはよくわかる」

「お、おう……」

「そう、ですね」

「ああ……」

「だが、これはやらなきゃならねえ事だ。お前らには必要不可欠な壁  
だ……その壁を超えられないってんなら、越えたくなる目標を授けて  
やろう」

「おいリュウガ……お前、何をする気だ？」

な、何だ……!? まさか、あんまりにもうるさかったから変なス  
イッチ入っちゃったのか？

し、仕方ないだろ！ マジでやる価値を感じないんだから！

……いや、ま、まさか習得するまで監禁するとかじゃないよね……  
!?

「オレからお前らに、修行をこなした後のご褒美を提示する!!」

「!? ご褒美 ……いだっ」

予想外の言葉に俺が思わず身を乗り出すと、鍊と樹に頭を小突かれた。

おい、何だよお前ら……その「お前がそういうことを言うと言分まですけ扱いされるだろうが」的な冷たい目は。

しようがないだろ、つい想像しちやっただから。男の子なんだから。

「ご褒美って……こいつらが物で釣られるタイプか？ レアアイテムならありえるが……ていうか、俺はそんなもんに金を出す気はないぞ」

「いや、そうじゃねえ。物は物だが……ただの物を差し出す気はねえ」尚文の言葉に、リュウガちゃんはまたふつと笑って首を横に振った。

ま、まあ相当レアなドロップが入るってんなら、やらなくもないけど……でも、言い方はあれだけど、ゲームに不慣れな尚文のところで手に入りそうなアイテム程度じゃなあ。

と、内心全然期待してなかった俺達に、リュウガちゃんはやがてはつきりと告げた。

『「気』の習得に至った勇者から順に、ライダーシステムを製作する！ ……セントが!!』

——!??

思わず振り向いて、リュウガちゃんをガン見した。

俺以外にも、鍊も樹もあと尚文もものすごい勢いで振り向いた。多分、全員目がギラって光った気がする。

そのぐらい……そのぐらい魅力的すぎるご褒美だった。

「……マジか、マジか、マジか!?!」

「ほ、本当に!?! いいんですか!?!」

「あ、後から返せって言われても返さないよ、セントちゃん!?!」

普段クールぶってる鍊がありえないぐらい目を輝かせてる。樹も

見たことないぐらい大興奮してる。

いやそりゃ誰だってそうなるわ!

だってアレだぞ!? アレの本物を作ってくれるっていうんだぞ!?  
男なら誰でもこうなるだろ!?

「お前何勝手なこと言ってるんだコラア!?!」

「だってそんなくらいねえとこいつら動かなさそうじゃねえか」

「だからってそんな約束取り付けんな! 作るのオレだぞ!?!」

「落ち着けよ……お前の考えはよくわかってっから」

俺達が呆然となってる間に、立ち上がったセントちゃんがリュウガちゃんに詰め寄った。

ま、まさか、駄目とは言わないよな!?

こんだけ期待させてやっぱり駄目とか言わないよな!?! なあ!?!

「お前がライダーシステムをポンポン作らないでいる理由って、ようは使う奴が弱すぎて盗まれる場合を心配してるからだろ?」

「……まあ、そうだな」

「だったらちようどいいじゃねえか。味方が強くなる上に、さらに強化を重ねられるわけだろ? それに、こう言つときゃこいつらも流石にやる気出すだろ」

なんかぼそぼそ話してるけど、うまく聞き取れない……説得してくれてるのか?

頼む! 頷いてくれ!

本当に作ってくれるんなら、こんな退屈な修行もちゃんと頑張るから! 絶対続けるから!!

欲しくて欲しくてたまらないけど……声は押し殺して目で懇願する。

素直に認めるのは、なんか……なんか、負けた気がするんだよ!

「さあ、どうする!?! 効果の実感できない退屈な訓練から逃れるか!  
それとも、男のロマンをその手に掴むか! どっちをお望みかな

!?!」

「くっ……!」

「卑怯な……!」

「俺達をここまで惑わせるなんて……！」  
にやりと笑うリユウガちゃん。

絶対誘導されてる……利用されてるってわかる。

だけど、だけどそれ以上に心が、魂が叫んでるんだよ……あの頃の夢を今、現実にする時だって心が叫んでるんだよ……!!

「あの方々は何と戦っているのでしょうか……？」

「さ、さあ」

ラフタリアちゃんや、初めて見た桃色紙の女騎士の子がヒソヒソやってるけど、もう気にしてる暇はなかった。

だ、駄目だ……保たれてたプライドの堰が……崩れるっ……!

「……! ああもう! わかったよ! 最後まで付き合っつてやるよ!」

「モ、モトヤス様!?!」

「仕方ないだろ! だって『変身』したいんだもの! 夢を叶えたいんだもの!! 男の子なんだもん!!」

俺は負けた……男子の夢にはかなわなかった。

すまないマイン……辛いだろうけど、でもっ、我慢ができなかったんだ。

「……あゝもう、しよーがねーな」

しばらくして、ガリガリ頭をかいて悩んでいたセントちゃんが、大きなため息をつきながら頷垂れた。

よかった……オツケーしてくれるんだね、作ってくれるんだね。

これで「やつぱりお前らには作らない」とか言われたらマジでいつその国からもブツチしようと思ってたわ。

「デザインについては希望聞くぞ? こんなんがいいっていう意見があったら言え。反映するから」

「はい! スマートなのがいいです! 細マッチョな感じで!」

「華麗な感じがいいです!」

「フン……黒がいい」

「どうせ防御しかできないだろうからごつい感じで頼む」

「ナオフミ様!?!」

疲れた顔で要望を聞いてくるセントちゃんに、俺達異世界組は各々の希望を口にする。

順番抜かしはしない。あくまで平等に、それぞれのなりたいヒーロー像を伝えていく。

俺達は今……初めて心が一つになっていた。

の、だが。

この後にとある事件が俺達勇者全員に襲いかかり、翻弄する事になる。

## 異変

S i d e : M e l t y

「謎の魔物？」

母う……女王陛下の前で、整列したナオフミ達が訝しげな顔をしてる。

急な話で驚くわよね。こちらとしてもいきなり浮上してきた問題で、まともな調査がまだできていないのよね。

……それはそれとして、なんか全員、凄く汚れてないかしら？

「いや、まあ、女王には色々助けて貰ってる以上、頼み事は断らんが………はあ」

何よ、ナオフミってばため息なんてついちゃって。

そりゃあ、強くなるための修行中に別のことを頼まれるなんて大変だなんてわかってるけど……ナオフミの性格的に面倒臭がるのはわかってるけど。

「何よ、なんでそんな急にやる気なくしてるのよ」

「……いや、別に」

あえて聞くと、バツが悪そうに目をそらすし。

……あ、いいのよラフタリアさん。ナオフミのこういう反応なんて予想してたし、気にしないでいいの。

ただ意外だったのは……他の勇者様方なのよね。

「ええええ……マジかよ」

「せっかく修行に対する熱意が盛り上がったところだったのに……」

「俺の……俺の変身ベルト……」

聞いた話だと、最初はこの人達、修行の成果を感じられないってものすごく駄々をこねてて、拳句ボイコットしようとしてたみたい。

でも今は、なんか逆に修行ができない事が不満で仕方ないように見えるわ。

槍の勇者様は女性陣を見てないし。

弓の勇者様はがっくり肩を落としてるし。

剣の勇者様なんて絶望の表情でその場に崩れ落ちてるし。

仲間の冒険者達もみんな呆れてるわよ。ラフタリアさん達だって困り顔でナオフミの事を見てるし……フィーロちゃんはよくわかってないっほいけど。

ああ、女王陛下も困惑の視線を向けておられるわ。

「……一体何があれだけ噛み合わなかった勇者様方を一つに団結させるのです?」

「男の浪漫だ!!」

声揃った! 仲良しか!!

「……こちらがお願いした事を中断させる形となって大変申し訳なく思います。ですが、すでにその魔物による被害も多少で始めていますので、早急な対処をお願いしたいのです」

「……なら、しようがないか」

「ですね……」

ずっとうなだれていた剣の勇者と弓の勇者がようやく顔をあげたわ……ほんつと手のかかる人達。

ちよつとナオフミ! あんたはこういう時に他の勇者達を説教する方でしょ!

仲良くなってるのはいいけどしやんとしなさい!

Side: Naofumi

「ふうん……謎の魔物ねえ。噂は少し聞いてたが、俺あてつきり、いつもの魔物の大量発生くらいにしか思ってたな」

女王に頼まれた調査について、俺達はまず武器屋の親父に報告に向かった。

これから戦力の増強を考えて、色々準備を手伝ってもらってたかな。頼んでおいて悪いが、装備作りは一旦中断してもらおう事になる。

「だが勇者様に指名がかかるんじゃ、結構な大事になりそうだな」

「ああ……それで、いまできてる武器と装備は?」

「おう! 嬢ちゃん達の武器は仕上がってるぜ」

親父に頼んでおいたもの……カルミラ島でポップしたウサウニーソードとイヌルトクロウがお披露目される。

ん？ 全体的に白くなってるな。

「わー！ かるーい！」

「それでいてすごく使いやすいです！ それにこの刃の感じ……斬れ味も維持されていますね！」

「マイナスの効果を打ち消したんだ。苦勞したぜ？」

利点を保ったままそこまで改良できたのか、さすが親父だな。前も誘って断られたが、やはり領地に来てくれないもんかね。

「そんで、こっちはウサギの嬢ちゃんの分な」

「お！ あんがとなく」

セントの方は、鎧を纏う時に自動的に手元に現れる武器の……ドリルクラツシャーとかのバージョンアップだったな。

しかしこいつのこの、ニチアサ感バリバリの武器まで整備できるってのは……流石に凄すぎないか？ 世界観まで超えた技術力だぞ。

まあそのおかげで、今後の戦いへの期待感も強まってるわけだけだな。

「そんで、こっからが本番だ！」

「ん？」

「着ぐるみの嬢ちゃんのだ。結構な傑作ができたぜ！」

そう言って親父が取り出したのは……フィーロだった。

いや、フィロリアルクイーン形態のフィーロを模した着ぐるみなんだが……いや、待て待て。最初はペツクルだっただろ、なんでこうなった!?

「おい、親父、これは……」

「いやー、なんか鳥の嬢ちゃん見てたらできちまってよ。まあ性能はちゃんといから安心してくれよ」

「あ、本当です！ すごいですコレ！」

「いつの間……!？」

俺が止める間もなく、というか気付かないうちにリーシアが早速フィーロ着ぐるみを着込んでいた。



躊躇いがなさすぎだろ……泣いててもわからないから着ぐるみを着てたいとかネガティブなこと言ってたけど、流石にもうちよつと恥じろよ。

ていうか本当に性能高いな！ 役には立ちそうだけど、なんでこちらの鎧よりスゲーんだよ！

俺がおかしいのか？ 親父の、つてかこの世界のやつらと感覚が合わないのが原因か？ ……やめよう、頭がこんがりそうだ。

「んで最後は……新しく入った坊主のだな。ほれ、お前さんの分だ」  
「わあ！ すっげえ！」

親父に剣を渡されたキールが興奮した声をあげてる。

なんか、懐かしく見えるな……ああ、そうだ。昔のラフタリアがあの感じで……いや、あんな風にはしやいではないなかつたか。

ふとラフタリアの方を見てみると、こっちも懐かしそうに、だがどこか寂しそうにキールを見つめている。

……一番キールが戦うことに反対していたけど、過去の自分と重なったせいで、何も言えなくなったのかもな。

さて、親父がキールに色々とレクチャーしてくれている間に、馬車の準備でもしておくか。

と、俺が親父の店を出た時だった。

「――盾の勇者様ですね」

誰かが、俺の前に立っていた。

一瞬身構えた俺は、目の前にいる何者か……分厚いローブで全身を隠した、声でかろうじて女だとわかる謎の相手を睨む。

何だ、こいつ。声をかけられるまで気配も何も感じなかったぞ。

「誰だ、お前は」

「時間がありません。手短にお話しします……どうか、どうか私を殺してください」

は？

いや、急に出てきて殺してくれって……何を言ってるんだ。

「というか、何だ……この、妙な感覚。目の前にいるこいつ……人間なのか、それともフィトリアみたいな魔物なのか。」

「いや、そのどちらでも、俺が知ってる他の何でもない気ようながする。」

「このままでは、私は使命を果たすことができません——」

困惑する俺を放置して、そいつは続けて願い続ける。

「思わず俺が聞き返そうとした時、武器屋から出てきたリュウガにぽんと肩を叩かれた。」

「どうした、ボーツと突っ立って」

「あ？ あ、ああ……この女が妙なことを言ってきてな」

「この女？ ……どの女？」

「どのつて、だから目の前にいるこの……っつていねえ!？」

「さっきまで確かに目の前にいたはずなのに、ちよつと目を離れたあの一瞬でどこに。」

「いや、さっきまでここに妙な女がいて……」

「んん〜？ それっぽいやつは見あたりねえけどな。そいつがどうかしたのか？」

「……いきなり話しかけてきて、自分を殺してくれ、だとか」

「はい？」

「いや、そんな訝しげな顔すんなよ。俺だつて困惑してんだから。」

「まさか俺だけにしか見えてなかった…？ こんな世界じゃあり得ないのが嫌だな。」

「亡霊でも見たんじゃねーのか？」

「亡霊が殺してくれとか言うのかよ」

「そりゃそうだけど……じゃあ、何だ？」

「知るか!!」

「聞き返すな！ いきなり話しかけられた俺が一番困惑してんだつてのに！」

「はあ……もういい。さっきのはほつといてさっさと出発の準備をしちまおう。」

「得体の知れない謎の女より、実害が出てるらしい謎の魔物の方が重

要だ。早急に片付けて修行に戻ろう。

——ここからそうかからないうちに、俺はその女と再び会うことになる。

## 甲羅の魔物

S i d e : E c l a i r

「なあ、ナオフミ？　ここつてさあ……あの村、で、いいんだよな？」  
「あ、ああ……」

鬱蒼と茂る木々。見たことのない奇妙な、しかし美味そうに見える果実を成らせたそれらが作る曲がりくねった道を、勇者殿の馬車に乗って進む。

この辺りはこんなにも深く険しい森などではなく、ごく普通の平地が続いていたはずなのだが……いつの間にかこのような密林になったのだ？

地に張られた根のために進みづらく、がたがたと揺れるその道を進んでいる中、ふとセントが勇者殿にひそひそと話しかけていた。

「前よりひどくなってるじゃねえか!!」

「俺に言うな！　……いや、実際に俺のせいなのか？」

……どうやら勇者様方は、この状況にひどく心当たりがあるようだ。

確かこのあたりには、以前に行商をしていた盾の勇者殿が通った村があつたはず。

飢饉に苦しみ、飢え死にするものが後を絶たないその場所で、槍の勇者殿が封じられた古代の種子を持ち込み……あつという間に村中に繁殖させてしまったんだっただか。

それを解決したのが盾の勇者殿だと聞いているが……全く解決していないようなのだが？

「おい、どうするよおい！　大丈夫つつたじゃねえか！　調整したから大丈夫だつつたじゃねえか！」

「ちよつと待て……俺もいま考えてんだよ。除草剤積んできたっけ？」

「多少はあるけど、これ全部を片付けるにやまず足りないな」

「……む、村の連中は」

「こんな状況だからな……異常発生した木に呑み込まれるか寄生され

るかで、今度こそ全滅してたり……」

「最悪だ……!!」

聞き捨てならない言葉がいくつも聞こえてきたのだが？

最悪の場合、国の恩人たる勇者殿を我が剣の錆にしなければならぬのだが？ どうすればいいのだ、私は。

「落ち着いてくだされ、聖人様。どうやら、皆様が心配されているような事にはなっておらぬようですじゃ」

「え？」

「……この有様なのか？」

む、師匠が頭を抱える勇者殿をなだめている。

どういふことだろうか、と尋ねようとした時だった。

「ああ！ もうまた入ってきてる！ ここはもううちの村の敷地だから入ってきてちやダメなんですつてば！」

一人の少年が馬車の前に飛び出してきて、通せんぼをしてくる。

む？ 村の敷地……やはりここは件の植物に侵された村で間違いないのか。それだとやはりこの有様は勇者殿のやらかという事になるのだろうか。

それにしても、村の住人らしきこの少年が苦しんでいる様子は見当たらない。いや、私たちの馬車に困った顔を見せてはいるが。

と、困惑する我々をにらんでいた少年が、御者台の勇者殿を見てぱっと表情を変えた。

「あ！ 盾のお兄ちゃ……じゃない、勇者様！」

「お前は……たしか寄生されてたあの子供」

どうやら、勇者殿とこの子供は顔見知りだったようだ。それも、勇者殿が直接助けた相手らしいな。

この様子だと、勇者殿が失敗してこの惨状になった……というわけではないらしい。疑ってしまうとは、悪い事をした。

「ここはもう、うちの村の畑なんです。立派な村の特産品になってますよ」

「……本当か？ 住人が呑み込まれて養分にされてたりしてないか？

寄生されて思考を乗っ取られたりしてないか？ 村の地下深くに

魔物化した植物の親玉とか眠ってないか？」

「大丈夫ですよ！」

勇者殿……まさか、やらかしたのではないかという不安からひどく疑り深くなっておられる。いや、一瞬疑ってしまった私がとやかく言えたものでもないのだが。

「たくさん他の村に売れるようになったので、畑を増やして見回りながら管理してるんです。だけど、普通の森と見分けがつきにくいから、よく冒険者の人達が勘違いして入ってきちゃって……」

「ほっほ、さすがは聖人様。凄まじい功績を残されたものじゃ」

「兄ちゃんの作った種がこうなったのか？ 兄ちゃんすげー！」

確かに、凄い。ここまで狙った成長を遂げる植物を生み出し育ては、盾の勇者の力の凄まじさは感服せざるを得ないな。

……当の本人は、未だに青い顔でうろたえておられるが。

「本当か？ 本当に大丈夫か？ 気を使ったりしてないか？」

「大丈夫ですつてば！」

「ナオフミ様……ご自分を疑われるのはもうおやめください。見てて切なくなります」

未だ自分の失態を疑い、心配する言葉をかけ続ける勇者殿をラフタリアがなだめている。どこまで自信がないんだこの御仁は。

自分でも少しやりすぎたと思ったのか、勇者殿は咳払いをして気分を切り替え、少年に向き直った。

「何もないならそれでいい。それで聞きたいことがあるんだが、この辺に正体不明の謎の魔物が出没し始めていると聞いてな、その調査に来たんだ」

「謎の魔物……ああ、はい。知ってます。村で預かってます」

「詳しく調べたい。見せてもらえるか？」

「はい！ こつちです！」

⊗

少年に案内され、我々は村へと辿り着いた。

広場らしき開けた場所には人ばかりと、その間に置かれた奇妙な魔物の死骸が見つかった。

「あれです。畑に迷い込んだ冒険者の方が遭遇して、襲ってきたのを退治してくれたんです」

「どりゃどりゃ……」

周りに集まっていた村人達に断ってから、セントが魔物を調べ始める。

ふむ……見たところはコウモリだが、確かに甲羅があるな。

飛びづらそうだと思うのは私だけか？ 見れば見るほど奇妙な魔物だ。

「ふむ……もらっていつていいか？」

「どうぞどうぞ」

勇者殿が盾を構え、その上に魔物の死骸を置く。

するとしゆるしゆると魔物の死骸が吸い込まれていき、跡形もなくなってしまう。

おお、これが聖なる武器の力か。こうして見るのは初めてだ。

こうやって魔物や物を吸い込ませることで、様々な力を使えるようになるんだったか。やはり不思議な力だ。

「……\*\*の使い魔？」

盾を確認していた勇者殿が首をかしげ、何かを呟く。

急に何を……ああ、吸い込んだものが何なのか調べていたのか。成る程、そういう使い方もあるわけか。

しかし、使い魔とは？

「使い魔ってことは……なんかがこいつを放って村を襲わせたってことか？」

「字面通りならそうだな。だが、肝心の名前が出てこない……こんなのは初めてだ」

「他にはないのか？」

「今の所はこの一体だけで……」

「そっかー」

村人に尋ねたセントが何やらがっくりと肩を落としているな……ああ、そういえばセントも魔物や物を使って道具を作っていたんだったか。

例の……フルボトルとかいうものの成分にしたかったのだろうか。  
ん？ 誰か近づいて来るのを感じて、私は思わず振り向く。

あれは……村にいた冒険者パーティーか。この魔物を狩ったのも  
彼らのようだが、何の用だ？

「どうした？ なんかでかいのを背負ってるが」

「あの……盾の勇者様、先ほどまた別の魔物が現れて、退治したところ  
なんです」

「そうか、いいタイミングだ。ちよつと見せてくれ」

近付いてきた冒険者達が担いで来た……あれは、猿か？ 妙にでか  
い毛むくじやらの魔物をどさつと地面に放り出される。

勇者殿はそれにも盾を向け、吸い込ませる。

が、全部は吸い込ませず、半分を残すとあとはセントに促した。

「ほれ、お前の方でも何ボトルが出てくるのか確かめてくれ」

「あいよ、成分吸収〜」

セントが取り出した空のフルボトルに、奇妙な猿が吸い込まれてい  
く。

残った半身が全て吸収されると、フルボトルは光と共にその形を変  
え……緑色に染まった。

瓶に浮かび上がったのは……亀、か？

「何じゃこりや。カメフルボトル？」

「どう見ても亀じゃねえだろ、さっきの魔物は。まあ、確かにこいつに  
もでかい甲羅があったけど」

「んじゃあ、こいつらの大元は亀のなんかかってことなのか？」

「さあな……これだけじゃさっぱりわからん。とにかく他に現れる可  
能性もある。調査がメインだが、村人が襲われる前に探し出して駆除  
しよう。被害が出る前にな

腕を組み、唸る勇者殿と同じく皆で頭を悩ませる。

確かに……ヒントが少なすぎてこれ以上何もわからなさそうだ。

人を襲うことがわかっている以上、その阻止が最優先事項だろう  
な。

「では、手分けして探そう。音に敏感なラフタリアとセントは別れた



方がいいのではないか？」

「ついでにフィーロも分けておこう。こいつは魔物の気配に妙に敏感だからな……3班に別れて森を調査して、あとで合流しよう」

「はい」

「おう」

「あいよ」

行動指針を決定し、我々はそれぞれで動き出す。

勇者殿はフィーロと老師。

ラフタリアは私とリーシアと。

セントはリュウガと、それぞれ班を作って調査に赴く。

早速歩き出したラフタリアと私だったが……その時私達は、リーシアが後ろで何事かを呟いているのに気付かずにはいた。

「甲羅……亀の魔物……何か、思い出せそうなの……？」

## 増殖する敵

S i d e : R y u g a

「うっわ、ここにも死骸だ」

謎の魔物の正体を突き止めるため、オレ達は森……村の連中的には畑なんだっけ？ 境界線がわかんねえけど、とにかく三班に分かれて調査を進めていた。

そんでわかったことといえば……連中が人間だけじゃなくて魔物も襲うこと、そんで生き物だけを狙うこと、逆に農作物とかは襲われてないこと、そのくらいだな。

全身をズタズタにされた魔物の死骸があっちこちで見つかった状況に、思わず顔が歪むのを感じる。

目の前に倒れた熊の魔物の苦痛に満ちた顔を見てると……なんともいえねえムカつきが腹の奥から湧いて来やがる。

「捕食……とかが目的じゃないみたいだな。とにかく殺す事だけ考えてるような……胸糞悪いな」

「ナオフミが確認したところじゃ、使い魔って話だが……何が目的なんだ？」

「わからない……ただ、なんか引つかかる」

オレと一緒に探索をしているセントがなんか考え込んでいる。

しかしまあ、胸糞悪いって言葉には賛成だな。死骸の傷口を見た感じ、大勢で寄ってたかかって襲いかかった印象がある……その上で食いもせずに放置だ。

どこのどいつがこんなもんを使役してるのかは知らねえけど、顔を見たらまずぶん殴るべきだな。

「……とりあえず、こいつをどうする？ ほっといたら魔竜みたいに復活したりしねえか？」

「それはないだろうが……一応、処理はしておこう。リュウガ、燃やしてやってくれ」

「オレかよ!? まあ、いいけど。ボトルにやしねえのか？」

「こんなやられ方したやつを使うのはなんか、気が引けてな」

それもそうか。

こつちが魔物を倒して素材を採集するのと、倒れてる死骸から素材を剥ぎとるのは、やってることは結果的には同じだけど……なんか、なんか違うよな。

そういえば、探索を始めてから何体かあの甲羅の魔物が出てきて、倒してセントが成分にしていたが……全部カメのフルボトルだったよな？

おかげで今のあいつの持ち物はほとんど緑色だ。

「しつかしどつから来てんだ、こいつらは」

「目撃証言としては、東から飛んできてるみたいだな。冒険者の話だと、あのでかい雪男みたいなのもその方角から来てたってさ」

「東ねえ……そういう逸話も知らねえって話だし、どうなってんだか」  
「手がかりもほとんどねえし、歩けど歩けど見つかるのは死骸ばかりだ。こうも何もねえとうんざりしてきやがる。」

……何もなきやいいのが一番だが、それはそれで不気味だから難儀だよな。

「おい、そろそろ頼む」

「ん、あいよ」

忘れてた、死骸の処理しないといけねえんだった。

剣の勇者のやらかしを再発させるわけにはいかねえからな。念入りに焼いておくか……その前に周りの木、燃やさないようにしねえと。

——と、オレが魔物の死骸に近づこうとした時。

もぞり、と。

事切れているはずの魔物が、かすかに動いた。

「……ん？」

「どうした？」

「いや、なんかこいつ、ちよつと動いたみてえな……」

「は？ おいおい、まさか本当に魔竜の悪夢が再発するとかベタな展

開が——」

険しい顔になったセントが、魔物を睨んでため息をついたその時。





「おわーっ!? ぶへっ!?」

セントが自分の鎧に手間取ってるうちに、別の雪男が寄ってきてぶん殴られている。

ふざけてるあたり割と余裕がありそうなんだが……っていつの間にかさらに集まってきた雪男達に囲まれてタコ殴りにされてるだけど!? 本当に大丈夫なのか!?

「いでっ! いでっ! あだだだだ! ……ってあれ? そんなに痛くないな」

「何やってんだお前は!!」

「いや〜悪い悪い。やっぱウサギとカメは相性悪いのかね」

雪男達に殴られながらヘラヘラしてるセント……いやマジで不安になるぐらい殴られてるだけど!?

動きは遅いけど、その分防御力が高いのか? どうでもいいけどいい加減反撃しろよ!

代わりにオレが寄ってくる雪男達をぶっ飛ばす羽目になってんだろうが! 戦えバカウサギ!!

「オラッ! オラア! くっ……殴っても殴っても湧いて出てきやがる! 面倒くせえな!」

「…おそろく、どっかにある魔物の死骸を苗床にして湧いてきてるんだ。まずそいつを片付けないと次々に生まれてくるぞ!」

「マジかよクソが!」

焼こうにもこんだけ敵に囲まれてちや動けねえつての……! 一体言ったおはそんなに苦労しなくても倒せるけど、多すぎんだよ一々! どうすりゃいいんだよ……!?

と、オレが暴れながら悩んでいると、雪男達に囲まれたままのセントがなんかぶつぶつ呟き始めた。何やってんだこんな状況で!?

「……なるほどなるほど……リユウガ! オレが合図したらそこから離れる!」

「はあ!?!」

「いいからいいから……いくぞ!!」

オレが思わず雪男の包囲の中を覗き込むと、セントが殴られながら

……いや、攻撃を防ぎながらハンドルを回している様子が見えた。

あの状況で必殺技でも使う気なのか？ そんな強力な技が使えるベストマッチにや思えないんだが……ええい、考えてる場合じゃねえ!!

【Ready GO!】

「今だ!!」

セントの声に合わせて、オレはその場から跳んでセントと雪男達から離れる。

宙に飛んだオレの視界の中で、セントの鎧の片方……時計を基にした装甲がかちかちと音を立てて——光った!?

【ボルテックファイニッシュー!】

セントの鎧から光がほとぼしって、周りの雪男達が全部まとめて吹っ飛ばされる。多分、ほとんどが今の一撃で仕留められてた。

な、何したんだあいつ今!?

殴り飛ばしたようには……何っ—か、あの甲羅で跳ね飛ばしたように見えたぞ!?

「ふむふむ……カメフルボトルの効果は衝撃吸収、いや衝撃蓄積か？ それをウオッチフルボトルの能力で時間圧縮、一気に放出……咄嗟の判断でここまでやれるとは、やっぱオレって天・才」

こ、こいつ……あの状況でも鎧の能力の検証してやがったのか……人をヒヤヒヤさせておいて勝手な奴。

「おいリュウガ! ぼさつとしてないでさっさと死骸燃やせ!!」

「ったく! わかつたつつの!!」

セントに言われて、オレはさっきの死骸があった場所に走って、炎で死骸を焼き払う。近くにあった畑の木は燃え広がらないようにへし折っちまったけど、緊急事態だし仕方ねえ。

メラメラと燃える炎の中で黒い炭になる魔物の死骸を、セントと確かめる。

「……湧いてこないな」

「推測通りみたいだな。あいつら、殺した魔物の死骸を苗床にして増えてるんだ……他にもまだ残ってるかもはずだ。探すぞ」

「厄介な敵が出てきたもんだな、くそっ！」

悪態をつきながら、オレ達は森……じゃなくて畑の奥を目指す。

面倒だが、ここで手を抜いたら最初に逆戻りする羽目になる。しっかり調べておかねえと。

しかし、こいつらが使い魔ってことは、こういう風に作ったやつがいるわけだよな？ 本当に何が目的なんだ？

……まさかとは思うが、この世の全ての生き物を殺して苗床にするのが目的だったりしないだろうな。

っ……！ なんだ、ちよつと寒気がするな。



まだ死ぬべきじゃない

S i d e : S e n t o

「おいナオフミ！ 大変だ、急いで例の魔物の死骸を処理しないと――」  
あの甲羅の魔物達を倒し、そしてその死骸もきっちり焼却処分してきた帰り

オレとリユウガは急いで村に戻り、ナオフミ達に報告に向かった。早いとこ手を打たねえと村どころかこの国も危ねえ、急いで動かないやならない。

で、なんかすげえ大騒ぎしてる声が聞こえる家からナオフミの声がしたんで、リユウガと速攻でお邪魔したんだが……。

「いだだだっ!! 何すんだよ兄ちゃん！ いで、いででで！ そこはダメだっ!!」

「キールううう!!」

「……って何やってんのお前ら!!」

ナオフミにベッドに押さえつけられたキールが、ものすげえ叫び声を上げている。

何があった!?! 何をしてんだお前は!!

え、キールもあの魔物とやりあった?

幸い軽症で済んだみたいだけど、話を聞いたナオフミがいきなりキールを押さえつけ始めた?

オレ達が絶句している間に、ナオフミはキールの背中に……あの魔物につけられたものらしい傷口に薬をぶっかけて、ピンセットで何かを強引に引き抜いた。

「ぎゃあああああっ!!」

「……よし、取れた。よく我慢したな、もう大丈夫だ」

あだだだだ!と見てるこっちが痛くなるような行動……治療の後、ナオフミは取り除いた何かを、小さな甲羅をオレ達に見せた。

「……あの魔物の卵のようなものだ。おそらく倒した魔物や傷を与えた相手にこれを植え付け、体内で増殖させていたんだろう」

「うえっ!？」

「マジかよクソツタレ……!？」

マジで？ 死骸から増えるのはオレ達にもわかったけど、戦っただけでもそんなん受けるのか？ こっわ!!

……オレ達大丈夫だよな？ 知らねえ間に植え付けられたりしてないよな？

卵を抜き取られたキールは……なんかめっちゃぐったりしてる。強引に引き抜かれたわけだからな、仕方がない。

オレ達の前に戻ってきたラフタリアちゃんとエクレールがキールの具合を診てるけど……だいたいぶ消耗してんな。

「魔物を襲っていたのは捕食のためじゃない……苗床にするためだったんだ。すぐに他の死骸も処分しなきゃならない」

「! あ、ああ! オレ達もそれに気付いて、リュウガに燃やさせたところだ」

「私達も」

「でも同時に、戦った奴らの傷も診なきゃならねえのか……」

リュウガの呟きで、思わず全員がハツとなる。

そうだった、オレ達が来る前にも何人か交戦してたんだっけか……こりゃ本格的にやばくなってきたな。

「ナオフミ様、これはもう私達だけで対処できる問題ではないのでは……」

「うむ、国で動かねばならんじやろうて」

ラフタリアちゃんとバーさんの言葉に、ナオフミも頷く。

あの魔物を倒すにも死骸を処分するにも、圧倒的に手が足りねえ。一体一体倒してる間にどんどん犠牲者も敵も増え続けるだろう。

急がねえと何もかもが手遅れになりそうだ。

「よし、報告も兼ねて一度城へ戻るぞ。三勇者も流石にこの状況はやばいとわかるだろう、全員で集まって話し合う必要がある」

「おうー」

方針を固めてから、オレ達は家を出て村を後にしようとする。

……その前に、ナオフミがベッドに腰掛けて荒い息をついている

キールに視線を戻した。

「キールはここで待機だ。傷が癒えるまで動くな」

「!? ちょよ、ちょつと待ってよ兄ちゃん! 俺もまだ戦え……うつ」

「おい、キール!」

置いてかれる事が決定し、慌てたキールが止めようと立ち上がって……そのままよろよろと崩れ落ちる。

あー、こりや寄生されて相当力を吸い取られてんな。このまま連れてくのは無理だ、足手まといになっちまう。

「つ……! ちくしよう……せつかく……せつかく強くなって、今度こそって……なのに」

「キールくん……」

床に座り込み、涙を滲ませながら項垂れるキールを見つめ、ラフタリアちゃんが悲痛な声を漏らしている。

まあ、そうだな……あのきつつい修行をなんとかこなして、やっと親や友達の仇である波に立ち向かう準備ができるってとこだったのに、これだもんなあ。

ぶるぶると肩を震わせるキールの前に、不意にリュウガがしがみこんだ。

「……情けねえツラしてんじゃねえ、キール。お前は今、重要な役目を果たした。魔物から村人を守って、奴らがどんどん増えてくる秘密を解く鍵を手に入れて……生き残ってみせた。これ以上ないくらいの大戦果だろ」

「ししよー……」

「今は休め、お前はまだ死ぬ時じゃない。お前がくれたチャンスを活かすために、オレ達は行くんだ……今度は、オレ達に任せろ」

ぐずぐずの顔で、リュウガを見つめるキール。

ズズツ、と鼻を吸って、濡れた目元をぐしぐしと拭ったキールは、リュウガやナオフミに顔を隠すようにしながら、やがてこくりと小さく頷いた。

……本当にえらく懐かれたなあ、お前。

「……行くぞ、ナオフミ。オレの教え子に手え出したクソツタレの魔

物共に目にももの見せてやる」

「ああ、わかった」

「フイーロも頑張る!」

いつも以上に目をギラギラさせたりユウガが、立ち上がったナオフミに促すと、全員が同じ決意を秘めた表情で頷く。

「つたく……こうもカツコいとこ見せつけられちゃ、こつちも頑張らねえとって気持ちになるじゃねえか!」

S i d e : E c l a i r

勇者殿の力……転移によって、我々はメルロマロク城へと帰還し、女王の元へ報告する事となった。

すでに多くの激務に追われておられる陛下にこのような報告をせねばならぬとは……待つ事を知らない時の流れが恨めしく思う。

急ぎ、謁見の間へ向かい、扉が開くと同時に陛下に呼びかける。

「女王陛下、ご報告が——」

「見つかったか!」

む? こちらが話すよりも前に陛下が過剰に反応を示され……来たのが私と勇者殿だと気づくと、やや落胆した様子を示された。

どうされたのだろうか、何か悩ましげな顔をされているが。

「どうかしたのか? こつちは例の魔物の件でわかった事を報告に来たんだが……」

「……申し訳ありません、イワタニ様。そのご報告は大変ありがたいのですが、こちらにも非常に頭の痛い問題が舞い込みまして」

歯切れ悪く、ため息混じりに、陛下はその問題について話された。

その内容に、我々も思わず言葉を失ってしまう。

ナオフミ殿以外の勇者方が、追っ手を撒いて失踪してしまった……と。

「何やってんのあの三馬鹿は?!」

セントが頭を抱えながら叫んでいるが、正直言えば私も叫びたかった。

素行というか態度に色々と問題があった彼らだが、とうとうこの非

常事態に姿を消すとは……！ ああ、おそらく今、私も陛下と同じ顔をしているのだろうか。

「なんだってそんな事を……あいつら、何か言っていたのか？」

「報告によれば、三人とも同じ事を……『事態の解決に向かうだけ』だとか」

事態の解決……？

言葉から察するに、事態とはあの魔物が大量に発生し襲ってきているこの状況のことなのだろうが、その解決という事か？

「……あいつらまさか、この状況の原因が何かわかっているのか？」

陛下の話に、勇者殿がハッと何かに気づいた様子を見せそう眩く。

そうか……他の勇者方はこの世界にやけに詳しい様子だった。この事態についても何か知っていたという事か。

ただ……何故それを詳しく我々に教えようとしない!!

「あいつらあ……！ さては他のやつを出し抜くつもりで……本当にゲーム感覚が抜け切っていない大馬鹿野郎共め!!」

勇者殿が険しい顔でそう怒鳴る。

そういえば、ナオフミ殿は逆にこの世界については疎く、最初の頃はひどく差をつけられていたのだったか……国の、世界の危機にどうしてそう子供のような意地を張られるのか。

「くそっ！ もう少し早く戻ってくりやよかったか……」

「今考えても仕方ありません……事情を知っているのなら話が早いんです。追いかけてみましょう」

ラフタリアの提案に、全員が頷く。

まったく……何か知っているのなら書き置きなり何なり残せばいいだろうに、それすらもしないとは！

急ぎ、陛下に断って謁見の間を後にしようとした時……不意に、リーシアが自信なさげに手を挙げた。

「ふえ……あの、ちょっとよろしいでしょうか」

「何か？」

「えつとえつと……あの魔物のことなのですが、私、何かの資料で似たものを見た事がある気がしまして……」

「何だと!？」

その言葉に、全員が一斉に立ち止まり振り向く。

思わず視線に力がこもってしまい、それをいっぺんに浴びたリーシアがかわいそうなくらい震え上がってしまった。

「ふええええ!! ほ、ほほ本当にそんな気がするだけで! あの、えつと……確か古の勇者の偉業の中に、巨大な亀と戦った記録があったよ  
うな」

「ドンピシャじゃねえか!!」

思わずといった様子で叫ぶリュウガに、私も内心で同意する。

まさにこの状況を表していると思えないなようだぞ……何故そこまで自信なさげになっているんだ。

とはいえ、おかげで重要な手がかりを得られそうだ。陛下も少し顔色が回復しておられる。

「なるほど……大義である、リーシア・アイヴィレッド。ならばそなたには城の書庫を解放し、その魔物に関する詳しい情報を調べる役目を与えたい。……構いませんか、勇者様」

「ああ、こつちからそう頼もうと思ってた。お手柄だリーシア、ようやくお前の活躍できる場が舞い込んできたみたいだな!」

「ふええええ!？」

勇者殿……もう少し別の言い方があるのではないか？

リーシアも突然の大役を任せられ、いつもの情けない悲鳴を上げているが……頼りになるのかならないのか。

「よし、なら俺達は三勇者の足取りを追おう。追いつく方法には一つアテがある……もつとも、向こうがそれに領いてくれるかどうかはわからないがな」

「じゃあナオフミ、オレもリーシアに同行していいか? 調べ物ならオレも得意だ」

「わかった」

セントが手を挙げ、勇者殿と陛下に許可を得る。

二人が急ぎ足で書庫へ向かうのを見送ってから、勇者殿も足早に歩き出した。

「あの三馬鹿め……見つけたらただじゃおかんぞ」  
ずんずんと荒々しい歩き方で去っていく勇者殿と、それを追って走り出すラフタリア達。

その言葉には大いに同意するが……その、何だ。  
日頃の不満も大いに混ざってはいないか？

## 世界の為に諦めて

S i d e : N a o f u m i

「おいフィーロ！ フイトリアに声を届けられるんだよな？ 俺達をあつ三馬鹿のところ免费送ってくれるよう頼んでくれ」

女王のもとから一旦離れて、人気のない外に出た俺はフィーロに……フィーロを通じてフイトリアに連絡を取る事を試みた。

あいつの持つてる馬車の転送能力があれば、先に行つた三勇者に追いつけるかもしれない。

世界を守るために仲違いするな、と言つたのはあいつだ。もう少し手を貸してもらうぞ。

フィーロはしばらく黙り込み、アホ毛をぴこぴこことアンテナのように震わせて……ん？ なんだ？ なんか困惑した表情になつたな。

「……えつとねー、ごしゅじんさま」

「何だ？」

「フイトリアがねー、『悪いけど、もう手遅れ』だつてー」

……は？

手遅れ、つて言つたのか？ フイトリアが。

動揺し言葉をなくす俺達に、フィーロは辿々しくフイトリアの言葉を……冷酷な拒絶に満ちた言葉を発する。

『四聖勇者の仲がここまで悪いのなら、もうどうしようもない』

『前に言つた。世界のためか命のためか、重大な選択を強いられる時が来る』

『うまくいけば、もう波は来なくなる。勇者が、世界の戦士達が戦い続ける必要はなくなる』

『三人の勇者は選択した、結果的には命を守るための茨の道を』

『フイトリアにできる事はもう何も無い——残念だけど、世界のために諦めて』

「……だつて！」



……誰も、何も言えなくなっていた。

いや、待て待て待て。そりゃあないだろう。

「待てフィトリアー！ そりゃあいつら、何も言わずに今回の騒動に首を突っ込みに行っただけ、いがみ合っていたわけじゃない！ 少しだが通じ合い始めていたんだ！ 手遅れと判断するのはまだ早い!!」

「……それでも、もう選択はされた。どの道、あの場所はフィトリアの管轄外だからもう間に合わない……だった」

いやいや待て待て本当に待て！

マジでちよつとずつだが足並みを揃えようとしていたんだ！ 男のロマンがそれを現実にしようとしていたんだ！ 本当に!!

それにお前が言ったんだぞ、四人の勇者がいがみ合っている世界を救えないって。だからこそあいつらに追いつかなきゃならないってのに。

まさか……ちよつと待て、お前。

「おい……まさかあいつ、オレ達を見放したのか!? フザケンナよこんな緊急事態に!!」

「そんな……」

リュウガが鬼の形相でつぶやき、ラフタリアも言葉を失っている。そりゃ、味方だと思っていた奴に突き放されりゃそんな反応にもなるわ！

……だが、こうなるのは当然の話だったかもしれない。

あいつは前に言っていた……自分の役目は人のいない地で起こる波の対処だと。

長い年月を、それこそ気の遠くなるような年月を一人だ守り続けていた奴にとって、今の勇者がどれだけ頼りなく見えた事か。

あげく、明らかな以上事態が起こっているというのに、それぞれが独断専行……。

俺があいつなら、見限る……そう思いかねない。

「……いくぞ。こうなったら俺達だけでやるしかない」

「大丈夫なのか？ あいつ、もう間に合わないっつってたぞ」

「……それでもやるしかないだろう」

無理だ、と言われても受け入れられるわけがない。

このままだと大勢の人間が死ぬ。それは見ず知らずの他人だけじゃなく……俺の知ってる奴も、俺を助けてくれた奴らもだ。

踵を返そうとした俺の手を、俯いたファイロが掴み、小さくこぼす。

「あのね、ごしゅじんさま。……フィットリア、さつき元気なかつたよ」

「……ファイロ、今もまだ繋がってるならこう言っておけ。あいにく、ここに居る奴らはみんな、諦めが悪いんだよ」

悲しげなファイロの頭を軽く撫で、俺達は歩き出す。

今はただ、できる事をするしかない……たとえそれが無駄に終わるのだとしても。手遅れだと告げられようとも。

俺達はまだ、生きてここにいるんだ。

それからしばらくして……事態は動いた。

城の書庫に数日こもり、情報を探していたセントとリーシアが、ついにその存在に辿り着いた。

「あああああああ!!」

本の山に埋もれていたセントとリーシアが、がばつと山をはねのけながら起き上がる。

そして、無数の資料の中から見つけ出した一つの記述を……今回の騒動の黒幕そのものを描いた一冊を見つけ、真つ青な顔で凝視した。

「思い出した！ 古の勇者の記録!!」

「遙か昔にでかい被害を出して、古の勇者に封印されたカメの化け物

！ その名は——」

☒

「——霊亀い?」

目の下に大きな隈を作ったセントとリーシアの説明に、リュウガが胡乱げな声で反応する。

ていうか大丈夫かお前ら……三日三晩かけて書庫から資料を見つけて出てきたすぐあとに出発したからな。めちやくちやふらふらになっただぞ。

「そう！ 遙か昔、先代勇者が対峙するも倒しきれず、やむなく古の魔

法で封印するしかなかったヤベエ化け物！　それが霊亀だ」

「どうヤバいんだよ、そいつは」

「とにかくデカイ。山を一個背中に背負った超でかいバケモノ亀だ。封印された後、そいつの背中には国がまるまる一つできてるらしい……それが今オレ達が向かってて、例の使い魔達がやってきてる方角にある霊亀国だ」

……そういえば、俺の元いた世界の伝説上の霊亀もそれぐらいデカイって話だったな。背負ってるのは国じゃなくて蓬莱山だが。

しかし、本当にそこまででかい敵を相手にするなんて想像だにしていなかったぞ……どう戦えばいいんだ？

昔の勇者にも倒せなかったって言ってるしな。そいつがどの勇者でどの程度の強さだったかは知らんが、少なくとも苦戦するのは間違いないだろう。

「……んでその、霊亀って化け物を倒すために、あの3バカは先に行ってたって事でいいのか？」

「そういう事だな」

「戦う術があるのか？　どうせゲームの事前知識を元に大丈夫だとか思ってるんだろうが……不安すぎるぞ」

ただでさえあいつら、中途半端な知識しかないせいで失敗続きなんだぞ。錬あたりは多少自覚してるっぽい……このまま油断が続くようじゃ、今度こそ命に関わる。

フィトリアの気持ちがよくわかるな……なんであのアホ共ここまで心を砕かにやならんのか。

「この速度で追いつけるのでしょうか……」

「わからん。だが、フィーロも休ませなければならぬし、魔物の邪魔も入るはずだ。予定通りにはいかないだろうな」

そもそもこの話……間に合ってどうにかなるか？　ゲーム知識が根本にあるあいつらが、お前らじゃ勝てないからやめろと言われて諦めるとも思えない。

間に合わなかった場合……もう波は起こらないという話も気になる。

俺が勇者をやらずに済むならそれはそれで万々歳だが……それは結果の話。過程がどうなるのかまるでわからない。

多大な犠牲を払う必要があるというのなら——ラフタリア達はどうかなる？

波だろうが霊亀だろうが……生きてる奴にとつちや災厄には変わりないんだよ、くそ！

「あの3バカめ……見つけたらただじゃおかん!!」

「おうー……うおつと!?!」

その時、がくと馬車が大きく揺れ、寝不足のセントがバランスを崩す。

床に手をつけて倒れ込んだ直後……ゴトツと何か、水色のゴツい機械がセントの懐からこぼれ落ちた。

なんだ？ レンチのついた……プレス機？

「だー！ これはダメだ！ 絶対にダメだ！ 絶対に触んな!!」

はつと我に返ったセントが、慌てて水色の機械を抱えて俺達の視界から隠す。

いや別に取りやしねえよ、なにかわかんねえし。

てか、そんなあからさまに隠されると逆に何か気になるじゃねえか。

じつと俺達が見ていると、セントは観念したようにため息をつき、隠した機械を俺達に見せてくる。

うーむ、見れば見るほどわからん。

ただなんか、セントの持つベルトに似てる気がするの俺だけか？

こいつ元々変わった武器ばつか作ってるからな。

「セントさん、これは一体……?」

「……フルボトルの研究過程でできた、あるアイテムを基に新しく作った兵器だ。失敗作のな」

「どういうものなんだ?」

「ナオフミのラースシールドみたいなの?」

「捨てるそんなもの!!」

簡潔な説明を聞いて即座にそう叫んでいた。なんつーもん作って

んだお前は!?

腐竜の一件を知らないリーシアだけがキョトンとしている。知ったところでどうせふえふえうるさいだけだろうけど。

「どうしてそんな危険なものを……」

「最初にナオフミが憤怒の盾を使った時にな? ものすげえエネルギーが聖なる盾から発生してたから、資料として採取しておいたんだよ」

そう言つて、セントは懐から一本のフルボトルを取り出してくる。

見せられたそれは、見るからに危険そうな漆黒に染まっていて、そのままベルトにさせば何かしらのバッドステータスに汚染されそうな気持ち悪さを醸し出している。

あれか、あのとき出てた炎を蓄えてんのかこれ。よく採る気になつたな。

「で、それをフルボトルに混ぜてみた。そしたら、中の成分がゲル状になった……調べてみたら、そいつは驚きの性質を持つてたんだ」

次にセントが見せてきたのは、元の世界でよく見たゼリー飲料みたいな入れ物だった。

……おいちよつと待て、入れ物のデザインといい形といい完全にゼリー飲料じゃねえか。やめろそういう日用品みたいな見た目にするの。真面目な話が全然頭に入つてこないんだよ。

「ゲル状になる事で、成分は液体の状態よりはるかに大きな力を発揮することがわかった。具体的には数倍から十数倍……そいつに合わせて、オレは新しくライダーシステムを作り上げた。それがこの「スクラッシュドライバー」だ」

ああ……なるほど。ゲル状だとボトルを振つても効果が発揮されなさそうだもんな……でもだからってなんでその形なんだよ。

そういえばこいつ、前からちよくちよくなんか実験して爆発させてたな。

そんな前からこんなものを作つてたのか……まさか、こういう緊急事態のために?

「ただこのスクラッシュドライバーには大きな欠点があつた……使用

者の闘争本能をばちばちに刺激して、狂戦士に変えちゃうんだ」

「それは……！」

……そうか、俺が暴走していた時に採取したエネルギーだからな。使用するとそういう感じになってしまうのか……マジで失敗作じゃねえか。

「なんでそんなものをここに……」

「この先の戦いで、今ある戦力じゃどうしようもなくなった時のために……最後の最後、切り札として持つておいてるんだよ」

そう言つて、セントは頬杖をついて馬車の向かう方を見やる。

その顔に、いつもの飄々とした雰囲気はない。険しい視線で、唇を噛み締めている。

これは……科学者としての葛藤か。

元から自分の発明品の与える影響力を気にしているところにてきちまった、使い手を狂わせる兵器。大幅にパワーアップできるとしても、そりゃ使うのに迷いを抱くだろうよ。

「……使わずに済めば何も問題はないんだけどな」

「……そうだな」

月並みな言葉しか吐けないが、そんな話を聞いた以上使わせたくはない。

だが、そんなセントの覚悟と想いは……。

バキッ——!!!

と、何処かから響いた破碎音と共に、無残に踏みにじられたのだつた。

## 霊亀、進撃

S i d e : R a p h t a l i a

「……!? 気をつけろ、お前ら! 波だ!!」

突如、顔色を変えられたナオフミ様が叫び、思わずぎよつと振り向きみます。

そんな、次の波までまだ余裕があったはずです! まだ他の勇者様達を見つけられていないのに、こんな緊急事態に起こるだなんて……!

ですが周りを見渡してみても、異変は見当たりません。転送もされていません……霊亀国に向かう道の途中です。

「落ち着いてください、波なんて起こってません!!」

「何……!?!」

強張った表情のナオフミ様に呼びかけると、ようやく落ち着いてくださいました。荒々しく息を吐いて、周りを見渡して、ようやく冷静さを取り戻してくださいました。

「だが今……確かに何か割れる音が、波で空に亀裂が走る時と似た感覚がしたんだが……」

「……オレもなんか、やばいことが起こった感覚は感じたぞ」

「やばい事ってなんだよ」

「そんなもんオレが知るか!」

リュウガちゃんも何か感じたのでしょうか? 険しい顔で周りを睨みつけています。

これは、勇者が持つ独自の感覚? でももしそうならどうしてリュウガちゃんにも……わからない事だらけです。誰にとっても未知の状況すぎて、なんの答えもまだ見つけられそうにありません。

「そもそも次の波が起こるのは2日くらい先だろ。色々ありすぎて神経質になってんじゃないやねえか?」

「それならそれでよかったんだ、が……」

「……ナオフミ様?」

虚空を、ステータス画面を確認しておられたナオフミ様が、大きく

目を見開いて固まっているのに気がつききました。

何でしょうか……私も、とてつもなく嫌な感覚がしてきました。

「……波のカウントが、止まっている」

「え？」

カウントが……止まっている？

あの、災厄の波の、多くの人々に血と涙を流させ、大勢の人が立ち向かってなお無慈悲に苦しみをもたらし続ける理不尽な災害のカウントが、止まっていると？

「……おい、それはマジでやばい事じゃないのか。どうなってるんだ!？」

「わからん。わからんが……代わりに7という数字が現れている」

「ちよつと待て、この状況……妙な魔物が現れたり、波のカウントがおかしくなったり、変な事ばかりが連続で起こってるこの状態、まさか」

突然の話に、私達は全員、呆然としたまま言葉をなくしていました。

だってこれでは……フィトリアさんが前に言っていた通りの状況じゃないですか。

うまくすれば波は来なくなる。けれどそのために、世界のためか命のためか選択をする必要がある……けれど、どちらの道も多大な犠牲を支払わなければならない、と。

だとしたら、今起こっているのは――

「霊亀が、復活した？」

⊠

【タカー！】【カメラ！】

霊亀国へ向かうの一旦中止し、私達は山道の途中にあった広場にとどまりました。

そこで、二つのフルボトルをベルトに挿し、二色の鎧を身に纏ったセントさんが小高い岩場の上に登り、霊亀国の様子を遠目から伺います。

あの鎧だと、鷹の目というスキルで遠くを見て、さらにもう片方の鎧に視界を拡大する能力が備わっているようです。この場にうつつけですね。



「……霊亀国がある方角ってこつちで合ってるよな？　ずっと見張ってるけどそれっぽいのは全然身あたりねえぞ……」

話を聞いた感じですと、恐ろしく大きい魔物のようですし、動き出したのならきつと遠目でもわかるとは思いますが……今のところセントさんが気づいた様子はありません。

まだ動き出していないのならそれでいいのですが……不安はどうしても拭えませんか。

「とにかく情報だ。もし本当に霊亀が復活したのなら、今の俺達で立ち向かえるのかわからない。あいつらの動向や使い魔の反応、調べられる事は全部調べておきたい」

「おう、わかった」

ナオフミ様の指示に頷き、セントさんはじつと周囲の異変を確認し続けます。

使い魔のように目立った異変が起きていない以上、待つ事しかできないのは非常に歯がゆいですが、仕方ありません。

ふと、すぐそばで不安げな表情でうつむいているリーシアさんに気がつきました。

「イツキ様は……ご無事でしうか」

「あいつらの事だしな……またいつもの根拠のない自信と中途半端な前知識で無謀に挑んで、あっさり返り討ちになっている未来しか想像できないんだが」

「ふええええ!?!」

「ナオフミ様!」

どうしてそう不安になる事をこの状況でおっしゃるのですか!?

本当の事だとしても、心から慕っているリーシアさんの目の前で言っただけじゃありません!!　……あれ、私も大概な事を言っているような?　?

んんっ……とにかく、先に霊亀の元に向かっているであろう他の勇者様達のことにも確かに心配です。

最初から協力を……そうでなくても最低限情報を教えてくれていれば、もつと前から対策を取る事もできたでしょうに。ナオフミ様と

同じように、ため息ばかりが溢れます。

と、その時、あたりを探っていたセントさんが、不意に顔を強張らせたままぎこちなくこちらに振り向きましました。

「……ゆるしや様ゆるしや様、確認させていたいただきたいのですが」

「なんだその妙な話し方は」

「あの、あのですね？ オレ達が目指してる方角にですね……なんか、あの、とんでもないものがあるみたいでして……」

顔中冷や汗まみれになったセントさんが、震える手である方角を指さします。

東……霊亀国のある方角。その態度と表情に、私達は言い表しようのない不安に苛まれ出します。

セントさんの立つ岩の上に私達も登り、セントさんの指差す方角に目を凝らします……フルボトルを借りるまでもありませんでした。示されてようやく、私達はその存在に気付きました。

遙か先に並び立つ山々……何百何千年の間、その地でじつと佇んでいたであろうそれらの一つが、確かに動いていました。

耳をすませば、遠くかすかに地響きが聞こえてきます。

ずん、ずんと、およそ生物が出すものとは思えない重く大きい足音が、一定の間隔で轟いているのがわかりました。

あれが……あれが!?

「ウソだろ……まさか、あれが」

「お察しの通りでござやる」

絶句する私達の背後に、ある声と共に黒い人影が降り立ちました。

この声、そしてこの特徴的な口調……振り向く私達の前で、その方はどこか緊張した雰囲気を取巻く奥から醸し出しながら跪きました。

「影！」

「間に合ったというべきか、間に合わなかったというべきか……盾の勇者殿が霊亀国に辿り着く前にご報告ができた事は幸運でござやる」  
影の方々は確か、他の勇者様達の動向を調べていたはず。

それがここまで慌てた様子でナオフミ様に報告しにきた、という事は。

「すでに、進行方向上にあるいくつかの国が使い魔と霊亀自身の攻撃を受け、壊滅状態にあるでおじやる。抵抗はしたものの、あの巨体が相手ではまるで歯が立たず……」

「三勇者は？」

「現地の同胞の最後の情報によると、お三方は霊亀が動き出すや否や同時に挑みかかり……そのまま生死不明と」

無慈悲なその報告に、リーシアさんがその場でふらりと倒れそうになり、慌ててフイーロと支えます。

まさか、まさかこんな事になるだなんて……！

というか、あれに挑んだんですか!? あんなものに勝てるよと本当に思っていたんですか!? どういう考えをしているんですかあの方々は!?

「イツキ様……!?!」

「最悪だ……! あの大バカ共を止めるのも、霊亀の復活も間に合わず、悪い展開ばかりが続いているぞ!?! 残ってる勇者は俺一人じゃないか!?!」

嘆かれるナオフミ様に、かける言葉が見つかりません。

私はもちろん、セントさんやリュウガちゃんも強張った表情で立ち尽くし、言葉をなくしています。

「どうにかしねえと……マジでフイトリアの言う通り、手遅れになっちゃまうぞ」

「そのために拙者がこちらに参った次第。まだ無事な国で終結し、霊亀に対抗するための連合軍を発足しているでおじやる。盾の勇者殿にもどうか、その会合に加わっていただきたく」

「……わかった。フイーロ、行くぞ」

「はい!!」

もうそんな動きを!? ……いえ、すでに壊滅している国がある以上、遅いというべきかもしれませんね。

何にせよ、こんな問題は私達だけでは手の出しようがありません。

ナオフミ様はすぐさま踵を返し、影さんのいう連合軍の拠点へとフイーロに向かうように指示します。

「いやいやいやいや……これはマジで無理だろ。あんな……あんな……あんなとんでもない奴、戦うなんてマジで無理だろ!! あんなもん……どうやって倒せつてんだよ!?!」

ただ、いつになく弱気なセントさんがブンブンと首を横に振っています。

意気地なし、と言えればいいのですが……流石にその言葉を否定する気にはなれません。

かつてないほどに圧倒的な敵の姿を見て、絶望せずにいられる人が果たして存在するのか。

## 勇者すなわち勇氣ある者

S i d e : M i l l e l i a

「一体勇者様達は何をやっておられるのか!？」

急遽用意された天幕の中で、とある国の王がそう叫ばれました。

復活してしまった霊亀、ただ歩くだけで破壊されていく国、容赦なく民に襲いかかる使い魔達……。

増え続ける犠牲を食い止めんために集った近隣諸国の為政者達ですが、最初の歩み寄りとしてはよろしくない反応でしょう。

「こうしている間にも霊亀はどんどん進行し続けている! だというのに三人の勇者は行方も生死も不明、いるのは盾の勇者だけ! 絶望的としか言いようがないではないか!!」

「まさか、我が身可愛さに逃げたのではあるまいな!」

同席していただいた盾の勇者様の顔がやや険しくなっておりますね。

自国が危うい今、冷静でいられないのは百も承知ですが、こうも好きかって言われるとご不快な気持ちになるのは当然でしょうが。

「これはメルロマロクの責任問題になりますぞ!」

「一体他の勇者達は今どこに……!」

「まさかすでに、霊亀にやられて……」

「三人の勇者様は逃げてなどおりません。いち早く危機を察し、霊亀の討伐に赴かれたのです」

これはまずい流れですね……一旦落ち着いていただくことにいたしましょう。

実際はお三方の勝手な行動なのですが、嘘は言っておりません。正直に話してより険悪になるよりは、好印象になるように誘導しておくべきでしょう。

イワタニ様も察してくださっているのか、何も言わずにいてくださっている事ですし。

「な、なら現在姿が見えないのは……」

「そちらもご安心を、勇者様達は皆さんご存命です。フォーブレイに

確認を取ったところ、どの聖武器の勇者も欠けていないと報告が返ってきました」

そう、着いたばかりの吉報をお伝えすると、イワタニ様からもほつと安堵する声が上がりました。

お話伺った、伝説のフィロリアル女王の話によると、四聖が一人でも欠ければ波への対処が厳しくなるとの話ですね。ご心配を取り除けたようで何よりです。

……気になりますのは、同じくフィロリアル女王からお聞きになったというもう一つの情報。

霊亀の復活が疑われた際、イワタニ様がフィロリアル女王に告げられた話。

うまくいけば、波はもう来なくなる。

ただし、それは多くの人々に犠牲を強いる茨の道だと。

……重要だとは思われますが、今それを伝えるのは得策ではありませんね。

まだ曖昧な部分も多く、詳しい真相もわかっていない今、無駄に場を混乱させる必要はありません。

「フォーブレイは何をしている!?!」

「あの国はいつも腰が重い! 動くのは問題が起こってからだ!!」

「あの国を頼っている暇はない! 我々だけで何かせねば!」

「あんな化け物を相手に何ができるといふのだ!?!」

本来、共通の敵が現れた各国は同じ方向を向くものですが……この場合はその類ではないようですね。

相手が強すぎる、という事実がある以上、及び腰になるのも当然です。

なればこそ……現時点において誰よりも強者である盾の勇者様にご意見をうかがう事にいたしましたしよう。

「奴を倒して、犠牲者を一人でも減らすべきだ」

私の目配せで察してくださったイワタニ様は、紛糾する会議の場にそう堂々と告げてくださいます。

まるで勝算があるように、不動の自信があるように。

後ろ向きな事ばかりを口にしていた連合軍の代表者達の顔に、ほんの少しですが安堵が浮かび出しました。

「……そもそも、こうなっているのは世界を守るべき勇者達が不甲斐ないせいではないか!! 守ることしかできない盾の勇者に何ができる!？」

それでも、やはり納得できない方はおられます。

ただでさえ我が国は、夫の暴走で独自に勇者召喚を行ってしまった汚点がありますからね……こちらから誘ったところで素直に領くことは難しいでしょう。

不意に、小さなため息がイワタニ様から聞こえました。

「お前達に聞こう……勇者とは何だ？」

「む……」

唐突に問われ、戸惑う某国の將軍殿。

勢いが一旦落ち着いたのを見計らい、私もイワタニ様のお考えを察し、話を合わせます。

「勇者とは強い力を正しい事に使う、勇気ある者の事です」

「俺は確かに防衛しかできない、頼りない勇者かもしれない……だが、その代わりに守る事については誰にも負けない自負がある。たとえば、相手が国を滅ぼせる巨大な化け物だろうとな」

……お見事です、ね、イワタニ様。何があろうとも揺るがない絶対的な自信、をしつかりと演じてくださっております。

報告に聞く行商で得られたお力なのでしようか？ それか元々持っておられた才能か……噂に聞く料理といい、イワタニ様は思いの外多才な方でございますね。

「だ、だが、それではただ耐えるしか……」

「俺には、共に戦ってくれる仲間がいる。多くの困難を共に乗り越え、強敵を打ち破ってきた心強い仲間が」

にやり、と不敵に笑い、イワタニ様は天幕の外を見やります。

これこそが自分の勇者としてのあり方、そうおっしゃるようには。

「あの強大な敵に打ち勝つためには、お前達の協力も必要不可欠だ……それを決して無駄にしないために、俺も全力を尽くそう」

そう言われた將軍殿は、もはや何も言い返せず、テーブルに拳を打ち付け黙り込んでしまわれました。

納得はできずとも、反論はもう何もありません。

お陰様で、方針がまとめられそうです。

またしても助けていただきましたね……我が夫にもあのようになりませんでした時代に戻っていただきたいものですが、ままなりませんね。

S i d e : S e n t o

「……ナオフミ、お前あいつらに何言ったんだ？　なんか雰囲気さつきと全然違うんだけど」

天幕の外で待ってたオレ達の元にナオフミが戻ってきた。

んで、遠目で様子を伺ってたリユウガが、なんとも言えないじとつとした目で尋ねた。

「勇者様！　盾の勇者様！」

「どうか我らに、我らに勝利を！」

外にいた兵士達がナオフミに向かって祈る仕草を見せると、ナオフミは自信満々な態度と一緒に手を振ってみせる。

そうすると、どよめきと歓声がわつとそこかしこで上がり始めた。

なんたる……今まで見たことないぐらいナオフミが勇者っぽい。

あれ、なんかコイツ、かっこよくね？

「私……感動しました！　怖いですけど……きつと頑張ります！」

「うむ、勇者殿のお言葉、私の胸にも響いたぞ。盾の勇者殿は口は悪いがやる時はやる方だったのだな！」

リーシアもエクレールも、目をキラツキラさせてナオフミを見つめる。あの宣言が聞こえてみたいだな。

……ま、まままあ？

オレだってあんだだけ言われちゃったんなら、力貸すのもやぶさかじゃないっていうか？

今まで何回も一緒にヤバい状況をぐぐり抜けてきたし？　こっただって守ってもらった借りとかあるし？



今更あんなヤツ相手にするぐらいどーって事……いややつぱ怖えわ、今でも逃げてえわ。

「お前、マジで一体何を……」

「えちよねー、ぐしゅじんさまはねー」

本気で気になり出したリユウガに尋ねられ、フィーロちゃんが答えようとする。

だがそれを、ナオフミ本人がフィーロちゃんの頭を撫でて止めた。

「それ以上言わなくていいぞ。どうせハツタリだからな」

「え？」

「あそこで逃げたら勇者の評判が下がるからな、嘘八百を並べて適当に士気を上げさせておいた」

あつけらかなと、一切悪びれる様子もなくナオフミは答えた。

おま、おまつ……お前え！　せめて仲間にはその本音隠せよ！

せつかくこいつらやる気あがってんのに、戦闘前に出鼻くじいてどうすんだよ!?

オレの横で、ラフタリアちゃんがはーつとふつかいたため息ついて額に手え当ててんぞ！

「そんな事だろうと思いましたよ……」

「感動した私の気持ちを返せ!!」

「そうだそうだ!!」

激昂するエクレールに合わせてオレも抗議の声をあげる。

ちよつとでもああコイツが一緒ならきつと大丈夫さ絶対生き残れるとかすげー安心したところにそれって！　ふざけんなコラ!!

だが、オレ達が騒いでると、変幻無双流のバーさんがケラケラ笑いながら近づいてきた。

「何、人を乗せる事が必ずしも悪い事に繋がるわけでもありませんまい。そうして虚勢を張って、味方を勝利に導けるのならいくらでもハツタリをかませばよろしいのですじゃ」

「そういうことだ」

「……ホントかあ〜?」

まー、会議の様子を聞いた感じ、紛糾してた場があれで一つにまと

まったっぽいけどよ……ああ、不安になってきた。

「何にせよ、こっちは持ち得る全てを以て立ち向かわなきやならないんだ。逃げたかったらお前だけでも逃げていい……ただし、どこまで逃げれば助かるのかは知らないがな」

「うっ」

ナオフミの言葉で、オレはちよつと冷静になった。なっちまった。聞けば、霊亀は人の多い場所を目指して進み続けていると聞く。

町や国が滅ぼされる前に、今ここから逃げたとして……そのあと奴はいっ止まる？ いっになつたら逃げ切れる？

ナオフミの言う通り、逃げ場なんてあるかどうかわからないんだ。だとしたら……奴と戦って仕留めるしか、確実に生き残れる方法なんてありやしないのかもしれない。

……こうしてうじうじ悩んでる間にも、あのデカくてヤベエ死神はどんどんこつちに向かってきてるんだよな。

「だーもうやりやいいんだろやりやあ!! 絶対生き残ってやつからな!!」

思わずガシガシと頭をかいて、ナオフミに向けて告げる。

そうこなくつちやな、みたいにニヤツと不敵に笑いやがって……そこまで言うならお前しっかり守れよ!! 頼むぞ!?

はあ……呑気に笑ってるファイロちゃんとやる気になってるラフタリアちゃんが羨ましい。リーシアなんてまた不安げにふえふえ言っちまってるし。

「はあ……こんなことなら、オレも新兵器開発もつと早くに始めとくんだったぜ。無駄に効果のでかいハツタリかましやがってナオフミの奴う」

がつくりと肩を落としながら、重い足で準備に向かうオレとナオフミ達。

項垂れていたオレは……すぐ近くでリュウガが真剣な表情でこぼしていた小さな呟きを聞き逃していた。

「……………ハツタリに、新兵器、か」

## 無謀な戦い

S i d e : N a o f u m i

「……近くで見るとマジで怖えんだけど」

地響きと共に向かってくる巨体を見つめて、セントが呆然とした声を漏らす。

お前……さっきまでのやけっぱちなやる気はどこいったんだよ。ここぞつて時に怖気付きやがって。

まあ、気持ちはよおくわかるがな。俺だってやつの進行方向がメルロマロクじゃなかったら、知らない奴らしかいない国だったらさつさと逃げてるだろうし。

霊亀の巨体もそうだが、空や陸を埋め尽くす使い魔の多さも絶望的だ。いくら個々が強くても、数は確かな脅威だしな。

「請け合いはしたが、一番大事なのは自分の命だ。もうこれ以上は無理だと判断したら、お前らは撤退しろ。俺もなんとか足止めしてから退く。いいな？」

「はいー」

「はいー」

確認を取ってから、俺はこの戦いの方針を確かめる。

地形を利用し、ある国を囿に霊亀と使い魔達を谷底に追い込む。行動を阻害された霊亀に、俺達で全力の攻撃を加え続ける。

為政者達からすれば苦渋の決断だっただろうが、復興資金や人命を代価にこの作戦をのんでもらった。

失敗すればどのみち霊亀に全員殺されるんだ、どうにかして成功に導かなきゃな。

盾も今現在俺が使えるものの中で、一番性能がいいものに変えてあるし……準備としては、これが最善。他にあれこれする余裕もない。

「……時間だ、いくぞー」

「くそつたりやあー！ 変身!!」

【クジラー！】 【ジェット！】 【ベストマッチー！】

セントが二本のフルボトルをベルトに挿してハンドルを回し、鎧を

身にまとう。

うん、クジラはわかるぞ。カルミラ島で戦った次元の勇魚……俺の今の盾の元になった魔物の力だろう。

だがジェットってなんだ!? お前それどっから手に入れてきた!? 時々持つてくる見慣れないフルボトルはお前、どこで調達してきてんだよ!?

え? フォーブレイで手に入れた? ……あの国で一体何やってたんだよお前は。

【天翔けるビッグウェーブ! クジラジェット! イエイ!】  
相変わらず、このベストマッチの法則性がわからん……どういう基準なんだ?

もやもやする俺を放置して、セントは背中に装着されたジェットから火を噴き、空中に浮かび上がる。

かと思えば、一瞬でもものすごい速さに加速して天空へと飛び立っていった。

「ヘイトリアクション!」

俺は使い魔に向けて、スキルを発動する。

目に見えない、魔物を挑発し引き寄せる波動が発せられ、人里を指していた使い魔達が一気に俺に襲いかかる。

「アチヨー!」

「はああああ!!」

飛びかかってきたコウモリ型の使い魔と雪男型の使い魔を、ババアとエクレールが迎撃する。

ババアは言わずもがな、マジでどこにそんな力があるんだと言いたくなる身体能力で使い魔達をぶっ飛ばし、エクレールもババアには劣るものの鋭い剣撃で使い魔達を切り刻む。

それに負けじと、ラフタリアとファイロもよっってくる使い魔達を次々に蹴散らしていく。

「いきます、陰陽剣!」

「ぶちくいつく!」

ラフタリアが剣を振るい、使い魔を切り裂けば、切り裂かれた使い

魔が白と黒の球体に変化して他の使い魔に叩きつけられる。

フィーロも目にも留まらぬ加速で使い魔達を切り裂き、死骸の山を築き上げていく。

やはり、あいつらは他の奴らとは一線を画す力を得ているな……ババアとの修行がここで活かされてるのか？

セントは……空中で錐揉み回転しながら、ドリルクラッシュヤーの銃形態とホークガトリンガーの二丁で銃弾をぶちまけている。

なんかあいつだけ別の世界観で戦ってないか？ ああいう戦闘機を操って標的を撃ち落としていくゲームがあつたぞ。

「うおらああああああああ!!」

で、一番派手に暴れてる奴がいるわけで……俺が集めた使い魔達に、青く燃える炎の拳を叩き込み、粉々にしていくリュウガがすぐ目の前にいる。

こいつも完全に別の世界観で戦ってんだろ。どこの無双ゲーだよ、爆風でとんでもない数の敵が吹っ飛んでいってるぞ。

頼もしいといえば頼もしいが……あの勢いをいつまでも維持できはるはずがない。しよっぱなから飛ばしすぎなんだよ、あいつは!!

「本体を叩きにいくぞー！ こい、フィーロ！ ラフタリア！」

二人を呼び寄せ、フィーロの背中に移る。ヘイトリアクションを発動したまま、霊亀を目指して走らせる。

「リュウガ！ お前も来い！」

「おう！ ……おいバカウサギ！ あれ貸せ！」

どがつ、と雪男型の使い魔をぶっ飛ばしたリュウガが、大空を舞うセントに向けて怒鳴る。

すぐさまセントは空中で旋回し、リュウガの頭上に接近すると、例のスマホっぽい道具とフルボトルを取り出して投げ渡してきた。

「大事に使えよ筋肉バカ！」

「うっせー、わかってらあ！」

言い合いながら、リュウガはスマホもどきにライオンフルボトルを挿し、バイクに変形させ跨る。

俺達は崖を一気に駆け下り、谷の間を突き進む霊亀の目の前に飛び

出した。

うお……近くで見ると絶望感半端ないな。

「もう一発、ヘイトリアクション！」

霊亀に向けて、俺はもう一度ヘイトリアクションを発動し注意を引く。

霊亀はそれに反応したのか、それとも単に足元をうろつく俺達が鬱陶しかったのか、巨大な足を隕石みたいに振り下ろしてきた。

「流星盾！」

即座に展開した流星盾に霊亀の踏み付けがぶつかる。一瞬耐える流星盾だが……すぐにびきつ、とヒビが走り碎け散る。

最大強化してるってのにこれかよ！ 嘆く間もなく、降ってきた足の裏を盾を上に向けて受け止める。

ぬぁ……！ 重つも……!!

だけど耐えられないわけじゃない。周囲が陥没するレベルの重量を気合と根性で押し返す。

【ボルテックファイニッシュ！】

「おらおらおらおらあ!!」

俺がメキメキと地面に埋められ、埋められそうになる中、セントが上空から無数の水の弾丸を乱射して霊亀を銃撃する……あの勢いはもはや爆撃だな。

それを嫌がったのか、霊亀がわずかに体勢を崩した。その隙に、俺は一旦霊亀の足の下から逃れる。

「はあああつー！」

「とーっ！」

「オラアア!!」

加えて、俺が注意を引いている間にラフタリア達も霊亀に攻撃を加え続ける。

狙うのはどう見ても硬そうな胴とか足より、普段は甲羅で守られてて柔いイメージのある首だ。

ざしざしと斬撃によって霊亀の首から血飛沫が飛ぶが……あの巨体からするとさしたる傷じゃないらしい。すぐに再生して塞がって

しまった。

焼け石に水……というわけでもなさそうだが、ちまちま削るだけじゃいつまでたつても倒せそうにないな。

「だったら……」一点集中攻撃だ！ お前ら！」

「おっしやあー！」

一度つけた傷に一気に攻撃を叩き込み続け、釘打ちの要領で打ち貫く。首を落とせばとただけでかい魔物だろうと止まりはする……はず！

そう決めて、散開しようとした時だった。

!? 何だ……急に体が重く……いや、違う！ 重力が倍になった

……!?

「うが……ぐ?!」

「おわ——っ?!」

これは……霊亀の魔法か何かか!? こんなこともできるのかよ!?

散らばろうとしたラフタリア達はその場に膝をつき、強引に這い蹲らされている。セントに至ってはすぐ近くに墜落してくる始末だ。

ん!? 何だあれ……霊亀の顔がこっちに向いて……口の中がバチバチ言ってるぞ!?

「この状況でブレスかよ!? お前ら、俺の後ろに集まれ!!」

まずい、俺が今使ってるのは水属性の盾だぞ!? あんなどう見ても電気ビリビリな攻撃食らったらどうなると思ってるんだ!?

即座に違う盾、属性的に相性のいい強めの盾に変えて、集まってきたラフタリア達を背に庇い構える。

そして……眩い光が俺達に襲いかかった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「ナオフミ様!?!」

「ナオフミ!!」

とんでもない熱と圧にさらされ、思わず呻き声が漏れる。気を抜いたらあつという間に吹っ飛ばされそうだ。

ラフタリア達の声に反応する余裕もない……! ただ盾を前に構えてるだけで精一杯だ……!!

数秒か、数十秒か。その何倍も長く感じられるほどのブレスが、ようやく途切れる。

あたりを見ると、地面が俺の背後を除いて真つ赤な溶岩みたいドロドロに溶けてやがる……マジでさっきの盾のままだったら、俺達全員蒸発してたんじゃないか？

だがなんとか耐えきった……と安堵する暇もなく、霊亀はジロリと俺達を睥睨し、向かってくる。

「くそっ！ あんなヤベーの、ナオフミも何度も受けてられねえぞ！ 重力を操る攻撃も厄介だし、何か手を考えねえと……」

セントが冷や汗を垂らしながら呟くが……そんなことは今更全員わかってんだよ。だがこの状況じゃ、一点攻撃する暇もなさそうだ。

ん？ ラフタリアにファイロ……その覚悟を決めた表情、何か策があるのか？

「……たった一撃ですが、あの巨体に通じる技があります。ですが消耗が激しく、次を放つのは難しいかと」

「ファイロもあるよ！ 強いけど一回やるとへろへろになっちゃうやつ」

反動の大きい必殺技ってところか……それに賭けるしかなさそうだな。

だがその手の技は使うのに準備が必要になる気がするんだが……ああ、二人の表情を見る感じ合ってるっぽいな。

それを使わせてくれるまで、奴が待ってくれるとも思えんし……もう一度俺が注意を引きつけられれば、あるいは。

「……そういう事なら、オレが時間を稼ぐ」

「は？」

不意に、リュウガが俺の前に出ながらそんな事を言いだして……つて!?

なんで鎧を外してんだよ!? この状況で自殺行為だろうか！

「待てー！ 戻れ！ 何考えてんだ……って、お前、それ」

思わず叫んだ俺は……リュウガの手にあるそれに気付いて息を呑む。同じく、セントとラフタリアもはつと目を見開いてリュウガを凝



視していた。

あいつが持つてるものは……！

あの、水色の機械は……!?

「……ちよ、お前、なんでそれ持つてんだよ!？」

リュウガがどこからともなく取り出したのは、道中にセントが落と  
していた、新たなベルト。

俺のラースシールドのエネルギーを活用できるよう作り上げたとい  
う、本人が使用を忌避していた危険な代物。

あいつ、いつの間に持ち出してたんだよ!?

「アイツに勝つには……コレしかねんだよ!!」

「スクラツシユドライバー!」

覚悟を決めた表情で、リュウガはそれを腰に巻く。

その瞬間、いつもつけてるベルトとは異なる……なんかこう、破壊  
神とか闇の街の支配者とか呼びたくなるような、野太い声が響き渡つ  
た。

アイツ……マジで使う気か!?

戸惑う俺達を放置して、リュウガはもう一つの道具……竜の顔が描  
かれたゼリーの的なものを取り出し、蓋をひねってベルトに挿した。

「ドラゴンゼリー!」

「変身……!」

プレス機の間ゼリー飲料もどきを挿したまま、レンチ型のレバー  
を押して容器を押しつぶす。

その瞬間——リュウガの全身に、青い電流が迸った。

## 青の狂戦士

S i d e : R a p h t a l i a

「ぐああああああああああああああ!!?」

バリバリと迸る青い電流をその身に浴び、リュウガちゃんが悲鳴をあげます。

とうかこの光景、ものすごく見覚えがあります!!

最初にドライバーで強引に変身しようとした際もこんな風に苦しんでいましたよね!? どうして同じ事を何度も繰り返すんですかあなたは!?

「リュウガ!」

「ぐううう……ぐぎ……! ギ……!」

「……! あのバカ! だから止めたんだよ!!」

電流が走るたびに、リュウガちゃんはとてつもない苦痛に苛まれているらしく、きつく食いしばった歯をむき出しにして顔を歪めています。

その姿に、あの新しいベルトを作ったセントさんが苛立った……いえ、悔恨のような表情を浮かべて頭をかきむしっています。

自分があんなものを見せなければ、そもそも作らなければこんな事には、そんな後悔が透けて見えます。

そうこうしている間にも、霊亀の攻撃が再び迫りつつあるというのに……! ど、どうすれば!?

リュウガちゃんを心配しながら、私達が凄まじい焦燥に駆られていた時でした。

いつのまにか、リュウガちゃんの漏らす悲鳴が途切れていることに気付きました。

あれだけ苦しそうに上げられていたのに、目を吊り上げ、みしみしと歯を軋ませながら、リュウガちゃんは唸り声を漏らしています。

あれは……耐えているのでしょうか?

「ウウウ……ウウウウ……! グウウオオオオオオオオオオオオ!!」

苦悶の声が唸り声に、そして咆哮に変わった直後、リュウガちゃん

に変化が現れます。

足元に何か機械の台のようなものが現れ、透明な器がリュウガちゃんの下を囲み、その中に青い液体が満たされていきます。

かと思うと、透明な器が突如ぎゅつと絞られ、青い液体がリュウガちゃんの全身を飲み込みました。

【潰れる！ 流れる！ 溢れ出る！ ドラゴン・イン・クローズチャー  
ジ！ ブラア！】

あの野太い声が響いた直後、青い液体が無数の水飛沫となって飛び散り、リュウガちゃんを解放します。

再び姿を見せたリュウガちゃんは……まるでつきり格好を変えていました。

銀色に輝く胴着に、はためくスリットの入った腰巻、胸に巻かれた晒し。

そして先ほど飛び散った青い液体が上半身に降り注ぎ、まるで意思を持つようにひとりでに固まって、両肩と胸の装甲、更に仮面に変わります。

豊満な胸には雄々しい竜の横顔が備わり、顔は半透明の竜の顔の仮面が張り付きます。

「あ……あれは!?!」

「アイツ……やりやがった」

「ぐるぐる……がるるる……!?!」

呆然とする私達の見つめる先で、リュウガちゃんは荒々しく息を吐き、目前に迫る霊亀を睨みつけます。

霊亀が私達に向けて大きく片足を上げた瞬間——リュウガちゃんの姿が突然掻き消えました。

いいえ、私達の目にも留まらぬほどの速さで、霊亀の元へと肉薄したのです。

【スクラップブレイク！】

「うおらあああああ!!!」

どごん!!

と……とてつもない轟音と衝撃波が私達に襲いかかりました。あ

まりの圧に、私達はナオフミ様に庇われたまましばらく動けなくなり  
ました。

なんとか薄目を開けて様子を伺うと、信じられない光景が広がっ  
ていて、私達は絶句します。

あの巨大な霊亀が……私達の攻撃では少し傷をつけることしかで  
きなかつた霊亀が、リュウガちゃんに足を殴られ、大きく体勢を崩し  
ていたのです。

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「!!!」

リュウガちゃんと霊亀、双方の放つ咆哮が雷鳴のように轟きます。

霊亀も流石に、自分を傾けさせる一撃を放ったリュウガちゃんを脅  
威と認識したのか、まっすぐにリュウガちゃんに標的を絞っているよ  
うです。

「ツインブレイカー!! ビームモード!!」

リュウガちゃんが構えた左腕に、青い液体がまとわりつき、固まっ  
て一つの機械に……籠手のような武器に変わります。

リュウガちゃんが左手を前に構えると、籠手の前方に伸びた二本の  
円柱から無数の光弾が放たれ、霊亀の顔に炸裂します。

それを受け、顔から煙を立ち上らせながら、霊亀は怒りの咆哮を返  
しました。

「ア、アレは一体……なんだか、リュウガちゃんが感情をあらわにする  
度に、力が増していつているみたいな……!?!」

「……その通りだよ」

思わず呟く私に、セントさんが苦虫を噛み潰したような表情で答え  
ます。

もうその表情だけで、リュウガちゃんが使っているものの危険性が  
嫌というほどわかります……最初に見た時にされた説明通りなら、相  
当に恐ろしい道具ですから。

「アレは……スクラッシュドライバーには装着者の感情の起伏によっ  
て出力が上がっていく機能がある。つまり、怒れば怒るほど、アイツ  
の力は増していく!」

「それであの威力……!」

「だが代わりに闘争本能が刺激されまくって、どんどん制御が効かなくなっていく!!」

再びリュウガちゃんに視線を戻せば、霊亀に再度殴りかかる姿が見えます。

しかし霊亀が首を一振りし、圧倒的な重さと大きさとで弾き飛ばされています……ですが、リュウガちゃんはすぐに立ち上がり、咆哮と共にまた襲い掛かります。

その姿は……まさに狂戦士と呼ぶに相応しいです。

「……この件が終わったら絶対封印させるぞ」

「悪かったよ! あんなもん作って!!」

「なににせよ今の内だ! リュウガが暴れて注意を引いている間に、お前らの最大の一撃で霊亀を仕留めろ!!」

「はい!」

「わかったー!」

リュウガちゃんの身を案じながら、ナオフミ様の指示通りに私達は動きます。

剣に手を添え、集中を重ねて気を込め、フィー口と共にたった一撃の奥の手を放つ準備をします。

リュウガちゃんが作った時間、決して無駄にはしません!

【アタックモード! シングル! シングルブレイク!】

「おらあ!!」

うつすらと瞼を開けて様子を伺えば、リュウガちゃんが左手の武器を変形させて、ドラゴンのフルボトルを挿している様が見えます。

籠手から金色の槍のような棘が生え、霊亀の首に突き立てられます。

苦悶の声を漏らす霊亀は、鬱陶しそうに身を震わせリュウガちゃんを振り払おうとします。

【ツイン! ツインブレイク!】

リュウガちゃんはさらにもう一本、ベルトに挿した容器を挿した事で、槍に青い水流が纏われます。

竜巻のように渦を巻く槍を構えたりユウガちゃんが、一気に拳を振り抜き霊亀の首を貫き穴を開けました。

やりました！……と思っただのもつかの間。

怒りに顔を歪めた霊亀が首を振り、リユウガちゃんを跳ね飛ばします。

そして、大きく口を開き、ばちばちと強烈な雷光を溜め込み始めました。いけません、空中では身動きが……!!

「セント！ 運べ！」

「えええええあの前に?！」

「早く!!」

「なんでこんな覚悟ガンギマリなんだよ……だーもうわかつたよ!!」

高速で宙を舞うセントさんが、渋い表情でナオフミ様の体を掴んで空へと運びます。

霊亀の口から雷の咆哮が放たれる寸前、リユウガちゃんの前にナオフミ様が割り込み、咆哮を受け止めます。

空中で閃光が花のように飛び散り、とてつもない眩しさが辺りを呑み込みます。

「ナオフミ!!」

「ぐ……防御は任せろ！ お前はただ、全身全霊を奴に叩き込め!!」

辛うじて、咆哮に耐えるナオフミ様とリユウガちゃんの声が聞こえます。

まだ二発目ですが、いくらナオフミ様でもあんな攻撃を何度も受け止められません……私達の準備も整い、動くなら今しかありません！

「いきますー！」

「いっくよー!!」

霊亀の咆哮がまだ止まないうちに、ファイー口の背に乗り、空中へ一気に飛び上がります。

練り上げた気をありつたけ込めた剣を構え、霊亀の首元に狙いを定めます。

「バケモノめ、冥土の土産に……ありつたけ全部持っていきやがれ!!」

「シュワつとハジける！ ラビットタンクスパークリング！ イエイ

「イエー！」

「エアストシールド！ セカンドシールド！」

霊亀の咆哮がやんだ瞬間、ナオフミ様が私達の背後にそれぞれ盾を召喚し、足場を作ってくださいます。

セントさんはあの刺々しい鎧を纏い、ベルトのハンドルを勢いよく回転させ、次の一撃に全力を込めます。

そして全員で光の盾を踏みしめ、思い切り飛び出します！

「天命八極剣!!」

「すばいらるすとらいく!!」

【スパークリングフィニッシュ!】

私達三人の一撃が、一斉に霊亀の首に炸裂します。

大きな傷を首に刻み、大量の血飛沫と霊亀の声が撒き散らされま  
す。

決まった……そう思った直後、霊亀がぎろりと私達を睨みつけ、再び雷の咆哮を放とうと大きく口を開きました。

まだ……足りないのですか!?

覚悟を決めかけたその瞬間、私達の大切な人の声が背後から響き渡りました。

「決める、リュウガ！ ドリットシールド！」

【レディ・ゴー！ レッツ・ブレイク！】

「オレは……オレ達はもう、誰にも止められねえええええええええええええ!!」

雄叫びと共に、リュウガちゃんが最後の盾を踏みつけ、拳を振りかぶります。

小さな機械の使い魔を籠手に備え、青い激流を槍に纏わせ、まるで流星のように眩く輝きながら落下してきます。

霊亀の咆哮が放たれるよりも速く、鋭い一撃が私達の刻んだ傷跡に食らいつき——貫き、肉を斬り裂きます。

首を断たれた霊亀は大きく目を見開き、ゆっくりと巨大な頭部が地面に落下していきます。

やがて首を失った体も、ゆっくりと膝を折り、大地に伏せました。

ズズン……と、重く響く大きな音が世界に響き渡ります。

びりびりと空気が震える中、私達は地面に降り立ち集合し、斃れた霊亀が巢押しでも動きを見せないかと確かめます。

ここまでやってダメなら……そう考えましたが、霊亀は立ち上がる事なく、静かに屍を晒すだけでした。

「……やった、みたいだな」

「よ……よっしやあああ!!」

セントさんがあげた歓喜の声で、私達はようやく息を吐きました。

こちらの様子がすっかり見えているのか、使い魔と戦っている連合軍の方々からも勝鬨が上がっているのが聞こえてきました。

喜ぶ余裕は……あまりありません。力を使い果たして、もう立っているのも億劫です。

ですがこれで……危機は去りました。

それがたまらなく喜ばしい……はずなのに。

何でしょうか……何とも言えない違和感というか、不穏な感じがして、私は心から安堵する事ができずにいました。



まだ終わりじゃない

S i d e : F i l l o

フィーロだよ！

ごしゅじんさまやみんなとがんばってね、あのおつきな亀さんを  
やっつけたよ！

でもがんばりすぎてフィーロへロへロ……。

ラフタリアお姉ちゃんもセントお姉ちゃんも座り込んでぐったり  
してるよ。

でもね……いちばんつらそうなのはリュウガお姉ちゃんだったの。

「おぎ……おぎ……」

亀さんをやっつけた後ね、リュウガお姉ちゃんてばいきなりぶつ倒  
れちゃったの。

あの水色の鎧をぬいだすぐ後にね、まっすぐに立ったままビターン  
！って。

すぐにごしゅじんさまに抱き上げられて馬車の中にねかされたん  
だけど、それからずっと辛そうなうめき声ばかりあげてるの。

「あ、ああ、甘く見てた……アレの反動がここまでえげつないとは……  
か、身体が、全然動かねえ」

「自業自得だバカ」

「セントがガチで止めたのに使うからだバカ」

リュウガお姉ちゃん、ごしゅじんさま達にいっぱい言われて言い返  
したいけど、それどころじゃないみたい。そのうちあきらめたみたい  
にだまっちゃった。

「……とはいえ、アレがなかったら相当に苦戦していただろうな。起  
死回生の一手になったのは間違いない……褒めはしないが、認めては  
いる」

「凄かったですね……スクラツシユドライバー。味方のはずの私達が  
恐ろしく感じるほどの威力でした」

「うん！ すごかった！」

フィーロも見ててびっくりした！ とくに亀さんの足をなぐって

グラグラさせてた時！

「でもあの時のリュウガお姉ちゃん……こわかった」

「そうだな……あれがスクラッシュドライバーとドラゴンジェリーの恐ろしいところだ。使用者が冷静さを保ってる間は頼もしいかもしれないけど……もし、闘争本能が理性を上回ったらどうなるか」

「こいつはとくに血の気が多いからな」

セントお姉ちゃんは一っとおっきなため息をついて、リュウガお姉ちゃんがつけたままのなんとかどらいばーをにらんだ。

「創り出したオレが言うのもなんだが、コイツは世に出すべき兵器じゃなかった。設計図も含めて、跡形もなく破壊する」

セントお姉ちゃん、なんだかすっごい苦しそう。自分が作ったものを壊すのがイヤなのかな？

またため息をついて、なんとかどらいばーを取ろうと手をのばして……その手をリュウガお姉ちゃんがガシツてつかんだ。

「……悪いがコイツはまだ返せねえ」

「おまつ……！」

えー、そんなにつらそうなのにまだつかうの？

……でもフィーロ、リュウガお姉ちゃんのきもちわかるかもしれない。い。

「バカ！　いくら強力だからってこんなもん何回も使わせるわけないだろ！　今回は急ぎで作ったからこの仕上がりになったただけだ、今度はずっと安全性を高めて——」

「事態はまだ終わっていない」

リュウガお姉ちゃんをしかるセントお姉ちゃんに、ごしゅじんさまがそう言った。

そっかー、ごしゅじんさまもおんなじこと考えてたんだね……見たら、ラフタリアお姉ちゃんもうんってしんけんな顔でうなずいてる。「どういう事だ、ナオフミ？　霊亀はもう倒しただろ？　アイツももう全然動く気配なんてなかったし……」

「……お疲れ様でございます。イワタニ様」

セントお姉ちゃんだけわかってないみたいで、すっごいふしぎそう

な顔になってる。

そしたらファイロたちのところに、メルちゃんのお母さんがやってきた。

「軍の被害は？」

「イワタニ様達が早急に動いてくださったおかげで、最小限に抑えられました……攻撃を受けた者もすぐに治療し、寄生も防げています」「そうか……それで、使い魔達の動きは」

「ごしゅじんさまに聞かれて、メルちゃんのお母さんはすぐくむずかしい顔になっただまっちゃった。

何も言わなかったけど、ごしゅじんさまはそれでわかったみたい。

「使い魔が止まっていけない以上、まだ何か原因を取り除けていないんだろう……それをどうにかしない限り、事件はまだ終わりじゃない」「なっ……」

「霊亀が沈黙している間に、奴の背中……霊亀国に向かって調査をする。それまで少しの間だが、体を休めておけ。リュウガは留守番だ」  
うええくく……やっぱりく。

ファイロもうつかれてるのにく。

S i d e : S e n t o

「おーい、三勇者やーい。どこいったく？」

女王さんが馬車を後にしたあと、霊亀国を調べる隊を編成するため、ちよこつとだけ自由時間ができた。

その間に、動ける奴で3バカの行方を調べて見ることになった……んだが。

まっつっつたく手がかりも何も見当たらねえでやんの。

「つたく……どこ行っちゃったんだ？ 負けて恥ずかしくて顔出せないのはわかるけどよ、いい加減現実認めて出てこーい！」

こーい……こーい……こーい……

オレの呼び声が虚しくこだまする、もう何十分探してると思ってたよ。

リーシアも「ふええええイツキ様く!!!」って速攻で探しに行って全

然帰ってこねえし……まあそのうちナオフミあたりに首根っこ引つ  
掴まれて戻ってくるだろ。多分。

はあ……あんだだけ必死に戦って勝ったつてのに、なんつーモヤモヤ  
する結末だ。

でもまだ使い魔は止まらないし、三勇者も見つからないし、そもそ  
もこんなに急に霊亀が復活した理由もわかってないし、わからない事  
が多すぎる。

「やるしかない、のはわかかってるけど……流石に堪えるなあ」

次から次へと厄介事が舞い込む……ヒーローつてのがこんなに忙  
しいとは。後悔はしないけど、嘆きたくなるな。

……おそらく、オレ達が強くなるのを待ってくれる事なく、脅威つ  
てやつはどんどん膨れ上がる。今回の一件で、それを痛感した。

正直死にたくないし、逃げたいけど……前に言われた通り、この世  
界で生きてる以上、逃げ場なんざどこにもない。

あの時はテンパリまくって冷静じゃなかったと今なら言えるが  
……ヒーローの口にする言葉じゃねえよな。

生きたいし、逃げちやいけな。

だったら限られた時間の中で強くなるしかない……言葉にすりや  
簡単だけど、キツツイよなあ。

そうなるとやつぱ、せめてオレ達だけにしわ寄せが来ないよう、あ  
いつらにもきっちり強くなってもらわねえと……面倒臭えけど。

「しゃーねえ、時間いっぱいまでもうちよつと探してやるかあ」

……そう、独り言ちていた時だった。

『気をつけろよお？ セント……お前がどれだけ必死になろうとも、  
運命つてやつは待つちやくれないんだぜ——』

!?

不意に耳元で聞こえた気がした、聞き慣れたあの人の声に思わず

はつと振り向く。だけど、そこには誰もいない。

幻聴…？ あの人の事がまだ吹っ切れられてないせいかな？

だけどその割には…えらくはつきり耳元で聞こえたような。

「姐さん……」

突然降りかかった不思議な体験に、オレはしばらくの間その場に立ち尽くし…勝手に、気持ち引き締まっていくのを感じた。

T o b e c o n t i n u e d …